

IMS

バージョン 15.1.0

コマンド 第 3 卷:
IMS コンポーネントおよび
z/OS コマンド
(第 2017年12月26日 版)

IBM

IMS

バージョン 15.1.0

コマンド 第 3 卷:
IMS コンポーネントおよび
z/OS コマンド
(第 2017年12月26日 版)

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、731 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IMS 15 (プログラム番号 5635-A06)、IMS Database Value Unit Edition V15.01.00 (プログラム番号 5655-DS5)、IMS Transaction Manager Value Unit Edition V15.01.00 (プログラム番号 5655-TM4)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリソースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC27-6782-00
IMS
Version 15.1.0
Commands, Volume 3:
IMS Component and z/OS Commands
(November 5, 2017 edition)

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1974, 2017.

目次

本書について	vii
前提知識	vii
新規および変更された情報の識別方法	vii
構文図の読み方	viii
IMS 15 のアクセシビリティ機能	x

第 1 部 基本プリミティブ環境コマンド 1

第 1 章 BPE コマンドの概要 3

第 2 章 BPE DISPLAY VERSION コマンド 7

第 3 章 BPE TRACETABLE コマンド 9

BPE DISPLAY TRACETABLE コマンド 9

BPE UPDATE TRACETABLE コマンド 17

第 4 章 BPE USEREXIT コマンド 25

BPE DISPLAY USEREXIT コマンド 25

BPE REFRESH USEREXIT コマンド 33

第 2 部 Common Service Layer コマンド 41

第 5 章 CSL SHUTDOWN コマンド 43

第 6 章 STOP csjjob コマンド 45

第 3 部 Common Queue Server コマンド 47

第 7 章 STOP cqsjob コマンド 49

第 4 部 DBRC コマンド 51

第 8 章 DBRC コマンドの概要 53

DBRC バッチ・コマンド 53

DBRC オンライン・コマンド 54

DBRC コマンド構文 55

DBRC タイム・スタンプ 57

第 9 章 BACKUP.RECON コマンド 67

第 10 章 CHANGE コマンド 69

CHANGE.ADS コマンド 69

CHANGE.BKOUT コマンド 70

CHANGE.CA コマンド 73

CHANGE.CAGRP コマンド	75
CHANGE.DB コマンド	79
CHANGE.DBDS コマンド	93
CHANGE.DBDSGRP コマンド	103
CHANGE.IC コマンド	106
CHANGE.PART コマンド	110
CHANGE.PRILOG OLDS コマンド	119
CHANGE.PRILOG RLDS コマンド	121
CHANGE.PRILOG SLDS コマンド	126
CHANGE.RECON コマンド	131
CHANGE.SECLOG OLDS コマンド	149
CHANGE.SECLOG RLDS コマンド	150
CHANGE.SECLOG SLDS コマンド	155
CHANGE.SUBSYS コマンド	160
CHANGE.UIC コマンド	163

第 11 章 CLEANUP.RECON コマンド 165

第 12 章 DELETE コマンド 179

DELETE.ADS コマンド 179

DELETE.ALLOC コマンド 180

DELETE.BKOUT コマンド 181

DELETE.CA コマンド 182

DELETE.CAGRP コマンド 183

DELETE.DB コマンド 183

DELETE.DBDS コマンド 184

DELETE.DBDSGRP コマンド 185

DELETE.IC コマンド 186

DELETE.LOG コマンド (OLDS 用) 187

DELETE.LOG コマンド (RLDS および SLDS 用) 188

DELETE.PART コマンド 191

DELETE.RECOV コマンド 192

DELETE.REORG コマンド 193

DELETE.SUBSYS コマンド 194

DELETE.UIC コマンド 195

第 13 章 GENJCL コマンド 197

GENJCL.ARCHIVE コマンド 197

GENJCL.CA コマンド 202

GENJCL.CLOSE コマンド 207

GENJCL.IC コマンド 211

GENJCL.OIC コマンド 230

GENJCL.RECOV コマンド 236

GENJCL.USER コマンド 244

DBRC の基幹 JCL 249

JCL とユーザー定義出力の生成 249

IBM 提供の基幹 JCL の使用 250

基幹 JCL データ・セット・メンバー 251

基幹 JCL の構文 252

DBRC が認識するシンボリック・キーワード 279

IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバー 289

第 14 章 INIT コマンド	317
INIT.ADS コマンド	317
INIT.CA コマンド	320
INIT.CAGRP コマンド	321
INIT.DB コマンド	324
INIT.DBDS コマンド	330
INIT.DBDSGRP コマンド	337
INIT.IC コマンド	340
INIT.PART コマンド	342
INIT.RECON コマンド	349
第 15 章 LIST コマンド	359
LIST.BKOUT コマンド	359
LIST.CAGRP コマンド	360
LIST.DB コマンド	362
LIST.DBDS コマンド	365
LIST.DBDSGRP コマンド	368
LIST.HISTORY コマンド	370
LIST.LOG コマンド (PRILOG ファミリー用)	374
LIST.LOG コマンド (レコードのカテゴリ用)	375
LIST.RECON コマンド	379
LIST.SUBSYS コマンド	383
第 16 章 NOTIFY コマンド	385
NOTIFY.ALLOC コマンド	385
NOTIFY.BKOUT コマンド	387
NOTIFY.CA コマンド	388
NOTIFY.IC コマンド	392
NOTIFY.PRILOG コマンド (OLDS 用)	397
NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用)	400
NOTIFY.PRILOG コマンド (SLDS 用)	405
NOTIFY.RECOV コマンド	409
NOTIFY.REORG コマンド	412
NOTIFY.SECLOG コマンド (OLDS 用)	418
NOTIFY.SECLOG コマンド (RLDS 用)	421
NOTIFY.SECLOG コマンド (SLDS 用)	425
NOTIFY.SUBSYS コマンド	429
NOTIFY.UIC コマンド	431
第 17 章 REPAIR.RECON コマンド	435
第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト	439
LIST.DB コマンド出力のサンプル・リスト	439
LIST.HISTORY コマンド出力のサンプル・リスト	439
RECON データ・セットのサンプル・リスト	452
RECON リスト内のフィールド (レコード・タイプ別)	466
RECON レコード・フィールド	467
ログ・レコード・フィールド	472
LOGALL レコード・フィールド	472
オンライン・ログ・レコード・フィールド	472
SSYS レコード・フィールド	472
BACKOUT レコード・フィールド	472
CAGRP レコード・フィールド	472
CA レコード・フィールド	473

データ・グループ・レコード・フィールド	473
DB (IMS) レコード・フィールド	473
DB (HALDB) レコード・フィールド	473
DB (PART) レコード・フィールド	473
DB (高速機能) レコード・フィールド	473
DBDS (高速機能以外) レコード・フィールド	473
DBDS (高速機能) レコード・フィールド	473
ALLOC レコード・フィールド	473
IMAGE レコード・フィールド	473
REORG レコード・フィールド	473
RECOV レコード・フィールド	474

第 5 部 高速データベース・リカバリ・コマンド 475

第 19 章 MODIFY fdbbrproc コマンド	477
F fdbbrproc,DUMP	477
F fdbbrproc,RECOVER	477
F fdbbrproc,STATUS	477
F fdbbrproc,STOP	479
F fdbbrproc,TERM	479

第 20 章 START fdbbrproc コマンド 481

第 6 部 IMS Connect コマンド 483

第 21 章 同等の IMS Connect WTOR コマンド、z/OS コマンド、およびタイプ 2 コマンド 485

第 22 章 IMS Connect タイプ 2 コマンド 493

第 23 章 IMS Connect WTOR コマンド 495

CLOSEHWS コマンド	495
OPENDS コマンド	497
OPENIP コマンド	499
OPENPORT コマンド	500
RECORDER コマンド	501
REFRESH CONVERTER コマンド	502
REFRESH RACFUID コマンド	504
SETOAUTO コマンド	505
SETPWMC コマンド	507
SETRACF コマンド	508
SETRRS コマンド	509
SETUIDC コマンド	510
STARTDS コマンド	512
STARTIA コマンド	513
STARTIP コマンド	514
STARTMSC コマンド	516
STARTOD コマンド	517
STARTPT コマンド	519
STARTRMT コマンド	520

STOPCLNT コマンド	522
STOPDS コマンド	523
STOPIA コマンド	524
STOPIP コマンド	526
STOPLINK コマンド	527
STOPMSC コマンド	529
STOPOD コマンド	531
STOPPORT コマンド	532
STOPRMT コマンド	533
STOPSCLN コマンド	535
VIEWDS コマンド	537
VIEWHWS コマンド	542
VIEWIA コマンド	570
VIEWIP コマンド	573
VIEWMSC コマンド	574
VIEWPORT コマンド	579
VIEWRMT コマンド	585
VIEWUOR コマンド	590

第 24 章 IMS Connect z/OS コマンド 593

IMS Connect z/OS コマンド構文	593
IMS Connect DELETE CLIENT コマンド	594
IMS Connect DELETE LINK コマンド	595
IMS Connect DELETE SENDCLNT コマンド	598
IMS Connect QUERY ALIAS コマンド	600
IMS Connect QUERY DATASTORE コマンド	601
IMS Connect QUERY IMSPLEX コマンド	606
IMS Connect QUERY MEMBER コマンド	608
IMS Connect QUERY MSC コマンド	635
IMS Connect QUERY PORT コマンド	640
IMS Connect QUERY RMTIMSCON コマンド	646
IMS Connect QUERY UOR コマンド	651
IMS Connect SHUTDOWN MEMBER コマンド	653
IMS Connect UPDATE ALIAS コマンド	654
IMS Connect UPDATE CONVERTER コマンド	656
IMS Connect UPDATE DATASTORE コマンド	657
IMS Connect UPDATE IMSPLEX コマンド	659
IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド	661
IMS Connect UPDATE MSC コマンド	665
IMS Connect UPDATE ODBM コマンド	667
IMS Connect UPDATE PORT コマンド	669
IMS Connect UPDATE RACFUID コマンド	670
IMS Connect UPDATE RMTIMSCON コマンド	672

第 7 部 IMS 制御領域コマンド . . . 675

第 25 章 MODIFY imsproc コマンド 677

F jobname,DUMP	677
F jobname,DUMPxxxx	677
F jobname,FORCExxxx	678
F jobname,RECONNECT	679

F jobname,RECONNSTR	681
F jobname,STOP	681
F jobname,STOPxxxx	682

第 8 部 IRLM コマンド 683

第 26 章 MODIFY irlmproc コマンド 685

F irlmproc,ABEND	685
F irlmproc,DIAG,HANG	686
F irlmproc,PURGE,imsname	687
F irlmproc,SET	688
F irlmproc,STATUS	691

第 27 章 START irlmproc コマンド 699

第 28 章 STOP irlmproc コマンド . . 703

第 29 章 TRACE CT コマンド 705

第 9 部 Open Database Access

コマンド 709

第 30 章 CANCEL ODBA コマンド 711

第 31 章 FORCE ODBA コマンド . . . 713

第 10 部 リポジトリ・サーバー・

コマンド 715

第 32 章 MODIFY reposervername コ

マンド 717

F reposervername,ADMIN	718
F reposervername,AUDIT	721
F reposervername,SECURITY	723
F reposervername,SHUTDOWN	724

第 33 章 P reposervername コマンド 727

第 11 部 付録 729

特記事項 731

商標	733
製品資料に関するご使用条件	733
IBM オンライン・プライバシー・ステートメント	734

参考文献 735

索引 X-1

本書について

これらのトピックでは、Base Primitive Environment (BPE)、Common Service Layer (CSL)、データベース・リカバリー管理 (DBRC) 機能、IMS™ Transport Manager Subsystem (TMS)、リポジトリ・サーバー、IMS Connect、および IMS 用の z/OS® コマンドなどのさまざまなタイプの IMS コマンドの構文と使用方法に関する情報を提供します。IMS タイプ 1 およびタイプ 2 コマンドに関する情報は、「IMS V15 コマンド 第 1 巻: IMS コマンド A-M」および「IMS V15 コマンド 第 2 巻: IMS コマンド N-V」に記載されています。

この情報は、IBM® Knowledge Center で参照できます。

前提知識

本書を使用する際には、IMS Database Manager (DB) または IMS Transaction Manager (TM) のいずれかの知識が必要となります。また、z/OS および IMS の基本概念、インストールされている IMS システムを理解しており、プロジェクト計画に関するタスクの一般的な知識を持っていることが必要です。

推奨事項: 本書をお読みになる前に、以下の資料をよく理解しておいてください。

- IMS V15 オペレーションおよびオートメーション
- z/OS JES2 コマンド
- z/OS JES3 コマンド
- OS/390 MVS™ システム・コマンド

z/OS の詳細については、IBM Knowledge Center の「z/OS basic skills」トピックを参照してください。

IMS の基本概念を理解するには、「*An Introduction to IMS*」(IBM Press 出版)をお読みになると役立ちます。

IBM では、IMS の学習に役立つような講習会や自習講座を数多く提供しています。利用可能な講習の詳しいリストについては、IBM Skills Gateway にアクセスして、IMS を検索してください。

新規および変更された情報の識別方法

IMS ライブラリーの PDF 資料のほとんどの新規および変更された情報は、左マージン内の文字 (改訂マーカー) によって示されています。「リリース計画」、ならびに「*Program Directory*」および「*Licensed Program Specifications*」の第 1 版 (-00) には、改訂マーカーは含まれていません。

改訂マーカーは、以下の一般的な規則に従っています。

- 技術的な変更のみにマークが付けられています。形式上の変更や文法的な変更には、マークは付けられていません。

- 段落、構文図、リスト項目、操作手順、または図などの要素の一部が変更された場合、その要素の一部だけの変更であっても、要素全体に改訂マークが付けられています。
- トピックの変更が 50% を超えた場合には、そのトピック全体に改訂マークが付けられています (そのため、新規トピックではなくても、新規トピックのように見えることがあります)。

改訂マークは情報に加えられたすべての変更を示しているとは限りません。削除されたテキストとグラフィックスには、改訂マークでマークを付けることはできないためです。

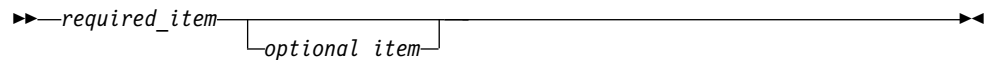
構文図の読み方

本書で使用されている構文図には、以下の規則が適用されています。

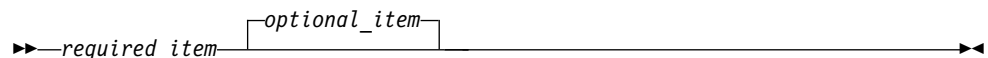
- 構文図は、経路を示す線に沿って、左から右、上から下に読み取ります。以下の規則が使用されます。
 - >>--- 記号は、構文図の始まりを示します。
 - ---> 記号は、構文図が次の行に続くことを示します。
 - >--- 記号は、この構文図が直前の行から続いていることを示します。
 - --->< 記号は、構文図の終わりを示します。
- 必須項目は、水平線 (メインパス) 上に表示されます。



- オプション項目は、メインパスより下に示されます。

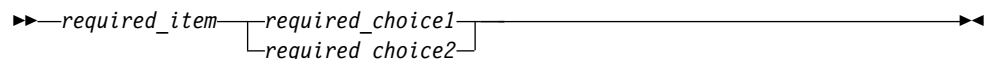


メインパスより上にオプション項目が示されている場合は、その項目が構文エレメントの実行に影響することはない、読みやすくするためのみの表記です。

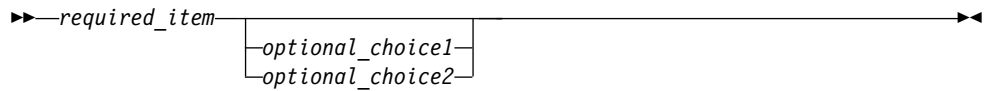


- 複数の項目から選択できる場合は、縦方向に並べて (スタック) 示されます。

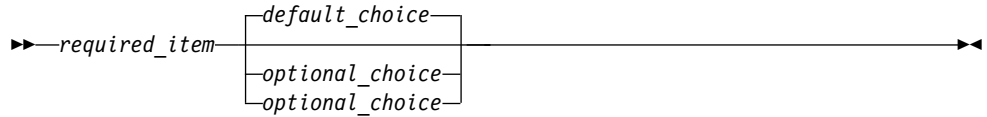
それらの項目の中から 1 つを選択する必要がある場合は、スタックの中の 1 つの項目がメインパス上に表示されます。



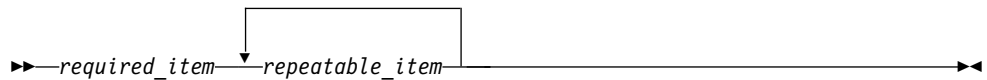
それらの項目から 1 つを選択することがオプションである場合は、スタック全体がメインパスの下に表示されます。



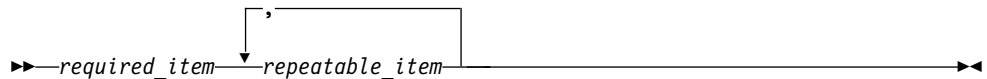
デフォルト項目が含まれている場合、その項目はメインパスより上に示され、他の選択項目はメインパスより下に示されます。



- メインパスの上方にある左に戻る矢印線は、項目が反復可能であることを示します。

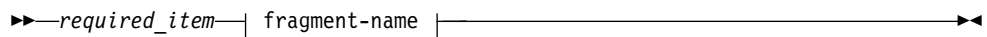


反復矢印線にコンマが含まれている場合は、反復項目をコンマで区切る必要があります。

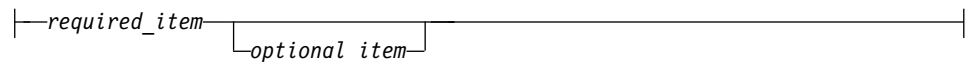


スタック上方の反復矢印線は、スタック内の項目を反復できることを示しています。

- 1 つの構文図を複数のフラグメントに分割しなければならない場合もあります。構文フラグメントはメインの構文図とは別に示されますが、フラグメントの内容は、図のメインパス上にあるものとして読む必要があります。



fragment-name:



- IMS では、b 記号は、該当位置に空白が 1 つあることを示します。
- キーワード、および該当する場合はキーワードの最小の省略語は、大文字で表されます。これらは、示されているとおりに入力する必要があります。変数は、すべて小文字のイタリック文字で示されます (例えば、`column-name`)。これらは、ユーザーが指定する名前または値を表します。
- キーワードとパラメーターは、構文図で間に句読点が表示されていない場合は、少なくとも 1 つのスペースで分離します。
- 句読記号、括弧、算術演算子、およびその他の記号は、構文図で示されたとおりに入力します。

- 脚注は、例えば (1) のように、数字を括弧で囲んで示してあります。

IMS 15 のアクセシビリティ機能

アクセシビリティ機能は、運動障害または視覚障害など身体に障害を持つユーザーが情報技術製品を快適に使用できるようにサポートします。

アクセシビリティ機能

以下のリストは、IMS 15 を含む z/OS 製品の主なアクセシビリティ機能を示しています。これらの機能は、以下をサポートしています。

- キーボードのみの操作。
- スクリーン・リーダー (読み上げソフトウェア) およびスクリーン拡大鏡によって通常使用されるインターフェース。
- 色、コントラスト、フォント・サイズなど表示属性のカスタマイズ。

キーボード・ナビゲーション

IMS 15 ISPF パネル機能には、キーボードまたはキーボード・ショートカット・キーを使用してアクセスできます。

TSO/E または ISPF を使用して IMS 15 ISPF パネルをナビゲートする詳細については、「z/OS TSO/E 入門」、「z/OS TSO/E ユーザーズ・ガイド」、および「z/OS 対話式システム生産性向上機能 (ISPF) ユーザーズ・ガイド 第 1 巻」を参照してください。上記の資料には、キーボード・ショートカットまたはファンクション・キー (PF キー) の使用方法を含む、各インターフェースのナビゲート方法が記載されています。それぞれの資料では、PF キーのデフォルトの設定値とそれらの機能の変更方法についても説明しています。

関連のアクセシビリティ情報

IMS 15 のオンライン資料は、IBM Knowledge Center で参照できます。

IBM におけるアクセシビリティ

IBM のアクセシビリティに対する取り組みについて詳しくは、*IBM Human Ability and Accessibility Center* (www.ibm.com/able) を参照してください。


第 1 部 基本プリミティブ環境コマンド

基本プリミティブ環境 (BPE) コマンドを使用すると、BPE が管理するリソースを表示し、更新することができます。

基本プリミティブ環境コマンド情報は、以下のとおりです。

- 3 ページの『第 1 章 BPE コマンドの概要』
- 7 ページの『第 2 章 BPE DISPLAY VERSION コマンド』
- 9 ページの『第 3 章 BPE TRACETABLE コマンド』
- 25 ページの『第 4 章 BPE USEREXIT コマンド』

関連資料:

 IMS PROCLIB データ・セットの BPE 構成パラメーター・メンバー (システム定義)

第 1 章 BPE コマンドの概要

BPE コマンドを使用すると、BPE が管理するリソースを表示し、更新することができます。いくつかのリソース・タイプは、BPE 自体によって定義され、所有されます。これらのリソース・タイプは、「システム・リソース・タイプ」として知られています。

システム・リソース・タイプを指定するコマンドは、BPE 環境で実行するいずれの IMS コンポーネントに対しても出すことができます。例えば、BPE は DISP、STG、および CBS などのいくつかの BPE システム・トレース・テーブル・タイプを定義します。これらのトレース・テーブルは、すべての BPE アドレス・スペースに存在します。これらのトレース・テーブル・タイプを表示し、更新するコマンドは、いずれの BPE アドレス・スペースに対しても出すことができます。

そのほかにも、BPE サービスを使用する IMS コンポーネントが定義し、所有するリソース・タイプがあります。これらのリソース・タイプは、「コンポーネント・リソース・タイプ」または「ユーザー・プロダクト・リソース・タイプ」として知られています。コンポーネント・リソース・タイプを指定するコマンドは、これらのタイプを定義する IMS コンポーネントに対してのみ出すことができます。例えば、CQS は STR、CQS、および INTF などの、いくつかの CQS 固有のトレース・テーブルを定義します。これらのトレース・テーブル・タイプを表示し、更新するコマンドは、CQS アドレス・スペースに対してのみ、出すことができます。

サブセクション:

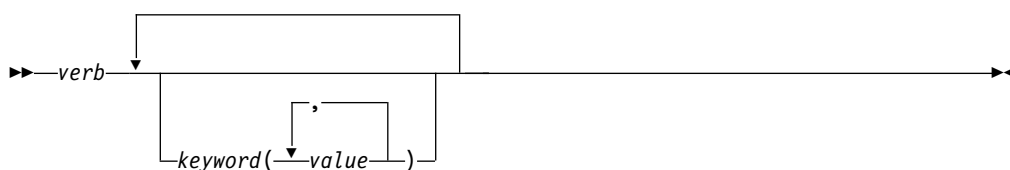
- 『BPE コマンド構文と呼び出し 』
- 4 ページの『BPE コマンドの呼び出し』
- 4 ページの『BPE ワイルドカード文字のサポート』
- 5 ページの『IMS コンポーネント・コマンド・パラメーターの指定』

BPE コマンド構文と呼び出し

BPE は、verb 専用フォーマットと verb リソース・タイプ・フォーマットの 2 つのコマンド・フォーマットをサポートしています。

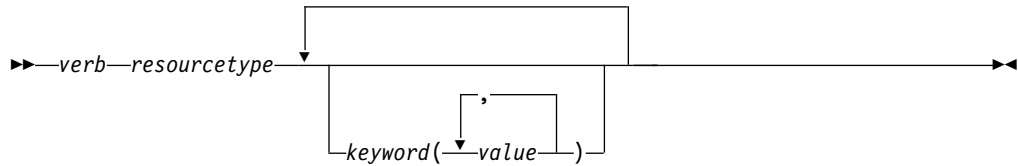
verb 専用フォーマットは、verb と、それに続くゼロ個以上のキーワードと値の対から成ります。値は括弧で囲みます。

BPE verb のみのコマンド構文



verb リソース・タイプ・フォーマットは、verb、リソース・タイプ、およびゼロ以上のキーワードと値の対が続きます。

BPE verb-resource タイプのコマンド構文



verb

アクションを表すコマンド verb。 DISPLAY、UPDATE、および REFRESH は verb の一例です。

resourcetype

verb により操作されるリソースのタイプ。 TRACETABLE および USEREXIT はリソースの一例です。

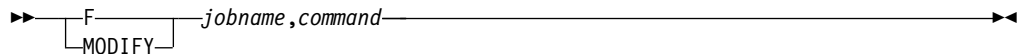
keyword(value)

コマンドに適用される属性、フィルター、あるいはその他の修飾子を表わすゼロ個以上のキーワードと値のセット。例えば、特定のリソースを識別する NAME() または、トレース・レベルを指定する LEVEL() があります。

BPE コマンドの呼び出し

BPE コマンドは、z/OS MODIFY コマンドを介してのみ呼び出します。次の図は、z/OS modify インターフェースを介してのコマンドの入力の一般的な構文を示しています。

BPE コマンドの呼び出し



F | MODIFY

z/OS コマンド MODIFY。

jobname

コマンドが送られる先のアドレス・スペースのジョブ名。

コマンド

実行されるコマンド。

BPE ワイルドカード文字のサポート

BPE コマンドのいくつかのパラメーターは、パターン・マッチング用のワイルドカード文字をサポートしています。このようなパラメーターでは、以下のワイルドカード文字を使用することができます。

- * ゼロ個以上の文字を含む任意のストリングとマッチングします。
- % 1 文字だけをマッチングします。

以下に、ワイルドカード文字の使用例をいくつか示します。

BE* 「BE」で始まる任意の長さのストリングとマッチングします。例えば、BE、BEE、BEEBLEBROX などです。

%%S 「S」で終わる 3 文字のストリングとマッチングします。例えば、IMS、CQS などです。

R*S*T%R

「R」で始まり「R」で終わり、中ほどに「S」が 1 つあり、その後に「T」が 1 つ続くストリングとマッチングします。最初の「R」、「S」、および「T」の間は文字はいくつあっても構いませんが、「T」と最後の「R」の間は正確に 1 文字です。例えば、ROASTER、ROSTER、RESORTER、RESCEPTOR、および RSTZR などです。

IMS コンポーネント・コマンド・パラメーターの指定

BPE コマンドは、コマンドが操作するリソース・タイプを、BPE が所有するリソース・タイプに、あるいはコマンドが出されるアドレス・スペースの IMS コンポーネントが所有するリソース・タイプに制限する機能を提供します。これは、OWNER をサポートするコマンド上の OWNER キーワードによって行います。OWNER(BPE) を使用して、BPE が所有し、定義するリソース・タイプ (システム・リソース・タイプ) にコマンド操作を制限します。OWNER(*component_type*) を使用して、IMS コンポーネント・アドレスが定義し、所有するリソース・タイプ (コンポーネント・リソース・タイプ) にコマンド操作を制限します。以下の表は、OWNER パラメーターで指定できる有効な値と、それぞれが適用されるアドレス・スペース・タイプを示しています。

表 1. OWNER パラメーターでの有効値

OWNER	アドレス・スペース・タイプ
BPE	BPE アドレス・スペースで実行される任意の IMS コンポーネント
CQS	共通キュー・サーバー
HWS	IMS Connect
ODBM	Open Database Manager
OM	オペレーション・マネージャー
REPO	リポジトリ・サーバー
RM	Resource Manager
SCI	構造化呼び出しインターフェース

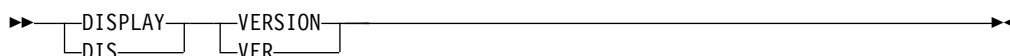
第 2 章 BPE DISPLAY VERSION コマンド

BPE DISPLAY VERSION コマンドは、BPE を使用している IMS コンポーネントのバージョンと、使用されている BPE のバージョンの両方を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『出力』
- 8 ページの『コマンド例 1』
- 8 ページの『コマンド例 2』

構文



キーワード

DISPLAY | DIS

指定されたリソースに対するアクションはリソースの属性の表示であることを指定する必須パラメーター。

VERSION | VER

操作の対象のリソース・タイプは IMS コンポーネントのバージョン番号および現行のアドレス・スペースの BPE であることを指定する必須パラメーター。

出力

DISPLAY VERSION コマンドの出力は、以下の形式の単一の表示出力行で構成されます。

```
BPE00001 comp VERSION=cv.cr.cp BPE VERSION=bv.br.bp
```

- *comp* は、アドレス・スペースの IMS コンポーネント ID です。長さは 1 から 4 文字で、以下の値のいずれかをもつことができます。
 - CQS (Common Queue Server)
 - DBRC (データベース・リカバリー管理)
 - HWS (IMS Connect)
 - ODBM (Open Database Manager)
 - OM (Operation Manager)
 - REPO (リポジトリ・サーバー)
 - RM (Resource Manager)
 - SCI (Structured Call Interface)

- *cv.cr.cp* は IMS コンポーネントの完全なバージョン番号であり、*cv* はバージョン、*cr* はリリース、そして *cp* はポイント・リリースを意味します。同様に、*bv.br.bp* はアドレス・スペースで実行している BPE の完全なバージョン番号を示しています。

コマンド例 1

ここでは、DISPLAY VERSION コマンドの使用例をいくつか示します。

CQS アドレス・スペースのバージョンを表示します。

コマンド :

```
F CQS1,DISPLAY VERSION
```

出力 :

```
BPE0000I CQS VERSION = 1.6.0 BPE VERSION = 1.7.0
```

コマンド例 2

RM アドレス・スペースのバージョンを表示します。

コマンド :

```
F RM1,DISPLAY VERSION
```

出力 :

```
BPE0000I RM VERSION = 1.4.0 BPE VERSION = 1.7.0
```

第 3 章 BPE TRACETABLE コマンド

TRACETABLE リソース・タイプは、BPE (例えば、DISP、CBS、STG、LATC) あるいは BPE を使用する IMS コンポーネント (例えば、CQS、ODBM、OM、RM、RS、SCI) によって定義される、内部 BPE 管理トレース・テーブルを指します。

- 『BPE DISPLAY TRACETABLE コマンド』
- 17 ページの『BPE UPDATE TRACETABLE コマンド』

BPE DISPLAY TRACETABLE コマンド

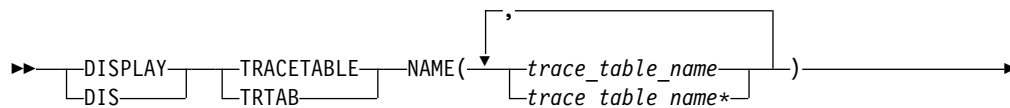
DISPLAY TRACETABLE コマンドは、指定されたトレース・テーブルのトレース・レベルおよびトレース・テーブルのページ数を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 10 ページの『キーワード』
- 13 ページの『出力』
- 15 ページの『コマンド例 1』
- 15 ページの『コマンド例 2』
- 15 ページの『コマンド例 3』
- 16 ページの『コマンド例 4』
- 16 ページの『コマンド例 5』
- 16 ページの『コマンド例 6』

構文

このコマンドは、要求されたトレース・テーブルの現在の属性の設定値を表示するために使用します。





キーワード

DISPLAY | DIS

指定されたリソースの属性を表示する必須パラメーター。

TRACETABLE | TRTAB

操作の対象のリソース・タイプが BPE 管理のトレース・テーブルであることを指定する必須パラメーター。

NAME(*trace_table_name*)

その属性を表示させたいトレース・テーブル・タイプの名前を指定する必須パラメーター。単一のトレース・テーブル名またはコンマで区切ったトレース・テーブル名のリストを指定することができます。トレース・テーブル名にはワイルドカード文字を含めることができます。トレース・テーブル名は、BPE 定義のトレース・テーブルか、または IMS コンポーネント定義のトレース・テーブルが可能です。

BPE を使用している IMS コンポーネント・アドレス・スペース用の BPE 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる BPE 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

AWE 非同期作業エレメント (AWE) トレース・テーブル

CBS 制御ブロック・サービス・トレース・テーブル

CMD コマンド・トレース・テーブル

DISP ディスパッチャー・トレース・テーブル

ERR BPE エラー・トレース・テーブル

ERRV

BPE エラー変数トレース・テーブル

HASH

ハッシュ・トレース・テーブル

LATC ラッチ・トレース・テーブル

MISC トラップ・トレース用に IMS サービスだけが使用する各種のトレース・テーブル。

SSRV システム・サービス・トレース・テーブル

STG ストレージ・サービス・トレース・テーブル

USRX ユーザー出口ルーチン・トレース・テーブル

CQS アドレス・スペース専用の CQS 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる CQS 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CQS CQS トレース・テーブル

ERR CQS エラー・トレース・テーブル
INTF CQS インターフェース・トレース・テーブル
OFLW
CQS 構造オーバーフロー・トレース・テーブル
SEVT CQS 構造イベント・トレース・テーブル
STR CQS クライアント・アクティビティ・トレース・テーブル

IMS Connect 定義トレース・テーブルは、IMS Connect アドレス・スペースについてのみ表示できます。以下に挙げる IMS Connect 定義トレース・テーブル・タイプが使用可能です。

ADPT

アダプター・トレース・テーブル

CMDT

IMS Connect のコマンド・アクティビティ・トレース・テーブル

ENVT

環境トレース・テーブル

ERRV

IMS Connect のエラー変数トレース・テーブル

HWSI

IMS Connect-OTMA 間ドライバー・トレース・テーブル

HWSN

IMS Connect-ローカル・オプション間ドライバー・トレース・テーブル

HWSO

IMSpIex ドライバー (IPDC) トレース・テーブル

HWSW

IMS Connect-TCP/IP 間ドライバー・トレース・テーブル

LEPS 言語処理環境 (LE) 事前初期設定サービス・トレース・テーブル

ODBM

ODBM 通信トレース・テーブル

ODDR

ODBM ドライバー・トレース・テーブル

OMDR

通信プロトコル・アクティビティ (SCI 呼び出し) トレース・テーブル

OSDR

ODBM ソケット・ドライバー・トレース・テーブル

OSOC

ODBM ソケット通信トレース・テーブル

OTMA

OTMA 通信ドライバー・トレース・テーブル

PCDR

ローカル・オプション・ドライバー・トレース・テーブル

PCIF PC インターフェース・トレース・テーブル

RCTR

レコーダー・トレース・テーブル

RRSI RRS インターフェース・トレース・テーブル

TCPI TCP/IP 通信ドライバー・トレース・テーブル

OM アドレス・スペース専用の OM 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる OM 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERR OM エラー・トレース・テーブル

OM OM 処理のトレース・テーブル

PLEX 特定の IMSplex のための OM 処理用の IMSplex トレース・テーブル

RM アドレス・スペース専用の RM 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる RM 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERR RM エラー・トレース・テーブル

PLEX 特定の IMSplex のための RM 処理用の IMSplex トレース・テーブル

REPO RM リポジトリ・サービス・トレース・テーブル

RM RM 処理のトレース・テーブル

SCI アドレス・スペース専用の SCI 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる SCI 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL 共通サービス・レイヤー (CSL) トレース・テーブル

ERPL SCI エラー・パラメーター・リスト・トレース・テーブル

ERR SCI エラー・トレース・テーブル

INTF SCI インターフェース・トレース・テーブル

INTP SCI インターフェース・パラメーター・トレース・テーブル

PLEX 特定の IMSplex のための SCI 処理用の IMSplex トレース・テーブル

SCI 構造化呼び出しインターフェース (SCI) 処理トレース・テーブル

DBRC アドレス・スペース専用の DBRC 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる DBRC 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

ERR DBRC エラー・トレース・テーブル

GRPS DBRC グループ・サービス・トレース・テーブル

MODF

DBRC モジュール・フロー・トレース・テーブル

RQST

DBRC 要求トレース・テーブル

ODBM アドレス・スペース専用の ODBM 定義のトレース・テーブルを表示することができます。以下に挙げる ODBM 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERR ERR トレース・テーブル

ODBM

ODBM トレース・テーブル

PLEX IMSplex トレース・テーブル

リポジトリ・サーバー定義のトレース・テーブルは、REPO アドレス・スペースについてのみ表示できます。以下に挙げるリポジトリ・サーバー (RS) トレース・テーブル・タイプが使用可能です。

DIAG

リポジトリ・サーバー診断トレース・テーブル

OWNER

属性を表示させたいトレース・テーブル・タイプ (1 つ以上) の所有者を指定するオプション・パラメーター。以下のいずれかの値を指定することができます。

BPE BPE アドレス・スペースで実行されるすべての IMS コンポーネント用

CQS CQS アドレス・スペース専用

DBRC

DBRC アドレス・スペース専用

HWS IMS Connect アドレス・スペース専用

ODBM

ODBM アドレス・スペース専用

OM OM アドレス・スペース専用

REPO RS アドレス・スペース専用

RM RM アドレス・スペース専用

SCI SCI アドレス・スペース専用

OWNER パラメーターは、どのトレース・テーブルを表示させたいかを選択するのに役立つフィルターの役割を果たします。例えば、NAME(*) OWNER(CQS) と指定すると、CQS アドレス・スペースのすべての CQS 定義のトレース・テーブル・タイプ (CQS、ERR、OFLW、SEVT、STR、および INTF) を表示することができます。NAME(*) OWNER(BPE) と指定すると、任意の BPE 管理のアドレス・スペースのすべての BPE 定義のトレース・テーブル・タイプを表示することができます。OWNER を省略すると、BPE とコンポーネント・トレース・テーブルの両方とも表示される可能性があります (NAME で指定されたテーブルによって異なります)。

出力

DISPLAY TRACETABLE コマンド出力は、ヘッダー行、選択されたトレース・テーブルごとに 1 行、およびコマンドが完了したことを示す BPE0032I メッセージ 1 行から構成されます。次に、例を示します。

```
F CQS1,DIS TRTAB NAME(*) OWNER(CQS)
BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES CQS1CQS
BPE0000I CQS CQS HIGH 4 NO 14 0 CQS1CQS
BPE0000I ERR CQS HIGH 4 NO 13 0 CQS1CQS
BPE0000I INTF CQS HIGH 8 NO 5 0 CQS1CQS
BPE0000I OFLW CQS HIGH 12 NO 4 0 CQS1CQS
BPE0000I SEVT CQS HIGH 12 NO 3 0 CQS1CQS
BPE0000I STR CQS HIGH 8 NO 87 0 CQS1CQS
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED CQS1CQS
```

以下の欄が、DISPLAY TRACETABLE の出力にあります。

TABLE

現在行に情報が表示されるトレース・テーブル・タイプの名前を指定します。BPE もしくは BPE を使用する製品のいずれかがこのトレース・テーブルを所有しています。

OWNER

トレース・テーブルを所有している IMS コンポーネントを指定します。BPE が所有するトレース・テーブルはシステム・トレース・テーブルであり、BPE を使用するすべての IMS コンポーネント・アドレス・スペースに

存在します。IMS コンポーネントに固有のトレース・テーブルは、この欄に 1 から 4 文字のコンポーネント ID を示しています。

LEVEL

トレース・テーブルの現行レベルの設定値を指定します。トレース・テーブルのレベルによって、収集されるトレース・データ量が決まります。以下に挙げるレベルが可能です。

NONE

テーブルにはトレース・データは書き込まれていません。

ERROR

エラーまたは例外条件のトレースのみがテーブルの中に書き込まれます。

LOW 主要なイベント・トレース・エントリーのみがテーブルの中に書き込まれます。

MEDIUM

主要なイベント・トレース・エントリーと一部のマイナーなイベント・トレース・エントリーがテーブルの中に書き込まれます。

HIGH

すべてのトレース・エントリーがテーブルの中に書き込まれます。

INACTV

トレース・テーブルは非アクティブであり、使用することはできません。この状況は、BPE がトレース・テーブル用のストレージをまったく取得できない場合にのみ生じます。指示されたテーブル・タイプではトレースは行われません。さらに、UPDATE TRACETABLE コマンドでトレース・テーブルのレベルを変更することはできません。トレース・テーブルを再び使用するためには、アドレス・スペースを再始動する必要があります。

#PAGES

トレース・テーブル・タイプに割り振られた 4K (4096 バイト) ページの数を指定します。

EXT NAME キーワードで指定されたトレース・テーブルのトレース・エントリーを外部トレース・データ・セットに書き込む必要があるかどうかを指定します。値は YES または NO です。

YES トレース・エントリーを外部トレース・データ・セットとメモリーの両方に書き込むことを指定します。

NO トレース・エントリーはメモリーのみに書き込むことを指定します。

#ENTRIES

トレース・テーブルで作成されたトレース・エントリー数を指定します。

#CYCLES

トレース・テーブルがいっぱいになり、上部に折り返された回数を指定します。

コマンド例 1

ここでは、DISPLAY TRACETABLE コマンドの使用例をいくつか示します。

次のコマンドは、BPE ディスパッチャー・トレース・テーブル (DISP) の状況を表示します。

コマンド:

```
F CQS1,DISPLAY TRACETABLE NAME(DISP)
```

出力:

```
BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES
BPE0000I DISP BPE HIGH 8 NO 1916 1
BPE0032I DISPLAY TRACETABLE COMMAND COMPLETED
```

コマンド例 2

次のコマンドは、すべての CQS トレースの状況を表示します。

コマンド:

```
F CQS1,DIS TRTAB NAME(*) OWNER(CQS)
```

出力:

```
F CQS1,DIS TRTAB NAME(*) OWNER(CQS)
BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES CQS1CQS
BPE0000I CQS CQS HIGH 4 NO 14 0 CQS1CQS
BPE0000I ERR CQS HIGH 4 NO 13 0 CQS1CQS
BPE0000I INTF CQS HIGH 8 NO 5 0 CQS1CQS
BPE0000I OFLW CQS HIGH 12 NO 4 0 CQS1CQS
BPE0000I SEVT CQS HIGH 12 NO 3 0 CQS1CQS
BPE0000I STR CQS HIGH 8 NO 87 0 CQS1CQS
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED CQS1CQS
```

コマンド例 3

次のコマンドは、SCI アドレス・スペースのすべてのトレースの状況を表示します。

コマンド:

```
F SCI,DIS TRTAB NAME(*)
```

出力:

```
BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES
BPE0000I AWE BPE HIGH 6 YES 2843 3
BPE0000I CBS BPE HIGH 6 YES 3456 4
BPE0000I CMD BPE HIGH 2 YES 1 0
BPE0000I CSL SCI HIGH 8 YES 0 0
BPE0000I DISP BPE HIGH 8 YES 5581 5
BPE0000I ERPL SCI HIGH 8 YES 1 0
BPE0000I ERR BPE HIGH 2 YES 1 0
BPE0000I ERR SCI HIGH 4 YES 1 0
BPE0000I ERRV BPE HIGH 8 YES 0 0
BPE0000I HASH BPE HIGH 8 YES 3432 3
BPE0000I INTF SCI HIGH 8 YES 874 0
BPE0000I INTP SCI HIGH 16 YES 873 3
BPE0000I LATC BPE HIGH 8 NO 3264 3
BPE0000I MISC BPE HIGH 1 NO 0 0
BPE0000I PLEX SCI HIGH 8 NO 1724 1
```

```

BPE0000I SCI SCI HIGH 8 NO 1 0
BPE0000I SSRV BPE HIGH 4 YES 28 0
BPE0000I STG BPE HIGH 8 NO 324 0
BPE0000I USRX BPE HIGH 4 NO 2 0
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED

```

コマンド例 4

次のコマンドは、すべての OM トレースの状況を表示します。

コマンド:

```
F OM,DIS TRTAB NAME(*) OWNER(OM)
```

出力:

```

BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES
BPE0000I CSL OM HIGH 4 YES 0 0
BPE0000I ERR OM HIGH 4 YES 0 0
BPE0000I OM OM HIGH 4 NO 1 0
BPE0000I PLEX OM HIGH 8 NO 20 0
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED

```

コマンド例 5

次のコマンドは、PLEX トレースおよび RM アドレス・スペース内の「C」で始まるすべてのトレースの状況を表示します。

コマンド:

```
F RM,DIS TRTAB NAME(PLEX,C*)
```

出力:

```

BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES
BPE0000I CBS BPE HIGH 6 NO 466 0
BPE0000I CMD BPE HIGH 2 NO 1 0
BPE0000I CSL RM HIGH 4 NO 0 0
BPE0000I PLEX RM HIGH 8 NO 750 0
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED

```

コマンド例 6

次のコマンドは、すべての ODBM トレースの状況を表示します。

次のコマンドは、すべてのリポジトリ・サーバー・トレースの状況を表示します。

コマンド:

```
F ODBM1,DIS TRTAB NAME(*) OWNER(ODBM)
```

```
F REPO1,DIS TRTAB NAME(*) OWNER(REPO)
```

出力:

```

BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES
BPE0000I CSL ODBM ERROR 4 NO 0 0
BPE0000I ERR ODBM HIGH 4 NO 0 0
BPE0000I ODBM ODBM ERROR 4 NO 0 0
BPE0000I PLEX ODBM ERROR 8 NO 0 0
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED

```

```

BPE0030I TABLE OWNER LEVEL #PAGES EXT #ENTRIES #CYCLES
BPE0000I DIAG REPO HIGH 300 NO 489 0
BPE0032I DIS TRTAB COMMAND COMPLETED

```

関連資料:

3 ページの『第 1 章 BPE コマンドの概要』

📄 基本プリミティブ環境のカスタマイズ出口ルーチン (出口ルーチン)

BPE UPDATE TRACETABLE コマンド

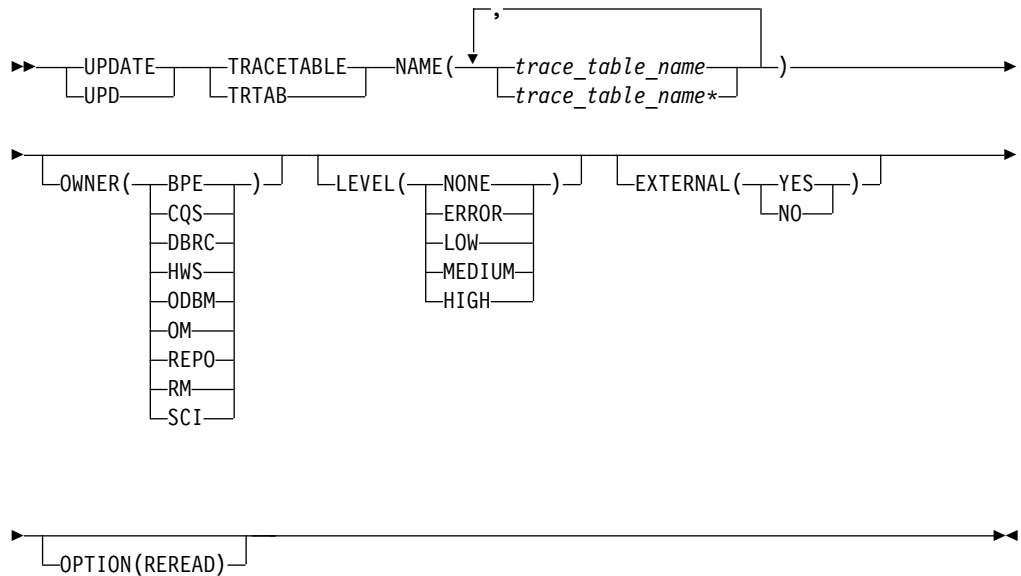
UPDATE TRACETABLE コマンドは、指定されたトレース・テーブルのトレース・レベル属性を更新するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 23 ページの『出力』
- 23 ページの『例』

構文

このコマンドは、要求されたトレース・テーブルのトレース・レベルの設定値を変更するために使用されます。



キーワード

UPDATE | UPD

指定されたトレース・テーブルに対するアクションはその属性の更新であることを指定する必須パラメーター。

TRACETABLE | TRTAB

操作の対象のリソース・タイプが BPE 管理のトレース・テーブルであることを指定する必須パラメーター。

NAME(*trace_table_name*)

更新するトレース・テーブル・タイプ (1 つ以上) の名前を指定する必須パラメーター。単一のトレース・テーブル名またはコンマで区切ったトレース・テーブル名のリストを指定することができます。トレース・テーブル名にはワイルドカード文字を含めることができます。トレース・テーブル名は、BPE 定義のトレース・テーブルか、または IMS コンポーネント定義のトレース・テーブルが可能です。

注: 明示コマンドを必要とするトレース・テーブル・タイプ (例えば、HWS RCTR テーブル) は、トレース・テーブル名に総称名 NAME(*) またはワイルドカード・パターン NAME(R%%%) が指定されている場合は処理されません。明示コマンドを必要とするトレース・テーブル・タイプは、NAME パラメーター NAME(RCTR) で明示的に指定されている場合にのみ処理されます。

BPE を使用している IMS コンポーネント・アドレス・スペース用の BPE 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる BPE 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

AWE 非同期作業エレメント (AWE) トレース・テーブル

CBS 制御ブロック・サービス・トレース・テーブル

CMD コマンド・トレース・テーブル

DISP ディスパッチャー・トレース・テーブル

ERR BPE エラー・トレース・テーブル

ERRV

BPE エラー変数トレース・テーブル

HASH

ハッシュ・トレース・テーブル

LATC ラッチ・トレース・テーブル

MISC トラップ・トレース用に IMS サービスだけが使用する各種のトレース・テーブル。

SSRV システム・サービス・トレース・テーブル

STG ストレージ・サービス・トレース・テーブル

USRX ユーザー・出口ルーチン・トレース・テーブル

CQS アドレス・スペース専用の CQS 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる CQS 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CQS CQS トレース・テーブル

ERR CQS エラー・トレース・テーブル

INTF CQS インターフェース・トレース・テーブル

OFLW

CQS 構造オーバーフロー・トレース・テーブル

SEVT CQS 構造イベント・トレース・テーブル

STR CQS クライアント・アクティビティ・トレース・テーブル

注: CQS クライアント・アクティビティ・トレース・テーブルには、1 つの CQS 構造のみからのトレース・レコードが入っています。

IMS Connect 定義トレース・テーブルは、IMS Connect アドレス・スペースについてのみ更新できます。以下に挙げる IMS Connect 定義トレース・テーブル・タイプが使用可能です。

ADPT

アダプター・トレース・テーブル

CMDT

IMS Connect のコマンド・アクティビティ・トレース・テーブル

CPDR

CICSPORT ドライバー・トレース・テーブル

CPRT CICSPORT 通信トレース・テーブル

ENVT

環境トレース・テーブル

ERRV

IMS Connect のエラー変数トレース・テーブル

GSVC

汎用サービス・トレース・テーブル

HWSI

IMS Connect-OTMA 間ドライバー・トレース・テーブル

HWSN

IMS Connect-ローカル・オプション間ドライバー・トレース・テーブル

HWSO

IMSpIex ドライバー (IPDC) トレース・テーブル

HWSW

IMS Connect-TCP/IP 間ドライバー・トレース・テーブル

ICDR IMS Connect 間ドライバー・トレース・テーブル

ICNC IMS Connect 間通信トレース・テーブル

ISCC ISC 通信トレース・テーブル

ISDR ISC ドライバー・トレース・テーブル

LEPS 言語処理環境 (LE) 事前初期設定サービス・トレース・テーブル

MSCC

MSC 通信トレース・テーブル

MSDR

MSC ドライバー・トレース・テーブル

ODBM

ODBM 通信トレース・テーブル

ODDR

ODBM ドライバー・トレース・テーブル

OMDR

通信プロトコル・アクティビティ (SCI 呼び出し) トレース・テーブル

OSDR

ODBM ソケット・ドライバー・トレース・テーブル

OSOC

ODBM ソケット通信トレース・テーブル

OTMA

OTMA 通信ドライバー・トレース・テーブル

PCDR

ローカル・オプション・ドライバー・トレース・テーブル

PCIF PC インターフェース・トレース・テーブル

RCDR

RMTCICS ドライバー・トレース・テーブル

RCIC RMTCICS 通信トレース・テーブル

RCTR

レコーダー・トレース・テーブル

注: レコーダー・トレース・テーブルは、明示的なコマンドを必要とします。

RRSI RRS インターフェース・トレース・テーブル

TCPI TCP/IP 通信ドライバー・トレース・テーブル

OM アドレス・スペース専用の **OM** 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる **OM** 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERR OM エラー・トレース・テーブル

OM OM 処理のトレース・テーブル

PLEX 特定の IMSplex のための OM 処理用の IMSplex トレース・テーブル

RM アドレス・スペース専用の **RM** 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる **RM** 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERR RM エラー・トレース・テーブル

PLEX 特定の IMSplex のための RM 処理用の IMSplex トレース・テーブル

REPO RM リポジトリ・サービス・トレース・テーブル

RM RM 処理のトレース・テーブル

SCI アドレス・スペース専用の **SCI** 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる **SCI** 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERPL SCI エラー・パラメーター・リスト・トレース・テーブル

ERR SCI エラー・トレース・テーブル

INTF SCI インターフェース・トレース・テーブル

INTP SCI インターフェース・パラメーター・トレース・テーブル

PLEX 特定の IMSplex のための SCI 処理用の IMSplex トレース・テーブル

SCI SCI 処理のトレース・テーブル

DBRC アドレス・スペース専用の **DBRC** 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる **DBRC** 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

ERR DBRC エラー・トレース・テーブル

GRPS DBRC グループ・サービス・トレース・テーブル

MODF

DBRC モジュール・フロー・トレース・テーブル

RQST

DBRC 要求トレース・テーブル

ODBM アドレス・スペース専用の ODBM 定義のトレース・テーブルを更新することができます。以下に挙げる ODBM 定義のトレース・テーブル・タイプが使用可能です。

CSL CSL トレース・テーブル

ERR エラー・トレース・テーブル

ODBM

ODBM トレース・テーブル

PLEX IMSplex トレース・テーブル

リポジトリ・サーバー定義のトレース・テーブルは、REPO アドレス・スペースについてのみ更新できます。以下に挙げるリポジトリ・サーバー (RS) トレース・テーブル・タイプが使用可能です。

DIAG

リポジトリ・サーバー診断トレース・テーブル

OWNER

更新したいトレース・テーブル・タイプ (1 つ以上) の所有者を指定するオプション・パラメーター。以下のいずれかの値を指定することができます。

BPE BPE アドレス・スペースで実行されるすべての IMS コンポーネント用

CQS CQS アドレス・スペース専用

DBRC

DBRC アドレス・スペース専用

HWS HWS アドレス・スペース専用

ODBM

ODBM アドレス・スペース専用

OM OM アドレス・スペース専用

REPO RS アドレス・スペース専用

RM RM アドレス・スペース専用

SCI SCI アドレス・スペース専用

OWNER パラメーターは、どのトレース・テーブルを更新したいかを選択するのに役立つフィルターの役割を果たします。例えば、NAME(*) OWNER(CQS) と指定すると、CQS アドレス・スペース内のすべての CQS 定義トレース・テーブル・タイプ (CQS、ERR、STR、OFLW、SEVT、および INTF) を更新することができます。NAME(*) OWNER(BPE) と指定すると、任意の BPE 管理アドレス・スペース内のすべての BPE 定義トレース・テーブル・タイプを更新することができます。OWNER を省略すると、BPE とコンポーネント・トレース・テーブルの両方とも更新される可能性があります (NAME で指定されたテーブルによって異なります)。

LEVEL(level)

指定されたトレース・テーブルの新しいトレース・レベルを設定するオプション・パラメーター。LEVEL が省略された場合は、指定されたトレース・テーブルのレベルは変更されません。以下に挙げるレベルが可能です。

NONE

テーブルにはトレース・データは書き込まれていません。

ERROR

エラーまたは例外条件のトレースのみがテーブルの中に書き込まれます。

LOW 主要なイベント・トレース・エントリーのみがテーブルの中に書き込まれます。

MEDIUM

主要なイベント・トレース・エントリーと一部のマイナーなイベント・トレース・エントリーがテーブルの中に書き込まれます。

HIGH

すべてのトレース・エントリーがテーブルの中に書き込まれます。

重要: トレース・テーブル・タイプ ERR のレベルを変更することはできません。BPE は、エラー診断が取り込まれるように、レベルを HIGH に強制的に設定します。ERR トレース・テーブルについて指定されたレベルはいずれも無視されます。

EXTERNAL

NAME キーワードで指定されたトレース・テーブルのトレース・エントリーを外部トレース・データ・セットに書き込む必要があるかどうかを指定します。値は YES または NO です。

YES トレース・エントリーを外部トレース・データ・セットとメモリーの両方に書き込むことを指定します。トレース・エントリーが外部データ・セットに書き込まれるのは、IMS PROCLIB データ・セットの BPE 構成パラメーター・メンバー (BPECFG=) に EXTTRACE ステートメントを組み込むことにより、そのデータ・セットを IMS に対して定義している場合に限られます。

NO トレース・エントリーはメモリーのみに書き込むことを指定します。

コマンドの発行時に EXTERNAL キーワードを含めない場合、IMS は影響を受けるテーブルの現行の外部トレース設定 (ある場合) を変更しません。

EXTTRACE ステートメントで指定されたデータ・セットを作成または定義する必要があります。データ・セットを作成または定義しない場合、データ・セットを開こうとしたときにエラーが生成されます。

OPTION(REREAD)

更新された EXTTRACE 設定を取得するために、ジョブの BPECFG= パラメーターで指定された BPE 構成 PROCLIB メンバーを再読み取りすることを指定します。BPE 構成 PROCLIB メンバーのみが再読み取りされます。

初期設定時に読み取られた値が、再読み取りされた時点の PROCLIB メンバー内の EXTTRACE パラメーターの値で置き換えられます。オープンされている現行の外部トレース・データ・セットがあれば、それがクローズされ、割り振り

解除されます。次に、更新された EXTTRACE パラメーターを使用して、新しい外部トレース・データ・セットが割り振られ、オープンされます。BPE PROCLIB メンバー内のその他のパラメーターは、メンバーの再読み取り時に再処理されません。

OPTION(REREAD) を使用すると、アドレス・スペースを停止せずに、新規の外部トレース・データ・セットを指定したり、既存のトレース・データ・セットの特性を変更したりすることができます。

OPTION(REREAD) では、BPE 構成 PROCLIB メンバーを指定する BPECFG= を使用してアドレス・スペースが開始されている必要があります。メンバーが指定されていない場合、再読み取りするメンバーが存在せず、コマンドはリジェクトされます。BPE 構成 PROCLIB メンバーが再読み取りされ、現行アドレス・スペースに適用する EXTTRACE ステートメントが見つからない場合、コマンドはリジェクトされ、既存の外部トレース設定 (ある場合) が保持されます。メンバーが再読み取りされ、新規の外部トレース・データ・セットの割り振りまたはオープン中にエラーが発生した場合 (例えば、指定されたデータ・セット名が存在しない場合)、BPE 外部トレースは停止されます。BPE PROCLIB メンバーを編集して、EXTTRACE ステートメントを訂正してください。その後で、OPTION(REREAD) を指定した UPDATE TRACETABLE コマンドを再入力し、再度 BPE 外部トレースを使用可能にすることができます。

出力

UPDATE TRACETABLE コマンド出力は、コマンドが完了したことを示すメッセージ BPE0032I から成っています。

```
BPE0032I UPDATE TRACETABLE COMMAND COMPLETED
```

例

コマンド例 1

BPE ディスパッチャー・トレース・テーブル (DISP) のレベルを HIGH に更新します。

コマンド :

```
F CQS1,UPDATE TRACETABLE NAME(DISP) LEVEL(HIGH)
```

出力 :

```
BPE0032I UPDATE TRACETABLE COMMAND COMPLETED
```

コマンド例 2

すべての SCI トレース・テーブルのレベルを MEDIUM に更新します。

重要:

- 例えば、この例で示されている NAME(*) のように、ワイルドカード文字を使用して特定所有者に属するすべてのテーブルを選択したとしても、トレース・テーブル・タイプ ERR のレベルを変更することはできません。BPE は、エラー診断が取り込まれるように、レベルを HIGH に強制的に設定します。トレース・テーブル・タイプ ERR のレベルは HIGH に設定されますが、その他のトレース・テーブル・タイプは MEDIUM に設定されます。

- 例えば、この例で示されている NAME(*) のように、ワイルドカード文字を使用して特定の所有者に属するすべてのテーブルを選択した場合は、明示コマンドを必要とするトレース・テーブル・タイプのレベルを変更することはできません。明示コマンドを必要とするトレース・テーブル・タイプは、NAME パラメーターを使用して明示的に指定されている場合にのみ処理されます。

コマンド :

```
F SCI,UPD TRTAB NAME(*) OWNER(SCI) LEVEL(MEDIUM)
```

出力 :

```
BPE0032I UPDATE TRACETABLE COMMAND COMPLETED
```

コマンド例 3

IMS Connect が TCP/IP エンドポイントおよび OTMA との間で送受信するメッセージ・データを取り込むために、IMS Connect レコーダー・トレースのレベルを HIGH に設定します。


コマンド :

```
F HWS1,UPDATE TRACETABLE NAME(RCTR) OWNER(HWS) LEVEL(HIGH) EXTERNAL(YES)
```


出力 :

```
BPE0032I UPDATE TRACETABLE COMMAND COMPLETED  
BPE0046I EXTERNAL TRACE DATA SET  
IMSTESTL.RCTR.GDG01.G0003V00 OPENED ON VOL=000000
```


関連概念:

 IMS Base Primitive Environment for IMS Connect の構成 (システム定義)

関連資料:

 IMS PROCLIB データ・セットの BPE 構成パラメーター・メンバー (システム定義)

3 ページの『第 1 章 BPE コマンドの概要』

 基本プリミティブ環境のカスタマイズ出口ルーチン (出口ルーチン)

第 4 章 BPE USEREXIT コマンド

USEREXIT リソース・タイプは、BPE または BPE を使用する IMS コンポーネント (例えば CQS) のいずれかによって定義または管理されたユーザー出口タイプを参照します。

注: このトピックでは、ユーザー出口ルーチン という用語は、ユーザー提供の出口ルーチン を意味します。

- 『BPE DISPLAY USEREXIT コマンド』
- 33 ページの『BPE REFRESH USEREXIT コマンド』

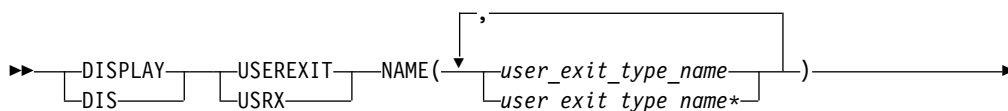
BPE DISPLAY USEREXIT コマンド

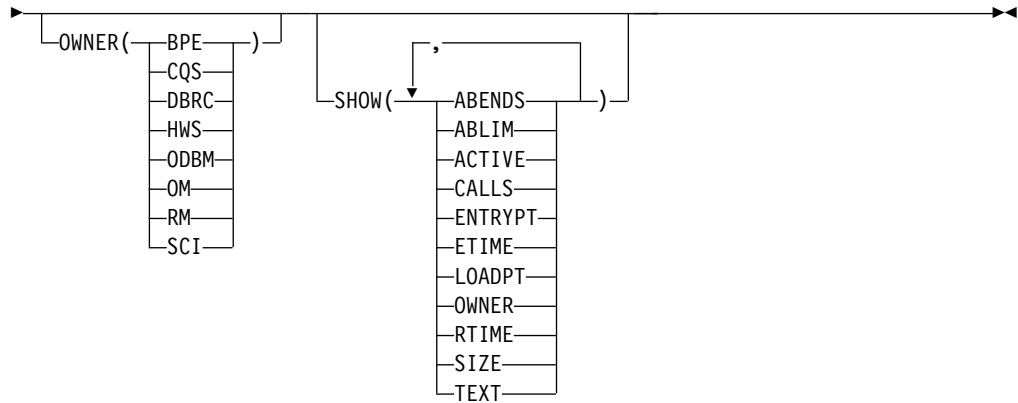
BPE DISPLAY USEREXIT コマンドは、指定されたユーザー出口タイプの属性を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 26 ページの『キーワード』
- 31 ページの『出力』
- 31 ページの『コマンド例 1』
- 32 ページの『コマンド例 2』
- 32 ページの『コマンド例 3』
- 32 ページの『コマンド例 4』
- 33 ページの『コマンド例 5』

構文





キーワード

DISPLAY | DIS

指定されたリソースに対するアクションはリソースの属性の表示であることを指定する必須パラメーター。

USEREXIT | USRX

操作の対象のリソース・タイプは BPE 管理のユーザー出口タイプであることを指定する必須パラメーター。

NAME(*user_exit_type_name*)

その属性を表示させたいユーザー出口タイプ (1 つ以上) の名前を指定する必須パラメーター。単一のユーザー出口タイプ名またはコンマで区切ったユーザー出口タイプ名のリストを指定することができます。ユーザー出口タイプ名にはワイルドカード文字を含めることができます。

重要: このパラメーターで指定する名前 (1 つ以上) は、個々のユーザー出口モジュールの名前ではなく、ユーザー出口タイプの名前です。

BPE、および BPE を使用できる各アドレス・スペースは、さまざまなユーザー出口タイプをもっています。OWNER(BPE) で指定されているように、BPE のユーザー出口タイプには以下のものがあります。

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

STATS

BPE システム機能統計ユーザー出口

OWNER(CQS) で指定されているように、すべての CQS アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

CLNTCONN

クライアント接続ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

OVERFLOW

キュー・オーバーフロー・ユーザー出口

STRSTAT

構造統計ユーザー出口

STREVENT

構造イベント・ユーザー出口

OWNER(DBRC) で指定されているように、すべての DBRC BPE アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

RECONIO

BPE RECON I/O ユーザー出口

REQUEST

BPE DBRC 要求ユーザー出口

SECURITY

BPE DBRC セキュリティー・ユーザー出口

OWNER(HWS) で指定されているように、すべての IMS Connect アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

PORnnnnn

IMS Connect Port Message Edit 出口。この出口タイプ名の *nnnnn* は、10 進数のポート番号 (例えば、POR01234) です。Port Message Edit の出口は、BPE タイプ 2 出口です。

XMLADAP

IMS Connect XML アダプター・ユーザー出口

ODBMAUTH

IMS Connect DB セキュリティー・ユーザー出口。これを使用して、ユーザーは、IMS 従属領域の外から ODBA を介して IMS データベース・リソースにアクセスすることができます。

ODBMROUT

IMS Connect Routing の ODBM 用出口。これを使用して、ユーザーは IMS 別名をオーバーライドしたり、ODBM を選択したりすることができます。

OWNER(ODBM) で指定されているように、すべての ODBM アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

CLNTCONN

クライアントの登録中および登録解除中に呼び出される ODBM ユーザー出口。

INITTERM

ODBM アドレス・スペースの初期化中および終了中に呼び出される ODBM ユーザー出口。

INPUT

ODBM への CSLDMI FUNC=ODBMCI 要求を表示するために呼び出される ODBM ユーザー出口。このタイプのユーザー出口は、実行の前に入力データを変更したり、要求が処理される前にその要求を拒否したりすることができます。

OUTPUT

CSLDMI FUNC=ODBMCI 要求の応答によって、ODBM から ODBM

クライアントに出される出力 (例えば ODBA 呼び出し出力) を表示するために呼び出される ODBM ユーザー出口。このタイプのユーザー出口は、出力が発信元に返される前に、その出力を変更することもできます。

OWNER(OM) で指定されているように、すべての OM アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

CLNTCONN

クライアント接続コマンド登録および登録解除ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

INPUT

コマンド入力ユーザー出口

OUTPUT

出力ユーザー出口

SECURITY

セキュリティー検査ユーザー出口

OWNER(RM) で指定されているように、すべての RM アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

CLNTCONN

クライアント接続および切断ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

OWNER(SCI) で指定されているように、すべての SCI アドレス・スペースで以下のユーザー出口タイプが定義されます。

CLNTCONN

クライアント接続および切断ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

OWNER(BPE | CQS | DBRC | HWS | ODBM | OM | RM | SCI)

属性を表示させたいユーザー出口タイプ (1 つ以上) の所有者を指定するオプション・パラメーター。以下のいずれかの値を指定することができます。

BPE

BPE アドレス・スペースで実行されるすべての IMS コンポーネント用

CQS

CQS アドレス・スペース専用

DBRC

DBRC アドレス・スペース専用

HWS

IMS Connect アドレス・スペース専用

ODBM

ODBM アドレス・スペース専用

OM OM アドレス・スペース専用

RM RM アドレス・スペース専用

SCI

SCI アドレス・スペース専用

OWNER パラメーターは、表示させたいユーザー出口タイプを選択するのに役立つフィルターの役割を果たします。例えば、**NAME(*) OWNER(CQS)** と指定すると、**CQS** アドレス・スペースのすべての **CQS** 定義のユーザー出口タイプを表示することができます。 **OWNER** を省略すると、**BPE** とコンポーネント・ユーザー出口の両方とも表示される可能性があります (**NAME** で指定された出口によって異なります)。

SHOW(attribute)

要求されたユーザー出口について表示したい属性を指定するオプション・パラメーター。

ユーザー出口についての情報を表示すると、表示出力の各行には、1 つのユーザー出口モジュールについての要求された属性が複数の列にもなって入っています。どのユーザー出口の表示にも **EXITTYPE** (出口のタイプ)、および **MODULE** (出口のロード・モジュール名) というラベルの付いた列が含まれています。さらに、以下の属性はいずれも、**SHOW** パラメーターを用いて要求できます。

ABENDS

ユーザー出口モジュールの最後のユーザー出口リフレッシュ以降に (リフレッシュが発生していない場合はアドレス・スペース初期設定以降に)、そのモジュール内で発生した異常終了の数。 **BPE** は、各ユーザー出口モジュール内で発生した異常終了の回数を記録します。この数が、出口のタイプに関する **EXITDEF** ステートメントの **ABLIM=** パラメーターに定義された数に達すると、**BPE** はモジュールの呼び出しを停止します。ユーザー出口モジュールがリフレッシュされると、このカウントはゼロにリセットされ、**BPE** は再びモジュールを呼び出します。

このフィールドに表示可能な最大値は $2^{31}-1$ です。異常終了のカウントがこの値を超えた場合は、**2147483647** と表示されます。

ABLIM

BPE 出口リスト **PROCLIB** メンバーの、ユーザー出口タイプに関する **EXITDEF** ステートメント上の **ABLIM=** パラメーターで指定されているユーザー出口タイプの異常終了の限界カウント。これは、**BPE** がユーザー出口の呼び出しを停止する前に、ユーザー出口モジュールが異常終了できる回数です。値 **0** は、異常終了の限界がないことを示します。

このフィールドに表示可能な最大値は $2^{31}-1$ です。

ACTIVE

現在アクティブなユーザー出口のインスタンスの数。これは、まだ戻されていないユーザー出口への呼び出し回数を表した、時刻指定数です。

このフィールドに表示可能な最大値は **999999** です。アクティブ・カウントがこの値を超えた場合は、**999999** と表示されます。

CALLS

最後のユーザー出口リフレッシュ以降の、ユーザー出口の呼び出し回数。

パフォーマンス上の理由から、BPE がこの数を収集するとき、シリアライゼーションは取得されません。複数インスタンスを並列で実行できる出口タイプの場合、この数は単なる概算であると見なす必要があります。

このフィールドに表示可能な最大値は 2147483647 ($2^{31}-1$) です。呼び出しカウントがこの値を超えた場合は、2147483647 と表示されます。

ENTRYPT

ユーザー出口モジュールのエントリー・ポイントのアドレス。

ETIME

最後のリフレッシュ以降、出口モジュールで費やされた合計 (累積) 経過時間 (ミリ秒)。

パフォーマンス上の理由から、BPE がこの数を収集するとき、シリアライゼーションは取得されません。複数インスタンスを並列で実行できる出口タイプの場合、この数は単なる概算であると見なす必要があります。

このフィールドに表示可能な最大値は 2147483647 ($2^{31}-1$) です。経過時間の数値 (ミリ秒) がこの値を超えた場合は、2147483647 と表示されません。

LOADPT

ユーザー出口モジュールのロード開始点のアドレス。

OWNER

ユーザー出口タイプを所有している IMS コンポーネント。BPE が所有するユーザー出口タイプは、BPE を使用するすべての IMS コンポーネント・アドレス・スペースに存在するシステム出口タイプです。コンポーネントに固有なユーザー出口タイプは、1 から 4 文字のコンポーネント ID をこの欄に表示します (例えば、CQS)。

RTIME

これは、ユーザー出口モジュールが最後にリフレッシュされた (リフレッシュが発生しなかった場合は最初にロードされた) ローカル日付と時刻です。この出力フィールドのフォーマットは次のとおりです。

```
yyyy-mm-dd hh:mm:ss.th
```

SIZE ユーザー出口ロード・モジュールのサイズ (単位はバイト、16 進数で表示)。

TEXT モジュールのエントリー・ポイントから +04 のオフセットから始まる 27 バイト。EBCDIC に変換され、ピリオド (.) で置き換えられた印刷不可の文字を含みます。これはモジュール識別情報に共通のロケーションです。モジュール内のこのポイントの印刷可能な識別データがユーザー出口に含まれている場合、TEXT オプションを指定するとその情報が表示できます。

SHOW パラメーターが指定されない場合、EXITTYPE および MODULE の後に表示されるデフォルト属性は、OWNER、ACTIVE、および ABENDS です。

SHOW パラメーターで属性をリストする順序は、属性の表示順序には影響しません。BPE が、表示出力の属性欄の順序を決定します。順序は次のとおりです。

1. OWNER
2. ACTIVE
3. ABENDS
4. ABLIM
5. CALLS
6. ETIME
7. RTIME
8. ENTRYPT
9. LOADPT
10. SIZE
11. TEXT

重要: 出力行の長さが WTO で表示するには長すぎる、数多くの属性を要求することは可能です。これが起こった場合、コマンドは処理されますが、一部の行が切り捨てられる可能性があります。BPE が表示する行の最大長は、126 文字です。

出力

DISPLAY USEREXIT コマンドの出力は、ヘッダー行、情報が表示されるユーザー出口モジュールごとに 1 行、およびコマンドが完了したことを示す BPE0032I メッセージ 1 行で構成されます。

コマンド:

```
F CQS1,DISPLAY USEREXIT NAME(INITTERM,STRSTAT)
```

出力:

```
BPE0030I EXITTYPE MODULE OWNER ACTIVE ABENDS
BPE0000I INITTERM MYINIT00 CQS 0 0
BPE0000I INITTERM ZZZINIT0 CQS 0 0
BPE0000I STRSTAT MYSTAT00 CQS 1 2
BPE0032I DISPLAY USEREXIT COMMAND COMPLETED
```

EXITTYPE と MODULE の欄は、SHOW で何が指定されているかに関係なく、すべての DISPLAY USEREXIT コマンドのためにあります。1 つのユーザー出口タイプについて複数の出口モジュールがリストされる場合は、それぞれが呼び出される順序でリストされます。

コマンド例 1

ここでは、DISPLAY USEREXIT コマンドの使用例をいくつか示します。

CQS 構造イベント・ユーザー出口タイプの状況を表示します。

コマンド:

```
F CQS1,DISPLAY USEREXIT NAME(STREVENT)
```

出力:

```
BPE0030I EXITTYPE MODULE OWNER ACTIVE ABENDS
BPE0000I STREVENT STREXV00 CQS 1 0
BPE0000I STREVENT ZZZSTEVO CQS 0 0
BPE0032I DISPLAY USEREXIT COMMAND COMPLETED
```

この例では、CQS 構造イベントのために呼び出されるように定義された、2 つの構造イベント出口モジュールがあります。最初に STREXV00、続けて ZZZSTEVO が呼び出されます。

コマンド例 2

すべての CQS ユーザー出口タイプの、呼び出し回数、費やされた経過時間、および異常終了の限界を表示します。

コマンド:

```
F CQS1,DIS USRX NAME(*) OWNER(CQS) SHOW(CALLS,ETIME,ABLIM)
```

出力:

```
BPE0030I EXITTYPE MODULE ABLIM CALLS ETIME
BPE0000I CLNTCONN CLCONX00 0 2 12
BPE0000I INITTERM MYCQSIT0 0 1 2
BPE0000I INITTERM OEMCQIT0 0 1 162
BPE0000I OVERFLOW OVERFL01 5 3 6
BPE0000I OVERFLOW OVERFL02 5 3 19
BPE0000I OVERFLOW OVERFL03 5 3 9
BPE0000I OVERFLOW OVERFL04 5 3 15593
BPE0000I STREVENT STREXV00 10 542 628
BPE0000I STRSTAT STRSTAT0 1 36 1889
BPE0000I STRSTAT STRSTA10 1 36 241
BPE0032I DIS USRX COMMAND COMPLETED
```

コマンド例 3

SCI CLNTCONN すべてのユーザー出口モジュールのエントリー・ポイント、ロード開始点、およびサイズを表示します。

コマンド:

```
F SCI,DIS USRX NAME(CLNTCONN) SHOW(SIZE,ENTRYPT,LOADPT)
```

出力:

```
BPE0030I EXITTYPE MODULE ENTRYPT LOADPT SIZE
BPE0000I CLNTCONN SCCLCN00 8B864D78 8B864D78 00000458
BPE0000I CLNTCONN SCCLCN10 8BA14200 8BA14200 00001C10
BPE0000I CLNTCONN SCCLCN20 8BA18EE8 8BA18AF0 00000AB0
BPE0032I DIS USRX COMMAND COMPLETED
```

コマンド例 4

OM アドレス・スペースのすべての BPE ユーザー出口に関するモジュール・テキストの最初の部分を表示します。

コマンド:

```
F OM,DIS USRX NAME(*) OWNER(BPE) SHOW(TEXT)
```

出力:

```

BPE0030I EXITTYPE MODULE TEXT
BPE0000I INITTERM MYINIT00 .MYINIT00+20010615+17:47...
BPE0000I STATS HHGSTAT0 .HHGSTAT0+20010615+08:47...
BPE0032I DIS USRX COMMAND COMPLETED

```

コマンド例 5

すべての RM INITTERM モジュールのリフレッシュ時間を表示します。

コマンド:

```
F RM,DIS USRX NAME(*) OWNER(RM) SHOW(RTIME)
```

出力:


```

BPE0030I EXITTYPE MODULE RTIME
BPE0000I INITTERM RMINITRM 2001-06-15 16:48:22.39
BPE0032I DIS USRX COMMAND COMPLETED

```

関連資料:

3 ページの『第 1 章 BPE コマンドの概要』

 [基本プリミティブ環境のカスタマイズ出口ルーチン \(出口ルーチン\)](#)

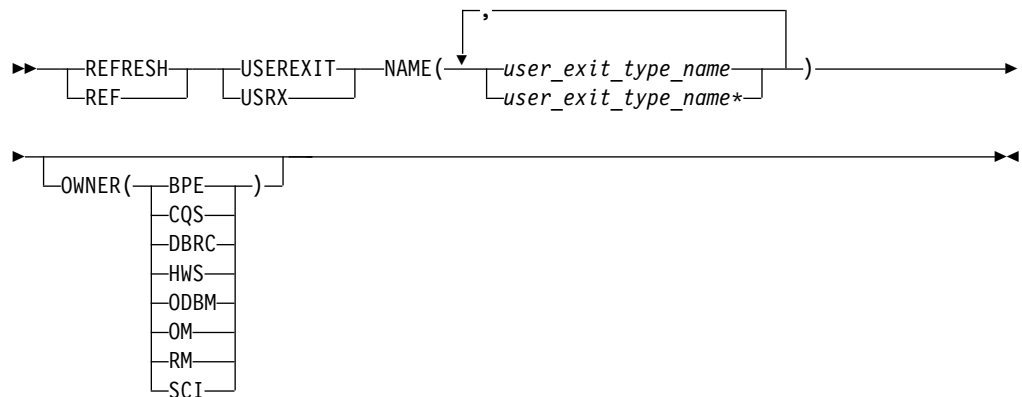
BPE REFRESH USEREXIT コマンド

BPE REFRESH USEREXIT コマンドは、指定されたユーザー出口タイプのユーザー出口モジュールの新規コピーをロードするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 34 ページの『キーワード』
- 37 ページの『使用上の注意』
- 39 ページの『出力』
- 39 ページの『例』

構文



キーワード

REFRESH | REF

指定されたリソースに対するアクションがそのリソースをリフレッシュすることであることを指定する必須パラメーター。

USEREXIT | USRX

操作の対象のリソース・タイプは BPE 管理のユーザー出口タイプであることを指定する必須パラメーター。

NAME(*user_exit_type_name*)

リフレッシュしたいユーザー出口タイプの名前を指定する必須パラメーター。単一のユーザー出口タイプ名またはコンマで区切ったユーザー出口タイプ名のリストを指定することができます。ユーザー出口タイプ名にはワイルドカード文字を含めることができます。

特に指定がなければ、ここで説明されているすべてのユーザー出口はタイプ 1 ユーザー出口です。

重要: このパラメーターで指定する名前は、個々のユーザー出口モジュールの名前ではなく、ユーザー出口タイプの名前です。

BPE、および BPE を使用できる各アドレス・スペースは、さまざまなユーザー出口タイプをもっています。BPE のユーザー出口タイプには、OWNER(BPE) によって指定されたように、以下のものが含まれています。

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

STATS

BPE システム機能統計ユーザー出口

ユーザー出口のタイプは、OWNER(CQS) によって指定されているようにすべての CQS アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

CLNTCONN

クライアント接続ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

OVERFLOW

キュー・オーバーフロー・ユーザー出口

STRSTAT

構造統計ユーザー出口

STREVENT

構造イベント・ユーザー出口

ユーザー出口のタイプは、OWNER(DBRC) によって指定されているように、すべての BPE ベースの DBRC アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

RECONIO

BPE RECON I/O ユーザー出口

REQUEST

BPE DBRC 要求ユーザー出口

SECURITY

BPE DBRC セキュリティー・ユーザー出口

ユーザー出口のタイプは、OWNER(HWS) によって指定されているように、すべての IMS Connect アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

POR $nnnnn$

IMS Connect Port Message Edit 出口。この出口タイプ名の $nnnnn$ は、10 進数のポート番号 (例えば、POR01234) です。Port Message Edit の出口は、BPE タイプ 2 出口です。

XMLADAP

IMS Connect XML アダプター・ユーザー出口

ODBMAUTH

IMS Connect DB セキュリティー・ユーザー出口。これを使用して、ユーザーは、IMS 従属領域の外から ODBA を介して IMS データベース・リソースにアクセスすることができます。

ODBMROUT

IMS Connect Routing の ODBM 用出口。これを使用して、ユーザーは IMS 別名をオーバーライドしたり、ODBM を選択したりすることができます。

ユーザー出口のタイプは、OWNER(ODBM) によって指定されているように、すべての ODBM アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

CLNTCONN

クライアントの登録中および登録解除中に呼び出される ODBM ユーザー出口。

INITTERM

ODBM アドレス・スペースの初期化中および終了中に呼び出される ODBM ユーザー出口。

INPUT

ODBM への CSLDMI FUNC=ODBMCI 要求を表示するために呼び出される ODBM ユーザー出口。このタイプのユーザー出口は、実行の前に入力データを変更したり、要求が処理される前にその要求を拒否したりすることができます。

OUTPUT

CSLDMI FUNC=ODBMCI 要求の応答によって、ODBM から ODBM クライアントに出される出力 (例えば ODBA 呼び出し出力) を表示するために呼び出される ODBM ユーザー出口。このタイプのユーザー出口は、出力が発信元に返される前に、その出力を変更することもできます。

ユーザー出口のタイプは、OWNER(OM) によって指定されているようにすべての OM アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

CLNTCONN

クライアント接続コマンド登録および登録解除ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

INPUT

コマンド入力ユーザー出口

OUTPUT

出力ユーザー出口

SECURITY

セキュリティー検査ユーザー出口

ユーザー出口のタイプは、OWNER(RM) によって指定されているようにすべての RM アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

CLNTCONN

クライアント接続および切断ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

ユーザー出口のタイプは、OWNER(SCI) によって指定されているようにすべての SCI アドレス・スペースに定義され、以下に挙げるタイプが含まれています。

CLNTCONN

クライアント接続および切断ユーザー出口

INITTERM

初期設定 - 終了ユーザー出口

OWNER(BPE | CQS | DBRC | HWS | ODBM | OM | RM | SCI)

リフレッシュしたいユーザー出口タイプ (1 つ以上) の所有者を指定するオプション・パラメーター。以下のいずれかの値を指定することができます。

BPE

BPE アドレス・スペースで実行されるすべての IMS コンポーネント用

CQS

CQS アドレス・スペース専用。

DBRC

DBRC アドレス・スペース専用。

HWS

IMS Connect アドレス・スペース専用。

ODBM

ODBM アドレス・スペース専用。

OM OM アドレス・スペース専用。

RM RM アドレス・スペース専用。

SCI

SCI アドレス・スペース専用。

OWNER パラメーターは、リフレッシュしたいユーザー出口タイプを選択するのに役立つフィルターの役割を果たします。例えば、NAME(*) OWNER(CQS) と指定すると、CQS アドレス・スペースのすべての CQS 定義のユーザー出口タイプをリフレッシュすることができます。OWNER を省略すると、BPE とコンポーネント・ユーザー出口の両方ともリフレッシュされる可能性があります (NAME で指定された出口によって異なります)。

使用上の注意

BPE ユーザー出口ルーチンには、タイプ 1 とタイプ 2 の 2 つの種類があります。タイプ 1 出口は、BPE 出口リスト PROCLIB メンバー内の BPE に定義されます。これらのメンバーはアドレス・スペースの初期設定時に処理され、REFRESH USEREXIT コマンドが発行されるたびに、再度処理されます。これにより、BPE アドレス・スペースの実行中に、出口指定を変更および更新することができます。

タイプ 2 出口は、実行時に BPE にプログラムを使用して定義されます。通常、タイプ 2 出口タイプ名は、BPE の制御外にあるその他の指定に基づいて、BPE を使用して IMS コンポーネントによって生成されます。例えば、IMS Connect Port Message Edit 出口タイプの名前は、TCP/IP ポート番号を使用して生成されます (例えば、ポート番号が 1234 の場合は POR01234 になります)。タイプ 2 出口は、BPE 出口リストの PROCLIB メンバーで指定されません。

タイプ 1 出口の場合、REFRESH USEREXIT コマンドは 2 つのことを行います。実行すると、BPE は、BPE 構成 PROCLIB メンバーで指定されたユーザー出口 PROCLIB メンバーを再処理します。また、コマンドで指定されたタイプに応じてユーザー出口 PROCLIB メンバーに現在リストされているユーザー出口モジュールを再ロードします。このコマンドを使用することで、アドレス・スペースを停止および再始動することなく、ユーザー出口を更新することができます。

タイプ 2 出口の場合、REFRESH USEREXIT コマンドは、実行時に BPE に定義されたユーザー出口モジュールを再ロードするのみです。タイプ 2 出口は BPE に対して外部で定義されるわけではないため、出口の定義値 (モジュール名、異常終了制限) は変更されません。

REFRESH USEREXIT コマンドを入力すると、BPE は以下の処理を実行します。

- タイプ 1 出口の場合
 - BPE 構成 PROCLIB メンバーの EXITMBR= ステートメント上で指定されているユーザー出口 PROCLIB メンバーをすべて読み取ります。コマンドを発行するときに BPE はこれらのメンバーを再読み取りするため、REFRESH コマンドを発行する前にユーザー出口 PROCLIB メンバーを編集し、ユーザー出口定義を変更することができます。BPE はメインの BPE 構成 PROCLIB メンバーを再読み取りしないため、ユーザー出口 PROCLIB メンバーの名前は変更できません。ただし、それらのメンバーの内容のみの変更はできます。
 - コマンドで指定されたユーザー出口タイプに応じて EXITDEF= ステートメント上で指定された、ユーザー出口モジュールをロードします。
- タイプ 2 出口の場合
 - コマンドで指定されたユーザー出口タイプに関連付けられたユーザー出口モジュールの新規コピーをロードします。

- すべての現行のユーザー出口を静止します。これは、コマンドがアクティブな出口が処理を完了するのを待って、現在の出口への新しい呼び出しを遅延させるということです。すべての現在のユーザー出口を静止することで、出口がリフレッシュされている間は、確実に、ユーザー出口が実行されないようになります。
- 前のユーザー出口モジュールを指す BPE 制御ブロック・ポインターを、新たにロードされたモジュールを指すポインターで置き換えます。これらのポインターは、出口の呼び出しを管理するために使用されます。
- ユーザー出口を再開し、新たにロードされる出口の呼び出しが行われることを可能にします。
- ユーザー出口の古いコピーを削除します。

BPE は、古いモジュールを削除する前に、ユーザー出口モジュールの新しいコピーをロードしています。この処理中にエラーが発生した (例えば、モジュールがロードできなかった、あるいは BPE 内部制御ブロック・ストレージを取得できなかった) 場合、BPE はコマンドを失敗させ、ユーザー出口の古いコピーは有効のままにします。コマンドが正常に完了するためには、指定したユーザー出口タイプのすべてのモジュールが正常にロードされていることが必要です。

ユーザー出口モジュールがリフレッシュされると、そのモジュールの異常終了カウントはゼロにリセットされます。これは、異常終了限界 (EXITDEF ステートメント上で ABLIM パラメーターによって指定) に達し、以後は BPE に呼び出されなくなったユーザー出口モジュールが、再び呼び出されるということです。

重要: PROCLIB メンバーのユーザー出口の ABLIM パラメーターを変更した場合、ABLIM の新しい値はリフレッシュ・コマンドの後に有効になります。

ユーザー出口のリフレッシュに関する考慮事項

- ユーザー出口タイプをリフレッシュすると、BPE は、そのタイプ用に定義されたすべての出口モジュールを再ロードします。モジュールの新しいコピーは、古いコピーとは異なる仮想アドレスに位置します。再入可能なモジュールは適切に作動します。ただし、モジュールが再入可能でなく、データがそのモジュール内に保管される場合、モジュールは再ロードが行われること、および、以前にモジュール内に保管された情報が失われることを許容できなければなりません。

重要: この状態を回避するには、すべてのユーザー出口モジュールを再入可能としてコーディングしてリンク・エディットしてください。

- ユーザーが、前にロードされたユーザー出口モジュールをリフレッシュした場合は、BPE は、引き続き、そのモジュールの前のコピーにより使用された同じ静的作業域を渡します。新しいバージョンのモジュールが、このエリアについて旧バージョンとは異なるマッピングまたは使用法をもっている場合には、新バージョンには、この静的作業域内にある古いタイプの定様式データを処理できる **toleration** (許容) コードが含まれている必要があります。

推奨事項: 静的作業域にはバージョン番号を入れるようにしてください。これは、この作業域内で別のデータ構造を使用するときに、ユーザー出口がそれを認識できるようにするためです。

- EXITDEF リストからユーザー出口モジュールを除去して、出口をリフレッシュすると、BPE は、除去された出口モジュールに関連する静的作業域を削除しま

す。後からモジュールを EXITDEF リストに再び追加し、出口をリフレッシュすると、モジュールは、前の作業域ではなく、新しい (クリアされた) 静的作業域を取得します。

- ユーザー出口が、仮想ルックアサイド機能 (VLF) またはそれと同等の製品を使用するリンク・ルックアサイド (LLA) により管理されている場合は、REFRESH USEREXIT コマンドを出す前に、リフレッシュしようとしているモジュールのコピーが LLA の中で更新されていることを確認する必要があります。
- 長時間にわたる z/OS WAIT (例えば、要応答オペレーター宛メッセージ (WTOR) のように遅延する可能性のある外部イベントを待つための WAIT) を出すユーザー出口がある場合は、REFRESH USEREXIT コマンドを出すと、パフォーマンスの問題または作業の停止が生じることがあります。これは、BPE が、REFRESH コマンドを処理するためにユーザー出口を静止しなければならないためです。BPE は、ユーザー出口のリフレッシュを実行する前に、現在呼び出されているユーザー出口がすべて完了するまで待たなければなりません。BPE は、コマンドが完了するまで、ユーザー出口への新しい呼び出しを阻止します。ユーザー出口が呼び出されていて、BPE に長期間戻らない場合、REFRESH コマンドは出口が戻るまで遅延されます。BPE が待機している間は他のユーザー出口を呼び出すことはできないので、ユーザー出口の呼び出し処理も待ち状態にされます。

推奨事項: ユーザー出口が長い待ちを回避するようにし、待つ可能性のあるサービスを出すことは回避するようにしてください。

出力

REFRESH USEREXIT コマンドの出力は、コマンドが完了したことを示すメッセージ BPE0032I から成っています。

```
BPE0032I REFRESH USEREXIT COMMAND COMPLETED
```

例

ここでは、REFRESH USEREXIT コマンドの使用例をいくつか示します。

コマンド例 1

すべてのユーザー出口モジュールをリフレッシュします。

コマンド :

```
F CQS1,REFRESH USEREXIT NAME(*)
```

出力 :

```
BPE0032I REFRESH USEREXIT COMMAND COMPLETED
```

コマンド例 2

OM コマンド入力および出力の出口タイプのユーザー出口モジュールをすべてリフレッシュします。


コマンド :

```
F OM,REF USRX NAME(INPUT,OUTPUT)
```

出力 :


```
BPE0032I REF USRX COMMAND COMPLETED
```

関連概念:

 z/OS: LLA が管理するライブラリーの変更

関連資料:

3 ページの『第 1 章 BPE コマンドの概要』

 基本プリミティブ環境のカスタマイズ出口ルーチン (出口ルーチン)

 IMS PROCLIB データ・セットの BPE 出口リスト・メンバー (システム定義)

第 2 部 Common Service Layer コマンド

Common Service Layer コマンドは、CSL を処理するために使用します。

- 43 ページの『第 5 章 CSL SHUTDOWN コマンド』
- 45 ページの『第 6 章 STOP csljob コマンド』

第 5 章 CSL SHUTDOWN コマンド

CSL SHUTDOWN コマンドは、1 つの z/OS イメージ上の CSL をシャットダウンするため、または IMSplex 全体をシャットダウンするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『使用上の注意』

構文

```
▶▶ F—scijobname—,—SHUTDOWN—

|         |
|---------|
| CSLLCL  |
| CSLPLEX |

▶▶
```

使用上の注意

z/OS MODIFY コマンドを発行する前に、/CHE FREEZE コマンドを発行して、CSL に接続されている IMS 制御領域を停止することができます。

1 つの z/OS イメージ上の CSL をシャットダウンするには、z/OS MODIFY コマンド F *scijobname*,SHUTDOWN CSLLCL を発行します。ここで、*scijobname* は、CSL 内の SCI の名前です。

このコマンドは、コマンドを受け取る SCI に関連付けられた z/OS イメージ上の CSL をシャットダウンします。このコマンドは、単一 z/OS イメージ上の CSL を手順どおりにシャットダウンする場合に使用してください。

IMSplex 全体をシャットダウンするには、z/OS MODIFY コマンド F *scijobname*,SHUTDOWN CSLPLEX を発行します。ここで、*scijobname* は CSL 内の SCI の名前です。

このコマンドは、単一 IMSplex 内の全 z/OS イメージ上の、コマンドを受け取る SCI に関連付けられた CSL マネージャーをシャットダウンします。

関連タスク:

➡ z/OS コマンドを使用した CSL のシャットダウン (オペレーションおよびオートメーション)

第 6 章 STOP csllib コマンド

STOP (または P) *odbmjobname*、*omjobname*、*rmjobname*、および *scijobname* コマンドは、IMSpex の Open Database Manager (ODBM) アドレス・スペース、Operations Manager (OM) アドレス・スペース、Resource Manager (RM) アドレス・スペース、および Structured Call Interface (SCI) アドレス・スペースをシャットダウンするために使用されます。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』

構文

▶▶ $\left[\begin{array}{l} P \\ \text{STOP} \end{array} \right]$ *odbmjobname* —————▶▶

▶▶ $\left[\begin{array}{l} P \\ \text{STOP} \end{array} \right]$ *omjobname* —————▶▶

▶▶ $\left[\begin{array}{l} P \\ \text{STOP} \end{array} \right]$ *rmjobname* —————▶▶

▶▶ $\left[\begin{array}{l} P \\ \text{STOP} \end{array} \right]$ *scijobname* —————▶▶

キーワード

odbmjobname

停止する ODBM アドレス・スペースのジョブ名を識別します。

omjobname

停止する OM アドレス・スペースのジョブ名を識別します。

rmjobname

停止する RM アドレス・スペースのジョブ名を識別します。

scijobname

停止する SCI アドレス・スペースのジョブ名を識別します。

関連タスク:

➡ CSL のシャットダウン (オペレーションおよびオートメーション)

第 3 部 Common Queue Server コマンド

Common Queue Server コマンドは、CQS を処理するために使用します。

- 49 ページの『第 7 章 STOP cqsjob コマンド』

第 7 章 STOP cqsjob コマンド

STOP (P) *cqsjobname* コマンドは、CQS を正常にシャットダウンするために使用します。いずれかのアクティブ IMS サブシステムが現在 CQS に接続中である場合は、このコマンドはリジェクトされます。

構文

▶▶ — P — *cqsjobname* —▶▶
└── STOP ─┘

キーワード

STOP *cqsjobname* コマンドでは、次のキーワードを指定できます。

cqsjobname

停止する CQS のジョブ名を指定します。

第 4 部 DBRC コマンド

データベース・リカバリー管理 (DBRC) コマンドは、DBRC からサービスを取得するために使用します。

データベース・リカバリー管理コマンド情報は、以下のとおりです。

- 53 ページの『第 8 章 DBRC コマンドの概要』
- 67 ページの『第 9 章 BACKUP.RECON コマンド』
- 69 ページの『第 10 章 CHANGE コマンド』
- 165 ページの『第 11 章 CLEANUP.RECON コマンド』
- 179 ページの『第 12 章 DELETE コマンド』
- 197 ページの『第 13 章 GENJCL コマンド』
- 317 ページの『第 14 章 INIT コマンド』
- 359 ページの『第 15 章 LIST コマンド』
- 385 ページの『第 16 章 NOTIFY コマンド』
- 439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

第 8 章 DBRC コマンドの概要

DBRC コマンドは、DBRC からサービスを取得するために使用します。これらのコマンドを使用して、RECON データ・セット内の情報の追加、変更、および削除を行い、データベース・リカバリーに使用されるさまざまな IMS ユーティリティを実行するために必要な JCL および制御ステートメントを生成します。

DBRC API 要求を使用して、DBRC から同じサービスを取得することもできます。

DBRC バッチ・コマンド

DBRC バッチ・コマンドは、RECON データ・セットのバックアップ・コピーの作成、RECON データ・セット内の情報の検査、RECON データ・セット内の情報の変更、RECON データ・セットからの情報の削除、各種 IMS リカバリー・ユーティリティのジョブの生成、または RECON データ・セットに対する変更を行うために使用します。




以下に、DBRC コマンドの要約を示します。

- BACKUP.RECON コマンドは、RECON データ・セットのバックアップ・コピーを作成する際に使用します。
- CHANGE コマンドは、RECON データ・セット内の情報を変更する際に使用します。
- DELETE コマンドは、RECON データ・セットから情報を削除する際に使用します。
- GENJCL コマンドは、各種の IMS リカバリー・ユーティリティ用のジョブを生成する際に使用します。
- INIT コマンドは、RECON データ・セットに次のような変更を加える際に使用します。
 - RECON データ・セットの初期設定
 - データベースおよびそれに関連したレコードの登録
 - 変更累積グループおよび再利用の変更累積データ・セットの作成
 - DBDS グループ、DB グループ、およびリカバリー・グループの作成
 - 再利用のイメージ・コピー・レコードの作成
- LIST コマンドは、RECON データ・セットのすべての、または選択された部分のフォーマット済み印刷出力を作成する際に使用します。
- NOTIFY コマンドは、RECON に、通常はそこに自動的に書き込まれる情報を追加する際に使用します。
- REPAIR.RECON コマンドは、RECON データ・セットに次のような変更を加える際に使用します。
 - 欠落または破損した RECON DMB テーブル・レコードを再作成する。
 - RECON ヘッダー・レコード、データベース・レコード、および高速機能エリア・レコード内でデータ管理ブロック (DMB) 番号の内部表記に不整合がないか検査したり、不整合を修正したりする。



DBRC コマンドは、以下のいずれかの方法を使用して実行することができます。

- データベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) を使用して、DBRC コマンドを実行できます。
- これらのコマンドの一部を、そのバリエーションとして /RMxxxxxx コマンドを使用すると、オンラインで実行することもできます。
- LIST.xx は例外として、DBRC アプリケーション・プログラミング・インターフェースを使用して FUNC=COMMAND 要求を使って DBRC コマンドを実行できます。
- CICS® ユーザーは、DBCTL へのコマンド・インターフェースを提供する、CICS 提供のトランザクション CDBM を使用して DBRC コマンドを実行することができます。

関連概念:

-  データ・セット命名規則 (システム管理)
-  CICS: CDBM - database control interface
-  DBRC API (システム・プログラミング API)

関連資料:

-  データベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) (システム・ユーティリティ)
-  CICS: Issuing DBRC commands from CICS

DBRC オンライン・コマンド


一部の DBRC コマンドは、オンライン IMS 環境から実行することができます (/RMxxxxxx コマンド)。

オンライン DBRC コマンドには、次のものがあります。

- /RMCHANGE
- /RMDELETE
- /RMGENJCL
- /RMINIT
- /RMLIST
- /RMNOTIFY

これらのコマンドが IMS のセキュリティーを正常にパススルーした後、IMS はこれらのコマンドをその処理を行う DBRC に渡します。これらのコマンドは、類似の名前を持つ通常の DBRC コマンドと同じ方法で処理されます。例えば、DBRC は /RMCHANGE コマンドを CHANGE コマンドと同様の方法で処理します。これらのオンライン・コマンドの許可も、バッチ DBRC コマンドと同様の方法で制御されます。具体的に言うと、DBRC コマンド許可出口 (DSPDCAX0)、RACF® などのセキュリティー許可プログラム、またはこの両方を使用することができます。

関連概念:

-  DBRC セキュリティー (システム管理)

関連資料:

DBRC コマンド構文

すべての DBRC コマンドは、ここで説明する構文に従う必要があります。この構文は標準のコマンド言語構文であり、TSO およびアクセス方式サービス・プログラムの構文に類似しています。

コマンドは、大文字、小文字、または大/小文字混合のいずれの形式で入力しても構いません。DBRC では、使用する形式には関係なく、コマンド入力の多くは処理する前に大文字形式に変換されます。ただし、DBRC は、キーワード値とストリング値は大文字形式には変換しません。例えば、GENJCL コマンドの **USERKEYS** パラメーターや、NOTIFY.UIC および CHANGE.UIC コマンドの **UDATA** パラメーターの「*value*」の部分は、入力されたとおりの形式で処理されます。

サブセクション:

- 『分離文字』
- 『継続文字』
- 『コメント』
- 56 ページの『コマンド』
- 56 ページの『パラメーター』

分離文字

コマンド内で分離文字が必要な個所はどこでも、ブランク、コンマ、またはコメントと交換することができます。パラメーターとパラメーターの間には、複数の分離文字を使用することができます。

継続文字

継続文字は、単一の入力行に収まらないコマンドおよびコメントを継続させるときに使用します。

DBRC で使用される 2 種類の継続文字は負符号 (-) と正符号 (+) です。

- + 継続される行からの先行分離文字を削除します。
- 継続される行からの先行分離文字を削除しません。

制約事項: 単一引用符で囲まれた文字ストリング (例えば、'c...c') を継続する場合は、負符号の継続文字でのみ継続ができます。これは、単一引用符で囲まれた文字ストリング内では分離文字が意味を持つからです。DBRC では、そうした文字ストリングは、終了引用符が検出される前に行の終わりに達した場合、行の最後の非ブランク文字が負符号の継続文字でなければ、終了したと見なされます。文字ストリングの最大長は 256 文字です。

コメント

コメントは、記号 (/*) で始まり、記号 (*/) で終わる英数字ストリングで構成されます。

文字ストリング (*/) が検出される前に行の終わりに達した場合、および行の最後の文字が継続文字でない場合は、コメントは終了したと想定されます。

コマンド

コマンドは、verb、修飾子、および、ほとんどの場合、パラメーターのリストから構成されます。verb の後にはピリオド (.) が 1 つだけ続き、verb と修飾子の間に他の文字を入れることはできません。

コマンドは、DBRC SYSIN 入力ストリームの 1 から 72 桁目の任意の位置に入力することができます。コマンド行の最後の非ブランク文字として継続文字を入力すれば、コマンドを複数行に継続することができます。

SYSIN 入力ストリームの 73 から 80 桁目は無視されます。

パラメーター

ほとんどの DBRC コマンドは、必須パラメーターとオプション・パラメーターの両方を含んでいます。

一般に、DBRC コマンドには定位置キーワード・パラメーターはありません。キーワード・パラメーターには、以下のタイプがあります。

- キーワード単独
- 値を持つキーワード:
keyword(v)
- 値のリストを持つキーワード:
keyword(v1,v2..)
- 値のリストが繰り返されるキーワード:
keyword((v1,v2..),(v1,v2..)..)

値のリストの繰り返しをこのタイプのキーワードで 1 回だけ入力する場合は、次のように外側の括弧を省略することができます。

keyword(v1,v2)

一部のコマンドは、互いに排他的なパラメーターを含んでいます。パラメーターの説明で、垂直バー (|) は、互いに排他的なパラメーターを分離します。同じコマンド上にこうしたパラメーターを複数指定するとエラーになりませんが、DBRC は最後に指定されたコマンドを採用し、その他は無視します。

重要: DBRC コマンド・パラメーターには、以下のコーディング規則が適用されます。

- ある種のキーワードは特定の形式の値を必要とします。
- 16 進数の入力形式は X'xxx' です。ここで X'x' は、0 から 9 および A から F の任意の文字です。
- 任意の文字を文字ストリングの一部とすることができます。
- ブランクまたはその他の特殊文字を含む文字ストリングは、単一引用符で囲む必要があります。例えば、

UDATA('RECOVERY POINT FOR ALL PARTITIONS TAKEN ON IMS12 EACH MONTH')

- データ・セット名、データ・セット DD 名、およびボリューム通し番号にはハイフンを含めることができます。
- データ・セット名は、z/OS JCL マニュアルで指定された規則に従います。

特に注記がない限り、値のあるオプションのキーワードは以下のデフォルトを持っています。

数値 0
 文字値
 ブランク

特定のパラメーターが 1 つのコマンド内で 1 回を超えて検出された場合は、最後に出現したパラメーターが使用されます。1 つのコマンド内で互いに排他的なパラメーターが検出された場合は、最後に出現したパラメーターが使用されます。

DBRC タイム・スタンプ

タイム・スタンプは、RECON データ・セットに記録される時刻指定です。RECON のリスト、メッセージ、およびダンプで見かけるタイム・スタンプのフォーマットを正しく理解しておく、コマンドで適切なタイム・スタンプを入力する際に役立ちます。

タイム・スタンプの精度は、マイクロ秒です。

標準フォーマットのタイム・スタンプ

ある種のパラメーターにはタイム・スタンプが必要です。タイム・スタンプは、以下のいずれかのフォーマットで入力することができます。

圧縮: yydddhhmmssthmiju [offset]

区切り:

[yy]yy|ddd|hh|mm|ss|thmiju [offset]

パラメーターの説明は次のとおりです。

yyyy 年 (0000 から 9999)

ddd 日 (000 から 366)

hh 時 (0 から 23)

mm 分 (0 から 59)

ss 秒 (0 から 59)

thmiju

100 万分の 1 秒 (000000 から 999999)

| ブランクを含む任意の非数値桁分離文字。ただし、単一引用符は除く。タイム・スタンプにブランク、コンマ、または括弧が含まれる場合は、それを単一引用符で囲む必要があります。例えば、次のようになります。

```
LIST.LOG STARTIME('11.213 08:24:45.123456 -8')
```

または

LIST.LOG STARTIME('11,213 08:24:45.123456 PST')

offset 次のいずれかです。

1. 省略。現行の TIMEZIN 値が使用されます。
2. **±h[h:mm]** または **±h[h:mm]** の形式の数値オフセットで、UTC に追加された場合は、地方時を示す。 **h[h]** は 0 から 14 の数値です。圧縮フォーマットで **mm** を指定した場合は、**hh** も指定する必要があります。 **mm** の値は {00、15、30、45} のセットから選択します。

±hh:mm は -11:45 から +14:45 の値のみが有効です。

±hhmm は -1145 から +1445 の値のみが有効です。

3. シンボリック時間帯ラベル。

タイム・スタンプ値には、右側を切り捨てられたエレメントがある場合があります。その場合、省略されたエレメントの数字はゼロと想定されます。

ddd の後のエレメントはいずれも、先頭で入力を切り捨てることができます。したがって、yyyy|ddd は yyyy|ddd|hh として受け入れられます。エレメントの一部を入力することはできません。例えば、yyyy|ddd|h は無効です。

年として 2 桁だけ入力すると、その 2 つの高位桁は、61 ページの『2 桁年入力の補外法』に説明されているスライディング・ウィンドウ方式を使用して補外されます。

同じタイム・スタンプを次のような方法で入力することができます。

```
11213082445123456
11213082445123456-0800
11.213/08:24:45.123456
```

あるいは、次のように、ブランク、コンマ、または括弧を用いて入力することもできます。

```
'11.213 08:24:45.123456 -8'          '11/213-08.24.45.123456 -8:00'
'11,213 08:24:45.123456 PST'        '11/213-16.24.45.123456 UTC'
'2011 213 16.24.45.123456 +0'
```

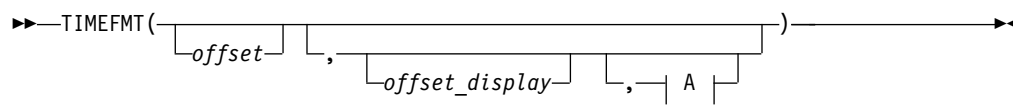
TIMEFMT パラメーター

オプションの TIMEFMT パラメーターを使用すると、DBRC からのメッセージ、画面表示、およびリストに表示されるタイム・スタンプの形式を定義できます。TIMEFMT に関連する各パラメーターはオプションであり、コマンドだけを組み合わせることによって省略できます。コマンド出力およびメッセージ出力のタイム・スタンプは、TIMEFMT パラメーターで指定されたフォーマットを使用して表示されます。すべてのフォーマットで、マイクロ秒の精度まで表示できるようになりました。

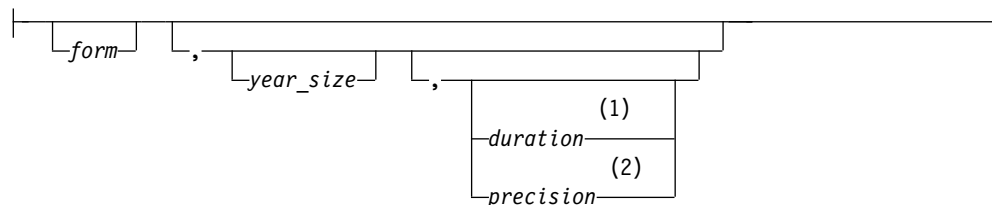
TIMEFMT パラメーターは、CHANGE.RECON、LIST.xxxx、GENJCL.xxxx の各コマンドで使用でき、基幹 JCL メンバーの中で指定することもできます。

制約事項: TIMEFMT に関連したパラメーターは定位置パラメーターです。

TIMEFMT パラメーター・サブリストの形式は、以下のとおりです。



A:



注:

- 1 *duration* は CHANGE.RECON コマンドでのみ設定できます。
- 2 *precision* は、%SET ステートメントでのみ有効です。

サブリストの項目を省略すると、RECON ヘッダーからの現行値が使用されます。

offset

表示する前の UTC 内部時刻に適用されるオフセットを指定します。

- U** 指定なし。すなわち、イベントの発生時に UTC を表示します。
- O** 起点を指定します。イベントが発生した時刻と場所の地方時を表示します。
- L** 現行のローカル・オフセットを指定します。現在の地方時に相当する時刻を表示します。

offset_display

時刻に付加されるオフセットの表示フォーマットを指定します。

- L** ラベルが定義されている場合、オフセットをラベル・フォーマットで表示することを指定します。ラベルが定義されていない場合、オフセットは数値フォーマットで表示されます。
- O** オフセットを数値 (+|- HH:MM) フォーマットで表示することを指定します。
- N** 時間帯情報は表示しないことを指定します。

form

タイム・スタンプを区切り形式または圧縮形式のどちらで表示するかを指定します。

- P** タイム・スタンプを区切り形式で表示することを指定します。
- C** 時刻を圧縮形式で表示することを指定します。

year_size

年の全 4 桁を表示するか、下位 2 桁のみを表示するかを指定します。

- 2** 年を下位 2 桁のみ表示します。
- 4** 年の全 4 桁を表示します。

duration

これらの選択項目の有効範囲を、現行のジョブに制限するか、システム・デフォ

ルトをグローバルにオーバーライドするものとして使用するかを指定します。
duration サブパラメーターは、CHANGE.RECON コマンドでのみ指定できます。

PERM

指定されたオプションが、同じ RECON で実行される後続のすべての DBRC ユーティリティー・ジョブでも有効であることを示します。つまり、これらの値はその後のジョブのデフォルトとなります。

TEMP

指定されたオプションが、そのコマンドが入力されるジョブでのみ有効であることを示します。PERM と TEMP のいずれも指定されない場合、TEMP がデフォルトとなります。

precision

基幹 JCL 内の %SET ステートメントに 1 から 6 までの数値でのみコーディングされます。これを使用して、GENJCL によって出力されるタイム・スタンプに含まれる下位桁の数を制御できます。デフォルトは 6 です。

他のパラメーターと同様、ヌル値をコーディングすると、対応する TIMEFMT 値は GENJCL のデフォルトにリセットされます。TIMEFMT() はすべての値をリセットします。

基幹 JCL 内の TIMEFMT パラメーター

TIMEFMT パラメーターは、CHANGE.RECON コマンドでの使用に加えて、任意の LIST.xxx または GENJCL.xxx DBRC コマンドでもコーディングすることができます。また、次のように基幹 JCL メンバーに指定することもできます。

```
%SET TIMEFMT(...)
```

次に示すのは、基幹 JCL 内の %SET キーワードの例です。

```
%SET TIMEFMT(,N)
%SELECT RLDS(%SSID, LAST)
LOGEND =%LOGETIM
%ENDSEL
```

次に示すのは、上の例の %SET から提供される出力です。

```
LOGEND =11011131500023456
```

TIMEFMT サブパラメーターの優先順位

TIMEFMT サブパラメーターの優先順位は、上から下の順で、以下のようになります。

1. RECON デフォルト

RECON デフォルトは INIT.RECON コマンドによって設定されます。これらのデフォルトは、CHANGE.RECON コマンドの PERM オプションを使用してリセットすることができます。

2. ジョブ・レベルのオーバーライド

RECON デフォルトは、CHANGE.RECON コマンドの PERM または TEMP オプションを使用して、SYSIN コマンド・ストリーム内の後続のコマンドでオーバーライドすることができます。

3. 基幹 JCL メンバー内の %SET ステートメント

%SET ステートメントの TIMEFMT 設定値は、同じメンバー内の直前の %SET ステートメントの設定値に加えて、GENJCL のデフォルトの設定値もオーバーライドします。

4. コマンドのオーバーライド

DBRC コマンドの TIMEFMT 設定値は、当該コマンド呼び出しの有効範囲内の上記設定値をすべてオーバーライドします。例えば、GENJCL.xxx コマンドの TIMEFMT 設定値は、適用できる基幹 JCL メンバー内のすべての %SET ステートメントの TIMEFMT 設定値をオーバーライドします。

最後のパラメーターの duration は、CHANGE.RECON 以外のいずれのコマンドで指定しても意味がありません。コーディングされた TIMEFMT 値はいずれも、現在有効な値を、このコマンドの継続時間だけオーバーライドするからです。省略された値については、PERM 継続時間を指定した最新の CHANGE.RECON コマンドからの、現在有効な値 (この値は INIT.RECON のデフォルトをオーバーライドします) はそのまま有効です。

INIT.RECON コマンドによって RECON データ・セットに設定される値は、**TIMEFMT(O,N,P,2,TEMP)** です。

GENJCL コマンドによって使用されるデフォルトは、**TIMEFMT(O,O,C,2,TEMP,6)** です。

推奨事項: ご使用のシステムで複数の IMS システムを異なる時間帯に操作し、それらのシステムがデータおよび RECON を共用する場合は、RECON リストに少なくとも UTC または LOC を使用して、リストされているすべてのタイム・スタンプが共通のベースを持つようにしてください。

ゼロのタイム・スタンプ値の指定

タイム・スタンプ値ゼロは、コマンド・キーワードの値として明示的に許可されている場合にのみ有効です。タイム・スタンプ値ゼロは、許可されている場合、区切りフォーマットまたは圧縮フォーマットのいずれでも入力でき、1 桁に圧縮することもできます。例えば、タイム・スタンプ値ゼロは、以下の方法で指定することができます。

```
00000000000000000000  
'00 000 00:00:00.000000'  
0
```

オフセット値が指定されている場合、それは無視されます。

2 桁年入力の補外法

DBRC コマンド上の入力タイム・スタンプに、2 桁の年表記を使用することは受け入れられます。この場合、世紀桁 (年号の上 2 桁) が、内部タイム・スタンプで使用するために引き出されます。内部タイム・スタンプ内の世紀桁は、次の処理で、入力された 2 桁により決定されます。

- 入力された年の桁数は、100 年のスライディング・ウィンドウと比較されます。ウィンドウの下限は、現在の年マイナス 70 です。上限は現在の年プラス 29 です。ブレイクポイントは、下限の下位 2 桁として定義されます。

入力された数字がブレイクポイントと等しいかそれより大きい場合は、下限の世紀桁が使用されます。ブレイクポイントより小さい場合は、上限の世紀桁が使用されます。ウィンドウの上限および下限とブレイクポイントは、IMS の初期化時に設定されます。年が変更されると、これらの値は再計算されます。

タイム・スタンプの変換および例

次の例では、地方時は PST (オフセット -08:00) です。

2007.030 10:00:0.123456 -08:00 (区切りフォーマット) または 0703010000123456
-0800 (圧縮フォーマット) で起こったイベントは、RECON データ・セットに
2007030F|18000012|3456032D| (yyyydddFhhmmssthmijufqqs) として 12 バイトで記
録されます。各部分の説明は次のとおりです。

yyyydddFhhmmssthmiju

UTC、地方時より 8 時間遅い

fqqs オフセット :

f フラグ・ビット。通常は 0

qq 1 時間の 4 分の 1 (32/4=8)

s 符号 (D は負、C は正)

注: 地方時を取得するために、オフセットが常に UTC 時間に加算されます。地方時から UTC 時間を取得するには、オフセットの符号を逆にし、それを地方時に加算します。

RECON データ・セット内のレコード (PRILOG レコードなど) からのタイム・スタンプは、次のようにリストされます。

```
'2007.030 10:00:00.123456 -08:00'
```

上記のタイム・スタンプがコマンドに引用符付きで入力された場合、DBRC は RECON データ・セット内のレコードを、次のように記録された時刻によって検出します。

```
2007030F 18000012 3456032D
```

DBRC は、RECON データ・セットでレコードを検索する際に、内部で UTC 時刻を使用します。UTC 時刻のオフセット部分は無視されます。

タイム・スタンプの中にオフセットが何も与えられていない場合は、DBRC は TIMEZIN 値を使用します。これは、レコードが RECON データ・セットの中に書き込まれた時刻以降に、クロックの変更が発生した場合には、正確でないことがあります。

オフセットが含まれている限り、さまざまな RECON リストからのタイム・スタンプを使用できます (タイム・スタンプが異なるフォーマットで表示される場合も含めて)。

タイム・スタンプ値の標準デフォルト設定

RECON データ・セットのタイム・スタンプ・フォーマットは、標準デフォルトです。

RECON ヘッダーから、次のように入力します。

```
TIMEZIN=%SYS
```

OUTPUT FORMAT: DEFAULT = LOCORG NONE PUNC YY No user-defined labels are defined.

オフセット値を指定せずに割り振りレコードをリストすると、タイム・スタンプは次のようにリストされます。

```
11.027 19:03:47.123456
```

この割り振りレコードは、夏時間変更の前に書き込まれました。タイム・スタンプは、オフセットを指定せずにレコードをリストするコマンドで入力されます。RECON データ・セットに TIMEZIN=%SYS を設定すると、オフセットは変更された現行 z/OS クロックから取得されます。RECON データ・セットにレコードが見つかりませんでした。

タイム・スタンプのフォーマットに影響される **DBRC** コマンド

以下の DBRC コマンドは、その構文の一部としてタイム・スタンプを持っています。

- CHANGE.BKOUT
- CHANGE.CA
- CHANGE.IC
- CHANGE.PRILOG
- CHANGE.SECLOG
- CHANGE.UIC
- DELETE.ALLOC
- DELETE.CA
- DELETE.IC
- DELETE.LOG
- DELETE.RECOV
- DELETE.REORG
- DELETE.UIC
- GENJCL.CA
- GENJCL.RECOV
- GENJCL.USER
- LIST.HISTORY
- LIST.LOG
- NOTIFY.ALLOC
- NOTIFY.BKOUT
- NOTIFY.CA
- NOTIFY.IC
- NOTIFY.PRILOG
- NOTIFY.RECOV
- NOTIFY.REORG
- NOTIFY.SECLOG
- NOTIFY.UIC

標準フォーマットのタイム・スタンプの詳細については、57 ページの『標準フォーマットのタイム・スタンプ』を参照してください。

完全精度タイム・スタンプ・パラメーターを必要とする DBRC コマンド

以下のコマンドは、特定の RECON レコードを識別するために、または変更される RECON レコード内の情報を識別するために、タイム・スタンプを使用します。これらの場合は、完全精度タイム・スタンプが必要です。

- CHANGE.BKOUT: UORTIME パラメーター
- CHANGE.CA: RECTIME パラメーター
- CHANGE.IC: RECTIME パラメーター
- CHANGE.PRILOG (RLDS/SLDS 用): STARTIME および DSSTART パラメーター
- CHANGE.SECLOG (RLDS/SLDS 用): STARTIME および DSSTART パラメーター
- CHANGE.UIC: RECTIME パラメーター
- DELETE.ALLOC: RECTIME パラメーター
- DELETE.CA: RECTIME パラメーター
- DELETE.IC: RECTIME パラメーター
- DELETE.LOG: STARTIME パラメーター
- DELETE.RECOV: RECTIME パラメーター
- DELETE.REORG: RECTIME パラメーター
- DELETE.UIC: RECTIME パラメーター
- LIST.LOG: STARTIME パラメーター
- NOTIFY.ALLOC: STARTIME パラメーター
- NOTIFY.ALLOC: ALLTIME パラメーター (DEALTIME パラメーターと共に指定された場合のみ)。
- NOTIFY.PRILOG (RLDS/SLDS 用): STARTIME パラメーター
- NOTIFY.PRILOG (RLDS/SLDS 用): STARTIME パラメーター

DBRC は、10 分の 1 秒の後に続く下位の桁を無視しなくなりました。例えば、次のイメージ・コピーの情報を変更する場合:

```
-----  
IMAGE  
  RUN      = 2011.114 16:28:41.123456 -07:00*  RECORD COUNT =0  
  STOP     = 0000.000 00:00:00.000000 +00:00  BATCH      USID=0000000000  
  
  IC1  
  DSN=DHVNTZ02.IC1                               FILE SEQ=0001  
  UNIT=3400                                       VOLS DEF=0001 VOLS USED=0001  
                                                    VOLSER=USER01  
-----
```

以下のいずれかの CHANGE.IC コマンドを入力します。

```
CHANGE.IC DBD(DHVNTZ02) DDN(HIDAM) RECTIME('2011.114 16:28:41.123456 -07:00') -  
ICDSN(NEWDSN)  
  
CHANGE.IC DBD(DHVNTZ02) DDN(HIDAM) RECTIME(11114162841123456-0700) -  
ICDSN(NEWDSN)  
  
CHANGE.IC DBD(DHVNTZ02) DDN(HIDAM) RECTIME(11114162841123456) -  
ICDSN(NEWDSN)
```

タイム・スタンプを含む (例えば、NOTIFY.IC) または一定の時刻範囲のログ・レコードを表示する (例えば、LIST.LOG FROMTIME) 新規レコードの作成では、ユーザーはタイム・スタンプを指定するときに選択したのと同じ精度が得られます。上にリストしたパラメーターを除いて、その他の DBRC コマンドのタイム・スタンプ・パラメーターはすべて最小仕様である年と日のみを必要とします。タイム・スタンプの残りの部分にはゼロが埋め込まれます。

関連資料:

131 ページの『CHANGE.RECON コマンド』

252 ページの『基幹 JCL の構文』

第 9 章 BACKUP.RECON コマンド

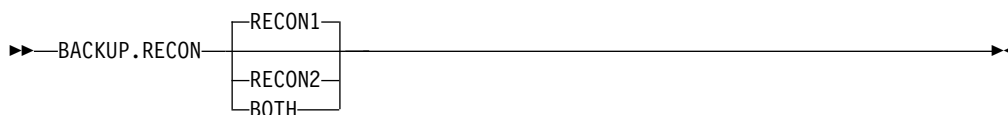
BACKUP.RECON コマンドは、コピー 1 RECON から RECON データ・セットのバックアップ・コピーを作成する際に使用します。

BACKUP.RECON コマンドは、最初に RECON データ・セットをオープンし、RECON の不整合があれば、それを除去するために必要なクリーンアップが行われます。次にこのコマンドは IDCAMS REPRO コマンドを呼び出し、その通常のデフォルトを使用して、バックアップ・コピーを作成します。REPRO コマンドの通常の使用に対して適用できる制約事項があれば、それをこのコマンドに適用します。バックアップ・コピーを受け取るデータ・セットは空でなければなりません。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 68 ページの『RECON データ・セットのバックアップ作成の例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、BACKUP.RECON コマンドに有効です。

RECON1 | RECON2 | BOTH

RECON データ・セットのコピー先のバックアップ・データ・セットを指定するために使用する、互いに排他的なオプション・キーワード。

RECON1

使用中の JCL の BACKUP1 DD ステートメントによって指定されたバックアップ・データ・セットに RECON データ・セットをコピーします。

RECON2

使用中の JCL の BACKUP2 DD ステートメントによって指定されたバックアップ・データ・セットに RECON データ・セットをコピーします。

BOTH

使用中の JCL の BACKUP1 および BACKUP2 DD ステートメントによって指定されたデータ・セットに RECON データ・セットをコピーします。

使用上の注意

並列 RECON アクセスが使用される場合、すべての DBRC インスタンスに対する RECON アクティビティが静止されます。COPY1 RECON データ・セットに関

連した保持ロックの存在に関する検査は、IDCAMS REPRO コマンドが呼び出される前に完了しています。保持ロックが存在する場合、IDCAMS REPRO コマンドは呼び出されず、コマンドは失敗します。

並列 RECON アクセス・モードでは、RECON データ・セットに対する保持ロックが存在する場合、それらのロックを解決する必要があります。SMS サーバー (SMSVSAM) がアクティブであり、すべてのプロセッサ上の Transactional VSAM (TVS) がアクティブであることを確認して、コマンドを再サブミットしてください。

RECON RECORDSIZE が 32 KB より大きく、バックアップの宛先が順次データ・セットの場合、BACKUP.RECON コマンドは失敗します。RECON データ・セットを順次ファイル (例えば、テープ) にバックアップする場合は、以下のステップを実行します。

1. BACKUP.RECON コマンドを使用してバックアップ KSDS を作成する
2. DFSMSdss を使用して、バックアップをとった KSDS を順次ファイルにコピーする

RECON データ・セットのバックアップ作成の例

この例では、コピー 1 RECON の 2 つのバックアップ・コピーが作成されます。

```
//BKUP    JOB
//BACKUP1 DD    . . .
//BACKUP2 DD    . . .

:
//SYSIN   DD    *
           BACKUP.RECON BOTH
/*
```

順次バックアップを作成するには、BACKUPx DD ステートメントに適切な DCB パラメーターを組み込む必要があります。指定する BLKSIZE は、RECON データ・セットに定義された最大 RECORDSIZE より大きく、32K より小さくなければなりません。例えば、DCB=(RECFM=VB,LRECL=32756,BLKSIZE=32760) です。

第 10 章 CHANGE コマンド

CHANGE コマンドは、RECON データ・セット内の情報を変更するために使用します。

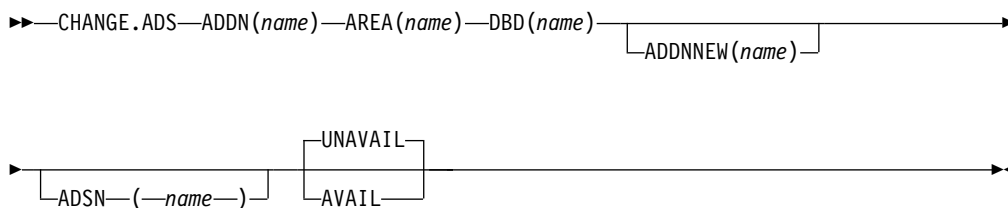
CHANGE.ADS コマンド

CHANGE.ADS コマンドは RECON データ・セット内の DEDB ADS 情報を変更するのに使用します。エリアの使用中に CHANGE.ADS コマンドを実行すると失敗します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 70 ページの『ADS レコードの変更例』

構文



キーワード

ADDN(*name*)

変更する ADS のエリア・データ・セットの DD 名を指定するための必須キーワード。

AREA(*name*)

変更する ADS をエリア名で示す必須キーワード。

DBD(*name*)

変更する ADS をデータベース名で示す必須キーワード。

ADDNNEW(*name*)

変更する ADS を新しい DD 名で示すオプション・キーワード。

ADSN(*name*)

変更する ADS を新しいデータ・セット名で示すオプション・キーワード。

UNAVAIL | AVAIL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、ADS レコードの可用性の表示を変更します。

UNAVAIL

ADS が使用不可であることを示します。

AVAIL

ADS が使用可能であることを示します。エリアのリカバリーが必要である場合は、CHANGE.ADS AVAIL コマンドは失敗します。

ADSN が指定されているのに、AVAIL も UNAVAIL も指定されていない場合は、この値のデフォルトは UNAVAIL となります。

ADS レコードの変更例

この例では、RECON データ・セットの ADS レコードを変更します。

```
//CHGADS JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.ADS DBD(DBD001) AREA(AREA002) -
           ADSN(ADSN004) ADDN(ADDN004)
/*
```

関連資料:

317 ページの『INIT.ADS コマンド』

CHANGE.BKOUT コマンド

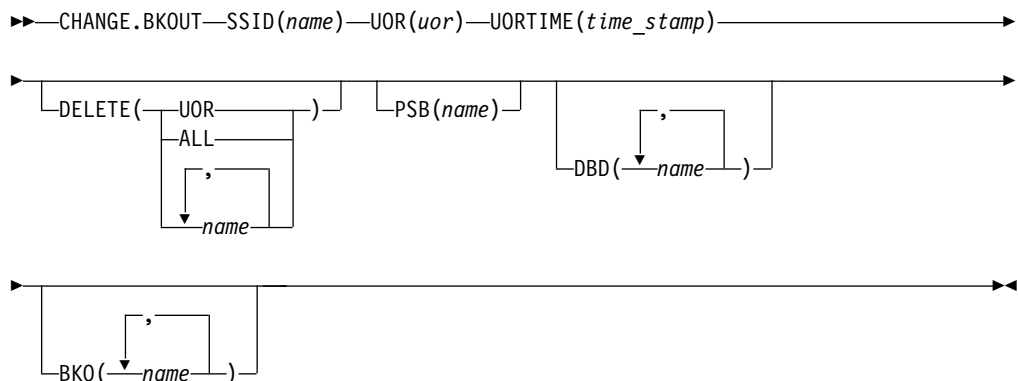
CHANGE.BKOUT コマンドは、指定したサブシステムに関連するバックアウト・レコードのリカバリー単位 (UOR) の追加、変更、または削除を行うのに使用します。

推奨事項: CHANGE.BKOUT コマンドは、動的バックアウト障害が発生し、特定のバックアウト・レコードが無効であることが分かっている場合に使用します。CHANGE.BKOUT コマンドを誤って使うと、リカバリーの保全性が失われる結果になるおそれがあります。

サブセクション:

- 『構文』
- 71 ページの『キーワード』
- 72 ページの『CHANGE.BKOUT コマンドの使用例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、CHANGE.BKOUT コマンドに有効です。

SSID(*name*)

バックアウト・レコードが変更されるサブシステムを指定する必須キーワード。この名前は最大 8 文字の英数字ストリングであり、任意の有効なサブシステム名を表します。

UOR(*uor*)

UORTIME キーワードと一緒に使用し、バックアウト・レコードのリカバリー単位を示す必須キーワード。リカバリー・トークン (*uor*) は、バックアウト・レコードの特定の UOR を記述する 16 バイトのフィールドです。このキーワードの値は 32 桁の 16 進数字で表す必要があります。

このキーワードに指定できるリカバリー単位は、現在バックアウト・レコードにあるもの、あるいはこれからレコード追加するものです。

UORTIME(*time_stamp*)

前記の UOR の時刻を指定する必須キーワード。この値は、UOR の開始時刻 (X'5607' ログ・レコードにあります) です。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DELETE(UOR | ALL | *name...*)

前記の必須キーワードで指定された、リカバリー単位に関連する一部またはすべての情報を削除するオプション・キーワード。

UOR

前記の UOR および UORTIME 必須キーワードで定義された UOR 全体を削除します。DELETE(UOR) を指定しない場合、CHANGE.BKOUT は、既存の UOR の変更か、現在バックアウト・レコードにない UOR の追加を行うものと見なします。

DELETE(UOR) を指定した場合は、それ以外のオプション・キーワードはすべて無視されます。

バックアウト・レコードに UOR が存在しない場合は、このコマンドは失敗します。

ALL

指定した UOR および UORTIME のデータベース・エントリーを削除することを指定します。ただし、DBD キーワードまたは BKO キーワード (あるいはその両方) にデータベース名も指定した場合は、UOR 接頭部情報はそのまま残します。DBD または BKO にデータベース名を指定しない場合は、CHANGE.BKOUT は DELETE(UOR) が指定されたのと同じような働きをします。ALL オプションを使用すると、UOR 接頭部の制御データに触れずに、バックアウト・レコードの UOR エントリー内のデータベース・リストを置き換えたり、実質的に変更することができます。また、ALL オプションを使用することによって、UOR 内のすべてのデータベース・エントリーも削除することができます。ただし、DBD または BKO キーワード内にリストされているデータベース・エントリーは削除できません。

name

DELETE キーワードで使用されるデータベース名を 8 個まで指定できます。指定する個々の名前はコンマで区切ります。指定したリカバリー単位に

関連したデータベースすべてをリストする場合の CHANGE.BKOUT のアクションは DELETE(ALL) が指定された場合と同じです。

リストされたデータベース名が 1 つでも、指定された UOR 内に含まれていない場合には、このコマンドは失敗します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに CHANGE.BKOUT コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

以下のオプション・キーワードは、DELETE(UOR) を指定しない場合にのみ使用できるものです。UOR が既にバックアウト・レコード内にある場合は、少なくとも 1 つはオプション・キーワードを指定する必要があります。バックアウト・レコードに UOR が含まれていなければ、追加されます。その場合は、PSB キーワードと DBD または BKO キーワードのいずれかを指定する必要があります。

BKO または DBD キーワードのいずれか、あるいはその両方を指定できます。ただし、BKO および DBD キーワードの両方に同じデータベース名は指定できません。バックアウトされているデータベースが同時に、バックアウトを要求することはできないからです。

PSB(*name*)

UOR に関連した PSB を示すオプション・キーワード。バックアウト・レコードに UOR を追加するには、PSB(*name*) を指定する必要があります。必須キーワードによって定義された UOR がバックアウト・レコード内に既に含まれている場合は、現行 PSB が指定された PSB で置き換えられます。

DBD(*name...*)

指定された UOR に関連したデータベースを示すオプション・キーワード。この DBD キーワードには 8 個までデータベース名をリストできます。ここにリストされるデータベース名は、このリカバリー単位のバックアウトを必要とするデータベースを示しています。このキーワードを使用すると、既存データベース・エントリーの状況をバックアウトが必要であるように変更できます。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに CHANGE.BKOUT コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

BKO(*name...*)

UOR が適用されるデータベースを示すオプション・キーワード。BKO は、この UOR から既にバックアウトされているデータベースを示します。BKO キーワードには 8 個までデータベース名を指定できます。このキーワードを使用すると、既存データベースの状況を、バックアウト完了の状況に変更できます。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに CHANGE.BKOUT コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

CHANGE.BKOUT コマンドの使用例

この例では、DBD および BKO キーワードでリストされたものを除き、指定された UOR および UORTIME のすべてのデータベース・エントリーが削除されます。

```

//CHGBKOUT JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.BKOUT SSID(SYS3)-
              UOR(E2E8E2F34040400000000600000003)-
              UORTIME(07093134502123456) DELETE(ALL)-
              DBD(DATA1,DATA2,DATA3C)-
              BKO(DATA4,DATA5,DATA3A)
/*

```

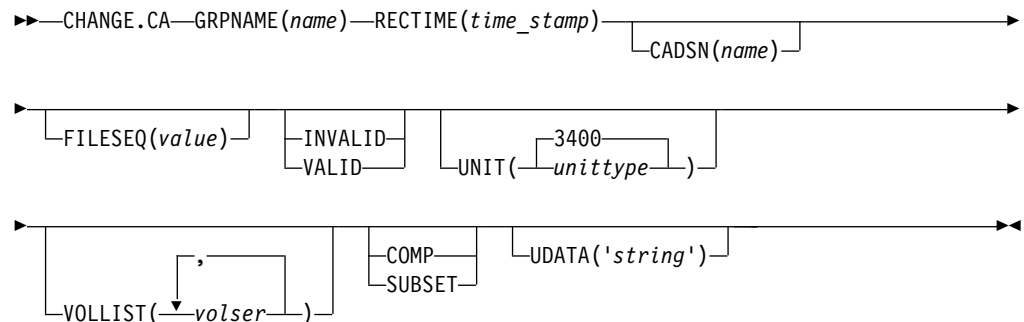
CHANGE.CA コマンド

CHANGE.CA コマンドを使用して、RECON データ・セットで識別されている CA グループについて、変更累積 (CA) ユーティリティーの指定された実行に関する情報を変更します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 75 ページの『例』

構文



キーワード

GRPNAME(*name*)

情報を変更する CA グループの名前を指定する必須キーワード。

RECTIME(*time_stamp*)

変更する変更累積実行レコードを示す必須キーワード。

CA レコードのリストから、アスタリスク (*) のマークの付いた STOP 時刻を使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

CADSN(*name*)

示されたレコードの変更累積データ・セットの新しい名前を指定するオプション・キーワード。

FILESEQ(*value*)

示されたレコードに記録する新規ファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワード。

INVALID | VALID

互いに排他的なオプション・キーワードであり、変更累積データ・セットを後続の変更累積またはデータベース・リカバリーを実行する際の入力として使用するかどうかを指定します。

INVALID

変更累積データ・セットを後続の変更累積またはデータベース・リカバリーの実行への入力として使用しないことを指定します。無効にされた変更累積データ・セットが、後で変更累積の出力として再使用される場合、そのデータ・セットは自動的に有効であるとマーク付けされ、使用されます。

VALID

以前に無効にされた変更累積データ・セットが、後続の変更累積またはデータベース・リカバリーの実行への入力として使用可能であること指定します。このキーワードは、前に無効であるとマーク付けされていた変更累積データ・セットが現在有効になっている場合にのみ使用します。

INVALID キーワードを指定すると、変更累積レコードの STOPTIME (停止時刻) と RUNTIME (実行時間) が交換されます。こうすることによって、RECON データ・セットでのレコードの重複が防げます。VALID キーワードを指定すると、STOPTIME と RUNTIME が再度交換され、元に戻ります。

UNIT(3400 | *unittype*)

変更累積データ・セットがあるボリュームの装置タイプを変更するオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

指定した変更累積実行レコードにある変更累積データ・セットのボリューム通し番号を置き換えるために使用するリストを指定できるオプション・キーワード。この可変フィールドには、最大 255 個のボリューム通し番号を指定することができます。各番号は 6 文字までの英数字です。

SUBSET | COMP

互いに排他的なオプション・キーワードであり、変更累積状況を示します。

SUBSET

CA を作成したときに、ログのサブセットは処理済みであること、および CA の停止時刻は最初の未処理ログ・ボリュームの開始時刻であることを示します。

COMP

CA を作成したときに、ログの全セットが処理済みであること、および CA の停止時刻が最後に処理されたログ・ボリュームの停止時刻であることを示します。

通常の状態では、このキーワードを使用する必要はありません。このキーワードの使用が、CA 停止時刻の値と整合しているかの検査は行われません。このキーワード値は、GENJCL.CA と GENJCL.RECOV の処理で使用されます。不適切に使用すると、無効な JCL が生成されるおそれがあります。

UDATA('string')

示された変更累積データ・セットについての情報を 80 バイトまで指定できるオプション・キーワード。このキーワードの変数フィールドを使用して、変更累積

データ・セットがどのように作成されたかを記述できます。string 値に空白またはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

例

例 1: 変更累積実行レコードの変更

この例では、RECON データ・セット内の変更累積実行レコードを変更します。INVALID キーワードは、指定されたデータ・セットを後続のユーティリティの実行に対し、入力として使用しないことを表します。VOLLIST、FILESEQ、および CADSN キーワードは、レコード内の変更すべき追加フィールドを示します。

```
//CHGCA JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.CA GRPNAME(CAGRP2) RECTIME(07065020433523456) -
INVALID CADSN(IMS.CAGRP2.CA.CADSN2) -
VOLLIST(VOLCA1) FILESEQ(4)
/*
```

例 2: 変更累積実行レコードのユーザー・データの変更

この例では、RECON データ・セット内の DBD、DDN、および RECTIME キーワードで示される変更累積レコードの情報を変更します。変更されたユーザー・データは UDATA パラメーターに組み込まれます。

```
//CHGCA JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.CA GRPNAME(CAGRP2) -
RECTIME(09152104355891200) -
UDATA('LAST CA OF THE WEEK')
/*
```

関連資料:

321 ページの『INIT.CAGRP コマンド』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

CHANGE.CAGRP コマンド

CHANGE.CAGRP コマンドは、RECON データ・セットで指定された CA グループ・レコードにある情報を変更するのに使用します。このコマンドを使用して、CA グループのメンバーである DBDS の名前を変更することもできます。

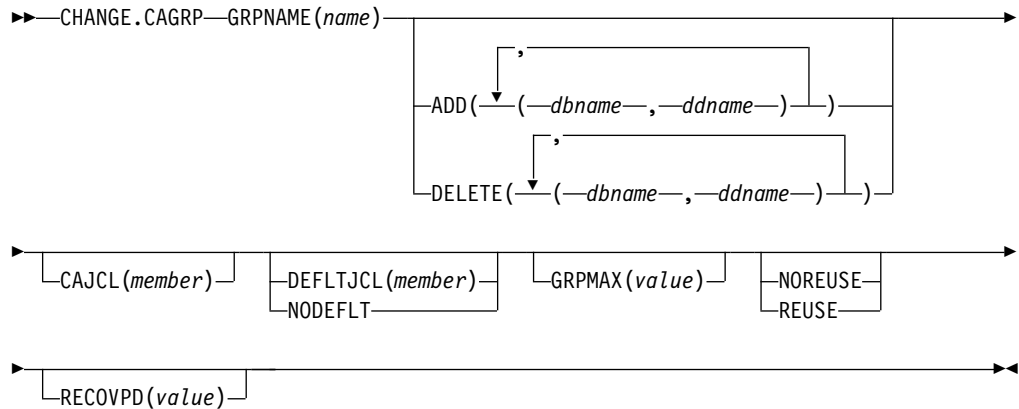
制約事項: HALDB、ILDS、および PHIDAM 1 次索引 DBDS はリカバリー可能でなく、これらへの変更はログに記録されません。CHANGE.CAGRP コマンドはこれらのデータ・セットをサポートしません。

サブセクション:

- 76 ページの『構文』
- 76 ページの『キーワード』
- 78 ページの『使用上の注意』

- 78 ページの『CHANGE.CAGRP コマンドの使用例』

構文



キーワード

GRPNAME(name)

記録を変更する CA グループの名前を指定する必須キーワード。

ADD(dbname, ddname) | DELETE(dbname, ddname)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定した CA グループに追加または削除するメンバーを指定します。

ADD

指定した CA グループに追加するメンバーを指定します。1 つのグループに入るメンバーは 32767 個を超えることはできません。

制約事項: ユーザーがリカバリー可能なデータベースを CA グループに追加することはできません。

DELETE

指定した CA グループから削除するメンバーを指定します。CA グループからメンバーを削除してしまうと、DBRC は、その DBDS でのこれまでの変更累積アクティビティを認識できなくなります。

1 つ以上のメンバーを可変フィールドに指定します。それぞれのメンバーは括弧で囲まれた 1 対の名前です。dbname は、メンバーのデータベース名です。HALDB データベースの場合、dbname には HALDB 区画の名前を指定します。ddname は DD ステートメントのシンボル名です。

1 つのグループのすべてのメンバーを削除すると、そのグループの記録が RECON データ・セットから削除されます。

CAJCL(member)

基幹 JCL の区画データ・セットのメンバー名を変更するためのオプション・キーワード。このメンバーを使用して、指定した CA グループについて GENJCL.CA コマンドを出したときに、変更累積ユーティリティの実行に必要な JCL を生成します。

DEFLTJCL(member) | NODEFLT

互いに排他的なオプション・キーワードであり、CA グループの暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定します。

DEFLTJCL

CA グループの暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定します。

GENJCL.CA は、定義されたキーワードを変換するために、指定されたデフォルト・メンバーを使用します。

NODEFLT

CA グループに対して基幹 JCL のデフォルト・メンバーは使用しないことを指定します。

GRPMAX(value)

指定された CA グループ用に DBRC が維持する変更累積データ・セットの最大数を変更するために使用するオプション・キーワード。 *value* は 2 から 1024 の 10 進数でなければなりません。

指定されたグループについて実行された変更累積ユーティリティの回数が GRPMAX 値を超えると、REUSE または NOREUSE キーワードを使用して定義されている CA グループの場合、そのグループのリカバリー期間を過ぎた最も早い変更累積停止時刻を持つレコードが削除されます。

NOREUSE | REUSE

変更累積データ・セットを再利用するかどうかを示すために使用する、相互に排他的なオプション・キーワード。

NOREUSE

指定された CA グループ用に既に使用されている変更累積データ・セットを、後続の変更累積ユーティリティの実行で出力として再利用できないことを示します。 NOREUSE キーワードを指定した場合、指定された CA グループの、未使用の変更累積実行レコードがあれば削除されます。

REUSE

指定された CA グループ用に既に使用されている変更累積データ・セットを、後続の変更累積ユーティリティの実行で、出力として再利用できることを示します。

GRPMAX がそのグループの既存のデータ・セット数より大きい場合は、INIT.CA コマンドを使用して、さらにデータ・セットを追加します。そうしないと、再利用は行われません。GRPMAX の説明を参照してください。

RECOVPD(0 | value)

指定された CA グループのリカバリー期間を変更するために使用するオプション・キーワード。リカバリー期間は、DBRC が変更累積情報を RECON データ・セット内に維持する、現在日付までの時間の長さです。例えば、変更累積グループのリカバリー期間が 14 日の場合、DBRC は少なくとも 14 日間、十分な変更累積実行レコードを維持します。

変更累積実行レコードがリカバリー期間内であるかどうかを判別するには、現在時刻から RECOVPD 値を差し引きます。計算された値より新しい停止時刻を持つ変更累積実行レコードはすべて RECON データ・セット内に保持されます。

value には、変更累積実行レコードを RECON データ・セット内に保持する日数を表す 0 から 999 の 10 進数を指定します。0 (デフォルト) を指定した場合、リカバリー期間はありません。

使用上の注意

CHANGE.CAGRP コマンドを出して、既存の値より小さい GRPMAX 値と RECOVPD 値を指定した場合、残りの変更累積データ・セットの数が指定された GRPMAX 値に等しくなるまで、停止時刻がリカバリー期間を過ぎている使用済み変更累積データ・セットが削除されます。

DELETE.CA コマンドを実行すると、RECOVPD 値または GRPMAX 値に関係なく、指定された変更累積データ・セット・レコードが削除されます。

重要: CHANGE.CAGRP コマンドを使用して GRPMAX 値を小さくした場合、その GRPMAX 値は、最も古い変更累積データ・セットを削除できるかどうかに関係なく記録されます。それらのデータ・セットはリカバリー期間内であるからです。

CHANGE.CAGRP コマンドの使用例

以下、CHANGE.CAGRP コマンドを使用した操作例をいくつか示します。

DBDS を既存の CA グループ CAGRP1 に追加する例

この例では、*dbname* パラメーターおよび *ddname* パラメーターで示された DBDS を既存の CA グループ CAGRP1 に追加します。

```
//CHGCAGRP JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.CAGRP GRPNAME(CAGRP1) ADD((DB1,DD1),(DB2,DD2))
```

DBDS を CA グループ CAGRP1 から削除する例

この例では、*dbname* パラメーターおよび *ddname* パラメーターで示された DBDS を CA グループ CAGRP1 から削除します。

```
//CHGCAGRP JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.CAGRP GRPNAME(CAGRP1) DELETE((DB3,DD3),(DB4,DD4))
```

CA グループ・レコードの変更例

この例では、RECON データ・セットの CA グループ・レコードを変更しています。変更累積ユーティリティーが CA データ・セットを再利用しないようにする変更が行われています。また、この CA グループに対する変更累積ユーティリティーに必要な JCL を生成するために使われる基幹 JCL の区画データ・セットのメンバーを名前変更します。


```
//CHGCAGRP JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.CAGRP GRPNAME(CAGRP3) NOREUSE CAJCL(JCLCA)
/*
```

CA グループ・レコードの変更例

この例では、CA グループ CAGRP1 の変更累積データ・セットの保存期間を 90 日に変更しています。

```
//CHGCAGRP JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.CAGRP GRPNAME(CAGRP1) RECOVPD(90)
```

関連タスク:

 GRPMAX の調整 (その値に達したか値が大きすぎる場合) (システム管理)

関連資料:

321 ページの『INIT.CAGRP コマンド』

CHANGE.DB コマンド

CHANGE.DB コマンドは、データベースまたは高速機能 DEDB エリアに関する情報を変更するのに使用します。この情報は、RECON データ・セットのデータベース・レコードかエリア・レコードに入っています。

データベースまたは DEDB エリアが使用中であるときに、キーワード SHARELVL、TYPEFP、または TYPEIMS を指定すると、このコマンドは失敗します。

また、CHANGE.DB を使用して、サブシステム (SSYS) レコードとデータベースまたはエリア (DB/AREA) レコード間でたまに生じる許可上の矛盾を除去することができます。このような矛盾は次のような場合に生じます。すなわち、SSYS レコードは許可されたデータベースやエリアのリストにはまだ DB/AREA エントリーがあるのに、DB/AREA レコードの関連サブシステム情報リストには SSID リストがない、あるいは DB/AREA にはまだ SSID エントリーがあるのに、SSYS レコードが RECON データ・セットにないか、その DB/AREA のエントリーがなくなった場合に生じます。このためには AUTH キーワードを使用してください。

制約事項: HALDB オンライン再編成実行中に CHANGE.DB コマンドを実行する場合、以下の制約事項が適用されます。

- CHANGE.DB コマンドは、HALDB 区画 (TYPE=PART) の場合にのみ指定できる。
- この区画 HALDB オンライン再編成が既に試みられている必要がある (M から V データ・セットが存在する必要があります)。
- ALL キーワードは、CHANGE.DB ALL OLRCAP コマンドを実行する場合にのみ使用できる。オンライン再編成可能とマークされる使用可能な HALDB データベースは、すべて「OLRCAP」とマークされます。変更用に使用できない

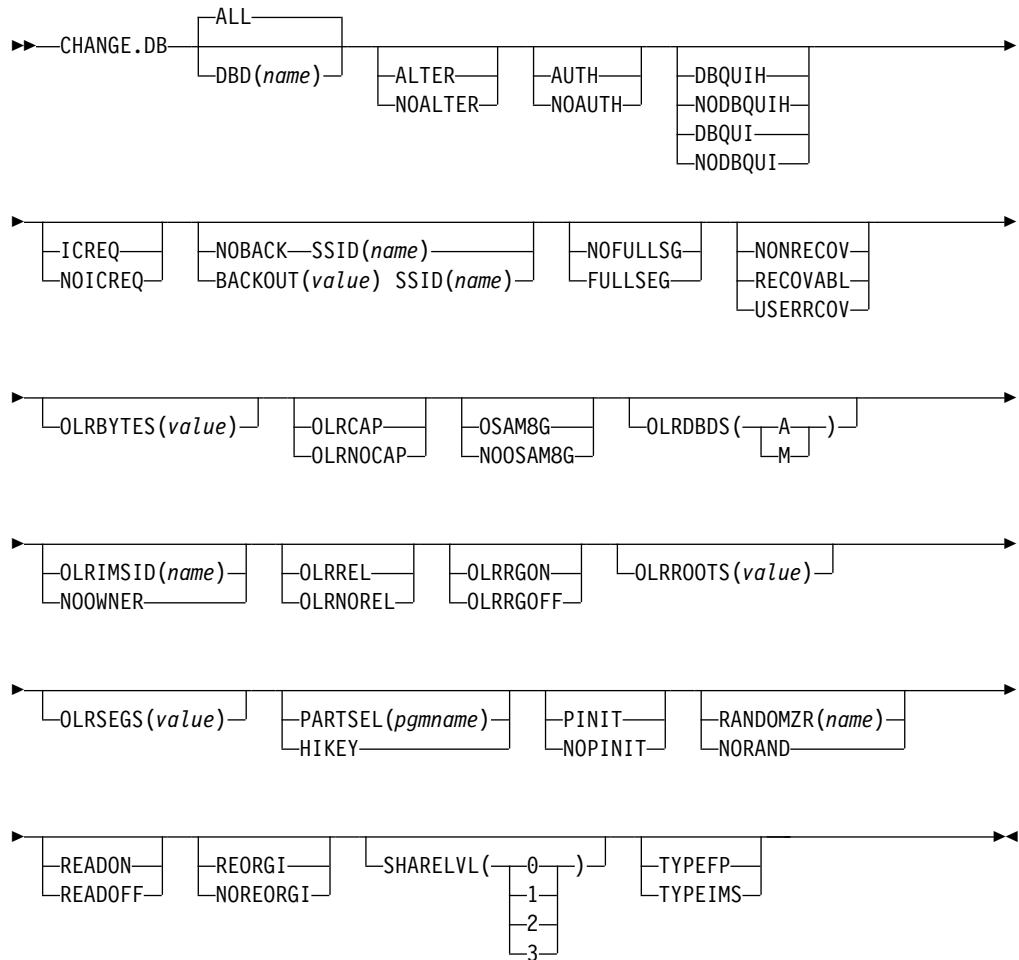
HALDB データベース(現在許可されている HALDB データベースなど) はスキップされ、OLRCAP とマークされません。

サブセクション:

- 『構文』
- 81 ページの『キーワード』
- 92 ページの『使用上の注意』
- 92 ページの『DBD キーワードで示されるデータベースのレコード変更例』

構文

CHANGE.DB コマンドには、次に示す 2 つの構文図のどちらかを使用してください。



または、

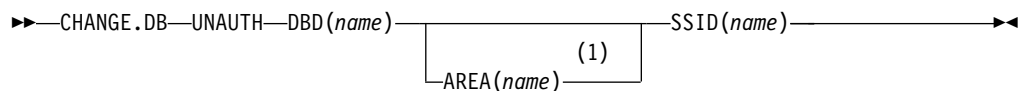


表 2. HALDB 区画およびマスターのキーワード定義 (続き)

CHANGE.DB	name = TYPE=HALDB	name = TYPE=PART
NONRECOV RECOVABL USERRCOV	あり	なし
OLRBYTES	あり	あり
OLRCAP OLRNOCAP	あり	なし
OLRDBDS(A M)	なし	あり
OLRIMSID(name) NOOWNER	なし	あり
OLRREL OLRNOREL	なし	あり
OLRRGON OLRRGOFF	なし	あり
OLRROOTS	あり	あり
OLRSEGS	あり	あり
OSAM8G NOOSAM8G	あり	なし
PARTSEL HIKEY	あり	なし
PINIT NOPINIT	あり	あり
READON READOFF	なし	あり
REORGI NOREORGI	あり	あり
SHARELVL	あり	なし
TYPEFP TYPEIMS	なし	なし
UNAUTH	なし	あり

ALTER | NOALTER

HALDB データベースまたは高速機能 DEDB データベースの ALTER IN PROGRESS 状況を設定または削除するオプション・キーワード。

HALDB データベースの場合、ALTER キーワードは、HALDB データベース内のすべての区画の RECON レコード内に ALTER IN PROGRESS フラグを設定します。HALDB の ALTER COUNT は、変更プロセスに参加しているパーティションの数に更新されます。NOALTER キーワードは、すべての区画レコードの ALTER IN PROGRESS フラグをオフにして、HALDB レコードのカウンターをクリアします。

DEDB データベースの場合は、変更される領域を示す AREA キーワードとともに ALTER キーワードを指定できます。AREA を指定しない場合、このキーワードはランダムマイザ置換機能をシミュレートし、DEDB の ALTER COUNT が更新されます。NOALTER キーワードは、DEDB 全体の変更状況をリセットし、AREA キーワード (指定されている場合) は無視されます。

HALDB 内の区画のいずれか、または DEDB 内のエリアのいずれかが許可されている場合、ALTER IN PROGRESS 状況は変更できません。

AUTH | NOAUTH

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データベースのデータ共有が許可されるかどうかを指定します。

AUTH

データベースでデータ共有の処理を許可するよう指示します。

NOAUTH

データベースでデータ共有の処理を許可しないように指示します。

DBQUIH | NODBQUIH | DBQUI | NODBQUI

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データベース静止オプションを指定するために使用します。これらのキーワードは、ALL キーワードと一緒に指定することはできません。

DBQUIH

データベースの QUIESCE HELD フラグが設定されることを指定します。このコマンドが高速機能 DEDB に対して発行されると、コマンドによって、高速機能 DEDB のすべてのエリアに対して、QUIESCE IN PROGRESS フラグが設定されます。このコマンドが HALDB マスターに対して発行されると、コマンドによって、HALDB のすべての区画に対して QUIESCE IN PROGRESS フラグが設定されます。

制約事項: DBQUIH は、QUIESCE IN PROGRESS フラグがオンの場合、または DBQUI キーワードもコマンドに含まれている場合にのみ有効です。

NODBQUIH

データベースの QUIESCE HELD フラグがオフに設定されることを指定します。このコマンドが高速機能 DEDB に対して発行されると、コマンドによって、高速機能 DEDB のすべてのエリアに対して、QUIESCE IN PROGRESS フラグがリセットされます。このコマンドが HALDB マスターに対して発行されると、コマンドによって、HALDB のすべての区画に対して QUIESCE IN PROGRESS フラグがリセットされます。

DBQUI

データベースの QUIESCE IN PROGRESS フラグが設定されることを指定します。このコマンドが高速機能 DEDB に対して発行されると、コマンドによって、高速機能 DEDB のすべてのエリアに対して、QUIESCE IN PROGRESS フラグが設定されます。このコマンドが HALDB マスターに対して発行されると、コマンドによって、HALDB のすべての区画に対して QUIESCE IN PROGRESS フラグが設定されます。

制約事項: DBQUI キーワードと PINIT キーワードと一緒に指定することはできません。

NODBQUI

データベースの QUIESCE IN PROGRESS フラグがオフに設定されることを指定します。このコマンドが高速機能 DEDB に対して発行されると、コマンドによって、高速機能 DEDB のすべてのエリアに対して、QUIESCE IN PROGRESS フラグがリセットされます。このコマンドが HALDB マスターに対して発行されると、コマンドによって、HALDB のすべての区画に対して QUIESCE IN PROGRESS フラグがリセットされます。

制約事項: NODBQUI は、QUIESCE HELD フラグがオフの場合、または NODBQUIH キーワードもコマンドに含まれている場合にのみ有効です。

FULLSEG | NOFULLSG

置き換え (REPL) 呼び出しによってセグメントが更新された場合、X'5950' ログ・レコードに完全なセグメント・イメージを記録するかどうかを指定する、互いに排他的なオプション・キーワード。これらのキーワードは、高速機能 DEDB の場合にのみ有効です。これらのキーワードを指定すると、指定した DEDB のすべてのエリアが、指示した設定に変更されます。この設定は、この DEDB 用のデータベース・レコードに保管され、後でこの DEDB に登録されるすべてのエリアのデフォルト設定として使用されます。これらのキーワードは、ALL キーワードと一緒に指定することはできません。

指定した DEDB が現在許可されている場合、この設定はどのエリアでも変更されず、その場合は DSP0045I メッセージを受け取ります。このコマンドを正常に実行するには、前もって DEDB を無許可にしておく必要があります。

FULLSEG

完全なセグメント・イメージをログに記録することを指示します。

NOFULLSG

セグメントの更新された部分のみをログに記録することを指示します。

ICREQ | NOICREQ

互いに排他的なオプション・キーワードです。リカバリー不能データベースまたはユーザー・リカバリー可能データベースがロードまたは再編成されたあとに、そのイメージ・コピーを作成する要求を DBRC に実行させるかどうかを指定します。このオプションは、DB 内のすべての DBDS に影響を与えます。

ICREQ

IMAGE COPY NEEDED オプションをリセットするのに使用します。このオプションがアクティブのときは、DBDS の初期ロード (PROCOPT=L) または再編成の直後に、DBRC が DBDS レコードに IC NEEDED ON をセットし、DB レコード内の IMAGE COPY NEEDED COUNT を増分します。

NOICREQ

IC NEEDED 要求を使用不可にするのに使用します。DBRC は、DBDS の初期ロードまたは再編成の後に、DBDS レコードに IC NEEDED ON をセットすることも、DB レコード内の IMAGE COPY NEEDED COUNT を増分することもしません。IC NEEDED フラグは、CHANGE.DB ICON コマンドを使用して手動でもセットすることができます。

制約事項:

- DB がリカバリー可能の場合は、NONRECOV または USERRCOV も一緒に指定しないと NOICREQ を指定することはできません。
- NOICREQ は、DBDS IC NEEDED の値をすべて OFF にリセットし、DB IMAGE COPY NEEDED COUNT を 0 にします。
- DB が RECOVABL に変更された場合は、このオプションが ICREQ にリセットされ、すべての DBDS で IC NEEDED が ON にセットされます。それに応じて、DB IMAGE COPY NEEDED COUNT もセットされます。
- ICREQ | NOICREQ は ALL キーワードと一緒に指定できません。

NOBACK SSID (name) | BACKOUT(value) SSID (name)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、サブシステムによるバックアウトがデータベースに必要かどうかを指定します。このキーワードは DEDB に対しては使用しないでください。

NOBACK

指定されたサブシステムがデータベースをバックアウトする必要がないことを示します。このキーワードは、指定したデータベース・レコードからバックアウト情報を削除するのに使用します。

保持されている AUTH 状態と ENCODED 状態がゼロであり、「バックアウト必要」フラグがオンである場合は、NOBACK キーワードを使用すると、関連したサブシステム情報がデータベース・レコードから削除されることとなります。

BACKOUT

指定されたサブシステムが指定された回数だけ、データベースをバックアウトする必要があることを示します。SSID キーワードにサブシステム名を指定する必要があります。SSID キーワードを BACKOUT キーワードと一緒に指定しないと、このコマンドは失敗します。

SSID(name)

バックアウト・エラーが起きたサブシステムを指定する必須キーワード。

name は任意の有効サブシステム名です。

UNAUTH と一緒に指定した場合、SSID は、DBD キーワードで指定されたデータベースの関連サブシステム情報リストから除去するエントリを示します。あるいは、許可されたデータベース/エリアのリストから、指定された DB/AREA を除去することによって、変更する SSYS レコードを示します。

SSID は、BACKOUT または UNAUTH キーワードと一緒に使用する必要があります。BACKOUT または UNAUTH のいずれかを使用せずにコーディングされている場合、このコマンドは失敗します。

NONRECOV | RECOVABL | USERRCOV

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定されたデータベースの更新ログを RECON データ・セットに記録するかどうかを指定します。

NONRECOV

データベースのリカバリーを行わないことを指定します。完全機能データベースに対する NONRECOV キーワードの効果は、高速機能データベースに対する効果とは異なります。完全機能データベースで NONRECOV が指定された場合、IMS はバックアウト情報をログに記録します。高速機能データベースで NONRECOV が指定された場合、IMS はバックアウト情報をログに記録しません。

RECOVABL

データベースがリカバリー可能であり、DBDS またはエリアに対して実行された更新はすべて RECON データ・セットに登録されることを指定します。

USERRCOV

高速機能 DEDB 用の更新割り振りを RECON データ・セットに記録しな

いことを指定します。データベースの更新は IMS によってログに記録されますが、DBRC を使用してデータベースのリカバリーを管理することはできません。リカバリーは、ユーザーが手動で生成した JCL を使用すれば許可されます。このキーワードは、高速機能 DEDB の場合にのみ有効です。

USERRCOV の注:

1. USERRCOV の使用は、データベースのオープン時間を減らす重大な必要性があり、しかもリカバリー可能性が必須である場合のみにしてください。
2. USERRCOV を使用するには、ユーザーが手動で作成した独自の JCL を変更累積およびリカバリー用に提供する必要があります。

NONRECOV、RECOVABL、および USERRCOV の制約事項:

- HALDB マスター・データベースはこれらのキーワードによってサポートされますが、HALDB 区画はサポートされません。
- これらのキーワードは、CHANGE.DB コマンドで ALL が指定されている場合は無効です。
- リカバリー不能データベースまたはユーザー・リカバリー可能データベースの並行イメージ・コピーを作成することはできません。
- データベースが RECOVABL または USERRCOV として登録されている場合は、そのデータベースを更新するいずれのジョブでも、VIO データ・セットを出力ログ (IEFRDER) に使用することはできません。VIO のような一時的なログ・データ・セットは、ジョブの終了時に削除されるため、リカバリーに使用することはできません。
- NONRECOV は SDEP を含む DEDB をサポートしません。

OLRBYTES(*value*)

HALDB オンライン再編成によって移動された HALDB 区画のバイト数を示す RECON 値を指定するためのオプション・パラメーター。この値の範囲は 0 から 47244640256 までです。値は、10 進数または同等の 16 進数で指定できます。16 進値は引用符で囲む必要があります (例えば、X'B00000000')。

OLRBYTES キーワードは、以下の項目に対しては (あるいは、これらと一緒に使用するの) 無効です。

- ALL、UNAUTH、OLRCAP、および OLRNOCAP キーワード
- HALDB マスター (HALDB master)
- OLR の実行は不可能としてマークされている HALDB 区画
- 高速機能データベース

OLRCAP | OLRNOCAP

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB を HALDB OLR を使用してオンライン再編成する場合に指定します。デフォルトはありません。これらのキーワードは DBD が HALDB マスターである場合にのみ有効です。

OLRCAP

HALDB がオンライン再編成可能であることを (マスター・データベース・レコードと区画データ・セット・レコード内で) 指定します。

OLRNOCAP

HALDB がオンライン再編成可能でないことを (マスター・データベース・レコードと区画データ・セット・レコード内で) 指定します。HALDB OLR カーソルがアクティブの場合、または M から V および Y の DBDS がアクティブの場合、このコマンドは失敗します。このコマンドが正常に完了し、M から V および Y の DBDS とそのすべての関連レコードが RECON データ・セット内に存在している場合、M から V および Y の DBDS とそのすべての関連レコードが、全区画の RECON データ・セットから削除されます。

OLRREL | OLRNOREL

HALDB OLR の所有権を、その所有者である IMS が異常終了したときに別の IMS によって再開できるかどうかを示す、互いに排他的なオプション・キーワード。

制約事項: 状況を変更するには、HALDB OLR が、異常終了した IMS によって所有されている必要があります。更新された状況は、OLR が再開されるまで、/DISPLAY DB OLR コマンド出力に反映されません。

OLRROOTS(*value*)

HALDB オンライン再編成によって移動された HALDB 区画のルート数を示す RECON 値を指定するためのオプション・パラメーター。この値の範囲は 0 から 2147483647 までです。値は、10 進数または同等の 16 進数で指定できます。16 進値は引用符で囲む必要があります (例えば、X'7FFFFFFF')。

OLRROOTS キーワードは、以下の項目に対しては (あるいは、これらと一緒に使用するの) 無効です。

- ALL、UNAUTH、OLRCAP、および OLRNOCAP キーワード
- HALDB マスター (HALDB master)
- OLR の実行は不可能としてマークされている HALDB 区画
- 高速機能データベース

OLRSEGS(*value*)

HALDB オンライン再編成によって移動された HALDB 区画のセグメント数を示す RECON 値を指定するためのオプション・パラメーター。この値の範囲は 0 から 47244640256 までです。値は、10 進数または同等の 16 進数で指定できます。16 進値は引用符で囲む必要があります (例えば、X'B0000000')。

OLRSEGS キーワードは、以下の項目に対しては (あるいは、これらと一緒に使用するの) 無効です。

- ALL、UNAUTH、OLRCAP、および OLRNOCAP キーワード
- HALDB マスター (HALDB master)
- OLR の実行は不可能としてマークされている HALDB 区画
- 高速機能データベース

OLRRGON | OLRRGOFF

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB OLR が進行中かどうかを指定します。これらのキーワードは、HALDB 区画に対してのみ有効です。

OLRRGON

HALDB OLR が進行中であることを指定します。A から J データ・セットと M から V データ・セットの両方にアクティブ・データが含まれます。

OLRRGOFF

HALDB OLR が完了し、A から J セットのデータ・セットか、M から V セットのデータ・セットのいずれかにアクティブ・データが含まれます。フラグは、非アクティブ・データ・セットがアクティブ・データ・セットになったことを示すように変更されます。OLREORG CURSOR ACTIVE = NO が DB レコードで設定されます。OLRIMSID はクリアされます。

注: DELETE.REORG コマンドと NOTIFY.REORG コマンドを使用して、DB (HALDB) レコードを手動で削除するか、それらのレコードに停止時刻を追加することが必要になる場合があります。

OLRIMSID(name) | NOOWNER

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB OLR を所有する IMS の名前を指定または変更します。

OLRDBDS(A | M)

この区画の DBDS のアクティブ・セットが A から J および X、または M から V および Y のいずれかであることを示すオプション・キーワード。

A A から J および X データ・セットがアクティブであることを指定します。

M M から V および Y データ・セットがアクティブであることを指定します。

HALDB OLR のカーソルがアクティブの場合、このキーワードは入力データ・セットである DBDS セットを示します。

OSAM8G | NOOSAM8G

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB PHDAM または PHIDAM のデータベースが OSAM データベース・データ・セット内でサポートするデータが最大 4 ギガバイトか、それとも最大 8 ギガバイトかをマスター・データベース・レコード内で指定します。デフォルトはありません。これらのキーワードは、DBD が HALDB マスターに対して指定されている場合にのみ有効です。

OSAM8G

OSAM データ・セットの最大容量が 8 ギガバイトのデータであることを指定します。HALDB をオンラインで再編成できる (OLR 対応である) 場合、コマンドは失敗します。OSAM8G に変更できるのは、OLR 対応でないデータベースのみです。データベースが現在 OLR 対応である場合は、OLRNOCAP と OSAM8G を指定して、最大サイズを 8 ギガバイトに変更する必要があります。

NOOSAM8G

OSAM データ・セットの最大容量が 4 ギガバイトのデータであることを指定します。

PINIT | NOPINIT

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB 区画の初期化が必要

かどうかを指定します。このキーワードは、データベース定義を変更せずに、1つ以上の区画データ・セットを削除および再定義した後で、使用します。

DBD キーワードによって指定されたデータベースが HALDB マスターの場合は、変更はすべての区画に対して行われます。そうでない場合は、指定された区画だけが変更されます。

制約事項:

1. PINIT キーワードおよび NOPINIT キーワードは、ALL と一緒では無効です。
2. PINIT キーワードと DBQUI キーワードを一緒に指定することはできません。

PINIT

区画を DB 事前再編成ユーティリティーか HALDB 区画データ・セット初期設定ユーティリティーを使用して初期設定する必要があることを表します。

NOPINIT

区画を初期化する必要がないことを示します。

RANDOMZR(name) | NORAND

高速機能 DEDB のランダム化モジュールの名前を変更するために使用するオプションのキーワード。このキーワードが指定されていて、ACBSHR=N の指定により各 IMS が独自の専用 ACB ライブラリーを使用する場合、DEDB にアクセスする IMS がこのランダムマイザーを使用しているかどうか、高速機能によって検証されます。ランダムマイザー名が検証されないようにする場合は NORAND を指定します。ACBSHR=Y の場合、どちらのキーワードが指定されていても、ランダムマイザー名の検証は実行されません。

RANDOMZR(name)

高速機能 DEDB のランダム化モジュールの名前を指定します。

NORAND

高速機能 DEDB のランダム化モジュールの名前をクリアします。

READON | READOFF

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データベースが読み取り専用処理だけに限定できるかどうかを指定します。いずれのキーワードも DEDB に対しては使用しないでください。

READON

データベースの読み取り処理だけを許可できることを指定します。

READOFF

データベースに対して、読み取り処理と更新処理の両方を許可できることを指定します。

SHARELVL(0 | 1 | 2 | 3)

許可サブシステムがデータベースを共用できる、データ共用のレベルを指定するのに使用するオプション・キーワード。このキーワードは、許可 DL/I データベースに対しては指定できません。

0、1、2、および 3 という数は、4 つのタイプのデータ共用レベルを定義します。

- 0 データベースは共用できないことを示します。
- 1 更新が許可された 1 つの IMS サブシステムと、それ以外の読み取り処理 (保全性処理なし) だけを許可されている IMS サブシステムとでデータベースを共用できることを表します。1 はまた、読み取り処理のみを許可された複数の IMS サブシステムによってデータベースを共用できることも示します。レベル 1 はデータベース・レベルの共用と呼ばれます。
- 2 単一ホスト・プロセッサ環境で更新を許可された複数の並行サブシステムによってデータベースを共用できることを示します。レベル 2 はホスト内ブロック・レベル共用と呼ばれます。
- 3 複数ホスト・プロセッサ環境で更新を許可された複数の並行サブシステムによってデータベースを共用できることを示します。レベル 3 はホスト内ブロック・レベル共用と言われます。

制約事項:

- SHARELVL キーワードは並行イメージ・コピーに対しては 0 より大きくなければならない。
- IRLM を使用しており、SHARELVL 2 または 3 を指定した場合は、データベース・データ・セットで VSAM SHAREOPTIONS (3 3) キーワードも必ず指定してください。
- SHARELVL キーワードは、DEDB 中のすべてのエリアに適用される。
- DEDB のレベルを 0 または 1 からレベル 2 か 3 に変更する場合は、その DEDB 内のすべての VSO エリアの最初のカップリング・ファシリティ構造名 (CFSTR1) をエリアの名前に設定する。DEDB をレベル 2 または 3 からレベル 0 または 1 に変更する場合、DBRC は指定されたすべてのカップリング・ファシリティ構造名をゼロにリセットし、LKASID キーワードを NOLKASID にリセットし、さらに MAS キーワードを NOMAS にリセットします。

TYPEFP | TYPEIMS

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON レコード構造を高速機能 DEDB または DL/1 データベースへ変更します。

TYPEFP

データベースが高速機能 DEDB であること、および RECON データ・セット内のレコード構造を IMS から高速機能へ変更する必要があることを指定します。

TYPEIMS

データベースが DL/I データベースであること、および RECON データ・セット内のレコード構造を高速機能から IMS へ変更する必要があることを指定します。

UNAUTH

DBD キーワードで指定されたデータベース内の関連したサブシステム情報リストからエントリーを除去するか、SSID パラメーターで指定された SSYS レコード内の許可データベース・リストまたは区画リストからエントリーを除去します。UNAUTH を使用する場合は、以下のキーワードを指定する必要があります。

DBD(name)

データベース名。

AREA

データベースが高速機能 DEDB の場合。

SSID(name)

IMS サブシステム ID。

制約事項: UNAUTH キーワードを使用する際には、以下の制約事項が適用されます。

- UNAUTH に DBD、AREA、および SSID 以外のキーワードを指定すると、このコマンドは失敗する。
- UNAUTH を指定せずに AREA を指定すると、このコマンドは失敗する。
- SSYS レコードと DB/AREA レコード間に前述のような矛盾がない場合は、このコマンドは失敗する。

AREA(name)

高速機能 DEDB に対して UNAUTH を指定する場合は必須。name 値は DEDB エリアの名前です。UNAUTH を指定せずに AREA を指定すると、このコマンドは失敗します。

PARTSEL(pgmname) | HIKEY

互いに排他的なオプション・キーワードであり、ユーザー区画選択出口プログラム名を HALDB データベースに対して識別するか、または削除するのに使用します。区画選択出口プログラムの名前を削除すると、区画選択ストリングがすべてクリアされてしまいます。区画選択出口プログラムの名前を追加あるいは変更しても、区画ハイ・キーや区画選択ストリングはそのまま残ります。いずれの場合でも、すべての区画には、PINIT (区画の初期化が必要) のマークが付きます。このコマンドは、NOPINIT も指定されていると失敗します。新規の区画高位キーまたは区画選択ストリングを指定するには、CHANGE.PART コマンドを使用します。

PARTSEL(pgmname)

HALDB に対してユーザーの区画選択出口プログラム名を識別します。この値は、長さが最大 8 文字のプログラム名です。

制約事項: このキーワードの ALL との併用は無効です。

HIKEY

HALDB と関連している既存の区画選択出口プログラムを除去します。

制約事項: このキーワードの ALL との併用は無効です。

REORGI | NOREORGI

同時には使用できません。(IMS に同梱される HALDB オンライン再編成機能以外の) オンライン再編成プロダクトによって使用され、DBRC に対して、それらがアクティブであり (データベースの再編成を目的としており)、全機能データベースのデータ整合性が実現されることを通知するオプション・パラメーター。REORG INTENT フラグが ON に設定されているときは、他の再編成プロダクト、バッチ・アクセス、およびオンライン・イメージ・コピー処理に関しては、データベース許可は失敗します。

REORGI

以下の条件を満足する場合は、データベースが再編成されるという意味であり、RECON データ・セットのデータベース・レコード内の REORG INTENT フラグが ON に設定されます。

- データベースのタイプが有効。HALDB データベースを含む全機能である必要があります。
- REORG INTENT フラグがオフ。
- このデータベースに対して、バッチ・ジョブが 1 つも許可されていない。
- HALDB オンライン再編成 (OLR) で、カーソルをアクティブに設定できない (OLREORG CURSOR ACTIVE=YES)。
- このデータベースが、IMS OLRIMSID=imsid により所有されないことがない。

NOREORGI

以下の条件を満足する場合に、データベースが再編成されないこと (あるいは再編成が完了されたばかりであることを意味し、RECON データ・セットのデータベース・レコード内の REORG INTENT フラグが OFF に設定されます。

- データベースのタイプが有効。HALDB データベースを含む全機能である必要があります。
- REORG INTENT フラグがオン。

使用上の注意

許可されているかオープンされている区画がある HALDB マスターに対して CHANGE.DB コマンドを発行する場合は、次のコマンドまたはコマンドの組み合わせのいずれかを実行して、許可されているかオープンされている区画に対して変更を有効にする必要があります。




- /START DB HALDB_master OPEN コマンド
- /DBRECOVERY DB HALDB_master コマンドと、その直後の /START DB HALDB_master コマンド

DBD キーワードで示されるデータベースのレコード変更例

この例では、RECON データベースに含まれる、DBD キーワードで示されるデータベースのレコードを変更するように指定します。データ共用レベルが指定されており、データベースに必要なバックアウトは 1 つです。

```
//CHGDB JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.DB DBD(THISDBD) NOAUTH READOFF SHARELVL(2) -
BACKOUT(1) SSID(IMSID1)
/*
```

関連概念:

-  非リカバリー・オプション (データベース管理)
-  データ共用のレベル (システム管理)
-  共用オプションによる VSAM データ・セット定義の調整 (システム管理)

🔗 リカバリー不能な全機能データベース (データベース管理)

関連資料:

🔗 /RMxxxxxx コマンド (コマンド)

362 ページの『LIST.DB コマンド』

『CHANGE.DBDS コマンド』

関連情報:

🔗 DSP0045I (メッセージおよびコード)

CHANGE.DBDS コマンド

CHANGE.DBDS コマンドは、DBDS に関する情報を変更するのに使用します。この情報は、RECON データベースの DBDS レコードにあります。

データベースまたは DEDB エリアが使用中であるときに、DSN、DDNNEW または AREANew を指定すると、このコマンドは失敗します。

要件: CHANGE.DBDS を実行するには、IMS データベースの定義にアクセスする必要があります。IMS システムが ACB を管理している場合、定義は IMS カタログから取り出されるため、IMS カタログの名前は RECON ヘッダーまたは CHANGE.DBDS コマンド自体の中で定義されている必要があります。RECON データ・セット内またはコマンド内で指定された IMS カタログが使用できない場合、コマンドは失敗します。

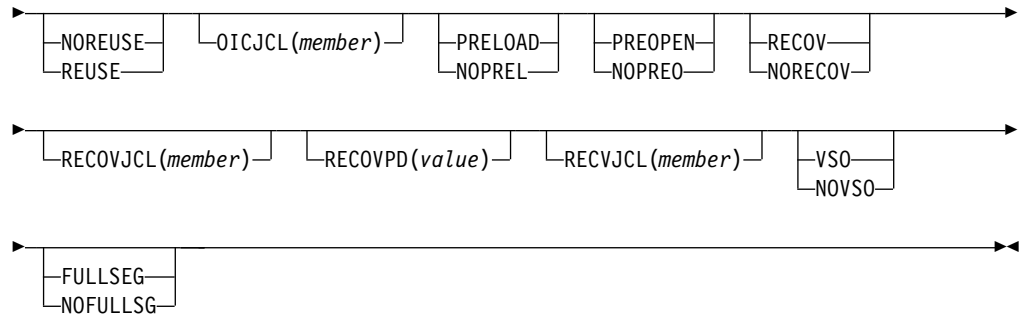
IMS システムで DBD、PSB、および ACB のライブラリーを使用する場合、IMS DBDLIB データ・セットがデータベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) のジョブ・ストリーム内で IMS の DD 名で識別される必要があります。

HALDB DBDS のいくつかの属性をこのコマンドで変更することができます。HALDB 区画のすべての DBDS を変更したい場合は、CHANGE.PART コマンドを使用します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、このコマンドは以下の表の指示通りにのみ使用できます。

表 3. HALDB データベースの CHANGE.DBDS

CHANGE.DBDS	区画データ DBDS	区画索引 /ILDS DBDS
ADDEQE DELEQE	あり	あり
CFSTR1	N/A	N/A
CFSTR2 NOCFSTR2	N/A	N/A
AUTH NOAUTH	N/A	N/A
DBQUIH NODBQUIH DBQUI NODBQUI	なし	なし
DDNEW AREANew	なし	なし
DEFLTJCL NODEFLT	あり	なし
DSN	なし	なし



キーワード

DBD(*name*)

レコードを変更する DBDS または DEDB エリアをデータベース名で示す必須キーワード。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、レコードを変更する DBDS または DEDB エリアを示します。DDN を指定する場合は、DBDS の DD 名を指定します。AREA を指定する場合は、エリアの名前を指定します。

CATALOG(*name*) | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、IMS が CHANGE.DBDS コマンドの処理中に IMS カタログと DBDLIB のどちらを参照するかを示すために使用します。

これらのパラメーターを省略した場合、IMS がこのコマンドの処理中に IMS カタログと DBDLIB のどちらを使用するかは、RECON ヘッダー内の CATALOG= の値によって決まります。

CATALOG(*name*)

IMS が CHANGE.DBDS コマンドの処理のために参照する IMS カタログを指定します。

name は、RECON データ・セット内に HALDB データベースとして登録されている IMS カタログ・データベースの名前に一致する、8 文字の英数字文字列として指定します。8 文字未満のすべての IMS カタログ名には、空白が埋め込まれます。

IMS カタログ名は、CHANGE.DBDS コマンドの実行中に検証されます。カタログが存在しないか、HALDB データベースとして定義されていないか、使用できない場合、コマンドは失敗します。

NOCATALG

IMS カタログの代わりに DBD ライブラリーを CHANGE.DBDS コマンドで使用することを指定します。

ADDEQE(*value*) | DELEQE(*value*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS のエラー・キュー・エレメントを変更します。

ADDEQE

DBDS にエラー・キュー・エレメントを追加します。エラー・キュー・エレメントは、データ・セットで入出力エラーが生じたためにデータ・セットをリカバリーする必要があることを示します。エラー・キュー・エレメントで記述されたデータ・セット部分以外の処理は継続します。エラー・キュー・エレメントが追加できるのは、DBDS が使用されていないときに限ります。変数フィールドには、1 つ以上の 4 バイトの 16 進値を引用符で囲んで指定します。例えば、ADDEQE(X'00002345', X'00012345', ...)

DELEQE

DBDS からエラー・キュー・エレメントを削除します。エラー・キュー・エレメントの削除は、そのデータ・セットでリカバリー処理が行われたことを示します。エラー・キュー・エレメントを削除できるのは、DBDS が使用されていないときに限ります。変数フィールドには、1 つ以上の 4 バイトの 16 進値を引用符で囲んで指定します。例えば、DELEQE(X'00002345', X'00012345', ...)

データベースに EQE を追加すると、自動的に「リカバリー必要」フラグが立てられます。EQE を削除し、データベースに他に EQE フラグがなくなると、「リカバリー必要」フラグはオフになります。ADDEQE または DELEQE キーワードを指定する場合は、RECOV または NORECOV は指定しないでください。

CFSTR1(name)

指定された VSO エリアの最初のカップリング・ファシリティ構造名を変更するオプション・キーワード。z/OS カップリング・ファシリティ構造の命名規則に従ってください。このキーワードは、SHARELVL(2|3) を指定して定義した DEDB の VSO エリアについてのみ有効です。エリアが VSO に変更され、DEDB が SHARELVL(2 | 3) である場合は、このエリア名がデフォルトになります。エリアが許可されている場合、そのエリアが NOVSO から VSO に変更されない限り、CFSTR1 は使用できません。

CFSTR2(name) | NOCFSTR2

互いに排他的なオプション・キーワードであり、識別された VSO エリアの 2 番目のカップリング・ファシリティ構造の名前を更新または除去します。これらのキーワードは、SHARELVL(2|3) で定義された DEDB の VSO エリアについてのみ有効です。これらのキーワードを許可エリアに対して指定できるのは、そのエリアが NOVSO から VSO に変更される場合のみです。

CFSTR2(name)

2 番目のカップリング・ファシリティ構造の新しい名前を指定します。カップリング・ファシリティ構造の z/OS 命名規則に従ってください。

制約事項: CFSTR2 は MAS と一緒に指定できません。またはそのエリアが複数エリア・カップリング・ファシリティ構造として既に指定されている場合にも指定できません。

NOCFSTR2

2 番目のカップリング・ファシリティ構造 (CFSTR2) の名前を除去します。

AUTH | NOAUTH

互いに排他的なオプション・キーワードであり、エリアを許可処理できるかどうかを指定します。AUTH および NOAUTH キーワードは、AREA キーワードが指定されている場合にのみ有効です。

AUTH

エリアの許可処理が可能であることを指定します。

NOAUTH

エリアの許可処理が禁止されることを指定します。

CHANGE.DBDS AREA(*name*) RECOV コマンドを指定すると、そのエリアに属するすべての ADS も同時に使用不能の状況に設定されます。

DBQUIH | NODBQUIH | DBQUI | NODBQUI

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データベース静止オプションを指定するために使用します。これらのキーワードは、AREA キーワードが指定されている場合にのみ有効です。

DBQUIH

DEDB エリアの QUIESCE HELD フラグがオンに設定されることを指定します。

制約事項: DBQUIH は、QUIESCE IN PROGRESS フラグがオンの場合、または DBQUI キーワードもコマンドに含まれている場合にのみ有効です。

NODBQUIH

DEDB エリアの QUIESCE HELD フラグがオフに設定されることを指定します。

DBQUI

DEDB エリアの QUIESCE IN PROGRESS フラグがオンに設定されることを指定します。

NODBQUI

DEDB エリアの QUIESCE IN PROGRESS フラグがオフに設定されることを指定します。

制約事項: NODBQUI は、QUIESCE HELD フラグがオフの場合、または NODBQUIH キーワードもコマンドに含まれている場合にのみ有効です。

DDNNEW(*name*) | AREANEW(*name*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定した DBDS のデータベース DD 名、または指定した RECON データ・セットの高速機能 DEDB エリアのエリア名を変更します。

このキーワードを指定すると、指定した DBDS に対応する RECON データ・セットに含まれる全レコードの既存の DD 名が新規 DD 名に置き換えられます。

CHANGE.DBDS コマンドのための JCL には、IMS DBDLIB データ・セットの DD 名を含める必要があります。新規 DD 名は IMS DBD ライブラリー内で定義する必要があり、そのデータ・セット ID の数値は変更してはなりません。また RECON データ・セットに既に存在する名前は使用できません。

AREANEW は、AREA キーワードが指定されている場合にのみ有効です。

DEFLTJCL(member) | NODEFLT

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS の暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定します。

DEFLTJCL

DBDS の新しい暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定します。指定したメンバーは、GENJCL.IC、GENJCL.OIC、および GENJCL.RECOV コマンドによって、ユーザーが定義したキーワードを変換するのに使用されません。

NODEFLT

デフォルトの JCL メンバーを使用しないときに、DBDS レコードからデフォルトの JCL 名を除去します。

DSN(name)

指定した DBDS のデータ・セット名を変更するのに使用するオプション・キーワード。このキーワードは、DEDB エリアには使用できません。

FULLSEG | NOFULLSG

置き換え (REPL) 呼び出しによってセグメントが更新された場合、X'5950' ログ・レコードに完全なセグメント・イメージを記録するかどうかを指定する、互いに排他的なオプション・キーワード。これらのキーワードは、高速機能 DEDB の場合にのみ有効です。エリアが使用中である場合は、これらのキーワードは指定できません。DBRC のエリア・レコードの属性を変更するには、エリアを停止する必要があります。

このキーワードは、RECON データ・セット内のエリア・レコードの属性を更新し、INIT.DB コマンドまたは CHANGE.DB コマンドで設定されたデフォルト属性をオーバーライドします。

FULLSEG

完全なセグメント・イメージをログに記録することを指示します。

NOFULLSG

セグメントの更新された部分のみをログに記録することを指示します。

GENMAX(value)

DBRC が、指定された DBDS または DEDB エリア用に保守するイメージ・コピー・データ・セットの最大数を変更するのに使用するオプション・キーワード。*value* は 2 から 255 の 10 進数でなければなりません。

指定された DBDS 用に現在存在しているイメージ・コピー・データ・セットの数より小さい値を指定すると、その GENMAX 値に等しくなるまで、リカバリ期間を超えているイメージ・コピー・データ・セットが RECON から削除されます。残存数が、指定された GENMAX 値に等しくなるまで、タイム・スタンプが最も古いイメージ・コピー・データ・セットのレコードが削除されます。

GENMAX 値を増やし、REUSE を指定する場合は、INIT.IC コマンドを使用して、RECON データ・セット内に追加のイメージ・コピー・レコードを作成してください。データ・セット数が GENMAX と等しくない場合は、データ・セットの再利用は行われず、ユーティリティーのために使用可能なデータ・セットを使い尽くす結果になります。

ICJCL (*member*)

基幹 JCL の区画データ・セットのメンバー名を変更するオプション・キーワード。GENJCL.IC コマンドは、指定された DBDS または DEDB エリアに対してデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するための JCL をこの名前で生成します。

ICON | **ICOFF**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データベースに、イメージ・コピーが必要であるかどうかを指定します。

ICON

DBDS のイメージ・コピーを取る必要があることを指定します。DBDS のイメージ・コピーの状況が IC RECOMMENDED の場合、CHANGE.DBDS ICON コマンドを発行すると、(RECON 内の) イメージ・コピーの状況が IC RECOMMENDED から IC NEEDED に変更されます。関連するデータベース・レコード内では、イメージ・コピーを必要とする DBDS の数を示すために、IC NEEDED カウンターが増加します。

ICOFF

DBDS はイメージ・コピーを必要としないことを指定します。DBDS のイメージ・コピーの状況が IC RECOMMENDED または IC NEEDED の場合、CHANGE.DBDS ICOFF コマンドを発行すると、イメージ・コピーの状況がリセットされ (オフにされ) ます。CHANGE.DBDS ICOFF コマンドを発行する前のイメージ・コピーの状況が IC NEEDED だった場合、関連するデータベース・レコード内の IC NEEDED カウンターは、CHANGE.DBDS ICOFF コマンドが発行された後に 1 だけ減らされます。IC NEEDED カウンターは、イメージ・コピーを必要とする DBDS の数を示します。

LKASID | **NOLKASID**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定されたエリアのローカル・データ・キャッシングを、読み取り要求でバッファ・ルックアサイド用に使用するかどうかを指定します。LKASID オプションは、SHARELVL(2 | 3) として指定された VSO エリアについてのみ有効です。これらのキーワードを許可エリアに対して指定できるのは、そのエリアが NOVSO から VSO に変更される場合のみです。

LKASID

このエリアに対する読み取り要求で、バッファ・ルックアサイドを実行することを示します。

NOLKASID

このエリアに対する読み取り要求で、バッファ・ルックアサイドを実行しないことを示します。

単一エリア構造を使用する VSO DEDB エリアの場合、そのエリア用に RECON データ・セットに定義される LKASID 値が、DFSVSMxx PROCLIB メンバーの DEDB LKASID 値より優先されます。

多重エリア構造を使用する VSO DEDB エリアの場合、LKASID または NOLKASID は DFSVSMxx PROCLIB メンバーを使用して指定する必要があります。エリア用に RECON データ・セットに定義される LKASID 値は無視されます。

MAS | NOMAS

互いに排他的なオプション・キーワードであり、共用 VSO エリアを複数エリア・カップリング・ファシリティ構造内に常駐させるかどうかを指定します。

MAS

エリアを複数エリア・カップリング・ファシリティ構造に常駐させることを示します。MAS が指定されている場合、第 2 のカップリング・ファシリティ構造名 (CFSTR2) を指定することはできません。第 2 の構造が既に定義されている場合、第 2 の構造名は削除されます。

制約事項: MAS を指定できるのは、DEDB が SHARELVL (2 または 3) として指定され、さらに VSO が指定されているか、エリアが既に VSO DEDB として指定されている場合に限ります。また、CFSTR2 は MAS と一緒に指定できません。またはそのエリアが複数エリア・カップリング・ファシリティ構造として既に指定されている場合にも指定できません。

NOMAS

カップリング・ファシリティ構造 (1 つ以上) には、このエリアのみのデータを含めることを示します。

NOREUSE | REUSE

互いに排他的なオプション・キーワードであり、イメージ・コピー・データ・セットを後続のイメージ・コピー・ジョブのために再利用できるかどうかを示します。

NOREUSE

指定された DBDS または DEDB エリア用に既に使用されているイメージ・コピー・データ・セットは、後続のイメージ・コピーで再利用しないことを表します。指定された DBDS または DEDB エリアの既存の未使用イメージ・コピー・データ・セット・レコードは削除されます。

REUSE

指定された DBDS または DEDB エリア用に既に使用されているイメージ・コピー・データ・セットを、後続のイメージ・コピーで再利用できることを示します。RECON に DBDS または DEDB エリアのための標準外イメージ・コピー・データ・セット・レコードが含まれている場合は、REUSE は指定できません。

GENMAX の値がグループの既存のデータ・セット数より大きい場合は、INIT.IC コマンドを使用して、さらにデータ・セットを追加しないと、データ・セットの再利用が行われません。

OICJCL (*member*)

基幹 JCL の区画データ・セットのメンバー名を変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、DEDB エリアには使用できません。

GENJCL.OIC コマンドは、指定された DBDS に対してオンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するための JCL をこの名前で生成します。

PRELOAD | NOPREL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、VSO DEDB エリアを次にオープンするときにロードするかどうかを指定します。

PRELOAD

このエリアを次にオープンするときに、それをデータ・スペースまたはカップリング・ファシリティ構造内にロードすることを表します。また、このオプションを選択すると、このエリアが事前オープンされます。

NOPREL

この VSO エリアを次にオープンするときに、それをデータ・スペースまたはカップリング・ファシリティ構造内にロードしないことを示します。CI は、初めて読み取られるときに、データ・スペース内にコピーされます。

PREOPEN | NOPREO

互いに排他的なオプション・キーワードであり、制御領域が次の初期設定の後の最初のチェックポイント後に、あるいは次の /STA AREA コマンドが処理される際のいずれかに、VSO DEDB エリアをオープンするかどうかを指定します。

PREOPEN

次回、制御領域が開始される時、または /STA AREA コマンドが処理される時に、エリアのオープンが行われることを示します。このオプションは、VSO エリアと非 VSO エリアの両方に有効です。

NOPREO

次に制御領域が開始する時、あるいは /STA AREA コマンドが処理される時に、エリアを事前オープンしないことを表します。このキーワードは、PRELOAD キーワードと一緒に指定できません。

RECOV | NORECOV

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS または DEDB エリアのリカバリーが必要かどうかを指定します。

RECOV

DBDS またはエリアのリカバリーが必要かどうかを指定します。リカバリーが必要な DBDS の数を示している、関連したデータベース・レコードの「リカバリー必要」カウンターの数が増加します。

NORECOV

DBDS または DEDB エリアのリカバリーが必要か否かを指定します。リカバリーされた DBDS の数を示している関連データベース・レコードの「リカバリー必要」カウンターの数が増加します。

RECOVJCL(member)

基幹 JCL の区画データ・セットのメンバー名を変更するためのオプション・キーワード。GENJCL.RECOV コマンドは、このメンバーを使用して、指定された DBDS または DEDB エリアに対して DBRC を実行するための JCL を生成します。

RECOVPD(value)

特定の DBDS や DEDB エリアのリカバリー期間を変更するために使用するオプション・キーワード。

value は、イメージ・コピーが RECON データ・セット内に保持されている日数を表す値で、0 から 999 の数でなければなりません。0 は、リカバリー期間がないことを示します。

RECVJCL(member)

GENJCL.RECEIVE コマンドで使用される基幹 JCL メンバーの名前を指定するためのオプション・キーワード。

VSO | NOVSO

互いに排他的なオプション・キーワードであり、制御領域が次回に初期化された後、あるいは次の /STA AREA コマンドが処理されるときにいずれかに、エリアを仮想記憶域に常駐させるかどうかを指定します。

VSO

エリアを仮想記憶域に常駐させることを示します。SHARELVL(0 | 1) で定義されたエリアの読み取りおよび書き込みは、z/OS データ・スペースに対して行われます。SHARELVL(2 | 3) で定義されたエリアは、カップリング・ファシリティを使用して、接続されたサブシステム間でデータを共有します。

NOVSO

このエリアを仮想記憶域に常駐させないことを示します。

このエリアが既に SHARELVL(2 | 3) として指定されている場合は、エリアを NOVSO に変更すると、カップリング・ファシリティ構造名がクリアされ、LKASID が NOLKASID にリセットされます。エリアが使用中の場合は、NOVSO は指定できません。

高速機能 DEDB のレコードの変更例

この例では、DBD と AREA キーワードで示される高速機能 DEDB について、RECON データ・セットのレコードに対する変更を指定します。指定された DEDB エリアのイメージ・コピー・データ・セットは再利用できません。また、DBRC が保守するイメージの最大数は 2 です。さらに、指定された DBDS のイメージ・コピー・データ・セットは、最低 15 日間は RECON データ・セットに保持されます。

```
//CHGDBDS JOB
:
//SYSIN DD *
      CHANGE.DBDS DBD(DB3) AREA(DD3) NOREUSE -
              GENMAX(2) RECOVPD(15)
/*
```




デフォルトのカタログ名の代わりに DBDLIB を使用する例

```
//CHANGEDBDS JOB
:
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN DD *
      CHANGE.DBDS DBD(DBD002) DDN(DDN003) GENMAX(2) REUSE -
              ICJCL(ICJCLX) RECOVJCL(RECOVJCX) DSN(DSN003) -
              NOCATALG
/*
```

デフォルトのカタログ名の代わりにカタログ名 **GREGCD00** を使用する例


```
//CHANGEDBDS JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.DBDS DBD(DBD002) DDN(DDN003) GENMAX(2) REUSE -
ICJCL(ICJCLX) RECOVJCL(RECOVJCX) DSN(DSN003) -
CATALOG(GREGCD00)
/*
```

関連概念:


-  VSO DEDB エリアの定義 (データベース管理)
-  カップリング・ファシリティ構造の命名規則 (データベース管理)
-  イメージ・コピー・データ・セットおよび GENMAX のリカバリー期間 (システム管理)

関連資料:

- 365 ページの『LIST.DBDS コマンド』
- 110 ページの『CHANGE.PART コマンド』
- 330 ページの『INIT.DBDS コマンド』

 /RMxxxxxx コマンド (コマンド)

関連情報:

 DSP0045I (メッセージおよびコード)

CHANGE.DBDSGRP コマンド

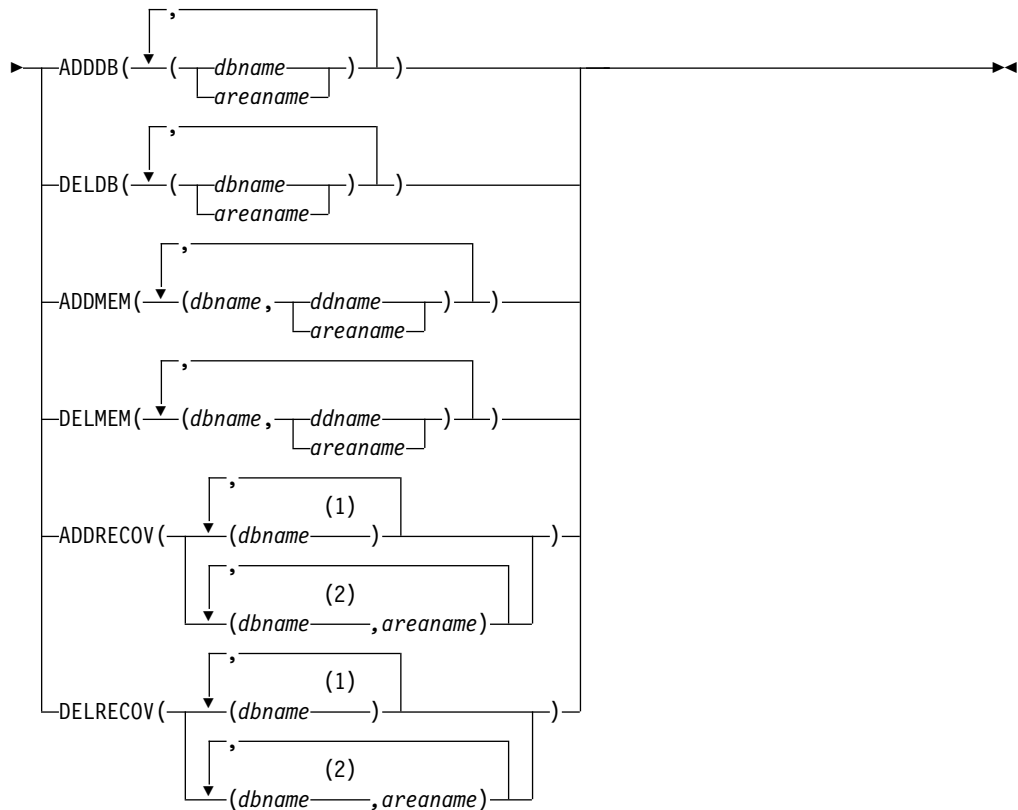
CHANGE.DBDSGRP コマンドは、DBDS またはデータベース・グループに関する情報を変更するのに使用します。この情報は、RECON データ・セットの DBDS グループ・レコードにあります。

サブセクション:

- 『構文』
- 104 ページの『キーワード』
- 106 ページの『DBDS グループの変更例』

構文

▶—CHANGE.DBDSGRP—GRPNAME(*name*)————▶



注:

- 1 全機能データベース名
- 2 高速機能 DEDB 名

キーワード

GRPNAM(*name*)

変更する DBDSGRP を識別するための必須キーワード。その名前のレコードは既に存在していなければなりません。

ADDDB(*dbname* | *areaname*) | **DELDDB**(*dbname* | *areaname*) | **ADDMEM**(*dbname*, *ddname* | *areaname*) | **DELMEM**(*dbname*, *ddname* | *areaname*) | **ADDRECOV**(*dbname*, *areaname*) | **DELRECOV**(*dbname*, *areaname*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、グループに追加するか、グループから削除するメンバー (1 つ以上) を識別するために使用します。1 つのメンバーがいくつの数の DB グループまたは DBDS グループにでも属することができますが、リカバリー・グループについては 1 つにしか属せません。

ADDDB(*dbname*)

DB グループに追加する 1 つ以上のデータベース名またはエリア名を識別します。指定する名前は、全機能データベース名、高速機能 DEDB 名、エリア名のいずれかにすることができます。

DELDDB(*dbname*)

DB グループから削除する 1 つ以上のデータベース名またはエリア名を識別します。指定する名前は、全機能データベース名、高速機能 DEDB 名、エリア名のいずれかにすることができます。

ADDMEM(*dbname, ddname*)

DBDS グループに追加する 1 つ以上のメンバーを識別します。*dbname* はデータベース名であり、*ddname* は DD ステートメント名またはエリア名です。

DELMEM(*dbname, ddname*)

DBDS グループから削除する 1 つ以上のメンバーを識別します。*dbname* はデータベース名であり、*ddname* は DD ステートメント名またはエリア名です。

ADDRECOV(*dbname, areaname*)

リカバリー・グループに追加する 1 つ以上のデータベースまたは DEDB エリアを識別します。*dbname* はデータベース (または DEDB) 名であり、*areaname* は DD ステートメント名またはエリア名です。

DEDB エリアはリカバリー・グループの一部にすることができますが、DEDB データベースはできません。HALDB データベースはリカバリー・グループの一部にすることができますが、個々の HALDB 区画はできません。

DEDB エリアをリカバリー・グループに追加する場合は、DEDB エリアとそのエリアが属している DEDB データベースの両方を指定する必要があります。つまり、DEDB エリアをリカバリー・グループに追加する場合は、*dbname* と *areaname* の両方を指定する必要があります。*areaname* のみを指定することはできません。

全機能データベースをリカバリー・グループに追加する場合は、*areaname* は高速機能データベースにのみ適用されるため、*areaname* を指定する必要はありません。

指定したグループがリカバリー・グループでない場合、このコマンドは失敗し、メッセージ DSP0077I が発行されます。

データベースまたはエリアは、1 つのリカバリー・グループにしか属することができません。ADDRECOV で指定したメンバーのいずれかが、既に別のリカバリー・グループに属している場合、このコマンドは失敗し、メッセージ DSP0078I が発行されます。

DELRECOV(*dbname, areaname*)

リカバリー・グループから削除する 1 つ以上の DB または DEDB エリアを指定します。ここで、*dbname* は、データベース (あるいは DEDB) 名、*areaname* は、DD ステートメント名あるいはエリア名です。

DEDB エリアをリカバリー・グループから削除する場合は、*dbname* と *areaname* の両方を指定する必要があります。指定したグループがリカバリー・グループでない場合、このコマンドは失敗し、メッセージ DSP0077I が発行されます。

1 つのグループのすべてのメンバーを削除すると、そのグループのレコードが RECON データ・セットから削除されます。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、*dbname* には HALDB 区画または HALDB マスターの名前を指定します。HALDB データベース名を指定する場合は、以下の表に定義されている CHANGE.DBDSGRP コマンドのみを使用してください。

表 4. CHANGE.DBDSGRP コマンドの HALDB マスターまたは区画データベース名の指定

CHANGE.DBDSGRP	<i>dbname</i> = HALDB マスター	<i>dbname</i> = 区画
ADDDDB	あり	あり
DELDB	あり	あり
ADDMEM	なし	あり
DELMEM	なし	あり
ADDRECOV	あり	なし
DELRECOV	あり	なし

DBDS グループの変更例

この例では、DBDS のグループを変更します。

```
//CHGDBGPR JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.DBDSGRP GRPNAME(GRP1) -
                ADDMEM((DB1,DD1),(DB2,DD2))
/*
```

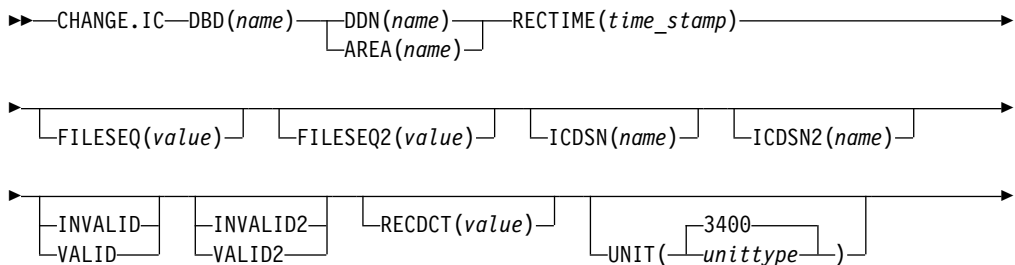
CHANGE.IC コマンド

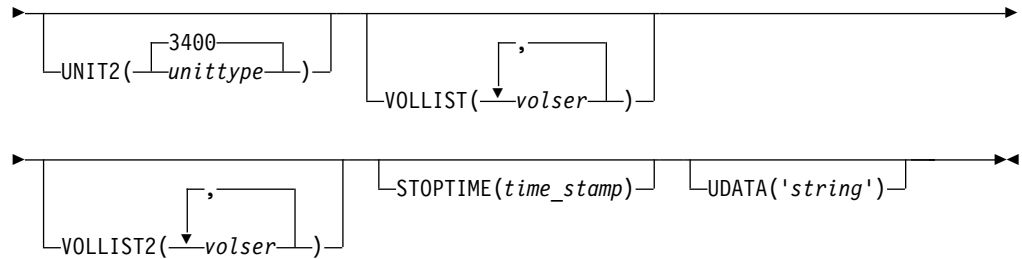
CHANGE.IC コマンドは、RECON データ・セットのイメージ・コピー・レコードに含まれている情報を変更するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 107 ページの『キーワード』
- 109 ページの『例』

構文





キーワード

DBD(*name*)

イメージ・コピー・レコードが変更される DBDS のデータベース名を示す必須キーワード。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、*dbname* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、変更するイメージ・コピー・レコードに関連した DBDS または DEDB エリアの名前を示します。

RECTIME(*time_stamp*)

変更する特定のイメージ・コピー・データ・セット・レコードを示す必須キーワード。

IMAGE レコードのリストから、アスタリスク (*) のマークの付いた実行時間を使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(*value*)

識別されたイメージ・コピー・データ・セットのレコードに含まれるファイル・シーケンス番号を変更するオプション・キーワード。

FILESEQ2(*value*)

識別された重複イメージ・コピー・データ・セットのレコードに対してファイル・シーケンス番号を追加あるいは更新するオプション・キーワード。

ICDSN(*name*)

識別されたイメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名を変更するオプション・キーワード。

ICDSN2(*name*)

識別された重複イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名をイメージ・コピー・レコードに追加、あるいはこのレコード内で変更するオプション・キーワード。

重複イメージ・コピー・データ・セットの名前を変更するには、最初のイメージ・コピー・データ・セットのレコードが RECON データ・セットになければなりません。

INVALID | VALID

互いに排他的なオプション・キーワードであり、これ以降にデータベース・リカバリ・ユーティリティー (DFSURDB0) を実行するときに、イメージ・コピー・データ・セットを入力として使用できないようにするか、できるようにするかを指定します。

INVALID

これ以後にデータベース・リカバリー・ユーティリティを実行するときに、指定されたイメージ・コピー・データ・セットを入力として使用できないようにします。無効になったイメージ・コピー・データ・セットを再利用すると、自動的に、有効であるとマーク付けされます。

VALID

これ以後にデータベース・リカバリー・ユーティリティを実行するときに、前に無効にされたイメージ・コピー・データ・セットを入力として使用できるようにします。

データベース・リカバリー・ユーティリティは、このイメージ・コピー・データ・セットが **INVALID** とマークされていない限り、それを入力として予期します。**INVALID** のマークが付いている場合、このユーティリティは重複イメージ・コピー・データ・セットを入力として予期します。

INVALID2 | VALID2

互いに排他的なオプション・キーワードであり、これ以降にデータベース・リカバリー・ユーティリティ (DFSURDB0) を実行するときに、重複イメージ・コピー・データ・セットを入力として使用できないようにするか使用できるようにするかを指定します。

INVALID2

これ以後にデータベース・リカバリー・ユーティリティを実行するときに、指定された重複イメージ・コピー・データ・セットを入力として使用できないようにします。無効になった重複イメージ・コピー・データ・セットを後で再利用すると、自動的に、有効であるとマーク付けされます。

VALID2

これ以後にデータベース・リカバリー・ユーティリティを実行するときに、前に無効にされた重複イメージ・コピー・データ・セットを入力として使用できるようにします。

INVALID2 と **VALID2** の両方を指定すると、後に指定された方が使用されます。

RECDCT(value)

指定されたイメージ・コピー・レコード内の、対応するイメージ・コピー・データ・セットに含まれるレコードのカウンタを変更するためのオプション・キーワード。CHANGE.IC *value* は 2 147 483 647 までの 10 進数でなければなりません。

UNIT(3400 | unittype)

指定されたイメージ・コピー・レコードに記録されている装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

UNIT2(3400 | unittype)

指定された重複イメージ・コピー・レコードに記録されている装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

識別されたイメージ・コピー・データ・セットがあるボリュームのボリューム通し番号をイメージ・コピー・レコードで変更するオプション・キーワード。

VOLLIST2(*volser*)

識別された重複イメージ・コピー・データ・セットがあるボリュームのボリューム通し番号をイメージ・コピー・レコードに追加、またはこのレコードのボリューム通し番号を変更するオプション・キーワード。

STOPTIME(*time_stamp*)

イメージ・コピーが完了した時刻を指定するオプション・キーワード。このタイム・スタンプは標準形にする必要があり、イメージ・コピー開始時刻より小さい値であってはなりません。これが進行中の HSSP CIC である場合は、有効な停止時刻の指定によって HSSP CIC が終了し、IC レコードと DBDS レコード内の進行中標識がリセットされます。

UDATA('string')

示された標準イメージ・コピー・データ・セットについての情報を 80 バイトまで指定できるオプション・キーワード。このキーワードの変数フィールドを使用して、標準イメージ・コピー・データ・セットがどのように作成されたかを記述できます。*string* 値にブランクまたはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

例**例 1:** イメージ・コピー・レコードの変更

この例では、DBD、DDN、および RECTIME キーワードで示されるイメージ・コピー・レコードの情報を RECON データ・セットで変更します。イメージ・コピー・データ・セット (ICDSN および ICDSN2 キーワードで指定されている) の新しいデータ・セット名はいずれも、デフォルトの命名規則に従います。また、イメージ・コピー・データ・セットがあるボリュームのボリューム通し番号も、VOLLIST および VOLLIST2 キーワードで指定された番号に変更されます。

```
//CHGIC JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.IC DBD(DBDKSDS1) DDN(DDNKSDS1) -
ICDSN(IMS.DBDKSDS1.DDNKSDS1.IC.ICDSN02) -
ICDSN2(IMS.DBDKSDS1.DDNKSDS1.IC2.ICDSN02) -
VOLLIST(ICVOL1,ICVOL2,ICVOL3) FILESEQ2(2) -
VOLLIST2(ICVOL4) RECTIME(07092131414323456)
/*
```

例 2: イメージ・コピー・レコードのユーザー・データの変更

この例では、DBD、DDN、および RECTIME キーワードで示されるイメージ・コピー・レコードの情報を RECON データ・セットで変更します。変更されたユーザー・データは UDATA パラメーターに組み込まれます。

```
//CHGIC JOB
:
//SYSIN DD *
```

```
CHANGE.IC DBD(DBDKSDS1) DDN(DDNKSDS1) -  
RECTIME(09152104355891200) -  
UDATA('RECOVERY POINT FOR ALL PARTITIONS TAKEN ON IMS12 EACH MONTH')  
/*
```

関連資料:

330 ページの『INIT.DBDS コマンド』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

CHANGE.PART コマンド

HALDB 区画の属性を変更するには、CHANGE.PART コマンドを使用します。

変更はその区画のすべての DBDS に適用されます。区画の単一の DBDS に関して、基幹 JCL メンバー名などのいくつかの属性を変更するには、CHANGE.DBDS コマンドを使用します。

以下のフィールドを変更する場合、区画を使用する前に初期化する必要があります。

- DSN 接頭部 (DSNPREFIX)
- ランダム化モジュール名 (RANDOMZR)
- 相対ブロック番号 (HIBLOCK)
- ルート・アンカー・ポイントの数 (ANCHOR)
- バイト (BYTES)
- 区画選択ストリングまたは区画ハイ・キー (KEYSTRNG)
- ブロック・サイズ (BLOCKSZE)

要件: KEYSTRNG を設定するか、区画を使用可能にする場合、IMS は CHANGE.PART コマンドの処理時にデータベース定義を参照する必要があります。IMS システムが ACB を管理している場合、定義は IMS カタログから取り出されるため、IMS カタログの名前は RECON ヘッダーまたは CHANGE.PART コマンド自体の中で定義されている必要があります。IMS システムで DBD、PSB、および ACB のライブラリーを使用する場合、IMS DBDLIB データ・セットがデータベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) のジョブ・ストリーム内で IMS の DD 名で識別される必要があります。

区画をアクティブに使用する状態から一時的に除去する場合は、DISABLE キーワードを使用します。区画をアクティブに使用する状態に戻すには、ENABLE キーワードを使用します。通常、区画を削除するときは事前にそれを DISABLE しますが、変更のテストが済むまで DBRC が維持するリカバリー関連情報をすべて除去することを望まないでください。DISABLE とマークされた区画は、削除したり、ENABLE とマーク付けして再びアクティブにすることができます。DISABLE から ENABLE に変更された区画は、リカバリーしてからでないと、使用できません。

制約事項: DISABLE または ENABLE が指定されている場合、CHANGE.PART コマンドに他のキーワードを指定できません。

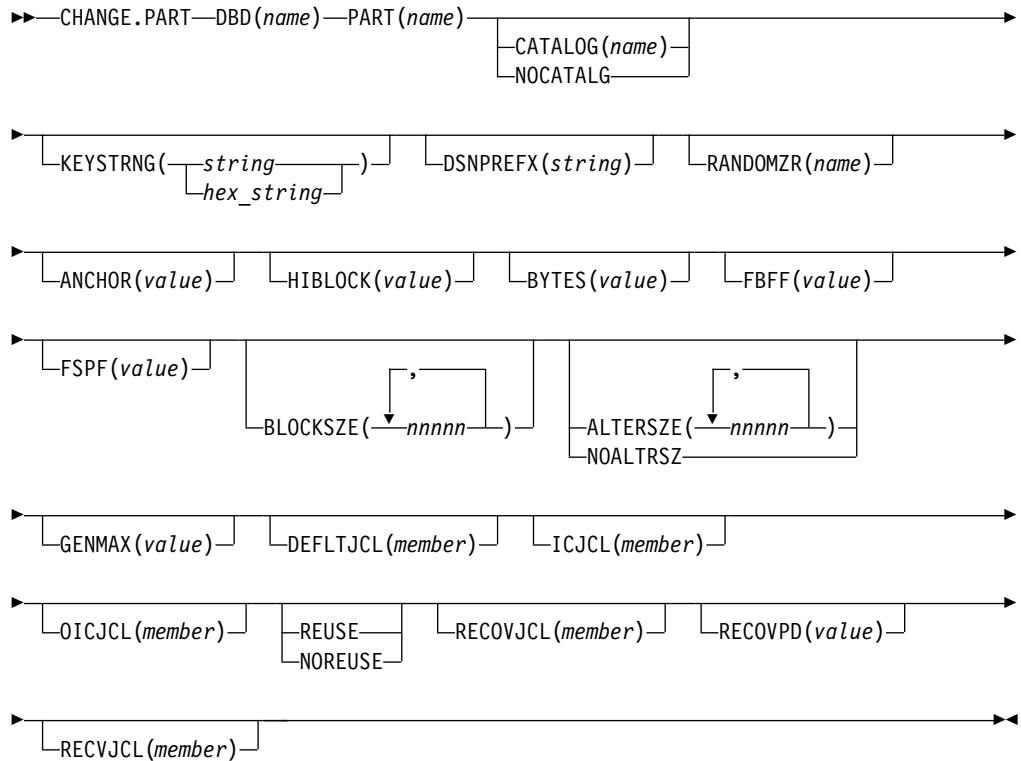
サブセクション:

- 111 ページの『構文』
- 111 ページの『キーワード』

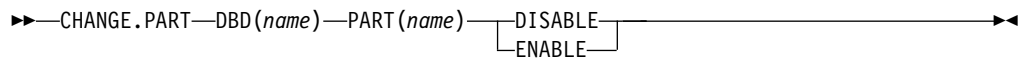
- 118 ページの『区画の変更例』

構文

CHANGE.PART コマンドには、次に示す構文図の 1 つを使用してください。



または、



キーワード

DBD(name)

HALDB データベースを識別するのに使用する必須キーワード。

PART(name)

区画を識別するのに使用する必須キーワード。

CATALOG(name) | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、IMS が CHANGE.PART コマンドの処理中に IMS カタログと DBDLIB のどちらを参照するかを示すために使用します。

これらのパラメーターを省略した場合、IMS がこのコマンドの処理中に IMS カタログと DBDLIB のどちらを使用するかは、RECON ヘッダー内の CATALOG= の値によって決まります。

CATALOG(*name*)

IMS が CHANGE.PART コマンドの処理のために参照する IMS カタログを指定します。

name は、RECON データ・セット内に HALDB データベースとして登録されている IMS カタログ・データベースの名前に一致する、8 文字の英数字文字列として指定します。8 文字未満のすべての IMS カタログ名には、空白が埋め込まれます。

IMS カタログ名は、CHANGE.PART コマンドの実行中に検証されます。カタログが存在しないか、HALDB データベースとして定義されていないか、使用できない場合、コマンドは失敗します。

NOCATALOG

IMS カタログの代わりに DBD ライブラリーを CHANGE.PART コマンドで使用することを指定します。

KEYSTRNG(*string* | *hex_string*)

HALDB 区画ハイ・キー値、または区画選択出口が使用するための選択文字列を変更するためのオプション・キーワード。最長 256 文字の文字列または最長 512 文字の 16 進値で指定します。文字列は英数字にします (埋め込まれた空白やコンマを使用するには、文字列を単一引用符で囲む必要があります)。文字列は、単一引用符で囲まない場合は、大文字に変換されます。16 進値は、単一引用符で囲み、先頭に X の文字を置きます。例えば、KEYSTRNG(X'D7C1D9E3D2C5E8') のようにします。

HALDB に対して区画選択ルーチンが指定されていない場合、KEYSTRNG は区画ハイ・キー値を定義します。この値は、ルート・キーの長さを超えてはなりません。ハイ・キーの長さが定義済みのルート・キーよりも短い場合は、ハイ・キー値に 16 進数の 'FF' が埋め込まれて定義済みのルート・キーの長さにされます。区画ハイ・キー値は、HALDB データベース内の各区画ごとに固有である必要があります。

HALDB に対して区画選択ルーチンが指定されている場合、KEYSTRNG は区画選択文字列を定義して、それを区画選択ルーチンに渡します。区画選択文字列は、最長 256 バイトの単純な文字情報から成ります。文字列に印刷不能な文字を含む場合は、16 進数表記で識別する必要があります。16 進数の文字列は、単一引用符で囲み、接頭部に X を付けます。

その区画が使用中であるか、またはハイ・キー値の変更の影響を受ける他の区画が使用中である場合は、このコマンドが失敗します。その区画と、ハイ・キー値の変更の影響を受ける他のすべての区画は、区画の初期設定が必要であるとマークされ (PINIT がオンに設定される)、初期設定されるまで使用できません。

要件: CHANGE.PART KEYSTRNG コマンドを発行した場合、IMS は区画のデータベース定義を参照する必要があります。IMS システムが ACB を管理している場合、定義は IMS カタログから取り出されるため、IMS カタログの名前は RECON ヘッダーまたは CHANGE.PART コマンド自体の中で定義されている必要があります。IMS システムで DBD、PSB、および ACB のライブラリーを使用する場合、IMS DBDLIB データ・セットがデータベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) のジョブ・ストリーム内で IMS の DD 名で識別される必要があります。

DSNPREFX(string)

HALDB データベース内の区画データ・セットについて、データ・セット名の接頭部を変更するのに使用するオプション・キーワード。指定される値は、最大 37 文字の有効な JCL データ・セット名です。

RANDOMZR(name)

HALDB PHDAM データベース専用のランダム化モジュール名を変更するのに使用するオプション・キーワード。ランダム化モジュールは、ルート・セグメントを PHDAM HALDB に置いたり、PHDAM HALDB から取り出したりするための制御をします。

ANCHOR(value)

PHDAM HALDB のルート・アドレス可能域内で各制御インターバルまたは制御ブロックに必要な RAP (ルート・アンカー・ポイント) の数を変更するのに使用するオプション・キーワード。1 から 255 の値を指定します。代表的な値は 1 から 5 です。

HIBLOCK(value)

ランダム化モジュールがこの HALDB データベースに対して生成できる最大相対ブロック番号値を変更するために使用するオプション・キーワード。この値は、PHDAM HALDB のルート・アドレス可能域内の制御インターバルまたはブロックの数を決定します。値の範囲は、1 から $16,777,215(2^{24} - 1)$ です。このキーワードは、PHDAM HALDB にのみ有効です。

BYTES(value)

一連の挿入において、別の HALDB レコードの呼び出しによって中断されることなくルート・アドレス可能域に保管できる HALDB レコードの最大バイト数を変更するのに使用するオプション・キーワード。値の範囲は、0 から $16,777,215(2^{24} - 1)$ です。このキーワードは、PHDAM HALDB データベースにのみ有効です。

値 0 (ゼロ) は、すべてのバイトがアドレス可能であることを意味します。

BYTES を 0 に設定すると、DBD 定義で BYTES を省略するのと同じ働きをします。

FBFF(value)

フリー・ブロック頻度係数 (fbff) を変更するためのオプション・キーワードです。この係数は、データベースのロードまたは再編成のときに、このデータ・セット・グループで、N 番目の制御インターバルまたは制御ブロックをフリー・スペースとして残すことを示します (FBFF= n の場合)。FBFF の範囲には、1 以外の 0 から 100 のすべての整数値を含みます。

FSPF(value)

フリー・スペース・パーセント係数を変更するためのオプション・キーワードです。このデータ・セット・グループで、各制御インターバルまたは制御ブロックの最低何 % をフリー・スペースとして残すかを指定します。値は、0 から 99 の任意の値です。

BLOCKSZE(nnnnn)

OSAM データ・セットのブロック・サイズを変更するのに使用するオプション・キーワード。32766 以下の偶数を指定します。ブロック・サイズの値を使

用するのは OSAM だけです。DBD に定義したデータ・セット・グループについて、それぞれ 1 つずつ、最大 10 個の値を指定できます。省略された値は変更されずに残ります。

ALTERSIZE(nnnnn) | NOALTRSZ

相互に排他的なオプションのキーワード。HALDB 変更操作の出力区画データ・セットの新規 OSAM ブロック・サイズまたは VSAM 制御インターバル (CI) サイズを設定あるいは消去します。

HALDB データベース上で変更操作が開始された後は、データベースの変更操作が完了してオンライン変更が実行されるまでは、区画データ・セットのブロック・サイズあるいは CI サイズを変更したり消去したりすることはできません。

ALTERSIZE(nnnnn)

HALDB 変更操作では、変更操作の出力区画データ・セットの新規 OSAM ブロック・サイズまたは VSAM CI サイズを指定します。

要件:

- 新規サイズは、INITIATE OLREORG OPTION(ALTER) コマンドを発行して変更操作を開始する前に、RECON データ・セットに保管する必要があります。
- ALTER オプションが指定されていても、入力データベース・メンバー内でデータベース構造の変更が検出されない場合、INITIATE OLREORG コマンドは失敗します。その結果、データベースの構造変更も行っている場合を除き、ALTER オプションを使用してブロック・サイズまたは CI サイズを変更することはできません。

32766 以下の偶数を指定します。DBD に定義したデータ・セット・グループについて、それぞれ 1 つずつ、最大 10 個の値を指定できます。省略された値は変更されずに残ります。

値は、定位置のコンマ区切り値として指定する必要があります。1 番目の位置の値は、1 つ目のデータ・セット・グループに適用されます。2 番目の位置の値は、2 つ目のデータ・セット・グループに適用されます (以降同様)。

例えば、ALTERSIZE(, ,4096) という ALTERSIZE キーワードは、3 つ目のデータ・セット・グループの新規ブロック・サイズまたは CI サイズを設定しますが、1 つ目と 2 つ目のデータ・セット・グループのサイズは変更しません。4 つ目から 10 個目のデータ・セット・グループも同様です (存在する場合)。

ALTERSIZE 値は、変更操作が完了してオンライン変更が実行されるまでのみ RECON データ・セット内の区画レコードに保管されます。オンライン変更が完了したら、新規 OSAM ブロック・サイズが区画レコードの OSAM BLOCK SIZE フィールドに保管されます。VSAM CI サイズは、区画レコードには保管されません。

ALTERSIZE 値が既に設定されている場合、CHANGE.PART コマンドを再発行して、変更する必要があるデータ・セットの新規 ALTERSIZE 値を指定することで、その値を変更することができます。

変更を取り消して、出力データ・セットのブロック・サイズまたは CI サイズが対応する入力データ・セットと同じになるようにするには、ALTERSIZE キーワードで入力データ・セットのブロック・サイズまたは CI サイズを指定して、コマンドを再発行します。

OSAM データ・セットの場合、ALTERSIZE 値を取り消した後、区画レコードの ALTER BLOCK SIZE フィールドに IMS が表示するデータ・セットの値は 0 です。これは、HALDB 変更機能がブロック・サイズを変更しないことを示します。

VSAM データ・セットの場合、ALTERSIZE 値を取り消した後、区画レコードの ALTER BLOCK SIZE フィールドに IMS が表示するデータ・セットの値は、ALTERSIZE 値を取り消すために入力した値です。IMS は、この値が入力データ・セットの CI サイズと同じであることを検証しません。出力データ・セットが存在しない場合、IMS は、ALTER BLOCK SIZE フィールドで設定された CI サイズで (そのサイズが入力データ・セットの CI サイズと異なっている場合でも) 出力データ・セットを自動的に作成します。出力データ・セットが存在し、その CI サイズがそれらに対して指定された ALTERSIZE 値に一致しない場合、区画の変更は失敗します。この場合、不一致を修正し、その他のすべての区画の変更処理が完了した後で、その区画の変更を再開します。

区画の ALTERSIZE 値を表示するには、LIST.DB コマンドを使用します。データ・セットのブロック・サイズまたは CI サイズが変更されていない場合、その ALTERSIZE 値は 0 です。0 は、出力データ・セットのブロック・サイズまたは CI サイズが入力データ・セットと同じになることを示します。区画内のデータ・セットのどのブロック・サイズあるいは CI サイズも変更されていない場合、ALTER SIZE 出力フィールドは表示されません。

NOALTRSZ

HALDB 変更機能の場合、RECON データ・セット内の区画レコードからすべての ALTERSIZE 値を消去します。

ALTERSIZE 値を消去した後、変更操作を開始する前に新規の ALTERSIZE 値が設定されていない場合、入力データ・セットと同じブロック・サイズまたは CI サイズで出力データ・セットが作成されます。

NOALTRSZ キーワードによってすべての ALTERSIZE 値を消去すると、ALTER SIZE 出力フィールドは表示されなくなります。

GENMAX(value)

区画 DBDS について DBRC が維持するイメージ・コピーの最大数を変更するのに使用するオプション・キーワード。NOREUSE キーワードを使用して区画 DBDS を識別した場合、イメージ・コピーの数が GENMAX 値を超えると、リカバリー期間を過ぎた DBDS の最も古いイメージ・コピーが削除されます。REUSE キーワードを使用して識別すると、リカバリー期間を過ぎた最も古いイメージ・コピーは再利用されます。2 から 255 の間の数値を指定します。すべての区画 DBDS は、この GENMAX 値を使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

DEFLTJCL(member)

HALDB の区画 DBDS について、暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを変更するのに使用するオプション・キーワード。指定されたメンバーは、GENJCL.IC、GENJCL.OIC、および GENJCL.RECOV コマンドにより、定義されたキーワードを変換するために使用されます。すべての区画 DBDS は、この DEFLTJCL メンバーを使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

ICJCL(member)

基幹 JCL が入っている区画データ・セットのメンバー名を変更するのに使用するオプション・キーワード。GENJCL.IC コマンドを使用すると、GENJCL コマンド上に指定した区画 DBDS について、DBRC がこのメンバーを使用して JCL を生成し、データベース・イメージ・コピー・ユーティリティー (またはデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティー) を実行します。すべての区画 DBDS は、この ICJCL メンバーを使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

NOREUSE | REUSE

互いに排他的なオプション・キーワードであり、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティーが、以前使用したイメージ・コピー・データ・セットを再利用するかどうかを変更します。REUSE を指定すると、GENJCL.IC コマンドまたは GENJCL.OIC コマンドによって生成されるジョブで、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティーが、(GENJCL コマンドで指定された DBDS について) DBDS の GENMAX 値を超えた場合に、最も古いイメージ・コピー・データ・セットを再利用できるようになります。REUSE の場合は、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティーが将来利用できるように、空のイメージ・コピー・データ・セットを作成する必要があります。さらに、INIT.IC コマンドを使用して、それらのデータ・セットの存在を RECON データ・セットに記録する必要があります。NOREUSE キーワードでは、このようなアクションは禁止されます。すべての区画 DBDS は、指定されたキーワードを使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

OICJCL(member)

基幹 JCL が入っている区画データ・セットのメンバー名を変更するのに使用するオプション・キーワード。GENJCL.OIC コマンドを実行すると、DBRC は、このメンバーを使用して、GENJCL コマンドで指定された区画 DBDS に対してオンライン・イメージ・コピー・ユーティリティーを実行するための JCL を生成します。該当する区画 DBDS は、この OICJCL メンバーを使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

RECOVJCL(member)

基幹 JCL が入っている区画データ・セットのメンバー名を変更するのに使用するオプション・キーワード。GENJCL.RECOV コマンドを実行すると、GENJCL コマンド上に指定した区画 DBDS について、DBRC がこのメンバーを使用して JCL を生成し、データベース・リカバリー・ユーティリティーを実行します。すべての区画 DBDS は、この RECOVJCL メンバーを使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

RECOVPD(*value*)

特定の区画 DBDS のリカバリー期間を変更するために使用するオプション・キーワード。DBRC に十分なリカバリー生成情報を RECON データ・セットの中に保守させたい日数を表す 0 から 999 までの数値を指定します。すべての区画 DBDS は、この RECOVPD 値を使用するように変更されます。

CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

RECVJCL(*member*)

GENJCL.RECEIVE コマンドで使用される基幹 JCL メンバーの名前を変更するのに使用するオプション・キーワード。すべての区画 DBDS は、この RECVJCL メンバーを使用するように変更されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

DISABLE | ENABLE

互いに排他的な必須キーワードであり、区画の状態を変更するために使用します。

DISABLE はこの区画を IMS およびほとんどのユーティリティーで使用できないものとしてマークします。ほとんどの状態では、DISABLE とマークされた区画は IMS によって認識されません (DBRC に登録されていないものとして扱われます)。DBRC LIST コマンドは DISABLE とマークされた区画に関する情報をリストし、HALDB 区画定義ユーティリティー (PDU) は DISABLE とマークされた区画を表示します。この区画はこの場合でもカウントされ、HALDB に定義された区画の最大数に近づきます。

DISABLE とマークされた区画は DBRC グループ (CAGROUP、DBDSGRP、DBGROUP および RECOVGRP) から除去されませんが、一般的には、そのグループが DBRC コマンドで使用されるとき、そのグループの一部として処理されることはありません。このことは、コマンドで使用される暗黙のグループにも適用されます。これに対する唯一の例外は、GENJCL.CA コマンドと IMS データベース変更累積ユーティリティーの実行です。DISABLE とマークされている場合でも、CA グループのメンバーである区画では、変更が累積されます。

GENJCL.IC コマンドと GENJCL.RECOV コマンドは、DISABLE とマークされた区画に対しては失敗します。これらのコマンドがいずれかの種類のグループを指定している場合、DISABLE とマークされた区画はスキップされます。すなわち、JCL は生成されず、メッセージも出されません。

ENABLE に設定すると、DISABLE になっていた区画が、IMS で再び使用できるようになります。この区画は「リカバリーが必要」状況に設定され、リカバリーしてからでないと IMS で使用できません。区画を ENABLE に設定すると、HALDB に新しい区画を追加する場合と同じ働きをします。HALDB が区画選択出口を使用すると、他のすべての区画は「区画の初期設定が必要」状況に設定されます。HALDB がハイ・キー値を使用する場合、次にハイ・キー値を使用する区画が「区画の初期設定が必要」状況に設定されます。

要件: CHANGE.PART ENABLE コマンドを発行した場合、IMS は区画のデータベース定義を参照する必要があります。IMS システムが ACB を管理している場合、定義は IMS カタログから取り出されるため、IMS カタログの名前は RECON ヘッダーまたは CHANGE.PART コマンド自体の中で定義されている必要があります。IMS システムで DBD、PSB、および ACB のライブラリーを

使用する場合、IMS DBDLIB データ・セットがデータベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) のジョブ・ストリーム内で IMS の DD 名で識別される必要があります。

区画の変更例

この例では、DBD と NAME キーワードで識別される区画に行う変更を指定します。ランダムマイザー・ルーチンの名前のほかに、区画のハイ・キーが変更されます。DBRC が維持するイメージの最大数は 12 です。さらに、指定された DBDS のイメージ・コピー・データ・セットは、最低 15 日間は RECON データ・セットに保持されます。この変更の結果、該当の区画とその次の区画が、区画の初期設定が必要であるとマークされます。

```
//CHGPART JOB
.
.
.
//IMS      DD   DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
...
//SYSIN DD *
      CHANGE.PART DBD(DB3) PART(PART3) KEYSTRNG('D7C1D9E3D2C5E8') -
                                RANDOMZR(RNDNAME2) GENMAX(12) RECOVPD(15)
/*
```

次の例では、DBD および PART キーワードによって識別される区画が DISABLE 状況に変更されます。

```
//CHGPART JOB
...
//SYSIN DD *
CHANGE.PART DBD(DB3) PART(PART3) DISABLE
/*
```

デフォルトのカタログ名の代わりに **DBDLIB** を使用する例

```
//CHANGEPART JOB
.
.
.
//IMS      DD   DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN    DD   *
      CHANGE.PART DBD(DBHDK01) PART(PDHDOKE) KEYSTRNG('ABCDEFGHIJKL--
MNOPQRSTUVWXYZ0123456789 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789ABCDEFGHIJ-
KLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789- ABCD--
EFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789') -
      DSNPREFIX(TESTSYS1.PROJECT) -
      BLOCKSIZE(32000,,4000) -
      NOCATALG
/*
```

デフォルトのカタログ名の代わりにカタログ名 **GREGCD00** を使用する例


```
//CHANGEPART JOB
.
.
.
//SYSIN    DD   *
      CHANGE.PART DBD(DBHDK01) PART(PDHDOKE) KEYSTRNG('ABCDEFGHIJKL--
MNOPQRSTUVWXYZ0123456789 ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789ABCDEFGHIJ-
```

```

KLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789- ABCD--
EFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789' ) -
  DSNPREFIX(TESTSYS1.PROJECT) -
BLOCKSIZE(32000,,4000) -
CATALOG(GREGCD00)
/*

```

関連資料:

 HALDB 区画データ・セット初期設定ユーティリティー (DFSUPNT0) (データベース・ユーティリティー)

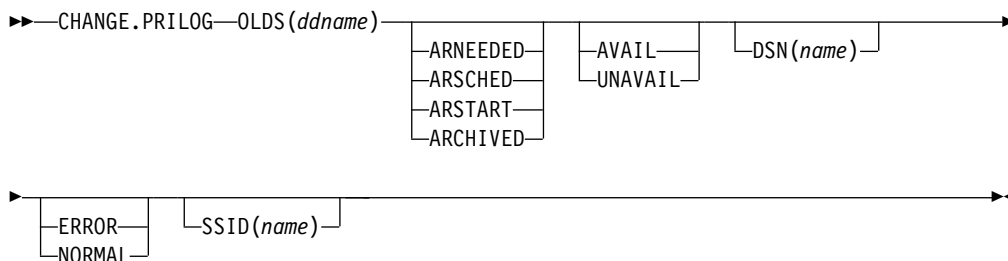
CHANGE.PRILOG OLDS コマンド

CHANGE.PRILOG OLDS コマンドは、RECON データ・セット内の 1 次オンライン・データ・セット (PRIOLDS) に関する情報を変更するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 121 ページの『OLDS の名前変更の例 』

構文



重要: このコマンドでは OLDS キーワードを指定する必要があります。OLDS が指定されていない場合、DBRC はデフォルトで RLDS を処理するため、希望する結果が得られません。

キーワード

OLDS (ddname)

RECON レコードが変更される OLDS を指定するための必須キーワード。

ARNEEDED | ARSCHED | ARSTART | ARCHIVED

互いに排他的なオプション・キーワードであり、OLDS のアーカイブ状況を変更します。OLDS がアーカイブされた後では、アーカイブ状況を変更することはできません。

ARNEEDED

OLDS が IMS によってクローズされていて、アーカイブが必要であることを示します。

ARSCHED

OLDS に対して GENJCL.ARCHIVE コマンドを実行することを表します。

ARSTART

ログ保存ユーティリティーが現在、OLDS をアーカイブ中であることを示します。

ARCHIVED

OLDS がアーカイブされ、再利用可能であることを示します。

AVAIL | UNAVAIL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、PRIOLDS の可用性の表示を変更します。

AVAIL

OLDS に含まれているデータが有効であり、ログ保存ユーティリティーへの入力として使用できることを示します。

UNAVAIL

OLDS に含まれているデータが無効であり、ログ保存ユーティリティーへの入力として使用できないことを示します。

DSN(name)

1 次 OLDS の名前を変更するのに使用するオプション・キーワード。name は 44 文字までです。

ERROR | NORMAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定された PRIOLDS を変更して、エラーを含んでいるかどうかを示します。

ERROR

RECON レコードを変更し、指定された OLDS にエラーが含まれているために、IMS が OLDS を適切に正しくクローズできないことを示すようにします。OLDS は、ログ保存ユーティリティーへの入力として使用する前にクローズしてください。

重複ロギングを使用する場合は、サブシステムは、エラーのない OLDS (すなわち、SECOLDS) を使用して、エラー有りのマークの付いた OLDS はクローズします。

重複ロギングを使用しない場合は、サブシステムは、次の OLDS を使用して、エラー有りとマークの付いた OLDS はクローズします。

NORMAL

前にエラー有りのマークが付いていた PRIOLDS レコードを変更して、データ・セットがいずれのログ・ユーティリティーの入力としても使用可能になったことを示します。OLDS に対して NORMAL を指定すると、レコードは即時に、指定された OLDS をクローズするためには 2 次 OLDS も次の OLDS も必要ないことを示します。

SSID(name)

RECON レコードが変更される OLDS を作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す任意の英数字からなる 8 文字のストリングです。

SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトのサブシステム ID を設定するには、INIT.RECON または

CHANGE.RECON コマンドを使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

OLDS の名前変更の例

この例では、PRIOLDS を作成する IMS オンライン・サブシステム IMSA が OLDS を名前変更します。

```
//CHGPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.PRILOG OLDS(DFSOLP02) -
DSN(IMS.NEWLOG) SSID(IMSA)
/*
```

CHANGE.PRILOG RLDS コマンド

CHANGE.PRILOG RLDS コマンドは、RECON データ・セット内の 1 次 RLDS (または、バッチ・サブシステムが作成した SLDS) に関する情報を変更するために使用します。

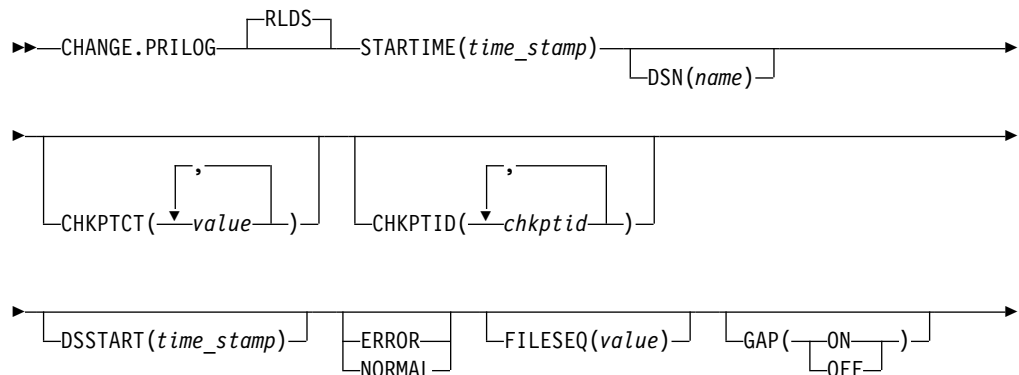
NOTIFY.PRILOG RLDS コマンドを使用して、PRILOG レコードを追加するか、既存の PRILOG レコードにデータ・セット・エントリーを追加します。

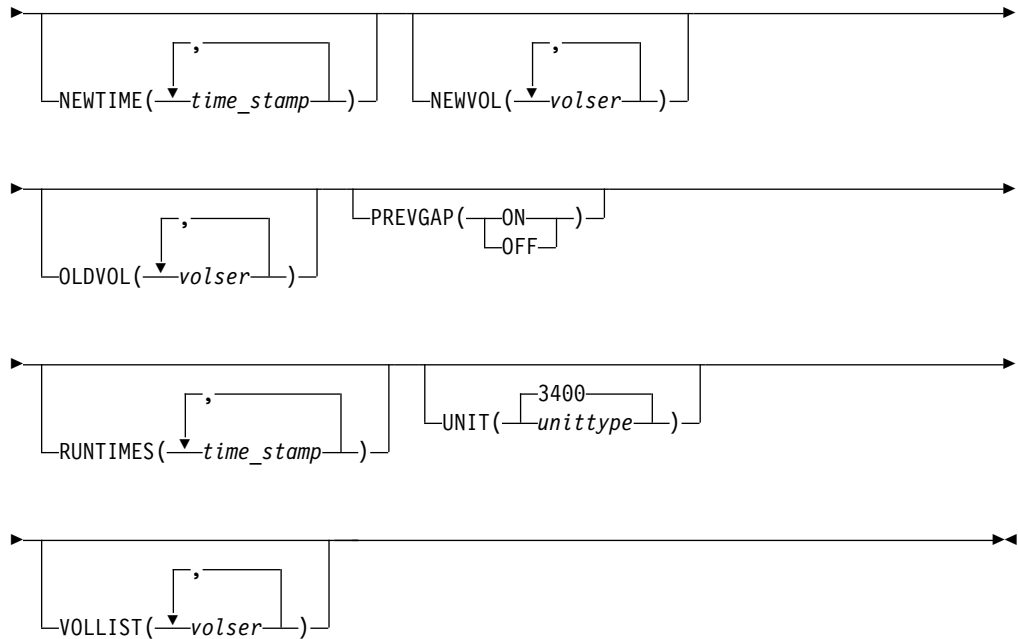
変更できる情報はすべて PRILOG レコードのデータ・セット・エントリー内にあります。CHANGE.PRILOG コマンドを実行するたびに、1 つのデータ・セット・エントリーだけが変更されます。ログに複数データ・セットがある場合は、DSSTART キーワードを使用して、変更するデータ・セット・エントリーを識別する必要があります。

サブセクション:

- 『構文』
- 122 ページの『キーワード』
- 125 ページの『CHANGE.PRILOG RLDS コマンドの使用例』

構文





キーワード

RLDS

PRILOG レコードが変更されることを指定するオプション・キーワード。

STARTIME(*time_stamp*)

変更する PRILOG レコードの開始タイム・スタンプを指定する必須キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN(*name*)

データ・セット名の変更に使用するオプション・キーワード。*name* には 44 文字まで指定することができます。

CHKPTCT(*value*)

データ・セットのそれぞれのボリュームごとに、完了するチェックポイントの数を変更するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL キーワードで指定されたそれぞれのボリュームごとに 1 つの値を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、CHKPTCT の値の数は OLDVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。NEWVOL が指定されると、CHKPTCT の値の数は NEWVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。

CHKPTCT の値は次のとおりです。

- 0 ボリューム上にチェックポイントなし。
- 1 ボリューム上にチェックポイントは 1 つ。
- 2 ボリューム上にチェックポイントは複数。

CHKPTID(*chkptid*)

データ・セットのそれぞれのボリューム上のアクティブ PST の最も古いチェックポイント ID を変更するのに使用するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL にリストされているそれぞれのボリュームごとに 1 つのチ

チェックポイント ID を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、チェックポイント ID の数は OLDVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。NEWVOL が指定されると、チェックポイント ID の数は NEWVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。

チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。時刻値にはゼロを指定することができます。

DSSTART(*time_stamp*)

変更するデータ・セット・エントリーの開始時刻を指定するために使用するオプション・キーワード。DSSTART キーワードは、PRILOG に複数データ・セット・エントリーがある場合には必須ですが、PRILOG にデータ・セット・エントリーが 1 つしかない場合にはオプションです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

ERROR | NORMAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データ・セット・エントリーを、エラーの有無を示すように変更するのに使用します。

ERROR

データ・セットを変更し、それにエラーが含まれているため、DBRC 管理下で実行されるいずれのリカバリー・ユーティリティの入力としても使用すべきでないことを示します。

NORMAL

前に、エラー有りとマークを付けられていたデータ・セットを変更し、いずれのリカバリー・ユーティリティに対しても入力可能になったことを示します。

DBRC は、PRILOG (または SECLOG) レコードから必要なログ・データ・セットを選択します。これらには、RLDS または SLDS エントリー、あるいはその両方を入れることができます。CHANGE.PRILOG RLDS ERROR コマンドを実行すると、対応する SECLOG エントリーがあれば、DBRC は自動的にそれを使用します。SECLOG エントリーがないか、エラー有りとマークが付いている場合は、その時間フレームのログ・データが必要な GENJCL コマンドは失敗します。

FILESEQ(*value*)

ボリュームのファイル・シーケンス番号を指定するためのオプション・キーワード。このキーワードは、VOLLIST キーワードを指定する場合にのみ指定します。可変フィールドに指定する値は 1 から 9999 の 10 進数です。

GAP(ON | OFF)

トラッキング PRILOG レコード内の GAP フラグをセット (ON) またはリセット (OFF) するためのオプション・キーワード。

NEWTIME(*time_stamp*)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。NEWTIME を指定する場合は、OLDVOL と NEWVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWTIME を指定する場合は、NEWVOL に指定したボリューム通し番号の数よりも 1 つ少ないタイム・スタンプを指定する必要があります。NEWVOL に指定された最後のボリュームの停止時刻は、このコマンドでは変更できないからです。タイム・スタンプはいずれも、NEWVOL に指定された対応するボリューム通し番号のボリューム停止時刻として使用されます。これが指定されていないと、新規ボリュームの停止時刻は、最後に指定された古いボリュームの停止時刻と同じになります。

指定するタイム・スタンプはいずれも、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。NEWTIME に指定する最初のタイム・スタンプは、変更されたボリュームの直前のボリュームの停止時刻より大きいか等しくなければなりません。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

NEWVOL (volser)

データ・セットの 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。NEWVOL を指定する場合は、OLDVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWVOL に指定されたボリューム通し番号は、OLDVOL キーワードに指定された対応するボリューム通し番号を置き換えます。NEWVOL および OLDVOL に同じ数のボリューム通し番号を指定する必要はありません。既に PRILOG レコードに存在するものと同じボリューム通し番号を NEWVOL に指定することはできません。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

ボリューム通し番号だけでなく、タイム・スタンプも変更するには、NEWTIME キーワードを使用します。

OLDVOL (volser)

データ・セットの 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。OLDVOL を指定するときは、NEWVOL、CHKPTCT、または CHKPTID のいずれかとも一緒に指定する必要があります。

変更するボリューム通し番号を指定します。OLDVOL に指定されたボリューム通し番号はいずれも PRILOG レコードに含まれているボリューム通し番号と一致していなければなりません。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

PREVGAP (ON | OFF)

トラッキング PRILOG レコードの PREV-GAP フラグをセット (ON) またはリセット (OFF) するオプション・キーワード。

RUNTIMES (time_stamp)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。ログ・ボリュームの停止時刻を変更するには、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL を使用します。RUNTIMES を指定する場合は、VOLLIST も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

RUNTIMES キーワードには、255 個までのタイム・スタンプを指定できます。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

可変フィールドのタイム・スタンプはそれぞれ、VOLLIST キーワードの可変フィールドのボリュームに対応している必要があります。RUNTIMES および VOLLIST キーワードの可変フィールドにはそれぞれ、同数のエントリーが含まれている必要があります。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定されるタイム・スタンプはそれぞれ、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。

RUNTIMES キーワードの可変フィールドの最初のタイム・スタンプは、STARTIME キーワードに指定されたタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定される最後のタイム・スタンプは、変更するレコードに指定された、対応する 1 次 RLDS の停止時刻と同じである必要があります。このコマンドは、1 次 RLDS の停止時刻の変更には使用できません。

UNIT(3400 | *unittype*)

データ・セットが常駐する装置の装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

データ・セットを含む複数のボリュームのボリューム通し番号のレコードを変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。データ・セットに含まれるボリュームのボリューム通し番号を変更するには、新しいキーワード・セット、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL を使用します。

VOLLIST キーワードを指定する場合は、RUNTIMES キーワードも指定する必要があります。この 2 つのキーワードの相互作用については、RUNTIME キーワードの説明を参照してください。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

CHANGE.PRILOG RLDS コマンドの使用例

ここでは、CHANGE.PRILOG RLDS コマンドの使用例をいくつか示します。

ボリューム通し番号の変更例

この例では、いくつかのボリューム通し番号を、単一データ・セットを含むログ用に変更しています。この例では、RECON データ・セット内の PRILOG レコードは 6 個のボリューム (VOL001、VOL002、VOL003、VOL004、VOL005、VOL006) を含み、開始時刻は 07233124329923456 です。3 番目と 4 番目のボリュームの通し番号は、次のコマンドによって変更できます。

```
//CHGPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
```

```
CHANGE.PRILOG RLDS STARTIME(07233124329923456) -  
OLDVOL (VOL003,VOL004) -  
NEWVOL (VOL007,VOL008,VOL009)  
/*
```

1 次 RLDS にエラーのマーク付けを行う例

この例では、ログの 1 つのデータ・セットに、エラーが含まれていることを示すマークを付けます。

```
//CHGPRILG JOB  
:  
//SYSIN DD *  
CHANGE.PRILOG RLDS STARTIME(07054121212023456) -  
DSSTART(07054121212023456) ERROR  
/*
```

関連資料:

400 ページの『NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用)』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

CHANGE.PRILOG SLDS コマンド

CHANGE.PRILOG SLDS コマンドは、RECON データ・セット内のオンライン・システムの 1 次 SLDS に関する情報を変更するために使用します。

バッチ・サブシステムが作成した SLDS に関する情報を変更するには、CHANGE.PRILOG RLDS コマンドを使用します。DBRC は、そのようなデータを RLDS と見なすからです。

PRISLD レコードを追加するか、または既存の PRISLD レコードにデータ・セット・エントリーを追加するには、NOTIFY.PRILOG コマンド (SLDS 用) を使用します。

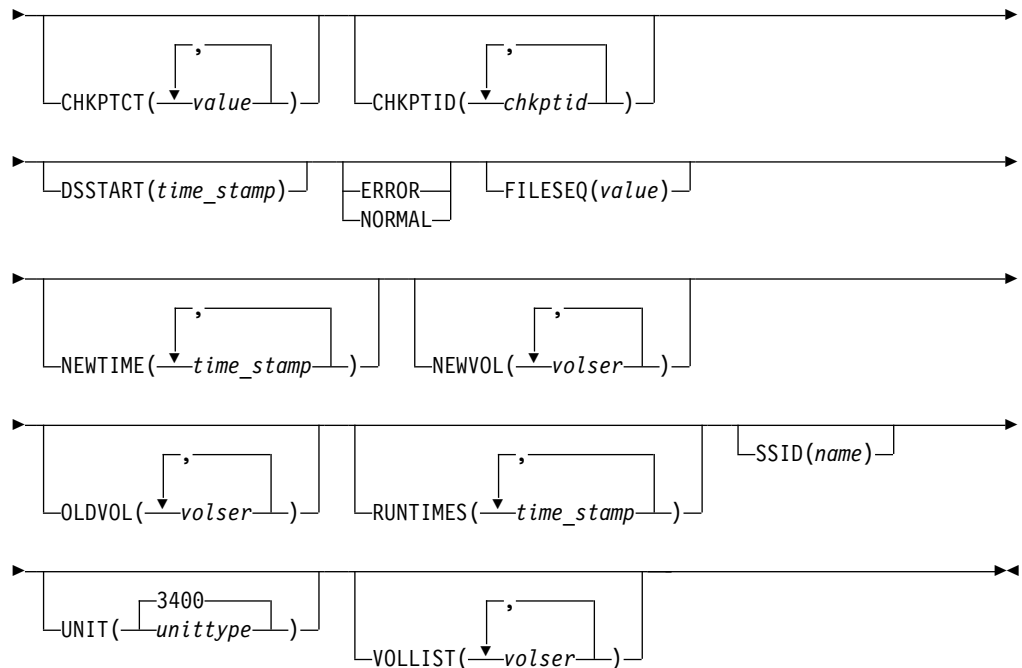
変更できる情報はすべて PRISLD レコードのデータ・セット・エントリー内にあります。CHANGE.PRILOG コマンドを実行するたびに、1 つのデータ・セット・エントリーだけが変更されます。ログに複数データ・セットがある場合は、DSSTART キーワードを使用して、変更するデータ・セット・エントリーを識別する必要があります。

サブセクション:

- 『構文』
- 127 ページの『キーワード』
- 130 ページの『CHANGE.PRILOG SLDS コマンドの使用例』

構文

```
▶▶—CHANGE.PRILOG—SLDS—STARTIME(time_stamp)—  
└──DSN(name)──┘
```



重要: このコマンドでは SLDS キーワードを指定する必要があります。SLDS が指定されていない場合、DBRC はデフォルトで RLDS を処理するため、希望する結果が得られません。

キーワード

以下のキーワードは、CHANGE.PRILOG SLDS コマンドに有効です。

SLDS

PRISLD レコードが変更されることを指定する必須キーワード。

STARTIME(*time_stamp*)

変更する PRISLD レコードの開始タイム・スタンプを指定する必須キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN(*name*)

データ・セット名の変更に使用するオプション・キーワード。*name* には 44 文字まで指定することができます。

CHKPTCT(*value*)

データ・セットのそれぞれのボリュームごとに、完了するチェックポイントの数を変更するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL キーワードで指定されたそれぞれのボリュームごとに 1 つの値を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、CHKPTCT の値の数は OLDVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。NEWVOL が指定されると、CHKPTCT の値の数は NEWVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。

CHKPTCT の値は次のとおりです。

- 0 ボリューム上にチェックポイントなし。
- 1 ボリューム上にチェックポイントは 1 つ。

2 ボリューム上にチェックポイントは複数。

CHKPTID(*chkptid*)

データ・セットのそれぞれのボリューム上のアクティブ PST の最も古いチェックポイント ID を変更するのに使用するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL にリストされているそれぞれのボリュームごとに 1 つのチェックポイント ID を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、チェックポイント ID の数は OLDVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。NEWVOL が指定されると、チェックポイント ID の数は NEWVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。

チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。時刻値にはゼロを指定することができます。

DSSTART(*time_stamp*)

データ・セット・エントリーの変更開始時刻を指定するキーワードです。PRISLD に複数データ・セット・エントリーがある場合、DSSTART キーワードは必須です。このキーワードは、PRISLD にデータ・セット・エントリーが 1 つしかない場合はオプションです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

ERROR | NORMAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データ・セット・エントリーを、エラーの有無を示すように変更するのに使用します。

ERROR

エラーが含まれていることを示すようにデータ・セット・エントリーを変更するために使用するオプション・キーワード。

NORMAL

以前にエラーを含むとしてマークされていたデータ・セット・エントリーについて、現在は正常であることを示すように変更するために使用するオプション・キーワード。

DBRC は、PRILOG (または SECLOG) レコードから必要なログ・データ・セットを選択します。これらには、RLDS または SLDS エントリー、あるいはその両方を入れることができます。CHANGE.PRILOG SLDS ERROR コマンドを実行すると、対応する SECLOG エントリーがあれば、DBRC は自動的にそれを使用します。SECLOG エントリーがないか、エラー有りマークが付いている場合は、その時間フレームのログ・データが必要な GENJCL コマンドは失敗します。

FILESEQ(*value*)

ボリュームのファイル・シーケンス番号を指定するためのオプション・キーワード。このキーワードは、VOLLIST キーワードを指定する場合にのみ指定します。可変フィールドに指定する値は 1 から 9999 の 10 進数です。

NEWTIME(*time_stamp*)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。NEWTIME を指定する場合は、NEWVOL と OLDVOL も指定する必要があります。以下の 2 つのキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL

- RUNTIMES, VOLLIST

NEWTIME を指定する場合は、NEWVOL に指定したボリューム通し番号の数よりも 1 つ少ないタイム・スタンプを指定する必要があります。NEWVOL に指定された最後のボリュームの停止時刻は、このコマンドでは変更できないからです。タイム・スタンプはいずれも、NEWVOL に指定された対応するボリューム通し番号のボリューム停止時刻として使用されます。これが指定されていないと、新規ボリュームの停止時刻は、最後に指定された古いボリュームの停止時刻と同じになります。

指定するタイム・スタンプはいずれも、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。NEWTIME に指定される最初のタイム・スタンプは、前に変更されたボリュームの停止時刻より大きいか等しくなければなりません。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

NEWVOL(volser)

データ・セットの 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。NEWVOL を指定する場合は、OLDVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWVOL に指定されたボリューム通し番号は、OLDVOL キーワードに指定された対応するボリューム通し番号に置き換わります。NEWVOL および OLDVOL に同じ数のボリューム通し番号を指定する必要はありません。既に PRISLD レコードに入っているボリューム通し番号を NEWVOL に指定することはできません。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

ボリューム通し番号だけでなく、タイム・スタンプも変更したい場合には、NEWTIME キーワードを使用します。

OLDVOL(volser)

1 次 SLDS の 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。OLDVOL を指定するときは、NEWVOL、CHKPTCT、または CHKPTID のいずれかとも一緒に指定する必要があります。

変更するボリューム通し番号を指定します。指定するボリューム通し番号はいずれも PRISLD レコードに含まれているボリューム通し番号と一致していなければなりません。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

RUNTIMES(time_stamp)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。ログ・ボリュームの停止時刻を変更するには、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL キーワードを使用します。RUNTIMES を指定する場合は、VOLLIST も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

RUNTIMES キーワードには、255 個までのタイム・スタンプを指定できます。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

可変フィールドのタイム・スタンプはそれぞれ、VOLLIST キーワードの可変フィールドのボリュームに対応している必要があります。RUNTIMES および VOLLIST キーワードの可変フィールドにはそれぞれ、同数のエントリーが含まれている必要があります。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定されるタイム・スタンプはそれぞれ、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。

RUNTIMES キーワードの可変フィールドの最初のタイム・スタンプは、STARTIME キーワードに指定されたタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定される最後のタイム・スタンプは、変更するレコードに指定された、対応する 1 次 SLDS の停止時刻と同じである必要があります。このコマンドは、1 次 SLDS の停止時刻の変更には使用できません。

SSID(name)

RECON レコードが変更される SLDS を作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す任意の英数字からなる 8 桁の文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトのサブシステム ID を設定するには、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

UNIT(3400 | unittype)

データ・セットが常駐する装置の装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(volser)

データ・セットを含む複数のボリュームのボリューム通し番号のレコードを変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。データ・セットに含まれるボリュームのボリューム通し番号を変更するには、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL キーワードを使用します。

VOLLIST キーワードを指定する場合は、RUNTIMES キーワードも指定する必要があります。これらの 2 つのキーワードの相互作用については、上記 RUNTIME キーワードの説明を参照してください。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

CHANGE.PRILOG SLDS コマンドの使用例

ここでは、CHANGE.PRILOG SLDS コマンドの使用例をいくつか示します。

ボリューム通し番号および停止時刻の変更例

この例では、単一のデータ・セットを含むログの複数のボリューム通し番号とボリューム停止時刻が変更されています。この例の RECON データ・セット内の PRISLD レコードは、開始時刻が 07233124329923456 で、6 個のボリューム (VOL001、VOL002、VOL003、VOL004、VOL005、VOL006) を含んでいます。4 番目のボリュームが新規ボリューム VOL007 と VOL008 にコピーされ、VOL007 の新しいボリューム停止時刻は 07233124832523456 になります。PRISLD レコードは次のコマンドで更新できます。

```
//CHGPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.PRILOG SLDS STARTIME(07233124329923456) -
               OLDVOL (VOL004)             -
               NEWVOL (VOL007,VOL008)      -
               NEWTIME(07233124832523456)
/*
```

1 次 SLDS に正常のマークを付ける例

この例では、1 次 SLDS の最初のデータ・セットが正常とマーク付けされます。

```
//CHGPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.PRILOG SLDS STARTIME(07054121212023456) -
               DSSTART(07054121212023456) NORMAL
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

CHANGE.RECON コマンド

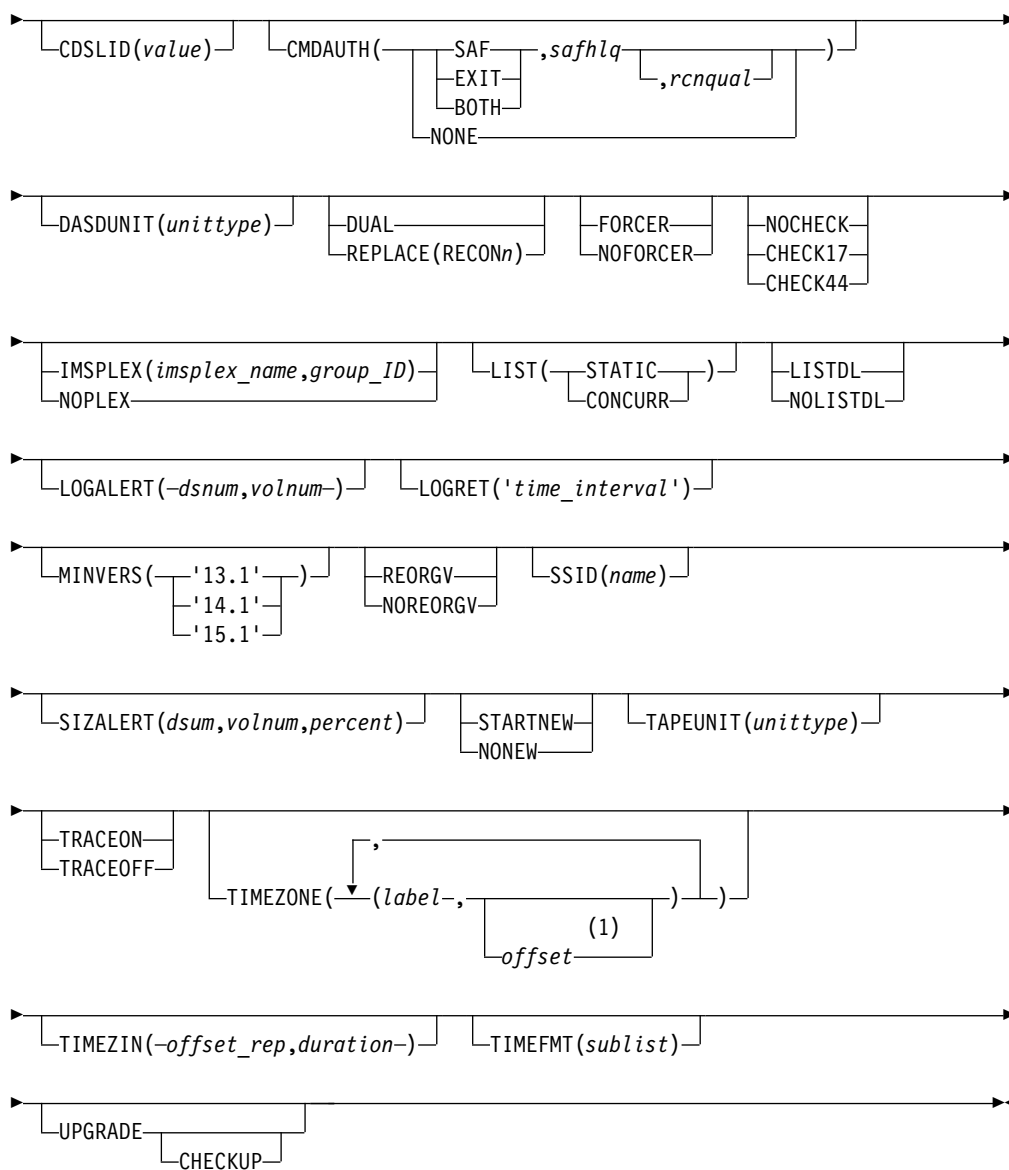
CHANGE.RECON コマンドは、RECON 状況レコード内のオプションを更新するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 132 ページの『キーワード』
- 147 ページの『使用上の注意』
- 148 ページの『RECON ヘッダー・レコードの更新例』

構文

```
▶▶ CHANGE.RECON [ACCESS( [SERIAL] )] [CATALOG (name)] [CATDS]
                  [PARALLEL] [NOCATALOG] [NOCATDS]
```



注:

- 1 エントリーを削除するためには、TIMEZONE キーワードの *offset* サブパラメーターを省略する必要があります。

キーワード

ACCESS(SERIAL | PARALLEL)

シリアルまたは並列 RECON アクセスを指定するために使用するオプション・キーワード。

ACCESS キーワードを指定する場合は、SERIAL または PARALLEL を指定する必要があります。

SERIAL

シリアル・モードで RECON データ・セットにアクセスすることを指定します。一度に 1 つだけの DBRC 要求を処理できます。RECON データ・

セットへのアクセスは、ハードウェア予約またはグローバル・リソースの逐次化 (GRS) を使用して、データ・セット・レベルでシリアライズされます。

PARALLEL

並列 RECON アクセスを使用すると、複数の IMS システムおよびバッチ/ユーティリティー・ジョブからの DBRC 要求を並行して処理できます。RECON データ・セットは、Transactional VSAM モードでアクセスされます。アクセスは、カップリング・ファシリティのロッキングを使用して、VSAM レコード・レベルでシリアライズされます。

並列 RECON アクセスを使用するには、以下の条件が満たされていることが必要です。

- 3 つの RECON データ・セットのすべてが使用可能である。2 つのアクティブな RECON データ・セット (COPY1 および COPY2) と、1 つのスベア (または廃棄) RECON データ・セットが必要です。
- RECON データ・セットが IMSplex と関連付けられている。

ACCESS キーワードで、RECON データ・セットに現在設定されているアクセス・モードを指定した場合、コマンドは戻りコードを 4 に設定します。

制約事項: IMSPLEX()|NOPLEX キーワードを変更しているときに、その同じコマンドで ACCESS(SERIAL|PARALLEL) キーワードを変更することはできません。

CATALOG | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、以下のコマンドの実行時に DBRC が IMS カタログと DBDLIB データ・セットのどちらからデータベース定義を取り出すかを示すために使用します。

CHANGE.DBDS

CHANGE.PART

HALDB の場合のみ、INIT.DB

INIT.DBDS

INIT.PART

NOTIFY.REORG

データベース定義言語 (DDL) を使用して定義されたデータベースの場合、DBRC は IMS カタログにアクセスする必要があります。

CATALOG(*name*)

IMS カタログを使用することを指定します。

name は、RECON データ・セット内に登録されている HALDB データベースを識別する 8 文字の英数字ストリングです。8 文字未満のすべてのカタログ名には、ブランクが埋め込まれます。

カタログ名は、CHANGE.RECON コマンドの実行時に検証されます。

NOCATALG

DBDLIB データ・セットを使用することを指定します。

CATDS | NOCATDS

互いに排他的なオプション・キーワードであり、イメージ・コピー・データ・セット、変更累積データ・セット、およびログ・データ・セットがカタログされているかどうかの状況を変更します。

CATDS

これらのデータ・セットがカタログされていること、または SMS によって管理されていることを指定します。

DBRC は、データ・セットのボリューム通し番号およびファイル・シーケンス番号を検査しません。

CATDS オプションを有効にするためには、データ・セットをカタログしておき、そのデータ・セットの VOLSER 情報を JCL から除外しておく必要があります。データ・セットがカタログされている場合に、CATDS が指定され、VOLSER 情報が JCL に含まれていると、DBRC は CATDS を無視し、JCL に従ってデータ・セットを割り振ります。また、通常の VOLSER およびファイル・シーケンス検査が実行されます。

データ・セットがカタログされていない場合は、CATDS は有効でなく、DBRC は VOLSER およびファイルのシーケンスを検査し、JCL に従ってデータ・セットを割り振ります。

ログ・データ・セットが SMS で管理されている場合、CATDS オプションを選択し、基幹 JCL メンバー CAJCL から %LOGVOL キーワードを削除します。

重要: CATDS オプションは、SLDS データ・セットからの IMS の再始動に影響します。CATDS オプションは、SLDS がカタログ管理システムの制御下にあることを示しているため、データ・セット割り振りのために IMS に VOLSER が戻されることはありません。SLDS データ・セットがカタログされていないと、IMS の再始動は失敗します。

NOCATDS

これらのデータ・セットは、カタログ状況に関係なく、カタログされているものとして扱われないことを指定します。

DBRC は、データ・セット名を検査し、JCL で指定されたボリューム通し番号およびファイル・シーケンス番号が、RECON データ・セットに記録されている情報と同じであるかどうかを検査します。

CDSLID(*value*)

RECON データ・セット内でクロス DBRC サービス・レベル ID を設定するのに使用するオプション・キーワード。このサービス・レベル ID は、与えられた値に対応するメンテナンスが、この RECON データ・セットにアクセスするあらゆるシステムに対して適用されたことを意味します。

そのメンテナンスを有効にする前に、同じ RECON データ・セットにアクセスするすべてのシステムに対してメンテナンスを適用する必要がある場合もあります。++HOLD カードがメンテナンスに関連付けられている場合、CHANGE.RECON CDSLID() コマンドを発行する必要があることを示します。

このコマンドを使用することで、メンテナンスがすべてのシステムに適用された後に、そのメンテナンスによって提供される機能が使用可能になります。コマンドに指定する値は、++HOLD カードに示されています。

クロス DBRC サービス・レベル ID が設定された後、設定された値以下の各サービス・レベル ID に関連付けられているメンテナンスがすべてアクティブ化されます。いくつかのメンテナンスを使用可能にした後に、システムがメンテナンスの適用をまだ行っていないことが検出された場合、使用可能にされた機能を非アクティブ化するには、使用可能化サービス・レベル ID より小さい値を指定します。例えば、RECON データ・セットでサービス・レベル ID 5 が設定されている場合、CHANGE.RECON CDSLID(3) コマンドを発行することで、ID 4 および 5 に関連付けられている機能が非アクティブ化されます。

CMDAUTH()

DBRC コマンド許可を実行するかどうかを指定するオプション・キーワード。

このキーワードを指定すると、指定されたコマンド許可設定値を用いてコマンド許可が実行されます。ただし、コマンド許可をオフにする (NONE を指定する) には、現行のコマンド許可設定値のもとで認可されなければなりません。

SAF | EXIT | BOTH | NONE

互いに排他的なサブパラメーターで、DBRC 許可オプションを指定するために使用します。

SAF

コマンド許可のためにセキュリティー・プロダクトを呼び出すことを指定します。

EXIT

コマンド許可のために DBRC コマンド許可出口 (DSPDCAX0) を呼び出すことを指定します。

BOTH

コマンド許可のために、セキュリティー・プロダクトと DBRC コマンド許可出口 (DSPDCAX0) を呼び出すことを指定します。セキュリティー・プロダクトが先に、その後 DSPDCAX0 が呼び出されます。

NONE

コマンド許可をスキップすることを指定します。

safhlq

コマンド許可を定義するために z/OS System Authorization Facility (SAF) 製品 (RACF) に対して定義されるリソース名の高位修飾子。この *safhlq* を SAF、EXIT、または BOTH と一緒に指定する必要があります。 *safhlq* は、8 文字までの英数字の名前です。

注: 単に高位修飾子を変更する場合は、この新しい *safhlq* と一緒に現行のコマンド許可オプションを指定します。このコマンドを入力する前に、この新しい修飾子をもつプロファイルが存在していなければなりません。新規のプロファイルを作成するか、古いプロファイルの名前を変更してください。

rcnqual

RECON データ・セット内のストリング値を設定または変更するために使用するオプション・パラメーター。このストリング値は、RECON に対する DBRC コマンド処理で、データ・セットがコピーであるかどうか、およびコマンド許可を実行する必要があるかどうかを判別するために使用されます。 *rcnqual* パラメーターは、SAF、EXIT、または BOTH とのみ指定できます。

rcnqual 値を設定または変更する場合、ストリングを RECON COPY1 データ・セット名のサブストリングにして、実動 RECON データ・セットに対するセキュリティーが不注意で無効に設定されないようにする必要があります。*rcnqual* の最後にアスタリスク (*) を使用し、引用符で囲んで指定する場合、RECON COPY1 データ・セット名は *rcnqual* で始める必要があります。そうしないと、DBRC コマンド許可は実行されません。

コマンド許可を実行するには、*rcnqual* は、RECON COPY1 データ・セット名のサブストリングである必要があります。理想的には、3 つすべての RECON データ・セット名に共通するサブストリングにして、RECON 再構成が実行されたときに問題が生じないようにすべきです。*rcnqual* は、最大 44 文字にすることができます。また、DBRC データ・セットの命名規則に従う必要があります。

DASDUNIT(*unittype*)

ログ・データ・セットのレコードを保持する DASD 装置の装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

DBRC は、DASDUNIT に指定された値を、各種 RECON レコードの装置フィールドに保管します。複数のユーティリティーで、この値が出力装置タイプのデフォルト値として使用されます。

DUAL | REPLACE(RECON_n)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、二重モードを再確立するか、あるいはアクティブ RECON データ・セットをスペアの RECON データ・セットで置き換えます。

DUAL

DBRC が二重 RECON モードになるようにします。DBRC が既に 2 つの RECON データ・セットを使用している場合は、この DUAL キーワードは無視されます。DBRC が使用している RECON データ・セットが 1 つである場合は、スペアの RECON データ・セットを使用しようとしています。スペアの RECON データ・セットが使用可能でない場合は、二重モードにはなりません。ただし、他のオプション・キーワードは処理されます。

DBRC を二重 RECON モードにするために DUAL キーワードを使用する必要はありません。例えば、RECON データ・セットで永続的な入出力エラーが起きた結果、DBRC が 1 つの RECON データ・セットだけを使用するように制限される場合、スペアの RECON データ・セットがあることが認識されるとただちに、自動的に二重 RECON モードが再開されます。ただし、DBRC をログ制御専用で使用しているインストール・システムでは、DBRC が新しく作成されたスペアの RECON データ・セットを認識する前に、再開することがあります。DUAL キーワードを指定した CHANGE.RECON コマンドを使用すると、DBRC は即時に二重 RECON モードになります。

REPLACE

DBRC がアクティブの RECON データ・セットをスペア RECON データ・セットで置き換えるようにします。このキーワードを指定すると、オンラインで RECON データ・セットを再編成することができます。

RECON n には、置き換えるべき RECON データ・セットの DD ステートメントを指定します。 n には、1、2、または 3 を指定できます。非アクティブ RECON データ・セットを指定したり、使用可能なスペア RECON データ・セットがない場合は、置換は行われません。ただし、このコマンドで指定された他のオプション・キーワードは実行されます。

FORCER | NOFORCER

互いに排他的なオプション・キーワードであり、すべてのデータベースを RECON データ・セットに登録する必要があるかどうかを指定します。

FORCER

すべてのデータベースを RECON データ・セットに登録すべきであることを指定します。ジョブが未登録のデータベースにアクセスしようとする、IMS から DBRC へのデータベース許可呼び出しが失敗します。

NOFORCER

データベースを RECON データ・セットに登録する必要はないことを指定します。

DBRC は、初期設定の際にこのキーワードを検査し、サブシステムが実行している間はこれは有効のままになっています。制御領域がアクティブであるときにこのキーワードを変更すると、RECON データ・セットのリストにその変更が示されますが、再始動または初期設定が行われるまで、変更は有効になりません。

NOCHECK | CHECK17 | CHECK44

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBRC が行う、ログ・データ・セット名の比較のタイプを変更します。

NOCHECK

DBRC への入力として指定するデータ・セット名が新規の高位修飾子を持ち、長さが 17 文字を超えることを指定します。NOCHECK を指定すると、DBRC は、RECON データ・セットに登録されているログ・データ・セット名とそれに該当する DD ステートメントに指定された名前の比較を行いません。

CHECK17

ログ・データ・セット名の最後の 17 文字が RECON データ・セットと一致するかどうかを検査します。RECON データ・セット内の名前が該当する DD ステートメントに指定された名前と一致しないと、ユーティリティーは停止します。

CHECK44

44 文字のログ・データ・セット名が RECON データ・セットと一致するかどうかを検査します。RECON データ・セット内の名前が該当するログ DD ステートメントに指定された名前と一致しないと、ユーティリティーは停止します。

IMSPLEX(*imsplex_name*, *group_ID*) | NOPLEX

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON データ・セットに関連付けられた IMSplex 名および DBRC グループ ID を変更するために使用します。

このコマンドの処理時には、SCI に登録されている他の DBRC インスタンスは RECON データ・セットにアクセスできません。このコマンドを処理する DBRC インスタンスは、RECON データ・セットに現在保管されている IMSplex 名を使用しなければなりません。

RECON データ・セット内の IMSplex 名を変更するのは、ユーザーの SCI 登録出口 DSPSCIX0 が新規の IMSplex 名を戻すように変更するときだけです。

同じ IMSplex 内で使用されている異なる RECON データ・セットを一意的に識別するために、DBRC グループ ID を使用できます。並列 RECON アクセスを使用する場合、同じ IMSplex 内の各 RECON は固有のグループ ID を持っていなければなりません。

制約事項:

- CHANGE.RECON IMSPLEX および CHANGE.RECON NOPLEX を実行できるのは、バッチ・コマンド・ユーティリティーからだけです。これらのコマンドをオンライン IMS から実行することはできません。
- CHANGE.RECON IMSPLEX コマンドと CHANGE.RECON NOPLEX コマンドは、/RMxxx コマンドとして発行することはできません。これらのコマンドは、データベース・リカバリー管理ユーティリティーにバッチ・コマンドとして組み込むか、FUNC=COMMAND DBRC API 要求に組み込むことにより発行できます。
- IMSPLEX()|NOPLEX キーワードを変更しているときに、その同じコマンドで ACCESS(SERIAL|PARALLEL) キーワードを変更することはできません。
- RECON データ・セットの現行のアクセス・モードが並列である場合、CHANGE.RECON NOPLEX は許可されません。

IMSPLEX(*imsplex_name*, *group_ID*)

新規の IMSplex 名を指定します。IMSplex 名は、5 文字までの英数字です。

imsplex_name

imsplex_name は、5 文字までの英数字を指定できます。

group_ID

group_ID は、3 文字までの英数字を指定できます。*group_ID* を指定する場合は、*imsplex_name* を指定する必要があります。*group_ID* が指定されず、既に設定されている値が何もない場合、グループ ID は '001' に設定されます。

NOPLEX

IMSplex 名を RECON データ・セットに関連づけないことを指定します。

このキーワードにはデフォルトがありません。どちらも指定しないと、現行の設定は変更されません。

注: DSPSCIX0 が見つからないと、DBRC はサンプル出口が使用されている場合と同じように動作します。したがって、IMSPLEX キーワードが使用されない場合は、DBRC は RECON 損失の自動通知 (Automatic Loss Notification) が非アクティブであると想定します。IMSPLEX キーワードが使用されたときは、DBRC はその値を SCI による登録に使用します。

LIST(STATIC | CONCURR)

LIST.xxx コマンドのデフォルトを STATIC または CONCURR に設定するためのオプション・キーワード。

STATIC

RECON データ・セットが並列アクセス・モードにあり、STATIC または CONCURR キーワードが指定されていない LIST コマンドを処理する場合、リスト処理のデフォルトは STATIC であることを指定します。

CONCURR

RECON データ・セットが並列アクセス・モードにあり、STATIC または CONCURR キーワードが指定されていない LIST コマンドを処理する場合、リスト処理のデフォルトは CONCURR であることを指定します。

推奨事項: STATIC オプションを指定した一部の LIST コマンドでは混乱が生じる可能性があるため、CONCURR をデフォルトとして設定してください。その上で、例えば問題の解決を試みるなど、特定のコマンドで STATIC を指定することができます。(CHANGE.RECON コマンドまたは INIT.RECON コマンドで明示的に設定されていない場合、デフォルトは CONCURR ではなく STATIC です。これは単に、シリアル RECON アクセスを使用した LIST コマンド処理で生成されるものは STATIC であるという理由からです。)

LISTDL | NOLISTDL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON から削除される (DELETE.LOG コマンドまたはアーカイブ・ジョブによるログの圧縮によって) データ・セット名をジョブ出力にリストするかどうかを指定します。このコマンドで指定された設定値は、DELETE.LOG コマンドによってオーバーライドすることができます。アーカイブ・ジョブの中では、ログ圧縮の設定値をオーバーライドする方法はありません。

LISTDL

削除されたデータ・セット名をジョブ出力にリストすることを指定します。

NOLISTDL

削除されたデータ・セット名をジョブ出力にリストしないことを指定します。

このキーワードにはデフォルトがありません。どちらも指定しないと、現行の設定は変更されません。

LOGALERT(*dsnum, volnum*)

DSP0287W メッセージを出すトリガーとなるしきい値を定義するためのオプション・キーワード。メッセージ DSP0287W が表示されるのは、PRILOG レコード・サイズが最大レコード・サイズの 16M を超えたために、オンライン IMS サブシステムが異常終了する前に、それをシャットダウンするだけの時間があるときです。

PRILOG レコードのサイズは最大 16 MB まで許容されるため、LOGALERT を使用する必要は事実上なくなりました。

dsnum, volnum

これらの値は PRILOG 関連レコードに対してのみ適用されます。次の条件が両方とも満たされたときに、メッセージが出されます。

- 新規 OLDS データ・セットがオープンされる。

- 現在、アーカイブが必要なすべての OLDS (新規も含めて) を正常にアーカイブするためのスペースが PRILOG レコードには無くなっており、かつ、各 OLDS が *volnum* のボリュームを使用する場合は *dsnum* のスペースも無くなっている。

入力する値は、サブシステムが通常 OLDS を満たす速度についての知識に基づいて、オンライン IMS サブシステムの通常シャットダウンを実行するための十分な時間を計算に入れる必要があります。

すべての値を指定する必要があります。いずれの位置のゼロ (0) も RECON レコードに既にある値を変更しないことを意味します。

新規 RECON または前のリリースからアップグレードされた RECON のデフォルト値は (3,16) で、INIT.RECON コマンドの処理の際に設定されます。

LOGRET(*time_interval*)

ログ・データ・セットの保存期間を変更するためのオプション・キーワード。

定義：

- 保存期間 とは、ログのオープン後、非アクティブになるまでの最小時間です。(それ以降は削除対象として適格になります。)
- *time_interval* は日時の代わりに時間間隔を表す、部分に分割されたタイム・スタンプ (日数、時間、分、秒、10 分の 1 秒)。このコマンドのタイム・スタンプは、年のサブパラメーター・エレメントが省略されていること以外は、標準フォーマットのタイム・スタンプに従います。有効な間隔は、10 分の 1 秒から 365 日までです。

時間間隔はタイム・スタンプとして扱われるため、不適切な値に対してはメッセージ DSP1048I が出されることがあります。有効な時間間隔の例は、次のとおりです。

```
LOGRET(365)
LOGRET('030 12.00')
LOGRET('000 00:00:08.0')
LOGRET('000 00,00,00,1')
```

次の例は、同じタイム・スタンプの指定を 2 つの異なるフォーマットで示しています。両方とも有効です。

```
LOGRET(030)          LOGRET('030')          = 30 days
LOGRET('010 12,30') LOGRET('010 12:30') x= 10 days, 12 hours, 30 minutes
```

非アクティブ・ログに関する情報、およびログ保存期間やその他の条件を使用して非アクティブ・ログを判別する方法については、DELETE.LOG (RLDS および SLDS 用) コマンドのものと INACTIVE キーワードを参照してください。

推奨事項: 必ず適切なログ保存期間を指定し、ログ情報が十分に長い期間にわたって RECON データ・セットに保持されるようにしてください。一定の IMS 機能は RECON データ・セット内のログ情報に依存しており、情報が早く削除されすぎると、これらの機能が失敗に終わることがあります。例えば、以下の機能の 1 つ以上が失敗に終わる可能性があります。

- 動的バックアウト
- バッチ・メッセージ処理 (BMP) の拡張再始動 (XRST)
- 作業単位テーブル項目 (UOWE) の再同期

MINVERS('13.1' | '14.1' | '15.1')

RECON データ・セットへのアクセスを許可する IMS の最小バージョンを指定するオプション・キーワード。低いバージョンの IMS を持つサブシステムが現在 DBRC にサインオンしている場合は、このキーワードをそれより高い IMS リリースに設定することはできません。

すべてのタイム・スタンプ形式の精度は、マイクロ秒に設定されます。

MINVERS キーワードのフォーマットには、ピリオドが含まれます。DBRC では、これが特殊文字とみなされるので、値を単一引用符で囲む必要があります。

要件:

- 順次従属 (SDEP) セグメントのある DEDB エリアに対して ALTERAREA 関数を使用して、DEDB 変更ユーティリティを実行するには、MINVERS 値が 14.1 であることが必要です。
- HALDB データベースが最大 8 ギガバイトのデータを OSAM PHDAM または PHIDAM のデータベース・データ・セット内に格納できることを指定するには、MINVERS 値が 14.1 であるか、または 13.1 で CDSLID 値が 2 であることが必要です。HALDB データベースが 8 GB OSAM データ・セットを使用して定義されており、CDSLID 値が 2 より小さい場合は、MINVERS を「13.1」にすることはできません。CDSLID 値 2 は、8 GB OSAM データ・セットのサポートを使用可能にする SPE APAR が、RECON データ・セットにアクセスするすべての IMS バージョン 13 常駐ライブラリーに適用されていることを示します。

REORGV | NOREORGV

同時には使用できません。HALDB 区画再編成番号の妥当性検査を変更するために使用するオプション・パラメーター。データベースが現在、別のサブシステムに対して許可されているときには、CHANGE コマンドにこのパラメーターを指定することができます。

REORGV

HALDB 区画再編成番号の妥当性検査を有効にすることを指定します。

RECON は、区画ごとに再編成番号を格納することによって、再編成番号が逆行しないようにします。CHANGE.RECON REORGV コマンドが発行された後、各区画レコード内の区画再編成番号はゼロに設定されます。

NOREORGV

HALDB 区画再編成番号の妥当性検査を使用不可にすることを指定します。再編成番号を格納、更新、または検査するためのいかなる要求も、無視されます。

SSID(*name*)

以下のコマンドのサブシステム ID として使用される IMS サブシステム名を変更するオプション・キーワード。

- CHANGE.PRILOG
- CHANGE.SECLOG
- DELETE.LOG
- GENJCL.ARCHIVE
- GENJCL.CLOSE

- NOTIFY.PRILOG
- NOTIFY.SECLOG

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名から成る任意の英数字の 8 桁の文字ストリングです。

SIZALERT(dsnum,volnum,percent)

レコードが異常に大きくなっていることを警告するメッセージのトリガーとなるしきい値を定義するオプション・キーワード。SIZALERT に指定する 10 進数のしきい値は次のとおりです。

dsnum,volnum

これらの値は PRILOG 関連レコードに対してのみ適用されます。次の条件が両方とも満たされたときに、メッセージ DSP0387W が出されます。

- 新規 OLDS データ・セットをオープンしている。
- 新規 OLDS も含め、現在オープンされているすべての OLDS がアーカイブされていて、レコード内に *volnum* ボリュームのそれぞれの *dsnum* データ・セット・エントリー用のスペースがもうなくなるか、またはレコード・サイズが最大レコード・サイズの 16 MB の *percent* % を超えようとしている。

PRILOG レコードのサイズは最大 16 MB まで許容されるため、*dsnum* と *volnum* を使用する必要は事実上なくなりました。

percent

この値はすべてのレコードに適用されます。レコードが最大 16 MB のレコード・サイズの *percent* パーセントを超過すると、しきい値に到達します。

STARTNEW | NONEW

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON データ・セットが 1 つしかない場合に新しいジョブを開始するかどうかを指定します。

STARTNEW

新規ジョブを開始することを指定します。並列 RECON アクセスが使用可能な場合、別の DBRC インスタンスが 2 つのアクティブな RECON データ・セットを使用して実行されているときには、単一の使用可能な RECON データ・セットを使用して新規ジョブを開始することはできません。

NONEW

新規ジョブを開始しないことを指定します。

TAPEUNIT(unttype)

ログ・データ・セットのレコードを保持する磁気テープ装置の装置タイプを変更するために使用するオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

DBRC は、TAPEUNIT に指定された値を、各種 RECON レコードの装置フィールドに保管します。複数のユーティリティーで、この値が出力装置タイプのデフォルト値として使用されます。

TRACEON | TRACEOFF

互いに排他的なオプション・キーワードであり、外部トレースを開始するか停止するかを指定します。

注: バッチ・ジョブで CHANGE.RECON コマンドを発行した場合、RECON ヘッダー・レコードは、要求した状況 (TRACEON または TRACEOFF) を示すように変更されますが、実際の TRACE 状況は、どのアクティブな IMS システムについても変更されません。

制御領域内でコマンドとして CHANGE.RECON コマンドを発行した場合 (/RMCHANGE DBRC='RECON TRACEON | TRACEOFF'), トレース状況と RECON ヘッダー・レコードは、その制御領域について要求した状況 (TRACEON または TRACEOFF) を示すように変更されます。しかし、実際の TRACE 状況は、それ以外のどのアクティブな IMS システム (バッチまたはオンライン) についても変更されません。

TRACEON

外部トレースを開始します。このキーワードを指定する場合は、USR タイプのレコードに対して、指定済みの汎用トレース機能 (GTF) をアクティブにしておく必要があります。

TRACEOFF

外部トレースを停止します。このキーワードを指定すると、DBRC は、内部トレースしか行いません。

TIMEZONE((*label,offset*),(*label,offset*))

時間帯ラベル表を変更するオプション・キーワード。このキーワードは、1 つ以上のシンボリック時間帯ラベルを定義するのに使用します。ほとんどのユーザーにとって、数値オフセットを時間帯に関連付けるのは容易ではないため、TIMEZONE には、-8 のような数値オフセットの代わりに、PST (太平洋標準時) のようなシンボリック・ラベルを定義することができます。

時間帯ラベル表には 32 個までのエントリーを入れることができます。各エントリーは、ラベルとオフセットで構成されています。

label

最大 5 文字までの英数字で、先頭は英字でなければなりません。小文字は大文字に変換されます。

offset

± [h]h[:mm] のフォーマットの符号付き 10 進数で、有効なタイム・スタンプのオフセットとしての要件を満たしています。オフセットは、UTC に付加されて地方時を提供する値です。例えば、PST (太平洋標準時) として使用する値は -8 であり、JST (日本標準時) は +9 になります。

保管されたリストのエントリーの追加、置換、および削除は次のようにサポートされます。

- 追加。保管されている表に対するエントリーの追加は、入力リスト・エントリーに RECON データ・セット内に存在しないラベルと有効なオフセット値の両方が含まれている場合に行われる。
- 置換。保管されている表のエントリーの置換は、入力エントリーに、表内の既存ラベルと一致するラベルと有効なオフセット値の両方が含まれている場合に行われる。

- 削除。保管されている表のエントリーの削除は、入力エントリーが、表内の既存ラベルと一致するラベルであり、オフセット値が指定されていない場合に行われる。オフセットを省略し、表内でラベルが見つからない場合は、表は変更されません。

表に含まれるラベルは固有でなければなりません。

タイム・ゾーン・ラベル表の管理のための提案: DBRC は、タイム・スタンプを出力するときは常に、表の中の最初のオカレンスを使用するので、複数のラベルが同じオフセットを指定することは許されません。

ラベル・フォーマットの実際の使用は、IMS インストールの有効範囲に影響されます。単一時間帯だけで操作される場合は、ラベルを使用することによって、オペレーターが 1 年中のすべての時点の UTC との正確なオフセットを知っておく必要はなくなります。複数のタイム・ゾーンで運用される場合は、ラベルでなく、オフセットを使用する方を推奨します (必須ではありません)。夏時間による調整を考慮した場合、あるタイム・ゾーンと次のタイム・ゾーンでオフセットが固有でなければ、ラベル表が実用的でなくなることがあります。夏時間への切り替えが行われているときに表を変更すると、混乱を招くことになりますので、そのような場合には、タイム・ゾーンを超える操作には数値オフセット値を使用してください。

TIMEZIN(*offset_rep* [*,duration*])

後続の DBRC コマンドに関する時間帯情報なしで入力されたタイム・スタンプのデフォルトの時間帯の値を定義するためのオプション・キーワード。

offset_rep

デフォルトの時間帯の値。この値は、以下の選択項目のいずれかです。

%SYS

オフセットを、z/OS CVT 制御ブロック内にある現行オフセットから取得することを指定するために使用されるキーワード。これは DBRC の初期デフォルトです。

label

TIMEZONE キーワードを使用して事前に定義された時間帯ラベル。

offset

前述の TIMEZONE キーワードで定義されているオフセットと同じフォーマットの数値オフセット値。

duration

offset_rep 選択項目の期間を指定します。

TEMP

ラベルまたはオフセットのデフォルトを、そのコマンドが入力されたジョブの実行中のみ有効にすることを表します。

PERM

ラベルまたはオフセットのデフォルトを、同じ RECON データ・セットを使用するのの後続 DBRC コマンドの実行時にも有効にすることを表します。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフ

フォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

UPGRADE

すべての RECON レコードを IMS 15 レベルにアップグレードするために使用するオプション・キーワード。RECON データ・セットを共有している他の IMS サブシステムをシャットダウンする必要はありませんが、サブシステムはコマンドが完了するまで待たされる可能性があります。

制約事項: CHANGE.RECON UPGRADE コマンドは、データベース・リカバリ管理ユーティリティ (DSPURX00) または DBRC アプリケーション・プログラミング・インターフェースを使用して実行できます。このコマンドをオンライン IMS から実行することはできません。

重要: サブシステム・レコードは作成しないが RECON データ・セットにアクセスする、ユーティリティ・プログラム (例えば、DSPURX00) のようなジョブは、適切な IMS 15 SPE が適用されていない IMS リリースを実行している間に RECON データ・セットがアップグレードされることから保護されません。このようなジョブは、次の RECON アクセス時に予測不能の結果になることがあります。CHANGE.RECON UPGRADE コマンドを入力する場合、そのようなジョブがアクティブになっていないことを確認してください。

推奨事項:

- 実動 RECON データ・セットに対して CHANGE.RECON UPGRADE を実行する前に、実動 RECON データ・セットのコピーをアップグレードして、アップグレードが正常に完了することを確認する。CHANGE.RECON UPGRADE CHECKUP コマンドは、実動 RECON データ・セットのコピーや実動 RECON データ・セットに対して実行することもできます。
- RECON データ・セットに多数の CA/CI 分割があると、非常に多数の RECON レコードでサイズが増加し、パフォーマンスが影響を受けます。RECON データ・セットを保守して、不要になっているレコードを削除してください。アップグレード中に RECON データ・セット用のスペースがなくならないように、必ず、2 次エクステントを使用できるようにしてください。RECON のアップグレードは、RECON データ・セットに対するアクティビティが最も少ない時間に行ってください。テストとして実動 RECON のバックアップ・コピーをアップグレードして、ご使用の環境でアップグレードにどのくらいの時間を要するかを判断してください。

CHANGE.RECON UPGRADE コマンドは、まずコピー 1、次にコピー 2 と 2 つのステージを通して RECON データ・セットをアップグレードします。

メッセージ DSP0251I は、最初のステージの開始を知らせます。シリアル・アクセスを使用している RECON データ・セットに対して、このステージ内で障害が起きると、DBRC は RECON データ・セットを再構成して、コピー 1 を破棄します。シリアル・アクセスを使用した最初のステージで障害が発生した場合は、CHANGE.RECON UPGRADE コマンドを再実行する必要があります。並列アクセスを使用している RECON データ・セットに対する最初のステージ内で障害が起きると、DBRC はすべての変更内容をバックアウトし、コマンドは再試行されます。

最初のステージが正常終了すると、メッセージ DSP0252I によって、2 番目のステージの開始が知らされます。このステージ内で何らかの障害が起きると、DBRC は RECON データ・セットを再構築し、コピー 2 を廃棄しますが、2 番目のステージで障害が発生しても、CHANGE.RECON UPGRADE コマンドを再実行する必要はありません。

CHANGE.RECON UPGRADE コマンドは並行モードまたは非並行モードのいずれかで使用できます。このモードは、このコマンドを実行する環境に応じて判断されます。

非並行モード

現在この RECON データ・セットをアクセスしているジョブはありません。

CHANGE.RECON UPGRADE コマンドを実行する前に、アップグレードや RECON リカバリー手順が失敗した場合に備えて、RECON データ・セットのバックアップ・コピーを作成してください。2 つの RECON データ・セットおよびスペアを割り振っていない場合に手順が失敗する可能性があります。

並行モード

現在、他のジョブがこの RECON データ・セットをアクセスしています。それらのジョブは、のいずれかである可能性があり、それぞれの IMS 15 SPE が適用されている必要があります。メッセージ DSP1113A が、適切な共存 SPE を適用していないサブシステムに発行されます。同時アップグレード用に、2 つの RECON データ・セットとスペアを割り当てる必要があります。

CHECKUP

RECON データ・セットおよびレコードの状況を検査して、RECON データ・セットがアップグレード可能な状態であるかどうかを検査するために、UPGRADE キーワードと組み合わせて使用するオプション・キーワード。CHANGE.RECON UPGRADE CHECKUP コマンドの実行の結果として、RECON データ・セット・レコードが変更されることはありません。実動 RECON データ・セットのバックアップ・コピーをアップグレードした後、実動 RECON データ・セットを実際にアップグレードする前に、このコマンドを使用して RECON データ・セットのアップグレードの妨げになるような状態の変更が行われていないことを確認することができます。RECON データ・セットを共用している IMS サブシステムをシャットダウンする必要はありませんが、サブシステムはコマンドが完了するまで待たされる可能性があります。

推奨事項: CHANGE.RECON UPGRADE CHECKUP コマンドは、パフォーマンスに関して発生する可能性があるすべての考慮事項を理解するために、実動 RECON データ・セットに対してコマンドを発行する前に、実動 RECON データ・セットのコピーに対して実行してください。

CHANGE.RECON UPGRADE CHECKUP コマンドが開始されると、メッセージ DSP1238I が出されます。アップグレードを妨げるようなエラーが検出されずにコマンドが正常に完了した場合、メッセージ DSP1239I が出され、戻りコード 0 が設定されます。コマンドが正常に完了し、アップグ

レードを妨げるようなエラーが検出された場合、メッセージ DSP1240E が出力され、戻りコード 12 が設定されます。

検出されたエラーを示す追加メッセージ (DSP1236E や DSP1113A など) が出力されます。

CHANGE.RECON UPGRADE コマンドに CHECKUP キーワードが含まれている場合、RECON データ・セット・レコードはアップグレードされないため、後で RECON データ・セットをアップグレードすると、別の理由で (RECON データ・セット内のスペース不足など) 失敗することがあります。

CHANGE.RECON UPGRADE CHECKUP コマンドは、パフォーマンス上の考慮が必要かどうかを把握するために、実動 RECON データ・セットに対してコマンドを実行する前に、実動 RECON データ・セットのコピーに対して実行する必要があります。

このコマンドに、ほかのキーワードとともに UPGRADE キーワードと CHECKUP キーワードを指定しないでください。CHANGE.RECON UPGRADE CHECKUP コマンドにほかのキーワードが含まれている場合は、UPGRADE キーワードと CHECKUP キーワードが先に処理されます。RECON データ・セットはアップグレードされません。ほかのキーワードが含まれている場合、アップグレードされていない RECON データ・セットを開こうとすると失敗します。

使用上の注意

並列 RECON アクセスが使用される場合、すべての DBRC インスタンスに対する RECON アクティビティが静止されます。RECON データ・セットのコピー 1 またはコピー 2 に関連した保持ロックの存在に関する検査は、RECON アップグレードが呼び出される前に完了しています。何らかの保持ロックがある場合、メッセージ DSP0383A が発行され、RECON のアップグレードは失敗します。

並列 RECON アクセス・モードでは、RECON データ・セットに対する保持ロックが存在する場合、それらのロックを解決する必要があります。SMS サーバー (SMSVSAM) がアクティブであり、すべてのプロセッサ上の Transactional VSAM (TVS) がアクティブであることを確認して、コマンドを再サブミットしてください。

DBRC は、NOTFY.REORG、CHANGE.PART、CHANGE.DBDS、INIT.PART、INIT.DB、および INIT.DBDS の各コマンドの処理中に、DBDLIB 内に格納されているデータベース定義にアクセスします。DBDLIB の代わりに、ディレクトリーが使用可能になっている場合、DBRC は IMS カタログにアクセスする必要があります。これは、ディレクトリーに、DDL を使用して定義されたデータベースのデータベース定義が含まれていない可能性があるからです。

RECON には新しいカタログ名が含まれます。この名前が定義されると、それは DBRC が、データベース定義を参照する必要があるコマンドに対して DBDLIB の代わりにディレクトリーを使用していることを示します。このカタログ名は、CHANGE.RECON コマンドでデフォルトとして設定できます。カタログ名は必須ではありません。カタログ名が存在しない場合、DBRC は引き続き IMS DD に DBDLIB が含まれることを予期します。

RECON ヘッダー・レコードの更新例

ここでは、CHANGE.RECON コマンドの使用例をいくつか示します。

CHANGE.RECON コマンドの例 1

```
//CHGRECON JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.RECON SSID(IMSB) FORCER LOGRET('007')
/*
```

この例では、すべてのデータベースが登録されるように強制し、デフォルト・サブシステム ID を IMSB に変更し、ログ保存期間を 7 日間に変更しています。

CHANGE.RECON コマンドの例 2

```
//CHGRECON JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.RECON CMDAUTH(SAF,SAFHLQ1,IMSTESTS.DSHR)
/*
```

この例では、RECON COPY1 データ・セット名が IMSTESTS.DSHR.RECON1 の場合、DBRC コマンド許可セキュリティは、RECON データ・セットに対する今後のすべてのアクセス試行に対してそのまま実行されます。これは、


「IMSTESTS.DSHR」という *rcnqual* 値が、RECON COPY1 データ・セット名 IMSTESTS.DSHR.RECON1 のサブストリングであるからです。

この RECON データ・セットを、第 2 レベル修飾子名が COPYDSHR であるデータ・セットにコピーすると、DBRC コマンド許可セキュリティは、RECON データ・セットに対する今後のすべてのアクセス試行に対して無効になります。これは、このようなコピーが行われると、RECON COPY1 データ・セット名が IMSTESTS.COPYDSHR.RECON1 に変更され、この名前に「IMSTESTS.DSHR」という *rcnqual* ストリング値が含まれなくなるからです。

CHANGE.RECON コマンドの例 3

```
//CHNGRCON JOB
:
//RECON1 DD DSN=ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON2,DISP=SHR
//SYSIN DD *
CHANGE.RECON CATALOG(DFSCD000)
```

関連概念:

 RECON データ・セットの修復 (システム管理)

関連資料:

188 ページの『DELETE.LOG コマンド (RLDS および SLDS 用)』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

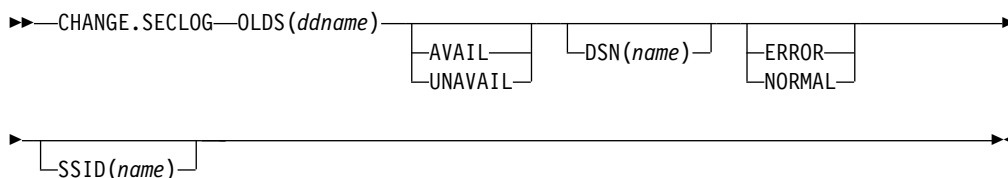
CHANGE.SECLOG OLDS コマンド

CHANGE.SECLOG OLDS コマンドは、RECON データ・セット内の 2 次オンライン・データ・セット (SECOLDS) に関する情報を変更するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 150 ページの『SECOLDS のエラーを示す例』

構文



重要: このコマンドでは OLDS キーワードを指定する必要があります。OLDS が指定されていない場合、DBRC はデフォルトで RLDS を処理するため、希望する結果が得られません。

キーワード

OLDS(ddname)

RECON レコードが変更される OLDS を指定するための必須キーワード。このキーワードの指定に失敗すると、RLDS が変更されることになります。

AVAIL | UNAVAIL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、SECOLDS を変更してその可用性を表示します。

AVAIL

OLDS に含まれているデータが有効であり、ログ保存ユーティリティーへの入力として使用できることを示します。

UNAVAIL

OLDS に含まれているデータが無効であり、ログ保存ユーティリティーへの入力として使用できないことを示します。

DSN(name)

2 次 OLDS の名前を変更するためのオプション・キーワード。可変フィールドに指定する名前は 44 文字までです。

ERROR | NORMAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定された SECOLDS レコードを変更して、エラーの有無を示します。

ERROR

RECON レコードを変更し、指定された OLDS にエラーが含まれているために、IMS が OLDS を適切に正しくクローズできないことを示すようにします。OLDS は、ログ保存ユーティリティーへの入力として使用する前にクローズしておく必要があります。

重複ロギングを使用する場合は、ERROR を使用して、指定した SECOLDS レコードをエラーが含まれていることを示すように変更します。サブシステムは、エラーのない OLDS に入っているデータを使用して、ERROR のマークが付いていた OLDS をクローズします。

NORMAL

前にエラー有りのマークが付いていた SECOLDS レコードを変更し、データ・セットがいずれのログ・ユーティリティーの入力としても使用可能になったことを示します。2 次 OLDS に対して NORMAL を指定すると、レコードは即時に、対応する 1 次 OLDS をクローズするために次の 1 次 OLDS は不要になったことを示します。

SSID(name)

RECON レコードが変更される OLDS を作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を構成する任意の英数字からなる 8 桁の文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。

RECON ヘッダー・レコードにデフォルトのサブシステム ID を設定するには、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

SECOLDS のエラーを示す例

この例では、IMS のオンライン・サブシステム IMSA が作成した SECOLDS にエラーがあることが判明します。

```
//CHGSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.SECLOG OLDS(DFSOLS02) -
               SSID(IMSA) ERROR
/*
```

CHANGE.SECLOG RLDS コマンド

CHANGE.SECLOG RLDS コマンドは、RECON データ・セット内の 1 次 RLDS (または、バッチ・サブシステムが作成した SLDS) に関する情報を変更するために使用します。

NOTIFY.SECLOG コマンド (RLDS 用) は、SECLOG レコードの追加、または既存の SECLOG レコードへのデータ・セット・エントリーの追加に使用します。

変更できる情報はすべて SECLOG レコードのデータ・セット・エントリー内にあります。CHANGE.SECLOG コマンドを実行するたびに、1 つのデータ・セット・エントリーだけが変更されます。ログに複数データ・セットがある場合は、DSSTART キーワードを使用して、変更するデータ・セット・エントリーを識別する必要があります。

サブセクション:

- 151 ページの『構文』

- 『キーワード』
- 154 ページの『CHANGE.SECLOG RLDS コマンドの使用例』

構文



キーワード

RLDS

SECLOG レコードが変更されることを指定するためのキーワード。RLDS はデフォルトのため、CHANGE.SECLOG の最初のキーワードとしてレコード・タイプを指定しない場合は、RLDS と見なされます。

STARTIME(*time_stamp*)

変更する SECLOG レコードの開始タイム・スタンプを指定するための必須キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN(*name*)

データ・セット名の変更に使用するオプション・キーワード。*name* には 44 文字まで指定することができます。

CHKPTCT(*value*)

データ・セットのそれぞれのボリュームごとに、完了するチェックポイントの数を変更するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL キーワードで指定されたそれぞれのボリュームごとに 1 つの値を指定します。OLDVOL

が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、CHKPTCT の値の数は OLDVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。NEWVOL が指定されると、CHKPTCT の値の数は NEWVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。

CHKPTCT の値は次のとおりです。

- 0 ボリューム上にチェックポイントなし。
- 1 ボリューム上にチェックポイントは 1 つ。
- 2 ボリューム上にチェックポイントは複数。

CHKPTID(*chkptid*)

データ・セットのそれぞれのボリューム上のアクティブ PST の最も古いチェックポイント ID を変更するのに使用するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL にリストされているそれぞれのボリュームごとに 1 つのチェックポイント ID を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、チェックポイント ID の数は OLDVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。NEWVOL が指定されると、チェックポイント ID の数は NEWVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。

チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。時刻値にはゼロを指定することができます。

DSSTART(*time_stamp*)

データ・セット・エントリーの変更開始時刻を指定するキーワード。DSSTART キーワードは、SECLOG に複数データ・セット・エントリーがある場合には必須ですが、SECLOG にデータ・セット・エントリーが 1 つしかない場合にはオプションです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

ERROR | NORMAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データ・セット・エントリーを、エラーの有無を示すように変更するのに使用します。

ERROR

エラーが含まれているため、DBRC 管理下で実行されるリカバリー・ユーティリティの入力として使用してはならないことを示すようにデータ・セットを変更するために使用するオプション・キーワード。

NORMAL

以前にエラーを含むとしてマークされていたデータ・セットについて、現在はリカバリー・ユーティリティへの入力として使用可能であることを示すように変更するために使用するオプション・キーワード。

DBRC は、PRILOG (または SECLOG) レコードから必要なログ・データ・セットを選択します。これらには、RLDS または SLDS エントリー、あるいはその両方を入れることができます。CHANGE.PRILOG RLDS ERROR コマンドを実行すると、対応する SECLOG エントリーがあれば、DBRC は自動的にそれを使用します。SECLOG エントリーがないか、エラー有りマークが付いている場合は、その時間フレームのログ・データが必要な GENJCL コマンドは失敗します。

FILESEQ(*value*)

ボリュームのファイル・シーケンス番号を指定するためのオプション・キーワー

ド。このキーワードは、VOLLIST キーワードを指定する場合にのみ指定します。可変フィールドに指定する値は 1 から 9999 の 10 進数です。

NEWTIME(*time_stamp*)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。NEWTIME を指定する場合は、OLDVOL と NEWVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWTIME を指定する場合は、NEWVOL に指定したボリューム通し番号の数よりも 1 つ少ないタイム・スタンプを指定する必要があります。NEWVOL に指定された最後のボリュームの停止時刻は、このコマンドでは変更できないからです。タイム・スタンプはいずれも、NEWVOL に指定された対応するボリューム通し番号のボリューム停止時刻として使用されます。これが指定されていないと、新規ボリュームの停止時刻は、最後に指定された古いボリュームの停止時刻と同じになります。

指定するタイム・スタンプはいずれも、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。NEWTIME に指定する最初のタイム・スタンプは、変更されたボリュームの直前のボリュームの停止時刻より大きいか等しくなければなりません。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

NEWVOL(*volser*)

データ・セットの 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。NEWVOL を指定する場合は、OLDVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWVOL に指定されたボリューム通し番号は、OLDVOL キーワードに指定された対応するボリューム通し番号に置き換わります。NEWVOL および OLDVOL に同じ数のボリューム通し番号を指定する必要はありません。既に SECLOG レコードにあるボリューム通し番号を NEWVOL に指定することはできません。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

ボリューム通し番号だけでなく、タイム・スタンプも変更するには、NEWTIME キーワードを使用します。

OLDVOL(*volser*)

データ・セットの 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。OLDVOL を指定するときは、NEWVOL、CHKPTCT、または CHKPTID のいずれかとも一緒に指定する必要があります。

変更するボリューム通し番号を指定します。OLDVOL に指定するボリューム通し番号はいずれも SECLOG レコードに含まれているボリューム通し番号と一致している必要があります。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

RUNTIMES(*time_stamp*)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション

ン・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。ログ・ボリュームの停止時刻を変更するには、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL のキーワードのセットを使用します。RUNTIMES を指定する場合は、VOLLIST も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

RUNTIMES キーワードには、255 個までのタイム・スタンプを指定できます。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

可変フィールドのタイム・スタンプはそれぞれ、VOLLIST キーワードの可変フィールドのボリュームに対応している必要があります。RUNTIMES および VOLLIST キーワードの可変フィールドにはそれぞれ、同数のエントリーが含まれている必要があります。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定されるタイム・スタンプはそれぞれ、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。

RUNTIMES キーワードの可変フィールドの最初のタイム・スタンプは、STARTIME キーワードに指定されたタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定される最後のタイム・スタンプは、変更するレコードに指定された、対応する 2 次 RLDS の停止時刻と同じでなければなりません。このコマンドは、2 次 RLDS の停止時刻を変更するためには使用できません。

UNIT(3400 | *unittype*)

データ・セットが常駐する装置の装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

データ・セットを含む複数のボリュームのボリューム通し番号のレコードを変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。データ・セットに含まれるボリュームのボリューム通し番号を変更するには、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL キーワード・セットを使用します。

VOLLIST キーワードを指定する場合は、RUNTIMES キーワードも指定する必要があります。この 2 つのキーワードの相互作用については、RUNTIME キーワードの説明を参照してください。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

CHANGE.SECLOG RLDS コマンドの使用例

ここでは、CHANGE.SECLOG RLDS コマンドの使用例をいくつか示します。

ボリューム通し番号の変更例

この例では、いくつかのボリューム通し番号が変更します。この例では、RECON データ・セット内の SECLOG レコードは 6 個のボリューム (VOL001、VOL002、VOL003、VOL004、VOL005、VOL006) を含み、開始時刻は

07233124329923456 です。3 番目と 4 番目のボリュームの通し番号は、次のコマンドによって、別の 3 つのボリューム通し番号に置き換えられます。

```
//CHGSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.SECLOG RLDS STARTIME(07233124329923456) -
OLDVOL(VOL003,VOL004) -
NEWVOL(VOL007,VOL008,VOL009)
/*
```

ボリューム停止時刻の変更例

この例では、STARTIME は SECLOG レコードを識別し、DSSTART はその最初のデータ・セット・エンタリーを識別しています。そのデータ・セット名と 3 個のボリュームの停止時刻を変更します。

```
//CHGSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.SECLOG RLDS STARTIME(07054121212023456) -
DSSTART(07054121212023456) -
DSN(IMS.SECLOG.SEC001.DSN) -
VOLLIST(VOL001,VOL002,VOL993) -
RUNTIMES(070541212122,070541313133,070541515150)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

400 ページの『NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用)』

CHANGE.SECLOG SLDS コマンド

CHANGE.SECLOG SLDS コマンドは、RECON データ・セット内のオンライン・システムの 2 次 SLDS に関する情報を変更するために使用します。

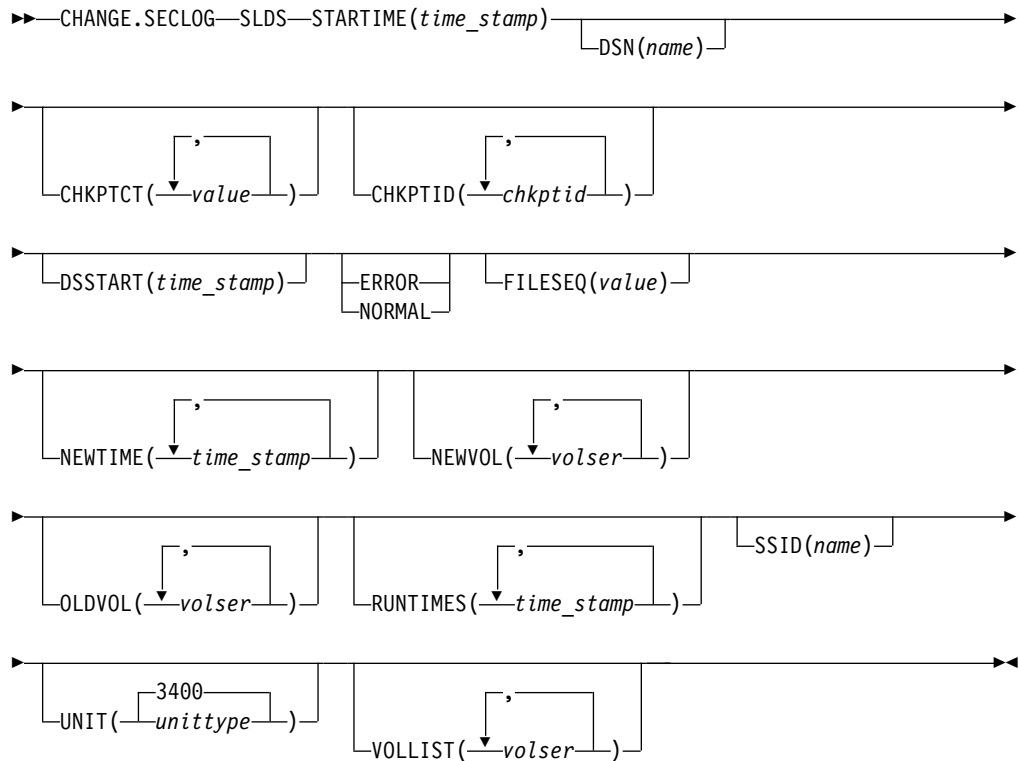
バッチ・サブシステムが作成した SLDS に関する情報を変更するには、CHANGE.SECLOG RLDS コマンドを使用します。DBRC は、そのようなデータを RLDS と見なすからです。NOTIFY.SECLOG SLDS コマンドを使用して、SECSLD レコードを追加するか、既存の SECSLD レコードにデータ・セット・エンタリーを追加します。

変更できる情報はすべて SECSLD レコードのデータ・セット・エンタリー内にあります。CHANGE.SECLOG コマンドを実行するたびに、1 つのデータ・セット・エンタリーだけが変更されます。ログに複数データ・セットがある場合は、DSSTART キーワードを使用して、変更するデータ・セット・エンタリーを識別する必要があります。

サブセクション:

- 156 ページの『構文』
- 156 ページの『キーワード』
- 159 ページの『CHANGE.SECLOG SLDS コマンドの使用例』

構文



重要: このコマンドでは SLDS キーワードを指定する必要があります。SLDS が指定されていない場合、DBRC はデフォルトで RLDS を処理するため、希望する結果が得られません。

キーワード

SLDS

SECSLD レコードが変更されることを指定する必須パラメーター。

STARTIME(*time_stamp*)

変更する SECSLD レコードの開始タイム・スタンプを指定する必須キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN(*name*)

データ・セット名の変更に使用するオプション・キーワード。*name* には 44 文字まで指定することができます。

CHKPTCT(*value*)

データ・セットのそれぞれのボリュームごとに、完了するチェックポイントの数を変更するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL キーワードで指定されたそれぞれのボリュームごとに 1 つの値を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、CHKPTCT の値の数は OLDVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。NEWVOL が指定されると、CHKPTCT の値の数は NEWVOL に指定されたボリューム通し番号の数と同じになります。

CHKPTCT の値は次のとおりです。

- 0 ボリューム上にチェックポイントなし。
- 1 ボリューム上にチェックポイントは 1 つ。
- 2 ボリューム上にチェックポイントは複数。

CHKPTID(*chkptid*)

データ・セットのそれぞれのボリューム上のアクティブ PST の最も古いチェックポイント ID を変更するのに使用するオプション・キーワード。OLDVOL または NEWVOL にリストされているそれぞれのボリュームごとに 1 つのチェックポイント ID を指定します。OLDVOL が指定され、NEWVOL が指定されていない場合は、チェックポイント ID の数は OLDVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。NEWVOL が指定されると、チェックポイント ID の数は NEWVOL にリストされたボリュームの数と同じになります。

チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。時刻値にはゼロを指定することができます。

DSSTART(*time_stamp*)

データ・セット・エントリーの変更開始時刻を指定するキーワード。

DSSTART キーワードは、SECSLD に複数データ・セット・エントリーがある場合には必須です。このキーワードは、SECSLD にデータ・セット・エントリーが 1 つしかない場合はオプションです。

タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

ERROR | NORMAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データ・セット・エントリーを、エラーの有無を示すように変更するのに使用します。

ERROR

データ・セット・エントリーを変更して、それがエラーを含んでいることを示すために使用されます。

NORMAL

前に、エラー有りとマークを付けられていたデータ・セット・エントリーを変更して、正常になったことを示すために使用されます。

DBRC は、PRILOG (または SECLOG) レコードから必要なログ・データ・セットを選択します。これらには、RLDS または SLDS エントリー、あるいはその両方を入れることができます。CHANGE.PRILOG SLDS ERROR コマンドを実行すると、対応する SECLOG エントリーがあれば、DBRC は自動的にそれを使用します。SECLOG エントリーがないか、エラー有りとマークが付いている場合は、その時間フレームのログ・データが必要な GENJCL コマンドは失敗します。

FILESEQ(*value*)

ボリュームのファイル・シーケンス番号を指定するためのオプション・キーワード。このキーワードは、VOLLIST キーワードを指定する場合にのみ指定します。可変フィールドに指定する値は 1 から 9999 の 10 進数です。

NEWTIME(*time_stamp*)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。NEWTIME を指定する場合は、OLDVOL と NEWVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWTIME を指定する場合は、NEWVOL に指定したボリューム通し番号の数よりも 1 つ少ないタイム・スタンプを指定する必要があります。NEWVOL に指定された最後のボリュームの停止時刻は、このコマンドでは変更できないからです。タイム・スタンプはいずれも、NEWVOL に指定された対応するボリューム通し番号のボリューム停止時刻として使用されます。これが指定されていないと、新規ボリュームの停止時刻は、最後に指定された古いボリュームの停止時刻と同じになります。

指定するタイム・スタンプはいずれも、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。NEWTIME に指定される最初のタイム・スタンプは、前に変更されたボリュームの停止時刻より大きいか等しくなければなりません。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

NEWVOL(volser)

データ・セットの 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するためのオプション・キーワード。NEWVOL を指定する場合は、OLDVOL も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

NEWVOL に指定されたボリューム通し番号は、OLDVOL キーワードに指定された対応するボリューム通し番号に置き換わります。NEWVOL および OLDVOL に同じ数のボリューム通し番号を指定する必要はありません。

既に SECSLD レコードに存在するものと同じボリューム通し番号を NEWVOL に指定することはできません。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

ボリューム通し番号だけでなく、タイム・スタンプも変更したい場合には、NEWTIME キーワードを使用します。

OLDVOL(volser)

2 次 SLDS の 1 つ以上のボリュームのボリューム通し番号を変更するのに使用するオプション・キーワード。

変更するボリューム通し番号を指定します。指定するボリューム通し番号はいずれも SECSLD レコードに含まれているボリューム通し番号と一致していなければなりません。

OLDVOL を指定するときは、NEWVOL、CHKPTCT、または CHKPTID のいずれかとも一緒に指定する必要があります。

1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。

RUNTIMES(time_stamp)

データ・セットの最後のボリューム以外の停止時刻を変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。ログ・ボリュームの停止時刻を変更するには、NEWTIME、OLDVOL、および NEWVOL のキーワードのセットを使用します。RUNTIMES を指定する場合は、VOLLIST も指定する必要があります。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL

- RUNTIMES, VOLLIST

RUNTIMES キーワードには、255 個までのタイム・スタンプを指定できます。それぞれのタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

可変フィールドのタイム・スタンプはそれぞれ、VOLLIST キーワードの可変フィールドのボリュームに対応している必要があります。RUNTIMES および VOLLIST キーワードの可変フィールドにはそれぞれ、同数のエントリーが含まれている必要があります。RUNTIMES キーワードの可変フィールドに指定されるタイム・スタンプはそれぞれ、直前のタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。

RUNTIMES キーワードの可変フィールドの最初のタイム・スタンプは、STARTIME キーワードに指定されたタイム・スタンプより大きい値でなければなりません。RUNTIMES キーワードの可変フィールドの最後のタイム・スタンプは、変更するレコードに指定された、対応する 2 次 SLDS の停止時刻と同じでなければなりません。このコマンドは、2 次 SLDS の停止時刻の変更には使用できません。

SSID(*name*)

RECON レコードが変更される SLDS を作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す任意の英数字からなる 8 桁の文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。

RECON ヘッダー・レコードにデフォルトのサブシステム ID を設定するには、INIT.SECLOG または CHANGE.SECLOG コマンドを使用します。

RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

UNIT(3400 | *unittype*)

データ・セットが常駐する装置の装置タイプを変更するためのオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

データ・セットを含む複数のボリュームのボリューム通し番号のレコードを変更するためのオプション・キーワード。このキーワードは、前のリリースの DBRC と互換性を保つためにあります。データ・セットに含まれるボリュームのボリューム通し番号を変更するには、新しいキーワードのセット NEWTIME OLDVOL NEWVOL を使用する必要があります。

VOLLIST キーワードを指定する場合は、RUNTIMES キーワードも指定する必要があります。これらの 2 つのキーワードの相互作用については、上記 RUNTIME キーワードの説明を参照してください。以下のキーワード・セットは相互に排他的です。

- NEWTIME, NEWVOL, OLDVOL
- RUNTIMES, VOLLIST

CHANGE.SECLOG SLDS コマンドの使用例

ここでは、CHANGE.SECLOG SLDS コマンドの使用例をいくつか示します。

ボリューム通し番号および停止時刻の変更例

この例では、SECSLD のいくつかのボリューム通し番号とボリューム停止時刻を変更します。この例で、RECON データ・セット内の SECSLD レコードは、6 個のボリューム (VOL001、VOL002、VOL003、VOL004、VOL005、および VOL006) を持ち、開始時刻は 07233124329923456 です。4 番目のボリュームが新規ボリューム VOL007 と VOL008 にコピーされ、VOL007 の新しいボリューム停止時刻は 07233124832523456 になります。SECSLD レコードは次のコマンドで更新されます。

```
//CHGPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.SECLOG SLDS STARTIME(07233124329923456) -
               OLDVOL(VOL004) -
               NEWVOL(VOL007,VOL008) -
               NEWTIME(07233124832523456)
/*
```

2 次 SLDS に正常のマークを付ける例

この例では、2 次 SLDS の最初のデータ・セットだけが正常とマーク付けされます。

```
//CHGPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.SECLOG SLDS STARTIME(07054121212023456) -
               DSSTART(07054121212023456) NORMAL
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

405 ページの『NOTIFY.PRILOG コマンド (SLDS 用)』

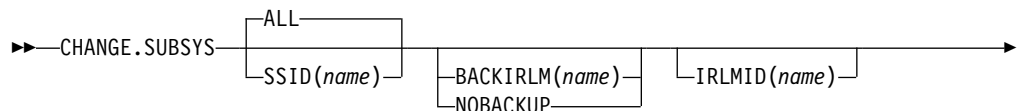
CHANGE.SUBSYS コマンド

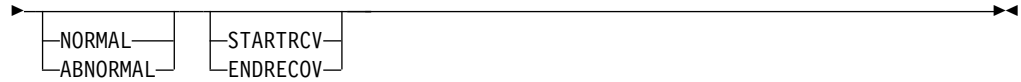
CHANGE.SUBSYS コマンドは、RECON データ・セット内のサブシステム・レコードに含まれている情報を変更するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 161 ページの『キーワード』
- 162 ページの『IRLM を識別する例』

構文





キーワード

ALL | **SSID**(*name*)

使用しているサブシステムを指定するためのオプション・キーワード。SSID は、有効な z/OS または IMS サブシステム ID 名を構成する任意の英数字からなる 8 桁の文字ストリングです。ALL がデフォルトであり、これを指定すると、指定した内部リソース・ロック・マネージャー (IRLM) と通信するそれぞれのサブシステムごとにこのコマンドが処理されます。

BACKIRLM(*name*) | **NOBACKUP**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、代替サブシステムの指定を変更します。

BACKIRLM

代替サブシステムの IRLM ID をアクティブ・サブシステム・レコードに追加します。BACKIRLM を指定する場合は、IRLMID も指定する必要があります。DBRC は、指定されたサブシステム・レコードを見つけて、代替サブシステムの IRLM ID の追加または変更を行います。

NOBACKUP

アクティブ・サブシステム・レコードから、代替サブシステムの IRLM ID を削除します。このパラメーターは、サブシステム・レコード内のフラグをリセットして、代替サブシステムがサインオンされていることを示します。代替サブシステムを再始動する前に、このコマンドが必要な場合があります。

制約事項: これらのキーワードはいずれも、NORMAL または ABNORMAL、あるいは STARTRCV または ENDRECOV と一緒に使用することはできません。

IRLMID(*name*)

サブシステムが通信する相手の IRLM の名前を指定するオプション・キーワード。IRLMID は、5 文字の任意の英数字からなる文字ストリングです。

制約事項: IRLM ID は変更できません。サブシステムの処理モードを変更するには IRLM ID を指定してください。

NORMAL | **ABNORMAL**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、サブシステムの状況を指定します。

NORMAL

サブシステムに対する通常処理が継続することを指定します。

ABNORMAL

サブシステムが異常終了したことを示します。ABNORMAL を指定すると、DBRC は以下の処理を行います。

- 更新されていないが、指定されたサブシステムに対する許可を持っているすべてのデータベースから許可を除去する。

- 識別されているサブシステムのエントリーに、異常終了したことを示すフラグを立てる。
- リカバリー処理開始済みフラグをオフにする。
- サブシステムがバッチで、更新されたデータベースがなければ、そのサブシステムのレコードは削除される。

サブシステムが異常終了して障害を DBRC に通知できない場合以外には、ABNORMAL を指定しないでください。

制約事項: STARTRCV または ENDRECOV を指定する場合は、ABNORMAL は指定できません。

STARTRCV | ENDRECOV

互いに排他的なオプション・キーワードであり、サインオンのリカバリーが正常に完了したかどうかを指定します。

STARTRCV

サインオンのリカバリーの開始を表します。

ENDRECOV

指定されたサブシステムが許可されているすべてのデータベースに対する許可を除去します。

すべてのデータベース許可をサブシステムから削除する場合は、CHANGE.SUBSYS STARTRCV コマンドを実行してから、CHANGE.SUBSYS ENDRECOV コマンドを実行します。これらの 2 つのコマンドは、サインオン・リカバリー開始呼び出しとサインオン・リカバリー完了呼び出しをシミュレートします。

推奨事項: 異常終了が起きない限り、このコマンド・シーケンスは使用しないでください。使用した場合、アクティブ・サブシステムが現在使用しているデータベースに対する許可が除去されてしまいます。

STARTRCV | ENDRECOV コマンドと DELETE.SUBSYS コマンドを使用した後で、サブシステム情報がまだデータベースに関連付けられている場合、残っているサブシステム ID をデータベース・レコードからクリアするには、NOBACK キーワードを指定した CHANGE.DB コマンドが必要です。

IRLM を識別する例

この例では、IRLMID は、SSID キーワードで示されているサブシステムと通信する IRLM を識別します。さらに、ABNORMAL は、このサブシステムが異常終了したことを示します。

```
//CHGSBSYS JOB
:
//SYSIN DD *
CHANGE.SUBSYS IRLMID(IRLM2) SSID(ISM34) ABNORMAL
/*
```

CHANGE.UIC コマンド

CHANGE.UIC コマンドは、RECON データ・セット内のイメージ・コピー・レコードで、標準外イメージ・コピー・データ・セットに対応するものに含まれる情報を変更するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 164 ページの『RECON データ・セット内の標準外 ICDSN を変更する例』

構文

```
▶▶ CHANGE.UIC DBD(name) DDN(name) RECTIME(time_stamp)
                └─ AREA(name) ─┘
▶ └─ STOPTIME(time_stamp) ─┘ UDATA('string') ▶▶
```

キーワード

DBD(*name*)

標準外イメージ・コピー・データ・セットが存在する DBDS のデータベース名を示す必須キーワード。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、標準外イメージ・コピー・データ・セットが存在する DBDS またはエリアの名前を示します。

RECTIME(*time_stamp*)

標準外イメージ・コピー・データ・セットの、変更する特定のイメージ・コピー・レコードを示す必須キーワード。IMAGE レコードのリストで横にアスタリスク (*) が付いているタイム・スタンプを使用してください。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

STOPTIME(*time_stamp*)

並行イメージ・コピーの停止時刻を指定するオプション・キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

UDATA('string')

識別されたイメージ・コピー・レコード内のユーザー・データを変更するための必須キーワード。*string* は、最大 80 文字まで指定できます。*string* 値にブラケットまたはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

RECON データ・セット内の標準外 ICDSN を変更する例

この例では、RECON データ・セット内の情報で、RECTIME キーワードで示される標準外イメージ・コピー・データ・セットに関するものを変更します。 UDATA キーワードには、指定されたイメージ・コピー・データ・セットに関して記録する新規情報を指定します。

```
//CHGUIC JOB
:
//SYSIN DD *
      CHANGE.UIC DBD(DBDKSDS1) AREA(AREA003) -
      RECTIME(07065101010023456) -
      UDATA('DUMP OF VOLUME VOL001 AT 07065101010023456')
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DBONLY オプションが指定されない場合、PRILOG 情報も削除されます。
DELETE.LOG INACTIVE コマンド (非アクティブな PRILOG とそれに関連するログ・レコードを削除します) の場合とは異なり、各ログの最も早いデータベース割り振りレコード (ALLOC) 時間またはクリーンアップ時間のいずれか古い方の時間まで、ログ・データはすべての PRILOG (オープンもクローズも) から削除されます。

RETPRD(*time_interval*)

削除する内容を判別するために期間または間隔を使用することを指定します。これは、指定した「経過時間」より古いデータは削除され、指定した「経過時間」より新しいデータは保持されるエージング値と考えられます。

time_interval は、日時を表すのではなく、時間間隔 (日、時、分、および秒) を表す、部分的な、区切られたタイム・スタンプです。タイム・スタンプのフォーマットは、次のとおりです。

ddd|hh|mm|ss|t

各項目の説明は、以下のとおりです。

ddd

日数 (000 から 365)

hh 時間数 (0 から 23)

mm 分数 (0 から 59)

ss 秒数 (0 から 59)

t 10 分の 1 秒 (0 から 9)

上記のフォーマットでは垂直バー (|) として示されているタイム・スタンプの区切りは、ピリオド (.) またはコンマ (,) などの任意の非数値文字でも構いません。タイム・スタンプにブランクまたは特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。日数には先行ゼロを含める必要があります。有効な間隔は、10 分の 1 秒から 365 日までです。

時間間隔はタイム・スタンプとして扱われるため、不適切な値に対して、メッセージ DSP1048I が出される場合があります。有効な時間間隔の例は、次のとおりです。

```
CLEANUP.RECON RETPRD(365)
CLEANUP.RECON RETPRD('030 12.00')
CLEANUP.RECON RETPRD('000 00:00:08.0')
CLEANUP.RECON RETPRD('000 00,00,00,1')
```

以下は、2 つの異なる有効なフォーマットで、同じタイム・スタンプの指定を示している例です。

```
CLEANUP.RECON RETPRD('010 12,30') = 10 days, 12 hours, 30 minutes
CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') = 10 days, 12 hours, 30 minutes
```

推奨事項: 必ず適切なログ保存期間を指定し、ログ情報が十分に長い期間にわたって RECON データ・セットに保持されるようにしてください。一定の IMS 機能は RECON データ・セット内のログ情報に依存しており、情報が早く削除されすぎると、これらの機能が失敗に終わることがあります。例えば、以下の機能の 1 つ以上が失敗に終わる可能性があります。

- 動的バックアウト
- バッチ・メッセージ処理 (BMP) の拡張再始動 (XRST)
- 作業単位テーブル項目 (UOWE) の再同期

TIME(*time_stamp*)

削除する内容を判別するために絶対値のタイム・スタンプを使用することを指定します。指定された時間より古いデータのみが削除されます。

CAGRANGE(*firstcag,lastcag* | *firstcag* | ,*lastcag*)

一定範囲の変更累積 (CA) グループの変更累積データ・セットに対してクリーンアップを実行することを指定するオプション・キーワード。このキーワードが指定されていない場合、すべての CA グループが処理されます。このキーワードは、複数の変更累積グループの変更累積データ・セットをクリーンアップするために、あるいは CLEANUP.RECON CAGRANGE コマンドが停止された後にクリーンアップを再開するために使用します。

firstcag,lastcag

希望する CA グループの範囲の上限と下限。これらのパラメーターは、RECON データ・セット内の CA グループの名前と一致している必要はありません。これらは、英字検索の開始と終了の引数として使用されます。

firstcag

RECON クリーンアップが変更累積実行データ・セットの処理を開始する CA グループの名前。RECON データ・セットの最後のグループに達するまで、または *lastcag* 値として指定された CA グループに達するまで、この CA グループと後続のすべての CA グループが処理されます。

lastcag

この CA グループの名前まで、RECON クリーンアップは CA グループの処理を続行します。RECON クリーンアップは、RECON データ・セットに定義された最初の CA グループから開始され、この CA グループが処理された後に停止します。*lastcag* を指定する場合は、前にコンマを付ける必要があります。

CAONLY

変更累積実行レコードのみを削除する (データベース・リカバリー関連情報およびログ情報は処理しない) ことを指定するために使用するオプション・キーワード。ただし、コマンドに DBONLY キーワードも含まれている場合は、データベース・リカバリー関連情報も処理され、ログ情報のみが未処理のまま残されます。

LASTCA

CA グループの最後の CA 実行レコードが削除基準を満たしている場合、その CA 実行レコードを RECON クリーンアップ処理の一部として削除できることを指定するために使用するオプション・キーワード。このキーワードが指定されていない場合、CA グループの最後の CA 実行レコードは保持されます。

DBRANGE(*firstdb,lastdb* | *firstdb* | ,*lastdb*)

クリーンアップを実行する対象となるデータベース名の範囲を指定するために使用するオプション・キーワードです。これらは、HALDB 区画の名前、および DEDB を含む非 HALDB データベースの名前です。範囲内の HALDB マスター・データベースは処理されません。範囲内の HALDB 区画は処理されます。このオプションを使用して、前の CLEANUP.RECON コマンドが停止された後に再開することができます。

firstdb,lastdb

希望するデータベース範囲の上限または下限を指定するのに使用するパラメ

ーターです。DBRANGE キーワードを使用する場合、これらのパラメータの少なくとも 1 つを指定する必要があります。これらのパラメータはいずれも、必ずしも RECON データ・セットに登録されたデータベース名に対応しなければならないというわけではありません。これらは、単に、英字検索での最初の引数と最後の引数として使用されるだけです。

firstdb

RECON クリーンアップがデータベースの処理を開始するデータベースの名前です。RECON クリーンアップは指定されたデータベースを処理した後、RECON データ・セット内の最後のデータベースに達するまで、または DBRANGE キーワードで *lastdb* として指定されたデータベースに達するまで、データベースを処理し続けます。

lastdb

RECON クリーンアップによるデータベース処理が、ここに指定されたデータベース名まで続行されます。RECON クリーンアップは、このデータベースが処理されると停止します。*lastdb* を指定する場合は、前にコンマを付ける必要があります。

DBONLY

データベース・リカバリー関連情報のみを削除する (変更累積実行レコードおよびログ情報は処理しない) ことを指定するために使用するオプション・キーワード。ただし、CAONLY キーワードも指定されている場合、変更累積情報メッセージも処理され、ログ情報のみが未処理のまま残されます。

LASTIC

データベースに対して使用可能な最後の IC が削除基準を満たす場合、RECON クリーンアップ処理の一部としてその IC を削除できることを指定するために使用するオプション・キーワードです。このキーワードが指定されない場合、データベースに対して使用可能な最後の IC が保持され、有用である可能性のあるデータベースが有効なリカバリー・ポイントを持たない状態のままになることが回避されます。

LISTDL | NOLISTDL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON データ・セットから削除されたデータに関する情報をリストするかどうかを指定するために使用します。このオプションを指定しない場合、RECON 見出しに指定されている現在の LISTDL オプションが使用されます。

LISTDL

RECON データ・セットから削除されたデータに関する情報がリストされることを指定します。

NOLISTDL

RECON データ・セットから削除されたデータに関する情報がリストされないことを指定します。

使用上の注意

重要: 必要なりカバリー情報とログ情報が RECON データ・セットから削除されないようにするために、まず、RECON データ・セットのコピーで CLEANUP.RECON コマンドを実行して、このジョブに必要な時間の長さを示す結果を確認してください。確認後、この情報を使用して、アクティブな RECON データ・セット上でこのコマンドを実行する時期を決定することができます。

推奨事項: CLEANUP.RECON コマンドを使用した後、コマンドを発行した結果として作成されたスペースを再利用するように、RECON データ・セットを再編成してください。

RECON データ・セットからの情報のクリーンアップの例

CLEANUP.RECON コマンドのいくつかの例を以下に示します。

CLEANUP.RECON コマンドの例 1

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') LASTIC LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          06.221 13:05:37.0
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:05:22.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:45:47.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I   RECOV          06.221 13:59:42.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、LASTIC キーワードおよび LISTDL キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保存時間を指定しました。ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は、1 つしかありません。IC は 2 つしかなく、両方とも、指定された保存時間より古いものになっています。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベース用の既存のすべてのイメージ・コピーが削除されたことがユーザーに通知され、メッセージ DSP1216I とメッセージ DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーとログ・データ・セットがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 2

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          06.221 13:05:37.0
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:05:22.0
DSP1214I                                IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I   RECOV          06.221 13:59:42.0
DSP1213I THE LAST IMAGE COPY FOR DBNAME = DBXYZN DDN= DDXYZN WAS NOT DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、LISTDL キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保持時間を指定しました。ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は、1 つしかありません。IC は 2 つしかなく、両方とも、指定された保存時間より古いものになっています。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1213I が発行されて、データベース用の最後のイメージ・コピーが削除期間内にあるにも関わらず (LASTIC が指定されていなかったため) 削除されなかったことがユーザーに通知され、メッセージ DSP1216I とメッセージ DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーとログ・データ・セットがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 3

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') NOLISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1213I THE LAST IMAGE COPY FOR DBNAME = DBXYZN DDN= DDXYZN WAS NOT DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、NOLISTDL キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保持時間を指定しました。ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は、1 つしかありません。IC は 2 つしかなく、両方とも、指定された保存時間より古いものになっています。

NOLISTDL オプションの結果として、メッセージ DSP1214I は発行されませんが、メッセージ DSP1213I は発行されて、データベースの最後のイメージ・コピーが削除期間内にあるにも関わらず (LASTIC が指定されていなかったため) 削除されなかったことがユーザーに通知され、メッセージ DSP1216I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーがリストされます。NOLISTDL オプションが指定されていたため、メッセージ DSP1047I は発行されません。

CLEANUP.RECON コマンドの例 4

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') DBRANGE(DBXYZN) LASTIC LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZZ DDN=DDXYZZ
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I  ALLOC          06.221 14:25:37.0
DSP1214I  IMAGE          06.221 14:25:22.0
DSP1214I                               IC1 DSN=IMSVS. DBXYZZ. DDXYZZ.IC.IC142520
DSP1214I  IMAGE          06.221 14:45:47.0
DSP1214I                               IC1 DSN=IMSVS. DBXYZZ. DDXYZZ.IC.IC144545
DSP1214I  RECOV          06.221 14:59:42.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZZ DDN= DDXYZZ WERE DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 14:24:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1424170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

説明: この例では、前の CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') LASTIC コマンドが停止された後、ユーザーはクリーンアップ処理を再開することにします。ユーザーは、メッセージ DSP1214I を検索し、最後に処理されたデータベースは DBXYZN であることが分かり、CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') DBRANGE(DBXYZN) LASTIC LISTDL コマンドを発行します。この結果、コマンドによって、データベースの処理が DBXYZN から開始され、最後のデータベース (この場合は DBXYZZ) を処理するまで、処理が続行されます。データベース DBXYZZ には 2 つの IC があり、これらの IC は両方とも、指定された保存期間である 10 日、12 時間、および 30 分より古いものです。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベース用の既存のすべてのイメージ・コピーが削除されたことがユーザーに通知され、メッセージ DSP1216I とメッセージ DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーとログ・データ・セットがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 5

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') DBONLY LASTIC LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I  ALLOC          06.221 13:25:37.0
DSP1214I  IMAGE          06.221 13:00:22.0
DSP1214I                               IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC130020
DSP1214I  IMAGE          06.221 13:45:47.0
DSP1214I                               IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I  RECOV          06.221 13:35:47.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、DBONLY、LASTIC、および LISTDL キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保存時間を指定しました。ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は 1 つだけですが、このデータベースには 2 つの IC しかなく、その両方とも、指定された保存時間より古くなっています。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベース用の既存のすべてのイメージ・コピーが削除されたことがユーザーに通知されます。ただし、メッセージ DSP1216I とメッセージ DSP1047I はこの例では発行されません。DBONLY オプションが指定されており、これによって、RECON クリーンアップ処理のデータベース部分のみが実行されるように指示されているからです。

CLEANUP.RECON コマンドの例 6

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
        CLEANUP.RECON TIME(06221145536000000) LASTIC LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          06.221 13:05:37.0
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:05:22.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:45:47.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I   RECOV          06.221 13:59:42.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、LASTIC キーワードおよび LISTDL キーワードとともに、タイム・スタンプ「06221145536000000」を指定しました。ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は 1 つだけですが、このデータベースには 2 つの IC しかなく、その両方とも、指定されたタイム・スタンプより古くなっています。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベース用の既存のすべてのイメージ・コピーが削除されたことがユーザーに通知され、メッセージ DSP1216I とメッセージ DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーとログ・データ・セットがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 7

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
        CLEANUP.RECON TIME(06221145536000000) LISTDL
/*
```


コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          06.221 13:05:37.0
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:05:22.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I   RECOV          06.221 13:59:42.0
DSP1213I THE LAST IMAGE COPY FOR DBNAME = DBXYZN DDN= DDXYZN WAS NOT DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

説明: この例では、ユーザーが `CLEANUP.RECON` コマンドを発行して、`LISTDL` キーワードとともに、タイム・スタンプ「06221203236000000」を指定しました。`ALLOC`、`IC`、および `RECOV` 情報を持つデータベース (`DBXYZN`) は 1 つだけですが、このデータベースには 2 つの `IC` しかなく、その両方とも、指定されたタイム・スタンプより古くなっています。

コマンドの結果として、メッセージ `DSP1214I` が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ `DSP1213I` が発行されて、データベース用の最後のイメージ・コピーが削除期間内にあるにも関わらず (`LASTIC` が指定されていなかったため) 削除されなかったことがユーザーに通知され、メッセージ `DSP1216I` とメッセージ `DSP1047I` が発行されて、削除された `PRILOG` ファミリーとログ・データ・セットがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 8

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON DBRANGE(,DBXYZZ) LASTIC LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          06.221 13:05:37.0
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:05:22.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I   IMAGE          06.221 13:45:47.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN. DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I   RECOV          06.221 13:59:42.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000

DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZZ DDN=DDXYZZ
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          06.221 14:25:37.0
DSP1214I   IMAGE          06.221 14:25:22.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZZ. DDXYZZ.IC.IC142520
DSP1214I   IMAGE          06.221 14:45:47.0
DSP1214I                                     IC1 DSN=IMSVS. DBXYZZ. DDXYZZ.IC.IC144545
DSP1214I   RECOV          06.221 14:59:42.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZZ DDN= DDXYZZ WERE DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 14:24:17.0 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1424170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

説明: この例では、3 つのデータベース (`DBXYZN`、`DBXYZZ`、および `DBXZZZ`) を持つユーザーが、最初の 2 つのデータベースをクリーンアップするために

CLEANUP.RECON コマンドを発行することにします。この場合、ユーザーは CLEANUP.RECON DBRANGE(DBXYZZ) LASTIC LISTDL コマンドを発行します。このコマンドは、ログ保存期間 (LOGRET) をデフォルトの削除時間として使用します。この結果、最初のデータベース (DBXYZN) の処理でコマンドが開始し、DBRANGE キーワードの「lastdb」部分に指定されたデータベース (DBXYZZ) に到達するまで、ログ保存期間 (LOGRET) をデフォルトの削除時間として使用して処理を続行します。DBXYZN データベースと DBXYZZ データベースは、両方とも、ログ保存期間である 10 日、12 時間、および 30 分より古い 2 つの IC を持ちます。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベース用の既存のすべてのイメージ・コピーが削除されたことがユーザーに通知され、メッセージ DSP1216I とメッセージ DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーとログ・データ・セットがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 9

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') LASTIC LASTCA LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I  ALLOC          09.021 13:05:37.012345
DSP1214I  IMAGE          09.021 13:05:22.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS.DBXYZN.DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I  IMAGE          09.021 13:45:47.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS.DBXYZN.DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I  RECOV          09.021 13:59:42.012345
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=GRPDBX
DSP1225I RECORD          TIME
DSP1225I  CA            09.021 15:05:37.012345
DSP1225I                      DSN=IMSVS.GRPDBX.CA2.CA182601
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=09.021 13:04:17.012345 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D09021.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER=00000009
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、LASTIC、LASTCA、および LISTDL の各キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保存時間を指定しました。ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は、1 つしかありません。IC は 2 つしかなく、両方とも、指定された保存時間より古いものになっています。再使用可能な変更累積実行レコードを持つ変更累積グループ (GRPDBX) が 1 つあり、5 つの変更累積実行レコードが含まれています。保存期間より古い変更累積実行レコードが 1 つだけ削除されました。

このコマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベースの既存のイメージ・コピーがすべて削除されたことをユーザーに通知します。さらに、メッセージ DSP1216I および DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリー

ーとログ・データ・セットがリストされ、メッセージ DSP1225I が発行されて、削除された変更累積実行レコードがリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 10

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') CAONLY LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=CAGRP1
DSP1225I RECORD TIME
DSP1225I CA 09.021 13:05:37.012345
DSP1225I DSN=IMSVS.CAGRP1.CA2.CA182601
DSP1225I CA 09.021 13:45:47.012345
DSP1225I DSN=IMSVS.CAGRP1.CA3.CA182602
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、CAONLY キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保持時間を指定しました。10 日より古い変更累積データ・セットが 2 つあります。

このコマンドの結果として、変更累積グループの変更累積実行レコードが削除されたときに、メッセージ DSP1225I が発行されます。LISTDL オプションが指定されているため、削除された各変更累積実行レコードもリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 11

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') CAGRANGE(CAGRP1) CAONLY NOLISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=CAGRP2
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=CAGRP3
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=CAGRP4
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=CAGRP5
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=MYGRP1
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=MYGRP2
```

説明: この例では、ユーザーは、CAGRP1 から始まる一定範囲の変更累積グループの変更累積レコードのみをクリーンアップすることに決めています。コマンドは、変更累積グループ CAGRP1 から処理を開始し、最後の変更累積グループ (このケースでは、MYGRP2) を処理するまで続行します。変更累積グループ CAGRP1 は既に前の CLEANUP.RECON コマンドで処理されていたため、変更累積実行レコードは削除されませんでした。変更累積レコードが削除された変更累積グループごとにメッセージ DSP1225I が発行されます。NOLISTDL オプションにより、削除された変更累積レコードはリストされません。

CLEANUP.RECON コマンドの例 12

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') CAONLY NOLISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1228I NO CHANGE ACCUMULATION INFORMATION WAS DELETED
```

説明: すべての変更累積グループが既に前の CLEANUP.RECON コマンドによって処理されていたため、このコマンドに対して発行されるメッセージは DSP01228I だけです。

CLEANUP.RECON コマンドの例 13

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') CAGRANGE(,CAGRP4) CAONLY NOLISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1228I NO CHANGE ACCUMULATION INFORMATION WAS DELETED
```

説明: この例では、ユーザーは、前の CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') CAGRANGE(CAGRP1) コマンドが完了した後、クリーンアップ処理を再開することに決めています。その結果、このコマンドは、最初の変更累積グループ (CAGRP1) の処理を開始します。CAGRANGE キーワードには、処理する最初の変更累積グループが省略されており、最後の変更累積グループとして CAGRP4 が含まれていたからです。すべての変更累積グループが既に前の CLEANUP.RECON コマンドによって処理されていたため、このコマンドに対して発行されるメッセージは DSP1228I だけです。

CLEANUP.RECON コマンドの例 14

コマンド入力:

```
//CLEANUP JOB
:
:
//SYSIN DD *
      CLEANUP.RECON DBRANGE(,DBXYZZ) LASTIC LISTDL
/*
```

コマンド出力:

```
DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I  ALLOC          06.221 13:05:37.012345
DSP1214I  IMAGE          06.221 13:05:22.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS.DBXYZN.DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I  IMAGE          06.221 13:45:47.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS.DBXYZN.DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I  RECOV          06.221 13:59:42.0
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=06.221 13:04:17.012345 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1304170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000
```

```

DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZZ DDN=DDXYZZ
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          08.221 14:25:37.012345
DSP1214I   IMAGE          08.221 14:25:22.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS.DBXYZZ.DDXYZZ.IC.IC142520
DSP1214I   IMAGE          08.221 14:45:47.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS.DBXYZZ.DDXYZZ.IC.IC144545
DSP1214I   RECOV          08.221 14:59:42.012345
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZZ DDN= DDXYZZ WERE DELETED
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=CAGRP33
DSP1225I RECORD          TIME
DSP1225I   CA            09.021 13:05:37.012345
DSP1225I                      DSN=IMSVS.CAGRP33.CA2.CA182601
DSP1225I   CA            09.021 13:45:47.012345
DSP1225I                      DSN=IMSVS.CAGRP33.CA3.CA182602
DSP1216I THE PRILOG FAMILY WITH TIME=08.221 14:24:17.012345 AND SSID=IMS1 WAS DELETED
DSP1047I DELETED DSN= IMSVS.RLDSP.IMS1.D06221.T1424170.V00,FILESEQ= 0001,VOLSER= 000000

```

説明: この例では、3 つのデータベース (DBXYZN、DBXYZZ、および DBXZZZ) を持つユーザーが、最初の 2 つのデータベースをクリーンアップするために CLEANUP.RECON コマンドを発行することにします。この場合、ユーザーは CLEANUP.RECON DBRANGE(DBXYZZ) LASTIC LISTDL コマンドを発行します。このコマンドは、ログ保存期間 (LOGRET) をデフォルトの削除時間として使用します。この結果、コマンドは最初のデータベース (DBXYZN) の処理から開始し、DBRANGE キーワード (DBXYZZ) の *lastdb* 位置に指定されたデータベースに達するまで処理を続行します。DBXYZN データベースと DBXYZZ データベースは、両方とも、ログ保存期間である 10 日、12 時間、および 30 分より古い 2 つの IC を持ちます。さらに、ログ保存期間より古い CAGRP33 用の変更累積データ・セットが 2 つあります。これらは削除されます。

コマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたりカバリー関連レコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベースの既存のイメージ・コピーがすべて削除されたことをユーザーに通知します。さらに、メッセージ DSP1216I および DSP1047I が発行されて、削除された PRILOG ファミリーとログ・データ・セットがリストされ、メッセージ DSP1225I が発行されて、CA グループ CAGRP33 の変更累積実行レコードが削除されたことをユーザーに通知します。LISTDL オプションにより、メッセージ DSP1225I には削除された各変更累積実行レコードもリストされます。

CLEANUP.RECON コマンドの例 15

コマンド入力:

```

//CLEANUP JOB
:
//SYSIN DD *
          CLEANUP.RECON RETPRD('010 12:30') DBONLY CAONLY LASTIC LASTCA LISTDL
/*

```

コマンド出力:

```

DSP1214I RECON INFORMATION WAS DELETED FOR DBDS DBNAME=DBXYZN DDN=DDXYZN
DSP1214I RECORD          TIME
DSP1214I   ALLOC          09.021 13:05:37.012345
DSP1214I   IMAGE          09.021 13:05:22.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN.DDXYZN.IC.IC130520
DSP1214I   IMAGE          09.021 13:45:47.012345
DSP1214I                      IC1 DSN=IMSVS. DBXYZN.DDXYZN.IC.IC134545
DSP1214I   RECOV          09.021 13:59:42.012345

```

```
DSP1212W ALL EXISTING IMAGE COPIES FOR DBNAME= DBXYZN DDN= DDXYZN WERE DELETED
DSP1225I CHANGE ACCUMULATION EXECUTION RECORDS WERE DELETED FOR CA GROUP GRPNAME=GRPDBX
DSP1225I RECORD                TIME
DSP1225I   CA                   09.021 15:05:37.012345
DSP1225I                DSN=IMSVS.GRPDBX.CA2.CA182601
```

説明: この例では、ユーザーが CLEANUP.RECON コマンドを発行して、DBONLY、CAONLY、LASTIC、LASTCA、および LISTDL の各キーワードとともに、10 日、12 時間、および 30 分という保存時間を指定しました。

ALLOC、IC、および RECOV 情報を持つデータベース (DBXYZN) は、1 つしかありません。IC は 2 つしかなく、両方とも、指定された保存時間より古いものになっています。変更累積グループ (GRPDBX) が 1 つあり、変更累積実行レコードが 5 つと、保存期間より古い変更累積実行レコードが 1 つだけ含まれています。DBONLY または CAONLY が指定されている場合、ログ情報は処理されません。

このコマンドの結果として、メッセージ DSP1214I が発行されて、削除されたレコードがリストされ、メッセージ DSP1212W が発行されて、データベースの既存のイメージ・コピーがすべて削除されたことをユーザーに通知します。さらに、メッセージ DSP1225I が発行されて、CA グループ GRPDBX の削除された変更累積実行レコードがリストされます。

第 12 章 DELETE コマンド

DELETE コマンドは、RECON データ・セットから情報を削除する際に使用します。

DELETE.ADS コマンド

DELETE.ADS コマンドは、RECON レコード構造内の ADS 関連エリア (最大 7 つの ADS で構成できる) から ADS を削除するために使用します。

削除される ADS は、INIT.ADS コマンドによって登録済みでなければなりません。

エリアが許可されており、ADS が AVAILABLE 状況のときに実行された DELETE.ADS コマンドは失敗します。このコマンドを使用できるのは、ADS 作成ユーティリティーが実行されていない場合で、ADS が UNAVAILABLE 状況の場合です。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『ADS レコードの削除例』

構文

▶▶—DELETE.ADS—ADDN(*name*)—AREA(*name*)—DBD(*name*)————▶▶

キーワード

ADDN(*name*)

削除する ADS のエリア名を示す必須キーワード。

AREA(*name*)

削除する ADS を含むエリア名を示す必須キーワード。

DBD(*name*)

削除するエリアのデータベース名を示す必須キーワード。

ADS レコードの削除例

この例では、DBD、AREA、および ADDN キーワードによって示される DEDB エリアの ADS レコードを RECON から削除します。

```
//DELADS JOB ('LEOPARD,IMS'),'LEOPARD',REGION=880K,  
:  
//SYSIN DD *  
DELETE.ADS DBD(DBD00001) AREA(AREA0001) -  
ADDN(AREA0002)  
/*
```

DELETE.ALLOC コマンド

DELETE.ALLOC コマンドは、指定された DBDS または DEDB エリアに関連した割り振りレコードを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

割り振りレコードを削除できるのは、そのレコードが割り振り解除時刻を持っているか、あるいはその関連ログに停止時刻が含まれている場合だけです。DBDS または DEDB エリアの最も古いイメージ・コピー・データ・セットより前の割り振りレコードを削除する場合を除いて、割り振りレコードの削除には注意が必要であり、通常は削除する必要はありません。指定した DBDS またはエリアを変更した期間を表している割り振りレコードを削除すると、将来、リカバリーが不適切に行われる恐れがあります。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『割り振りレコードの削除例』

構文

```
▶▶—DELETE.ALLOC—DBD(name)—┬—DDN(name)—┬—RECTIME(time_stamp)—▶▶  
└—AREA(name)—┘
```

キーワード

DBD(*name*)

割り振りレコードが削除される DBDS またはエリアのデータベース名を示す必須キーワード。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.ALLOC コマンドの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、割り振りレコードが削除される DBDS または DEDB エリアのデータ・セット DD 名を示すために使用します。

RECTIME(*time_stamp*)

指定された DBDS または DEDB エリアで削除される特定の割り振りレコードを示す必須キーワード。ALLOC レコードのリストで横にアスタリスク (*) が付いているタイム・スタンプを使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

割り振りレコードの削除例

この例では、DBD および DDN キーワードで示される DBDS の割り振りレコードを RECON から削除します。RECTIME キーワードは、削除する特定の割り振りレコードを示します。


```
//DELALLOC JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.ALLOC DBD(DBDKSDS1) DDN(DDNKSDS1) -
RECTIME(07023110223423456)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DELETE.BKOUT コマンド

DELETE.BKOUT コマンドは、RECON データ・セットからバックアウト・レコードを削除するのに使用します。

このコマンドは、例えば、最近のイメージ・コピーが正常に復元された後などに続けて使用します。コピーの際に RECON データ・セットに保持されるバックアウト情報は無意味ですが、DBRC は、その事実が認識できないため、そのバックアウト・レコードを自動的に削除することはありません。

重要: DELETE.BKOUT コマンドの使用には細心の注意が必要です。このコマンドにより、サブシステムのすべてのバックアウト情報が RECON から削除されてしまいます。DBRC はこの情報を利用して、IMS がデータベースの保全性を維持できるように支援します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『DELETE.BKOUT コマンドの使用例』

構文

▶▶—DELETE.BKOUT—SSID(*name*)—————▶▶

キーワード

SSID(*name*)

バックアウト・レコードが削除されるサブシステムを示す必須キーワード。サブシステム名は 8 文字の英数字からなるストリングで、任意の有効なサブシステムを表します。コマンドを出すたびに、1 つのサブシステムを指定することができます。

バックアウトが必要とマーク付けされたレコードのそれぞれのデータベース・エントリーごとに、それに関連したサブシステム (SSID) のデータベース・ヘッダー・レコードのバックアウト・カウントが 1 ずつ減らされます。それによって、SSID のバックアウト・カウントがゼロになると、その SSID エントリーはデータベース・ヘッダー・レコードから除去されます。

DELETE.BKOUT コマンドの使用例

この例では、DELETE.BKOUT コマンドを使用して、サブシステム IMS3 をバックアウトします。

```
//DELBKOUT JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.BKOUT SSID(IMS3)
/*
```

DELETE.CA コマンド

DELETE.CA コマンドは、指定された CA グループの変更累積実行レコードを RECON から削除するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『実行レコードの削除例』

構文

▶▶—DELETE.CA—GRPNAME(*name*)—RECTIME(*time_stamp*)—————▶▶

キーワード

GRPNAME(*name*)

CA グループを指定する必須キーワード。削除する実行レコードは、この CA グループのメンバーです。

RECTIME(*time_stamp*)

削除する変更累積実行レコードを指定する必須キーワード。

CA レコードのリストから、アスタリスク (*) のマークの付いた RECTIME を使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

実行レコードの削除例

この例では、GRPNAME キーワードで示される CA グループの実行レコードを RECON から削除します。RECTIME キーワードは、削除するレコードを示しています。

```
//DELCA JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.CA GRPNAME(CAGRP1) RECTIME(07122090954023456)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DELETE.CAGRP コマンド

DELETE.CAGRP コマンドは、CA グループ・レコードおよびすべての関連した CA 実行レコードを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『CA グループ・レコードの削除例』

構文

▶▶—DELETE.CAGRP—GRPNAME(*name*)————▶▶

キーワード

GRPNAME(*name*)

レコードを削除する CA グループの名前を指定する必須キーワード。

CA グループ・レコードの削除例

この例では、RECON データ・セットから CA グループ・レコードを削除します。レコードを削除する CA グループは、GRPNAME キーワードで示されます。

```
//DELCAGRP JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.CAGRP GRPNAME(CAGRP2)
/*
```

DELETE.DB コマンド

DELETE.DB コマンドは、データベースと、RECON データ・セット内に記録されているそのデータベースに関連したすべての情報を RECON データ・セットから削除するのに使用します。

データベースが HALDB である場合は、データベースとそのすべての区分が削除されます。指名されたデータベースが HALDB 区画の場合は、このコマンドは失敗します。HALDB 区画を削除するには、DELETE.PART コマンドを使用します。指定されたデータベース、または HALDB データベースの区分が使用中である場合は、コマンドが失敗し、RECON レコードはどれも削除されません。

サブセクション:

- 『構文』
- 184 ページの『キーワード』
- 184 ページの『レコードの RECON データ・セットからの削除例』

構文

▶▶—DELETE.DB—DBD(*name*)————▶▶

キーワード

DBD(*name*)

削除するデータベースの名前を識別する必須キーワード。

name と同じデータベース名を持つすべてのデータベース、DBDS、割り振り、イメージ・コピー、リカバリー、および再編成レコードが削除されます。さらに、対応する DBDS レコードが削除されたエントリーを削除するために、すべての CA グループと DBDS グループのレコードがスキャンされます。また、対応する DBDS レコードが削除された、割り振りリスト内のエントリーを削除するために、すべてのログ割り振りレコードもスキャンされます。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.DB コマンドの場合、*name* には HALDB マスター・データベースの名前を指定します。

レコードの **RECON** データ・セットからの削除例

この例では、DBD キーワードで示されるデータベースおよびそれに対応する DBDS のレコードを RECON から削除します。

```
//DELDB    JOB
:
//SYSIN    DD    *
           DELETE.DB  DBD(THISDB)
/*
```

関連概念:

 PHDAM、PHIDAM、および PSINDEX データベース内の区画 (データベース管理)

DELETE.DBDS コマンド

DELETE.DBDS コマンドは、指定した DBDS または DEDB エリアに関連する全レコードを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

レコードを削除する DBDS が CA グループまたは DBDS グループに属している場合は、その名前がグループ・レコードから除去されます。DL/1 データベースまたは高速機能 DEDB エリアが使用中の場合は、DELETE.DBDS コマンドは失敗します。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.DBDS コマンドを使用して HALDB 区画から DBDS を削除することはできません。HALDB 区画およびその DBDS のすべてを削除するには、DELETE.PART コマンドまたは HALDB 区画定義ユーティリティを使用してください。

サブセクション:

- 185 ページの『構文』
- 185 ページの『キーワード』
- 185 ページの『DBDS レコードの削除例』

構文

▶▶—DELETE.DBDS—DBD(*name*)—┐—DDN(*name*)—┐—————▶▶
 └—AREA(*name*)—┘

キーワード

DBD(*name*)

全レコードが削除する DBDS または DEDB エリアのデータベース名を指定する必須キーワード。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、全レコードが RECON データ・セットから削除される DBDS またはエリアの DD 名を指定します。

DBDS レコードの削除例

この例では DBD および DDN キーワードで示される DBDS のレコードを RECON から削除します。

```
//DELD BDS JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.DBDS DBD(DBDESDSA) DDN(DDNESDSA)
/*
```

DELETE.DBDSGRP コマンド

DELETE.DBDSGRP コマンドは、指定した DBDS グループのレコードを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『DBDS グループ・レコードの削除例』

構文

▶▶—DELETE.DBDSGRP—GRPNAME(*name*)—————▶▶

キーワード

GRPNAME(*name*)

削除する DBDS グループの名前を指定する必須キーワード。指定する名前は RECON データ・セットで識別されているグループの名前である必要があります。

DBDS グループ・レコードの削除例

この例では、RECON データ・セットから DBDS グループ・レコードを削除します。

```

//DELDDBGP  JOB
:
//SYSIN      DD  *
      DELETE.DBDSGRP  GRPNAME(DBDSGRP1)
/*

```

DELETE.IC コマンド

DELETE.IC コマンドは、イメージ・コピー・レコードまたは 2 番目のイメージ・コピー・データ・セットに関する情報を削除するのに使用します。

ICDSN2 キーワードを指定すると、2 番目のイメージ・コピー・データ・セットに関する情報だけが削除され、このパラメーターを指定しない場合は、すべてのイメージ・コピー・レコードと 2 番目のイメージ・コピー・データ・セットに関する情報の両方が削除されます。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 187 ページの『イメージ・コピー・レコードからの情報の削除例』

構文

```

▶▶—DELETE.IC—DBD(name)—┌—DDN(name)—┐—RECTIME(time_stamp)—▶▶
                        └—AREA(name)—┘
▶└—ICDSN2(name)—┘▶▶

```

キーワード

DBD(*name*)

削除するイメージ・コピー・レコードを示す必須キーワード。 *name* は関連する DBDS または DEDB エリアのデータベース名です。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.IC コマンドの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、削除するイメージ・コピー・レコードを示します。 *name* は関連する DBDS または DEDB エリアの名前です。

RECTIME(*time_stamp*)

削除する特定のイメージ・コピー・レコードを示す必須キーワード。 IMAGE レコードのリストで、横にアスタリスク (*) のマークが付いている実行時間を使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

ICDSN2(*name*)

イメージ・コピー・レコードから重複イメージ・コピー・データ・セットの情報を削除するとき、その名前を指定するオプション・キーワード。(最初のイメージ・コピー・データ・セットのレコードは RECON データ・セットに残ります。)

イメージ・コピー・レコードからの情報の削除例

この例では、重複イメージ・コピー・データ・セットに関する情報を RECON データ・セットのイメージ・コピー・レコードから削除します。キーワード DBD、AREA、ICDSN2、および RECTIME は、削除される情報を示します。ICDSN2 キーワードに含まれるアスタリスク (*) は、イメージ・コピー・データ・セットのデフォルトの命名規則に従って、DBRC が拡張します。

```
//DELIC JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.IC DBD(DBDKSDS1) AREA(AREA006) -
RECTIME(07123122322123456) ICDSN2(IMS.*.ICDSN5)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DELETE.LOG コマンド (OLDS 用)

DELETE.LOG OLDS コマンドは、OLDS レコードからデータ・セット・エントリを削除するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 188 ページの『暫定 OLDS レコードの削除例』

構文

```
▶▶ DELETE.LOG—OLDS(ddname) —┬─ INTERIM ┬─ LASTCLOS ┬─ SSID(name) ┬─▶▶
```

キーワード

OLDS(ddname)

1 次 OLDS の DD 名を指定する必須キーワード。DBRC は、指定された *ddname* を持つ指定サブシステムの 1 次および 2 次 OLDS の RECON レコードを削除します。OLDS のレコードを削除できるのは、OLDS がアーカイブ済みである場合のみです。

INTERIM

暫定 OLDS レコードの削除を指定するオプション・キーワード。

LASTCLOS

OLDS キーワードで指定された OLDS が PRIOLDS レコード内の最後の OLDS であり、それを削除する必要があることを指定するオプション・キーワード。このキーワードの使用には注意が必要です。通常、PRIOLDS レコードの最後の OLDS は、最後にクローズされた OLDS であり、それを削除してはなりません。最初の OLDS がエラーのために空になっている場合は、後続の再始動で、最初の OLDS をクローズしてください。

SSID(*name*)

RECON レコードを削除するログ・データ・セットを作成した IMS サブシステム名を指定するために使用するオプション・キーワード。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名から成る任意の英数字の 8 桁の文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトのサブシステム ID を設定するには、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを設定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

暫定 OLDS レコードの削除例

この例では、RECON データ・セットから暫定 OLDS レコードを削除します。

```
//DELLOG JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.LOG SSID(IMSA) OLDS(DFSOLP03) -
INTERIM
/*
```

DELETE.LOG コマンド (RLDS および SLDS 用)

DELETE.LOG コマンドは、PRILOG および SLDS レコードを削除したり、これらのレコードから単一のデータ・セット・エントリを削除するために、および PRILOG レコードが最大 RECON レコード・サイズを超えるのを防止するために使用します。

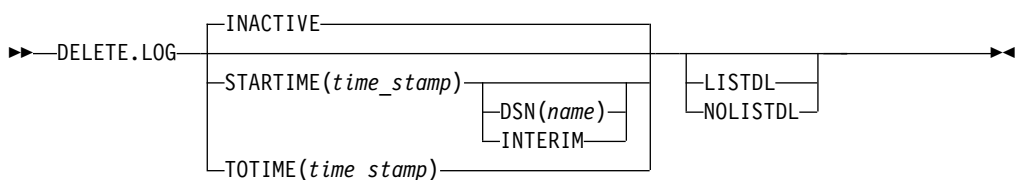
以下のレコードを削除できます。

- PRILOG ファミリーのレコード
- PRILOG ファミリーからの 1 つのデータ・セット
- 一部またはすべての非アクティブ PRILOG ファミリー

サブセクション:

- 『構文』
- 189 ページの『キーワード』
- 191 ページの『RLDS および SLDS レコードの削除例』

構文



キーワード

INACTIVE | **STARTIME(*time_stamp*)** | **TOTIME(*time_stamp*)**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、削除するレコードを指定します。

ログが非アクティブであると見なされるためには、以下の条件をすべて満たしている必要があります。

- ログには、DBRC が認識している最も古いイメージ・コピー・データ・セットより新しい DBDS 変更レコードは含まれていない (LOGALL レコードが空)。
- INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドで指定されたログ保存期間より古いログである。
- ログが終了している (停止時刻が非ゼロ) か、PRILOG または SECLOG レコードのエラー・フラグがオンに設定されている。
- ログが終了している場合、PRILOG または SECLOG レコード内の停止時刻はログの保管期間より古くなければなりません。

INACTIVE

非アクティブの PRILOG とそれに関連したログ・レコードを削除します。INACTIVE がデフォルトです。

DELETE.LOG INACTIVE コマンドを発行すると、DBRC はアクティブな PRILOG レコードも検査して、それらのレコードを圧縮する (レコード内の非アクティブ・データ・セット・エントリーを削除する) かどうかを判断します。データ・セット・エントリーは、次の 3 つの条件すべてが満たされている場合に非アクティブと定義されます。

- INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドで指定されたログ保存期間より古い。
- RECON データ・セットに登録されているデータベースのリカバリーに必要な最も古いログ・ボリュームより古い。
- システム再始動に必要な最初のチェックポイントより古い。

INACTIVE は、上記の 3 つの条件のすべてが満たされていないログについては、PRILOG および SECLOG レコードを削除しません。ほとんどのログは上記の条件を満たしています。3 つの条件すべてを満たしていないログには、DELETE.LOG STARTIME(*time_stamp*) コマンドを使用してください。

推奨事項: 必ず適切なログ保存期間を指定し、ログ情報が十分に長い期間にわたって RECON データ・セットに保持されるようにしてください。一定の IMS 機能は RECON データ・セット内のログ情報に依存しており、情報が早く削除されすぎると、これらの機能が失敗に終わることがあります。例えば、以下の機能の 1 つ以上が失敗に終わる可能性があります。

- 動的バックアウト
- バッチ・メッセージ処理 (BMP) の拡張再始動 (XRST)
- 作業単位テーブル項目 (UOWE) の再同期

STARTIME(*time_stamp*)

削除するログ・レコードの開始時刻を指定します。 PRILOG および SECLOG レコードのリストで、横にアスタリスク (*) が付いているタイム・スタンプを使用します。

DSN(*name*)

特定の (トラッキング・サイトに置かれている) ログ・データ・セットの RLDS または SLDS レコードに入っているエントリーを削除するときに、そのデータ・セット名を指定する (STARTIME と一緒に使用される) オプション・キーワード。指定するデータ・セット名は 1 つ以上の、1 次あるいは 2 次 RLDS および SLDS レコードに存在していてもかまいません。指定するデータ・セットと同じ範囲のログ・シーケンス番号を持つすべてのエントリーが削除されます。

トラッキング・サイトにあるトラッキング・ログ・データ (アクティブ・サイトにあるログ・データの部分コピー) だけが削除に適格です。

削除されるデータ・セットがログ・レコード内で最後のものであり、クローズしている場合は、ログ停止時刻はゼロに設定されており、レコードの終わりにデータ・セットのギャップがあることを示しています。

DSN を指定しないと、すべての RLDS または SLDS レコードが削除されます。

注: STARTIME は、DSN と一緒に指定する必要があります。

TOTIME、INTERIM、または TRACKING は DSN と一緒に指定できません。

INTERIM

削除する暫定 RLDS および暫定 SLDS レコードを指定するオプション・キーワード。

注: DSN を指定した場合は、INTERIM を指定できません。 INTERIM を指定する場合は、STARTIME も指定する必要があります。

TOTIME

終了時刻が、TOTIME キーワードで指定された時刻より前の、すべての非アクティブ RLDS および SLDS のレコードを削除することを指定します。指定する時刻は、現在時刻からログ保存期間を差し引いた時刻より前の時刻であることが必要です。 タイム・スタンプは標準形にする必要があります。 PRILOG が、指定した TOTIME より古く、しかも依然としてアクティブである場合は、PRILOG が検査され、レコード内で非アクティブなすべてのデータ・セット・エントリーが削除されます。

制約事項: TOTIME および DSN パラメーターは、同時に指定できません。

LISTDL | NOLISTDL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON から削除されたデータ・セットの名前をジョブ出力にリストするかどうかを指定します。これらのキーワードは、デフォルトをオーバーライドします。デフォルトは INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドで指定された値です。

LISTDL

削除されたデータ・セット名をジョブ出力にリストすることを指定します。

NOLISTDL


削除されたデータ・セット名をジョブ出力にリストしないことを指定します。

RLDS および SLDS レコードの削除例

この例では、STARTIME キーワードで示される暫定 RLDS と暫定 SLDS レコードを RECON データ・セットから削除します。

```
//DELLOG JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.LOG STARTIME(07054121212023456)-
INTERIM
/*
```

関連概念:

 不要な RECON レコードの削除 (システム管理)

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DELETE.PART コマンド

DELETE.PART コマンドは、HALDB 区画と、RECON データ・セット内に記録されているその区分に関連したすべての情報を RECON データ・セットから削除するのに使用します。

指定された区分、またはこの削除で影響を受ける他の区分が使用中である場合は、コマンドが失敗し、RECON レコードはどれも削除されません。

制約事項: HALDB 区画に属する個々の DBDS を DELETE.DBDS コマンドで削除することはできません。DELETE.PART コマンドを発行した場合、この区分に関連するすべての DBDS と、それらの DBDS のリカバリーに関連するすべてのレコード (ALLOC、IMAGE、RECOV、REORG レコードなど) が除去されます。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 192 ページの『RECON からの区分の削除例』

構文

▶▶—DELETE.PART—DBD(*name*)—PART(*name*)—▶▶

キーワード

DBD(*name*)

区分削除の対象となる HALDB を識別するのに使用する必須キーワード。

PART(*name*)

削除する HALDB 区画名を識別するための必須キーワード。

RECON からの区分の削除例

この例では、DBD および NAME キーワードで識別される区分とそれに対応する DB および DBDS に関するレコードを、RECON データ・セットから削除します。

```
//DELPART JOB
//SYSIN DD *
DELETE.PART DBD(DB3) PART(PART3)
/*
```

関連概念:

 PHDAM、PHIDAM、および PSINDEX データベース内の区画 (データベース管理)

DELETE.RECOV コマンド

DELETE.RECOV コマンドは、指定したリカバリー実行レコードを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

タイム・スタンプ・リカバリーのリカバリー実行レコードに対して DELETE.RECOV を指定した場合は、そのレコードに関連した DBDS または DEDB エリアが復元済みであることを暗黙指定していることとなります。それは、削除しようとしているリカバリー実行レコードを作成したタイム・スタンプ・リカバリーの直前の状態に復元済みです。また、このような削除では、タイム・スタンプ・リカバリーの発生後に、IMS ログ・データ・セットに変更レコードを生成した DBDS または DEDB エリアの割り振りが行われていなかったということも暗黙指定します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 193 ページの『DBDS のリカバリー・レコードの削除例』

構文

```
▶▶—DELETE.RECOV—DBD(name)—┬—DDN(name)—┬—RECTIME(time_stamp)—▶▶
                               └—AREA(name)—┘
```

キーワード

DBD(*name*)

削除するリカバリー・レコードを示す必須キーワード。*name* は関連した DBDS または DEDB エリアのデータベース名です。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.RECOV コマンドの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | **AREA**(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、削除するリカバリー・レコードを示します。*name* は関連した DBDS または DEDB エリアの名前です。

RECTIME(*time_stamp*)

削除するリカバリー実行レコードのタイム・スタンプを指定する必須キーワード。RECOV レコードのリストで、横にアスタリスク (*) が付いているタイム・スタンプを使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DBDS のリカバリー・レコードの削除例

この例では、DBD および DDN キーワードで示される DBDS のリカバリー・レコードを RECON データ・セットから削除します。削除されるレコードは RECTIME キーワードで示されます。

```
//DELRECOV JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.RECOV DBD(DBDESDB) DDN(DDNESDB) -
RECTIME(07089191919023456)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DELETE.REORG コマンド

DELETE.REORG コマンドは、指定した DBDS のデータベース再編成レコードを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

DELETE.REORG コマンドを指定する場合は、DBDS および IMS DBD ライブラリーが、データベース再編成レコードを作成した再編成が行われる前の状態に復元されていることを暗黙指定することになります。また、DELETE.REORG コマンドを使用すると、IMS ログ・データ・セットにレコードを生成した再編成データベースの割り振りが行われなかったことも暗黙指定されます。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 194 ページの『DBDS の再編成レコードの削除例』

構文

▶▶—DELETE.REORG—DBD(*name*)—DDN(*name*)—RECTIME(*time_stamp*)—▶▶

キーワード

DBD(*name*)

削除する再編成レコードを示す必須キーワード。*name* は関連した DBDS のデータベース名です。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.REORG コマンドの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*)

削除する再編成レコードを示す必須キーワード。*name* は関連した DBDS のデータ・セット DD 名です。

RECTIME(*time_stamp*)

削除する特定のデータベース再編成レコードを示す必須キーワード。REORG レコードのリストで、横にアスタリスク (*) が付いているタイム・スタンプを使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DBDS の再編成レコードの削除例

この例では、DBDS の再編成レコードを RECON データ・セットから削除します。

```
//DELREORG JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.REORG DBD(DBDESDB) DDN(DDNESDB) -
RECTIME(07023110223423456)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DELETE.SUBSYS コマンド

DELETE.SUBSYS コマンドは、指定したサブシステムがデータベースの使用許可は何も持っていないことを確認してから、RECON データ・セットのサブシステム・エントリーを削除するのに使用します。

サブシステム・ログをクローズするには、NOTIFY.PRILOG コマンドを実行してから、DELETE.SUBSYS コマンドを実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『指定された SUBSYS レコードの削除例』

構文

▶—DELETE.SUBSYS—SSID(*name*)—▶

キーワード

SSID(*name*)

サブシステムが許可しているデータベースがない場合、RECON からエントリーを削除するサブシステムを示すための必須キーワード。

このコマンドをオンラインで出す場合、コマンドが出された IMS 制御領域は削除するサブシステムにはなり得ません。

指定された SUBSYS レコードの削除例


この例では、サブシステムに許可されているデータベースがない場合には、指定された SUBSYS レコードが削除されます。

```
//DELSBSYS JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.SUBSYS SSID(IMS34)
/*
```

関連資料:

160 ページの『CHANGE.SUBSYS コマンド』

関連情報:

 DSP0045I (メッセージおよびコード)

DELETE.UIC コマンド

DELETE.UIC コマンドは、標準外イメージ・コピー・データ・セットを RECON データ・セットから削除するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『標準外イメージ・コピー・データ・セット・レコードの削除例』

構文

```
→→DELETE.UIC—DBD(name)—┬—DDN(name)—┬—RECTIME(time_stamp)—→→
                          └—AREA(name)—┘
```

キーワード

DBD(*name*)

削除する標準外イメージ・コピー・レコードを示す必須キーワード。 *name* は関連した DBDS またはエリアのデータベース名です。

HALDB データベースの制約事項: DELETE.UIC コマンドの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、削除する標準外イメージ・コピー・レコードを示します。 *name* は関連した DBDS または DEDB エリアの名前です。

RECTIME(*time_stamp*)

削除する標準外イメージ・コピー・レコードのタイム・スタンプを指定する必須キーワード。 IMAGE レコードのリストで、横にアスタリスク (*) が付いているタイム・スタンプを使用してください。 タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

標準外イメージ・コピー・データ・セット・レコードの削除例

この例では、標準外イメージ・コピー・データ・セットを RECON データ・セットから削除する方法を示します。

```
//DELUIC JOB
:
//SYSIN DD *
DELETE.UIC DBD(DBDESDB) AREA(AEAESD2) -
RECTIME(07087121212023456)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

第 13 章 GENJCL コマンド

GENJCL コマンドは、さまざまな IMS リカバリー・ユーティリティーを実行する JCL ステートメントとユーティリティー制御ステートメントを生成するために使用します。

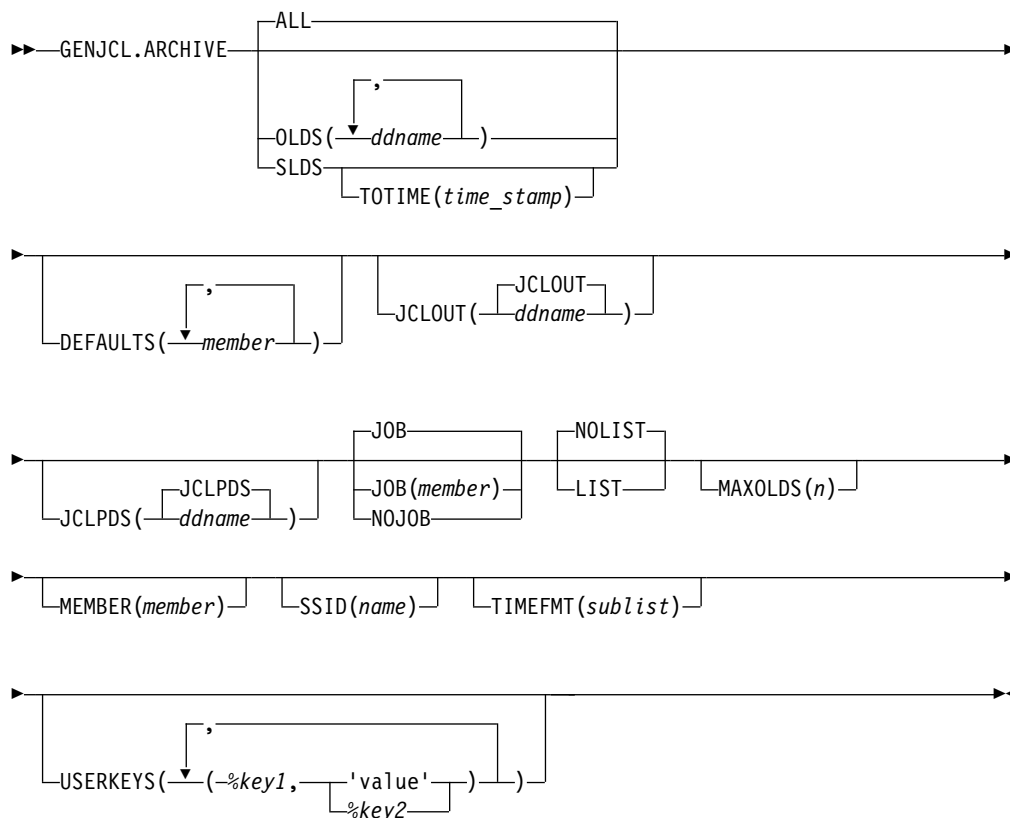
GENJCL.ARCHIVE コマンド

GENJCL.ARCHIVE コマンドは、ログ保存ユーティリティーを実行する JCL とユーティリティー制御ステートメントの生成に使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 198 ページの『キーワード』
- 200 ページの『例』

構文



キーワード

ALL | OLDS(*ddname*) | SLDS

互いに排他的なオプション・キーワードであり、アーカイブする OLDS を指定するため、またはトラッキング SLDS のアーカイブを要求するために使用します。

ALL

アーカイブされていないすべての OLDS をアーカイブするための JCL を生成します。次のいずれかの条件が満たされている場合には、複数ステップから成るジョブを生成することができます。

- 指定されたサブシステムに不連続な OLDS がある。
- /DBRECOVERY の入力後、強制 EOVS 条件が生じた。

OLDS

アーカイブする 1 次 OLDS の DD 名を指定します。

SLDS

アーカイブされていない、指定されたサブシステムに関連したすべてのトラッキング SLDS をアーカイブするための JCL を生成します。PRISLD または SECSLD (あるいはその両方) に、アーカイブが必要な不連続データ・セット・エントリーがあるか、指定された MAXOLDS 値より多くのアーカイブされていない DSN がある場合には、複数ステップのジョブを生成することができます。

TOTIME(*time_stamp*)

開始時刻が *time_stamp* かそれ以前のトラッキング・ログ・データ・セットのみをアーカイブすることを指定します。このキーワードは、オプションであり、SLDS も指定された場合にのみ有効です。それ以外の場合は無視されます。タイム・スタンプは標準フォーマットにする必要があります。

DEFAULTS(*member*)

JCL の生成時に使用される基幹 JCL のデフォルトのメンバーを 10 個まで指定するためのオプション・キーワードです。キーワードを変換するために、デフォルトのメンバーがこのキーワードに指定された順序で検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

JCLOUT(JCLOUT | *ddname*)

生成された JCL の出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。指定されたデータ・セットは、デフォルトの JCLOUT に使用されたデータ・セットと同じものでない限り、区分データ・セット (PDS) のメンバーでも構いません。

JCLPDS(JCLPDS | *ddname*)

JCL を生成するときに、入力として使用される基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。*ddname* によりデータ・セットを指定します。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。

JOB | JOB(member) | NOJOB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを生成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。JOB(member) を指定した場合は、指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成する JCL 内に JOB ステートメントを作成しないことを指定します。

NOLIST | LIST

互いに排他的なオプション・キーワードであり、SYSPRINT データ・セットを使用して、生成された JCL を印刷するかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MAXOLDS(*n*)

単一ジョブでアーカイブされる OLDS または SLDS の最大数を指定するオプション・キーワード。 *n* には 1 から 100 の任意の 10 進数を指定できます。

MAXOLDS を指定し、かつ、アーカイブが必要な OLDS が *n* で指定した数より多い場合には、複数のジョブが生成されます。生成されたそれぞれのジョブがアーカイブする OLDS の数は、*n* 個以下です。

このキーワードの機能は、SLDS と OLDS では若干異なります。MAXOLDS を指定し、かつ、アーカイブが必要な SLDS が *n* で指定した数より多い場合には、複数のジョブ・ステップが生成されます。生成されたそれぞれのジョブ・ステップがアーカイブする SLDS の数は、*n* 個以下です。

MAXOLDS は 1 次データ・セットにのみ適用されます。重複ロギングが有効な場合は、それぞれのジョブは、2 次データ・セット用および 1 次データ・セット用の DD ステートメント (つまり、 $2 \times n$ 個のデータ・セット用の DD ステートメント) を持つことができます。

MAXOLDS を指定しない場合は、すべての OLDS または SLDS に対して単一ジョブが生成されます。

MEMBER(member)

使用する基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定するオプション・キーワード。このキーワードを指定しない場合は、GENJCL.ARCHIVE コマンド用の IBM 提供の実行メンバーが使用されます。

SSID(name)

アーカイブされる OLDS または SLDS を作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名から成る任意の英数字の 8 桁の文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘ

ッダー・レコードにデフォルトのシステム ID を設定するには、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを設定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

TIMEFMT(*sublist*)

ユーザー定義の出力内で、タイム・スタンプを表すフォーマットを定義するオプション・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基幹 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドが有効なのは、単一の GENJCL コマンドの実行中だけです。

USERKEYS(%*key1*, '*value*' | %*key2*)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%key1

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z、0-9) でなければなりません。

'value'

ユーザー定義のキーワードに割り当てられた値。*value* は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。*value* の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。*value* 自体に引用符が含まれている場合は、2 つの単一引用符を指定します。(例えば、*value* が TRK'S である場合は、'TRK'S' と指定します)。*value* にはヌル・ストリング (') も指定できます。*value* がタイム・スタンプである場合は、0 に設定できます。

%key2

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

例

ここでは、GENJCL.ARCHIVE コマンドの使用例をいくつか示します。

OLDS パラメーターで定義された 1 次 **OLDS** の例

この例では、OLDS キーワードによって定義された 1 次 OLDS に対してログ保存ユーティリティーを実行するために必要な JCL と制御ステートメントが

GENJCL.ARCHIVE コマンドで生成されます。このコマンドが実行されると、RECON データ・セット内の PRIOLDS レコードが更新され、OLDS のアーカイブがスケジュールされたことを示します。JCLPDS DD ステートメントで示されるデータ・セットからデフォルトの基幹メンバー ARCHJCL を取り出します。生成された JCL は、JCLOUT DD ステートメントで示されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJAR JOB
//JCLOUT DD . . .
//JCLPDS DD . . .

:
//SYSIN DD *
GENJCL.ARCHIVE SSID(IMSA) -
OLDS(DFSOLP01,DFSOLP02)
/*
```

アーカイブ処理の一環として、RECON データ・セットの PRIOLDS レコードが更新され、アーカイブが完了したことを示します。作成された SLDS を識別する PRISLD および SECSLD レコードで RECON データ・セットが更新されます。さらに、作成された RLDS を識別する PRILOG および SECLOG レコードで RECON データ・セットが更新されます。

1 次 OLDS を定義する SSID IMSB OLDS キーワードの例

この例では、GENJCL.ARCHIVE コマンドにより、SSID IMSB の OLDS キーワードで定義されている 1 次 OLDS をアーカイブするための JCL を生成します。PDSJCL DD ステートメントで示される JCLPDS データ・セットから、JCL 実行メンバー ARCHJCLA を取り出します。生成された JCL は、OUTJCL DD ステートメントで示される SYSOUT=A に入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJAR1 JOB
//OUTJCL DD SYSOUT=A
//PDSJCL DD DSN=dsname
//SYSIN DD *
GENJCL.ARCHIVE SSID(IMSB) OLDS(DFSOLP01) MEMBER(ARCHJCLA) -
JCLPDS(PDSJCL) JCLOUT(OUTJCL)
```

アーカイブされていないデフォルトのサブシステム OLDS の例

この例では、GENJCL.ARCHIVE コマンドによって、デフォルトのサブシステム ID の、アーカイブされていない OLDS すべてをアーカイブするための JCL と制御ステートメントを生成します。

JCLPDS DD ステートメントで示された JCLPDS データ・セットから、JCL 実行メンバー ARCHJCLB を取り出します。JCLPDS データ・セット (JCLPDS DD ステートメントで示される) からのメンバー DEFARC01 には、ARCHJCLB にあるユーザー定義のキーワードを変換するための値が入っています。%SPACE はメンバー ARCHJCLB にあるユーザー定義のキーワードであり、値 'CYL,1' が割り当てられます。%RSPACE はメンバー ARCHJCLB にあるユーザー定義のキーワードであり、値 'TRK,4' が割り当てられます。

USERKEYS キーワードでキーワードに指定された値は、DEFAULTS メンバーに含まれている値をオーバーライドします。JOB1 は JOB ステートメントを作成する JCLPDS 内のメンバーです。

```
//GENJAR2 JOB
//JCLPDS DD . . .
//JCLOUT DD . . .
//SYSIN DD *
GENJCL.ARCHIVE MEMBER(ARCHJCLB) DEFAULTS(DEFARC01) -
USERKEYS((%SSPACE,'CYL,1'),(%RSPACE,'TRK,4')) JOB(JOB1)
```

関連資料:

249 ページの『JCL とユーザー定義出力の生成』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

252 ページの『基幹 JCL の構文』

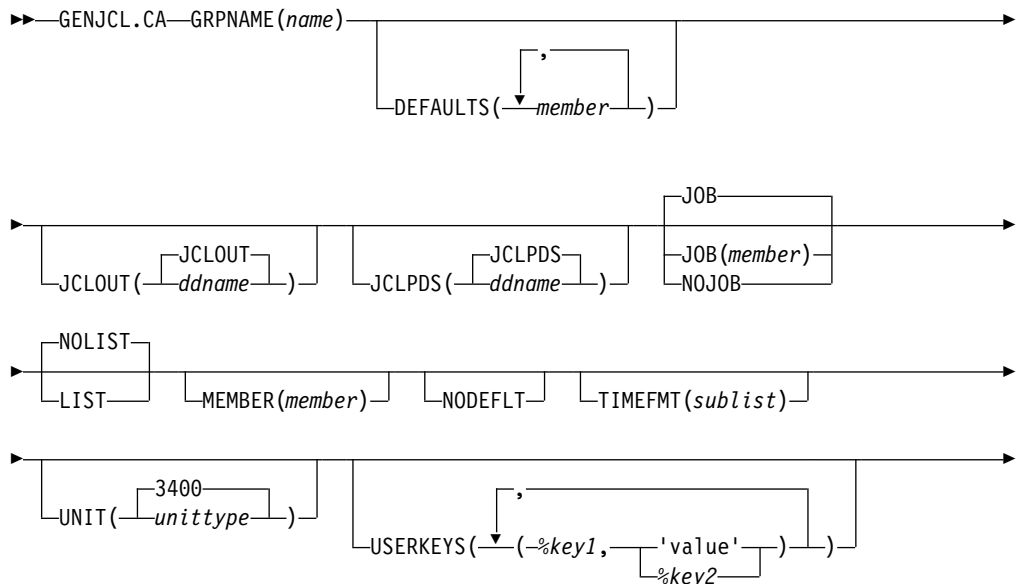
GENJCL.CA コマンド

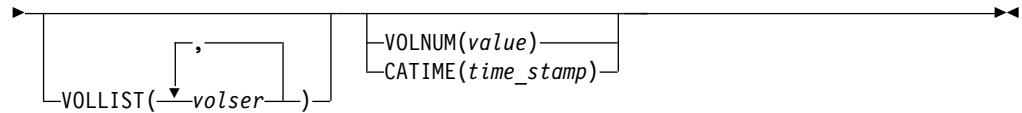
GENJCL.CA コマンドは、指定した CA グループに対して変更累積ユーティリティーを実行するための JCL とユーティリティー制御ステートメントを生成するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 203 ページの『キーワード』
- 205 ページの『例』

構文





キーワード

GRPNAME(*name*)

変更累積ユーティリティーを実行する CA グループの名前を指定する必須キーワード。

DEFAULTS(*member*)

JCL の生成時に使用する基幹 JCL のデフォルトのメンバーの名前を 10 個まで指定するオプション・キーワード。キーワードを変換するために、デフォルトのメンバーがこのキーワードに指定された順序で検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

JCLOUT(**JCLOUT** | *ddname*)

生成された JCL の出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。デフォルトの JCLOUT で使用するデータ・セットと同じでない場合のみ、指定するデータ・セットは区分データ・セットのメンバーでも構いません。

JCLPDS(**JCLPDS** | *ddname*)

JCL を生成するときに、入力として使用される基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。

JOB | **JOB**(*member*) | **NOJOB**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成する JCL 内に最初の JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを生成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。

JOB(*member*)

指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成する JCL 内に JOB ステートメントを作成しないことを指定します。

NOLIST | **LIST**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成された JCL を SYSPRINT データ・セットに書き込むかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MEMBER(*member*)

使用する基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。このキーワードを指定しない場合は、CA グループに指定したデフォルトが使用されます。

NODEFLT

CA グループに暗黙の基幹 JCL のデフォルトのメンバーがあっても、それは使用しないことを指定するオプション・キーワード。

TIMEFMT(*sublist*)

ユーザー定義の出力内で、タイム・スタンプを表すフォーマットを定義するオプション・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基幹 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドが有効なのは、単一の GENJCL コマンドの実行中だけです。

UNIT(3400 | *unittype*)

変更累積データ・セット出力の装置タイプを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、次の条件が両方満たされたときにのみ有効です。

- VOLLIST キーワードが指定されている。
- JCL を生成する CA グループが、NOREUSE キーワードで定義されている。

USERKEYS(%*key1*, '*value*' | %*key1*, %*key2*)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%*key1*

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z, 0-9) でなければなりません。

'*value*'

ユーザー定義のキーワードを検出したときに、それに割り当てる値。*value* は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。*value* の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。*value* に引用符が含まれている場合、単一引用符を 2 つ使用します。*value* にはヌル・ストリング (') も指定できます。*value* がタイム・スタンプである場合は、0 でも構いません。

%*key2*

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

VOLLIST(*volser*)

変更累積データ・セットの入るボリュームを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、JCL が生成される CA グループが NOREUSE パラメーターで定義されている場合にのみ有効です。

VOLNUM(*value*) | **CATIME**(*time*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、変更累積ユーティリティーが使用するログ・ボリュームを指定するために使用します。

VOLNUM(*value*)

それぞれの変更累積ジョブ・ステップごとに、使用するログ・ボリュームの数を指定します。DBRC は、それぞれのステップで変更累積ユーティリティーを呼び出す複数ステップのジョブを生成します (VOLLIST を指定しない限り)。さらに、それぞれのステップごとのログ・ボリュームの数をこのパラメーターで指定された値で制限します。サブセット処理を行うために他のボリュームが必要な場合は、VOLNUM を DBRC でオーバーライドすることができます。また、DBRC は、以下の理由でも VOLNUM をオーバーライドすることがあります。

- CATDS が指定されており、データ・セット・エントリーが複数のボリュームにまたがっている。
- 複数のログ・ボリュームが同じ開始時刻になっている。
- ログ・ボリュームの開始時刻と停止時刻が同じになっている。

value にはログ・ボリュームの数を指定します。1 から 255 の 10 進数を指定することができます。

2 番目以降のジョブ・ステップはそれぞれ、(前のステップで生成された) 変更累積データ・セットをそのステップにおける累積の開始点として使用します。

CATIME(*time_stamp*)

指定された CA グループのログ・ボリュームがそれ以降含まれていない時刻を指定します。そのタイム・スタンプは、いずれかのログ・ボリュームの停止時刻である必要はありません。DBRC は、タイム・スタンプをログ・ボリューム・サブセットの終了分離文字として使用します。したがって、開始時刻が、指定されたタイム・スタンプより小さいか等しいログ・ボリュームはすべて、ボリュームのサブセットに含まれます。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

例

ここでは、GENJCL.CA コマンドの使用例をいくつか示します。

GRPNAME CA グループの例

この例では、GENJCL.CA コマンドは、GRPNAM キーワードで示される CA グループについて変更累積ユーティリティーを実行するのに必要な JCL と制御ステートメントを生成します。CAGRP1 は REUSE として定義されています。CAGRP1 について INIT.CAGRP コマンドを CAJCL(member) キーワードなしで指定した場合は、JCLPDS DD ステートメントで示されるデータ・セットからデフォルトの基幹メンバー CAJCL を使用します。CAJCL(member) キーワードを使用して INIT.CAGRP を指定した場合は、そのメンバーが使用されます。生成された JCL は、JCLOUT DD ステートメントで示されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJCA JOB
//JCLPDS DD . . .
//JCLOUT DD . . .

:
//SYSIN DD *
GENJCL.CA GRPNAM(CAGRP1)
/*
```

CAJCLA によって生成される基幹 JCL の例

この例では、PDSJCL DD ステートメントが示す JCLPDS データ・セットから取り出される基幹 JCL 実行メンバー CAJCLA によって、GENJCL.CA コマンドが生成されます。生成された JCL からの出力は、OUTJCL DD ステートメントが示す SYSOUT=A に入ります。CAGRP2 は、NOREUSE キーワードで定義されています。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJCA1 JOB
//OUTJCL DD SYSOUT=A
//PDSJCL DD DSN=dsname
//SYSIN DD *
GENJCL.CA GRPNAM(CAGRP2) VOLLIST(VOL001) MEMBER(CAJCLA) -
JCLPDS(PDSJCL) JCLOUT(OUTJCL)
```

CAJCLB によって生成される基幹 JCL の例

この例では、GENJCL.CA コマンドは、CAGRP3 について変更累積ユーティリティーを実行するための JCL と制御ステートメントを生成します。CAGRP3 は REUSE として定義されています。JCLPDS DD ステートメントで示されている JCLPDS データ・セットから JCL 実行メンバー CAJCLB を取り出します。

DEFAULTS(DEFCA01) は JCLPDS データ・セットのメンバーであり、メンバー CAJCLB にあるユーザー定義のキーワードを変換するための値を含んでいます。CAGRP のデフォルト・メンバーが INIT.CAGRP DEFLTJCL(MEMBER) コマンドで、初期化されている場合は、このメンバーもキーワードの変換で使用されます。%DISP はメンバー CAJCLB にあるユーザー定義のキーワードであり、値 'SHR' が割り当てられます。%OUTCLS はメンバー CAJCLB にあるユーザー定義のキーワードであり、値 'B' が割り当てられます。

明示的に定義された DEFAULTS メンバーの値は、事前定義された DEFLTJCL メンバーの値をオーバーライドします。USERKEYS キーワードでキーワードに指定された値は、DEFAULTS メンバーに含まれている値をオーバーライドします。JCL は JOB ステートメントなしで生成されます。開始時刻が、指定されたタイム・スタ

ンプより小さいか等しいボリュームはすべて、変更累積ユーティリティーへの入力として使用されるボリュームのサブセットに含まれます。生成された JCL はリストされます。

```
//GENJCA3 JOB
//JCLPDS DD
//JCLOUT DD
//SYSIN DD *
GENJCL.CA GRPNAME(CAGRP3) MEMBER(CAJCLB) DEFAULTS(DEFCA01) -
USERKEYS((%DISP,'SHR'),(%OUTCLS,'B')) NOJOB LIST -
CATIME(071020202111)
```

関連資料:

249 ページの『JCL とユーザー定義出力の生成』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

252 ページの『基幹 JCL の構文』

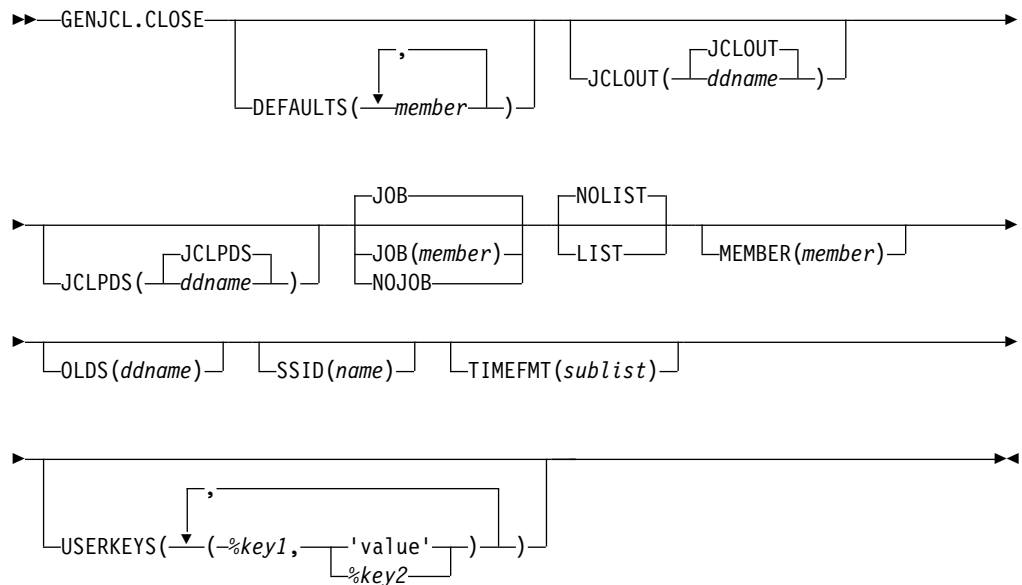
GENJCL.CLOSE コマンド

GENJCL.CLOSE コマンドは、ログ・リカバリー・ユーティリティーを実行する JCL とユーティリティー制御ステートメントを生成して、WADS を使用している OLDS をクローズするのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 208 ページの『キーワード』
- 210 ページの『例』

構文



キーワード

DEFAULTS(*member*)

JCL の生成時に使用される基幹 JCL のデフォルトのメンバーを 10 個まで指定するオプション・キーワード。キーワードを変換するために、デフォルトのメンバーがこのキーワードに指定された順序で検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

JCLOUT(**JCLOUT** | *ddname*)

生成された JCL の出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。デフォルトの JCLOUT で使用するデータ・セットと同じでない場合のみ、指定するデータ・セットは区分データ・セットのメンバーでも構いません。

JCLPDS(**JCLPDS** | *ddname*)

JCL を生成する際に入力として使用する基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。

JOB | **JOB**(*member*) | **NOJOB**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを作成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。

JOB(*member*)

指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成される JCL 内に JOB ステートメントが作成されないことを指定します。

NOLIST | **LIST**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成された JCL を SYSPRINT データ・セットに書き込むかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MEMBER(*member*)

使用する基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定するオプション・キーワード。このキーワードを指定しない場合は、GENJCL.CLOSE コマンド用の IBM 提供の実行メンバーが使用されます。

OLDS(*ddname*)

クローズする OLDS を指定するオプション・キーワード。オンラインの IMS

サブシステムがログ・データを作成したときに使用した DD ステートメントの名前を指定します。1 次 OLDS の DD 名を指定する必要があります。OLDS を指定しない場合は、DBRC は、最後にオープンされた OLDS をクローズする JCL を生成します。

SSID(name)

クローズする OLDS を作成した IMS サブシステムの名前を指定するオプション・キーワード。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を含む、8 文字の英数字からなる文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトのシステム ID を設定するには、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを設定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

TIMEFMT(sublist)

ユーザー定義の出力内で、タイム・スタンプを表すフォーマットを定義するオプション・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基幹 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドが有効なのは、単一の GENJCL コマンドの実行中だけです。

USERKEYS(%key1, 'value' | %key2)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%key1

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z、0-9) でなければなりません。

'value'

ユーザー定義のキーワードを検出したときに、それに割り当てる値。value は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。value の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。value に引用符が含まれている場合、単一引用符を 2 つ使用します。value にはヌル・ストリング (') も指定できます。value がタイム・スタンプである場合は、0 でも構いません。

%key2

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

例

ここでは、GENJCL.CLOSE コマンドの使用例をいくつか示します。

ホスト・オペレーティング・システムが失敗し、/ERE が実行不能である場合の例

この例では、GENJCL.CLOSE コマンドによって、サブシステム ID が IMSA である IMS オンライン・サブシステムに対してログ・リカバリー・ユーティリティを実行するために必要な、JCL と制御ステートメントが生成されます。このサブシステムは、ホスト・オペレーティング・システムが失敗したときに 1 次 OLDS を使用しており、/ERE を実行できませんでした。JCLPDS DD ステートメントで示されるデータ・セットからデフォルトの基幹メンバー LOGCLJCL を取り出します。生成された JCL からの出力は、JCLOUT DD ステートメントで識別されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJCL JOB
//JCLOUT DD
//JCLPDS DD

:
//SYSIN DD *
          GENJCL.CLOSE SSID(IMSA)
/*
```

クローズ・ジョブの実行後、OLDS に対応する RECON データ・セットの PRIOLDS レコードが更新され、正常にクローズしたことを示します。

CLOSE1 JCLPDS メンバーの使用例

この例では、PDS DD ステートメントで示される JCLPDS データ・セットから取り出された基幹 JCL 実行メンバー CLOSE1 によって、GENJCL.CLOSE コマンドが生成されます。生成された JCL からの出力は、OUT DD ステートメントで示されたデータ・セットに入ります。JCLPDS DD ステートメントからの MEMBER DEFCL1 には、メンバー CLOSE1 にあるユーザー定義のキーワードを変換する値が入っています。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。生成された JCL はリストされます。

```
//GENJCL1 JOB
//OUT DD . . .
//PDS DD . . .
//SYSIN DD *
GENJCL.CLOSE MEMBER(CLOSE1) OLDS(DFSOLP01) -
JCLPDS(PDS) JCLOUT(OUT) DEFAULTS(DEFCL1) LIST
```

関連資料:

249 ページの『JCL とユーザー定義出力の生成』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

252 ページの『基幹 JCL の構文』

GENJCL.IC コマンド

GENJCL.IC コマンドは、データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーまたはデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティーを実行するために必要な JCL とユーティリティー制御ステートメントを生成します。

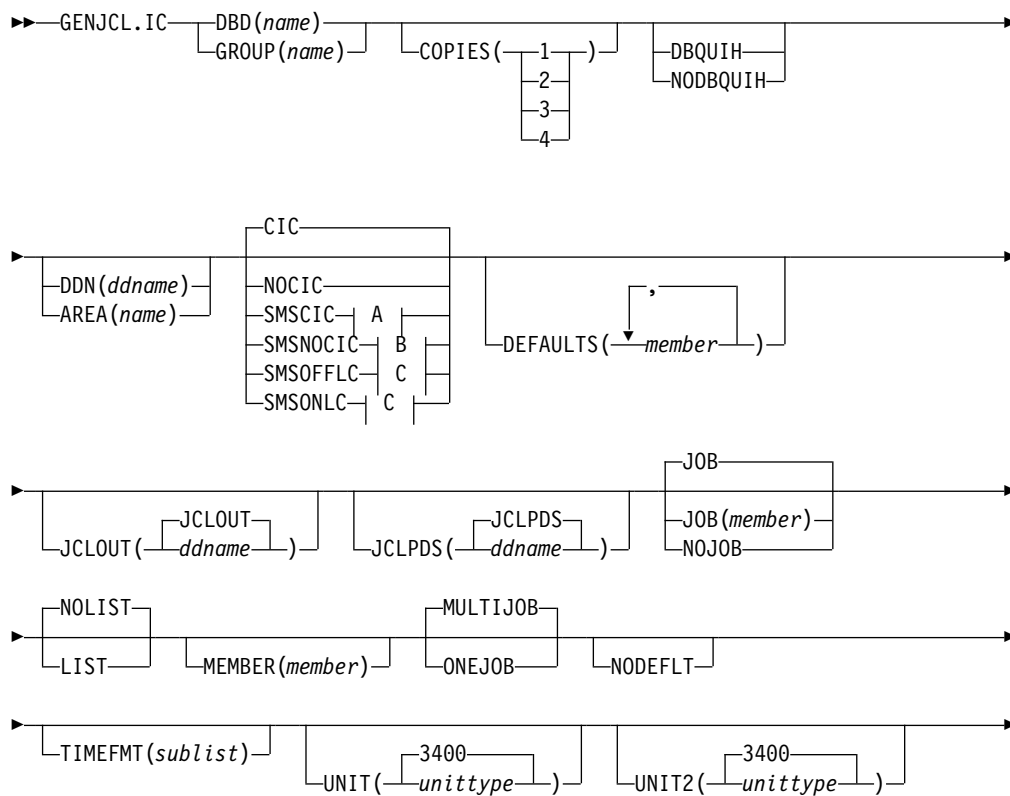
重要:

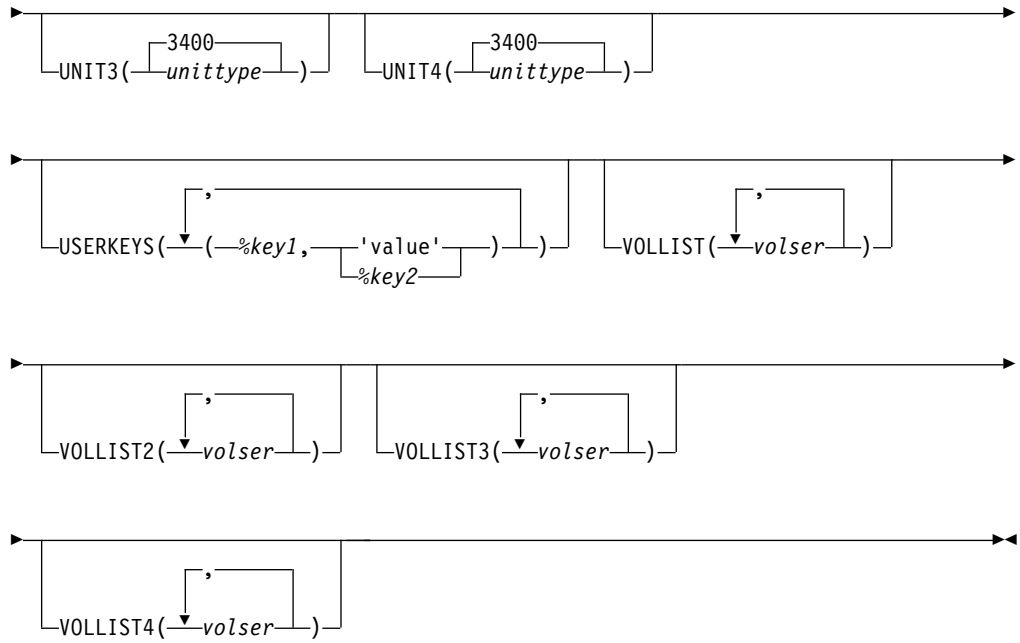
- GENJCL.IC コマンドは HALDB 区画の場合、ILDS および索引データ・セットを、データ DBDS と異なる扱いをします。GENJCL.IC コマンドは、グループが明示的であるか暗黙的であるかに関係なく、グループに含まれるこれらのデータ・セットはスキップします。これらのデータ・セットのいずれかを明示的に指定すると、GENJCL.IC コマンドは失敗します。
- HALDB DBDS の場合、GENJCL.IC コマンドは、コピーされる DBDS の DD ステートメントを生成しません。SYSIN 制御ステートメントには、コピーされるアクティブな DBDS が明示されます。これらは、A から J データ・セット、または M から V データ・セットのいずれかです。

サブセクション:

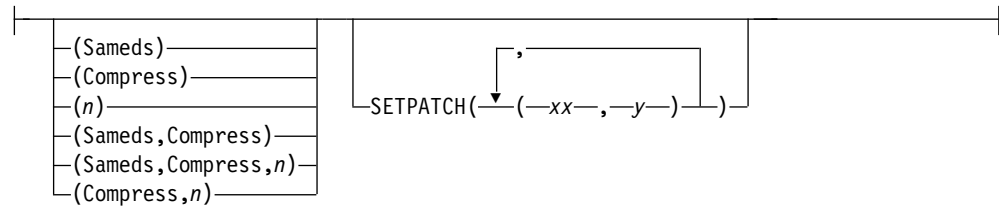
- 『構文』
- 213 ページの『キーワード』
- 225 ページの『例』

構文

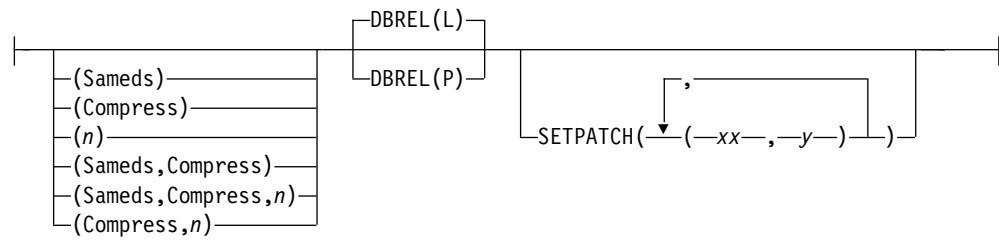




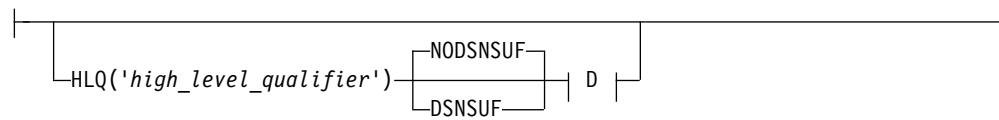
A:

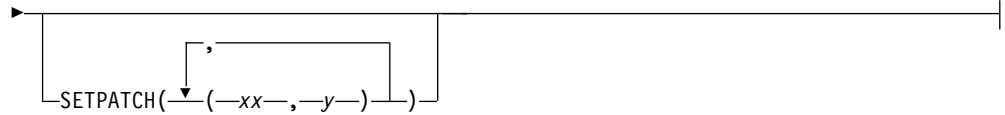


B:



C:





D:



キーワード

DBD(name) | GROUP(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、コピーする DBDS のデータベースまたは DBDS グループを指定するために使用します。

DBD(name)

コピーする DBDS またはエリアを含むデータベース名を指定します。

SMSCIC または SMSNOCIC イメージ・コピーに関して DDN が省略され、ONEJOB が指定されている場合は、DBD 名をグループ名として指定するユーティリティー制御ステートメントが JCL に生成されます。

HALDB データベースの制約事項: GENJCL.IC コマンドの場合、*name* には、HALDB マスター・データベース名または HALDB 区画名を指定します。

GROUP(name)

DBDS グループのすべての DBDS をコピーすることを指定します。

GROUP を指定すると、指名された DBDS グループのそれぞれの DBDS ごとに GENJCL.IC コマンドが繰り返し実行されます。

SMSCIC または SMSNOCIC イメージ・コピーに関して GROUP および ONEJOB が指定されている場合は、グループ名を指定するユーティリティー制御ステートメントが JCL に生成されます。

COPIES(1 | 2 | 3 | 4)

指定された DBDS 用に、イメージ・コピー・データ・セットを何組生成するかを指定するオプション・キーワード。

指定された DBDS が、RECON データ・セットでは NOREUSE 属性で識別されている場合、複数のイメージ・コピー・データ・セットが必要であれば、COPIES キーワードを指定することができます。これを指定しなければ、生成されるイメージ・コピー・データ・セットは 1 つです。COPIES(3 | 4) を指定できるのは、SMSCIC または SMSNOCIC のいずれかが指定されている場合のみです。3 番目と 4 番目のコピーは RECON データ・セットには記録されません。

指定された DBDS が RECON データ・セット内で REUSE 属性を持って識別されている場合は、COPIES キーワードが許可されません。コピー数は、INIT.IC コマンドで指定された事前定義イメージ・コピー・データ・セットの数で決められます。

DFSMS 高速複製は、複数の出力コピーをサポートしません。GENJCL.IC コマンドで SMSOFFLC または SMSONLC のいずれかを指定する場合、COPIES には、値 2、3、または 4 は指定できません。

DBQUIH | NOBQUIH

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON データ・セット上の現在のデータベース静止設定をオーバーライドするために使用します。

イメージ・コピー用に生成された、またはユーザーによってハードコーディングされた JCL は、DISP=SHR を指定する必要があります。これは、オンライン IMS サブシステムに、データベース静止中に割り振られたデータベース・データ・セットがある可能性があるためです。DBRC は、バッチ・イメージ・コピーを除く、すべてのイメージ・コピーに対して DISP=SHR を生成します。バッチ・イメージ・コピーに対して、DISP は DISP=OLD に設定されます。

QUIESCE HELD フラグが RECON データ・セットに設定されると、DBRC は、DISP=OLD ではなく、DISP=SHR を設定して、JCL を生成します。以下のキーワードを使用して、RECON データ・セット内の現在の設定をオーバーライドすることができます。

DBQUIH

JCL が実行されると、データベースが静止されるように指定します。生成される JCL に DISP=SHR が設定されます。

NOBQUIH

JCL が実行されても、データベースが静止されないように指定します。生成される JCL に DISP=OLD が設定されます。

これらのいずれのキーワードも指定されない場合、DBRC は、JCL が生成されるとき QUIESCE HELD フラグの状況を基に、バッチ・イメージ・コピーに対して DISP 値を設定します。QUIESCE HELD フラグが RECON データ・セットの DB または AREA レコードでオンになっていると、DISP=SHR が設定されます。QUIESCE HELD フラグがオフの場合、DISP=OLD が設定されません。

DDN(ddname) | AREA(name)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、コピーする DBDS の DD 名または DEDB エリア名を示すために使用します。

DDN または AREA キーワードは、DBD キーワードを指定した場合にのみ指定します。DDN または AREA を指定しない場合は、GENJCL.IC コマンドは、指定されたデータベースのそれぞれの DBDS またはエリアごとに 1 回ずつ繰り返し実行されます。HALDB マスター名を指定した場合は、HALDB マスター・データベースのそれぞれの区分ごとのすべてのデータ DBDS に対して GENJCL.IC コマンドが実行されます。HALDB 区画名を指定した場合は、GENJCL.IC コマンドは、識別された区分のすべてのデータ DBDS に対して実行されます。

HALDB データベースの場合、DDN キーワードを使用するためには、DBD キーワードでパーティション・データベース名を指定する必要があります。DDN キーワード値は区分 DDN です。GENJCL.IC コマンドは、識別された区分の DBDS に対して実行されます。DDN が区分のデータ DBDS を識別していない場合は、GENJCL.IC コマンドは失敗します。

**CIC | NOCIC | SMSCIC(Sameds | Compress | n | any combination) |
SMSNOCIC(Sameds | Compress | n | any combination) DBREL(L | P) | SMSOFFLC |
SMSONLC**

イメージ・コピーの取り方を示すオプション・キーワード。

制約事項: CIC および SMSCIC をリカバリー不能データベースまたはユーザー・リカバリー可能データベースに使用することはできません。

CIC

データベース・イメージ・コピー (DFSUDMP0) ユーティリティを使用し、イメージ・コピーを取ることを指定します。CIC を指定した場合は、コピーが更新処理と並行します。

NOCIC

データベース・イメージ・コピー (DFSUDMP0) ユーティリティを使用し、イメージ・コピーを取ることを指定します。NOCIC を指定した場合、コピーが行われている間は、更新処理のためにデータベースを使用することはできません。

SMSCIC(Sameds | Compress | n | any combination) | SETPATCH

データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティを使用して、更新処理と並行してイメージ・コピーを取ることを指定します。データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティは、DFSMSdss を呼び出し、並行コピー・オプションを使用してデータベース・データ・セット (複数の場合もある) をダンプします。

Sameds

ジョブが生成したすべてのイメージ・コピーを、単一の出力データ・セットに書き込むことを指定するオプション・キーワード。このオプションは、いずれかの DBD またはエリアが REUSE 属性を持っている場合、ONEJOB が指定されていない場合、あるいは一方または他方 (あるいは両方) のエリアに 255 個を超えるデータ・セットがコピーされる場合は無効です。このオプションを指定するときは、短縮することができます。DBDS グループを (明示的または暗黙的に) 指定した場合は、このオプションがそのグループの全メンバーに適用されます。

Compress

圧縮を使用するようにユーティリティに指示するオプションのキーワード。この圧縮オプションによって、イメージ・コピーの保持に必要なストレージ・スペースを削減できます。ただし、圧縮オプションを使用すると、コピー操作を実行するために必要な CPU 時間が増えます。このオプションを指定するときは、短縮することができます。DBDS グループを (明示的または暗黙的に) 指定した場合は、このオプションがそのグループの全メンバーに適用されます。

ユーティリティは、DFSMSdss に圧縮サービスを要求します。イメージ・コピー 2 ユーティリティが圧縮サービスを要求する際には、COMPRESS ZCOMPRESS(PREFERRED) オプションを指定した DFSMSdss DUMP コマンドを発行します。これにより、z/Enterprise Data Compression (zEDC) サービスが z/OS システム内で使用可能になっていれば、zEDC が圧縮に使用されます。zEDC は CPU の使用量が少なく、改良された圧縮アルゴリズムを使用します。

n DFSMSDss OPTIMIZE キーワードに使用する値を指定するオプション・キーワード。*n* は 1 から 4 までの数値です。

- *n* が 1 の場合、DFSMSDss は一度に 1 トラックを読み取ります。
- *n* が 2 の場合、DFSMSDss は一度に 2 トラックを読み取ります。
- *n* が 3 の場合、DFSMSDss は一度に 5 トラックを読み取ります。
- *n* が 4 の場合、DFSMSDss は一度に 1 シリンダーを読み取ります。

n を指定しないときのデフォルトは、SMSCIC の場合は 1 で、SMSNOCIC の場合は 4 です。値が高いほど、より多くの実記憶装置および仮想記憶域を使用し、チャンネルが使用中になる時間単位が長くなることに注意してください。このオプションを指定するときは、短縮することができます。DBDS グループを (明示的または暗黙的に) 指定した場合は、このオプションがそのグループの全メンバーに適用されません。

SETPATCH((*xx1*,*y1*), (*xx2*,*y2*) ... (*xxn*,*yn*))

イメージ・コピー 2 ユーティリティが DFSMSDss に渡す SETPATCH オフセットを定義することにより DFSMSDss 処理オプションを指定するキーワード。SETPATCH は、SMSCIC、SMSNOCIC、SMSONLC、または SMSOFFLC が指定されている場合にのみ適用されます。

オフセット *xx1* から *xxn* はパッチ・バイト、*y1* から *yn* は対応するパッチ・バイトに設定する値です。パッチ・バイトと値の対を最大 32 個まで提供できます。

SMSNOCIC(Sameds | Compress | *n* | any combination) | DBREL(L | P) |

SETPATCH

データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティを使用して、データベースの更新処理ができないときに、イメージ・コピーを取ることを表します。データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティは、DFSMSDss を呼び出し、並行コピー・オプションを使用してデータベース・データ・セットをダンプします。

Sameds

ジョブが生成したすべてのイメージ・コピーを、単一の出力データ・セットに書き込むことを指定するオプション・キーワード。このオプションは、いずれかの DBD またはエリアが REUSE 属性を持っている場合、ONEJOB が指定されていない場合、あるいは一方または他方 (あるいは両方) のエリアに 255 個を超えるデータ・セットがコピーされる場合は無効です。このオプションを指定するときは、短縮することができます。DBDS グループを (明示的または暗黙的に) 指定した場合は、このオプションがそのグループの全メンバーに適用されます。

Compress

圧縮を使用するようにユーティリティに指示するオプションのキーワード。この圧縮オプションによって、イメージ・コピーの保持に必要なストレージ・スペースを削減できます。ただし、圧縮オプションを使用すると、コピー操作を実行するために必要な CPU 時間が増えます。このオプションを指定するときは、短縮することができます。DBDS

グループを (明示的または暗黙的に) 指定した場合は、このオプションがそのグループの全メンバーに適用されます。

ユーティリティは、DFSMSdss に圧縮サービスを要求します。イメージ・コピー 2 ユーティリティが圧縮サービスを要求する際には、COMPRESS ZCOMPRESS(PREFERRED) オプションを指定した DFSMSdss DUMP コマンドを発行します。これにより、z/Enterprise Data Compression (zEDC) サービスが z/OS システム内で使用可能になっていれば、zEDC が圧縮に使用されます。zEDC は CPU の使用量が少なく、改良された圧縮アルゴリズムを使用します。

n DFSMSdss OPTIMIZE キーワードに使用する値を指定するオプション・キーワード。*n* は 1 から 4 までの数値です。

- *n* が 1 の場合、DFSMSdss は一度に 1 トラックを読み取ります。
- *n* が 2 の場合、DFSMSdss は一度に 2 トラックを読み取ります。
- *n* が 3 の場合、DFSMSdss は一度に 5 トラックを読み取ります。
- *n* が 4 の場合、DFSMSdss は一度に 1 シリンダーを読み取ります。

n を指定しないときのデフォルトは、SMSCIC の場合は 1 で、SMSNOCIC の場合は 4 です。値が高いほど、より多くの実記憶装置および仮想記憶域を使用し、チャンネルが使用中になる時間単位が長くなることに注意してください。このオプションを指定するときは、短縮することができます。DBDS グループを (明示的または暗黙的に) 指定した場合は、このオプションがそのグループの全メンバーに適用されます。

DBREL(L | P)

データベースがいつ更新処理に使用できるかを示します。DBREL は SMSNOCIC も指定されている場合にのみ適用できます。IMS は、SMSCIC と一緒に指定されている DBREL を無視します。

L L は、イメージ・コピーが論理的に完了した後 (DFSMS が並行コピー・セッションを初期化した後)、更新が可能になることを示します。更新処理は、イメージ・コピーが物理的に完了する前に開始する (または再開される) ことも可能です。

P P は、イメージ・コピーが物理的に完了するまで更新が許されないことを示します。

SETPATCH((xx1,y1), (xx2,y2) ... (xxn,yn))

イメージ・コピー 2 ユーティリティが DFSMSdss に渡す SETPATCH オフセットを定義することにより DFSMSdss 処理オプションを指定するキーワード。SETPATCH は、SMSCIC、SMSNOCIC、SMSONLC、または SMSOFFLC が指定されている場合にのみ適用されます。

オフセット *xx1* から *xxn* はパッチ・バイト、*y1* から *yn* は対応するパッチ・バイトに設定する値です。パッチ・バイトと値の対を最大 32 個まで提供できます。

SMSOFFLC

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティを使用して、データベ

ースの更新処理ができないときに、イメージ・コピーを取ることを表します。このオプションは、データベース・イメージ・コピー 2 に、DFSMS 高速複製を呼び出すように指示します。

HLQ(*high_level_qualifier*)

データ・セット高位修飾子を使用して出力データ・セット名を作成することを示します。出力データ・セットが動的に作成される時、`dbdname` と `DD` 名をデータ・セット高位修飾子 (HLQ) に付加することにより、出力データ・セット名が作成されます。HLQ は、`SMSONLC` および `SMSOFFLC` タイプのコピーにのみ適用されます。HLQ に指定する値は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

HLQ を指定する場合は `VOLLIST` を指定する必要があり、ターゲット・データ・セットは非 SMS 管理です。HLQ キーワードに加えて `VOLLIST` キーワードが指定されている場合、イメージ・コピー・データ・セット用の `DD` ステートメントが生成され、指定されたボリュームが組み込まれますが、イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名は組み込まれません。この `DD` ステートメントの `DD` 名は、`DBDS Select` 制御ステートメントの `OUTPUT` キーワードに組み込まれます。`VOLLIST` キーワードが指定されていない場合、生成される `JCL` には、イメージ・コピー・データ・セットの `DD` ステートメントも `OUTPUT` キーワードの値も組み込まれません。

`DSNSUF` キーワードも指定されている場合、出力データ・セット名にタイム・スタンプが低位修飾子として付加されます。HLQ 値、`dbdname`、`dsname`、タイム・スタンプ、および修飾子間の区切り文字を組み合わせた長さは、44 文字を超えることはできません。

HLQ キーワードが省略されている場合、出力データ・セット名は、`GENJCL.IC` コマンドで使用された基幹 `JCL` 実行メンバーの指示どおりに生成されます。

制約事項: `SMSOFFLC` または `SMSONLC` が指定されない限り、HLQ は指定できません。`SMSOFFLC` または `SMSONLC` を一緒に指定せずに HLQ を指定した場合、コピーは失敗し、理由コード 04 付きでメッセージ `DSP0191` が生成されます。

NODSNSUF | DSNSUF

生成される出力データ・セット名に日時スタンプが低位修飾子として使用されるかどうかを指定するために使用する、互いに排他的なオプション・キーワード。

NODSNSUF

生成される出力データ・セット名には日時スタンプが低位修飾子として組み込まれないことを示します。このキーワードはデフォルトです。

DSNSUF

生成される出力データ・セット名に日時スタンプが低位修飾子として組み込まれることを示します。フォーマットは `Dyyddd.Thhmmss` です。`DSNSUF` が指定されている場合、日時が常に一緒に使用されます。

制約事項:

- HLQ が指定されない限り、DSNSUF は指定できません。HLQ を指定せずに DSNSUF を指定した場合、コピーは失敗し、メッセージ DSP0191 理由コード 03 が生成されます。
- SMSOFFLC または SMSONLC が指定されない限り、DSNSUF は指定できません。SMSOFFLC または SMSONLC を指定せずに DSNSUF を指定した場合、コピーは失敗し、メッセージ DSP0191 理由コード 04 が生成されます。

MGMTCLAS(*management_class*)

イメージ・コピー・データ・セットの割り振りに使用する管理クラスを示すオプション・キーワード。この指定は、アクセス制御システム (ACS) ルーチンへの入力として使用されます。ユーザーは、指定された管理クラスに対する適切な RACF 許可を持っている必要があります。このキーワードは、SMSONLC または SMSOFFLC と、HLQ が指定されている場合にのみ適用されます。

SETPATCH((*xx1,y1*), (*xx2,y2*) ... (*xxn,yn*))

イメージ・コピー 2 ユーティリティーが DFSMSdss に渡す SETPATCH オフセットを定義することにより DFSMSdss 処理オプションを指定するキーワード。SETPATCH は、SMSCIC、SMSNOCIC、SMSONLC、または SMSOFFLC が指定されている場合にのみ適用されます。

オフセット *xx1* から *xxn* はパッチ・バイト、*y1* から *yn* は対応するパッチ・バイトに設定する値です。パッチ・バイトと値の対を最大 32 個まで提供できます。

STORCLAS(*storage_class*)

イメージ・コピー・データ・セットの割り振りに使用するストレージ・クラスを示すオプション・キーワード。この指定は ACS ルーチンへの入力として使用されます。ユーザーは、指定されたストレージ・クラスに対する適切な RACF 許可を持っている必要があります。このキーワードは、DFSMS 高速複製を呼び出すためにデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティーが使用され、ターゲット・データ・セットが SMS 管理対象である場合にのみ適用されます。

このキーワードは、SMSONLC または SMSOFFLC と、HLQ が指定されている場合にのみ適用されます。

SMSONLC

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーを使用して、更新処理と並行してイメージ・コピーを取ることを指定します。このオプションは、データベース・イメージ・コピー 2 に、DFSMS 高速複製を呼び出すように指示します。

HLQ(*high_level_qualifier*)

データ・セット高位修飾子を使用して出力データ・セット名を作成することを示します。出力データ・セットが動的に作成されるとき、*dbname* と DD 名をデータ・セット高位修飾子 (HLQ) に付加することにより、出力データ・セット名が作成されます。HLQ は、

SMSONLC および SMSOFFLC タイプのコピーにのみ適用されます。HLQ に指定する値は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

HLQ を指定する場合は VOLLIST を指定する必要があり、ターゲット・データ・セットは非 SMS 管理です。HLQ キーワードに加えて VOLLIST キーワードが指定されている場合、イメージ・コピー・データ・セット用の DD ステートメントが生成され、指定されたボリュームが組み込まれますが、イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名は組み込まれません。この DD ステートメントの DD 名は、DBDS Select 制御ステートメントの OUTPUT キーワードに組み込まれます。VOLLIST キーワードが指定されていない場合、生成される JCL には、イメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントも OUTPUT キーワードの値も組み込まれません。

DSNSUF キーワードも指定されている場合、出力データ・セット名にタイム・スタンプが低位修飾子として付加されます。HLQ 値、dbdname、dsname、タイム・スタンプ、および修飾子間の区切り文字を組み合わせた長さは、44 文字を超えることはできません。

HLQ キーワードが省略されている場合、出力データ・セット名は、GENJCL.IC コマンドで使用された基幹 JCL 実行メンバーの指示どおりに生成されます。

制約事項: SMSOFFLC または SMSONLC が指定されない限り、HLQ は指定できません。SMSOFFLC または SMSONLC を一緒に指定せずに HLQ を指定した場合、コピーは失敗し、理由コード 04 付きでメッセージ DSP0191 が生成されます。

NODSNSUF | DSNSUF

生成される出力データ・セット名に日時スタンプが低位修飾子として使用されるかどうかを指定するために使用する、互いに排他的なオプション・キーワード。

NODSNSUF

生成される出力データ・セット名には日時スタンプが低位修飾子として組み込まれないことを示します。このキーワードはデフォルトです。

DSNSUF

生成される出力データ・セット名に日時スタンプが低位修飾子として組み込まれることを示します。フォーマットは *Dyyddd.Thhmmss* です。DSNSUF が指定されている場合、日時が常に一緒に使用されます。

制約事項:

- HLQ が指定されない限り、DSNSUF は指定できません。HLQ を指定せずに DSNSUF を指定した場合、コピーは失敗し、メッセージ DSP0191 理由コード 03 が生成されます。
- SMSOFFLC または SMSONLC が指定されない限り、DSNSUF は指定できません。SMSOFFLC または SMSONLC を指定せずに DSNSUF を指定した場合、コピーは失敗し、メッセージ DSP0191 理由コード 04 が生成されます。

MGMTCLAS(*management_class*)

イメージ・コピー・データ・セットの割り振りに使用する管理クラスを示すオプション・キーワード。この指定は、アクセス制御システム (ACS) ルーチンへの入力として使用されます。ユーザーは、指定された管理クラスに対する適切な RACF 許可を持っている必要があります。このキーワードは、SMSONLC または SMSOFFLC と、HLQ が指定されている場合にのみ適用されます。

SETPATCH((*xx1,y1*), (*xx2,y2*) ... (*xxn,yn*))

イメージ・コピー 2 ユーティリティーが DFSMSdss に渡す SETPATCH オフセットを定義することにより DFSMSdss 処理オプションを指定するキーワード。SETPATCH は、SMSCIC、SMSNOCIC、SMSONLC、または SMSOFFLC が指定されている場合にのみ適用されます。

オフセット *xx1* から *xxn* はパッチ・バイト、*y1* から *yn* は対応するパッチ・バイトに設定する値です。パッチ・バイトと値の対を最大 32 個まで提供できます。

STORCLAS(*storage_class*)

イメージ・コピー・データ・セットの割り振りに使用するストレージ・クラスを示すオプション・キーワード。この指定は ACS ルーチンへの入力として使用されます。ユーザーは、指定されたストレージ・クラスに対する適切な RACF 許可を持っている必要があります。このキーワードは、DFSMS 高速複製を呼び出すためにデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティーが使用され、ターゲット・データ・セットが SMS 管理対象である場合にのみ適用されます。

このキーワードは、SMSONLC または SMSOFFLC と、HLQ が指定されている場合にのみ適用されます。

DEFAULTS(*member*)

JCL の生成時に使用する基幹 JCL のデフォルトのメンバーの名前を 10 個まで指定するオプション・キーワード。キーワードを変換するために、デフォルトのメンバーがこのキーワードに指定された順序で検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

JCLOUT(JCLOUT | *ddname*)

生成された JCL の出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。デフォルトの JCLOUT で使用するデータ・セットと同じでない場合のみ、指定するデータ・セットは区分データ・セットのメンバーでも構いません。

JCLPDS(JCLPDS | *ddname*)

JCL を生成するときに、入力として使用される基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。

JOB | JOB(member) | NOJOB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを生成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。JOB(member) を指定した場合は、指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成しないことを指定します。

NOLIST | LIST

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL を SYSPRINT データ・セットに書き込むかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MEMBER(member)

使用する基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定するオプション・キーワード。このキーワードを指定しない場合は、INIT.DBDS コマンドで指定されたデフォルトが使用されます。

MULTIJOB | ONEJOB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS グループが明示的または暗黙的に指定されたときに生成する JOB および EXEC ステートメントの数を制御するために使用します。

MULTIJOB

それぞれのグループ・メンバーごとに 1 つのジョブを作成します。

ONEJOB

次のどちらかの方法で、1 つのジョブを作成します。

- CIC または NOCIC オプションを持つ各グループ・メンバーごとに、個別のステップで。
- SMSVIC または SMSNOCIC オプションを持つグループの全メンバーをコピーする単一ステップで。

これらのキーワードは、JOB キーワードに NOJOB サブパラメーターが指定されているか、DBDS グループが指定されていない場合には無効です。

NODEFLT

DBDS に暗黙の基幹 JCL のデフォルトのメンバーがあっても、それは使用しないことを指定するオプション・キーワード。

TIMEFMT(sublist)

ユーザー定義の出力内で、タイム・スタンプを表すフォーマットを定義するオプ

ション・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基幹 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドが有効なのは、単一の GENJCL コマンドの実行中だけです。

UNIT(3400 | *unittype*)

1 番から 4 番目までの出力イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。これらのキーワードは、以下の条件が両方満たされたときにのみ有効です。

- 対応する VOLLIST キーワードが指定されている。
- JCL を生成する DBDS が、NOREUSE オプションで定義されている。

このキーワードが指定されている場合、その値は、生成された JCL 内の DD ステートメント D1OU1、およびデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティーの制御ステートメント内の OUTPUT キーワードに関連付けられます。GROUP キーワードも指定されている場合、Group Name 制御ステートメントの後続のすべての DBDS Select 制御ステートメントに、D1OU1 が OUTPUT キーワードとして含まれます。

UNIT2(3400 | *unittype*)

1 番から 4 番目までの出力イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。これらのキーワードは、以下の条件が両方満たされたときにのみ有効です。

- 対応する VOLLIST キーワードが指定されている。
- JCL を生成する DBDS が、NOREUSE オプションで定義されている。

ユーザーが SMSOFFLC または SMSONLC を指定して DFSMS 高速複製を選択する場合、このキーワードは指定できません。

UNIT3(3400 | *unittype*)

1 番から 4 番目までの出力イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。これらのキーワードは、以下の条件が両方満たされたときにのみ有効です。

- 対応する VOLLIST キーワードが指定されている。
- JCL を生成する DBDS が、NOREUSE オプションで定義されている。

ユーザーが SMSOFFLC または SMSONLC を指定して DFSMS 高速複製を選択する場合、このキーワードは指定できません。

UNIT4(3400 | *unittype*)

1 番から 4 番目までの出力イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。これらのキーワードは、以下の条件が両方満たされたときにのみ有効です。

- 対応する VOLLIST キーワードが指定されている。
- JCL を生成する DBDS が、NOREUSE オプションで定義されている。

ユーザーが SMSOFFLC または SMSONLC を指定して DFSMS 高速複製を選択する場合、このキーワードは指定できません。

USERKEYS(%key1, 'value' | %key2)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%key1

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z、0-9) でなければなりません。

'value'

ユーザー定義のキーワードを検出したときに、それに割り当てる値。value は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。value の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。value に引用符が含まれている場合、単一引用符を 2 つ使用します。value にはヌル・ストリング (') も指定できます。value がタイム・スタンプである場合は、0 でも構いません。

%key2

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

VOLLIST(volser)

オプション・キーワードであり、いずれか 1 つを指定するために使用します。イメージ・コピー・データ・セットのコピーが常駐するボリュームを指定します。これらのキーワードは、以下の条件が満たされた場合にのみ有効です。

- JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションを指定して定義されている。
- DBD に DDN または AREA が指定されている。

このキーワードを指定した場合、その値は、生成された JCL 内の DD ステートメント D1OU1、およびデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティの制御ステートメント内の OUTPUT キーワードに関連付けられます。

GROUP キーワードも指定した場合は、Group Name 制御ステートメントの後続のすべての DBDS Select 制御ステートメントに、D1OU1 が OUTPUT パラメーターとして含まれます。

VOLLIST2(volser)

オプション・キーワードであり、いずれか 1 つを指定するために使用します。イメージ・コピー・データ・セットのコピーが常駐するボリュームを指定します。これらのキーワードは、以下の条件が満たされた場合にのみ有効です。

- JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションを指定して定義されている。

- DBD に DDN または AREA が指定されている。

ユーザーが SMSOFFLC または SMSONLC を指定して DFSMS 高速複製を選択する場合、このキーワードは指定できません。

VOLLIST3(volser)

オプション・キーワードであり、いずれか 1 つを指定するために使用します。イメージ・コピー・データ・セットのコピーが常駐するボリュームを指定します。これらのキーワードは、以下の条件が満たされた場合にのみ有効です。

- JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションを指定して定義されている。
- DBD に DDN または AREA が指定されている。

ユーザーが SMSOFFLC または SMSONLC を指定して DFSMS 高速複製を選択する場合、このキーワードは指定できません。

VOLLIST4(volser)

オプション・キーワードであり、いずれか 1 つを指定するために使用します。イメージ・コピー・データ・セットのコピーが常駐するボリュームを指定します。これらのキーワードは、以下の条件が満たされた場合にのみ有効です。

- JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションを指定して定義されている。
- DBD に DDN または AREA が指定されている。

ユーザーが SMSOFFLC または SMSONLC を指定して DFSMS 高速複製を選択する場合、このキーワードは指定できません。

例

ここでは、GENJCL.IC コマンドの使用例をいくつか示します。

DBD および DDN パラメーターによって定義される DBDS の例

次の例では、GENJCL.IC コマンドは、DBD および DDN キーワードで識別された DBDS に対してデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するために必要な JCL と制御ステートメントを生成します。デフォルトの並行イメージ・コピー (CIC) を使用します。データベースは REUSE として定義されています。JCL を生成する DBDS に対する INIT.DBDS コマンドに ICJCL(member) が指定されている場合は、JCLPDS DD ステートメントで示されるデータ・セットからその基幹メンバーを使用します。そうでない場合は、JCLPDS データ・セットから取り出されるデフォルトの基幹メンバー ICJCL を使用します。生成された JCL からの出力は、JCLOUT DD ステートメントで識別されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJIC1 JOB
//JCLOUT DD   . . .
//JCLPDS DD   . . .
:
//SYSIN DD *
GENJCL.IC DBD(DBDKSDS1) DDN(DDNKSDS1)
```

生成された JCL の EXEC および SYSIN ステートメントは次のとおりです。

```

:
//IC1 EXEC PGM=DFSUDMP0,REGION=nnnK,
//          PARM='CIC,GSGNAME='
//D10U1 DD DSN=...

:
//SYSIN DD *
D1 DBDKSDS1 DDNKSDS1 D10U1
/*

```

NOCIC のグループのすべての DBDS の例

以下の例では、GENJCL.IC コマンドが、GROUP1 のすべての DBDS についてイメージ・コピー・ユーティリティを実行するための JCL と制御ステートメントを生成し、バッチ・イメージ・コピー (NOCIC) も取り出します。使用する基幹メンバーは、PDS4 で示されるデータ・セットから取り出される ICJCL1 です。キーワード %DEFIC は ICJCL1 にあるユーザー定義の値で、変換されて '1ST USERKEYS PARM' となります。INIT.DBDS DEFJTJCL(MEMBER) で初期化されたデータベースのデフォルト・メンバーは、キーワードの変換には使用されません。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```

//GENJCL2 JOB
//JCLOUT DD . . .
//PDS4 DD . . .
//SYSIN DD *
GENJCL.IC GROUP(GROUP1) JOB MEMBER(ICJCL1) JCLPDS(PDS4) ONEJOB -
NOCIC USERKEYS((%DEFIC,'1ST USERKEYS PARM')) NODEFLT

```

以下のステートメントは、生成された JCL の 1 つの EXEC ステートメントと 1 つの SYSIN ステートメントの例です。

```

:
//IC1 EXEC PGM=DFSUDMP0,REGION=nnnK,
//          PARM=',GSGNAME='
//D10U1 DD DSN=...

:
//SYSIN DD *
D1 DBD1GRP1 DDN1GRP1 D10U1
/*
//IC2 EXEC PGM=DFSUDMP0,REGION=nnnK,
//          PARM=',GSGNAME='

:

```

SMSCIC での、データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティの実行例

以下の例では、GENJCL.IC コマンドが、DBD および DDN キーワードで識別される DBDS について、共用データベース・モード (SMSCIC) でデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティを実行するために必要な JCL と制御ステートメントを生成します。データベースは NOREUSE として定義され、4 つのコピーが要求されています。JCLPDS データ・セットからデフォルトの基幹メンバー ICJCL が使用されます。生成された JCL からの出力は、JCLOUT DD ステートメントで識別されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```

//GENJIC3 JOB
//JCLOUT DD . . .
//JCLPDS DD . . .
:
//SYSIN DD *
GENJCL.IC DBD(DBDVSAM1) DDN(DDNVSAM1) COPIES(4) SMSCIC(1) -
          VOLLIST(IC2001) VOLLIST2(IC2002) VOLLIST3(IC2003) -
          VOLLIST4(IC2004)
/*

```

生成された JCL の EXEC および SYSIN ステートメントは次のとおりです。

```

:
//IC1 EXEC PGM=DFSRRCO0,REGION=nnnK,
//          PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,,,,,Y,,,,,,,,,'
:
//SYSIN DD *
4 DBDVSAM1 DDNVSAM1 D10U1 D20U1 D30U1 D40U1 S 1
/*

```

SMSNOCIC での、データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティの実行例

以下の例では、GENJCL.IC コマンドによって、DBD および DDN キーワードで識別された DBDS について、排他的データベース使用 (SMSNOCIC) でデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティを実行するための JCL と制御ステートメントが生成されます。データベースは REUSE として定義されており、デフォルトでは 1 つのコピーが要求されます。JCLPDS データ・セットからデフォルトの基幹メンバー ICJCL が使用されます。生成された JCL からの出力は、JCLOUT DD ステートメントで識別されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。物理的なコピーが完了すると、データベースはアンロックされます。

```

//GENJIC4 JOB
//JCLOUT DD . . .
//JCLPDS DD . . .
:
//SYSIN DD *
GENJCL.IC DBD(DBDVSAM2) DDN(DDNVSAM2) DBREL(P) SMSNOCIC
/*

```

生成された JCL の EXEC および SYSIN ステートメントは次のとおりです。

```

:
//IC1 EXEC PGM=DFSRRCO0,REGION=nnnK,
//          PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,,,,,Y,,,,,,,,,'
:
//SYSIN DD *
1 DBDVSAM2 DDNVSAM2 DATAOUT1 XP
/*

```

暗黙のデータベース・グループに対する、データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティの実行例

データベースの全データ・セットが、圧縮オプションを使用して、単一ステップで単一の出力データ・セットにコピーされます。

```

//GENJIC5 JOB
//JCLOUT DD . . .
//JCLPDS DD . . .
.
.
.
//SYSIN DD *
GENJCL.IC DBD(DBDVSAM) SMSCIC(SAMEDS,COMPRESS) ONEJOB
/*

```

生成された JCL 内の EXEC および SYSIN カードは次のようになります。

```

:
//IC1 EXEC PGM=DFSRR00,REGION=800K,
//      PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,,,,,Y,,,,,,,,,'
//D10U0 DD DSN=...
//SYSIN DD *
G  DHVNTZ02                                S C1
  1 DHVNTZ02 HIDAM      D10U0
S  DHVNTZ02 HIDAM2                                /*

```

高速複製を使用するデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティの実行例
1(非 SMS 管理)

```

GENJCL.IC DBD(DB1) DDN(DBDS1) SMSONLC VOLLIST(VOLXXX)

//ICJCL EXEC PGM=DFSRR00,PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,,,,,Y,N'
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//SYSUDUMP DD SYSOUT=A
//RECON1 DD DSN=IMS.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=IMS.RECON2,DISP=SHR
//RECON3 DD DSN=IMS.RECON3,DISP=SHR
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DBDS1 DD DSN=IMS.USER.DBDS1,DISP=SHR
//*
//D10U1 DD DISP=(NEW,CATLG),
//      UNIT=SYSDA,VOL=SER=VOLXXX
//      SPACE=(TRK,(5,5),RLSE),
//      DSN=HLQ.DBDS1.COPY,
//DFSVSAMP DD *
//SYSIN DD *
1 DB1 DBDS1 D10U1                                S F

```

この例は、類似の JCL と制御ステートメントを生成します。イメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメント (D10U1) があります。ターゲット・イメージ・コピー・データ・セットは SMS 管理対象ではないため、イメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントでターゲット・ボリュームを指定する必要があります。

高速複製を使用するデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティの実行例
2(SMS 管理)

```

GENJCL.IC DBD(DB1) DDN(DBDS1) SMSONLC HLQ(HLQ1)

//ICJCL EXEC PGM=DFSRR00,PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,,,,,Y,N'
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//SYSUDUMP DD SYSOUT=A
//RECON1 DD DSN=IMS.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=IMS.RECON2,DISP=SHR
//RECON3 DD DSN=IMS.RECON3,DISP=SHR
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DBDS1 DD DSN=IMS.USER.DBDS1,DISP=SHR
//*

```



```
//DFSVSAMP DD *
//SYSIN DD *
 1 DB1 DBDS1 D10U1 S FH
H1 HLQ1
```

この例は、イメージ・コピー・データ・セットの名前が HLQ1.DB1.DBDS1 として生成される、類似の JCL と制御ステートメントを生成します。ボリュームを指定するイメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントはありません。また、HLQ 制御ステートメントでのストレージ・クラスの指定もありません。この場合、ソース・データベースは SMS 管理対象になっている必要があります。ターゲット・イメージ・コピー・データ・セットのストレージ・クラスの指定は、ソース・データ・セットの属性から継承されます。

高速複製を使用するデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティの実行例 3(イメージ・コピーが非 SMS 管理)

```
GENJCL.IC DBD(DB1) DDN(DBDS1) SMSOFFLC VOLLIST(VOLSER) HLQ('HLQ1') NODSNSUF
//ICJCL EXEC PGM=DFSRR00,PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,Y,N'
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//SYSUDUMP DD SYSOUT=A
//RECON1 DD DSN=IMS.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=IMS.RECON2,DISP=SHR
//RECON3 DD DSN=IMS.RECON3,DISP=SHR
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DBDS1 DD DSN=IMS.USER.DBDS1,DISP=SHR
//*
//D10U1 DD DISP=SHR,
// UNIT=SYSDA,VOL=SER=VOLSER
//DFSVSAMP DD *
//SYSIN DD *
 1 DB1 DBDS1 D10U1 X FH
H1 HLQ1
```

この例は、イメージ・コピー・データ・セットの名前が HLQ1.DB1.DBDS1 として生成される、類似の JCL と制御ステートメントを生成します。イメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントはありますが、データ・セット名が含まれていません。ターゲット・イメージ・コピー・データ・セットは SMS 管理対象ではないため、イメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントでターゲット・ボリュームを指定する必要があります。

高速複製を使用するデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティの実行例 4 (イメージ・コピーが SMS 管理)

```
GENJCL.IC DBD(DB1) DDN(DBDS1) SMSONLC STORCLAS(STORCLS1) HLQ('HLQ1')
NODSNSUF
//ICJCL EXEC PGM=DFSRR00,PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,Y,N'
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//SYSUDUMP DD SYSOUT=A
//RECON1 DD DSN=IMS.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=IMS.RECON2,DISP=SHR
//RECON3 DD DSN=IMS.RECON3,DISP=SHR
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DBDS1 DD DSN=IMS.USER.DBDS1,DISP=SHR
//*
//DFSVSAMP DD *
//SYSIN DD *
 1 DB1 DBDS1 D10U1 S FH
H1 HLQ1 STORCLS1
```


この例は、イメージ・コピー・データ・セットの名前が HLQ1.DB1.DBDS1 として生成される、類似の JCL と制御ステートメントを生成します。イメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントはありません。ターゲット・イメージ・コピーが SMS 管理対象である場合、HLQ 制御ステートメントで SMS ストレージ・クラスを指示します。

高速複製を使用するデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティーの実行例 5 (SMS 管理)

```
GENJCL.IC DBD(DB1) DDN(DBDS1) SMSONLC HLQ(HLQ1) DSNSUF
//ICJCL EXEC PGM=DFSRR00,PARM='ULU,DFSUDMT0,,,,,,,,,,,,,Y,N'
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//SYSUDUMP DD SYSOUT=A
//RECON1 DD DSN=IMS.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=IMS.RECON2,DISP=SHR
//RECON3 DD DSN=IMS.RECON3,DISP=SHR
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DBDS1 DD DSN=IMS.USER.DBDS1,DISP=SHR
//*
//DFSVSAMP DD *
//SYSIN DD *
  1 DB1 DBDS1 D10U1 S FH
HIYHLQ1
```

この例は、イメージ・コピー・データ・セットの名前が HLQ1.DB1.DBDS1.Dyyddd.Thhmmss として生成される、類似の JCL と制御ステートメントを生成します。ボリュームを指定するイメージ・コピー・データ・セットの DD ステートメントはありません。また、HLQ 制御ステートメントでのストレージ・クラスの指定もありません。この場合、ソース・データベースは SMS 管理対象になっている必要があり、ターゲット・イメージ・コピー・データ・セットのストレージ・クラスの指定は、ソース・データ・セットの属性から継承されます。

関連概念:

 z/OS: Tuning DFSMSHsm with supported tuning patches

関連資料:

249 ページの『JCL とユーザー定義出力の生成』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

252 ページの『基幹 JCL の構文』

GENJCL.OIC コマンド

GENJCL.OIC コマンドは、オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーを実行するために必要な JCL とユーティリティー制御ステートメントを生成するのに使用します。

重要:

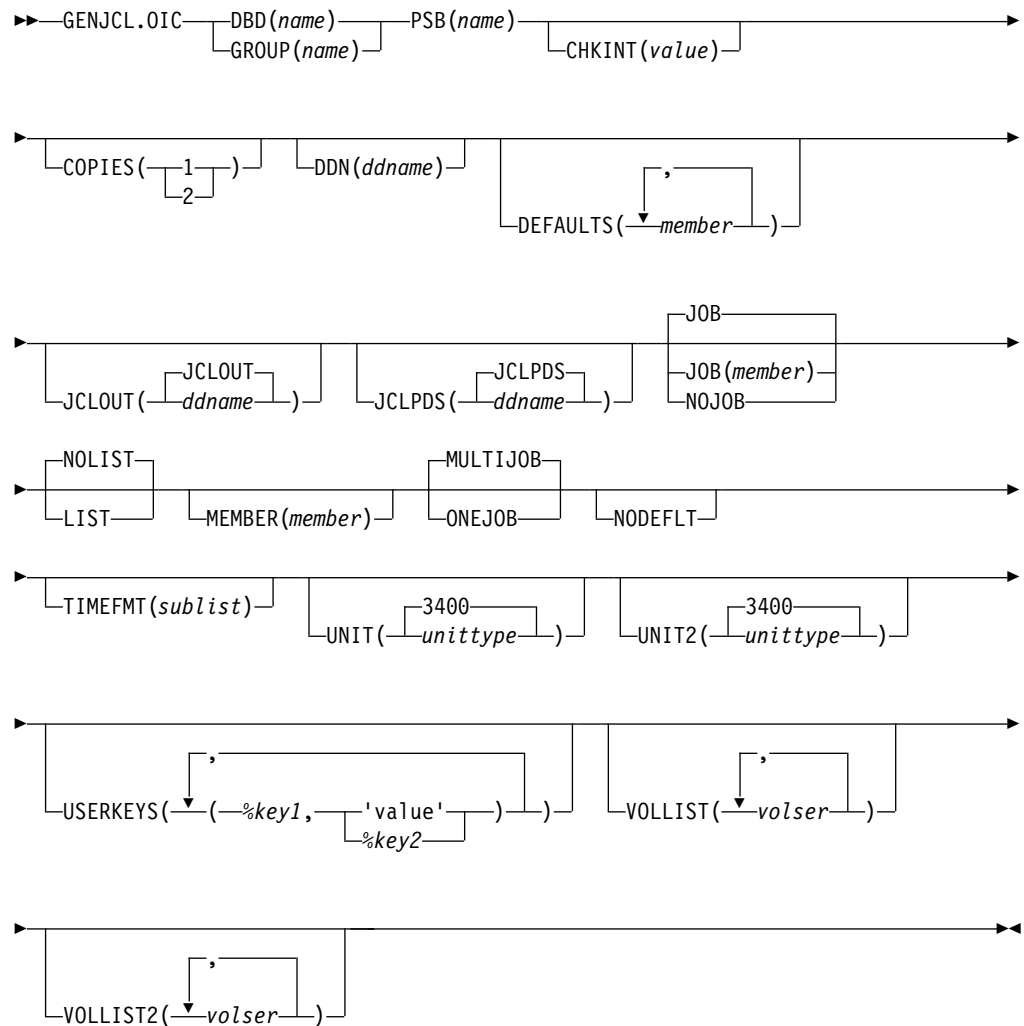
- HALDB 区画の場合、GENJCL.OIC コマンドは、ILDS および索引データ・セットをデータ DBDS と異なる扱いをします。 GENJCL.OIC コマンドは、グループが明示的であるか暗黙的であるかに関係なく、グループに含まれるこれらのデータ・セットはスキップします。これらのデータ・セットの 1 つを明示的に指定すると、GENJCL.OIC コマンドは失敗します。

- HALDB DBDS の場合、GENJCL.OIC コマンドは、コピーされる DBDS の DD ステートメントを生成しません。SYSIN 制御ステートメントには、コピーされるアクティブな DBDS が明示されます。これらは、A から J データ・セット、または M から V データ・セットのいずれかです。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 235 ページの『例』

構文



キーワード

DBD(name) | GROUP(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、コピーする DBDS を含むデータベースを指定するために使用します。

DBD

コピーする DBDS を含むデータベース名を指定します。

HALDB データベースの制約事項: GENJCL.OIC コマンドの場合、*name* には、HALDB マスター・データベース名または HALDB 区画名を指定します。

GROUP

DBDS グループのすべての DBDS をコピーすることを指定します。GROUP を指定すると、DBDS グループのそれぞれの DBDS ごとに 1 回ずつ GENJCL.OIC コマンドが繰り返し実行されます。

PSB(*name*)

オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーの実行に必要な PSB の名前を指定する必須キーワード。

GROUP を指定すると、グループのすべてのメンバーに同じ PSB 名が使用されます。

CHKINT(*value*)

オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーのチェックポイント間隔を指定するオプション・キーワード。*value* は 1 から 9999 の 10 進数でなければなりません。このキーワードを省略すると、オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーは、チェックポイント間隔に対して所有のデフォルト値を使用します。

COPIES(1 | 2)

指定する DBDS について、1 つまたは 2 つのイメージ・コピー・データ・セットを生成するためにオンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーを要求するオプション・キーワード。

指定された DBDS が RECON データベースでは NOREUSE 属性で識別されている場合は、2 つのイメージ・コピー・データ・セットを生成するには、COPIES キーワードを指定する必要があります。それ以外の場合は、生成されるイメージ・コピー・データ・セットは 1 つだけです。

指定された DBDS が RECON データベースでは REUSE 属性で示されている場合は、COPIES キーワードは指定できません。この DBDS 用に生成されるイメージ・コピー・データ・セットの数は INIT.IC コマンドに含まれるキーワードによって決まります。

DDN(*ddname*)

コピーされる DBDS を示すオプション・キーワード。

DDN キーワードは、DBD キーワードが指定された場合にのみ指定できます。DDN を指定しない場合は、指定されたデータベースのそれぞれの DBDS ごとに 1 回ずつ GENJCL.OIC コマンドが繰り返し実行されます。HALDB マスター名を指定した場合、GENJCL.OIC コマンドは、HALDB マスター内のそれぞれの区分のすべてのデータ DBDS に対して実行されます。HALDB 区画名を指定すると、GENJCL.OIC コマンドは、識別された HALDB 区画のすべてのデータ DBDS に対して実行されます。

HALDB データベースの場合、DDN キーワードを使用するためには、DBD キーワードでパーティション・データベース名を指定する必要があります。DDN キーワード値は区分 DDN です。GENJCL.OIC コマンドは、識別された区分の

DBDS に対して実行されます。DDN が区分のデータ DBDS を識別していない場合は、GENJCL.OIC コマンドは失敗します。

DEFAULTS(member)

JCL の生成時に使用する基幹 JCL のデフォルトのメンバーの名前を 10 個まで指定するオプション・キーワード。デフォルトのメンバーは、このキーワードに指定されている順番で、キーワードを変換するために検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

JCLOUT(JCLOUT | ddname)

生成された JCL の出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。デフォルトの JCLOUT で使用するデータ・セットと同じでない場合のみ、指定するデータ・セットは区分データ・セットのメンバーでも構いません。

JCLPDS(JCLPDS | ddname)

JCL を生成するときに、入力として使用される基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。GENJCL コマンドのあるジョブ・ステップには、この DD 名の JCL DD ステートメントが含まれている必要があります。

JOB | JOB(member) | NOJOB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを生成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。JOB(member) を指定した場合は、指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成しないことを指定します。

NOLIST | LIST

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL を SYSPRINT データ・セットに書き込むかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MEMBER(member)

使用する基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。このキーワードを指定しない場合は、INIT.DBDS コマンドで指定されたデフォルトが使用されます。

MULTIJOB | ONEJOB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS グループが明示的または暗黙的に指定されたときに生成する JOB ステートメントの数を制御するために使用します。

MULTIJOB

それぞれのグループ・メンバーごとに基幹 JCL の JOB メンバーを処理します (複数の JOB ステートメントが生成されます)。

ONEJOB

最初のグループ・メンバーだけの基幹 JCL の JOB メンバーを処理します。

これらのキーワードは、NOJOB が指定されているか、DBDS グループが指定されていない場合には無効です。

NODEFLT

DBDS に暗黙の基幹 JCL のデフォルトのメンバーがあっても、それは使用しないことを指定するオプション・キーワード。

TIMEFMT(sublist)

ユーザー定義の出力内で、タイム・スタンプを表すフォーマットを定義するオプション・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基幹 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドが有効なのは、単一の GENJCL コマンドの実行中だけです。

UNIT(3400 | unittype)

1 次出力データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、以下の条件が満たされた場合にのみ有効です。

- VOLLIST キーワードが指定された。
- JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションで定義されている。

UNIT2(3400 | unittype)

2 次出力データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、以下の条件が満たされた場合にのみ有効です。

- VOLLIST2 キーワードが指定された。
- JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションで定義されている。

USERKEYS(%key1, 'value' | %key2)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%key1

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z、0-9) でなければなりません。

'value'

ユーザー定義のキーワードを検出したときに、それに割り当てる値。 *value* は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。 *value* の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。 *value* に引用符が含まれている場合、単一引用符を 2 つ使用します。 *value* にはヌル・ストリング ('') も指定できます。 *value* がタイム・スタンプである場合は、0 でも構いません。

%key2

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

VOLLIST(volser)

イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションで定義されている場合、および DBDS がグループでなく DBD と一緒に使用されている場合にのみ有効です。

VOLLIST2(volser)

重複イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、JCL を生成する DBDS が NOREUSE オプションで定義されている場合、および DBDS がグループでなく DBD と一緒に使用されている場合にのみ有効です。

例

ここでは、GENJCL.OIC コマンドの使用例をいくつか示します。

JCLPDS メンバー **OICJCL** の使用例

この例では、GENJCL.OIC コマンドによって、DBD および DDN キーワードで識別される DBDS に対してオンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するために必要な JCL と制御ステートメント生成します。データベースは REUSE として定義されています。JCL を生成する DBDS に対する INIT.DBDS コマンドで OICJCL(*member*) が指定されている場合、JCLPDS DD ステートメントで示されるデータ・セットでそのメンバーは使用され、検索されます。それ以外の場合は、JCLPDS データ・セットから取り出されたデフォルトの基幹メンバー OICJCL が使用されます。生成された JCL からの出力は、JCLOUT DD ステートメントで定義されているデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJOIC JOB
//JCLPDS DD . . .
//JCLOUT DD . . .
```

```

:
//SYSIN DD *
GENJCL.OIC DBD(DBDKSDS1) DDN(DDNKSDS1) -
PSB(MYJOB)
/*

```

JCLPDS メンバー OICJCL2 の使用例

この例では、GENJCL.OIC コマンドは、GROUP1 のすべての DBDS についてオンライン・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するための JCL と制御ステートメントを生成します。使用する基幹メンバーは、OICPDS DD ステートメントで示されたデータ・セットからの OICJCL2 です。OICPDS DD ステートメントに示されたデータ・セットにある JOBCARD メンバーから、それぞれのグループ・メンバーごとに 1 つの JOB ステートメントが生成されます。%DEFDBDS は OICJCL2 にあるユーザー定義の値であり、'DATABASE DEFINED HERE' とともに変換されます。メンバー DEF1、DEF2、および DEF3 は、OICJCL2 にあるユーザー定義のキーワードを変換するために使用されます。INIT.DBDS DEFLTJCL(MEMBER) で初期化されたデータベースのデフォルト・メンバーは、キーワードの変換には使用されません。USERKEYS キーワードでキーワードに指定された値は、DEFAULTS メンバーに含まれている値をオーバーライドします。

```

//GENJOIC1 JOB
//OICOUT DD . . .
//OICPDS DD . . .
//SYSIN DD *
GENJCL.OIC GROUP(GROUP1) JOB(JOBCARD) MEMBER(OICJCL2) -
NODEFLT JCLPDS(OICPDS) JCLOUT(OICOUT) PSB(PCBOIC6) -
USERKEYS((%DEFDBDS,'DATABASE DEFINED HERE')) -
DEFAULTS(DEF1,DEF2,DEF3)

```

関連資料:

- 249 ページの『JCL とユーザー定義出力の生成』
- 57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』
- 252 ページの『基幹 JCL の構文』

GENJCL.RECOV コマンド

GENJCL.RECOV コマンドは、データベース・リカバリー・ユーティリティ (DFSURDB0) を実行するために必要な JCL とユーティリティ制御ステートメントを生成するために使用します。

指定された DBDS またはエリアの完全リカバリーまたはタイム・スタンプ・リカバリー用の JCL ステートメントとユーティリティ制御ステートメントを生成できます。すべてのログ・データをアーカイブする必要があります。そのようにしない場合は、GENJCL.RECOV コマンドは失敗します。

制約事項:

- GENJCL.RECOV コマンドをユーザー・リカバリー可能データベースに対して発行することはできません。
- GENJCL.RECOV コマンドは、ILDS および索引データ・セットをサポートしません。HALDB 索引/ILDS 再作成ユーティリティ (DFSPREC0) のための JCL を生成するには、GENJCL.USER コマンドを使用します。

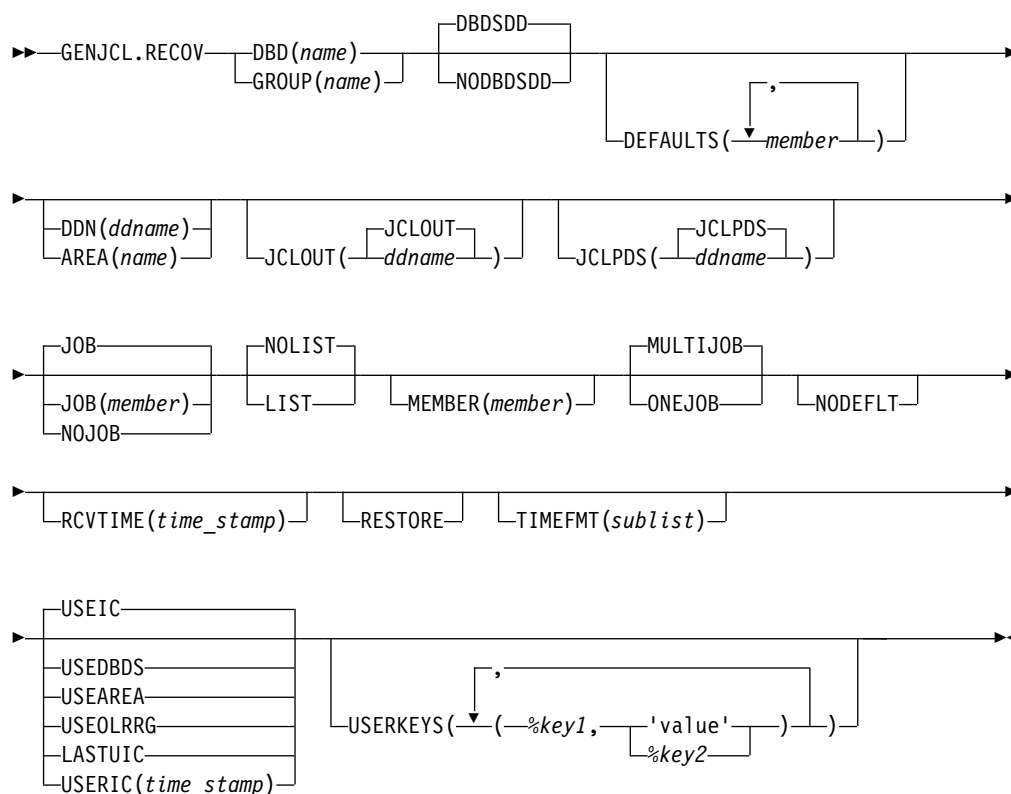
重要:

- HALDB 区画の場合、GENJCL.RECOV コマンドは、データ DBDS とは異なる方法で ILDS および索引付きデータ・セットを処理します。 GENJCL.RECOV コマンドは、グループが明示的であるか暗黙的であるかに関係なく、グループに含まれるこれらのデータ・セットはスキップします。 これらのデータ・セットの 1 つを明示的に指定した場合は、GENJCL.RECOV コマンドは失敗します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 243 ページの『例』

構文



キーワード

DBD(name) | GROUP(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、リカバリーする DBDS を指定するために使用します。

DBD(name)

リカバリーする DBDS のデータベース名を指定します。

HALDB データベースの制約事項: GENJCL.RECOV コマンドの場合、*name* には HALDB マスター・データベースか HALDB 区画を指定します。

GROUP(*name*)

DBDS または CA グループの、すべての DBDS がリカバリーされることを指定します。GROUP を指定すると、DBDS または CA グループのそれぞれの DBDS ごとに 1 回ずつ GENJCL.RECOV コマンドが繰り返し実行されます。リカバリー可能またはリカバリー不能 DBDS で暗黙的または明示的なグループ実行を行おうとした場合 (かつ、RESTORE が指定されていない場合)、リカバリー不能 DBDS については JCL は生成されません。

DBDSDD | **NODBDSDD**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL に DBDS 用の DD ステートメントを組み込むかどうかを指定します。

NODBDSDD

生成される JCL に DBDS 用の DD ステートメントを組み込まないことを指定します。データベース・リカバリー・ユーティリティーは、DBRC から DBDS のデータ・セット名を受け取ります。

NODBDSDD キーワードは、高速複製イメージ・コピーからのリカバリーにのみ適用されます。

例えば、次のコマンドは、

```
GENJCL.RECOV DBD(DB1) DDN(DBDS1) USEIC NODBDSDD
```

次の制御ステートメントを生成します。

```
S DB1 DBDS1 D
```

この場合、DBDS 名は DBRC から抽出されるため、ジョブ・ストリーム内にはデータベース・データ・セットを識別する DD ステートメント DBDS1 は必要ありません。

DBDSDD

生成される JCL に DBDS 用の DD ステートメントを組み込むことを指定します。

例えば、次のコマンドは、

```
GENJCL.RECOV DBD(DB1) DDN(DBDS1) USEIC
```

次の制御ステートメントを生成します。

```
S DB1 DBDS1 D10U1
```

この場合は、DD ステートメント DBDS1 をジョブ・ストリームに組み込み、DD ステートメントでターゲット DBDS のデータ・セット名を参照する必要があります。

DEFAULTS(*member*)

JCL の生成時に使用する基幹 JCL のデフォルトのメンバーの名前を 10 個まで指定するオプション・キーワード。キーワードを変換するために、デフォルトのメンバーがこのキーワードに指定された順序で検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

DDN(*ddname*) | **AREA**(*name*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、リカバリーする DBDS DD 名または DEDB エリア名を示すために使用します。

DDN または AREA キーワードは、DBD キーワードが指定された場合にのみ指定します。

HALDB データベースの場合、DDN キーワードを使用するためには、DBD キーワードでパーティション・データベース名を指定する必要があります。DDN キーワード値は区分 DDN です。GENJCL.RECOV コマンドは、識別された区分の DBDS について実行されます。DDN が区分のデータ DBDS を識別していない場合は、GENJCL.RECOV コマンドは失敗に終わります。

DDN または AREA を指定しない場合は、GENJCL.RECOV コマンドは、指定されたデータベースのそれぞれの DBDS またはエリアごとに繰り返し実行されます。HALDB マスター名を指定した場合は、GENJCL.RECOV コマンドは、HALDB マスターのそれぞれの HALDB 区画ごとのすべてのデータ DBDS について実行されます。HALDB 区画名を指定した場合は、GENJCL.RECOV コマンドは、識別された区分のすべてのデータ DBDS について実行されます。

JCLOUT(JCLOUT | *ddname*)

生成された JCL の出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。指定するデータ・セットは、デフォルト (JCLOUT) に使用されたデータ・セットと同じものではない場合にのみ、区分データ・セットのメンバーでも構いません。

JCLPDS(JCLPDS | *ddname*)

JCL を生成するときに、入力として使用される基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。この DD 名を持つ JCL DD ステートメントは、GENJCL コマンドを含むジョブ・ステップに入っている必要があります。

JOB | **JOB**(*member*) | **NOJOB**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを生成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。JOB(*member*) を指定した場合は、指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成しないことを指定します。

NOLIST | **LIST**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL を SYSPRINT データ・セットに書き込むかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MEMBER(member)

使用する基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定するオプション・キーワード。このキーワードを指定しない場合は、INIT.DBDS コマンドで指定されたデフォルトが使用されます。

MULTIJOB | ONEJOB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS グループを明示的または暗黙的に指定したときに生成する JOB ステートメントの数を制御するために使用します。

MULTIJOB

それぞれのグループ・メンバーごとに基幹 JCL の JOB メンバーを処理します (複数の JOB ステートメントが生成されます)。

ONEJOB

最初のグループ・メンバーだけの基幹 JCL の JOB メンバーを処理します。

これらのキーワードは、NOJOB が指定されているか、DBDS グループが指定されていない場合には無効です。

NODEFLT

DBDS に暗黙の基幹 JCL のデフォルトのメンバーがあっても、それは使用しないことを指定するオプション・キーワード。

RCVTIME(time_stamp)

タイム・スタンプ・リカバリーを指定するために使用するオプション・キーワード。これは、DBDS またはエリアを最新の状態より前の時刻までリカバリーさせる部分リカバリーです。このキーワードを省略すると、最新の状態までの完全リカバリーを要求することになります。

部分リカバリーの有効なタイム・スタンプは、DBDS またはエリアの割り振りがなく、変更累積ユーティリティーの実行によって解決できなかったログのマーキングが必要ない任意の時点です。

重要: 割り振り解除時刻が記録されていない割り振りは、現行ログの停止時まで持続します。

RESTORE

リカバリー不能として指定されている DBDS 用の JCL を生成するオプション・キーワード。DBDS がリカバリー不能と指定される前に、最後のイメージ・コピーが取られた場合は、DBDS をリカバリー状態の変更が起きた時点までリカバリーさせる通常リカバリー JCL が生成されます。DBDS がリカバリー不能と指定された後で、最後のイメージ・コピーが取られた場合は、生成される JCL はそのイメージ・コピーだけをリカバリーに使用します。

リカバリー可能またはリカバリー不能 DBDS で暗黙的または明示的なグループ実行を行おうとした場合 (かつ、RESTORE が指定されている場合)、リカバリー不能 DBDS についてのみ JCL が生成されます。

リカバリー可能 DBDS について RESTORE は指定しないでください。

TIMEFMT(sublist)

ユーザー定義の出力に表示されるタイム・スタンプの形式を定義するオプション

ン・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基本 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドは、単一の GENJCL コマンドの期間中のみ有効です。

USEIC | USEDDBDS | USEAREA | USEOLRRG | LASTUIC | USERIC

互いに排他的なオプション・キーワードであり、要求されたりカバリー・アクションの開始点を指定するために使用します。

USEIC

イメージ・コピー・データ・セットからリカバリーを開始します。その後、DBDS 内で生じた後の変更を適用できます。

デフォルトは USEIC です。

USEDDBDS

リカバリーは、現在の状態の DBDS に対して行われた変更だけを使用して、行われます。このリカバリーへの入力にはイメージ・コピー・データ・セットは使用されません。USEDDBDS キーワードを指定できるのは、DBDS キーワードも指定し、イメージ・コピー・データ・セットが入力として使用されるタイム・スタンプ・リカバリーが実行された後だけです。

USEAREA

リカバリーは、現在の状態の DEDB エリアに対して行われた変更だけを使用して、行われます。このリカバリーへの入力にはイメージ・コピー・データ・セットは使用されません。USEAREA を指定できるのは、AREA キーワードも指定し、イメージ・コピー・データ・セットが入力として使用されるタイム・スタンプ・リカバリーが実行された後だけです。

USEOLRRG

HALDB オンライン再編成更新によってリカバリーを開始します。

LASTUIC

ユーザー生成の JCL から作成された最新の並行ユーザー・イメージ・コピーを使用してリストアされたデータベース・データ・セットをリカバリーすることを指定します。

LASTUIC キーワードを指定した場合、並行イメージ・コピー・データ・セットはリカバリー JCL に組み込まれませんが、タイム・スタンプ・リカバリーを実行するために必要なログ・データ・セットはすべて組み込まれます。並行ユーザー・イメージ・コピーからリカバリーするには、USERIC または LASTUIC キーワードのいずれかを指定する必要があります。USERIC キーワードで示された時刻から RCVTIME キーワードで示された時刻までの間に使用されたすべてのログが GENJCL.RECOV コマンドによって取得され、これらのログがリカバリーに使用されます。

制約事項: GENJCL.RECOV LASTUIC コマンドを使用してデータベース・データ・セットをリカバリーする前に、並行ユーザー・イメージ・コピーからデータベース・データ・セットをリストアしておく必要があります。

USERIC(*time_stamp*)

ユーザー生成の JCL から作成された特定の並行ユーザー・イメージ・コピーの開始時刻を指定します。このキーワードは、リカバリーのためにデータベース・データ・セットをリストアするのに使用される、ユーザー生成 JCL から生成された並行ユーザー・イメージ・コピーの実行時刻を示すために指定する必要があります。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

データベース・リカバリー・ユーティリティーは、ログ・データ・セットの適用を開始する時刻を判別するためにのみ、タイム・スタンプを使用します。データベース・リカバリー・ユーティリティーは、どのイメージ・コピーを使用するかを判別するためにはタイム・スタンプを使用しません。データベース・リカバリー・ユーティリティーは、ユーザー・イメージ・コピーに関連した最新のイメージ・コピー・レコードを探します。その場合は、ユーザー自身がイメージ・コピーを組み込む必要があります。並行ユーザー・イメージ・コピーからリカバリーするには、USERIC または LASTUIC キーワードのいずれかを指定する必要があります。

制約事項: GENJCL.RECOV USERIC コマンドを使用してデータベース・データ・セットをリカバリーする前に、並行ユーザー・イメージ・コピーからデータベース・データ・セットをリストアする必要があります。

これらのキーワードによって、指定されたタイム・スタンプまでイメージ・コピー・データ・セットを使用して DBDS またはエリアをリカバリーし、その後、USEDDBDS または USEAREA キーワードを使用して追加リカバリーを指定することによってイメージ・コピー以降に起きた変更を適用することができます。

制約事項: この必須タイム・スタンプ・リカバリーによって、DBDS または DEDB エリアが既存のタイム・スタンプ・リカバリーの範囲内の時間 (RECOV TO と RUN の間の時間) の状態に復元された場合、USEDDBDS または USEAREA キーワードは無効です。

USERKEYS(%*key1*, '*value*' | %*key2*)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%*key1*

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z、0-9) でなければなりません。

'*value*'

ユーザー定義のキーワードを検出したときに、それに割り当てる値。 *value* は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。 *value* の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。 *value* に引用符が含まれている場合、単一引用符を 2 つ使用します。 *value* にはヌル・ストリング (') も指定できます。 *value* がタイム・スタンプである場合は、0 でも構いません。

%*key2*

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

例

次の例は、GENJCL.RECOV コマンドを使用して、データベース・リカバリー・ユーティリティを実行するために必要な JCL を生成する方法を示しています。

DBD および DDN キーワードで識別される DBDS の例

この例では、GENJCL.RECOV コマンドは、DBD および DDN キーワードで識別される DBDS について、データベース・リカバリー・ユーティリティの実行に必要な JCL と制御ステートメントを生成します。USEIC キーワードは、タイム・スタンプ・リカバリーがイメージ・コピー・データ・セットで開始し、RCVTIME キーワードで指定された値の停止タイム・スタンプを持つログ・データ・セットで終了することを示します。

JCL を生成する DBDS に対する INIT.DBDS コマンドで RECOVJCL(member) が指定されている場合、そのメンバーが使用され、JCLPDS DD ステートメントで示されるデータ・セットが検索されます。そうでない場合は、JCLPDS データ・セットからのデフォルトの基幹メンバー RECOVJCL が使用されます。生成された JCL からの出力は、JCLOUT DD ステートメントで識別されるデータ・セットに入ります。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENJRCOV JOB
//JCLPDS DD . . .
//JCLOUT DD . . .
:
//SYSIN DD *
GENJCL.RECOV DBD(DBESDSA) DDN(DDESDSA) USEIC -
RCVTIME(071001212130)
/*
```

グループのすべての DBDS の例

この例では、GENJCL.RECOV コマンドは、GROUP1 のすべての DBDS に対してデータベース・リカバリー・ユーティリティを実行するための JCL と制御ステートメントを生成します。使用する基幹メンバーは、PDS DD ステートメントで示されるデータ・セットからの RECJCL2 です。

基幹メンバー JOBJCL は、グループのそれぞれのメンバーごとに JOB ステートメントを生成します。%DEFDBD1 と %DEFDBD2 はメンバー RECJCL2 にあるユーザー定義の値であり、'DEFINE DB1' と 'DEFINE DB2' に変換されます。デフォルトのメンバー DEF1、DEF2、および DEF3 は、RECJCL2 にあるユーザー定義のキーワードを変換するのに使用されます。DBDS のデフォルト・メンバーが INIT.DBDS DEFLTJCL(MEMBER) コマンドで、初期化されている場合、このメンバーもキーワードの変換に使用できます。明示的に定義された DEFAULTS メンバー内の値は、

事前定義の DEFLTJCL メンバーに含まれている値をオーバーライドします。
 USERKEYS キーワードでキーワードに指定された値は、DEFAULTS メンバーに含まれている値をオーバーライドします。

```
//GENJRCV1 JOB
//OUT DD . . .
//PDS DD . . .
//SYSIN DD *
GENJCL.RECOV GROUP(GROUP1) MEMBER(RECJCL2) -
  JCLPDS(PDS) JCLOUT(OUT) -
  USERKEYS((%DEFDBD1,'DEFINE DB1'),(%DEFDBD2,'DEFINE DB2')) -
  DEFAULTS(DEF1,DEF2,DEF3)
```

関連資料:

- 249 ページの『JCL とユーザー定義出力の生成』
- 57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』
- 252 ページの『基幹 JCL の構文』
- 289 ページの『IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバー』

GENJCL.USER コマンド

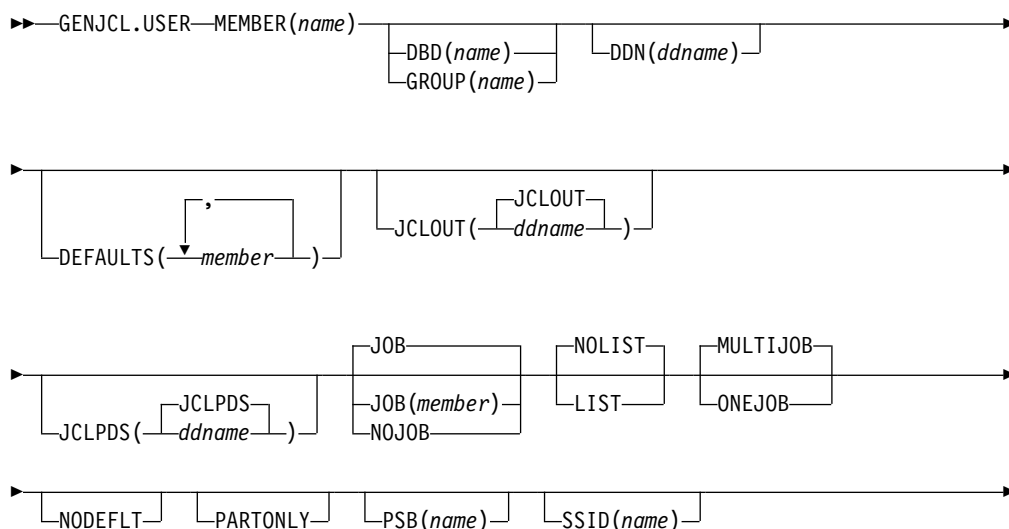
GENJCL.USER コマンドは、JCL または任意の種類ユーザー出力を生成するのに使用します。

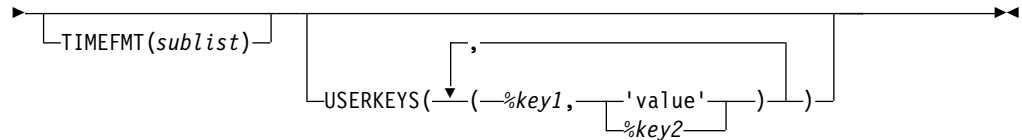
GENJCL.USER コマンドに必要な基幹 JCL 実行メンバーを用意する必要があります。

サブセクション:

- 『構文』
- 245 ページの『キーワード』
- 248 ページの『JCL の生成例』

構文





キーワード

MEMBER(*name*)

出力を生成するのに使用される基幹 JCL 実行メンバーの名前を指定する必須キーワード。実行メンバーをあらかじめ用意しておく必要があります。

名前は区分データ・セットの有効なメンバー名であれば何でも構いません。指定されたメンバーが基幹 JCL データ・セットにない場合、このコマンドは失敗します。

DBD(*name*) | GROUP(*name*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、%dbname キーワードの値を設定するために使用します。

DBD(*name*)

DDN キーワードなしで DBD を指定すると、GENJCL.USER コマンドは、それぞれの DBDS または指定されたデータベースごとに繰り返し実行されます。

HALDB データベースの制約事項: GENJCL.USER コマンドの場合、*name* には HALDB マスター・データベースか HALDB 区画の名前を指定します。このキーワードを使用して、%dbname キーワードの値を HALDB マスター名または HALDB 区画名に設定できます。HALDB マスター名を使用した場合、GENJCL.USER コマンドは、HALDB マスター内のそれぞれの HALDB 区画ごとのすべてのデータ DBDS について実行します。HALDB 区画名を使用した場合、GENJCL.USER コマンドは、識別された区分のすべてのデータ DBDS について実行します。

GROUP(*name*)

GROUP を指定した場合、指定された DBDS グループのそれぞれの DBDS ごとに 1 回ずつ GENJCL.USER コマンドが繰り返し実行されます。繰り返されるそれぞれの実行ごとに、DBD および DDN キーワードが対応するグループ・メンバーに設定されます。

DBD も GROUP も指定しない場合は、USERKEYS キーワードまたは基幹 JCL のデフォルト・メンバーに値が割り当てられていない限り、%dbname キーワードの値はヌルになります。

DDN(*ddname*)

%ddname キーワードの値を設定するオプション・キーワード。DDN を指定しない場合、USERKEYS キーワードまたは基幹 JCL のデフォルト・メンバーに値が割り当てられていない限り、%ddname キーワードの値はヌルになります。

HALDB データベースの場合、DDN キーワードを使用するためには、DBD キーワードでパーティション・データベース名を指定する必要があります。このケースでは、DDN は区分 DDN です。GENJCL.USER コマンドは、区分の識別

された DBDS について実行します。DDN が区分の DBDS を識別していない場合は、GENJCL.USER コマンドは失敗します。

GROUP も指定する場合は、DDN は指定できません。

DEFAULTS(*member*)

JCL または他のユーザー定義出力の生成の際に使用する基幹 JCL のデフォルトのメンバーを 10 個まで指定するオプション・キーワード。キーワードを変換するために、デフォルトのメンバーがこのキーワードに指定された順序で検索されます。

DEFAULTS および USERKEYS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定されている値が使用されます。

JCLOUT(**JCLOUT** | *ddname*)

生成する JCL または他のユーザー定義の出力のための出力データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。GENJCL.USER コマンドのあるジョブ・ステップには、この DD 名の JCL DD ステートメントが含まれている必要があります。指定するデータ・セットは、デフォルト (JCLOUT) に使用されたデータ・セットと同じものではない場合にのみ、区分データ・セットのメンバーでも構いません。

JCLPDS(**JCLPDS** | *ddname*)

JCL または他のユーザー定義の出力を生成するとき、入力として使用する基幹 JCL データ・セットを指定するオプション・キーワード。データ・セットは *ddname* で指定されます。GENJCL.USER コマンドのあるジョブ・ステップには、この DD 名の JCL DD ステートメントが含まれている必要があります。

JOB | **JOB**(*member*) | **NOJOB**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成するかどうかを指定するために使用します。

JOB

JOB ステートメントを生成することを指定します。メンバー名なしで JOB を指定すると、IBM 提供の実行メンバー JOBJCL によって JOB ステートメントが作成されます。JOB(*member*) を指定した場合は、指定された実行メンバーが JOB ステートメントを作成します。

NOJOB

生成される JCL 内に JOB ステートメントを作成しないことを指定します。

NOLIST | **LIST**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、生成される JCL を SYSPRINT データ・セットに書き込むかどうかを指定するために使用します。

NOLIST

生成された JCL を印刷しません。

LIST

生成された JCL を印刷します。

MULTIJOB | **ONEJOB**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS グループを明示的または暗黙的に指定したときに生成する JOB ステートメントの数を制御するために使用します。

MULTIJOB

それぞれのグループ・メンバーごとに基幹 JCL の JOB メンバーを処理します (複数の JOB ステートメントが生成されます)。

ONEJOB

最初のグループ・メンバーの基幹 JCL の JOB メンバーだけを処理します。

これらのキーワードは、NOJOB が指定されているか、DBDS グループが指定されていない場合には無効です。

NODEFLT

DBDS に暗黙の基幹 JCL のデフォルトのメンバーがあっても、それは使用しないことを指定するオプション・キーワード。GROUP または DBD を指定しない場合は、このキーワードは無視されます。

PARTONLY

各 HALDB 区画のすべてのデータ DBDS ではなく、HALDB 区画だけを処理することを指定するオプション・キーワード。PARTONLY は HALDB に対してのみ意味があります。指定された DBD が HALDB マスター名または HALDB 区画名でない場合は、このキーワードが無視されます。このキーワードは、%mdbname の値を HALDB マスター名に、%dbname の値を HALDB 区画名に設定します。

PSB(name)

%PSB キーワードの値を設定するオプション・キーワード。

name は任意の文字ストリングです。これは実際の PSB DD 名でなくて構いません。この名前の最大長は 8 文字です。

PSB を指定しない場合は、USERKEYS キーワードまたは基幹 JCL のデフォルト・メンバーに値が割り当てられていない限り、%PSB キーワードの値はヌルになります。

SSID(name)

%SSID キーワードの値を設定するオプション・キーワード。

name は任意の文字ストリングです。これは実際の IMS サブシステム ID であっても構いません。この名前の最大長は 8 文字です。

SSID キーワードを指定しない場合、USERKEYS キーワードまたは基幹 JCL のデフォルト・メンバーに値が割り当てられていない限り、%SSID キーワードの値はヌルになります。

TIMEFMT(sublist)

ユーザー定義の出力内で、タイム・スタンプを表すフォーマットを定義するオプション・キーワード。この指定によって、GENJCL のデフォルト値および入力の基幹 JCL に含まれる %SET ステートメントで設定された値の両方ともオーバーライドされます。

GENJCL の出力時刻形式は、2 桁の年と 960021315001 +0700 の数値で表されるオフセット形式に圧縮されます。出力タイム・スタンプをオフセットなしで表示する場合は、例えば、デフォルトを TIMEFMT(N) でオーバーライドすることができます。

オーバーライドが有効なのは、単一の GENJCL コマンドの実行中だけです。

USERKEYS(%key1,'value' | %key2)

ユーザーが定義したキーワードの値を設定するオプション・キーワード。64 個までのキーワードを指定することができます。

%key1

値が割り当てられるユーザー定義のキーワード。このキーワードの最大長は、% 記号を含めて 8 文字です。% 記号の後の先頭文字は英字 (A-Z) でなければなりません。残りの文字は英数字 (A-Z、0-9) でなければなりません。

'value'

ユーザー定義のキーワードを検出したときに、それに割り当てる値。value は単一引用符で囲まれた任意の文字ストリングです。value の最大長は 132 文字 (引用符は除く) です。value に引用符が含まれている場合、単一引用符を 2 つ使用します。value にはヌル・ストリング (') も指定できます。value がタイム・スタンプである場合は、0 でも構いません。

%key2

前に値が割り当てられていた単純キーワード (DBRC 定義のキーワードおよびユーザー定義のキーワードを含む)。

いずれのキーワードも USERKEYS キーワードによって値を割り当てることができます。ただし、DBRC 定義キーワードに値を割り当てると、その値は無視されます。

USERKEYS および DEFAULTS キーワードの両方でキーワードに値が割り当てられている場合は、USERKEYS に指定された値が使用されます。

JCL の生成例

この例では、GENJCL.USER コマンドは、DD ステートメント MYJCLPDS で示されるデータ・セットのメンバー USER4 から JCL を生成します。生成した JCL からの出力は、DD ステートメント JCLOUT で示されるデータ・セットに入ります。%SSID、%DBNAME、および %DDNAME への置換が行われます。基幹メンバー JOBJCL は JOB ステートメントを作成します。

```
//GENUSER JOB
//JCLOUT DD
//MYJCLPDS DD
//SYSIN DD *
GENJCL.USER MEMBER(USER4) JCLPDS(MYJCLPDS) DBD(DHONTZ04) -
SSID(IMSA) DDN(HIDAM)
```

次の例は、実行されるメンバー USER4 を示しています。

```
/          ADD LIST=ALL,NAME=USER4,LEVEL=01,SOURCE=0
/          NUMBER NEW1=00000100,INCR=100
//*****
//*          MEMBER NAME = USER4          *
//* (SSID) SHOULD BE SUBSTITUTED IN LIST.SUBSYS COMMAND *
//* (DBNAME) SHOULD BE SUBSTITUTED IN LIST.DBDS COMMAND *
//* (DDNAME) SHOULD BE SUBSTITUTED IN LIST.DBDS COMMAND *
//*****
//USER4 EXEC PGM=DSPURX00
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
//SYSIN DD *
```

```

LIST.SUBSYS SSID(%SSID) /* (SSID) SHOULD BE SUBSTITUTED */
LIST.DBDS DBD(%DBNAME) DDN(%DDNAME) -
/* (DBNAME) and (DDNAME) SHOULD BE SUBSTITUTED */
/*

```

関連資料:

『JCL とユーザー定義出力の生成』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

252 ページの『基幹 JCL の構文』

DBRC の基幹 JCL

DBRC は区分データ・セット (PDS) メンバーを入力モデル (またはテンプレート) として使用し、一部のリカバリー・ユーティリティ用の入力データを生成します。これらの PDS メンバーは IMS とともに配布され、基幹 JCL と呼ばれます。

DBRC は、基幹 JCL、RECON データ・セットからの情報、および GENJCL コマンドからの指示を使用して、一部のリカバリー・ユーティリティを正しく実行するために必要な JCL と制御ステートメントを生成します。ご使用のシステムの構成を反映するように、基幹 JCL を変更してください。

JCL とユーザー定義出力の生成

データベース・リカバリー管理ユーティリティでは、8 つの GENJCL コマンドがサポートされます。これらのコマンドの 7 つは、各種の IMS リカバリー関連ユーティリティの実行に必要な、JCL と制御ステートメントを生成します。残りの 1 つのコマンド GENJCL.USER は、ユーザー定義出力 (JCL を含む) の生成に使用します。

以下の表は、GENJCL コマンドとその出力を示しています。

表 5. GENJCL コマンドと出力

コマンド (PDS メンバー)	生成される出力
GENJCL.ARCHIVE (ARCHJCL メンバー)	ログ保存ユーティリティの JCL および制御ステートメント
GENJCL.CA (CAJCL メンバー)	データベース変更累積ユーティリティの JCL および制御ステートメント
GENJCL.CLOSE (LOGCLJCL メンバー)	ログ・リカバリー・ユーティリティの JCL および制御ステートメント
GENJCL.IC (ICJCL メンバー)	データベース・イメージ・コピーまたはデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティの JCL および制御ステートメント
GENJCL.OIC (OICJCL メンバー)	オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティの JCL および制御ステートメント
GENJCL.RECEIVE (ICRCVJCL メンバー)	データベース・リカバリー・ユーティリティの JCL および制御ステートメント
GENJCL.RECOV (RECOVJCL メンバー)	データベース・リカバリー・ユーティリティの JCL および制御ステートメント

表 5. GENJCL コマンドと出力 (続き)

コマンド (PDS メンバー)	生成される出力
GENJCL.USER (DSPUPJCL メンバー)	ユーザー定義出力 (JCL および制御ステートメントを含む) HALDB INDEX/ILDS 再ビルド・ユーティリティー (DSPUPJCL) のサンプル JCL が IMS に付属して提供されており、GENJCL.USER コマンドと一緒に使用できますが、他のタイプの JCL も同様に使用できます。デフォルトは定義されていません。

GENJCL コマンドを出すと、基幹 JCL 実行メンバーが使用されます。実行メンバーは、作成する JCL またはユーザー出力のモデルです。実行メンバーは、シンボリック・キーワードを含んでいます。DBRC は、シンボリック・キーワードを現行情報で置き換えます。置き換えられる情報は、RECON データ・セット、基幹 JCL のデフォルト・メンバー、およびユーザーの USERKEY 値からのものです。DBRC が置き換えるシンボリック・キーワードの典型的な情報としては、データ・セット名とボリューム情報があります。DBRC はキーワード置換を実行し、次に GENJCL コマンドの実行により要求された JCL またはユーザー出力を生成します。

IBM は、すべての GENJCL コマンドで使用される、JOB ステートメント実行メンバーを提供しています。IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバーが、ユーザーの一般的な要件を満たしている場合は、これを少し変更すれば、ご使用のシステムに特有な情報を提供することができます。

IBM 提供の基幹 JCL がユーザーの一般的な要件を満たしていない場合、または GENJCL.USER コマンドの使用を計画している場合は、ユーザー独自の基幹 JCL メンバーを作成するか、または新しいシンボリック・キーワードを定義し、IBM 提供の基幹 JCL に含める必要があります。IBM は、GENJCL.USER コマンドには基幹 JCL 実行メンバーを提供していません。

関連資料:

279 ページの『DBRC が認識するシンボリック・キーワード』

『IBM 提供の基幹 JCL の使用』

IBM 提供の基幹 JCL の使用

IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバーを使用して、IMS リカバリー関連ユーティリティー用の JCL を生成する場合、処理は単純です。これには、IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバーを変更することも含まれます。

メンバーを使用する前に、次の作業を行ってください。

- オンライン IMS が使用する DBRC 従属アドレス・スペース・プロシージャーに、2 つの DD ステートメント (JCLPDS と JCLOUT) を追加します。JCLPDS は、基幹 JCL 実行メンバーを含む区分データ・セットを指定します。JCLOUT は、生成されたジョブが書き込まれるデータ・セットを指定します。出力はカード・イメージ形式です。出力データ・セットは、パンチ・ファイル、ジョブを実行依頼する前に検査する DASD データ・セット、または z/OS 内部読み取りプログラムを使用できます。

これらの 2 つの DD 名は、GENJCL コマンドに指定することができます。GENJCL を使用すると、指定された 2 つのデータ・セットは GENJCL コマンドにのみ有効であり、ジョブの残りの部分には効果を持ちません。JCLOUT データ・セットはコマンド実行の開始でオープンされ、コマンド実行の終了でクローズされます。したがって、ジョブ・ストリーム内に複数の GENJCL コマンドを連結した場合、JCLOUT データ・セット (z/OS 内部読み取りプログラム以外の場合) は、処理された最後のコマンドの結果のみを含みます。

- ご使用のシステムで必要な、STEPLIB DD 名、およびジョブ・アカウント情報、基幹 JCL 実行メンバーを追加します。JOB ステートメント用の基幹 JCL メンバーを除き、基幹 JCL には JOBLIB、および JES 制御ステートメントを追加しないでください。追加すると、複数ステップが生成された場合にエラーが起きます。
- 基幹 JCL EXEC ステートメント上の既存の REGION パラメーターが、ご使用のシステムにとって正しくない場合は、そのデフォルト値を変更します。
- ログ・リカバリー・ユーティリティ (メンバー LOGCLJCL) を実行する JCL を生成する場合は、DFSWADS0 DD ステートメントを置き換えます。

推奨事項: DBRC は生成された JCL を検査しないため、基幹 JCL を変更する場合は注意して行ってください。

基幹 JCL データ・セット・メンバー

基幹 JCL データ・セットは、GENJCL コマンド・プロセッサが出力を生成するために使用する、基幹 JCL メンバーを含んでいます。

次の図に示されているように、基幹 JCL メンバーには、実行メンバーとデフォルト・メンバーの 2 つのタイプがあります。

実行メンバーは、生成する出力のモデルです。実行メンバーは、IBM 提供のものでも、ユーザー提供のものでも構いません。実行メンバーは、シンボリック・キーワードを含み、これは DBRC が提供する情報を表します。

デフォルト・メンバーは、実行メンバー内のシンボリック・キーワード用のデフォルト値を指定します。デフォルト・メンバーの使用はオプションです。ユーザーがデフォルト・メンバーを提供します。デフォルト・メンバーを使用するには、GENJCL コマンドでメンバーを指定します。あるいは、DBDS および CA グループの場合には、暗黙的にデフォルト・メンバーを指定できます。

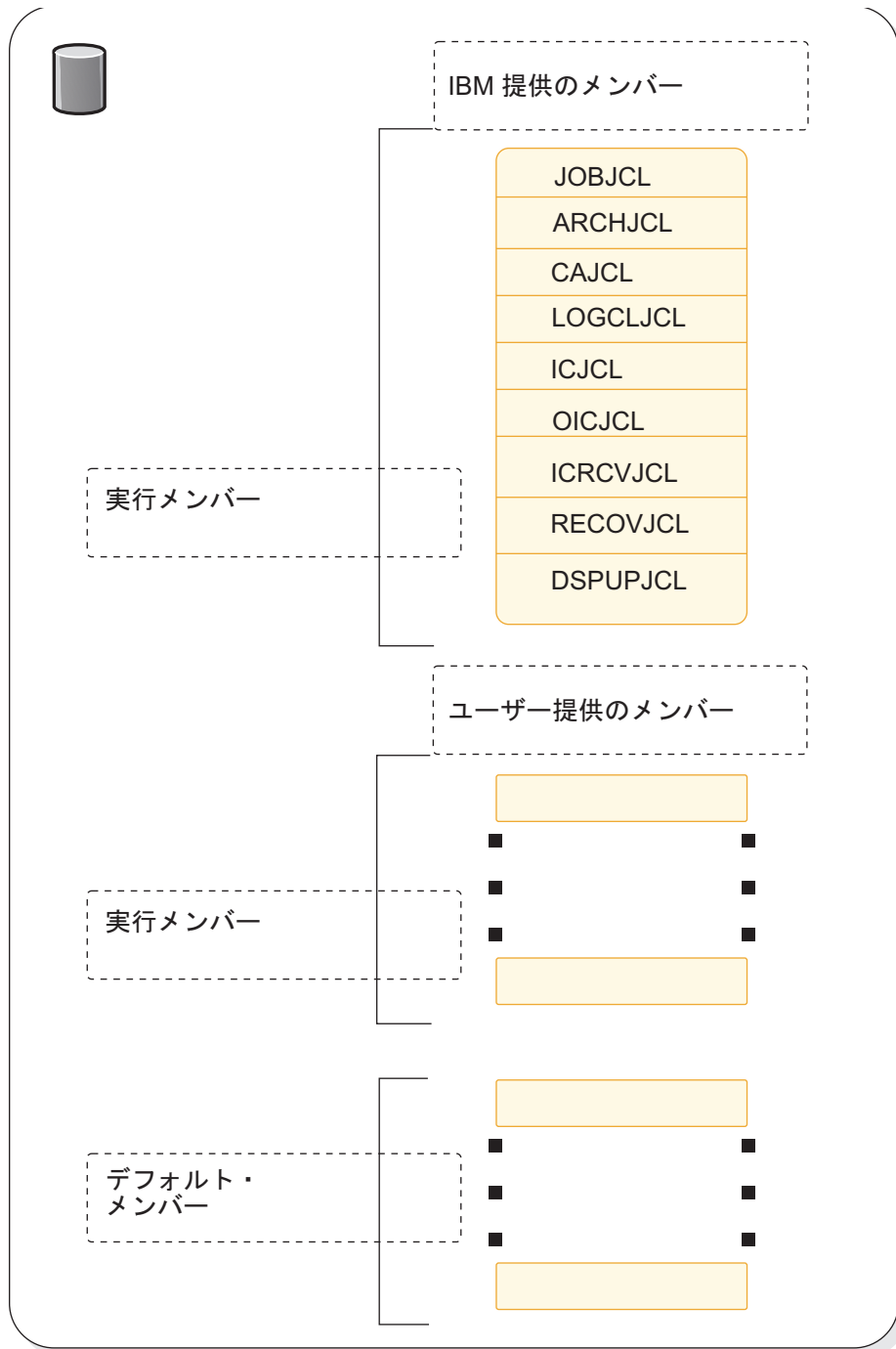


図 1. 基幹 JCL データ・セットの内容

基幹 JCL の構文

基幹 JCL 実行メンバーは、作成される出力のモデルです。実行メンバーには、シンボリック・キーワードと制御キーワードが含まれます。シンボリック・キーワードは、DBRC が GENJCL コマンドに指定された内容と RECON データ・セットから入手した情報を基に出力ストリーム (例えば、データ・セット名) 内で値と置き換えるシンボリック・パラメーターです。

制御キーワードは、GENJCL コマンドに指定された内容 (例えば、どの RECON レコードをキーワード置換に使用するか) を基に、DBRC により生成される出力の内容を規定します。

基幹 JCL メンバー内のキーワードは、大文字でなければなりません。

サブセクション:

- 『シンボリック・キーワード』
- 254 ページの『%SELECT および %ENDSEL 制御キーワード』
- 258 ページの『%DELETE および %ENDDEL 制御キーワード』
- 259 ページの『%SET MEMBER 制御キーワード』
- 260 ページの『%SET TIMEFMT 制御キーワード』
- 261 ページの『制御キーワードに関する規則』
- 278 ページの『基幹 JCL デフォルト・メンバーの作成』
- 278 ページの『デフォルト・メンバーの指定』
- 279 ページの『ユーザー提供の基幹 JCL または変更した基幹 JCL の使用』

シンボリック・キーワード

JCL を生成する際に、基幹 JCL 実行メンバー内のシンボリック・キーワードは、現行のキーワード値で置き換えられます。例えば、IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバーは、シンボリック・キーワードとして %TIME を使用します。DBRC は %TIME を見つけると、これを時刻で置き換えます。キーワード置換は、DBRC がシンボリック・キーワードを見つかるたびに行われます。基幹 JCL 実行メンバーには複数のシンボリック・キーワードを入れることができます。

シンボリック・キーワードには、その使用前に値を割り当てる必要があります。キーワード値は、以下に示すように、いくつかの異なる方法で割り当てる (または設定する) ことができます。

- GENJCL コマンドは、基幹 JCL 実行メンバーまたはデフォルト・メンバー内のシンボリック・キーワードのいくつかに値を指定します。ユーザー定義キーワードは、コマンド内の USERKEYS パラメーター内に値を割り当てます。その他のキーワード値は、コマンド上の各種のパラメーターにより設定します。例えば、SSID パラメーターは、%SSID キーワード (サブシステム ID) の値を設定します。
- 基幹 JCL デフォルト・メンバーは、基幹 JCL 実行メンバー内のキーワードのデフォルト値を設定します。
- RECON データ・セットもキーワード値を提供します。例えば、GENJCL.ARCHIVE コマンドを実行すると、OLDS の DD 名とデータ・セット名は、PRIOLDS および SECOLDS レコードから入手します。
- いくつかのキーワード値、例えば時刻などは、暗黙的に認識されています。

JCL 生成処理中に、値が割り当てられていないキーワードが見つかった場合、置換は行われません。この場合、DBRC は警告メッセージを出します。

ユーザー独自の基幹 JCL 実行メンバーを作成する際に、既に DBRC が認識しているシンボリック・キーワードを使用するだけでなく、ユーザー独自のシンボリック

ク・キーワードを定義することができます。また、ユーザー独自のシンボリック・キーワードを定義し、それを IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバーに追加することもできます。

次に、シンボリック・キーワードを作成する場合に知っておく必要がある、いくつかの規則、制限、およびその他の詳細を示します。

- キーワードはパーセント (%) 記号で始める必要があります。
- キーワードの最小の長さは、% 記号を含めて 2 文字です。最大の長さは、% 記号を含めて 8 文字です。
- キーワードは、大文字のみ (a ではなく A) を使用して作成する必要があります。
- % 記号の後の最初の文字は英字 (A-Z) でなければならず、残りの文字は英数字 (A-Z, 0-9) でなければなりません。キーワードは、英数字以外の文字または、最大長に達した場合に区切られます。
- DBRC は、%W、%X、%Y、または %Z で始まるキーワードを使用しません。したがって、これらの文字をユーザー独自のキーワードとして使用すれば、定義済みのキーワードと競合せずに済みます。
- ユーザー定義のシンボリック・キーワードは、GENJCL コマンドの USERKEYS パラメーターまたは、基幹 JCL デフォルト・メンバーを使用して、値を割り当てる必要があります。
- キーワード置換は、基幹 JCL レコードの桁 1-71 上で行われます。桁 72-80 は変更されません。キーワード値がキーワードよりも短い場合、レコード上の残りのデータは左にシフトされ、空白で埋められます。キーワード値がキーワードよりも長い場合、残りのデータは右にシフトされます。非空白の文字が桁 71 を超えてシフトされると、JCL 継続ステートメントが生成されます。場合によっては (例えば、出力が JCL ステートメントでない場合)、JCL 継続ステートメントを生成できないことがあります (DBRC が出力レコードを分割するには、その中にコンマまたは空白がなければならないため)。DBRC がステートメント内に切れ目を見つけれられない場合、ステートメントは桁 71 で分割されます。

%SELECT および %ENDSEL 制御キーワード

%SELECT 制御キーワードは、シンボリック・キーワードを変換するために必要な RECON レコードを選択します。%ENDSEL 制御キーワードは、%SELECT キーワードにより選択されたレコードの終了を示します。これらの制御キーワードは必ずペアで使用されます。%SELECT キーワードの後には、1 つ以上の実行メンバー・レコードが続き、その後に %ENDSEL キーワードが続きます。このようなレコードの順序は、制御グループ、より正確には、選択グループと呼ばれます。

%SELECT キーワードは、RECON データ・セットから 1 つ以上のレコードを選択するために使用します。選択されたレコードは、IMS データ・セットまたは DBRC によりトラッキングされたイベントを表します。選択されたレコードからの情報は、選択グループ内のシンボリック・キーワードを変換するために使用されます。シンボリック・キーワードは、実行メンバー・レコードまたは、%SELECT キーワード・ステートメントに指定することができます。

選択グループの形式は次のとおりです。

```
%SELECT record_type(selection_criteria)
      execution_member_record(s)
%ENDSEL
```

record_type は、選択する RECON レコードのタイプです。次の record_type のいずれかを選択できます。

- OLDS (PRIOLD)
- SLDS (PRISLD)
- RLDS (PRILOG)
- IC (IMAGE)
- CA (CA)
- ALLOC (ALLOC)
- DBDS (DBDS)

selection_criteria は選択するレコードのタイプによって異なり、時刻範囲と DD 名を指定できます。

record_type および selection_criteria の両方とも、シンボリック・キーワードとして使用できます。

RECON レコードが選択されると、そこからの情報を使用して、シンボリック・キーワードの値が設定されます。選択されたレコードのタイプに応じて、選択されたレコードに関連するシンボリック・キーワードの特定グループの値が設定されます。

選択グループが処理される前にキーワードに割り当てられた値は、選択グループが処理される時にオーバーライドされます。選択グループが処理された後で有効なキーワード値は、最後に選択されたレコードから設定された値です。キーワード値は、レコードが選択されなければ、未変更のまま残ります。この場合、選択グループ内のレコードは処理されません。次に処理されるレコードは、%ENDSEL ステートメントのすぐ後にあるレコードです。選択グループは、削除グループ内に入れることができます。選択グループを削除グループ内に入れ、削除グループを削除すると、選択グループは処理されず、キーワード値は設定 (または変更) されません。

選択グループの selection_criteria は、1 つ以上の RECON レコードを選択することができます。選択されたレコードのタイプにより、1 つの実行メンバーを複数回、出力することができます。

出力ストリームが JCL の場合、選択グループは、連結された、または繰り返された DD ステートメントのいずれかを生成することができます。選択グループの最初の実行メンバー・レコードにより、いずれを生成するかが決まります。このレコードが JCL DD ステートメントであり、DD 名がシンボリック・キーワードの場合、DD ステートメントが繰り返して生成されます。それ以外の場合、連結された DD ステートメントが生成されます。

例:

最初のレコードが次のようになっていたとします。

```
//DDNAME DD DSN= . . .
```

この場合、連結された DD ステートメントが生成されます。あるいは、最初のレコードが次のようになっていたとします。

```
//%DDNAME DD DSN= . . .
```

この場合は、DD ステートメントが繰り返して生成されます。DD ステートメントが繰り返して生成される場合は、繰り返される DD 名が必ず固有になるようにするための、何らかのメカニズムを提供する必要があります。OLDS を選択する場合、DBRC は OLDS DD 名を使用し、これは OLDS RECON レコードにあります。DBRC は、その他のタイプのデータ・セットについては、DD 名を追跡しません。したがって、OLDS でないデータ・セットについては、DBRC は固有な DD 名を生成できない場合があります。

次の 2 つのセクションでは、record_type パラメーターと selection_criteria パラメーターについて詳しく説明します。

レコード・タイプ・パラメーターの指定

%SELECT キーワードに指定できるレコードのタイプが、以下の表に示されています。

表 6. %SELECT キーワードを使用して選択できるレコード

レコード・タイプ	選択されるもの
OLDS	OLDS を選択することを指定します。重複ロギングが有効な場合、PRIOLDS と SECOLDS の両方が選択できます。
SLDS	PRISLD を選択することを指定します。RECON データ・セットの SLDS レコードが、SLDS にエラーがあることを示していない限り、PRISLD が選択されます。エラーがある場合は、SECSLD が選択されます。SLDS は、IMS バッチ領域により作成されたものではなく、OLDS のアーカイブ時にログ保存ユーティリティにより作成されたものです。IMS バッチ SLDS を選択するには、RLDS を指定します。
SSLDS	SECSLD を選択することを指定します。
RLDS	RLDS を選択することを指定します。RECON データ・セット内の PRILOG レコードが、RLDS にエラーがあることを示していない限り、PRIRLDS が選択されます。エラーがある場合は、SECRLDS が選択されます。RLDS は、ログ保存ユーティリティにより作成された RLDS と、IMS バッチ領域により作成された SLDS の両方を指します。
SRLDS	SECRLDS を選択することを指定します。
IC	イメージ・コピー・データ・セットを選択することを指定します。
CA	変更累積データ・セットを選択することを指定します。
ALLOC	DBDS 割り振りレコードを選択することを指定します。
DBDS	DBDS レコードを選択することを指定します。

選択基準パラメーターについて

選択基準は、選択するレコード・タイプにより異なります。選択基準については、個々のレコード・タイプの選択に関するセクションで説明されています。

この章の残りの部分では、選択基準に使用される、次のような共通用語を使用しています。

dbds_qualifier

選択されたレコードと関連付ける DBDS を指定します。DBDS は、DB 名、DD 名、または CA グループ名として指定することができます。CA グループ名を指定すると、CA グループ内のすべての DBDS が選択に使用されます。DBDS 修飾子は、以下のものを選択する時に使用されます。

- RLDS
- 変更累積データ・セット
- イメージ・コピー・データ・セット
- ALLOC レコード
- DBDS

time_qualifier

タイム・スタンプまたは、タイム・スタンプの範囲を指定します。

DBRC は、RECON のレコード・キーを使用して RECON レコードを選択します。多くのレコードがタイム・スタンプを含んでいます。そして、レコード・キーに含まれる時刻は、リスト上で隣接するアスタリスク (*) により示されます。時刻修飾子は、FROMTIME または TOTIME パラメーターで指定し、DBRC が選択するレコードを決めます。

PRILOG または PRISLD レコードなどのレコードは、複数の DSN エントリーから成っており、それぞれが開始時刻と停止時刻を持っています。DBRC は、最初にログ・レコード全体を選択してからでなければ、特定の DSN エントリーを選択することができません。FROMTIME および TOTIME の値は、必要な DSN エントリーを含むログ・レコード全体がレコード・キーにあるタイム・スタンプに基づいて選択されるように、指定する必要があります。

例えば、12:00 の FROMTIME を指定すると、12:00 より後のタイム・スタンプを持つ DSN エントリーは (ただし、開始時刻が 11:00 の PRISLDS には含まれている)、DBRC によって選択されることも、表示されることもありません。なぜなら、PRISLDS レコード自体は、指定された FROMTIME よりも早いタイム・スタンプを持っているからです。時刻値にはゼロを指定することができます。

FIRST

最も古いレコードを選択することを指定します。

LAST

最新のレコードを選択することを指定します。

(FROM(*time*),TO(*time*)) or (FROM(*time*)) or FROM(*time*) or (TO(*time*)) or TO(*time*)

FROM 時刻より大か等しく TO 時刻より小か等しい時刻を持つ、すべてのレコードを選択することを指定します。

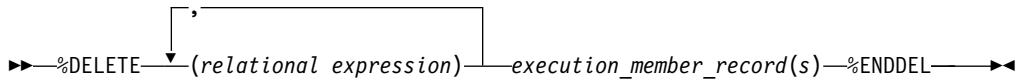
ALL

すべてのレコードを選択することを指定します。

%DELETE および %ENDDDEL 制御キーワード

%DELETE キーワードは、生成された出力ストリームからレコードを削除します。削除は、特定の条件に基づいて行われます。%ENDDDEL キーワードは、%DELETE キーワードの有効範囲を区切ります。これらの制御キーワードは必ずペアで使用されます。%DELETE キーワードの後には 1 つ以上の実行メンバー・レコードが続き、その後には %ENDDDEL キーワードが続きます。このようなレコードの順序は、制御グループ、より正確には、削除グループと呼ばれます。

%DELETE と %ENDDDEL キーワードは、特定の条件に基づいて、出力ストリームからレコードを削除するために使用します。削除グループの構文を以下に示します。



%DELETE ステートメントはネストできません。各 %DELETE キーワードには、対応する %ENDDDEL を続ける必要があります。その後でないと別の %DELETE キーワードを指定できません。

関係式 (relational expression) は、%keyword op 'value' または %keyword op '%userkey' の形式で指定する必要があります。ここで、

- %keyword は任意のシンボリック・キーワードです。
- 'value' は、単一引用符で囲んだ任意の文字ストリングです。値には、ヌル・ストリング ('') を指定することができます。時刻値にはゼロを指定することができます。
- %userkey は、GENJCL コマンドの USERKEYS パラメーターで定義された任意のキーワードです。%userkey は、引用符で囲む必要があります。%userkey の値は先行ゼロを除く必要があります。
- op は、以下の演算子の 1 つです。

EQ	等しい
NE	等しくない
LT	より小さい
LE	より小さいか等しい
GT	より大きい
GE	より大きいか等しい

基幹 JCL 実行メンバーが %DELETE キーワードを検出すると、関係式が評価されます。式が真の場合、削除グループは出力ストリームから削除されます。式が偽の場合、キーワードを変換した後、該当のレコードが出力ストリームにコピーされます。キーワードに値が割り当てられない場合、値はヌル・ストリング ('') です。基幹 JCL に未定義のキーワードがある場合、エラー・メッセージが出され、置換は行われません。

複合式の指定

複数の関係式を連結語で結合して構成される、複合式を指定することができます。

バー名を指定しても、GENJCL コマンドが実行されるまでエラー条件が生じないため、そのメンバーを読み込んでしまうようなステップが生成される可能性があります。

%SET TIMEFMT 制御キーワード

%SET TIMEFMT キーワードは、GENJCL 出力に表示されるタイム・スタンプのフォーマットを指定します。マイクロ秒を組み込むように設定されていないタイム・スタンプを持つ以前のバージョンからの JCL は再利用できません。

GENJCL.USER の場合、デフォルトは TIMEFMT(0,0,C,2,6) です。

GENJCL TIMEFMT のデフォルト値は、IBM 提供の基幹 JCL について正しい出力を作成するために選択されていることに注意してください。 %SET ステートメントを使用して TIMEFMT 値を変更し、それが IBM 提供の JCL ステートメントに置換される値に影響を及ぼすような場合は、この結果が無効となる可能性があります。

例:

次に示すのは、基幹 JCL 内の %SET TIMEFMT キーワードの例です。

```
%SET TIMEFMT(,N)
%SELECT RLDS(%SSID, LAST)
LOGEND =%LOGETIM
%ENDSEL
```

次に示すのは、上の例の %SET から提供される出力です。

```
LOGEND =96011131500023456
```

次の 4 つの例は、GENJCL.USER で使用される次の基幹 JCL メンバー (USER01) に基づいています。

```
%SELECT RLDS(%SSID, LAST)
LOGETIM=%LOGETIM
%ENDSEL
```

- この例の出力形式は、USER01 JCL を使用し、SSID(XXXX) を指定し、TIMEFMT のデフォルト (下記) を使用して得られたものです。

```
TIMEFMT(0,0,C,2,6)
LOGETIM=96002131400123456-0700
```

- この例の出力形式は、USER01 JCL を使用し、SSID(XXXX) を指定し、TIMEFMT のデフォルトをオープン・ログに使用して得られたものです。

```
LOGETIM=0000000000000000+0000
```

- この例の出力形式は、USER01 JCL を使用し、SSID(XXXX) を指定し、TIMEFMT(,N) の指定を使用して得られたものです。

```
LOGETIM=96011131454423456
```

- この例の出力形式は、USER01 JCL を使用し、SSID(XXXX) を指定し、TIMEFMT(,P,4) の指定を使用して得られたものです。

```
LOGETIM=1996.011 13:15:00.023456 -07:00
```

- この例の出力形式は、USER01 JCL を使用し、SSID(XXXXX) を指定し、TIMEFMT(,P,4,1) の指定を使用して得られたものです。

```
LOGETIM=1996.011 13:15:00.0 -07:00
```


制約事項: %SET TIMEFMT キーワードは、GENJCL コマンドを介して出されるか、基幹 JCL 内の %SET ステートメントから出される場合にも、GENJCL の出力に影響を与えます。

%SET TIMEFMT キーワードの構文は、次のとおりです。

▶▶—%SET_TIMEFMT(*subparm*, [*subparm*], ...)————▶▶

制御キーワードに関する規則

制御キーワードを作成するには、以下の規則および制約事項を守ってください。

- 制御キーワードは、基幹 JCL 実行メンバー・レコードのカラム 1 から始める必要があります。
- キーワードに指定するものはすべて、1 つのレコード内に含める必要があります。制御ステートメントの後に続くデータはすべて、無視されます。
- 制御グループには、基幹 JCL 実行メンバー・レコードをいくつでも含めることができます。
- 複数の削除グループおよび複数の選択グループのネストはできません。ただし、1 つの選択グループを 1 つの削除グループ内に含めること、あるいは、1 つの削除グループを 1 つの選択グループ内に含めることは可能です。
- 制御キーワードを含む実行メンバー・レコードは、出力ストリームにコピーされません。

OLDS の選択

OLDS を選択するための %SELECT キーワードの構文は、次のとおりです。

▶▶—%SELECT—OLDS(*ssid*,*olds_qualifier*)————▶▶

ssid

OLDS を作成した IMS オンライン制御領域のサブシステム ID。

olds_qualifier

選択する OLDS を、次のように指定します。

INUSE

指定されたサブシステムが現在使用している OLDS を選択することを指定します。重複ロギングが有効な場合、1 次 OLDS と 2 次 OLDS の両方が選択されます。

LATEST

指定されたサブシステムが最新にオープンした OLDS を選択することを指定します。重複ロギングが有効な場合、1 次 OLDS と 2 次 OLDS の両方が選択されます。

UNARCH

指定されたサブシステムの、アーカイブされていないすべての OLDS を選択することを指定します。重複ロギングが有効な場合、1 次 OLDS と 2 次 OLDS の両方が選択されます。

(DDNAME)

1 つ以上の OLDS を DD 名により指定します。重複ログインが有効であり、1 次 OLDS と 2 次 OLDS の両方が選択される場合、両方の DD 名を指定する必要があります。

ALL

指定されたサブシステムの、すべての OLDS を選択することを指定します。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キーワードを使用して、選択される各 OLDS レコードについて収集する情報のタイプを指定します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%OLDSDDN

OLDS の DD 名。

%OLDSDSN

OLDS のデータ・セット名。

%OLDSTYP

OLDS のタイプ。DBRC は、%OLDSTYP に、1 次 OLDS の場合 P を、2 次 OLDS の場合 S を設定します。

%OLDOTIM

OLDS がオープンされた時刻。DBRC は %OLDOTIM を、yyddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。

%OLDCTIM

OLDS がクローズされた時刻。DBRC は %OLDCTIM を、yyddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。OLDS が閉じられていない場合、DBRC は時刻を 0000000000000000+0000 に設定します。

%OLDSSEL

OLDS が選択された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NO に設定されます。

%OLDFRID

OLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号。

%OLDLRID

OLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号。

例 1: 次の選択グループは、サブシステム IMSA に属する、アーカイブされていないすべての OLDS 用に、DD ステートメントを繰り返して生成します。

```
%SELECT    OLDS(IMSA,UNARCH)
//%OLDSDDN DD DSN=%OLDSDSN,DISP=SHR
%ENDSEL
```

この選択グループにより生成される JCL は、次のようなものです。

```
//DFSOLP00 DD DSN=IMS.OLDSP00,DISP=SHR
//DFSOLS00 DD DSN=IMS.OLDSS00,DISP=SHR
//DFSOLP01 DD DSN=IMS.OLDSP01,DISP=SHR
//DFSOLS01 DD DSN=IMS.OLDSS01,DISP=SHR
```

例 2: 次の選択グループは、サブシステム IMSA に属するすべての OLDS のリストを生成します。

```

%SELECT      OLDS(IMS,ALL)
%OLDSTYPOLDS DD NAME=%OLDSDDN
              DSN=%OLSDSN
              CLOSE TIME=%OLDSCTIM
%ENDSEL

```

この選択グループにより生成される出力は、次のようなものです。

```

POLDS DD NAME=DFSOLP00
       DSN=IMS.POLDS00
       CLOSE TIME=84235163819300000+0012
POLDS DD NAME=DFSOLP01
       DSN=IMS.POLDS01
       CLOSE TIME=84235171224600000+0055
POLDS DD NAME=DFSOLP02
       DSN=IMS.POLDS02
       CLOSE TIME=00000000000000000+0000

```

SLDS の選択

SLDS を選択するための %SELECT キーワードの構文は、次のとおりです。

```

▶▶—%SELECT—slds_type(ssid,time_qualifier)————▶▶

```

slds_type

SLDS (PRISLD の場合) または、SSLDS (SECSLD の場合) を指定します。このキーワードは、個々のデータ・セットではなく、RECON レコード全体を選択します。したがって、SLDS レコード内に識別されるすべてのデータ・セットが選択されます。

選択された PRILOG データ・セットにエラーのマークが付けられていると、DBRC は、関連付けられた 2 次データ・セットでエラーでないものがあれば、それを選択します。関連付けられたデータ・セットが存在するけれども、それもエラーの場合、DBRC は元のレコードを選択します。SSLDS を指定すると、エラーのマークが付いているかどうかに関係なく、SECLOG データ・セットが選択されます。SLDS レコードには DSN エントリーが含まれていない場合があります。この場合、%SLDSDSN、%SLDUNIT、および %SLDVOLS の値はヌルになります。LASTDSET 時刻修飾子を使用することにより、データ・セット・エントリーを含んでいる最後の PRISLDS データ・セットを戻させることができます。生成された JCL 内で DBRC が有効なデータを確実に置換するようにするため、%DELETE ステートメントを使用する必要があります。

ssid

SLDS になるためにアーカイブされた OLDS を作成した、(IMS オンライン制御領域の) サブシステム ID。

time_qualifier

タイム・スタンプまたは、タイム・スタンプの範囲を指定します。

DBRC は、RECON のレコード・キーを使用して RECON レコードを選択します。多くのレコードがタイム・スタンプを含んでいます。そして、レコード・キーに含まれる時刻は、リスト上で隣接するアスタリスク (*) により示されます。時刻修飾子は、FROMTIME または TOTIME パラメーターで指定し、DBRC が選択するレコードを決めます。

PRILOG または PRISLD レコードなどのレコードは、複数の DSN エントリーから成っており、それぞれが開始時刻と停止時刻を持っています。DBRC は、

最初にログ・レコード全体を選択してからでなければ、特定の DSN エントリ
ーを選択することができません。FROMTIME および TOTIME の値は、必要
な DSN エントリを含むログ・レコード全体が、レコード・キーの持つタイ
ム・スタンプに基づいて選択されるように、指定する必要があります。

例えば、12:00 の FROMTIME を指定すると、12:00 より後のタイム・スタンプ
を持つ DSN エントリは (ただし、開始時刻が 11:00 の PRISLDS には含ま
れている)、DBRC によって選択されることも、表示されることもありません。
なぜなら、PRISLDS レコード自体は、指定された FROMTIME よりも早いタ
イム・スタンプを持っているからです。時刻値にはゼロを指定することができ
ます。

FIRST

最も古いレコードを選択することを指定します。

LAST

最新のレコードを選択することを指定します。

LASTDSET

LASTDSET は LAST に似ていますが、このキーワードは空のログ・レコー
ドを無視し、DSN エントリを含んでいる最後の SLDS を戻します。この
キーワードは RLDS または SLDS (2 次を含む) に対してのみ有効です。そ
他のレコード・タイプに対して LASTDSET が指定されている場合は、デ
フォルトの LAST になります。

(FROM(time),TO(time)) or (FROM(time)) or FROM(time) or (TO(time)) or TO(time)

FROM 時刻より大か等しく TO 時刻より小か等しい時刻を持つ、すべての
レコードを選択することを指定します。

ALL

すべてのレコードを選択することを指定します。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キー
ワードを使用して、選択される各 SLDS レコードについて収集する情報のタイプを
指定します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%SLDSDSN

SLDS のデータ・セット名。

%SLDUNIT

SLDS の装置タイプ。

%SLDVOLS

SLDS のボリューム通し番号。

%SLDFSEQ

SLDS のファイル・シーケンス番号。

%SLDSTIM

SLDS の開始時刻。DBRC は %SLDSTIM を、yyddhhmssthmiju{offset} の
フォーマットで設定します。

%SLDETIM

SLDS の停止時刻。DBRC は %SLDETIM を、yyddhhmssthmiju{offset} の
フォーマットで設定します。

%SLDOTIM

PRISLDS/SECSLDS の開始時刻。DBRC は %SLDOTIM を `yyddhhmmssthmiju{offset}` 形式で設定します。

%SLDSSEL

SLDS が選択された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NO に設定されます。

%SLDRMT

SLDS がトラッキング・サイトで作成された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NULL に設定されます。

%SLDFRID

SLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号。

%SLDLRID

SLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号。

%SLDCHKT

SLDS データ・セット・エントリーのチェックポイント・タイプの値。これは、以下のようなビット設定値の 16 進表記です。

- ビット 0 - 単純チェックポイント
- ビット 1 - `snapq` チェックポイント
- ビット 2 - `dumpq` チェックポイント
- ビット 3 - パージ・チェックポイント
- ビット 4 - フリーズ・チェックポイント
- ビット 5-7 - 使用されません

例 1: 次の選択グループは、サブシステム IMSA の最新の SLDS を生成します。

```
%SELECT      SLDS(IMSA, LAST)
LATEST SLDS: DSN=%SLDSDSN
              STOP TIME=%SLDETIM
%ENDSEL
```

この選択グループにより生成される出力は、次のようなものです。

```
LATEST SLDS: DSN=IMS.SLDS
              STOP TIME=84123081233900000
```

SLDS レコードに複数のデータ・セットがある場合、すべてのデータ・セットが選択され、出力は次のようになります。

```
LATEST SLDS: DSN=IMS.IMSA.SLDSP.D97107.T1405235.V06
              STOP TIME=97107142046900000+0100
LATEST SLDS: DSN=IMS.IMSA.SLDSP.D97107.T1420469.V03
              STOP TIME=97107142057900000+0100
LATEST SLDS: DSN=IMS.IMSA.SLDSP.D97107.T1420579.V00
              STOP TIME=97107143008700000+0100
```

例 2: 次の選択グループは、オープン時刻が 840031903298 より大か等しいサブシステム IMSA のすべての SLDS の連結 DD ステートメントを生成します。

```
%SELECT  SLDS(IMSA, FROM(840031903298))
%DELETE  (%SLDSDSN EQ '')
//SLDS   DD DSN=%SLDSDSN, DISP=OLD,
//        UNIT=%SLDUNIT,
```


DBRC は、RECON のレコード・キーを使用して RECON レコードを選択します。多くのレコードがタイム・スタンプを含んでいます。そして、レコード・キーに含まれる時刻は、リスト上で隣接するアスタリスク (*) により示されます。時刻修飾子は、FROMTIME または TOTIME パラメーターで指定し、DBRC が選択するレコードを決めます。

PRILOG または PRISLD レコードなどのレコードは、複数の DSN エントリーから成っており、それぞれが開始時刻と停止時刻を持っています。DBRC は、最初にログ・レコード全体を選択してからでなければ、特定の DSN エントリーを選択することができません。FROMTIME および TOTIME の値は、必要な DSN エントリーを含むログ・レコード全体が、レコード・キーの持つタイム・スタンプに基づいて選択されるように、指定する必要があります。

例えば、12:00 の FROMTIME を指定すると、12:00 より後のタイム・スタンプを持つ DSN エントリーは (ただし、開始時刻が 11:00 の PRISLDS には含まれている)、DBRC によって選択されることも、表示されることもありません。なぜなら、PRISLDS レコード自体は、指定された FROMTIME よりも早いタイム・スタンプを持っているからです。時刻値にはゼロを指定することができません。

FIRST

最も古いレコードを選択することを指定します。

LAST

最新のレコードを選択することを指定します。

LASTDSET

LASTDSET は LAST に似ていますが、このキーワードは空のログ・レコードを無視し、DSN エントリーを含んでいる最後の SLDS を戻します。このキーワードは RLDS または SLDS (2 次を含む) に対してのみ有効です。その他のレコード・タイプに対して LASTDSET が指定されている場合は、デフォルトの LAST になります。

(FROM(time),TO(time)) or (FROM(time)) or FROM(time) or (TO(time)) or TO(time)

FROM 時刻より大か等しく TO 時刻より小か等しい時刻を持つ、すべてのレコードを選択することを指定します。

ALL

すべてのレコードを選択することを指定します。

dbds_qualifier

選択されたレコードと関連付ける DBDS を指定します。DBDS は、DB 名、DD 名、または CA グループ名として指定することができます。CA グループ名を指定すると、CA グループ内のすべての DBDS が選択に使用されます。DBDS 修飾子は、以下のものを選択する時に使用されます。

- RLDS
- 変更累積データ・セット
- イメージ・コピー・データ・セット
- ALLOC レコード
- DBDS

dbds_qualifier を指定すると、指定された DBCS に対応するログ・レコードを含む RLDS だけが選択されます。(言い換えれば、RECON データ・セット内に ALLOC レコードが存在する RLDS。) *dbds_qualifier* を指定すると、1 次 RLDS だけを選択できます。

max_volumes

選択するログ・ボリュームの最大数。*max_volumes* を指定すると、選択グループの処理は、指定された数のログ・ボリュームに達すると終了します。

max_volumes を指定し、ログ・マージ状態が存在すると、指定されたボリューム数を超えて選択することができます。これは、ログの有効なサブセットが選択されたことを保証するためです。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キーワードを使用して、選択される各 RLDS レコードについて収集する情報のタイプを指定します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%LOGDSN

RLDS のデータ・セット名。

%LOGFSEQ

RLDS のファイル・シーケンス番号。

%LOGUNIT

RLDS の装置タイプ。

%LOGVOLS

RLDS のボリューム通し番号。

%LOGSTIM

RLDS の開始時刻。DBRC は %LOGSTIM を、yydddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。

%LOGETIM

RLDS の停止時刻。DBRC は %LOGETIM を、yydddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。データ・セットがまだオープンされている場合、時刻は 000000000000+0000 に設定されます。

%LOGSEL

ログ・データ・セットが選択された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NO に設定されます。

%LOGMERG

ログ・マージが必要な場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NO に設定されます。%LOGMERG は、SSID が指定されていると、常に NO に設定されます。

%LOGONL

RLDS がオンライン領域と関連付けられている場合は、YES に設定されます。バッチ・ログの場合は NO に設定されます。

%LOGRMT

RLDS がトラッキング・サイトで作成された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NULL に設定されます。

%LOGFRID

RLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号。

%LOGLRID

RLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号。

%LOGOTIM

PRILOG/SECLOG の開始時刻。DBRC は %LOGOTIM を、
yydddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。

例: 次の選択グループは、サブシステム BATCHJOB の最新の RLDS 用の DD ステートメントを生成します。この例は、RLDS がまだオープンされていると想定しています。

```
%SELECT  RLDS(BATCHJOB, LAST)
%DELETE  (%LOGETIM NE '0000000000000000+0000')
//LOGDD  DD  DSN=%LOGDSN, DISP=OLD,
//          UNIT=%LOGUNIT,
//          VOL=SER=(%LOGVOLS),
//          LABEL=(%LOGFSEQ, SL)
%ENDDEL
%ENDSEL
```

RECON データ・セット内にサブシステムの RLDS が記録されていない場合、または最新の RLDS がクローズされている場合、DD ステートメントは生成されません。その他の場合、次のような DD ステートメントが生成されます。

```
//LOGDD  DD  DSN=IMS.RLDS, DISP=OLD,
//          UNIT=3400,
//          VOL=SER=(VOLUM1, VOLUM2)
//          LABEL=(1, SL)
```

イメージ・コピー・データ・セットの選択

イメージ・コピー・データ・セットを選択するための %SELECT キーワードの構文は、次のとおりです。

▶▶—%SELECT—IC(*dbds_qualifier*, *time_qualifier*)—————▶▶

dbds_qualifier

選択されたレコードと関連付ける DBDS を指定します。DBDS は、DB 名、DD 名、または CA グループ名として指定することができます。CA グループ名を指定すると、CA グループ内のすべての DBDS が選択に使用されます。DBDS 修飾子は、以下のものを選択する時に使用されます。

- RLDS
- 変更累積データ・セット
- イメージ・コピー・データ・セット
- ALLOC レコード
- DBDS

time_qualifier

タイム・スタンプまたは、タイム・スタンプの範囲を指定します。

DBRC は、RECON のレコード・キーを使用して RECON レコードを選択します。多くのレコードがタイム・スタンプを含んでいます。そして、レコード・キーに含まれる時刻は、リスト上で隣接するアスタリスク (*) により示されます。時刻修飾子は、FROMTIME または TOTIME パラメーターで指定し、DBRC が選択するレコードを決めます。

PRIOLOG または PRISLD レコードなどのレコードは、複数の DSN エントリーから成っており、それぞれが開始時刻と停止時刻を持っています。DBRC は、最初にログ・レコード全体を選択してからでなければ、特定の DSN エントリーを選択することができません。FROMTIME および TOTIME の値は、必要な DSN エントリーを含むログ・レコード全体がレコード・キーにあるタイム・スタンプに基づいて選択されるように、指定する必要があります。

例えば、12:00 の FROMTIME を指定すると、12:00 より後のタイム・スタンプを持つ DSN エントリーは (ただし、開始時刻が 11:00 の PRISLDS には含まれている)、DBRC によって選択されることも、表示されることもありません。なぜなら、PRISLDS レコード自体は、指定された FROMTIME よりも早いタイム・スタンプを持っているからです。時刻値にはゼロを指定することができません。

FIRST

最も古いレコードを選択することを指定します。

LAST

最新のレコードを選択することを指定します。

(FROM(time),TO(time)) or (FROM(time)) or FROM(time) or (TO(time)) or TO(time)

FROM 時刻より大か等しく TO 時刻より小か等しい時刻を持つ、すべてのレコードを選択することを指定します。

ALL

すべてのレコードを選択することを指定します。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キーワードを使用して、選択される各イメージ・コピー・レコードについて収集する情報のタイプを指定します。重複イメージ・コピーにエラーのマークが付いている場合、DBRC は 1 次イメージ・コピーを選択します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%ICDSN

イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名。

%ICTYPE

イメージ・コピーのタイプ:

AVAIL、BATCH、ONLINE、CIC、SMSCIC、SMSNOCIC、SMSOFFLC、および SMSONLC。

%ICFSEQ

イメージ・コピー・データ・セットが NONHSSP タイプの場合、そのファイル・シーケンス番号。それ以外の場合、ICFSEQ はヌルです。

%ICSEL

イメージ・コピー・データ・セットが選択された場合、YES に設定されます。選択されない場合は、ICSEL は NO に設定されます。

%ICSTOP

存在するイメージ・コピー・データ・セット ID の停止時刻。その他の場合、ICSTOP はヌルです。

%ICTIME

イメージ・コピーの実行時刻。DBRC は %ICTIME を、
yydddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。

%ICUNIT

イメージ・コピー・データ・セットが NONHSSP タイプの場合、その装置
タイプ。それ以外の場合、ICUNIT はヌルです。

%ICVCNT

イメージ・コピー・データ・セットが NONHSSP タイプの場合、そのボリ
ューム数。それ以外の場合、ICVCNT はヌルです。

%ICVOLS

イメージ・コピー・データ・セットが NONHSSP タイプの場合、そのボリ
ューム通し番号リスト。それ以外の場合、ICVOLS はヌルです。

%ICUSID

更新セット ID (USID)。

%ICCAT

イメージ・コピーがカタログされている場合、YES に設定されます (HSSP
CIC のみ)。そうでない場合は、ICCAT は NO に設定されます。

%IC2SEL

選択されたイメージ・コピー・データ・セットに重複イメージ・コピー・デ
ータ・セットが関連付けられている場合は、YES に設定されます。そうでな
い場合は、IC2SEL は NO に設定されます。

次のキーワードは、重複イメージ・コピー・データ・セットが存在する場合のみ設
定され、存在しない場合はヌルとなります。

%IC2DSN

重複イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名。

%IC2FSEQ

重複イメージ・コピー・データ・セットのファイル・シーケンス番号。IC
が HSSP により作成された場合、IC2FSEQ はヌルに設定されます。

%IC2UNIT

重複イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプ。IC が HSSP によ
り作成された場合、IC2UNIT はヌルに設定されます。

%IC2VCNT

重複イメージ・コピー・データ・セットのボリューム数。IC が HSSP に
より作成された場合、IC2VCNT はヌルに設定されます。

%IC2VOLS

重複イメージ・コピー・データ・セットのボリューム通し番号リスト。IC
が HSSP により作成された場合、IC2VOLS はヌルに設定されます。

例: 次の選択グループは、データベース名 SHISAMDB と DD 名 SHISAMDD を
持つ DBDS の、最も古いイメージ・コピー・データ・セット用の DD ステートメ
ントを生成します。

```
%SELECT IC((SHISAMDB,SHISAMDD),FIRST)
//ICDD DD DSN=%ICDSN,DISP=OLD,
// VOL=SER=(%ICVOLS),
// UNIT=%ICUNIT,
// LABEL=(%ICFSEQ,SL)
%ENDSEL
```

生成される DD ステートメントは次のようなものです。

```
//ICDD DD DSN=SHISAMDB.SHISAMDD.IC,DISP=OLD,
// VOL=SER=(VOLUM1),
// UNIT=3400,
// LABEL=(1,SL)
```

変更累積データ・セットの選択

変更累積データ・セットを選択するための %SELECT キーワードの構文は、次のとおりです。

▶▶—%SELECT—CA(*dbds_qualifier,time_qualifier*)————▶▶

dbds_qualifier

選択されたレコードと関連付ける DBDS を指定します。DBDS は、DB 名、DD 名、または CA グループ名として指定することができます。CA グループ名を指定すると、CA グループ内のすべての DBDS が選択に使用されます。DBDS 修飾子は、以下のものを選択する時に使用されます。

- RLDS
- 変更累積データ・セット
- イメージ・コピー・データ・セット
- ALLOC レコード
- DBDS

time_qualifier

タイム・スタンプまたは、タイム・スタンプの範囲を指定します。

DBRC は、RECON のレコード・キーを使用して RECON レコードを選択します。多くのレコードがタイム・スタンプを含んでいます。そして、レコード・キーに含まれる時刻は、リスト上で隣接するアスタリスク (*) により示されます。時刻修飾子は、FROMTIME または TOTIME パラメーターで指定し、DBRC が選択するレコードを決めます。

PRILOG または PRISLD レコードなどのレコードは、複数の DSN エントリーから成っており、それぞれが開始時刻と停止時刻を持っています。DBRC は、最初にログ・レコード全体を選択してからでなければ、特定の DSN エントリーを選択することができません。FROMTIME および TOTIME の値は、必要な DSN エントリーを含むログ・レコード全体がレコード・キーにあるタイム・スタンプに基づいて選択されるように、指定する必要があります。

例えば、12:00 の FROMTIME を指定すると、12:00 より後のタイム・スタンプを持つ DSN エントリーは (ただし、開始時刻が 11:00 の PRISLDS には含まれている)、DBRC によって選択されることも、表示されることもありません。なぜなら、PRISLDS レコード自体は、指定された FROMTIME よりも早いタイム・スタンプを持っているからです。時刻値にはゼロを指定することができません。

FIRST

最も古いレコードを選択することを指定します。

LAST

最新のレコードを選択することを指定します。

(FROM(time),TO(time)) or (FROM(time)) or FROM(time) or (TO(time)) or TO(time)

FROM 時刻より大か等しく TO 時刻より小か等しい時刻を持つ、すべてのレコードを選択することを指定します。

ALL

すべてのレコードを選択することを指定します。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キーワードを使用して、選択される各変更累積レコードについて収集する情報のタイプを指定します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%CADSN

変更累積データ・セット名。

%CAFSEQ

変更累積データ・セットのファイル・シーケンス番号。

%CAUNIT

変更累積データ・セットの装置タイプ。

%CAVCNT

変更累積データ・セットのボリューム数。

%CAVOLS

変更累積データ・セットのボリューム通し番号のリスト。

%CALGTM

変更累積データ・セットへの入力として使用された、最後のログ・ボリュームのボリューム停止時刻。DBRC は %CALGTM を、yydddhmssthmiju{offset} のフォーマットで設定します。

%CATIME

yydddhmssthmiju{offset} のフォーマットの、変更累積データ・セットの時刻。

%CASEL

変更累積データ・セットが選択された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NO に設定されます。

例: 次の選択グループは、CA グループ CAGRP1 について、時刻 0723100000000000+0000 以降に作成されたすべての変更累積データ・セットをリストします。

```
%SELECT CA((CAGRP1),FROM(0723100000000000+0000))
          DSNAME=%CADSN
          VOLUMES=%CAVOLS
          RUNTIME=%CATIME
          LOGTIME=%CALGTM
%ENDSEL
```

生成される出力は次のようなものです。

```

DSNAME=CAGRP1.DSN1
  VOLUMES=VOLUM1,VOLUM2,VOLUM3,
  VOLUM4,
// VOLUM5,VOLUM6
  RUNTIME=07231061823000000
  LOGTIME=07230231555700000
DSNAME=CAGRP1.DSN2
  VOLUMES=VOLUM1,VOLUM2
  RUNTIME=07236182444300000
  LOGTIME=07236093451900000

```

この例では、最初のデータ・セット用のボリューム通し番号リストは、出力レコードに入りきれません。したがって、JCL 継続ステートメントが生成されます (JCL を生成しない場合でも)。

DBDS 割り振りレコードの選択

ALLOC レコードを選択するための %SELECT キーワードの構文は、次のいずれかを使用することができます。

```
▶▶—%SELECT—ALLOC(dbds_qualifier,time_qualifier)—————▶▶
```

```
▶▶—%SELECT—ALLOC(PRILOG,time_qualifier)—————▶▶
```

dbds_qualifier

選択されたレコードと関連付ける DBDS を指定します。DBDS は、DB 名、DD 名、または CA グループ名として指定することができます。CA グループ名を指定すると、CA グループ内のすべての DBDS が選択に使用されます。DBDS 修飾子は、以下のものを選択する時に使用されます。

- RLDS
- 変更累積データ・セット
- イメージ・コピー・データ・セット
- ALLOC レコード
- DBDS

dbds_qualifier を指定すると、指定された DBCS に対応する ALLOC レコードが選択されます。

time_qualifier

タイム・スタンプまたは、タイム・スタンプの範囲を指定します。

DBRC は、RECON のレコード・キーを使用して RECON レコードを選択します。多くのレコードがタイム・スタンプを含んでいます。そして、レコード・キーに含まれる時刻は、リスト上で隣接するアスタリスク (*) により示されます。時刻修飾子は、FROMTIME または TOTIME パラメーターで指定し、DBRC が選択するレコードを決めます。

PRILOG または PRISLD レコードなどのレコードは、複数の DSN エントリーから成っており、それぞれが開始時刻と停止時刻を持っています。DBRC は、最初にログ・レコード全体を選択してからでなければ、特定の DSN エントリーを選択することができません。FROMTIME および TOTIME の値は、必要

な DSN エントリーを含むログ・レコード全体がレコード・キーにあるタイム・スタンプに基づいて選択されるように、指定する必要があります。

例えば、12:00 の FROMTIME を指定すると、12:00 より後のタイム・スタンプを持つ DSN エントリーは (ただし、開始時刻が 11:00 の PRISLDS には含まれている)、DBRC によって選択されることも、表示されることもありません。なぜなら、PRISLDS レコード自体は、指定された FROMTIME よりも早いタイム・スタンプを持っているからです。時刻値にはゼロを指定することができません。

FIRST

最も古いレコードを選択することを指定します。

LAST

最新のレコードを選択することを指定します。

(FROM(time),TO(time)) or (FROM(time)) or FROM(time) or (TO(time)) or TO(time)

FROM 時刻より大か等しく TO 時刻より小か等しい時刻を持つ、すべてのレコードを選択することを指定します。

ALL

すべてのレコードを選択することを指定します。

指定された *time_qualifier* の境界内にある割り振り時刻を持つ、指定された DBDS のすべての ALLOC レコードが選択されます。PRILOG を指定すると、指定された時刻境界内にある PRILOG レコードに対応する、すべての ALLOC レコードが選択されます。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キーワードを使用して、選択される各 ALLOC レコードについて収集する情報のタイプを指定します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%DBNAME

データベース名。

%DBDDN

データベースの DD 名またはエリア名。

%ALLTIME

yydddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットの割り振りタイム・スタンプ。

%DALTIME

yydddhhmsssthmiju{offset} のフォーマットの割り振り解除タイム・スタンプ。割り振り解除タイム・スタンプがない場合は、000000000000+0000 に設定されます。

%ALLDSSN

データ・セットのシーケンス番号。

%PLGTIME

対応する PRILOG レコードの開始時刻。

%ALLSEL

ALLOC レコードが選択された場合、YES に設定されます。選択されなかった場合、ALLSEL は NO に設定されます。

%ALLUSID

更新セット ID (USID)

%DBTYPE

選択された ALLOC レコードが関連付けられているデータベースのタイプ。 %DBTYPE 値は、以下のいずれかです。

FP 高速機能データベースのエリア

DLI 非 HALDB

PDATA

HALDB のデータ DBDS

例: 次の選択グループは、データベース名 SHISAMDB と DD 名 SHISAMDD を持つ DBDS の、すべての ALLOC レコードについての情報のリストを生成します。

```
%SELECT ALLOC((SHISAMDB,SHISAMDD),ALL)
          DBNAME          %DBNAME
          DDNAME          %DBDDN
          ALLOC time      %ALLTIME
          DEALL time      %DALTIME
          PRILOG time     %PLGTIME
```

生成される出力は次のようなものです。

```
          DBNAME          SHISAM
          DDNAME          SHISAM
          ALLOC TIME      8325608000000000+0000
          DEALL TIME      0000000000000000+0000
          PRILOG TIME     8325606300000000+0000
```

DBDS レコードの選択

DBDS レコードを選択するための %SELECT キーワードの構文は、次のとおりです。

```
▶▶—%SELECT—DBDS(dbds_qualifier)————▶▶
```

dbds_qualifier

選択されたレコードと関連付ける DBDS を指定します。 DBDS は、DB 名、DD 名、または CA グループ名として指定することができます。 CA グループ名を指定すると、CA グループ内のすべての DBDS が選択に使用されます。 DBDS 修飾子は、以下のものを選択する時に使用されます。

- RLDS
- 変更累積データ・セット
- イメージ・コピー・データ・セット
- ALLOC レコード
- DBDS

DEDB の場合、選択グループは、指定された各エリアに定義された各エリア・データ・セット (ADS) ごとに、一度処理されます。その他のタイプのデータベースの場合、選択グループは、指定された DBDS ごとに一度処理されます。

%SELECT キーワードの後に続く実行メンバー・レコード内で、シンボリック・キーワードを使用して、選択される各 DBDS レコードについて収集する情報のタイプを指定します。収集できる情報のタイプは、次のものです。

%DBNAME

データベース名。

%DBDDN

DBDS DD 名または DEDB エリア名。

%DBTYPE

選択された DBDS が高速機能データベースのエリアの場合、FP に設定されます。HALDB データベース以外の DBDS の場合、DLI に設定されます。HALDB データベースのデータ DBDS の場合、PDATA に設定されます。HALDB データベースの 1 次索引 DBDS の場合、PINDEX に設定されます。HALDB データベースの ILDS DBDS の場合、PILDS に設定されます。

%DBDSN

DBDS または ADS のデータ・セット名。

%DBADDN

DEDB の場合、ADS の DD 名。その他のタイプのデータベースの場合、DBADDN はヌルに設定されます。

%DBADSAV

DEDB の場合、RECON データ・セット内で ADS が使用可能と示されていれば、AVAIL に設定されます。ADS が使用可能でない場合は、UNAVAIL に設定されます。その他のタイプのデータベースの場合、DBADSAV はヌルに設定されます。

%DBDSSEL

DBDS レコードが選択された場合、YES に設定されます。選択されない場合は、DBDSDEL は NO に設定されます。

%DBUSID

DEDB の場合、エリアの更新セット ID (USID)。その他のタイプのデータベースの場合、DBUSID は NULL に設定されます。

%DBDSNRV

DBDS がリカバリー不能の場合、YES に設定されます。そうでない場合、DBDSNRV は NO に設定されます。

例: 次の選択グループは、DBHVSAM1 という名前のエリアについて、使用可能なエリア・データ・セットのための一連の DD ステートメントを生成します。このエリアは、DIVNTZ04 という名前の DEDB にあります。

```
%SELECT      DBDS((DIVNTZ04,DBHVSAM1))
%DELETE      (%DBADSAV ne 'AVAIL')
//%DBADDN    DD  DSN=%DBDSN,DISP=OLD
%ENDDDEL
%ENDSEL
```

生成される出力は次のようなものです。

```
//FP1ADD1 DD  DSN=IMS.FP1ADD1,DISP=OLD
//FP1ADD2 DD  DSN=IMS.FP1ADD2,DISP=OLD
```

基幹 JCL デフォルト・メンバーの作成

基幹 JCL デフォルト・メンバーを使用して、基幹 JCL 実行メンバーで定義したキーワードのデフォルト値を設定します。デフォルト・メンバーの使用はオプションです。使用するデフォルト・メンバーは、いずれもユーザーが用意する必要があります。

デフォルト・メンバーには、2 つのタイプのレコード (割り当てレコードまたはコメント・レコード) を指定することができます。割り当てレコードは、ユーザー定義キーワードにデフォルト値を割り当てます。割り当てレコードでは、カラム 1 にパーセント (%) 記号を指定する必要があります。カラム 1 に % 記号がないと、そのレコードはコメント・レコードになり、DBRC はこれを無視します。

▶▶—%user defined keyword='value'————▶▶

キーワードに割り当てる値は、ヌル・ストリング ('') を含む、どのようなテキスト・ストリングでも構いません。値に単一引用符が含まれる場合は、2 つの単一引用符を使用する必要があります。全体の値は、1 つのレコード内に含める必要があります。クローズの単一引用符の後に続くデータはすべて、無視されます。クローズの単一引用符は必須です。クローズの単一引用符がないと、エラー・メッセージが出され、GENJCL コマンドは失敗します。

例: デフォルト・メンバーは次のレコードを含んでいます。

```
%DEDBNAM = 'DIVNTZ04'  
%AREANAM = 'DBHVSAM1'
```

基幹 JCL メンバーは次のレコードを含んでいます。

```
DATABASE NAME = %DEDBNAM  
AREA NAME = %AREANAM
```

DEFAULTS パラメーターを使用し、値がオーバーライドされないと想定した場合、GENJCL コマンドは次のものを生成します。

```
DATABASE NAME = DIVNTZ04  
AREA NAME = DBHVSAM1
```

デフォルト・メンバーの指定

デフォルト・メンバーは明示的または暗黙的に指定することができます。

メンバーは、GENJCL コマンドに DEFAULTS パラメーターを使用して、明示的に指定します。デフォルト・メンバーは 10 個まで指定できます。

暗黙的な指定は、DBDS に適用される GENJCL コマンド (GENJCL.IC、GENJCL.OIC、および GENJCL.RECOV) または CA グループ (GENJCL.CA) に適用することができます。さらに、暗黙的な指定は、GENJCL.USER コマンドでも適用することができます。暗黙的に適用されるデフォルト・メンバーは、INIT.DBDS、CHANGE.DBDS、INIT.CAGRP、および CHANGE.CAGRP コマンド上の DEFLTJCL パラメーターを使用して指定します。DBDS または CA グループごとに、1 つだけのデフォルト・メンバーを使用できます。

暗黙的に使用したデフォルト・メンバーは、GENJCL コマンドの NODEFLT パラメーターでオーバーライドすることができます。明示的指定と暗黙的指定の両方の

デフォルト・メンバーを使用すると、明示的に指定されたメンバーが優先します。つまり、両方のメンバーでキーワードに値を割り当てると、明示的に指定されたメンバーにより割り当てられた値が使用されます。

キーワードに、デフォルト・メンバーと GENJCL コマンドの USERKEYS パラメーターの両方から値を割り当てると、後者の値が使用されます。USERKEYS パラメーターの値は、デフォルト・メンバーの値をオーバーライドします。

ユーザー提供の基幹 JCL または変更した基幹 JCL の使用

ユーザーの基幹 JCL 実行メンバーまたはデフォルト・メンバーを使用する前に、次の作業を行う必要があります。

- DBRC の実行に必要な JCL に、JCLPDS および JCLOUT DD 名を追加します。JCLPDS は、基幹 JCL 実行メンバーを含む区分データ・セットを指定します。JCLOUT は、生成されたジョブが書き込まれるデータ・セットを指定します。出力はカード・イメージ形式です。出力データ・セットは、パンチ・ファイル、またはジョブを実行依頼する前に検査するか、または z/OS 内部読み取りプログラムに直接出力する DASD データ・セットです。
- ご使用のシステムで必要な、STEPLIB DD 名、およびジョブ・アカウント情報、基幹 JCL 実行メンバーに追加します。DD ステートメントにコメントまたは継続文字が含まれている場合、それらは JCL 生成時に無視されます。JOB ステートメント用の基幹 JCL メンバーを除き、基幹 JCL には JOBLIB および JES 制御ステートメントを追加しないでください。追加すると、複数ステップを生成した場合にエラーが起こります。

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DBRC が認識するシンボリック・キーワード

DBRC は、IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバー内のシンボリック・キーワードを認識します。

以下のトピックでは、リカバリー関連のユーティリティーで認識されるシンボリック・キーワードについて説明します。

- 280 ページの『すべてのユーティリティーで認識されるシンボリック・キーワード』
- 281 ページの『ログ保存ユーティリティー (ARCHJCL) で認識されるシンボリック・キーワード』
- 281 ページの『データベース変更累積ユーティリティー (CAJCL) で認識されるシンボリック・キーワード』
- 283 ページの『ログ・リカバリー・ユーティリティー (LOGCLJCL) で認識されるシンボリック・キーワード』
- 283 ページの『データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーで認識されるシンボリック・キーワード』
- 285 ページの『データベース・リカバリー・ユーティリティー - 受け取り (ICRCVJCL) で認識されるシンボリック・キーワード』

- 287 ページの『データベース・リカバリー・ユーティリティー - リカバリー (RECOVJCL) で認識されるシンボリック・キーワード』

すべてのユーティリティーで認識されるシンボリック・キーワード

以下の表では、サポートされるすべてのユーティリティーが認識するシンボリック・キーワードを説明します。

表 7. サポートされるすべてのユーティリティー用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%RCNDSN1	RECON データ・セットを JCL で割り振った場合、RECON1 データ・セットの名前。 RECON データ・セットを動的に割り振った場合は、ヌルに設定されます。
%RCNDSN2	RECON データ・セットを JCL で割り振った場合、RECON2 データ・セットの名前。 RECON データ・セットを動的に割り振った場合は、ヌルに設定されます。
%RCNDSN3	RECON データ・セットを JCL で割り振った場合、RECON3 データ・セットの名前。 RECON データ・セットを動的に割り振った場合は、ヌルに設定されます。
%STPNO	現行ステップの番号。 GENJCL コマンドに JOB パラメーターを指定した場合、ステップ番号は 0 に設定されます。ステップ番号は、DBRC が基幹 JCL 実行メンバー内で最初にキーワードを検出した際、1 ずつ増えます。ステップ番号は、実行メンバーが処理されている間、その値のまま残ります。後続の基幹 JCL 内でキーワードを見つけると、現行値は置き換えられます。 JCL 実行メンバーは、複数ステップを生成するため、あるいは後続の GENJCL コマンドが NOJOB を指定しているため、再度処理することがあります。行メンバーを再度処理すると、ステップ番号は、次の基幹 JCL 実行メンバー内でキーワードが最初に検出された際に、その現行値より 1 ずつ増えます。この増加は、キーワード値を置き換える前に行われます。
%TIME	hhmmss 形式の時刻。
%GRPINDEX	DBDS グループ・メンバー索引。このキーワードは、GENJCL コマンド上で、暗黙的にまたは明示的に、DBDS グループが指定された場合のみ設定されます。(DBDS グループは、GENJCL.IC、GENJCL.OIC、GENJCL.RECOV、および GENJCL.USER コマンドで指定することができます。) DBDS グループを指定すると、キーワードは 1 に初期化され、後続のグループ・メンバーが処理されるたびに 1 ずつ増えます。
%CNTR	DBRC により制御されるカウンター。このカウンターは、最初の GENJCL コマンドが実行された場合、または基幹 JCL 実行メンバー JOBJCL から JOB ステートメントが再作成された場合、必ず 0 に設定されます。DBRC は、基幹 JCL 実行メンバー内でこのキーワードを見つけたたびに、カウンターを 1 だけ増やします。 JCL 実行メンバーは、複数ステップを生成するため、あるいは後続の GENJCL コマンドが NOJOB を指定しているため、再度処理することがあります。この場合、次の基幹 JCL 実行メンバーでキーワードが見つかった時に、カウンターはその現行値から増やされ続けます。この増加は、キーワード値を置き換える前に行われます。
%DATE	yyddd 形式の年間通算日。
%DATE7	yyyyddd 形式の年間通算日。
%IMSPLEX	RECON データ・セットに設定された IMSplex 名。DBRC が SCI に登録されていない場合は、NULL に設定されます。
%DBRCGRP	RECON データ・セットに設定された DBRC グループ。DBRC が SCI に登録されていない場合は、NULL に設定されます。

ログ保存ユーティリティー (ARCHJCL) で認識されるシンボリック・キーワード

ログ保存ユーティリティーは、以下のシンボリック・キーワードを認識します。

表 8. ログ保存ユーティリティー用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%SSID	GENJCL.ARCHIVE コマンドの SSID パラメーターから設定されるサブシステム ID。SSID パラメーターが指定されていない場合、デフォルトのサブシステム ID が使用されます。デフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドでユーザーが設定します。デフォルトのサブシステム ID を指定しないと、コマンドは失敗します。
%DDNAMES	アーカイブされる OLDS の DD 名。GENJCL.ARCHIVE コマンドで ALL を指定するかまたはデフォルトとして使用した場合、アーカイブされていないすべての OLDS の DD 名は、RECON データ・セットから決められます。それ以外の場合、コマンドに指定された DD 名が使用されます。
%OLSDDDN	1 つ以上の特定の OLDS の DD 名。
%OLSDSN	1 つ以上の OLDS のデータ・セット名。
%ARDATE	アーカイブされる最初の OLDS の日付 (オープン・タイム・スタンプより)。日付は yyddd 形式であり、ここで、 yy は年 ddd は日付
%ARDATE7	アーカイブされる最初の OLDS の日付 (オープン・タイム・スタンプより)。日付は yyyyddd 形式であり、ここで、 yyyy は 4 桁の年 ddd はユリウス日付 (通年日付)
%ARTIME	アーカイブされる最初の OLDS の時刻 (オープン・タイム・スタンプより)。時刻は hhmmssst 形式であり、ここで、 hh は時 mm は分 ss は秒 t はミリ秒 (.1 秒)
%ARVERS	アーカイブされる最初の OLDS のアーカイブ・バージョン番号。
%ARCSLDS	SLDS パラメーターを指定した場合、YES に設定されます。

データベース変更累積ユーティリティー (CAJCL) で認識されるシンボリック・キーワード

データベース変更累積ユーティリティーは、以下のシンボリック・キーワードを認識します。

表 9. データベース変更累積ユーティリティー用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%CAGRP	CA グループ名。
%DSSLGTM	選択している入力ログ・データの開始時刻。入力変更累積データ・セットを使用している場合は、%DSSLGTM は最後の累積ログ・ボリュームのボリューム停止時刻に設定されます。

表 9. データベース変更累積ユーティリティ用のシンボリック・キーワード (続き)

キーワード	説明
%CAODSN	入力変更累積データ・セットのデータ・セット名。 RECON データ・セットに CA グループの既存の変更累積データ・セットが定義されていない場合、このキーワードはヌルに設定されます。
%CAOUNIT	入力変更累積データ・セットの装置タイプ。 RECON データ・セットに CA グループの既存の変更累積データ・セットが定義されていない場合、このキーワードはヌルに設定されます。
%CAOVOLS	入力変更累積データ・セットのボリューム通し番号リスト。 RECON データ・セットに CA グループの既存の変更累積データ・セットが定義されていない場合、このキーワードはヌルに設定されます。
%CAOFSEQ	入力変更累積データ・セットのファイル・シーケンス番号。 RECON データ・セットに CA グループの既存の変更累積データ・セットが定義されていない場合、このキーワードはヌルに設定されます。
%CANDSN	出力変更累積データ・セットのデータ・セット名。 CA グループに REUSE が指定されている場合、このキーワードは RECON データ・セットの情報から設定されます。 NOREUSE が指定されていると、DBRC はデータ・セット名を生成します。生成される名前は、次のようになります。 IMSVS.cagrpname.CA.CAhhmss ここで、 <i>cagrpname</i> は CA グループ名、 <i>hhmss</i> は現行の時刻です。
%CANUNIT	出力変更累積データ・セットの装置タイプ。 CA グループに REUSE が指定されている場合、このキーワードは RECON データ・セットの情報から設定されます。 NOREUSE が指定されている場合、このキーワードは GENJCL.CA コマンドの UNIT パラメーターから設定されます。 UNIT が指定されていない場合、このキーワードは 3400 に設定されます。
%CANVCNT	出力変更累積データ・セット内のボリューム数。 CA グループに REUSE が指定されている場合、このキーワードは RECON データ・セットの情報から設定されます。 NOREUSE が指定されている場合、このキーワードは GENJCL.CA コマンドの VOLLIST パラメーターから設定されます。
%CANVOLS	出力変更累積データ・セットのボリューム通し番号リスト。 CA グループに REUSE が指定されている場合、このキーワードは RECON データ・セットの情報から設定されます。 NOREUSE が指定されている場合、このキーワードは GENJCL.CA コマンドの VOLLIST パラメーターから設定されます。
%CABFSEQ	出力変更累積データ・セットのファイル・シーケンス番号。 CA グループに REUSE が指定されている場合、このキーワードは RECON データ・セットの情報から設定されます。 NOREUSE が指定されている場合、このキーワードは 1 に設定されます。
%LOGDSN	ログ・データ・セットのデータ・セット名。
%LOGUNIT	ログ・データ・セットの装置タイプ。
%LOGVSEQ	ログ・データ・セットのボリューム・シーケンス番号。
%LOGVOLS	ログ・データ・セットのボリューム通し番号。
%LOGFSEQ	ログ・データ・セットのファイル・シーケンス番号。
%LOGSEL	ログ・データ・セットが選択された場合、YES に設定されます。そうでない場合は、NO に設定されます。
%CADB0	このキーワードは、データベース変更累積ユーティリティ用の DB0 制御ステートメントを生成します。 注: %CADB0 は常に、UTC フォーマット (ゼロのオフセットによって示される) のタイム・スタンプを使用して DB0 制御ステートメントを生成します。

ログ・リカバリー・ユーティリティー (LOGCLJCL) で認識されるシンボリック・キーワード

ログ・リカバリー・ユーティリティーは、以下のシンボリック・キーワードを認識します。

表 10. ログ・リカバリー・ユーティリティー用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%SSID	GENJCL.CLOSE コマンドの SSID パラメーターから設定されるサブシステム ID。SSID パラメーターが指定されていない場合、デフォルトのサブシステム ID が使用されます。デフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドでユーザーが設定します。デフォルトのサブシステム ID を指定しないと、コマンドは失敗します。
%CDDNAME	クローズされる OLDS の DD 名。このキーワードは、GENJCL.CLOSE コマンドの OLDS パラメーターから設定されます。GENJCL.CLOSE が OLDS を指定していない場合、指定されたサブシステムの最新のオープン OLDS が使用されます。
%OLDSTYP	OLDS のタイプであり、1 次なら P に、2 次なら S に設定されます。
%OLDSDSN	OLDS のデータ・セット名。
%WADS	クローズされる OLDS が現在オープンされている場合、このキーワードは YES に設定されます。そうでない場合は、このキーワードは NO に設定されます。
%NDNAME	OLDS のクローズに使用される '次の OLDS' の DD 名。%WADS が NO に設定されている場合、このキーワードは、クローズされる OLDS の直後に使用される OLDS の DD 名に設定されます。%WADS が YES に設定されている場合、このキーワードはヌルに設定されます。
%PDDNAME	OLDS をクローズするために使用される直前の OLDS の DD 名であり、この OLDS は基本点情報として、最後のブロック・シーケンス番号を提供します。

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーで認識されるシンボリック・キーワード

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーは、以下のシンボリック・キーワードを認識します。

表 11. データベース・イメージ・コピー・ユーティリティー用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%PSB	PSB 名であり、GENJCL コマンドの PSB パラメーターから設定されます。このキーワードは、データベース・オンライン・イメージ・コピー・ユーティリティーにのみ適用されます。
%DBNAME	データベース名であり、GENJCL コマンドの DBD パラメーターから設定されます。
%DBDDN	DBDS の DD 名であり、GENJCL コマンドの DDN パラメーターから設定されます。
%DBDSN	DBDS データ・セット名であり、RECON データ・セット内の DBDS レコードから設定されます。
%DBDSAM	このキーワードは、VSAM DBDS の場合 VSAM に設定されます。その他の場合はヌルに設定されます。
%DBADDN	DEDB の場合、ADS の DD 名。そうでない場合は NULL に設定されます。このキーワードは、データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーにのみ適用されます。
%BADSAV	DEDB の場合、RECON に ADS が使用可能と示されていれば、AVAIL に設定され、ADS が使用可能でない場合は UNAVAIL に設定されます。その他のタイプのデータベースの場合、このキーワードはヌルに設定されます。このキーワードは、データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーにのみ適用されます。

表 11. データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ用のシンボリック・キーワード (続き)

キーワード	説明
%COPIES	作成されるイメージ・コピー・データ・セットの数。このキーワードは、GENJCL コマンドの COPIES パラメーターから、1 または 2 に設定されます。
%MDBNAME	これが HALDB 区画の DBDS の場合、HALDB マスター名。HALDB データベース以外はこのキーワードは NULL に設定されます。
%SMS	要求されたユーティリティの実行に、データベース・イメージ・コピー 2 (DFSUMDT0) のイメージ・コピー・データ・セットを使用するかどうかを示します。使用する場合、キーワードは 1 に設定され、使用しない場合はキーワードは 0 に設定されます。
%ICDDN1、%ICDDN2、%ICDDN3、%ICDDN4	最初のイメージ・コピー・データ・セットの DD 名。複数のイメージ・コピー・データ・セットが生成される場合、%ICDDN2、%ICDDN3、および %ICDDN4 は類似セットです。
%ICSYSIN	データベース・イメージ・コピー・ユーティリティの制御ステートメント。ステートメントのカラムは次のように設定されます。 カラム 設定 1 D 2 作成されるイメージ・コピー・データ・セットの数 (1 または 2 のいずれか) 4-11 データベース名 13-20 DBDS の DD 名 22-30 1 次イメージ・コピー・データ・セットの DD 名 31-38 重複イメージ・コピー・データ・セットを作成する場合は、その DD 名 40-43 チェックポイント間隔 (オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティにのみ適用)。 その他のカラムはすべてブランクに設定されます。
%ICDSN1、%ICDSN2、%ICDSN3、%ICDSN4	イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名は、%ICDSN1 です。 DBDS に NOREUSE が指定されている場合、DBRC は次のデータ・セット名を生成します。 IMSVS.dbname.ddname.IC.IChmmss パラメーターの説明は次のとおりです。 • <i>dbname</i> は DBDS のデータベース名 • <i>ddname</i> は DBD の DD 名 • <i>hmmss</i> は現行時刻 DBDS のグループに Sameds が指定されている場合、DBRC は次のようなデータ・セット名を生成します。 IMSVS.GROUP.grpname.IC.IChmmss ここで、 • <i>grpname</i> は、GROUP または DBD パラメーターに指定されている名前です。 • <i>hmmss</i> は現行時刻 複数のイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合、%ICDSN3 または %ICDSN4 は同様に設定されます。

表 11. データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ用のシンボリック・キーワード (続き)

キーワード	説明
%ICUNIT1、%ICUNIT2、%ICUNIT3、%ICUNIT4	イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプ。DBDS に NOREUSE が指定されている場合、%ICUNIT1 はコマンドの UNIT パラメーターから設定されます。複数のイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合、%ICUNIT2、%ICUNIT3、または %ICUNIT4 は同様に設定されます。
%ICFSEQ1、%ICFSEQ2、%ICFSEQ3、%ICFSEQ4	イメージ・コピー・データ・セットのファイル・シーケンス番号。DBDS に NOREUSE が指定されている場合、%ICFSEQ1 は 1 に設定されます。複数のイメージ・コピー・データ・セットが作成される場合、%ICFSEQ2、%ICFSEQ3、または %ICFSEQ4 は同様に設定されます。
%ICVOLS1、%ICVOLS2、%ICVOLS3、%ICVOLS4	イメージ・コピー・データ・セットのボリューム通し番号。DBDS に NOREUSE が指定されている場合、%ICVOLS1 はコマンドの VOLLIST パラメーターから設定されます。複数のイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合、%ICVOLS2、%ICVOLS3、または %ICVOLS4 は同様に設定されます。
%ICVCNT1、%ICVCNT2、%ICVCNT3、%ICVCNT4	イメージ・コピー・データ・セットのボリューム数。DBDS に NOREUSE が指定されている場合、%ICVCNT1 はコマンドの VOLLIST パラメーターで指定されたボリューム数に設定されます。複数のイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合、%ICVCNT2、%ICVCNT3、または %ICVCNT4 は同様に設定されます。
%SMSGRP	グループ処理の状況を示す数値。 カラム 設定 0 一方または他方または両方のエリアの各 DBDS ごとに 1 つのジョブ・ステップが生成されます。 あるいは、一方または他方または両方のエリアの複数の DBDS をコピーするために単一ジョブが生成されます (イメージ・コピー 2、DDN のない GROUP または DB、および ONEJOB が指定された場合)。これは、基幹 JCL メンバーが、生成されるジョブ・ステップごとに 1 回を超えて処理されることを意味します。 1 グループのメンバーだけを処理します。 2 複数メンバーの最初のメンバーを処理します。 3 中間のメンバーを処理します。 4 最後のメンバーを処理します。
%SMS1DS	Sameds が指定されていたかどうかを示す数値 カラム 設定 0 Sameds が指定されていない 1 Sameds が指定されていた
%GROUP	GROUP パラメーターの値、または、DDn が省略された場合 (暗黙のグループ) は DBD パラメーターの値が入っている文字値。それ以外の場合はヌル。
%ICRTYPE	GENJCL.IC または GENJCL.OIC で要求されているイメージ・コピー・タイプ。有効な値は、BATCH、ONLINE、CIC、SMSCIC、SMSNOCIC、SMSOFF、SMSOFFLC、および SMSONLC です。

データベース・リカバリー・ユーティリティ - 受け取り (ICRCVJCL) で認識されるシンボリック・キーワード

データベース・リカバリー・ユーティリティ - 受け取りは、以下のシンボリック・キーワードを認識します。

表 12. データベース・リカバリー・ユーティリティー - 受け取り (ICRCVJCL) 用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%DBNAME	カバーされる DBDS のデータベース名。 %DBNAME は、GENJCL.RECEIVE コマンドの DBD パラメーターから設定されます。
%DBDDN	DBDS の DD 名であり、%DBDDN は GENJCL.RECEIVE コマンドの DDN パラメーターから設定されます。
%DBDSN	DBDS のデータ・セット名であり、%DBDSN は RECON データ・セット内の DBDS レコードから設定されます。
%DBDSAM	VSAM DBDS の場合 VSAM に設定されます。そうでない場合は NULL に設定されます。
%DBUSID	DBDS の更新セット ID。
%ALLUSID	DBDS の最新の ALLOC レコードの更新セット ID。
%MDBNAME	これが HALDB 区画の DBDS の場合、HALDB マスター名。 HALDB データベース以外はこのキーワードは NULL に設定されます。
%DSLGLTM	選択している入力ログ・データの開始時刻。入力変更累積データ・セットを使用している場合は、%DSLGLTM は最後の累積ログ・ボリュームのボリューム停止時刻に設定されます。その他の場合、キーワード値はイメージ・コピー時刻に設定されます。
%ICDSN	イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名。 USEDBDS パラメーターが GENJCL.RECEIVE コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICUNIT	イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプ。 USEDBDS パラメーターが GENJCL.RECEIVE コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICVOLS	イメージ・コピー・データ・セットのボリューム通し番号リスト。 USEDBDS パラメーターが GENJCL.RECEIVE コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICFSEQ	イメージ・コピー・データ・セットのファイル・シーケンス番号。 USEDBDS パラメーターが GENJCL.RECEIVE コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICUSID	イメージ・コピーの更新セット ID。
%CADSN	変更累積データ・セットのデータ・セット名。 DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%CAUNIT	変更累積データ・セットの装置タイプ。 DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%CAVOLS	変更累積データ・セットのボリューム通し番号のリスト。 DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%CAFSEQ	変更累積データ・セットのファイル・シーケンス番号。 DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%OLDFLRID	OLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号 (ログ・レコード ID) です。
%OLDLLRID	OLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号 (ログ・レコード ID) です。 OLDS がクローズされていない場合、%OLDLLRID はヌルに設定されます。
%SLDFLRID	SLDS 内の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号 (ログ・レコード ID) です。

表 12. データベース・リカバリー・ユーティリティー - 受け取り (ICRCVJCL) 用のシンボリック・キーワード (続き)

キーワード	説明
%SLDFSEQ	SLDS のファイル・シーケンス番号。
%SLDLLRID	SLDS 内の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号 (ログ・レコード ID) です。SLDS がクローズされていない場合、%SLDLLRID はヌルに設定されます。
%SLDUNIT	ログ・データ・セットの装置タイプ。
%SLDVOLS	ログ・データ・セットのボリューム通し番号。
%LOGDSN	ログ・データ・セットのデータ・セット名。
%LOGUNIT	ログ・データ・セットの装置タイプ。
%LOGVSEQ	ログ・データ・セットのボリューム・シーケンス番号。
%LOGVOLS	ログ・データ・セットのボリューム通し番号。
%LOGFSEQ	ログ・データ・セットのファイル・シーケンス番号。
%LOGSEL	選択グループによりログ・データ・セットが選択されている場合は YES に設定されます。この場合、選択グループの後の削除グループは削除されます。それ以外の場合、%LOGSEL キーワードは NO に設定され、DD DUMMY ステートメントが生成されます。
%LOGFLRID	RLDS 内の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号 (ログ・レコード ID) です。
%LOGLLRID	RLDS 内の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号 (ログ・レコード ID) です。RLDS がクローズされていない場合、%LOGLLRID はヌルに設定されます。
%RVSYISIN	データベース・リカバリー・ユーティリティーの制御ステートメント。ステートメントのカラムは次のように設定されます。 カラム 設定 1 S 4-11 データベース名 13-20 データ・セットまたはエリアの DD 名 22-29 DFSUDUMP 63 V。これは RECEIVE であることを示します。 その他のカラムはすべてブランクに設定されます。

データベース・リカバリー・ユーティリティー - リカバリー (RECOVJCL) で認識されるシンボリック・キーワード

データベース・リカバリー・ユーティリティー- リカバリーは、以下のシンボリック・キーワードを認識します。

表 13. データベース・リカバリー・ユーティリティー - リカバリー (RECOVJCL) 用のシンボリック・キーワード

キーワード	説明
%DBNAME	リカバリーされる DBDS のデータベース名。%DBNAME は、GENJCL.RECOV コマンドの DBD パラメーターから設定されます。
%DBDDN	DBDS の DD 名。%DBDDN は GENJCL.RECOV コマンドの DDN パラメーターから設定されます。
%DBDSN	DBDS のデータ・セット名。%DBDSN は DBDS の DBDS レコードから設定されます。
%DBDSAM	VSAM DBDS の場合 VSAM に設定されます。そうでない場合は NULL に設定されます。

表 13. データベース・リカバリー・ユーティリティー - リカバリー (RECOVJCL) 用のシンボリック・キーワード (続き)

キーワード	説明
%MDBNAME	これが HALDB 区画の DBDS の場合、HALDB マスター名。HALDB データベース以外はこのキーワードは NULL に設定されます。
%DSSLGTM	選択している入力ログ・データの開始時刻。入力変更累積データ・セットを使用している場合は、%DSSLGTM は最後の累積ログ・ボリュームのボリューム停止時刻に設定されます。その他の場合、キーワード値はイメージ・コピー時刻に設定されます。
%SMS	要求されたユーティリティーの実行に、イメージ・コピー 2 のイメージ・コピー・データ・セットを使用するかどうかを示します。使用する場合は 1 に、使用しない場合は 0 に設定されます。
%ICDSN	イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名。USEDDBDS パラメーターが GENJCL.RECOV コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICUNIT	イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプ。USEDDBDS パラメーターが GENJCL.RECOV コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICVOL5	イメージ・コピー・データ・セットのボリューム通し番号リスト。USEDDBDS パラメーターが GENJCL.RECOV コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%ICFSEQ	イメージ・コピー・データ・セットのファイル・シーケンス番号。USEDDBDS パラメーターが GENJCL.RECOV コマンドで指定されている場合は、ヌルに設定されます。その他の場合、DBDS のイメージ・コピー・レコードから設定されます。
%CADSN	変更累積データ・セットのデータ・セット名。DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%CAUNIT	変更累積データ・セットの装置タイプ。DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%CAVOL5	変更累積データ・セットのボリューム通し番号のリスト。DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%CAFSEQ	変更累積データ・セットのファイル・シーケンス番号。DBDS 用の使用可能な変更累積がない場合、ヌルに設定されます。使用可能な変更累積がある場合、変更累積レコードから設定されます。
%LOGDSN	ログ・データ・セットのデータ・セット名。
%LOGUNIT	ログ・データ・セットの装置タイプ。
%LOGVSEQ	ログ・データ・セットのボリューム・シーケンス番号。
%LOGVOL5	ログ・データ・セットのボリューム通し番号。
%LOGFSEQ	ログ・データ・セットのファイル・シーケンス番号。
%LOGSEL	選択グループによりログ・データ・セットが選択されている場合は YES に設定されます。この場合、選択グループの後の削除グループは削除されます。それ以外の場合、%LOGSEL キーワードは NO に設定され、DD DUMMY ステートメントが生成されます。

表 13. データベース・リカバリー・ユーティリティー - リカバリー (RECOVJCL) 用のシンボリック・キーワード (続き)

キーワード	説明
%RCSYSIN	<p>データベース・リカバリー・ユーティリティーの制御ステートメント。ステートメントのカラムは次のように設定されます。</p> <p>カラム 設定</p> <p>1 S</p> <p>4-11 データベース名</p> <p>13-20 データ・セットの DD 名</p> <p>31-61 GENJCL.RECOV コマンドに RCVTIME パラメーターが指定されている場合は、指定されたタイム・スタンプ。指定されていない場合は、ブランク。</p> <p>63 GENJCL.RECOV コマンドに USEDBDS が指定されている場合は、C。GENJCL.RECOV コマンドに USERIC または LASTUIC が指定されている場合は、M。指定されていない場合は、ブランク。</p> <p>64 GENJCL.RECOV コマンドに NOBDBSDD が指定されている場合は、D。指定されていない場合は、ブランク。</p> <p>その他のカラムはすべてブランクに設定されます。</p>
%RCVFULL	<p>完全リカバリーを生成するかどうかを示します。YES に設定された場合、完全リカバリーが生成されます。GENJCL.RECOV コマンドに RCVTIME パラメーターが指定されている場合、%RCVFULL は NO に設定されます。</p>

IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバー

このセクションでは、IBM により提供される各基幹 JCL 実行メンバーをリストし、説明します。この基幹 JCL は、該当するユーティリティーを実行するための実行可能な JCL を生成します。

- 『JOB ステートメント』
- 290 ページの『ログ保存ユーティリティー JCL (ARCHJCL)』
- 295 ページの『データベース変更累積ユーティリティー JCL (CAJCL)』
- 298 ページの『ログ・リカバリー・ユーティリティー JCL (LOGCLJCL)』
- 300 ページの『データベース・イメージ・コピー・ユーティリティー JCL (ICJCL)』
- 305 ページの『オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティー JCL (OICJCL)』
- 308 ページの『データベース・リカバリー・ユーティリティー JCL (イメージ・コピーを受け取るトラッキング・サイト) (ICRCVJCL)』
- 310 ページの『データベース・リカバリー・ユーティリティー JCL (RECOVJCL)』
- 314 ページの『HALDB Index/ILDS 再作成ユーティリティー JCL (DSPUPJCL)』

JOB ステートメント

JOB ステートメント用の IBM 提供の基幹 JCL 実行メンバーの名前は、JOBJCL です。JOBJCL は、GENJCL コマンドを実行すると呼び出されます。

JOBJCL は、次のような 1 つのステートメントからなります。

```
//JT%TIME JOB
```

ユーザーは JOBJCL を変更し、ご使用のシステムで必要なジョブ・アカウント情報追加する必要があります。さらに、JOB LIB、STEPLIB、および JES 制御ステートメントを JOBJCL に追加することができます。デフォルトのジョブ名は変更できます。こうして提供された JOB ステートメントを使用する場合、ジョブ名は JThhmmss として生成されます。ここで、hhmmss は JCL が生成された時刻 (時間、分、秒) です。

ログ保存ユーティリティー JCL (ARCHJCL)

ログ保存ユーティリティー用の IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、ARCHJCL です。ARCHJCL は、GENJCL.ARCHIVE コマンドの実行時に使用されます。

以下は、ARCHJCL のリストです。図の後に、ARCHJCL 内のステートメントの説明があります。

Note: The following is the OLDS archive EXEC statement.

```
%DELETE (%ARCSLDS EQ 'YES')
//AR%STPNO EXEC PGM=DFSUARC0,PARM='%SSID'
%ENDDDEL
```

Note: The following is the SLDS archive EXEC statement.

```
%DELETE (%ARCSLDS EQ 'NO')
//AR%STPNO EXEC PGM=DFSUARC0,PARM='DBRC=Y'
%ENDDDEL
/**
/** THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
/** KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
/** THE IMS/ESA DATABASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
/**
/** JCL FOR ARCHIVE UTILITY
/**
```

```
//STEPLIB DD DSN=IMSVS.RESLIB,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
```

Note: The following lines are used to archive OLDS.

```
%DELETE (%ARCSLDS EQ 'YES')
%SELECT OLDS(%SSID,(%ddnames))
//%OLDSDDN DD DSN=%OLDSDDN,DISP=SHR
%ENDSEL
//DFSSLOGP DD DSN=IMS.SLDSP.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME.V%ARVERS,
// UNIT=3400,VOL=(,.,99),
// DISP=(NEW,KEEP),LABEL=(1,SL)
//DFSSLOGS DD DSN=IMS.SLDSS.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME.V%ARVERS,
// UNIT=3400,VOL=(,.,99),
// DISP=(NEW,KEEP),LABEL=(1,SL)
//RLDSDD1 DD DSN=IMS.RLDSP.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME.V%ARVERS,
// UNIT=3400,VOL=(,.,99),
// DISP=(NEW,KEEP),LABEL=(1,SL)
```

```
//RLDSDD2 DD DSN=IMS.RLDSS.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME.V%ARVERS,
//          UNIT=3400,VOL=(, ,99),
//          DISP=(NEW,KEEP),LABEL=(1,SL)
%ENDDEL
```

Note: The following lines are used to archive primary SLDSs.

```
%DELETE (%ARCLDS EQ 'NO')
%SELECT SLDS(%SSID,ALL)
//DFSSLDSP DD DSN=%SLDSASN,DISP=(OLD,PASS)
%ENDSEL
%ENDDEL
%DELETE (%ARCLDS EQ 'NO' | %SLDSSEL EQ 'NO')
//DFSSLOGP DD DSN=IMSVS.ARCH1.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME,
//          UNIT=3400,VOL=(, ,99),
//          DISP=(NEW,PASS),LABEL=(1,SL)
//RLDSDD1 DD DSN=IMSVS.RLDS1.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME,
//          UNIT=3400,VOL=(, ,99),
//          DISP=(NEW,PASS),LABEL=(1,SL)
%ENDDEL
```

Note: The following lines are used to archive secondary SLDSs.

```
%DELETE (%ARCLDS EQ 'NO')
%SELECT SSLDS(%SSID,ALL)
//DFSSLDSS DD DSN=%SLDSASN,DISP=(OLD,PASS)
%ENDSEL
%ENDDEL
%DELETE (%ARCLDS EQ 'NO' | %SLDSSEL EQ 'NO')
//DFSSLOGS DD DSN=IMSVS.ARCH2.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME,
//          UNIT=3400,VOL=(, ,99),
//          DISP=(NEW,PASS),LABEL=(1,SL)
//RLDSDD2 DD DSN=IMSVS.RLDS2.%SSID.D%ARDATE.T%ARTIME,
//          UNIT=3400,VOL=(, ,99),
//          DISP=(NEW,PASS),LABEL=(1,SL)
%ENDDEL
```

Note: The following lines are common to both processes.

```
//SYSIN DD *
SLDS FEOV(08000)
COPY DDNOUT1(RLDSDD1) DDNOUT2(RLDSDD2) DBRECOV
/*
```

Note: The following lines are used for the SLDSs process

```
%DELETE (%ARCLDS EQ 'NO')
//*****
//*
//* The following optional steps are used to manage the data
//* sets used in the previous SLDS archive step. If the previous
//* step completed successfully, the input data sets will be
//* deleted and the output data sets will be cataloged. The
//* output data sets will be deleted if the previous step
//* failed.
//*
//*****
//GOODRC%STPNO EXEC PGM=IEFBR14,COND=(0,NE,AR%STPNO)
%SELECT SLDS(%SSID,ALL)
//PSLDS1 DD DSN=%SLDSASN,DISP=(OLD,DELETE)
%ENDSEL
%SELECT SSLDS(%SSID,ALL)
//SSLDS1 DD DSN=%SLDSASN,DISP=(OLD,DELETE)
%ENDSEL
//DD1 DD DSN=*.AR%STPNO.DFSSLOGP,DISP=(OLD,CATLG)
//DD2 DD DSN=*.AR%STPNO.DFSSLOGS,DISP=(OLD,CATLG)
//DD3 DD DSN=*.AR%STPNO.RLDSDD1,DISP=(OLD,CATLG)
//DD4 DD DSN=*.AR%STPNO.RLDSDD2,DISP=(OLD,CATLG)
/*
//BADRC%STPNO EXEC PGM=IEFBR14,COND=(0,EQ,AR%STPNO)
//DD1 DD DSN=*.AR%STPNO.DFSSLOGP,DISP=(OLD,DELETE)
//DD2 DD DSN=*.AR%STPNO.DFSSLOGS,DISP=(OLD,DELETE)
```

```
//DD3 DD DSN=*.AR%STPNO.RLDSDD1,DISP=(OLD,DELETE)
//DD4 DD DSN=*.AR%STPNO.RLDSDD2,DISP=(OLD,DELETE)
/*
%ENDDDEL
```

ユーザーの要求に合わせて、この JCL を変更することができます。出力 DD ステートメントの位置 (DFSSLOGP と RLDSDD1、または DFSSLOGS と RLDSDD2) を、正しい %SELECT グループとの関係で維持することが重要です。つまり、1 次出力データ・セット (DFSSLOGP と RLDSDD1) 用の DD ステートメントは、%SELECT SLDS(%SSID,ALL) 選択グループの後でかつ、%SELECT SSLDS(%SSID,ALL) 選択グループの前に置く必要があります。

制約事項:

- %ARVERS キーワードは SLDS アーカイブ処理ではサポートされないので、使用しないでください。
- DFSSLOGP DD ステートメントには FREE=CLOSE JCL パラメーターを使用しないでください。データ・セットは動的に割り振り解除されるので、FREE=CLOSE を使用すると予測不能な結果を招きます。

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは現行のステップ番号によって置き換えられます。この後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えていきます。%SSID キーワードは、OLDS を作成した IMS サブシステムの ID によって置き換えられます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。%RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スペアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

OLDS DD ステートメント

アーカイブされる OLDS 用の DD ステートメントが、選択グループを使用して生成されます。%SSID キーワードはサブシステム ID を示します。

%DDNAMES キーワードは OLDS を示します。指定されたそれぞれの OLDS ごとに、1 つの DD ステートメントが生成されます。OLDS DD 名は %OLDSDDN キーワードを置き換えます。データ・セット名は %OLDSDSN キーワードを置き換えます。

DFSSLGDP DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 1 次 SLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

DFSSLGDS DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 2 次 SLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

二重 SLDS ロギングを使用していない場合は、基幹 JCL 実行メンバーからこの DD ステートメントを削除してください。

RLDSDD1 DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 1 次 RLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

RLDS を使用していない場合は、実行メンバーから、このステートメントと RLDSDD2 DD ステートメントを削除してください。このステートメントを削除する場合は、ユーティリティー制御ステートメント COPY を、SYSIN データから削除しなければなりません。DBRC は、SYSIN データが DD ステートメントと一致するかどうかを検査しません。

RLDSDD2 DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 2 次 RLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

RLDS ロギングを使用していない場合は、実行メンバーからこのステートメントを削除してください。このステートメントを削除する場合は、SYSIN データ内のユーティリティー制御ステートメント COPY から、DDNOUT2(RLDSDD2) パラメーターを削除する必要があります。DBRC は、SYSIN データが DD ステートメントと一致するかどうかを検査しません。

SYSIN DD ステートメント

DBRC は、SYSIN DD ステートメントの変更、または SYSIN データ内のユーティリティー制御ステートメントの変更を行いません。

DFSSLDSP DD ステートメント

アーカイブされる 1 次 SLDS 用の DD ステートメントが、選択グループを使

用して生成されます。%SSID キーワードはサブシステム ID を示します。アーカイブされていないそれぞれの SLDS ごとに、1 つの DD ステートメントが生成されます。SLDS データ・セット名は %SLDSDSN キーワードを置き換えます。

DFSSLDSS DD ステートメント

アーカイブされる 2 次 SLDS 用の DD ステートメントが、選択グループを使用して生成されます。%SSID キーワードはサブシステム ID を示します。アーカイブされていないそれぞれの SLDS ごとに、1 つの DD ステートメントが生成されます。SLDS 名は %SLDSDSN キーワードを置き換えます。

DFSSLOGP DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 1 次 SLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS または SLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

DFSSLOGS DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 2 次 SLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS または SLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

二重 SLDS ロギングを使用していない場合は、基幹 JCL 実行メンバーから、これらの DD ステートメントおよび DD2 DD ステートメントを削除してください。

RLSDDD1 DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 1 次 RLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS または SLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

RLDS を使用していない場合は、これらのステートメント、RLSDDD2 DD ステートメント、および DD3 と DD4 DD ステートメントを実行メンバーから削除してください。これらのステートメントを削除する場合は、ユーティリティ制御ステートメント COPY を、SYSIN データから削除しなければなりません。DBRC は、SYSIN データが DD ステートメントと一致するかどうかを検査しません。

RLSDDD2 DD ステートメント

この DD ステートメントは、作成される 2 次 RLDS を定義します。サブシステム ID は %SSID キーワードを置き換えます。%ARDATE および %ARTIME キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS または SLDS のオープン・タイム・スタンプからの、日付 (yyddd) および時刻 (hhmmsst) で置き換えられます。%ARVERS キーワードは、アーカイブされる最も古い OLDS のアーカイブ・バージョン番号 (nn) で置き換えられます。

重複ロギングを使用していない場合は、実行メンバーから、これらのステートメントおよび DD4 DD ステートメントを削除してください。これらのステートメントを削除する場合は、SYSIN データ内のユーティリティ制御ステートメント COPY から、DDNOUT2(RLDSDD2) パラメーターを削除する必要があります。DBRC は、SYSIN データが DD ステートメントと一致するかどうかを検査しません。

データベース変更累積ユーティリティ JCL (CAJCL)

データベース変更累積ユーティリティ用の IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、CAJCL です。CAJCL は、GENJCL.CA コマンドが実行されるときに使用されます。INIT.CAGRP または CHANGE.CAGRP コマンドに、CAJCL パラメーターを使用することにより、CAJCL 以外の実行メンバーを指定することができます。

以下は、CAJCL のリストです。図の後に、CAJCL 内のステートメントの説明があります。

```
//CA%STPNO EXEC PGM=DFSUCUM0,PARM='CORE=100000',REGION=800K
/**
/** THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
/** KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
/** THE IMS/ESA DATABASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
/**
/**      JCL FOR CHANGE ACCUMULATION
/**
//STEPLIB DD DSN=IMS.SDFSRESL,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSOUT DD SYSOUT=A
//SORTLIB DD DSN=SYS1.SORTLIB,DISP=SHR
//SORTWK01 DD UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(2),,CONTIG)
//SORTWK02 DD UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(2),,CONTIG)
//SORTWK03 DD UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(2),,CONTIG)
//SORTWK04 DD UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(2),,CONTIG)
//SORTWK05 DD UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(2),,CONTIG)
//SORTWK06 DD UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(2),,CONTIG)
%DELETE (%CAODSN EQ '')
//DFSUCUM0 DD DSN=%CAODSN,UNIT=%CAOUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,,,SER=(%CAOVOLS)),
//          LABEL=(%CAOFSEQ,SL),
//          DISP=OLD
%ENDDDEL
%DELETE (%CAODSN NE '')
//DFSUCUM0 DD DUMMY,DCB=BLKSIZE=100
%ENDDDEL
//DFSUCUMN DD DSN=%CANDSN,UNIT=%CANUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,,,%CANVCNT,SER=(%CANVOLS)),
//          LABEL=(%CANFSEQ,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP)
%SELECT RLDS((%CAGRP),(FROM(%DSLLGTM)))
//DFSULOG DD DSN=%LOGDSN,UNIT=%LOGUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,,,%LOGVSEQ,,,SER=(%LOGVOLS)),
```

```
//          LABEL=(%logfseq,SL),
//          DCB=RECFM=VB,
//          DISP=OLD
%ENDSEL
%DELETE    (%LOGSEL EQ 'YES')
//DFSULOG DD DUMMY,DCB=BLKSIZE=100
%ENDDDEL
//DFSUDD1 DD DUMMY
//SYSIN    DD *
%CADB0
/*
```

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは、現行のステップ番号で置き換えられます。その後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。 %RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スベアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

IMS DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSOUT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SORTLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SORTWKn DD ステートメント

DBRC はこれらのステートメントは変更しません。

DFSUCUMO DD ステートメント

このステートメントは、入力として使用される、前に作成された変更累積データ・セットを指定します。

この DD ステートメントを生成するため、2 つの削除グループが使用されます。 RECON データ・セットに CA グループの既存の変更累積データ・セットが定義されていない場合、%CAODSN キーワードの値はヌルです。したがって、最初の削除グループは削除され、DFSUCUMO DD ステートメントは DUMMY,DCB=BLKSIZE=100 として生成されます。

RECON データ・セットに入力変更累積データ・セットが定義されている場合、%CAODSN キーワードはデータ・セット名に設定されます。したがって、2 番目の削除グループは削除され、DFSUCUM DD ステートメントは入力データ・セットを指定します。出力データ・セットに関するその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%CAODSN

データ・セット名

%CAUNIT

装置タイプ

%CAOVOLS

ボリューム通し番号リスト

%CAOFSEQ

ファイル・シーケンス番号

DFSUCUM DD ステートメント

この DD ステートメントは、出力変更累積データ・セットを示します。出力データ・セットに関するその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%CANDSN

データ・セット名

%CANUNIT

装置タイプ

%CANVCNT

ボリューム・カウント

%CANVOLS

ボリューム通し番号

%CANFSEQ

ファイル・シーケンス番号

DFSULOG DD ステートメント

この DD ステートメントは、データベース変更累積ユーティリティーへの入力として使用される、IMS ログ・データ・セットを示します。選択グループは必要なログ・データ・セットを選択します。%CAGRP は、ログ・データ・セットを選択する CA グループを示します。前にその CA グループ用に処理されていない、すべてのログ・ボリュームが選択されます。選択されたデータ・セットのその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%LOGDSN

データ・セット名

%LOGUNIT

装置タイプ

%LOGVSEQ

ボリューム・シーケンス番号

%LOGVOLS

ボリューム通し番号

%LOGFSEQ

ファイル・シーケンス番号

選択グループによりログ・データ・セットが選択されると、次の削除グループ内の %LOGSEL キーワードは YES となり、これにより削除グループは削除されません。それ以外の場合、%LOGSEL キーワードは NO に設定され、DD DUMMY ステートメントが生成されます。

DFSUDD1 DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

DFSUDD1 DD ステートメントは、データベース変更累積ユーティリティーが作成した、オプションの出力ログ・データ・セットを示します。DBRC は、オプションの出力ログ・データ・セットを記録しないので、基幹 JCL 実行メンバーでは、DFSUDD1 DD ステートメントは DUMMY として指定されています。

SYSIN DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

DB0 制御ステートメント

DB0 制御ステートメントは、CA グループ内のそれぞれの DBDS ごとに生成されます。

ログ・リカバリー・ユーティリティー JCL (LOGCLJCL)

ログ・リカバリー・ユーティリティー用の IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、LOGCLJCL です。LOGCLJCL は、GENJCL.CLOSE コマンドを実行すると使用されます。

以下は、LOGCLJCL のリストです。図の後に、LOGCLJCL 内のステートメントの説明があります。

```
//CL%STPNO      EXEC PGM=DFSULTR0,PARM='IMSID=%SSID'  
//*  
//* THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.  
//* KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF  
//* THE IMS/ESA DATABASE RECOVERY CONTROL FEATURE.  
//*  
//*          JCL FOR LOG RECOVERY UTILITY  
//*  
//STEPLIB      DD DSN=IMS.SDFSRESL,DISP=SHR  
//SYSPRINT     DD SYSOUT=A  
%DELETE       (%RCNDSN1 EQ '')  
//RECON1       DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR  
%ENDDDEL  
%DELETE       (%RCNDSN2 EQ '')  
//RECON2       DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR  
%ENDDDEL  
%DELETE       (%RCNDSN3 EQ '')  
//RECON3       DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR  
%ENDDDEL  
%SELECT       OLDS(%SSID,(%CDDNAME))  
//DFSOL%OLDSTYP DD DSN=%OLDSDSN,DISP=SHR  
%ENDSEL  
%DELETE       (%WADS EQ 'NO')  
//DFSWADS0     DD DSN=IMS.WADS0,DISP=OLD  
%ENDDDEL  
%DELETE       (%WADS EQ 'YES')  
%SELECT       OLDS(%SSID,(%NDDNAME))  
//DFSOL%OLDSTYP DD DSN=%OLDSDSN,DISP=SHR  
%ENDSEL
```

```

%ENDDDEL
%DELETE          (%PDDNAME EQ ' ')
%SELECT          OLDS(%SSID, (%PDDNAME))
//DFSPOL%OLDSTYP DD DSN=%OLDSDSN,DISP=SHR
%ENDSEL
%ENDDDEL
//SYSIN          DD *
CLS
/*

```

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは現行のステップ番号で置き換えられます。この後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えていきます。%SSID キーワードは、クローズされる OLDS を作成した IMS サブシステムの ID によって置き換えられます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。%RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スペアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

OLDS DD ステートメント

この DD ステートメントは、クローズされる OLDS を指定します。選択グループを使用して OLDS を選択します。%SSID キーワードはサブシステム ID を示し、%CDDNAME は DD 名により OLDS を識別します。OLDS タイプ (1 次または 2 次) により、%OLDSTYP キーワードが置き換えられます。結果の DD 名は、DFSOLP または DFSOLS です。%OLDSDSN キーワードは、OLDS のデータ・セット名で置き換えられます。

WADS DD ステートメント

このステートメントは、モデルとしてのみ提供されています。基幹 JCL 実行メンバーを使用する前に、これを変更する必要があります。

提供された DFSWADS0 DD ステートメントは、DD ステートメント DFSWADS0 から DFSWADS_n までを使用して、置き換える必要があります。n+1 は、オンライン IMS 制御領域が使用する WADS の数です。WADS DD ステートメントは、キーワード %WADS により制御される選択グループ内に含まれています。GENJCL.CLOSE コマンド・プロセッサは、OLDS が WADS を使用してクローズされる場合、%WADS キーワードの値を YES に設定します。コマンド・プロセッサは、OLDS が次の OLDS を使用してクローズされる場合、キーワ

ードの値を NO に設定します。したがって、OLDS が次の OLDS を使用してクローズされる場合、WADS DD ステートメントは削除されます。

次の OLDS DD ステートメント

OLDS が次の OLDS を使用してクローズされる場合、これらの DD ステートメントは次の OLDS を指定します。これらのステートメントは、%WADS キーワードにより制御される削除グループ内に含まれます。したがって、OLDS が WADS を使用してクローズされる場合、これらのステートメントは削除されません。次の OLDS を選択するために、選択グループを使用します。%SSID キーワードはサブシステム ID を示します。%NDDNAME キーワードは次の OLDS を DD 名で指定します。OLDS タイプ (1 次または 2 次) により、%OLDSTYP キーワードが置き換えられます。結果の DD 名は、DFSNOLP または DFSNOLS です。%OLDSDSN キーワードは、OLDS のデータ・セット名で置き換えられます。

前の OLDS DD ステートメント

直前の OLDS が存在する場合、対応する DD ステートメントは直前の OLDS を指定します。これらのステートメントは、%PDDNAME キーワードにより制御される削除グループ内に含まれます。キーワードの値がヌルでない場合、選択グループを使用して、直前の OLDS が選択されます。結果の DD 名は、DFSPOLP または DFSPOLS です。その他のキーワードの処理は、上記の「次の OLDS DD ステートメント」の項に説明されています。

SYSIN DD ステートメント

DBRC は、SYSIN DD ステートメントの変更、または SYSIN データ内のユーティリティー制御ステートメントの変更を行いません。

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティー JCL (ICJCL)

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーおよびデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティー用の、IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、ICJCL です。

ICJCL は、GENJCL.IC コマンドを実行すると使用されます。ICJCL の処理を、出力 JCL の各ジョブ・ステップごとに 1 回を超えて行うことができます。

INIT.DBDS または CHANGE.DBDS コマンドに ICJCL パラメーターを使用することにより、ICJCL 以外の実行メンバーを指定することができます。

JCL は、以下の 3 つの部分に分けられます。

第 1 部 (EXEC ステートメントから IMS DD ステートメントまで)

キーワード %SMSGRP によって制御される削除グループに含まれます。したがって、これらはジョブ・ステップごとに 1 回だけ処理されます。

第 2 部 (%DBADDN DD ステートメントから %ICDDN4 DD ステートメントまで) ジョブ・ステップでコピーされる各 DBDS またはエリアごとに 1 回処理されます。GENJCL コマンドで Sameds が指定されていた場合は、%ICDDNn DD ステートメントの 2 番目のセットが削除されます。

第 3 部 (SYSIN DD ステートメントおよび %ICSYSIN ステートメント)

キーワード %SMSGRP によって制御される削除グループに含まれます。したがって、これらはジョブ・ステップでコピーされる最後の (または唯一の) DBDS またはエリアに対してのみ処理されます。

以下は、ICJCL のリストです。図の後に、ICJCL 内のステートメントの説明があります。

```
%DELETE (%SMSGRP NE '
/*-----| These comments are useful for modifying the skeletal
/*-----| member, but are confusing when generated in the
/*-----| output jcl. Force them to be deleted.
/*-----|
/*-----| New variables for GENJCL.IC:
/*-----| One DBDS per step:
/*-----|   %SMSGRP = 0 - Not SMS or not Group
/*-----|   %SMS1DS = 0 - Not SMS or not Group or not ONEDS
/*-----|
/*-----| Multiple DBDSs per step:
/*-----|   %SMSGRP = 1 - SMS + Group + only member
/*-----|   %SMSGRP = 2 - SMS + Group + first member
/*-----|   %SMSGRP = 3 - SMS + Group + not first or last
/*-----|   %SMSGRP = 4 - SMS + Group + last member
/*-----|   %SMS1DS = 1 - %SMSGRP > 0 + ONEDS
/*-----|-----|-----|
/*-----| Section 1 is used only once per step
/*-----|-----|-----|

%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP GT '2')
//IC%STPNO EXEC PGM=%PGMIC,REGION=800K,
//          PARM='%PARMX'
/*
/*
/* THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
/* KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
/* THE IMS/ESA DATA BASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
/*
/*          JCL FOR IMAGE COPY.
/*
//STEPLIB DD DSN=IMSVS.RESLIB,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '' | %SMSGRP GT '2')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '' | %SMSGRP GT '2')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '' | %SMSGRP GT '2')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP GT '2')
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP NE '')

/*-----|-----|-----|
/*-----| Single output data set if SMS and ONEDS
/*-----|-----|-----|
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP GT '2' | %SMS1DS NE '1')
//%ICDDN1 DD DSN=%ICDSN1,UNIT=%ICUNIT1,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT1,SER=(%ICVOLS1)),
//          LABEL=(%ICFSEQ1,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LT '2' | %SMSGRP GT '2' | %SMS1DS NE '1')
//%ICDDN2 DD DSN=%ICDSN2,UNIT=%ICUNIT2,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT2,SER=(%ICVOLS2)),
//          LABEL=(%ICFSEQ2,SL),
```

```

//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LT '3' |%SMSGRP GT '2' | %SMS1DS NE '1')
//%ICDDN3  DD DSN=%ICDSN3,UNIT=%ICUNIT3,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT3,SER=(%ICVOLS3)),
//          LABEL=(%ICFSEQ3,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LT '4' |%SMSGRP GT '2' | %SMS1DS NE '1')
//%ICDDN4  DD DSN=%ICDSN4,UNIT=%ICUNIT4,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT4,SER=(%ICVOLS4)),
//          LABEL=(%ICFSEQ4,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP NE '')
//*-----|-----
//*-----| Section 2 is used once per DBDS (any value of %SMSGRP)
//*-----|-----

%ENDDDEL
%SELECT DBDS((%DBNAME,%DBDDN))
%DELETE (%DBADSAV NE 'AVAIL')
//%DBADDN  DD DSN=%DBDSN,DISP=%CICDISP
%ENDDDEL
%DELETE (%DBADSAV NE '' | %MDBNAME NE'')
//%DBDDN   DD DSN=%DBDSN,DISP=%CICDISP
%ENDDDEL
%ENDSEL
%DELETE (%SMSGRP NE '')
//*-----|-----
//*-----| Output data sets not included if SMS + Group + ONEDS
//*-----|-----

%ENDDDEL
%DELETE (%SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN1  DD DSN=%ICDSN1,UNIT=%ICUNIT1,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT1,SER=(%ICVOLS1)),
//          LABEL=(%ICFSEQ1,SL),
%ENDDDEL
%DELETE (%SMS EQ '1' | %SMS1DS EQ '1')
//          DISP=(NEW,KEEP),DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%SMS NE '1' | %SMS1DS EQ '1')
//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL

%DELETE (%COPIES EQ '1' | %SMS EQ '1' | %SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN2  DD DSN=%ICDSN2,UNIT=%ICUNIT2,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT2,SER=(%ICVOLS2)),
//          LABEL=(%ICFSEQ2,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP),DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES EQ '1' | %SMS NE '1' | %SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN2  DD DSN=%ICDSN2,UNIT=%ICUNIT2,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT2,SER=(%ICVOLS2)),
//          LABEL=(%ICFSEQ2,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LE '2' | %SMS EQ '1' | %SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN3  DD DSN=%ICDSN3,UNIT=%ICUNIT3,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT3,SER=(%ICVOLS3)),
//          LABEL=(%ICFSEQ3,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP),DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LE '2' | %SMS NE '1' | %SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN3  DD DSN=%ICDSN3,UNIT=%ICUNIT3,
//          VOL=(PRIVATE,,%ICVCNT3,SER=(%ICVOLS3)),
//          LABEL=(%ICFSEQ3,SL),
//          DISP=(NEW,KEEP)

```

```

%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LE '3' | %SMS EQ '1' | %SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN4 DD DSN=%ICDSN4,UNIT=%ICUNIT4,
// VOL=(PRIVATE,,,%ICVCNT4,SER=(%ICVOLS4)),
// LABEL=(%ICFSEQ4,SL),
// DISP=(NEW,KEEP),DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%COPIES LE '3' | %SMS NE '1' | %SMS1DS EQ '1')
//%ICDDN4 DD DSN=%ICDSN4,UNIT=%ICUNIT4,
// VOL=(PRIVATE,,,%ICVCNT4,SER=(%ICVOLS4)),
// LABEL=(%ICFSEQ4,SL),
// DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP NE '')
/*-----
/*-----| Section 3 is used once per step (%SMSGRP = 0, 1, or 4
/*-----
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP EQ '2' | %SMSGRP EQ '3')
//SYSIN DD *
%ICSYSIN
/*
%ENDDDEL

```

- このメンバーの処理を、出力 JCL の各ジョブ・ステップで 1 回を超えて行うことができます。
- JCL の第 1 部に含まれるすべてのステートメント (EXEC ステートメントから IMS DD ステートメントまで) は、キーワード %SMSGRP によって制御される削除グループに含まれます。したがって、これらはジョブ・ステップごとに 1 回だけ処理されます。
- %ICDDn DD ステートメントの最初のセットは、イメージ・コピーの 1 つのグループに対して単一の出力データ・セットを識別します。これは、%SMS1DS キーワードで制御される削除グループに入っています。したがって、これは Sameds が GENJCL コマンドに指定されていたときにのみ出力されます。
- JCL の第 2 部 (%DBADDN DD ステートメントから %ICDDN4 DD ステートメントまで) は、1 つのジョブ・ステップでコピーされる DBDS またはエリアごとに 1 回ずつ処理されます。GENJCL コマンドで Sameds が指定されていた場合は、%ICDDNn DD ステートメントが削除されます。
- JCL の第 3 部 (SYSIN DD ステートメントおよび %ICSYSIN ステートメント) は、キーワード %SMSGRP によって制御される削除グループに含まれます。したがって、これらは 1 つのジョブ・ステップでコピーされる最後の (または唯一の) DBDS またはエリアに対してのみ処理されます。

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは、現行のステップ番号で置き換えられます。その後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。 %RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スベアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

IMS DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

%DBADDN DD ステートメント

このステートメントは、使用される、使用可能 ADS を指定します。 %DBADDN キーワードは、ADS の DD 名で置き換えられます。 %DBDSN キーワードは、ADS 名で置き換えられます。

%DBDDN DD ステートメント

このステートメントは、コピーされる DBDS を識別します。 %DBDDN キーワードは、DBDS の DD 名で置き換えられます。 %DBDSN キーワードは、DBDS のデータ・セット名によって置き換えられます。

%ICDDN1 DD ステートメント

これらのステートメントは、イメージ・コピー・ユーティリティにより作成される最初のイメージ・コピー・データ・セットを示します。イメージ・コピー・データ・セットに関するその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%ICDSN1

データ・セット名

%ICVCNT1

ボリューム・カウント

%ICVOLS1

ボリューム通し番号リスト

%ICUNIT1

装置タイプ

%ICFSEQ1

ファイル・シーケンス番号

%ICDDN2 | 3 | 4 DD ステートメント

これらのステートメントは、イメージ・コピー・ユーティリティにより作成される後続のイメージを指定します。この DD ステートメントは、%COPIES キーワードにより制御される削除グループ内に含まれます。 %COPIES キーワードは、1 つのイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合には 1 に設定され、複数のイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合には 2、3、または 4 に設定されます。 %COPIES が 1 の場合、グループは削除されます。

%ICDSNx、%ICVCNTx、%ICVOLsx、%ICUNITx、および %ICFSEQx キーワードは、すぐ上の「%D10U0 DD ステートメント」の項に示されているものと同じタイプの情報で置き換えられます。x は 2、3 または 4 のいずれかです。

SYSDIN DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

%ICSYSIN ステートメント

イメージ・コピー・ユーティリティー制御ステートメントが、%ICSYSIN キーワードを置き換えます。

%ICSYSIN ステートメントは必須です。 %ICSYSIN ステートメントを削除すると、GENJCL.IC コマンドは失敗します。グループを処理する場合は、複数の制御ステートメントが生成されます。

以下は、ご使用のシステムが IMSPLEX および DBRCGRP EXEC パラメーターを使用して、DBRC インスタンスを登録する IMSplex および DBRC グループを識別する場合に使用できるサンプル JCL を示しています。この JCL では、DFSUDMP0 と DFSUDMT0 に同じ基幹メンバーを使用できます。

```
%DELETE (%ICRTYPE NE 'BATCH' & %ICRTYPE NE 'CIC')
//IC%STPNO EXEC PGM=%PGMIC,REGION=0M,
//   PARM=%PARMX,IMSPLEX=%IMSPLEX,DBRCGRP=%DBRCGRP'
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP GT '2' | %ICRTYPE EQ 'BATCH' | %ICRTYPE EQ 'CIC')
//IC%STPNO EXEC PGM=%PGMIC,REGION=0M,
//   PARM=(%PARMX,,,,,
//   'IMSPLEX=%IMSPLEX,DBRCGRP=%DBRCGRP')
%ENDDDEL
%DELETE (%SMSGRP GT '2')
//*
//*
//*   THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
//*   KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
//*   THE IMS/ESA DATA BASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
//*
//*           JCL FOR IMAGE COPY.
//*
//STEPLIB DD DSN=IMSVS.RESLIB,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%ENDDDEL
```

オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティー JCL (OICJCL)

オンライン・イメージ・コピー・ユーティリティー用の IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、OICJCL です。OICJCL は、GENJCL.OIC コマンドを実行すると使用されます。INIT.DBDS または CHANGE.DBDS コマンドに OICJCL パラメーターを使用することにより、OICJCL 以外の実行メンバーを指定することができます。

以下は、OICJCL のリストです。図の後に、OICJCL 内のステートメントの説明があります。

```
//OIC%STPNO EXEC PGM=DFSRR00,PARM='BMP,DFSUICP0,%PSB,,MASTER',
//   REGION=700K
//*   THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
//*   KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
//*   THE IMS/VS DATA BASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
//*
```

```

/**          JCL FOR ONLINE IMAGE COPY.
/**
//STEPLIB DD DSN=IMSVS.SDFSRESL,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//%ICDDN1 DD DSN=%ICDSN1,UNIT=%ICUNIT1,
// VOL=(PRIVATE,,,%ICVCNT1,SER=(%ICVOLS1)),
// LABEL=(%ICFSEQ1,SL),
// DISP=(NEW,KEEP)
%DELETE (%COPIES EQ '1')
//%ICDDN2 DD DSN=%ICDSN2,UNIT=%ICUNIT2,
// VOL=(PRIVATE,,,%ICVCNT2,SER=(%ICVOLS2)),
// LABEL=(%ICFSEQ2,SL),
// DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
//DFSUCKPT DD DSN=IMSVS.%DBNAME.%DBDDN.CHECKPT.IC%TIME,
// UNIT=SYSDA,SPACE=(TRK,1),DISP=(NEW,CATLG)
//SYSIN DD *
%ICSYSIN
/*

```

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは現行のステップ番号で置き換えられます。その後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えます。 GENJCL.OIC コマンドに指定した PSB 名が、 %PSB キーワードを置き換えます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。 %RCNDSN キーワード値は、 GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、 GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スベアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

IMS DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

%ICDDN1 DD ステートメント

このステートメントは、イメージ・コピー・ユーティリティにより作成される

最初のイメージ・コピー・データ・セットを示します。オンライン・イメージ・コピー・データ・セットに関するその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%ICDSN1

データ・セット名

%ICVCNT1

ボリューム・カウント

%ICVOLS1

ボリューム通し番号リスト

%ICUNIT1

装置タイプ

%ICFSEQ1

ファイル・シーケンス番号

%ICDDN2 DD ステートメント

このステートメントは、イメージ・コピー・ユーティリティーにより作成される重複イメージ・コピー・データ・セットを指定します。この DD ステートメントは、%COPIES キーワードにより制御される削除グループ内にあります。

%COPIES キーワードは、1 つのイメージ・コピー・データ・セットを作成する場合、1 に設定され、重複イメージ・コピー・データ・セットを作成する場合は、2 に設定されます。 %COPIES が 1 の場合、グループは削除されます。

%ICDSN2、%ICVCNT2、%ICVOLS2、%ICUNIT2、および %ICFSEQ1 キーワードは、すぐ上の「%D10U0 DD ステートメント」の項に示されているものと同じタイプの情報で置き換えられます。

DFSUCKPT DD ステートメント

DFSUCKPT DD ステートメントは、オプションのオンライン・イメージ・コピー・チェックポイント・データ・セットを指定します。このオプションのデータ・セットに関するキーワードは、次のように置き換えられます。

%DBNAME

データベース名。

%DBDDN

DD 名

%TIME 現在の時刻 (hhmmss 形式)

チェックポイント・データ・セット用のボリューム通し番号と装置タイプは、IBM 提供の基幹 JCL には指定されていません。チェックポイント・データ・セットを使用する場合は、これらを提供する必要があります。

DFSUCKPT DD ステートメントはオプションです。オンライン・イメージ・コピー・ユーティリティーでチェックポイント・データ・セットを使用しない場合は、このステートメントを削除することができます。

SYSIN DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

%ICSYSIN ステートメント

イメージ・コピー・ユーティリティー制御ステートメントが、%ICSYSIN キーワードを置き換えます。

データベース・リカバリー・ユーティリティー JCL (イメージ・コピーを受け取るトラッキング・サイト) (ICRCVJCL)

データベース・リカバリー・ユーティリティー (イメージ・コピーを受け取るトラッキング・サイトで使用されるもの) 用の IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、ICRCVJCL です。ICRCVJCL は、GENJCL.RECEIVE コマンドを実行すると使用されます。INIT.DBDS または CHANGE.DBDS コマンドに RECVJCL パラメーターを使用することにより、ICRCVJCL 以外の実行メンバーを指定することができます。

以下は、ICRCVJCL のリストです。図の後に、ICRCVJCL 内のステートメントの説明があります。

```
//RCV%STPNO EXEC PGM=DFSRR00,REGION=1300K,
//          PARM='UDR,DFSURDB0,%DBNAME',,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,%GSGNAME'
//*
//* THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
//* KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
//* THE IMS/VIS DATA BASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
//*
//*          JCL FOR IMAGE COPY RECEIVE
//*
//STEPLIB DD DSN=IMSVS.RESLIB,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//%DBDDN DD DSN=%DBDSN,
%DELETE (%DBDSAM EQ 'VSAM')
//          UNIT=SYSDA,
//          VOL=SER=VOLSER,
//          SPACE=(CYL,(20,2)),
//          DISP=(NEW,KEEP),
//          DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%DBDSAM NE 'VSAM')
//          DISP=OLD
%ENDDDEL
//DFSUDUMP DD DSN=%ICDSN,UNIT=%ICUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,,,,SER=(%ICVOL)),
//          LABEL=(%ICFSEQ,SL),
//          DISP=(OLD,KEEP),DCB=BUFNO=10
%DELETE (%LOGSEL EQ 'YES')
//DFSULOG DD DUMMY
%ENDDDEL
%DELETE (%CADSN NE '')
//DFSUCUM DD DUMMY
%ENDDDEL
//DFSVSAMP DD *
1024,4
4096,4
//SYSIN DD *
%RVSYSIN
/*
```

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは現行のステップ番号で置き換えられます。その後、現行ス

テップ番号は 1 ずつ増えます。%DBNAME キーワードは、受け取る DBDS またはエリアのデータベース名で置き換えられます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。 %RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スベアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

IMS DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

%DBDDN DD ステートメント

%DBDDN キーワードは、受け取る DBDS の DD 名で置き換えられます。

%DBDSN キーワードは、DBDS またはエリアのデータ・セット名で置き換えられます。

%DBDDN DD ステートメントの残りの部分は削除グループにより制御されます。削除グループの内容は、DBDS のアクセス方式により制御されます。アクセス方式が VSAM の場合、DISP=OLD が生成されます。その他の場合、UNIT、VOL、SPACE、DISP、および DCB パラメーターが生成されます。

DFSUDUMP DD ステートメント

この DD ステートメントは、受け取るイメージ・コピー・データ・セットを指定します。 %ICDSN、%ICUNIT、%ICVOL、および %ICFSEQ キーワードは、イメージ・コピー RECON レコード内の該当のフィールドから設定されます。

DFSUCUM DD ステートメント

この DD ステートメントは、トラッキング・サイトでは常に DUMMY としてリストされます。

DFSULOG DD ステートメント

この DD ステートメントは、トラッキング・サイトでは常に DUMMY としてリストされます。

DFSVSAMP DD ステートメント

DFSVSAMP DD ステートメントは、DL/I バッファ・ハンドラーが必要とする情報を指定します。 DBRC はこれらのステートメントは変更しません。

SYSIN DD ステートメント

この DD ステートメントは、処理を制御するデータベース・リカバリー・ステートメントを含みます。

%RVSYSIN ステートメント

DBRC が %RVSYSIN キーワードを置き換えます。

データベース・リカバリー・ユーティリティー JCL (RECOVJCL)

データベース・リカバリー・ユーティリティー用の IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、RECOVJCL です。RECOVJCL は、GENJCL.RECOV コマンドを実行すると使用されます。INIT.DBDS または CHANGE.DBDS コマンドに RECOVJCL パラメーターを使用することにより、RECOVJCL 以外の実行メンバーを指定することができます。

以下は、RECOVJCL のリストです。図の後に、RECOVJCL 内のステートメントの説明があります。

```
%DELETE (%MDBNAME NE '')
//RCV%STPNO EXEC PGM=DFSRRC00,REGION=1300K,
//          PARM='UDR,DFSURDB0,%DBNAME,,,,,,,,,,,,,%GSGNAME'
%ENDDDEL
%DELETE (%MDBNAME EQ '')
//RCV%STPNO EXEC PGM=DFSRRC00,REGION=1300K,
//          PARM='UDR,DFSURDB0,
%ENDDDEL
//*
//*
//* THIS JCL ORIGINIATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
//* KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION OF
//* THE IMS/VS DATA BASE RECOVERY CONTROL FEATURE.
//*
//*          JCL FOR RECOVERY.
//*
//STEPLIB DD DSN=IMSVS.SDFSRESL,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//%DBDDN DD DSN=%DBDSN,
%DELETE (%DBDSAM EQ 'VSAM' | %SMS EQ '1')
//          UNIT=SYSDA,
//          VOL=SER=VOLSER,
//          SPACE=(CYL,(20,2)),
//          DISP=(NEW,KEEP),
//          DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%DBDSAM EQ 'VSAM' | %SMS EQ '0')
//          UNIT=SYSDA,
//          VOL=SER=VOLSER,
//          SPACE=(CYL,(20,2)),
//          DISP=(NEW,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%DBDSAM NE 'VSAM')
//          DISP=OLD
```

```

%ENDDDEL
%DELETE (%ICDSN EQ '')
//DFSUDUMP DD DSN=%ICDSN,
%ENDDDEL

%DELETE (%ICCAT EQ 'YES')
//          UNIT=%ICUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,, ,SER=(%ICVOLS)),
//          LABEL=(%ICFSEQ,SL),
%ENDDDEL
%DELETE (%ICDSN EQ '' | %SMS EQ '1')
//          DISP=(OLD,KEEP),DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%ICDSN EQ '' | %SMS EQ '0')
//          DISP=(OLD,KEEP)
%ENDDDEL
%DELETE (%ICDSN NE '')
//DFSUDUMP DD DUMMY
%ENDDDEL
//DFSVDUMP DD DUMMY
%DELETE (%CADSN EQ '')
//DFSUCUM DD DSN=%CADSN,UNIT=%CAUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,, ,SER=(%CAVOLS)),
//          LABEL=(%CAFSEQ,SL),
//          DISP=(OLD,KEEP),DCB=BUFNO=10
%ENDDDEL
%DELETE (%CADSN NE '')
//DFSUCUM DD DUMMY
%ENDDDEL
%SELECT RLDS((%DBNAME,%DBDDN),FROM(%DSL LGTM))
%DELETE (%LOGVOLS EQ '')
//DFSULOG DD DSN=%LOGDSN,UNIT=%LOGUNIT,
//          VOL=(PRIVATE,, ,%LOGVSEQ,,SER=(%LOGVOLS)),
//          LABEL=(%LOGFSEQ,SL),
//          DCB=RECFM=VB,
//          DISP=OLD
%ENDDDEL
%DELETE (%LOGVOLS NE '')
//DFSULOG DD DSN=%LOGDSN,DISP=OLD
%ENDDDEL
%ENDSEL
%DELETE (%LOGSEL EQ 'YES')
//DFSULOG DD DUMMY
%ENDDDEL
%DELETE (%TRACK EQ 'NO')
//DFSTRCV DD DSN=?????,
//          DISP=OLD
%ENDDDEL
//DFSVSAMP DD *
1024,4
4096,4
//SYSIN DD *
%RCSYSIN
/*

```

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは現行のステップ番号で置き換えられます。その後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えます。HALDB の場合は、リカバリーされる DBD の HALDB マスター名、%MDBNAME が、EXEC ステートメントで使用されます。その他の場合はすべて、データベース名、%DBNAME が使用されます。

STEPLIB DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。 %RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。
- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スベアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

IMS DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

%DBDDN DD ステートメント

%DBDDN キーワードは、リカバリーされる DBDS の DD 名で置き換えられます。 %DBDSN キーワードは、DBDS のデータ・セット名によって置き換えられます。

%DBDDN DD ステートメントの残りの部分は削除グループにより制御されます。削除グループの内容は、DBDS のアクセス方式により制御されます。アクセス方式が VSAM の場合、DISP=OLD が生成されます。その他の場合、UNIT、VOL、SPACE、DISP、および DCB パラメーターが生成されます。

DFSUDUMP DD ステートメント

この DD ステートメントは、リカバリーに使用されるイメージ・コピー・データ・セットがあれば、それを定義します。この DD ステートメントを生成するために、%ICDSN キーワードにより制御される削除グループが使用されます。

GENJCL.RECOV コマンドに USEIC パラメーターが指定されているかまたはこれがデフォルトである場合、%ICDSN キーワードはそのデータ・セット名に設定されます。したがって、DFSUDUMP 用の最初の削除グループが使用され、2 番目の削除グループは削除されます。最初の削除グループ内のその他のキーワードは未変更です。

GENJCL.RECOV コマンドに USEDDBDS または USEAREA キーワードを指定すると、DFSUDUMP DD ステートメントは DUMMY として生成されます。

DFSVDUMP DD ステートメント

DFSVDUMP DD ステートメントは常に DUMMY として生成されます。

DFSUCUM DD ステートメント

この DD ステートメントは、リカバリーへの入力として使用される変更累積データ・セット (もしあれば) を指定します。 DFSUCUM DD ステートメントを生成するために、%CADSN キーワードにより制御される削除グループが使用されます。 DBDS が CA グループに属する場合、%CADSN キーワードは、最新の変更累積データ・セットのデータ・セット名に設定されます。 DBDS が CA グル

ープに属さない場合、または使用でき変更累積データ・セットが存在しない場合は、%CADSN キーワードはヌルに設定されます。

- %CADSN キーワードがヌルの場合、DFSUCUM DD ステートメントは DUMMY として生成されます。
- %CADSN キーワードがヌルでない場合、DFSUCUM DD ステートメントは変更累積データ・セットを指定します。

変更累積データ・セットに関するその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%CAVOLS

ボリューム通し番号リスト

%CAUNIT

装置タイプ

%CAFSEQ

ファイル・シーケンス番号

DFSULOG DD ステートメント

この DD ステートメントは、データベース・リカバリー・ユーティリティへの入力として使用される、ログ・データ・セットを指定します。

選択グループは必要なログ・データ・セットを選択します。 %DBNAME および %DBDDN キーワードは、ログ・データ・セットを選択する DBDS を識別します。変更累積データ・セットに含まれていない、DBDS 用の変更レコードを含むすべてのログ・ボリュームが選択されます。ログ・データ・セットに関するその他のキーワードは、次のように置き換えられます。

%LOGDSN

ログ・データ・セット名

%LOGUNIT

装置タイプ

%LOGVSEQ

ボリューム・シーケンス番号

%LOGVOLS

ボリューム通し番号

%LOGFSEQ

ファイル・シーケンス番号

ログ・データ・セットが選択されると、%LOGSEL キーワードの値は YES となり、あとに続く削除グループは削除されます。それ以外の場合、%LOGSEL キーワードは NO になり、DD DUMMY ステートメントが生成されます。

DFSTRCV DD ステートメント

DFSTRCV DD ステートメントは、1 つ以上のトラックをリカバリーする DBDS を指定します。 GENJCL コマンドに TRACK パラメーターが指定されていない場合、このステートメントは生成される JCL に出力されません。

DFSTRCV DD ステートメントを変更し、該当のデータ・セット名と装置情報を指定する必要があります。この変更は、基幹 JCL、または生成された JCL のいずれかで行うことができます。

DFSVSAMP DD ステートメント

DFSVSAMP DD ステートメントは、DL/I バッファ・ハンドラーが必要とする情報を指定します。DBRC はこれらのステートメントは変更しません。

SYSIN DD ステートメント

この DD ステートメントは、処理を制御するデータベース・リカバリー・ステートメントを含みます。

%RCSYSIN ステートメント

DBRC が %RCSYSIN キーワードを置き換えます。

%RCVFULL

%RCVFULL キーワードは、どのタイプのリカバリーを生成するかを示します。GENJCL.RECOV コマンドに RCVTIME パラメーター (タイム・スタンプ・リカバリー) が指定されていると、これは NO に設定されます。完全リカバリーを示す場合は、YES に設定されます。

このキーワードは、例えば、タイム・スタンプ・リカバリーの後に続けて、DBDS レコード内の「イメージ・コピー必要」フラグを ON にする場合に便利です。RECOVJCL 基幹 JCL メンバーの終わりに次の JCL を追加すれば、これを行うことができます。

```
%DELETE (%RCVFULL EQ 'YES')
//RCV%STPNO EXEC PGM=DSPURX00
//STEPLIB DD DSN=IMS.SDFSRESL,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCVFULL EQ 'YES' | %RCNDSN1 EQ '')
//RECON1 DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCVFULL EQ 'YES' | %RCNDSN2 EQ '')
//RECON2 DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCVFULL EQ 'YES' | %RCNDSN3 EQ '')
//RECON3 DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCVFULL EQ 'YES')
//SYSIN DD *
CHANGE.DBDS DBD(%DBNAME) DDN(%DBDDN) ICON
/*
%ENDDDEL
```

HALDB Index/ILDS 再作成ユーティリティー JCL (DSPUPJCL)

DFSPREC0 を使用して、HALDB 区画の ILDS または 1 次索引データ・セット (またはこの両方) を再作成します。

ILDS および 1 次索引データ・セットには、データベース・リカバリー・ユーティリティーとイメージ・コピー・ユーティリティーは使用できません。

GENJCL.RECOV、GENJCL.RECEIVE、GENJCL.IC、および GENJCL.OIC コマンドは、ILDS および 1 次索引データ・セットを対象として実行しようとする失敗します。グループに対する GENJCL コマンドは、明示的 (GROUP キーワードを使用)、暗黙的 (DDN キーワードのない DBD) のいずれの場合でも、ILDS または 1 次索引データ・セット用の JCL を生成しません。これらのデータ・セットは無視されます。GENJCL.USER は、ILDS と 1 次索引データ・セットを指定することができます。このコマンドの場合、ILDS と 1 次索引データ・セットは無視されません。

HALDB 区画 (HALDB 区画のデータ DBDS) のタイム・スタンプ・リカバリーの後、該当する ILDS または 1 次索引データ・セット (またはこの両方) を再作成する必要があります。これらのデータ・セット用に特定の GENJCL サポートはありませんが、GENJCL.USER を使用することができます。IBM 提供基幹 JCL 実行メンバーの名前は、DSPUPJCL です。次のようなインプリメンテーションを推奨します。

```
GENJCL.USER MEMBER (DSPUPJCL) -
      USERKEYS ((%MDBNAME, 'DBHDOJ01'),(%DBNAME,'PART1'), -
                (%RCVTYP, 'ILE'))
```

以下は、DSPUPJCL のリストです。図の後に、DSPUPJCL 内のステートメントの説明があります。

```
//UPREC%STPNO EXEC PGM=DFSRR00,REGION=1300K,
//          PARM='ULU,DFSPRE0,%MDBNAME,,,,,,,,,,,,,Y,N'
//*
//*****
//*
//*   THIS JCL ORIGINATES FROM THE USER'S 'JCLPDS' LIBRARY.
//*   KEYWORDS ARE REPLACED BY THE GENJCL FUNCTION.
//*
//*           User JCL for rebuilding either the index or ILDS data set, or
//*           BOTH data sets for a HALDB partition.
//*
//SYSPRINT DD SYSOUT=A
%DELETE (%RCNDSN1 EQ '')
//RECON1   DD DSN=%RCNDSN1,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN2 EQ '')
//RECON2   DD DSN=%RCNDSN2,DISP=SHR
%ENDDDEL
%DELETE (%RCNDSN3 EQ '')
//RECON3   DD DSN=%RCNDSN3,DISP=SHR
%ENDDDEL
//IMS      DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//DFSVSAMP DD DSN=IMS.VSAM.PARM(OPTIONS),DISP=SHR
//SYSIN    DD *
PARTITION=%DBNAME,RECOVTYP=%RCVTYP
/*
```

EXEC ステートメント

%STPNO キーワードは現行のステップ番号で置き換えられます。その後、現行ステップ番号は 1 ずつ増えます。%MDBNAME キーワードは、リカバリーされる DBDS の HALDB マスター名で置き換えられます。

SYSPRINT DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

RECONn DD ステートメント

RECON DD ステートメントは RECON データ・セットを識別します。

これらのステートメントは削除グループ内にあり、%RCNDSN キーワードにより制御されます。%RCNDSN キーワード値は、GENJCL コマンドの実行時に使用された RECON 名から設定されます。

- RECON データ・セットが動的に割り振られる場合、%RCNDSN キーワードはヌルに設定され、RECONn DD ステートメントは削除されます。
- RECON データ・セットが JCL により割り振られる場合、%RCNDSN キーワードは、GENJCL コマンド内の対応する RECON の名前に設定されます。

- GENJCL コマンドの実行時に RECON データ・セットを使用しない場合 (例えば、スベアの RECON が存在しない場合)、キーワードはヌルに設定され、DD ステートメントは削除されます。

IMS DD ステートメント

DBRC はこのステートメントは変更しません。

DFSVSAMP DD ステートメント

DFSVSAMP DD ステートメントは、DL/I バッファ・ハンドラーが必要とする情報を指定します。DBRC はこれらのステートメントは変更しません。

SYSIN DD ステートメント

この DD ステートメントは、処理を制御するデータベース・リカバリー・ステートメントを含みます。


PARTITION=%DBNAME

このステートメントは、再作成される ILDS または 1 次索引データ・セットの HALDB 区画名を指定します。

RECOVTYP=%RCVTYP

このステートメントは、DFSPREC0 ユーティリティーが再作成するデータ・セットのタイプ (ILDS、1 次索引、または両方) を示します。また、フリー・スペース・オプション・パラメーター (ILEF または BOTHF) を提供することにより、ユーティリティーは (フリー・スペースを組み込むために) VSAM ロード・モードで ILDS を再作成するののかも示します。

関連資料:

 データベース変更累積ユーティリティー (DFSUCUM0) (データベース・ユーティリティー)

第 14 章 INIT コマンド

INIT コマンドは、RECON データ・セットにさまざまなレコードを作成するために使用します。

INIT.ADS コマンド

INIT.ADS コマンドは、エリアの ADS (エリア・データ・セット) を定義するエントリーを RECON データ・セット内に作成するために使用します。このコマンドを使用して、DEDB 変更ユーティリティーに必要なデータ・セットを定義することもできます。エリアには、最大 7 個のデータ・セットと 7 個のシャドー・データ・セット (DEDB 変更用) を含むことができます。

DEDB 変更ユーティリティーの ALTERAREA 関数では、INIT.ADS コマンドを SHADOW オプションおよび IC オプションと一緒に使用して、1 から 6 個のシャドー・エリア・データ・セットおよび 1 個のシャドー・イメージ・コピー・データ・セットを定義します。シャドー・データ・セット (シャドー・エリア・データ・セットとシャドー・イメージ・コピー・データ・セット) の最大合計数は 7 個です。

DEDB 変更ユーティリティーの ADDAREA 関数では、INIT.ADS コマンドを SHADOW オプションや IC オプションと一緒に使用せずに、1 から 7 個のシャドー・エリア用アクティブ・エリア・データ・セットを定義します。

ADDAREA 関数によって追加されたエリアは、シャドー・エリアとして登録されます。シャドー・エリア用のエリア・データ・セットは、標準 (アクティブ) エリア・データ・セットとして登録されます。シャドー・エリア・データ・セットは、シャドー・エリア用に登録されている場合がありますが、ADDAREA 関数はアクティブ・エリア・データ・セットを使用し、シャドー・エリア・データ・セットを無視します。

INIT.ADS コマンドを実行する前に、エリアおよびデータベース・レコードを RECON データ・セット内に作成する必要があります。エリアを登録するには、INIT.DBDS コマンドを使用します。

注: ADDN または ADSN 名がこのエリアで固有の名前ではない場合、INIT.ADS コマンドは失敗します。

エリアを登録する際、必要な ADS の登録を完了する前に IMS オンライン・システムによって不用意に使用されないようにするために、エリアの状況は「リカバリーが必要 (recovery needed)」に設定されます。

エリアの状況が「リカバリーが必要」である間、RECON データ・セット内に ADS レコードを作成できますが、INIT.ADS UNAVAIL コマンドを発行して、それらのレコードを利用不可として作成する必要があります。シャドー・エリア・データ・セットは、指定されたエリアで DEDB 変更ユーティリティーが実行されていない限り、いつでも定義することができます。

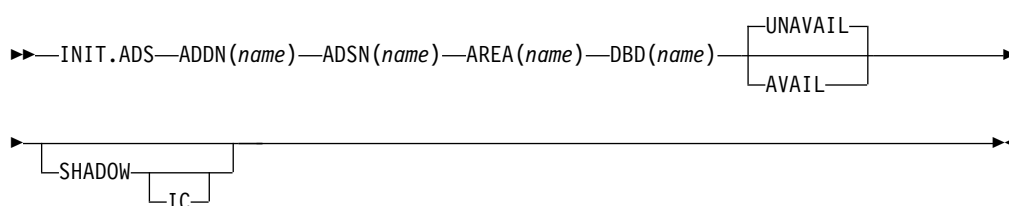
ただし、最初に CHANGE.DBDS NORECOV コマンドでエリアから「リカバリーが必要」の状況を解除し、その後、コマンド INIT.ADS AVAIL を発行して ADS を作成すれば、即時に利用可能となる ADS を作成できます。

エリアに登録されているエリア・データ・セットごとに別々の INIT.ADS コマンドを発行する必要があります。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 319 ページの『例』

構文



キーワード

ADDN(name)

DD 名によって DBRC に識別されている ADS を示すための必須キーワード。

ADSN(name)

データ・セット名によって DBRC に識別されている ADS を示すための必須キーワード。

AREA(name)

ADS が DBRC に識別されているエリア名を示すための必須キーワード。

DBD(name)

エリアをデータベース名で示すための必須キーワード。ADS はこのデータベース名で DBRC に識別されています。

UNAVAIL | AVAIL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、ADS レコードが使用可能かどうかを示すために使用します。

UNAVAIL

ADS の状況を使用不能にします。

AVAIL

ADS の状況を使用可能にします。エリアが使用中またはエリアがリカバリーを必要とする場合に INIT.ADS AVAIL コマンドを実行すると、このコマンドは失敗します。

SHADOW

DEDB 変更ユーティリティーに使用する 1 から 7 個のアクティブ・エリア・データ・セットを、RECON データ・セット内に登録するために使用するオプション・キーワード。

IC シャドー・エリア・データ・セットをシャドー・イメージ・コピー・データ・セットとして定義することを指定するオプション・キーワード。このキーワードは、SHADOW キーワードも指定された場合にのみ有効です。

推奨事項: DEDB 変更ユーティリティーを実行する前に、イメージ・コピー・データ・セットの GENMAX 値を 1 または 2 増やすことで、ユーザーのイメージ・コピー・データ・セットに対応できるようになります。後でイメージ・コピー・データ・セットの GENMAX 値を減らして、元の値に戻すことができます。

例

ここでは、INIT.ADS コマンドの使用例をいくつか示します。

ADS を定義するレコード作成の例

次の例では、ADS を識別するレコードが RECON データ・セット内に作成されます。

```
//INITADS JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.ADS DBD(DBD03) AREA(AREA03) -
ADDN(AREADDN1) ADSN(AREADSN2)
/*
```

MADS を定義するレコード作成の例

この例では、同じ DEDB エリア (DB21AR0) に関連する多重エリア・データ・セット (MADS) を識別するレコードが、RECON データ・セット内に作成されます。

```
INIT.DB DBD(DEDBJN21) SHARELVL(1) TYPEFP
INIT.DBDS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR0) GENMAX(2) VSO PRELOAD
INIT.ADS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR0) ADSN(IMSTESTL.DB21AR01) -
ADDN(DB21AR01)
INIT.ADS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR0) ADSN(IMSTESTL.DB21AR02) -
ADDN(DB21AR02)
INIT.ADS DBD(DEDBJN21) AREA(DB21AR0) ADSN(IMSTESTL.DB21AR03) -
ADDN(DB21AR03)
```

シャドー・エリア・データ・セットの定義の例

次の例では、DEDB 変更ユーティリティーの ALTRAREA 関数で使用するシャドー ADS およびシャドー・イメージ・コピー ADS を識別するレコードが、RECON データ・セット内に作成されます。

```
//INITADS JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.ADS DBD(DEDBJ001) AREA(D0010001) ADDN(D001001S) -
ADSN(IMSTESTS.D0010001.SHADOW) SHADOW
INIT.ADS DBD(DEDBJ001) AREA(D0010001) ADDN(D001001I) -
ADSN(IMSTESTS.D0010001.SHADOW.IC) SHADOW IC
/*
```


FILESEQ(1 | *value*)

定義する変更累積実行データ・セットのファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワード。FILESEQ キーワードに 1 より大きい値を指定する場合は、VOLLIST キーワードも指定する必要があります。

value は 1 から 9999 の 10 進数でなければなりません。

UNIT(3400 | *unittype*)

変更累積実行データ・セットが存在するボリュームの装置タイプを指定するオプション・キーワード。*unittype* は 8 文字までの英数字が可能です。

UNIT キーワードを指定する場合は、VOLLIST キーワードも指定する必要があります。

CA データ・セットを定義するレコード作成の例

この例では、RECON データ・セットに変更累積実行データ・セットを示すレコードを作成します (CADSN キーワードにより識別)。この変更累積実行データ・セットは、GRPNAME キーワードで識別される CA グループのために、変更累積実行ユーティリティーが後で実行するときに使用するために作成されるものです。このレコードを作成するということは、識別された CA グループが REUSE キーワードを指定して定義されていることを意味しています。

```
//INITCA JOB
:
//SYSIN DD *
      INIT.CA GRPNAME(CAGRP1) -
            CADSN(IMS.CAGRP1.CA.CA001) -
            VOLLIST(VOL001) FILESEQ(4)
/*
```

INIT.CAGRP コマンド

INIT.CAGRP コマンドは、指定された CA グループに属する DBDS の名前を指定するために使用します。

DBDS を CA グループに割り当てる前に、最初に INIT.DBDS コマンドを使用して、RECON データ・セット内に DBDS 用のレコードを作成する必要があります。DBDS それぞれは 1 つの CA グループにしか属することができません。

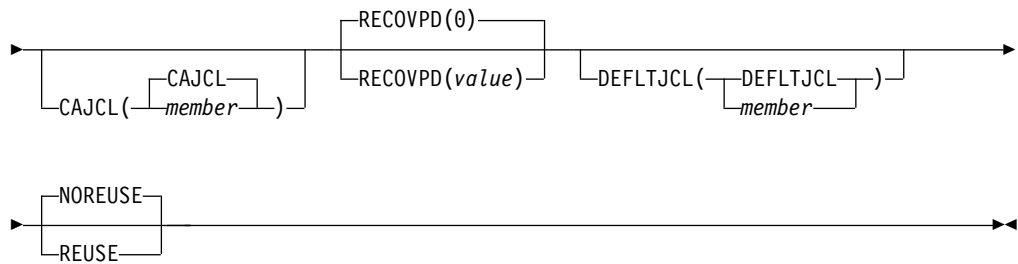
制約事項: 索引 DBDS と ILDS DBDS はリカバリー不能であり、これらに対する変更はログに記録されません。INIT.CAGRP コマンドはこれらのデータ・セットをサポートしません。

サブセクション:

- 『構文』
- 322 ページの『キーワード』
- 323 ページの『CA グループの作成の例』

構文

```
→ INIT.CAGRP—GRPMAX(value)—GRPMEM(—(↓) (dbdname, ddname) —) —GRPNAME(name)—→
```



キーワード

GRPMAX(*value*)

指定された CA グループ用に DBRC が維持する変更累積実行データ・セットの最大数を指定する必須キーワード。 *value* は 2 から 1024 の 10 進数でなければなりません。

指定されたグループに対して変更累積ユーティリティを実行する回数が GRPMAX 値を超えると、この CA グループに対して NOREUSE キーワードを指定している場合は、グループのリカバリ期間を過ぎた最も早い変更累積実行レコードの停止時刻を持つレコードが削除されます。この CA グループに対して REUSE キーワードを指定している場合は、リカバリ期間を過ぎた最も早い変更累積実行レコードの停止時刻を持つレコードが再利用されます。

GRPMEM(*dbname*, *ddname*)

定義する CA グループのメンバーとなる DBDS の名前を指定する必須キーワード。

CA グループには、1 から 32 767 個のメンバーを含めることができます。変数フィールドに置き換える名前は、対の名前を括弧で囲んで指定する必要があります。ここで、*dbname* は DBDS のデータベース名、*ddname* は、データ・セット DD 名または高速機能エリア名です。HALDB データベースに INIT.CAGRP コマンドを使用するときは、*dbname* に HALDB 区画の名前を指定します。

制約事項: ユーザーがリカバリ可能なデータベースを CA グループに追加することはできません。

GRPNAME(*name*)

作成する CA グループの名前を指定する必須キーワード。 *name* には 8 文字までの英数字を指定することができますが、RECON データ・セットに既に存在する CA グループと同じ名前を指定してはなりません。

CAJCL(**CAJCL** | *member*)

基幹 JCL の区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。作成する CA グループでの変更累積実行ユーティリティの実行に必要な JCL を生成するために、このメンバーを作成します。

RECOVPD(**0** | *value*)

指定された CA グループのリカバリ期間を設定するために使用するオプション・キーワード。リカバリ期間は、DBRC が変更累積情報を RECON データ・セット内に維持する、現在日付までの時間の長さです。例えば、変更累積グ

ループのリカバリー期間が 14 日の場合、DBRC は変更累積実行レコードの停止時刻に基づいて、少なくとも 14 日間、十分な変更累積実行レコードを維持します。

リカバリー期間は、現在日付から最も古い変更累積実行レコードの停止時刻の日付を差し引いた値として計算されます。変更累積実行レコードの日付が、指定された RECOVPD(*value*) の日数以内である場合、DBRC はそれらを RECON データ・セットに保持します。

value には、変更累積実行レコードを RECON データ・セット内に保持する日数を表す、0 から 999 の 10 進数を指定します。0 (デフォルト) を指定した場合、リカバリー期間はありません。

DEFLTJCL(DEFJTJCL | *member*)

CA グループ用の暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定するためのオプション・キーワード。指定されたメンバーは、GENJCL.CA コマンドが使用し、定義されたキーワードを変換します。

NOREUSE | REUSE

互いに排他的なオプション・キーワードであり、定義される CA グループ用の変更累積実行データ・セットが再利用可能かどうかを指定するために使用します。

NOREUSE

このグループ内の変更累積実行データ・セットが、変更累積実行ユーティリティで再利用されないことを示します。

REUSE

変更累積実行ユーティリティは、グループの GRPMAX 値を超えたときに、最も古い変更累積実行データ・セットとレコード (定義されているグループの) を再利用することを示します。再利用とは、変更累積実行ユーティリティが、グループ内の最も古い変更累積実行データ・セットに使用したのと同じ物理スペース、ボリューム、データ・セット名、および新しい変更累積実行データ・セットの RECON データ・セットのレコードを使用することを意味します。

CA グループの作成の例

この例では、CA グループを作成します。GRPMAX キーワードに示されているように、最大 15 個の変更累積データ・セットが、このグループ用に維持されます。RECOVPD キーワードに示されているように、このグループに対して 60 日の保存期間が設定されています。NOREUSE キーワードは、GRPMAX 値に達したときに、このグループ用の変更累積実行データ・セットが、変更累積実行ユーティリティで再利用されないことを示します。また、このキーワードは、変更累積実行ユーティリティを将来実行するときに使用するために、空の変更累積実行データ・セットをこのグループに定義することはできない、ということも意味しています。

```
//INITCAGP JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.CAGRP GRPNAME(CAGRP1) GRPMAX(15) RECOVPD(60) NOREUSE -
```

```

GRPMEM((DB1,DD1) (DB2,DD2) (DB3,DD3) -
(DB4,DD4) (DB5,DD5) (DB6,DD6) (DB7,DD7) -
(DB8,DD8) (DB9,DD9) (DB10,DD10)) -

```

/*
 関連概念:

➡ 変更累積データ・セットのリカバリー期間と GRPMAX (システム管理)

INIT.DB コマンド

INIT.DB コマンドは、データベースを DBRC に登録し、そのデータベースのさまざまな特性を指定するために使用します。

INIT.DBDS コマンドまたは INIT.PART を使用して、新規 DBDS、HALDB 区画、または DEDB エリアを初期化するには、データベースを DBRC で事前に登録する必要があります。

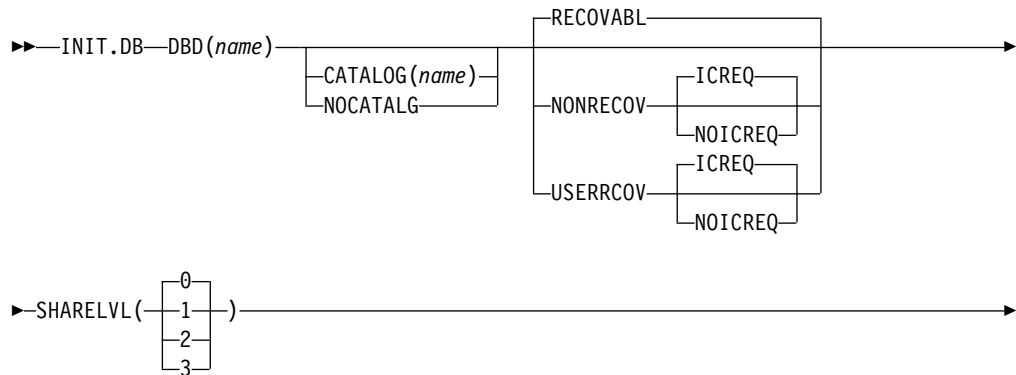
HALDB 区画 (TYPE=PART) に対して INIT.DB コマンドを実行すると、次のフィールドがデフォルトに設定されます。

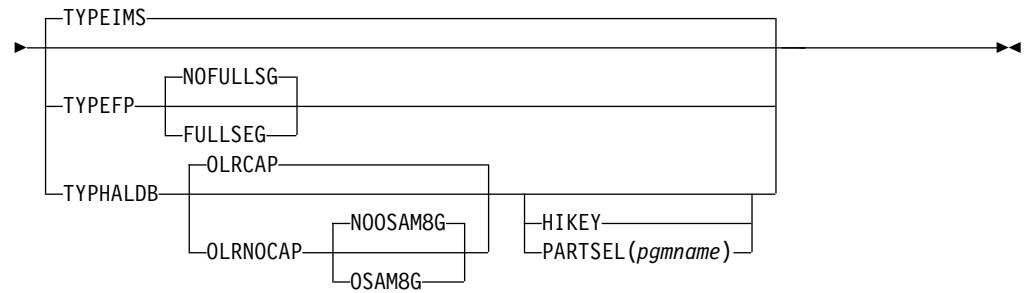
- OLREORG CURSOR ACTIVE =NO
- OLRIMSID=**NULL**
- ACTIVE DBDS=A-J

サブセクション:

- 『構文』
- 325 ページの『キーワード』
- 329 ページの『SHARELVL 1 DB レコードの作成の例』

構文





キーワード

DBD(*name*)

RECON データ・セットに登録するデータベースのデータベース名を指定するための必須キーワード。

HALDB データベースの制約事項: INIT.DB コマンドの場合、*name* には HALDB マスター・データベースの名前を指定します。

CATALOG(*name*) | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、INIT.DB コマンドの実行中に IMS カタログを使用するかどうかを示すために使用します。これらのパラメーターが省略された場合、IMS は RECON ヘッダー内で指定された IMS カタログを使用します。RECON 内の IMS カタログ名がヌルの場合、DBRC は DBDLIB を使用します。

CATALOG(*name*)

DBD ライブラリーの代わりに、指定された IMS カタログを INIT.DB コマンドで使用することを指定します。

name は、RECON データ・セット内に登録されている HALDB IMS カタログ・データベースの名前に一致する 8 文字の英数字ストリングとして指定します。8 文字未満のすべての IMS カタログ名には、空白が埋め込まれます。

IMS カタログ名は、INIT.DB コマンドの実行中に検証されます。カタログが存在しないか、HALDB データベースとして定義されていない場合、コマンドは失敗します。

NOCATALG

IMS カタログの代わりに DBD ライブラリーを INIT.DB コマンドで使用することを指定します。

RECOVABL | NONRECOV | USERRCOV

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBRC が、指定されたデータベースのデータ・セットについての更新を RECON に記録できるかどうかを指定します。

RECOVABL

データベース上の更新割り振りが RECON データ・セットに書き込まれることを指定します。

NONRECOV

指定されたデータベースのデータ・セットについての更新レコードは、RECON データ・セットには保持しないことを指定します。完全機能データ

ベースに対する NONRECOV キーワードの効果は、高速機能データベースに対する効果とは異なります。完全機能データベースで NONRECOV が指定された場合、IMS はバックアウト情報をログに記録します。高速機能データベースで NONRECOV が指定された場合、IMS はバックアウト情報をログに記録しません。

ICREQ | NOICREQ

互いに排他的なオプション・キーワードです。リカバリー不能データベースまたはユーザー・リカバリー可能データベースがロードまたは再編成されたあとに、そのイメージ・コピーを作成する要求を DBRC に実行させるかどうかを指定します。このオプションは、DB 内のすべての DBDS に影響を与えます。

ICREQ

DBDS の初期ロード (PROCOPT=L) または再編成のあとに、DBDS レコード内の IC NEEDED をオンにし、DB レコード内の IMAGE COPY NEEDED COUNT を増分するデフォルト値。

NOICREQ

IC NEEDED 要求をオフにします。DBDS の初期ロードまたは REORG のあとに、DBRC は DBDS レコード内の IC NEEDED をオンにすることも、DB レコード内の IMAGE COPY NEEDED COUNT を増分することもしません。IC NEEDED フラグは、CHANGE.DBDS ICON コマンドを使用して手動でもセットすることができます。

USERRCOV

高速機能データベース用の更新割り振りを RECON データ・セットに記録しないことを指定します。しかし、データベース更新はログに記録され、DBRC はデータベースのリカバリーを管理できなくなります。リカバリーは、ユーザーが手動で生成した JCL を使用すれば許可されます。このキーワードは、TYPEFP にのみ有効です。

注:

1. USERRCOV の使用は、データベースのオープン時間を減らす重大な必要性があり、しかもリカバリー可能性が必須である場合のみにしてください。
2. USERRCOV を使用するには、ユーザーが手動で作成した独自の JCL を変更累積およびリカバリー用に提供する必要があります。

ICREQ | NOICREQ

互いに排他的なオプション・キーワードです。リカバリー不能データベースまたはユーザー・リカバリー可能データベースがロードまたは再編成されたあとに、そのイメージ・コピーを作成する要求を DBRC に実行させるかどうかを指定します。このオプションは、DB 内のすべての DBDS に影響を与えます。

ICREQ

DBDS の初期ロード (PROCOPT=L) または再編成のあとに、DBDS レコード内の IC NEEDED をオンにし、DB レコード内の IMAGE COPY NEEDED COUNT を増分するデフォルト値。

NOICREQ

IC NEEDED 要求をオフにします。DBDS の初期ロードまたは REORG のあとに、DBRC は DBDS レコード内の IC NEEDED をオンにすることも、DB レコード内の IMAGE COPY NEEDED COUNT を増分することもしません。IC NEEDED フラグは、CHANGE.DBDS ICON コマンドを使用して手動でもセットすることができます。

制約事項:

- データベースが RECOVABL または USERRCOV として登録されている場合は、そのデータベースを更新するいずれのジョブでも、VIO または DD DUMMY データ・セットを出力ログ (IEFRDER) に使用することはできません。VIO データ・セットのような一時的なログ・データ・セットは、ジョブの終了時に削除されるため、リカバリーに使用することはできません。
- リカバリー不能データベースまたはユーザー・リカバリー可能データベースの並行イメージ・コピーを作成することはできません。

SHARELVL(0 | 1 | 2 | 3)

許可サブシステムがデータベースを共用できる、データ共用のレベルを指定するのに使用するオプション・キーワード。

制約事項:

- 並行イメージ・コピーの場合は、共用レベル 1、2、または 3 を指定する必要があります。
- IRLM を使用しており、共用レベル 2 または 3 を指定した場合は、データベース・データ・セットで VSAM SHAREOPTIONS (3 3) キーワードも必ず指定してください。

TYPEIMS | TYPEFP | TYPHALDB

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データベースが全機能、高速機能 DEDB、または HALDB のいずれであるかを指定するために使用します。

TYPEIMS

データベースが DL/I データベース (非 HALDB) であることを指定します。

TYPEFP

データベースが高速機能 DEDB であることを指定します。

NOFULLSG | FULLSEG

置き換え (REPL) 呼び出しによってセグメントが更新された場合、X'5950' ログ・レコードに完全なセグメント・イメージを記録するかどうかを指定する、互いに排他的なオプション・キーワード。これらのキーワードは、高速機能 DEDB の場合にのみ有効です。この設定は、この DEDB 用のデータベース・レコードに保管され、後でこの DEDB に登録されるすべてのエリアのデフォルト設定として使用されます。

NOFULLSG

セグメントの更新された部分のみをログに記録することを指示します。これはデフォルトです。

FULLSEG

完全なセグメント・イメージをログに記録することを指示します。

TYPHALDB

データベースが DL/I データベース (HALDB) であることを指定します。

INIT.DB TYPHALDB が発行された場合、DBRC はデータベース定義へのアクセスを必要とします。IMS システムが ACB を管理している場合、定義は IMS カタログから取り出されるため、IMS カタログの名前は RECON ヘッダーまたは INIT.DB コマンド自体の中で定義されている必要があります。IMS システムで DBD、PSB、および ACB のライブラリーを使用する場合、IMS DBDLIB データ・セットがデータベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) のジョブ・ストリーム内で IMS の DD 名で識別される必要があります。

以下の追加キーワードは、TYPHALDB を指定した場合にのみ指定できません。

OLRCAP | OLRNOCAP

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB OLR がそのデータベースで実行できることを示すために使用します。

OLRCAP

HALDB OLR がそのデータベースで実行できることを、マスター・データベース・レコードとパーティション・データベース・レコード内で指定します。これはデフォルトです (ただし、PSINDEX は常に OLRNOCAP であるため例外です)。

OLRNOCAP

HALDB OLR がそのデータベースで実行できないことを、マスター・データベース・レコードとパーティション・データベース・レコード内で指定します。

NOOSAM8G | OSAM8G

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB PHDAM または PHIDAM のデータベースが OSAM データベース・データ・セット内でサポートするデータが最大 4 ギガバイトか、それとも最大 8 ギガバイトかをマスター・データベース・レコード内で指定します。これらのキーワードは、HALDB マスター・データベースに対してのみ有効です。

NOOSAM8G

OSAM データ・セットの最大容量が 4 ギガバイトのデータであることを指定します。これはデフォルトです。

OSAM8G

OSAM データ・セットの最大容量が 8 ギガバイトのデータであることを指定します。OSAM8G にすることができるのは、OLR 対応でないデータベースのみです。OSAM8G を指定する場合は、OLRNOCAP も指定する必要があります。

HIKEY | PARTSEL(*pgmname*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、HALDB が区画選択

出口を使用するか、ハイ・キー値を使用するかを示すために使用します。この設定は、INIT.PART コマンドの KEYSTRNG キーワードが区画選択出口ストリングを定義するのか、それともハイ・キー値を定義するのかを決定します。これらのキーワードは、TYPHALDB に対してのみ有効です。

PARTSEL (pgmname)

HALDB に使用する区画選択出口プログラムの名前を指定します。
pgmname 値は、有効なプログラム名として、最大 8 文字の長さの値を指定します。

HIKEY

この HALDB がハイ・キー値を使用することを指定します。

PARTSEL も HIKEY も省略すると、HALDB は HALDB DBD に指定されている区画選択出口モジュール名 (PSNAME) を使用します。DBD に区画選択出口モジュール名が指定されていなかった場合は、HALDB はハイ・キー値を使用します。

SHARELVL 1 DB レコードの作成の例

この例では、RECON データ・セットに新しいデータベース・レコードを作成します。このデータベースの共用レベルは 1 です。

```
//INITDB JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.DB DBD(THISDB) SHARELVL(1) TYPEFP
/*
```




デフォルトのカタログ名の代わりに DBDLIB を使用する例

```
//INITDB JOB
:
//IMS DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN DD *
INIT.DB DBD(DBD002) NOCATALG
/*
```

デフォルトのカタログ名の代わりにカタログ名 GREGCD00 を使用する例

```
//INITDB JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.DB DBD(DBD002) CATALOG(GREGCD00)
/*
```

関連概念:

-  共用オプションによる VSAM データ・セット定義の調整 (システム管理)
-  データ共用のレベル (システム管理)
-  リカバリー不能な全機能データベース (データベース管理)

関連資料:

- ➡ /RMxxxxxx コマンド (コマンド)
- 342 ページの『INIT.PART コマンド』
- 『INIT.DBDS コマンド』
- 362 ページの『LIST.DB コマンド』

INIT.DBDS コマンド

INIT.DBDS コマンドは、DBDS または DEDB エリアを登録するときに使用します。

DBDS は、他のコマンドが所定の DBDS または DEDB エリアで機能するために、存在している必要があります。DBDS を登録するために、DBRC は IMS カタログまたは IMS DBDLIB データ・セットを調べて、次のことを行います。

- DBDS または DEDB エリアが存在するかどうか検査する。
- DBDS のデータ・セット ID (DSID)、データ・セット編成、およびデータベース編成を取得する。

ACB の IMS 管理が使用可能である場合、DBRC は、INIT.DBDS コマンドの CATALOG キーワードで指定された IMS カタログ、またはデフォルト IMS カタログとして RECON ヘッダー内に記録されている IMS カタログを調べます。

インストール済み環境が、IMS カタログの代わりに ACB ライブラリーを使用して ACB を管理する場合、DBRC は IMS DBDLIB データ・セットを調べます。IMS DBDLIB データ・セットは、データベース・リカバリー管理ユーティリティ (DSPURX00) のジョブ・ストリームで、IMS という DD 名で識別する必要があります。

INIT.DBDS コマンドをデータベースの使用中に実行すると、コマンドは失敗します。

INIT.DBDS コマンドを発行すると、DBRC は RECON の DBDS レコード内のイメージ・コピー状況を IC RECOMMENDED に設定します。DBDS を登録した後、次のどちらかの操作を行うことにより、RECON 内のイメージ・コピー状況をリセットできます。

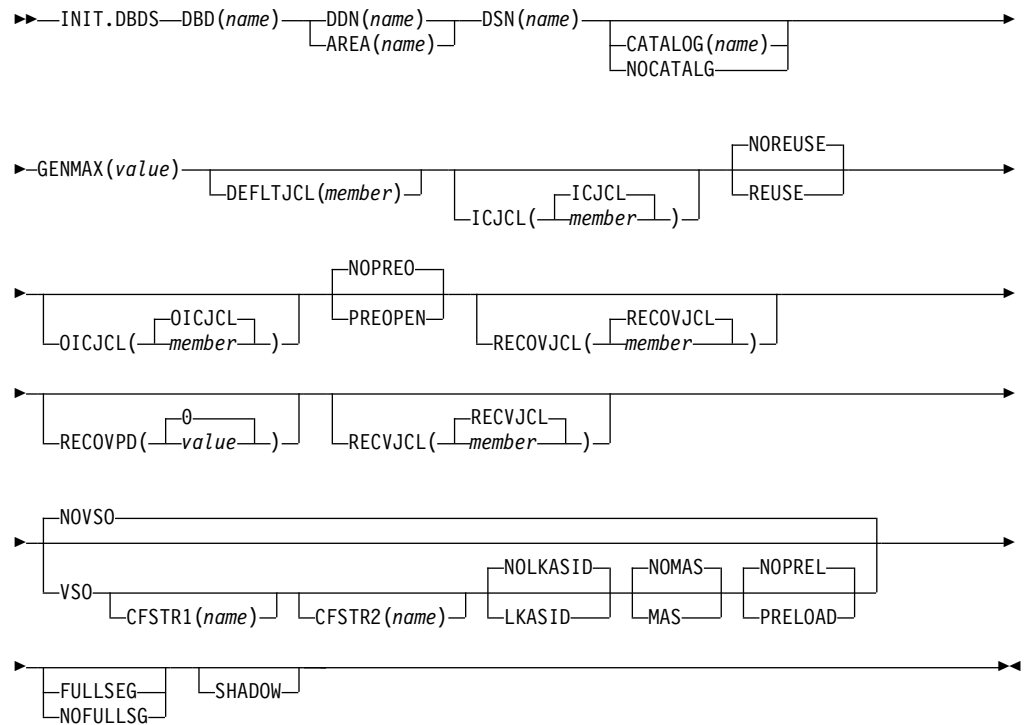
- イメージ・コピー・ユーティリティを使用してバックアップ・コピーを作成する。
- CHANGE.DBDS コマンドを使用して RECON データ・セット内のイメージ・コピー状況を変更する。

HALDB データベースの制約事項: INIT.DBDS コマンドを使用して HALDB データベースの DBDS を登録することはできません。代わりに、HALDB 区画定義ユーティリティ、または INIT.DB および INIT.PART コマンドを使用する必要があります。

サブセクション:

- 331 ページの『構文』
- 331 ページの『キーワード』
- 336 ページの『DBRC のリカバリー制御を開始するための DBDS 識別の例』

構文



キーワード

DBD(*name*)

DBRC に識別される DBDS または DEDB エリアのデータベース名を指定する必須キーワード。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、DBRC に識別される DBDS または DEDB エリアの DD 名を指定するために使用します。

DSN(*name*)

DBRC に識別される DBDS のデータ・セット名を指定するために、DDN(*name*) キーワードとともに使用する必須キーワード。このキーワードを DEDB エリアで使用することはできません。

DBDS が DBRC に登録されている ADS の 1 つである場合は、このキーワードは指定しないでください。その代わりに INIT.ADS コマンドで、データ・セット名を指定してください。

CATALOG(*name*) | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、INIT.DBDS コマンドの実行中にカタログを使用するかどうかを示すために使用します。これらのパラメーターが省略された場合、IMS は RECON ヘッダー内で定義されたデフォルト・カタログ名を使用します。デフォルト名がヌルの場合は、DBDLIB が使用されます。

データベース定義言語 (DDL) を使用して定義されたデータベースの場合、DBRC はカタログにアクセスする必要があります。

NOCATALOG

IMS カタログの代わりに DBD ライブラリーを INIT.DBDS コマンドで使用することを指定します。

CATALOG(*name*)

DBD ライブラリーの代わりに、指定された IMS カタログを INIT.DBDS コマンドで使用することを指定します。

name は、RECON データ・セット内に登録されている HALDB IMS カタログ・データベースの名前に一致する 8 文字の英数字ストリングとして指定します。8 文字未満のすべての IMS カタログ名には、ブランクが埋め込まれます。

IMS カタログ名は、INIT.DBDS コマンドの実行中に検証されます。カタログが存在しないか、HALDB データベースとして定義されていない場合、コマンドは失敗します。

GENMAX(*value*)

識別された DBDS 用に DBRC が維持するイメージ・コピーの最大数を指定する必須キーワード。

開始されている DBDS に対してデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するたびに、新しいイメージ・コピーが RECON データ・セットで定義されます。NOREUSE キーワードで DBDS を識別した場合、イメージ・コピーの数が GENMAX 値を超えると、リカバリ期間を過ぎた DBDS の最も古いイメージ・コピーが削除されます。DBDS を REUSE キーワードで識別する場合、リカバリ期間を過ぎた最も古いイメージ・コピーが再利用されます。

value は 2 から 255 の 10 進数でなければなりません。

DEFLTJCL(*member*)

DBDS 用の暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定するオプション・キーワード。指定されたメンバーは、GENJCL.IC、GENJCL.OIC、および GENJCL.RECOV コマンドにより、定義されたキーワードを変換するために使用されます。

ICJCL(ICJCL | *member*)

基幹 JCL の入っている区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。GENJCL.IC コマンドを実行すると、DBRC は、このメンバーを使用して、識別された DBDS または DEDB エリア用にデータベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するための JCL を生成します。

NOREUSE | REUSE

互いに排他的なオプション・キーワードであり、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティが、以前使用したイメージ・コピー・データ・セットを再利用するかどうかを指定するために使用します。

NOREUSE

サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティが、この DBDS 用にイメージ・コピー・データ・セットを自動的に再利用できないようにします。

NOREUSE オプションが HISAM データベースに指定されている場合、HISAM 再ロード・ユーティリティの終了時に、「イメージ・コピー必

要」フラグはオンになりません。 HISAM データベースの再ロード中に使用される入力データ・セットが、イメージ・コピー・データ・セットとして使用されます。

REUSE

GENJCL.IC コマンドまたは GENJCL.OIC コマンドがジョブを生成し、このジョブによって、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティは DBDS の GENMAX 値を超えた場合に、最も古いイメージ・コピー・データ・セットを (定義される DBDS 用に) 再利用できるようになります。 REUSE の場合は、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティが将来利用できるように、空のイメージ・コピー・データ・セットを作成する必要があります。さらに、INIT.IC コマンドを使用して、それらのデータ・セットの存在を RECON データ・セットに記録する必要があります。 NOREUSE キーワードでは、このようなアクションは禁止されます。

HSSP イメージ・コピー処理を行う場合は、REUSE を指定する必要があります。再利用とは、イメージ・コピー・ジョブが、最も古い DBDS イメージ・コピー・データ・セットのものと同じボリューム、データ・セット名、および新しいイメージ・コピー・データ・セット用の RECON データ・セットのレコードを使用することを意味します。

OICJCL(OICJCL | member)

基幹 JCL の入っている区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。このキーワードを DEDB エリアで使用することはできません。 GENJCL.OIC コマンドを実行すると、DBRC は、このメンバーを使用して、識別された DBDS 用にオンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティを実行するための JCL を生成します。

NOPREO | PREOPEN

互いに排他的なオプション・キーワードであり、エリアのオープンを、制御領域の次の初期設定に続く最初のチェックポイントの後にするか、または /START AREA コマンドが次に処理される時にするかを指定するために使用します。 NOPREO がデフォルトです。ただし、PRELOAD を指定した場合は、PREOPEN がデフォルトになります。

NOPREO

エリアの事前オープンが、次回、制御領域が開始される時、または /START AREA コマンドが処理される時に行われないことを示します。 NOPREO を PRELOAD と一緒に指定することはできません。

PREOPEN

次回、制御領域が開始される時、または /STA AREA コマンドが処理される時に、エリアのオープンが行われることを示します。このオプションは、VSO エリアと非 VSO エリアの両方に有効です。

RECOVJCL(RECOVJCL | member)

基幹 JCL の区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。 GENJCL.RECOV コマンドを実行すると、DBRC は、このメンバーを使用して、識別された DBDS またはエリア用にデータベース・リカバリー・ユーティリティを実行する JCL を生成します。

RECOVPD(0 | value)

特定の DBDS や DEDB エリアのリカバリー期間を指定するために使用するオプション・キーワード。

リカバリー期間は、DBRC が RECON データ・セット内にリカバリー情報を維持する現在日付までの時間の長さです。例えば、ある DBDS またはエリアのリカバリー期間が 14 日であるとする、DBRC は十分なリカバリー世代情報を少なくとも 14 日間は維持していることとなります。

リカバリー期間は、現在日付から最も古いイメージ・コピーの日付を引いた値として計算します。イメージ・コピーの日付が RECOVPD(value) に指定された日数の中に入る場合、DBRC はそれらのイメージ・コピーを RECON データ・セットに保持します。

value には、イメージ・コピーを RECON データ・セットに保持する日数を表す 0 から 999 の 10 進数を指定します。0 (デフォルト) を指定した場合、リカバリー期間はありません。

RECVJCL(RECVJCL | member)

GENJCL.RECEIVE コマンドで使用される基幹 JCL メンバーの名前を指定するオプション・キーワード。

RECVJCL は、DL/I DBDS および高速機能エリアについて指定することができます。

NOVSO | VSO

互いに排他的なオプション・キーワードであり、次回に制御領域が初期化される時、または /STA AREA コマンドが次回に処理される時に、エリアを仮想記憶域に常駐させるかどうかを指定するために使用します。

NOVSO

このエリアを仮想記憶域に常駐させないことを示します。

VSO

エリアを仮想記憶域に常駐させることを示します。SHARELVL(0 | 1) で定義されたエリアの読み取りおよび書き込みは、z/OS データ・スペースに対して行われます。SHARELVL(2 | 3) で定義されたエリアは、カップリング・ファシリティを使用して、接続されたサブシステム間でデータを共有します。

CFSTR1(name)

識別されたエリアの最初のカップリング・ファシリティ構造の名前を指定するオプション・キーワード。z/OS カップリング・ファシリティ構造の命名規則を厳守する必要があります。このキーワードは、SHARELVL(2|3) を指定して定義した DEDB の VSO エリアについてのみ有効です。VSO が指定され、DEDB が SHARELVL(2 | 3) の場合は、このエリア名がデフォルトです。

CFSTR2(name)

識別されたエリアの 2 番目のカップリング・ファシリティ構造の名前を指定するオプション・キーワード。z/OS カップリング・ファシリティ構造の命名規則を厳守する必要があります。このキーワードは、SHARELVL(2|3) を指定して定義した DEDB の VSO エリアについてのみ有効です。デフォルトはありません。

制約事項: CFSTR1 キーワードを指定していない場合、この名前をエリア名にすることはできません。MAS が指定されている場合、CFSTR2 を指定することはできません。

NOLKASID | LKASID

互いに排他的なオプション・キーワードであり、指定されたエリアのローカル・データ・キャッシングを、読み取り要求でバッファ・ルックアサイド用に使用するかどうかを指定するために使用します。LKASID オプションは、SHARELVL(2 | 3) VSO エリアについてのみ有効です。

NOLKASID

このエリアに対する読み取り要求で、バッファ・ルックアサイドを実行しないことを示します。NOLKASID がデフォルトです。

LKASID

このエリアに対する読み取り要求で、バッファ・ルックアサイドを実行することを示します。

単一エリア構造を使用する VSO DEDB エリアの場合、そのエリア用に RECON データ・セットに定義される LKASID 値が、DFSVSMxx PROCLIB メンバーの DEDB LKASID 値より優先されます。

多重エリア構造を使用する VSO DEDB エリアの場合、LKASID または NOLKASID は DFSVSMxx PROCLIB メンバーを使用して指定する必要があります。エリア用に RECON データ・セットに定義される LKASID 値は無視されます。

NOMAS | MAS

互いに排他的なオプション・キーワードであり、共用 VSO を複数エリア・カップリング・ファシリティ構造内に常駐させるかどうかを指定するために使用します。

NOMAS

カップリング・ファシリティ構造 (1 つ以上) には、このエリアのみのデータを含めることを示します。NOMAS はデフォルトです。

MAS

エリアを複数エリア・カップリング・ファシリティ構造に常駐させることを示します。MAS が指定されている場合、第 2 のカップリング・ファシリティ構造 (CFSTR2) を指定することはできません。

NOPREL | PRELOAD

互いに排他的なオプション・キーワードであり、次のオープン時に VSO エリアをロードするかどうかを指定するために使用します。

NOPREL

このエリアを次にオープンするときに、それをデータ・スペースまたはカップリング・ファシリティ構造内にロードしないことを表します。VSO エリアでは、CI は、初めて読み取られた時点で、データ・スペースにコピーされます。

PRELOAD

このエリアを次にオープンするときに、それをデータ・スペースまたはカップリング・ファシリティ構造内にロードすることを表します。また、このオプションを選択すると、エリアの事前オープンが起こります。

FULLSEG | NOFULLSG

置き換え (REPL) 呼び出しによってセグメントが更新された場合、X'5950' ログ・レコードに完全なセグメント・イメージを記録するかどうかを指定する、互いに排他的なオプション・キーワード。これらのキーワードは、高速機能 DEDB の場合にのみ有効です。

これらのキーワードの 1 つが指定された場合、INIT.DB コマンドの設定はオーバーライドされます。これらのキーワードのどちらも指定されていない場合は、DEDB のデータベース・レコードに設定されているデフォルト値が使用されます。INIT.DB コマンドを参照してください。

FULLSEG

完全なセグメント・イメージをログに記録することを指示します。

NOFULLSG

セグメントの更新された部分のみをログに記録することを指示します。

SHADOW

DEDB 変更ユーティリティの ADDAREA 機能によって DEDB データベースの末尾に追加された新しい DEDB エリアのシャドー・エリアを、登録するかどうかを指定するために使用するオプション・キーワード。このキーワードは、高速機能 DEDB に対してのみ有効です。

DEDB 変更機能は、IMS システムがシャドー・エリアにアクセスできるようにするために不可欠です。

DBRC のリカバリー制御を開始するための DBDS 識別の例

この例では、DBDS が DBRC に登録されます。IMS DBDLIB データ・セットにアクセスして、DBDS のデータ・セット ID、データ・セット編成、およびデータベース編成を取得するには、IMS DD ステートメントが必要です。DBDS は DBD、DDN、および DSN キーワードによって識別され、IMS システムによってのみアクセスされます。イメージ・コピー・データ・セット (DBDS の) は再利用可能で、DBRC は最大 2 つのイメージ・コピーを維持します。ICJCL キーワードは、データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ用の JCL の生成に使用される、基幹 JCL の区画データ・セットのメンバーを指定します。RECOVJCL キーワードは、データベース・リカバリー・ユーティリティに対して同じことを行います。

```
//INITDBDS JOB
:
//IMS      DD  DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN   DD  *
          INIT.DBDS  DBD(DBD002) DDN(DDN003) GENMAX(2) REUSE -
                    ICJCL(ICJCLX) RECOVJCL(RECOVJCX) DSN(DSN003)
/*
```


デフォルトのカタログ名の代わりに **DBDLIB** を使用する例


```
//INITDBDS JOB
:
//IMS      DD  DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN    DD  *
INIT.DBDS  DBD(DBD002) DDN(DDN003) GENMAX(2) REUSE -
            ICJCL(ICJCLX) RECOVJCL(RECOVJCX) DSN(DSN003) -
            NOCATALG
/*
```

Example using the catalog name GREGCD00 instead of the default catalog name.

```
//INITDBDS JOB
:
//SYSIN    DD  *
INIT.DBDS  DBD(DBD002) DDN(DDN003) GENMAX(2) REUSE -
            ICJCL(ICJCLX) RECOVJCL(RECOVJCX) DSN(DSN003) -
            CATALOG(GREGCD00)
/*
```

関連概念:


 VSO DEDB エリアの定義 (データベース管理)

 イメージ・コピー・データ・セットおよび GENMAX のリカバリー期間 (システム管理)

関連資料:

342 ページの『INIT.PART コマンド』

365 ページの『LIST.DBDS コマンド』

 /RMxxxxxx コマンド (コマンド)

93 ページの『CHANGE.DBDS コマンド』

INIT.DBDSGRP コマンド

INIT.DBDSGRP コマンドは、DBDS グループ (DBDS または DEDB エリア)、DB グループ (DL/I データベースまたは DEDB エリア)、またはリカバリー・グループ (DL/I データベースまたは DEDB エリア) を定義するために使用します。

DBDS グループは、例えば /DBR コマンドの場合のように、DB グループを使用できるところであれば、どこでも使用することができますが、この方法は非効率的です。そのように使用するには、別個の DB グループを定義してください。

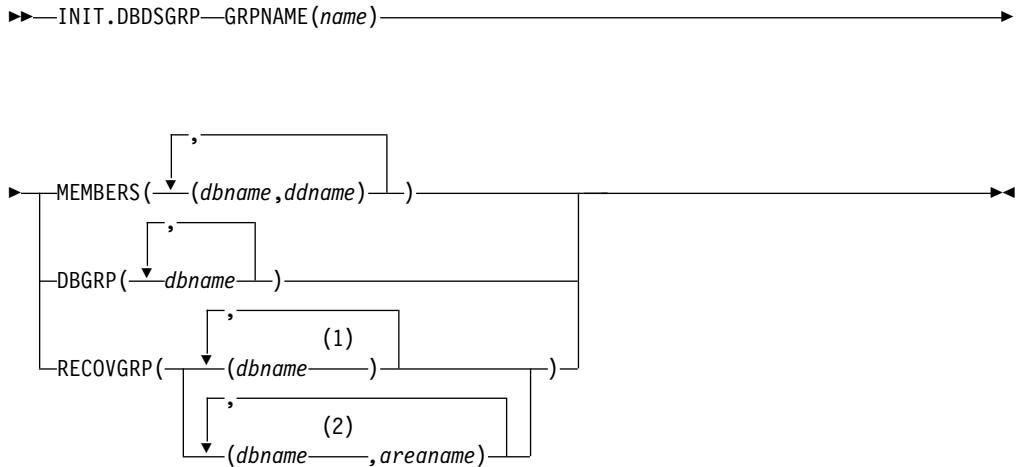
リカバリー・グループはデータベース・リカバリーで使用されます。また、DB グループを使用できるところであれば、どこでも使用することができます。

DBDS グループまたはリカバリー・グループを定義する場合は、そのグループのメンバーを RECON データ・セットに登録する必要があります。DB グループのメンバーを RECON データ・セットに登録することは、オプションです。DBDS グループ、リカバリー・グループ、または DB グループのメンバーに登録するには、適切な INIT コマンドを使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 339 ページの『DBDS グループの作成の例』

構文



注:

- 1 全機能データベース名
- 2 高速機能 DEDB 名

キーワード

GRPNAME (name)

作成される DBDSGRP を示す必須キーワード。名前には 1 から 8 文字の英数字を指定することができますが、既存の DBDSGRP または CAGRP レコードと同じ名前にすることはできません。

MEMBERS (dbname, ddname) | DBGRP (dbname) | RECOVGRP (dbname, areaname)

互いに排他的な必須キーワードであり、新しいグループに含めるメンバーを識別します。1 つのグループに最大 32767 のメンバーを含めることができます。

MEMBERS (dbname, ddname)

グループが DBDS グループであることを示します。このキーワードは、1 つ以上の DBDS あるいは DEDB エリアを、それぞれ、括弧で囲まれた 1 対の名前で示します。ここで *dbname* はデータベース名、*ddname* は DD ステートメント名または DEDB エリア名です。

いずれメンバーも、複数の DBDS グループに所属させることができます。

DBGRP (dbname)

グループが DB グループであることを示し、1 つ以上のデータベースあるいはエリア名を示します。いずれのメンバーも、複数の DB グループに所属させることができます。

RECOVGRP (dbname, areaname)

グループがリカバリー・グループであることを示します。リカバリー・グループとは、関連すると考えられる全機能データベースまたは DEDB エリアのグループです。

DEDB エリアはリカバリー・グループの一部にすることができますが、DEDB データベースはできません。HALDB データベースはリカバリー・グループの一部にすることができますが、個々の HALDB 区画はできません。

グループのメンバーの 1 つでタイム・スタンプ・リカバリーを実行する場合、データベース・リカバリー・ツールによっては、グループのすべてのメンバーを同じ時刻までリカバリーしなければならないものがあります。それ以外の点では、リカバリー・グループは DB グループと同様に使用することができます。

DEDB エリアをリカバリー・グループに追加する場合は、DEDB エリアとそのエリアが属している DEDB データベースの両方を指定する必要があります。つまり、DEDB エリアをリカバリー・グループに追加する場合は、*dbname* と *areaname* の両方を指定する必要があります。*areaname* のみを指定することはできません。

全機能データベースをリカバリー・グループに追加する場合は、*areaname* は高速機能データベースにのみ適用されるため、*areaname* を指定する必要はありません。

データベースまたはエリアは、1 つのリカバリー・グループにしか属することができません。RECOVGRP によって指定されたメンバーのいずれかが、既に別のリカバリー・グループに属している場合、このコマンドは失敗します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、*dbname* には HALDB 区画または HALDB マスター・データベースの名前を指定します。HALDB データベース名を指定する場合は、以下の表に定義されている INIT.DBDSGRP コマンドのみを使用してください。

表 14. INIT.DBDSGRP コマンド・キーワードでサポートされる HALDB データベースの DB 名仕様

INIT.DBDSGRP	<i>dbname</i> = HALDB マスター	<i>dbname</i> = 区画
MEMBERS	なし	あり
DBGRP	あり	あり
RECOVGRP	あり	なし

DBDS グループの作成の例

この例では、DBDS のグループを定義します。

```
//INITDBGRP JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.DBDSGRP GRPNAME(DBDSG1) -
MEMBERS((DB1,DD1),(DB2,DD2),(DB3,DD3))
/*
```

関連資料:

324 ページの『INIT.DB コマンド』

330 ページの『INIT.DBDS コマンド』

INIT.IC コマンド

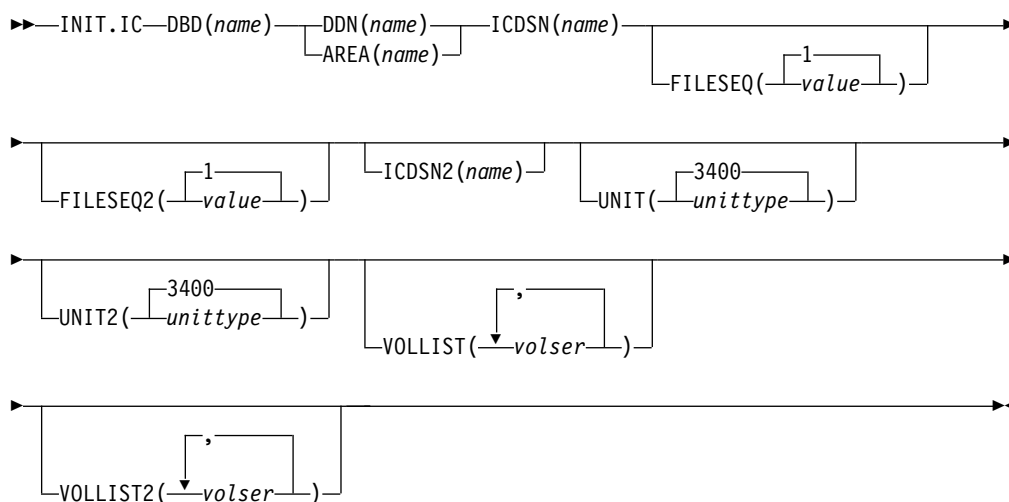
INIT.IC コマンドは、RECON データ・セットにイメージ・コピー・レコードを作成するときに使用します。これらのイメージ・コピー・レコードは、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティーのその後の実行中に使用可能なイメージ・コピー・データ・セットを定義します。

それぞれの INIT.IC コマンドが、1 つのイメージ・コピー・レコードを作成します。イメージ・コピー・データ・セットをその後の使用のために定義できるのは、対応する DBDS または DEDB エリアが INIT.DBDS コマンドにより RECON データ・セットで識別されたときに、REUSE キーワードを指定していた場合のみです。所定の DBDS または DEDB エリアで使用されるイメージ・コピー・レコードの最大数は、指定された DBDS または DEDB エリアの GENMAX の値によって決まります。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 342 ページの『ICDSN を定義するレコード作成の例』

構文



キーワード

DBD(name)

作成されるイメージ・コピー・データ・セットを、関連する DBDS または DEDB エリアのデータベース名で示す必須キーワード。

HALDB データベースの制約事項: INIT.IC コマンドの場合、*name* には HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(name) | AREA(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、作成されるイメージ・コピー・データ・セットを示すために使用します。 *name* は、関連する DBDS または DEDB エリアのデータ・セットの DD 名です。

ICDSN(name)

イメージ・コピー・レコードを作成するイメージ・コピー・データ・セットの名前を指定する必須キーワード。 *name* には 44 文字まで指定することができます。この名前に、イメージ・コピー・データ・セットのデフォルトの命名規則を使用することができます。

FILESEQ(1 | value)

イメージ・コピー・レコードを作成するイメージ・コピー・データ・セットのファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワード。このキーワードを指定できるのは、VOLLIST キーワードを指定していて、かつファイル・シーケンス番号が 1 でない場合のみです。 *value* は 1 から 9999 の 10 進数でなければなりません。

FILESEQ2(1 | value)

イメージ・コピー・レコードを作成する重複イメージ・コピー・データ・セットのファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワード。このキーワードを指定できるのは、重複イメージ・コピー・データ・セットを作成し、VOLLIST2 キーワードを指定し、かつファイル・シーケンス番号が 1 でない場合のみです。可変フィールドに指定する値は 1 から 9999 の 10 進数です。

ICDSN2(name)

イメージ・コピー・レコードを作成する重複イメージ・コピー・データ・セットの名前を指定するオプション・キーワード。 *name* には 44 文字まで指定することができます。この名前に、重複イメージ・コピー・データ・セットのデフォルトの命名規則が使用できます。

UNIT(3400 | unittype)

定義するイメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

UNIT キーワードを指定する場合は、VOLLIST キーワードも指定する必要があります。

UNIT2(3400 | unittype)

定義する重複イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定するオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(volser)

イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームのボリューム通し番号を指定するために使用するオプション・キーワード。可変フィールドには、1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。各ボリューム通し番号は、6 文字までの英数字を指定でき、ボリューム通し番号に関する z/OS® JCL 規則に従う必要があります。イメージ・コピー・データ・セットがカタログ済みとして扱われない場合 (RECON 状況レコードに示されます)、VOLLIST は必須です。

VOLLIST2(volser)

重複イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームのボリューム通し番号を指定するために使用するオプション・キーワード。可変フィールドには、1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。各ボリューム通し番号は、6 文字までの英数字を指定でき、ボリューム通し番号に関する z/OS® JCL 規則に従う必要があります。VOLLIST2 は、ICDSN2 が指定されている場合のみ許可されます。イメージ・コピー・データ・セットがカタログ済みとして扱われない場合 (RECON 状況レコードに示されます)、VOLLIST2 は必須です。

ICDSN を定義するレコード作成の例

この例では、DBDS のイメージ・コピーの作成に使用するイメージ・コピー・データ・セットを定義するレコードを RECON データ・セットに作成します。イメージ・コピー・データ・セットの名前は ICDSN キーワードで指定します。この例では、デフォルトの命名規則を使用して、完全修飾データ・セット名を生成します。イメージ・コピー・データ・セットが常駐するボリュームは VOLLIST キーワードで指定し、そのファイル・シーケンス番号は FILESEQ キーワードで指定します。

```
//INITIC JOB
:
//SYSIN DD *
      INIT.IC      DBD(DB1) DDN(DD1) -
                  ICDSN(IMS.*.ICDSN2) -
                  VOLLIST(VOL003) FILESEQ(5)
/*
```

INIT.PART コマンド

HALDB 区画を登録するには、INIT.PART コマンドを使用します。

このコマンドは、RECON HALDB 区画構造 (PART レコード、区画 DB レコード、および DBD 仕様に応じて 1 つ以上の DBDS レコード) を作成します。

INIT.PART コマンドは、HALDB が HALDB 区画定義ユーティリティーに使用されていると失敗します。

INIT.PART コマンドの場合、DBRC は IMS カタログまたは IMS DBDLIB のいずれかのデータベース定義を参照します。

ACB の IMS 管理が使用可能な場合、DBRC は IMS カタログを参照します。IMS カタログの名前が INIT.PART コマンドの CATALOG キーワードで指定されているか、デフォルトの IMS カタログ名が RECON ヘッダー内に記録されている必要があります。

インストール済み環境が、IMS カタログの代わりに ACB ライブラリーを使用して ACB を管理する場合、DBRC は IMS DBDLIB データ・セットを参照します。IMS DBDLIB データ・セットは、データベース・リカバリー管理ユーティリティー (DSPURX00) のジョブ・ストリームで、IMS という DD 名で識別する必要があります。

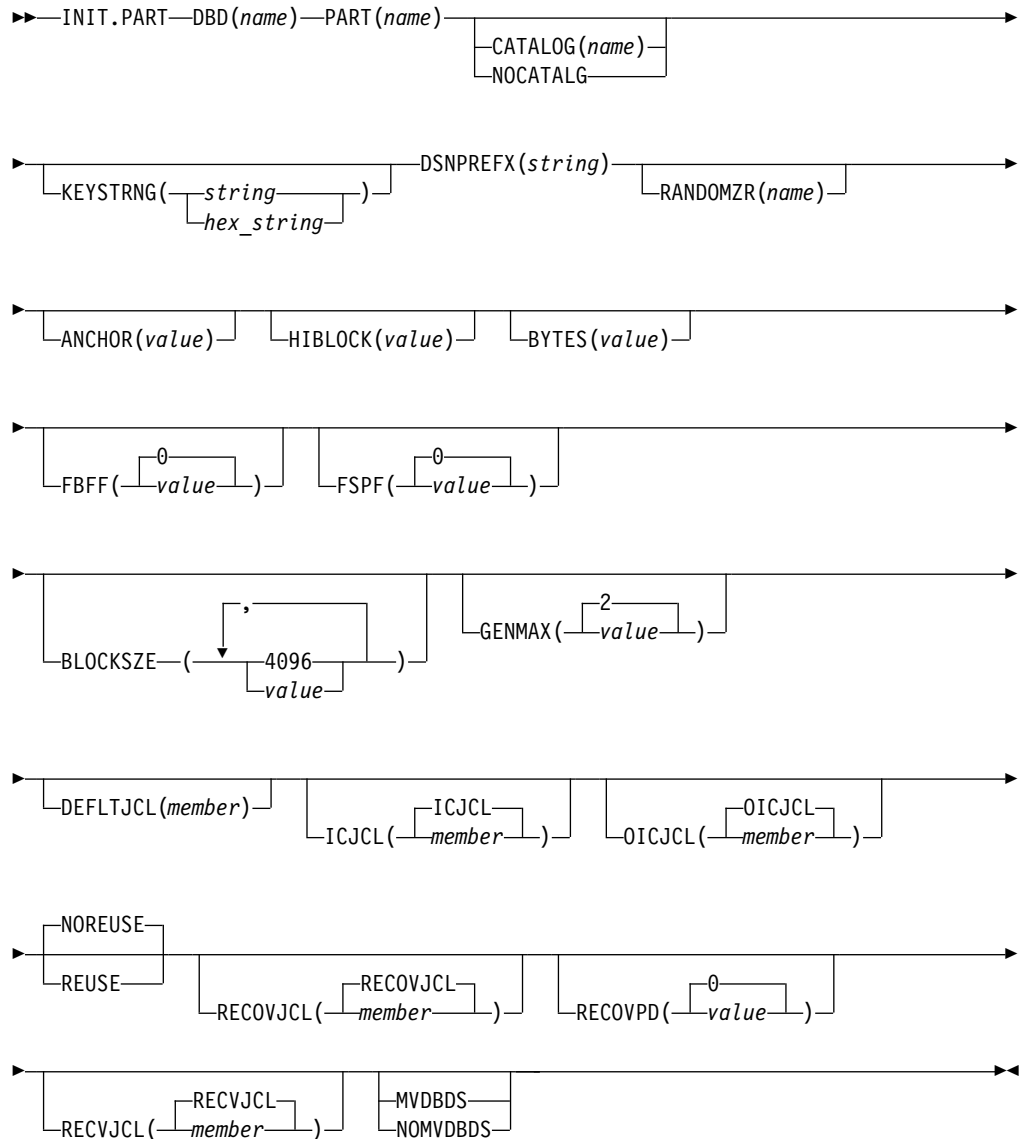
このコマンドの一部のキーワードは、このコマンドの結果として作成されるすべての区画 DBDS に適用されます。これは HALDB 区画定義ユーティリティーとは異なります。HALDB 区画定義ユーティリティーでは、作成される区画 DBDS ごとに

個別にキーワードを指定できます。これらのキーワードは、CHANGE.DBDS コマンドを使用して、後で個別に変更することができます。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 348 ページの『区画の作成の例』

構文



キーワード

DBD(*name*)

区画定義の対象となる HALDB を識別するのに使用する必須キーワード。

PART(*name*)

HALDB 区画名を識別するのに使用する必須キーワード。最長 7 文字の英数字の値です。最初の文字は英字にします。

CATALOG(*name*) | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、INIT.PART コマンドの実行中にカタログを使用するかどうかを示すために使用します。これらのパラメーターが省略された場合、IMS は RECON ヘッダー内で定義されたデフォルト・カタログ名を使用します。デフォルト名がヌルの場合は、DBDLIB が使用されます。

データベース定義言語 (DDL) を使用して定義されたデータベースの場合、DBRC はカタログにアクセスする必要があります。

CATALOG(*name*)

DBD ライブラリーの代わりに、指定された IMS カタログを INIT.PART コマンドで使用することを指定します。

name は、RECON データ・セット内に登録されている HALDB IMS カタログ・データベースの名前に一致する 8 文字の英数字ストリングとして指定します。8 文字未満のすべてのカタログ名には、ブランクが埋め込まれます。

カタログ名は、INIT.PART コマンドの実行中に検証されます。カタログが存在しないか、HALDB データベースとして定義されていない場合、コマンドは失敗します。

NOCATALOG

IMS カタログの代わりに DBD ライブラリーを INIT.PART コマンドで使用することを指定します。

KEYSTRNG(*string*) | KEYSTRNG(*hex_string*)

HALDB 区画ハイ・キー値の指定、または区画選択出口が使用するための選択ストリングを指定するためのオプション・キーワードです。最長 256 文字の文字値または最長 512 文字の 16 進値で指定します。文字値は英数字にします (埋め込まれたブランクやコンマを使用するには、ストリングを単一引用符で囲む必要があります)。文字ストリングは、単一引用符で囲まない場合は、大文字に変換されます。16 進値は、単一引用符で囲み、先頭に X の文字を置きます。例えば、KEYSTRNG(X'D7C1D9E3D2C5E8') のようにします。

HALDB マスター定義で区画選択ルーチンが指定されていない場合は、必ず、KEYSTRNG で区画ハイ・キーを定義します。ハイ・キーの長さは、ルート・キーよりも長くはできません。ハイ・キーの長さが、定義されているルート・キー長より短い場合は、ハイ・キー値に、定義されているルート・キー長まで X'FF' が埋め込まれます。区画ハイ・キー値は、HALDB 内の各区画ごとに固有である必要があります。

HALDB マスター定義で区画選択ルーチンが指定されている場合は、KEYSTRNG で区画選択ルーチンへ渡される区画選択ストリングを定義します。使用しているシステムの区画選択ルーチンは、区画選択ストリングを必要とする場合としない場合があります。必要とする場合は、使用しているシステムがストリングの内容を決定します。ストリングは、最長 256 バイトの単なる文字情

報です。ストリングに印刷不能な文字を含む場合は、16 進数表記で識別する必要があります。16 進数の文字ストリングは、単一引用符で囲み、接頭部に X を付けます。

DSNPREFX(string)

HALDB 内の区画データ・セットについて、データ・セット名の接頭部を指定するための必須キーワードです。指定される値は、最大 37 文字の有効な JCL データ・セット名です。

RANDOMZR(name)

HALDB PHDAM データベース専用のランダム化モジュール名を指定するためのオプション・キーワードです。RANDOMZR を省略すると、ランダム化モジュールの名前は、DBD から獲得します。ランダム化モジュールは、ルート・セグメントを PHDAM HALDB に置いたり、PHDAM HALDB から取り出したりするための制御をします。

ANCHOR(value)

PHDAM HALDB のルート・アドレス可能域内で制御インターバルまたは制御ブロックに必要なルート・アンカー・ポイント (RAP) の数を指定するためのオプション・キーワードです。このキーワードは、PHDAM HALDB データベース専用です。

1 から 255 の値を指定します。代表的な値は 1 から 5 です。ANCHOR を省略すると、値は、DBD から獲得します。

HIBLOCK(value)

ランダム化モジュールがこの HALDB データベースに対して生成できる最大相対ブロック番号値を指定するために使用するオプション・キーワード。このキーワードは、PHDAM HALDB データベース専用です。

HIBLOCK 値は、PHDAM HALDB のルート・アドレス可能域内の制御インターバルまたはブロックの数を決定します。値は、1 から $16,777,215(2^{24}-1)$ の間とします。HIBLOCK を省略した場合、値は DBD から取得されます。

BYTES(value)

一連の挿入において、別の HALDB データベース・レコードの呼び出しによって中断されることなくルート・アドレス可能域に保管できる HALDB データベース・レコードの最大バイト数を指定するのに使用するオプション・キーワード。値は、0 から $16,777,215(2^{24}-1)$ の間とします。BYTES を省略した場合、値は DBD から取得されます。このキーワードは、PHDAM HALDB データベース専用です。

値 0 (ゼロ) は、すべてのバイトがアドレス可能であることを意味します。

BYTES を 0 に設定すると、DBD 定義で BYTES を省略するのと同じ働きをします。

FBFF(0 | value)

フリー・ブロック頻度係数 (fbff) を指定するためのオプション・キーワードです。この係数は、データベースのロードまたは再編成のときに、このデータ・セット・グループで、N 番目の制御インターバルまたは制御ブロックをフリー・スペースとして残すことを示します (FBFF=n の場合)。FBFF の範囲には、1 以外の 0 から 100 のすべての整数値を含みます。FBFF のデフォルト値は 0 です。

FSPF(0 | value)

フリー・スペース・パーセント係数を指定するためのオプション・キーワードです。このデータ・セット・グループで、各制御インターバルまたは制御ブロックの最低何 % をフリー・スペースとして残すかを指定します。値は、0 から 99 の任意の値です。FSPF のデフォルト値は 0 です。

BLOCKSIZE(4096 | value)

OSAM データ・セットのブロック・サイズを指定するためのオプション・キーワード。32,766 以下の偶数を指定します。ブロック・サイズの値が使用されるのは OSAM だけです。デフォルトは 4096 です。DBD に定義したデータ・セット・グループについて、それぞれ 1 つずつ、最大 10 個の値を指定できます。

GENMAX(2 | value)

区画 DBDS について DBRC が維持するイメージ・コピーの最大数を指定するオプション・キーワード。NOREUSE キーワードを使用して区画 DBDS を識別した場合、イメージ・コピーの数が GENMAX 値を超えると、リカバリー期間を過ぎた DBDS の最も古いイメージ・コピーが削除されます。REUSE キーワードを使用して識別すると、リカバリー期間を過ぎた最も古いイメージ・コピーは再利用されます。2 から 255 の間の数値を指定します。区画 DBDS は、すべてこの GENMAX 値で作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。GENMAX のデフォルト値は 2 です。

DEFLTJCL(member)

HALDB の区画 DBDS について、暗黙の基幹 JCL デフォルト・メンバーを指定するオプション・キーワード。指定されたメンバーは、GENJCL.IC、GENJCL.OIC、および GENJCL.RECOV コマンドにより、定義されたキーワードを変換するために使用されます。区画 DBDS は、すべてこの DEFLTJCL メンバーで作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

ICJCL(ICJCL | member)

基幹 JCL の入っている区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。GENJCL.IC コマンドを使用すると、GENJCL コマンド上に指定した区画 DBDS について、DBRC がこのメンバーを使用して JCL を生成し、データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ (またはデータベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティ) を実行します。区画 DBDS は、すべてこの ICJCL メンバーで作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

NOREUSE | REUSE

互いに排他的なオプション・キーワードであり、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティが、以前使用したイメージ・コピー・データ・セットを再利用するかどうかを指定するために使用します。

REUSE

REUSE を指定すると、GENJCL.IC コマンドまたは GENJCL.OIC コマンドによって生成されるジョブで、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティが、(GENJCL コマンドで指定された DBDS について) DBDS の GENMAX 値を超えた場合に、最も古いイメージ・コピー・データ・セットを再利用できるようになります。REUSE の場合は、サポートされるイ

メージ・コピー・ユーティリティーが将来利用できるように、空のイメージ・コピー・データ・セットを作成する必要があります。さらに、INIT.IC コマンドを使用して、それらのデータ・セットの存在を RECON データ・セットに記録する必要があります。

NOREUSE

NOREUSE キーワードでは、このようなアクションは禁止されます。すべての区画 DBDS は、指定されたキーワードを使用して作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

OICJCL(OICJCL | *member*)

基幹 JCL の入っている区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。GENJCL.OIC コマンドを実行すると、DBRC はこのメンバーを使用して、GENJCL コマンドで指定された区画 DBDS に対してオンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーを実行するための JCL を生成します。区画 DBDS は、すべてこの OICJCL メンバーで作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

RECOVJCL(RECOVJCL | *member*)

基幹 JCL の入っている区画データ・セットのメンバー名を指定するオプション・キーワード。GENJCL.RECOV コマンドを実行すると、DBRC はこのメンバーを使用して、GENJCL コマンドで指定された区画 DBDS に対してデータベース・リカバリー・ユーティリティーを実行するための JCL を生成します。区画 DBDS は、すべてこの RECOVJCL メンバーで作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

RECOVPD(0 | *value*)

特定の区画 DBDS のリカバリー期間を指定するために使用するオプション・キーワード。DBRC に十分なリカバリー生成情報を RECON データ・セットの中に保守させたい日数を表す 0 から 999 までの数値を指定します。デフォルト値は 0 で、リカバリー期間がないことを示します。区画 DBDS は、すべてこの RECOVPD 値で作成されます。CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

RECVJCL(RECVJCL | *member*)

GENJCL.RECEIVE コマンドで使用される基幹 JCL メンバーの名前を指定するために使用するオプション・キーワード。

区画 DBDS は、すべてこの RECVJCL メンバーで作成されます。

CHANGE.DBDS コマンドを使用すると、個別の区画 DBDS についてこの値を変更できます。

MVDBDS | NOMVDBDS

HALDB オンライン再編成を実行可能な HALDB データベースに関して、パートナー DBDS (M-V,Y) を RECON データ・セット内に作成できるようにするために使用するオプション・キーワード。

MVDBDS

HALDB が OLRCAP として定義される場合に、M-V, Y データ・セットを作成するために使用するオプション・パラメーター。このパラメーターが

INIT.PART コマンドに包含されない場合は、HALDB オンライン再編成が初めて実行されるまで、M-V, Y データ・セットは作成されません。

NOMVDBDS

OLRCAP として定義されている HALDB データベースに関し、M-V, Y データ・セットが RECON データ・セットの中で作成されないことを表すために使用するオプション・パラメーター。これは、OLRCAP である HALDB データベースのデフォルトです。

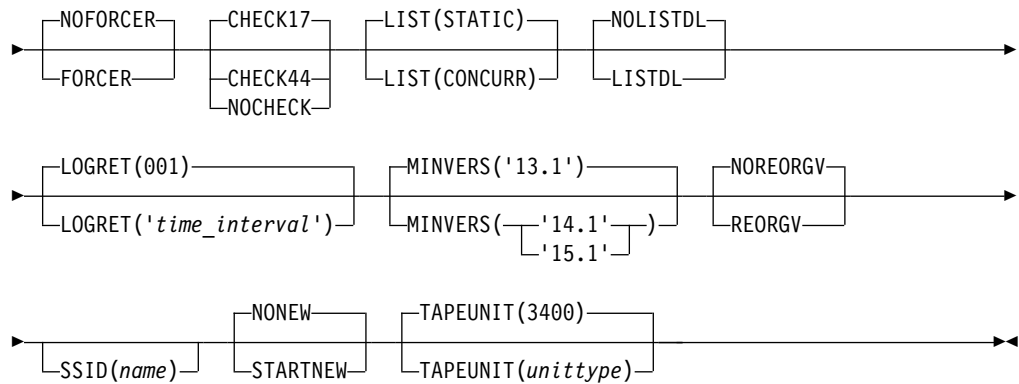
区画の作成の例

この例では、DBD キーワードによって識別された HALDB 用の区画を作成します。区画名は PART キーワードによって識別されます。HALDB は、区画選択出口を使用します。KEYSTRNG キーワードは、区画選択出口で使用される選択ストリングを定義します。このストリングの長さは 149 文字です。この文字ストリングはブランクを含んでいるので、単一引用符で囲む必要があります。末尾にある負符号 (-) は、行が継続することを示しています。選択ストリングにも負符号 (-) が含まれているので、ストリングの最初の行は 2 つの負符号 (-) (最初のもは選択ストリングの一部で、2 番目のものは継続文字) で終わっていることに注意してください。最初の DSGROUP (DBDS) には 32 000 のブロック・サイズが割り当てられ、2 番目はデフォルトの 4096 で、3 番目は 4000、残りの DSGROUP はデフォルトの 4096 になります。この区画には、作成時に区画の初期設定が必要であることを示すマークが付きます。

```
//INITPART JOB
.
.
.
//IMS      DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN    DD *
          INIT.PART DBD(DBHDOK01) PART(PDHDOKE) KEYSTRNG('ABCDEFHGHIJKL--
MNOPQRSTUVWXYZ0123456789 ABCDEFHGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789ABCDEFHGHIJ-
KLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789- ABCD--
EFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789') -
          DSNPREFIX(TESTSYS1.PROJECT) -
          BLOCKSZE(32000,,4000)
/*
|...+....1....+....2....+....3....+....4....+....5....+....6....+....7..
```

デフォルトのカタログ名の代わりに **DBDLIB** を使用する例

```
//INITPART JOB
.
.
.
//IMS      DD DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN    DD *
          INIT.PART DBD(DBHDOK01) PART(PDHDOKE) KEYSTRNG('ABCDEFHGHIJKL--
MNOPQRSTUVWXYZ0123456789 ABCDEFHGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789ABCDEFHGHIJ-
KLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789- ABCD--
EFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ0123456789') -
          DSNPREFIX(TESTSYS1.PROJECT) -
          BLOCKSZE(32000,,4000) -
          NOCATALG
/*
```

キーワード

ACCESS()

並列 RECON アクセスを使用不可または使用可能にするために使用するオプション・キーワード。

SERIAL

シリアル・モードで RECON データ・セットにアクセスすることを指定します。一度に 1 つだけの DBRC 要求を処理できます。RECON データ・セットへのアクセスは、ハードウェア予約を使用して、データ・セット・レベルでシリアルライズされます。

PARALLEL

並列モードで RECON データ・セットにアクセスすることを指定します。並列 RECON アクセスを使用すると、複数の IMS システム、バッチ・ジョブ、およびユーティリティー・ジョブからの DBRC 要求を並行して処理できます。RECON データ・セットは、Transactional VSAM モードでアクセスされます。アクセスは、カップリング・ファシリティのロッキングを使用して、VSAM レコード・レベルでシリアルライズされます。

並列 RECON アクセスを使用するには、以下の条件が満たされていることが必要です。

- 3 つの RECON データ・セットのすべてが使用可能である。
- コマンドを処理している DBRC インスタンスが SCI に登録されている (つまり、DBRC SCI 登録出口ルーチン (DSPSCIX0) または IMSPLEX 実行キーワードを介して IMSplex 名が指定されている必要があります)。

NOCATALG | CATALOG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、以下のコマンドの実行時に DBRC が IMS カタログと DBDLIB データ・セットのどちらからデータベース定義を取り出すかを示すために使用します。

CHANGE.DBDS
 CHANGE.PART
 INIT.DB
 INIT.DBDS
 INIT.PART
 NOTIFY.REORG

データベース定義言語 (DDL) を使用して定義されたデータベースの場合、DBRC は IMS カタログにアクセスする必要があります。

NOCATALG

DBDLIB データ・セットを使用することを指定します。

CATALOG(*name*)

IMS カタログを使用することを指定します。

name は、RECON データ・セット内に登録されている IMS カタログ HALDB データベースを識別する 8 文字の英数字ストリングです。8 文字未満のすべてのカタログ名には、ブランクが埋め込まれます。

RECON データ・セットの初期設定が済むまでは RECON データ・セット内にカタログを定義できないため、カタログ名は INIT.RECON コマンドの実行時に検証されません。

NOCATDS | CATDS

互いに排他的なオプション・キーワードであり、イメージ・コピー、変更累積実行、およびログ・データ・セットがカタログされているかどうかを示すために使用します。

NOCATDS

これらのデータ・セットは、カタログ状況に関係なく、カタログされているものとして扱われないことを指定します。

DBRC は、ジョブ・ファイル制御ブロックに指定されたボリューム通し番号およびファイル・シーケンス番号が、RECON データ・セットに記録されている情報と同じであるかどうかを検査します。

CATDS

これらのデータ・セットがカタログされていること、または SMS によって管理されていることを指定します。

DBRC は、データ・セットのボリューム通し番号およびファイル・シーケンス番号を検査しません。

CATDS オプションを有効にするには、データ・セットがカタログされており、そのデータ・セットのボリューム通し番号情報が JCL から省略されている必要があります。データ・セットがカタログされ、CATDS が指定され、ボリューム通し番号情報が JCL に含まれている場合は、DBRC は CATDS を無視し、JCL によってそのデータ・セットを割り振ります。通常のボリューム通し番号とファイル・シーケンス検査が行われます。

データ・セットがカタログされておらず、CATDS が有効でない場合、DBRC は JCL によってそのデータ・セットを割り振り、ボリューム通し番号とファイル・シーケンスの検査を行います。

ログ・データ・セットが SMS で管理されている場合、CATDS オプションを選択し、基幹 JCL メンバー CAJCL から %LOGVOLS キーワードを削除します。

重要: CATDS オプションは、SLDS データ・セットからの IMS の再始動に影響します。CATDS オプションは SLDS がカタログ管理システムの制御下にあることを示しているため、VOLSER がデータ・セット割り振りで IMS に戻されることはありません。SLDS データ・セットがカタログされていないと、IMS の再始動は失敗します。

CMDAUTH()

DBRC バッチ・コマンド許可を実行するかどうかを指定するオプション・キーワード。

NONE | SAF | EXIT | BOTH

互いに排他的なサブパラメーターであり、DBRC バッチ・コマンド・セキュリティ・オプションを指定するために使用します。

NONE

コマンド許可をスキップすることを指定します。これはデフォルトです。

SAF

コマンド許可のためにセキュリティ・プロダクトを呼び出すことを指定します。

EXIT

コマンド許可のために DBRC コマンド許可出口 (DSPDCAX0) を呼び出すことを指定します。

BOTH

コマンド許可のために、セキュリティ・プロダクトと DBRC コマンド許可出口 (DSPDCAX0) を呼び出すことを指定します。セキュリティ・プロダクトが先に、その後に DSPDCAX0 が呼び出されます。

safhlq

コマンド許可を定義するために z/OS System Authorization Facility (SAF) 製品 (RACF) に対して定義されるリソース名の高位修飾子。この *safhlq* を SAF、EXIT、または BOTH と一緒に指定する必要があります。 *safhlq* は、8 文字までの英数字の名前です。

rcnqual

RECON データ・セット内のストリング値を設定するために使用するオプション・パラメーター。このストリング値は、RECON に対する DBRC コマンド処理で、データ・セットがコピーであるかどうか、およびコマンド許可を実行する必要があるかどうかを判別するために使用されます。 *rcnqual* パラメーターは、SAF、EXIT、または BOTH とのみ指定できます。

rcnqual を設定する場合、ストリング値を RECON COPY1 データ・セット名のサブストリングにして、実動 RECON データ・セットに対するセキュリティが不注意で無効にされないようにする必要があります。 *rcnqual* の最後にアスタリスク (*) を使用し、引用符で囲んで指定する場合、RECON COPY1 データ・セット名は *rcnqual* で始める必要があります。そうしないと、DBRC コマンド許可は実行されません。

コマンド許可を実行するには、*rcnqual* 値は、RECON COPY1 データ・セット名のサブストリングである必要があります。理想的には、3 つすべての RECON データ・セット名に共通するサブストリングにして、RECON 再

構成が実行されたときに問題が生じないようにすべきです。 *rcnqual* は、最大 44 文字にすることができます。また、DBRC データ・セットの命名規則に従う必要があります。

DASDUNIT()

ログ・データ・セットのレコードがある DASD 装置の装置タイプを指定するオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

このキーワードを使用して DASD 装置を指定しない場合、INIT.RECON コマンドでの、DASD 装置タイプのデフォルトは 3400 になります。

DBRC は、DASDUNIT に指定された値を、各種 RECON レコードの装置フィールドに保管します。複数のユーティリティーで、この値が出力装置タイプのデフォルト値として使用されます。

NOFORCER | FORCER

互いに排他的なオプション・キーワードであり、すべての IMS データベースを RECON データ・セットに登録する必要があるかどうかを指定するために使用します。

NOFORCER

データベースに登録する必要はないことを指定します。

FORCER

すべてのデータベースに登録する必要があることを指定します。FORCER が指定されているのに、ジョブが未登録のデータベースにアクセスしようとすると、IMS からの DBRC へのデータベース許可呼び出しは失敗します。

CHECK17 | CHECK44 | NOCHECK

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBRC が行うログ・データ・セット名比較のタイプを変更するために使用します。

CHECK17

ログ・データ・セット名の最後の 17 文字が RECON データ・セットと一致するかどうかを検査します。RECON データ・セット内の名前が該当する DD 名上の名前と一致しない場合、ユーティリティーは停止します。

CHECK44

44 文字のログ・データ・セット名が RECON データ・セットと一致するかどうかを検査します。RECON データ・セット内の名前が該当するログ DD 名上の名前と一致しない場合、ユーティリティーは停止します。

NOCHECK

データベース・リカバリー・ユーティリティーへの入力として指定されたデータ・セット名が 17 文字より長く、新しい高位修飾子を持っている場合に使用します。DBRC は、RECON データ・セットに登録されたログ・データ・セット名と該当する DD 名上の名前との比較は行いません。

LIST()

LIST コマンドのデフォルトを STATIC または CONCURR に設定するために使用するオプション・キーワード。デフォルトは、RECON データ・セットが並列アクセス (つまり TVS) モードのときに処理される LIST コマンドにのみ適用されます。

INIT.RECON コマンドで LIST キーワードが指定されていない場合は、STATIC がデフォルトとして設定されます。

STATIC

RECON データ・セットが並列アクセス・モードにあり、STATIC または CONCURR キーワードが指定されていない LIST コマンドを処理する場合、リスト処理のデフォルトは STATIC であることを指定します。

CONCURR

RECON データ・セットが並列アクセス・モードにあり、STATIC または CONCURR キーワードが指定されていない LIST コマンドを処理する場合、リスト処理のデフォルトは CONCURR であることを指定します。

推奨事項: STATIC オプションを指定した一部の LIST コマンドでは混乱が生じる可能性があるため、CONCURR をデフォルトとして設定してください。その上で、例えば問題の解決を試みるなど、特定のコマンドで STATIC を指定することができます。(INIT.RECON で LIST キーワードが指定されていない場合、デフォルトは、CONCURR ではなく、STATIC です。これは単に、シリアル RECON アクセスでの LIST コマンドは常に一貫した出力を生成するという理由からです。)

LOGRET(001 | '*time_interval*')

ログ・データ・セットの保存期間を指定するオプション・キーワード。

保存期間とは、ログのオープン後、非アクティブになるまでの最小時間です。(それ以降は削除対象として適格になります。)

time_interval は、日時を表すのではなく、時間間隔 (日、時、分、および秒) を表す、部分的な、区切られたタイム・スタンプです。タイム・スタンプのフォーマットは、次のとおりです。

ddd|hh|mm|ss|t

各項目の説明は、以下のとおりです。

ddd

日数 (000 から 365)

hh 時間数 (0 から 23)

mm 分数 (0 から 59)

ss 秒数 (0 から 59)

t 10 分の 1 秒 (0 から 9)

タイム・スタンプの区切り (上記のフォーマットでは垂直バー (|)) は、ピリオド (.) やコンマ (,) など、任意の非数値文字でも構いません。タイム・スタンプに空白または特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。日数には先行ゼロは含める必要がありますが、後続ゼロは省略することができます。有効な間隔は、10 分の 1 秒から 365 日までです。デフォルト値、001 は 24 時です。

時間間隔はタイム・スタンプとして扱われるため、不適切な値に対して、メッセージ DSP1048I が出される場合があります。有効な時間間隔の例は、次のとおりです。

```
LOGRET(365)
LOGRET('030 12.00')
LOGRET('000 00:00:08.0')
LOGRET('000 00,00,00,1')
```

次に示すように、同じタイム・スタンプ指定を表すのに、2つのフォーマットがあります。

```
LOGRET(030)          LOGRET('030')          = 30 days
LOGRET('010 12,30') LOGRET('010 12:30') = 10 days, 12 hours, 30 minutes
```

非アクティブ・ログに関する情報、およびログ保存期間やその他の条件を使用して非アクティブ・ログを判別する方法については、DELETE.LOG (RLDS および SLDS 用) コマンドのものと INACTIVE キーワードを参照してください。

保存期間を指定するのにこのキーワードを使用しない場合、INIT.RECON コマンドでは期間のデフォルトは 001 (24 時間) になります。

推奨事項: 必ず適切なログ保存期間を指定し、ログ情報が十分に長い期間にわたって RECON データ・セットに保持されるようにしてください。一定の IMS 機能は RECON データ・セット内のログ情報に依存しており、情報が早く削除されすぎると、これらの機能が失敗に終わることがあります。例えば、以下の機能の 1 つ以上が失敗に終わる可能性があります。

- 動的バックアウト
- バッチ・メッセージ処理 (BMP) の拡張再始動 (XRST)
- 作業単位テーブル項目 (UOWE) の再同期

NOLISTDL | LISTDL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、(DELETE.LOG コマンドまたはアーカイブ・ジョブ・ログ圧縮によって) RECON から削除されたデータ・セット名をジョブ出力にリストするかどうかを指定するために使用します。このコマンドで指定された設定値は、DELETE.LOG コマンドによってオーバーライドすることができます。アーカイブ・ジョブの中では、ログ圧縮の設定値をオーバーライドする方法はありません。

LISTDL

削除されたデータ・セットの名前をジョブ出力にリストすることを指定します。

NOLISTDL

削除されたデータ・セットの名前をジョブ出力にリストしないことを指定します。

MINVERS('13.1' | '14.1' | '15.1')

DBRC へのサインオンを許可する IMS の最小バージョンを指定するオプション・キーワード。デフォルトは MINVERS('13.1') です。

MINVERS キーワードのフォーマットには、ピリオドが含まれます。DBRC では、これが特殊文字とみなされるので、値を単一引用符で囲む必要があります。

要件:

- 順次従属 (SDEP) セグメントのある DEDB エリアに対して ALTERAREA 関数を使用して、DEDB 変更ユーティリティを実行するには、MINVERS 値が '14.1' であることが必要です。

- HALDB データベースが最大 8 ギガバイトのデータを OSAM PHDAM または PHIDAM のデータベース・データ・セット内に格納できることを指定するには、**MINVERS** 値が「14.1」であるか、または「13.1」で **CDSLID** 値が 2 であることが必要です。**MINVERS** が「14.1」に設定されているときに、8 GB の OSAM データ・セットを使用するように HALDB データベースが定義されている場合、この値を低くすることはできません。
CHANGE.RECON () は失敗し、DSP1256E メッセージが発行されます。
CDSLID 値 2 は、8 GB OSAM データ・セットのサポートを使用可能にする SPE APAR が、RECON データ・セットにアクセスするすべての IMS バージョン 13 常駐ライブラリーに適用されていることを示します。

NOREORGV | REORGV

同時には使用できません。HALDB 区画再編成番号の妥当性検査を変更するために使用するオプション・パラメーター。デフォルトは NOREORGV です。

NOREORGV

HALDB 区画再編成番号の妥当性検査を使用不可にすることを指定します。再編成番号を格納、更新、または検査するためのいかなる要求も、無視されます。

REORGV

HALDB 区画再編成番号の妥当性検査を有効にすることを指定します。DBRC は、再編成番号が逆行するのを防ぐために、各区画の再編成番号を RECON データ・セット内の区画レコードに格納します。

SSID(name)

次のコマンドでデフォルト・サブシステム ID として使用する IMS サブシステムの名前を指定するオプション・キーワード。

CHANGE.PRILOG
CHANGE.SECLOG
DELETE.LOG
GENJCL.ARCHIVE
GENJCL.CLOSE
NOTIFY.PRILOG
NOTIFY.SECLOG

name は、有効な IMS サブシステム ID を示す 8 文字の英数字ストリングです。

NONEW | STARTNEW

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RECON データ・セットが 1 つしかない場合に新しいジョブを開始するかどうかを指定するために使用します。

NONEW

新規ジョブを開始しないことを指定します。

STARTNEW

新規ジョブを開始することを指定します。並列 RECON アクセスが使用可能な場合、別の DBRC インスタンスが 2 つのアクティブな RECON データ・セットを使用して実行されているときには、単一の使用可能な RECON データ・セットを使用して新規ジョブを開始することはできません。

TAPEUNIT (*unittype*)

ログ・データ・セットのレコードを保持する磁気テープ装置の装置タイプを指定するオプション・キーワード。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

このキーワードを使用して磁気テープ装置を指定しない場合は、INIT.RECON コマンドでは装置タイプのデフォルトは 3400 になります。

DBRC は、TAPEUNIT に指定された値を、各種 RECON レコードの装置フィールドに保管します。複数のユーティリティーで、この値が出力装置タイプのデフォルト値として使用されます。

使用上の注意

DBRC は、NOTFY.REORG、CHANGE.PART、CHANGE.DBDS、INIT.PART、INIT.DB、および INIT.DBDS の各コマンドの処理中に、DBDLIB 内に格納されているデータベース定義にアクセスします。DBDLIB の代わりに、ディレクトリーが使用可能になっている場合、DBRC は IMS カタログにアクセスする必要があります。これは、ディレクトリーに、DDL を使用して定義されたデータベースのデータベース定義が含まれていない可能性があるからです。

RECON には新しいカタログ名が含まれます。この名前が定義されると、それは DBRC が、データベース定義を参照する必要があるコマンドに対して DBDLIB の代わりにディレクトリーを使用していることを示します。このカタログ名は、INIT.RECON コマンドでデフォルトとして設定できます。カタログ名は必須ではありません。カタログ名が存在しない場合、DBRC は引き続き IMS DD に DBDLIB が含まれることを予期します。

INIT.RECON の実行中に定義されたカタログ名は検証されません。まだ RECON に対してカタログを定義できないからです。

RECON データ・セットの初期化の例

ここでは、INIT.RECON コマンドの使用例をいくつか示します。

INIT.RECON コマンドの例 1

```
//INITRCON JOB
:
//RECON1 DD DSN=RECON7,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=RECON8,DISP=SHR
//SYSIN DD *
INIT.RECON NOCHECK SSID(IMSB) LOGRET('007 00:00:30.0')
/*
```

この例では、RECON1 および RECON2 DD ステートメントが RECON データ・セットを示しています。

INIT.RECON コマンドの例 2

```
//INITRCON JOB
:
//SYSIN DD *
INIT.RECON CMDAUTH(SAF,SAFHLQ1,IMSTESTS.DSHR)
/*
```

この例では、RECON COPY1 データ・セット名が IMSTESTS.DSHR.RECON1 の場合、DBRC コマンド許可セキュリティは、RECON データ・セットに対する今後のすべてのアクセス試行に対してそのまま実行されます。これは、「IMSTESTS.DSHR」という *rcnqual* 値が、RECON COPY1 データ・セット名 IMSTESTS.DSHR.RECON1 のサブストリングであるからです。

この RECON データ・セットを、第 2 レベル修飾子名が COPYDSHR であるデータ・セットにコピーすると、DBRC コマンド許可セキュリティは、RECON データ・セットに対する今後のすべてのアクセス試行に対して無効になります。これは、このようなコピーが行われると、RECON COPY1 データ・セット名が IMSTESTS.COPYDSHR.RECON1 に変更され、この名前に「IMSTESTS.DSHR」という *rcnqual* ストリング値が含まれなくなるからです。

INIT.RECON コマンドの例 3

```
//INITRCON JOB
:
//RECON1 DD DSN=ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON1,DISP=SHR
//RECON2 DD DSN=ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON2,DISP=SHR
//SYSIN DD *
        INIT.RECON SSID(GREG) LOGRET('007 00:00:30.0') CATALOG(DFSCD000)
/*
```

関連資料:

188 ページの『DELETE.LOG コマンド (RLDS および SLDS 用)』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

第 15 章 LIST コマンド

LIST コマンドは、RECON データ・セットに含まれている情報のすべて、または選択した一部をフォーマット設定して印刷出力を生成するために使用します。

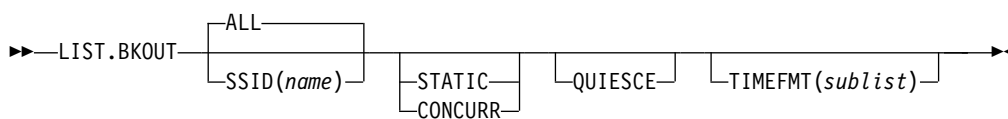
LIST.BKOUT コマンド

LIST.BKOUT コマンドは、選択したサブシステムのバックアウト・レコードに関する情報、あるいは RECON データ・セットのすべてのバックアウト・レコードをリストするのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 360 ページの『バックアウト・レコードに関する情報のリストの例』

構文



キーワード

ALL | SSID(name)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、表示するバックアウト・レコードを指定します。

ALL

RECON データ・セットのすべてのバックアウト・レコードを表示することを指定します。

SSID(name)

バックアウト・レコードを 1 つだけ表示することを指定します。name は、有効なサブシステム ID を示す 8 文字の英数字からなる文字ストリングです。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データ・セットを静止することを設定するために使用する、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。

LIST コマンドは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている中から TIMEFMT のデフォルトを入手します。

バックアウト・レコードに関する情報のリストの例

以下の例は、サブシステム IMS1 のバックアウト・レコードに関する情報をリストするために LIST.BKOUT コマンドを使用する方法を示しています。

```
//LISTBKOUT JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.BKOUT SSID(IMS1)
/*
```

関連資料:

439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

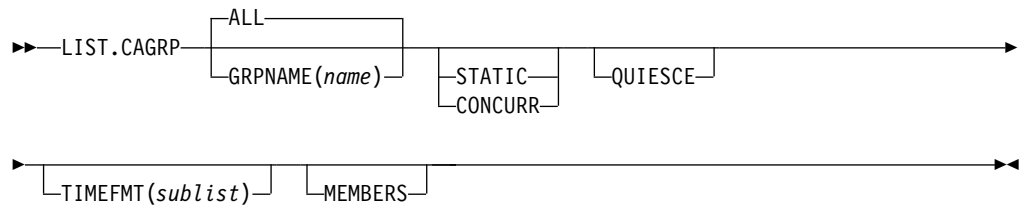
LIST.CAGRP コマンド

LIST.CAGRP コマンドは、指定された CA グループもしくはすべての CA グループに関して、コピー 1 RECON データ・セットにある情報をリストするのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 361 ページの『キーワード』
- 362 ページの『GRPNAME を使用して CA グループと CA レコードを指定する例』

構文



キーワード

ALL | GRPNAME(*name*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、情報が表示される CA グループの名前を指定します。

ALL

RECON データ・セットのそれぞれの CA グループごとに CA グループ・レコードと対応する変更累積実行レコードのリストを生成します。

GRPNAME(*name*)

name で要求するグループの CA グループ・レコードと変更累積実行レコードのリストを生成します。

MEMBERS

CA グループ定義に関する情報だけをリストするために使用するオプション・キーワード。CA 実行情報はリストされません。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データ・セットを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフ

フォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

GRPNAME を使用して CA グループと CA レコードを指定する例

この例では、GRPNAME キーワードで、CA グループ・レコードとそれに関連した CA レコードを指定しています。

```
//LISTCAGP JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.CAGRP GRPNAME (MYGROUP)
/*
```

関連資料:

439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

LIST.DB コマンド

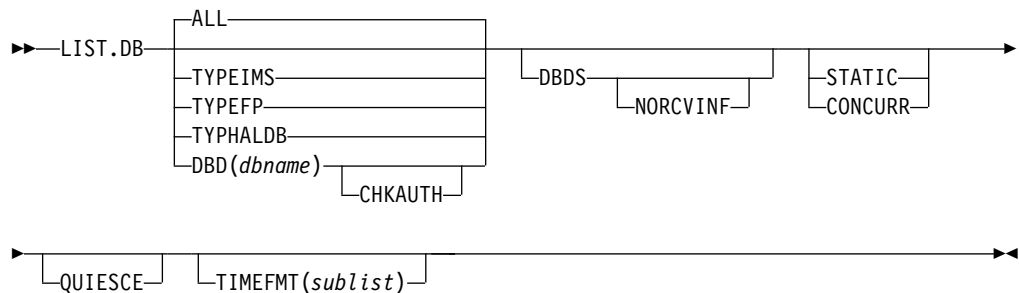
LIST.DB コマンドは、RECON データ・セットに登録されているデータベースのリストを受け取るために使用します。1 つ以上のデータベース・レコードを、その関連 DBDS レコードと一緒にあるいは無しで、リストすることができます。

LIST.DB コマンドは、データベースのリカバリー可能またはリカバリー不能状況を表示します。

サブセクション:

- 『構文』
- 363 ページの『キーワード』
- 364 ページの『DBDS レコードを含めずにデータベースを表示する例』

構文



キーワード

ALL | TYPEIMS | TYPEFP | TYPHALDB | DBD(*dbname*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、表示する RECON データ・セットのデータベースを指定します。

ALL

RECON データ・セットのすべてのデータベース・レコードを表示することを指定します。HALDB データベースの場合は、パーティション・データベース・レコードがマスター・レコードの下にリストされます。

TYPEIMS

DL/1 データベースを記述する、RECON データ・セットのすべてのデータベース・レコードを表示することを指定します。

TYPEFP

高速機能 DEDB を記述する、RECON データ・セットのすべてのデータベース・レコードを表示することを指定します。

TYPHALDB

HALDB データベースを表すすべてのデータベース・レコードを表示することを指定します。これには、HALDB マスター・データベース・レコード (TYPE=HALDB) とそれに関連した HALDB パーティション・データベース・レコード (TYPE=PART) が含まれます。

DBD(*dbname*)

データベースの特定のデータベース・レコードまたはデータベースのリカバリー・グループを表示します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合は、HALDB マスター名を指定すると、HALDB マスター・レコードとそのすべてのパーティション・データベース・レコードがリストされます。パーティション・データベース名を指定すると、パーティション・データベース・レコードだけがリストされます。

CHKAUTH

指定された DBD の許可状況を検査するために使用するオプション・キーワード。DBD は、全機能データベース、高速機能データベース、HALDB マスター、または HALDB 区画のいずれかです。何もリストされません。DBD がサブシステムに対して許可されている場合は、DSP0044I と RC=04 を受け取ります。DBD が許可されていない場合は、RC=00 のみを受け取ります。

CHKAUTH キーワードの指定は、DBD キーワードと一緒にの場合のみ有効です。DBD が指定されていない場合、コマンドは失敗します。他のキーワードを指定しても、無視されます。

DBDS

指定されたデータベースに関連した、RECON データ・セットの DBDS またはエリアを表示するオプション・キーワード。DBDS 情報には、リカバリー関連レコード (ALLOC、IC、RECOV、REORG) が含まれています。このキーワードを指定しないと、DBDS レコードまたはエリア・レコードは表示されません。

NORCVINF

指定されたデータベースに関連した、RECON データ・セット内の DBDS またはエリアのリカバリー関連レコード (ALLOC、IC、RECOV、REORG) を抑止します。

LIST.DB コマンド出力が切り捨てられてメッセージ DSP0057I が返された場合は、出力のサイズを最小化するために NORCVINF キーワードを指定できます。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

DBDS レコードを含めずにデータベースを表示する例

この例では、データベース DEDBAB12 が、関連する DBDS レコードを含めずに表示されます。

入力:


```
//LISTDB
:
//SYSIN DD *
LIST.DB DBD(DEDBAB12)
/*
```

応答 :

```
LIST.DB DBD(DEDBAB12)
```

```
-----
DB
DBD=DEDBAB12                DMB#=8        TYPE=FP
SHARE LEVEL=3
FLAGS:                        COUNTERS:
                                RECOVERY NEEDED COUNT =3
                                IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
                                AUTHORIZED AREAS          =1
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF    EEQE COUNT      =0
RECOVERABLE                   =YES                    ALTER COUNT     =1
FULLSEG DEFAULT               =NO                    ALTER COMPLETE COUNT =1
-----
```

関連概念:

[👉 データベースのリカバリーの概説 \(データベース管理\)](#)

関連資料:

439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

[👉 /RMxxxxxx コマンド \(コマンド\)](#)

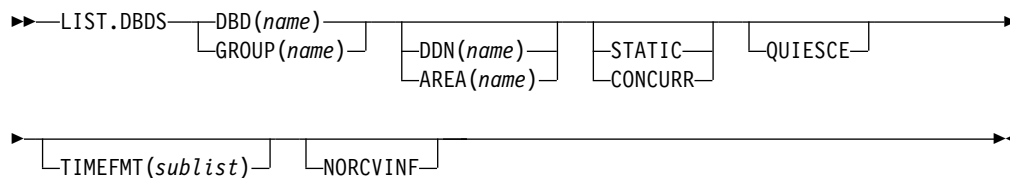
LIST.DBDS コマンド

LIST.DBDS コマンドは、特定の DBDS または DEDB エリアに関する情報を含んでいる、RECON データ・セット内のすべてのレコードのリストを表示するのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 366 ページの『キーワード』
- 367 ページの『レコードのリストの表示例』

構文



キーワード

DBD(name) | GROUP(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、リストする DBDS または DEDB エリアを示します。

DBD(name)

表示する DBDS または DEDB エリアのデータベース名を指定します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、DDN キーワードを指定しないときには、HALDB マスター・データベース名と HALDB 区画名のどちらでも指定できます。DDN キーワードを指定するときは、HALDB 区画名だけを指定できます。

GROUP(name)

名前付き DBDS グループのすべての DBDS または DEDB エリアを表示することを指定します。GROUP を指定すると、識別されているグループのそれぞれのメンバーごとに LIST.DBDS コマンドが実行されます。

DDN(name) | AREA(name)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、表示する DBDS または DEDB エリアを示します。DBD キーワードを指定する場合にのみ、以下のいずれかのキーワードを指定します。

DDN(name)

表示する DBDS の名前を指定します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、DDN キーワードを使用するためには、DBD キーワードで HALDB 区画名 (HALDB マスター名ではなく) を指定する必要があります。DDN キーワード値は HALDB 区画 DDN です。LIST.DBDS コマンドは、区分の示されている DBDS に対して実行されます。DDN で区分の DBDS が識別されていない場合は、LIST.DBDS コマンドは失敗します。

AREA(name)

表示する DEDB エリアの名前を指定します。

DDN も AREA も指定しないと、LIST.DBDS コマンドは、指定したデータベースのそれぞれの DBDS または DEDB エリアごとに実行されます。

HALDB データベースの制約事項: HALDB マスター名を指定した場合、LIST.DBDS コマンドは、HALDB マスター内の各 HALDB 区画の DBDS ごとに実行されます。HALDB 区画名を指定すると、識別されている区画のそれぞれの DBDS ごとに LIST.DBDS コマンドが実行されます。

NORCVINF

すべての表示された DBDS および DEDB エリアについて、リカバリー関連レコード (ALLOC、IC、RECOV、REORG) を抑止します。このキーワードを指定しない場合は、表示された DBDS および DEDB エリアに関する情報を含んでいる、RECON データ・セット内のすべてのレコードのリストが表示されます。

LIST.DBDS コマンド出力が切り捨てられ、メッセージ DSP0057I が返された場合、出力のサイズを最小化するために NORCVINF キーワードを指定できません。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

レコードのリストの表示例

この例では、DEDB エリア AREA01 に関する情報を含んでいる RECON データ・セット内のすべてのレコードのリストが表示されます。

入力:

```
//LISTDBDS JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.DBDS DBD(FPEDB02) AREA(AREA01)
/*
```

応答 :

LIST.DBDS DBD(FPEDBD02) AREA(AREA01)

```

-----
DBDS
  DBD=FPEDBD02 AREA=AREA01                                TYPE=FP
  SHARE LEVEL=3          DSID=00001 DBORG=DEDB   DSORG=VSAM
  GSGNAME=**NULL**      USID=0000000002
  AUTHORIZED USID=0000000002 RECEIVE USID=0000000002 HARD USID=0000000002
  RECEIVE NEEDED USID=0000000000
  CAGRP=**NULL** GENMAX=2   IC AVAIL=0   IC USED=0   DSSN=00000001
  NOREUSE          RECOVPD=0   NOVSO NOPREOPEN  NOPRELOAD  NOFULLSG
  CFSTR1=**NULL**   CFSTR2=**NULL**   NOLKASID  NOMAS
  DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL  RECVJCL=ICRCVJCL RECOVJCL=RECOVJCL
  DBRCVGRP=**NULL**
  FLAGS:
    PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF
    IC NEEDED          =OFF
    IC RECOMMENDED    =ON
    RECOV NEEDED      =OFF
    RECEIVE NEEDED    =OFF
    OFR REQUIRED        =NO
    TRACKING SUSPENDED =NO
    HSSP CIC IN PROGRESS =NO
    QUIESCE IN PROGRESS =NO
    QUIESCE HELD      =NO
    ALTER IN PROGRESS  =YES
  COUNTERS:
    AUTHORIZED SUBSYSTEMS =1
    HELD AUTHORIZATION STATE=6
    ADS AVAIL #           =1
    REGISTERED ADS #      =1
    EEQE COUNT            =0
    SHADOW ADS AVAIL #    =2
    REGISTERED SHADOW ADS # =2
  
```

ADS LIST:

-ADS DDN--ADS DSN-	-STAT-	CREATE	-RUNNING-
DB21AR0 IMSTESTS.DB21AR0	AVAIL		NO

SHADOW ADS LIST:

-ADS DDN--ADS DSN-	-STAT-	CREATE	-RUNNING-
DB21AS01 IMSTESTS.DB21AR0.SHADOW	AVAIL		NO
DB21AS02 IMSTESTS.DB21AR0.SHADOW.IC	AVAIL		NO IC


ASSOCIATED SUBSYSTEM INFORMATION:

-SSID-	-ACCESS INTENT-	ENCODED	-STATE-	-SS ROLE-
IMS1	UPDATE		6	ACTIVE

関連資料:

439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

 /RMxxxxxx コマンド (コマンド)

LIST.DBDSGRP コマンド

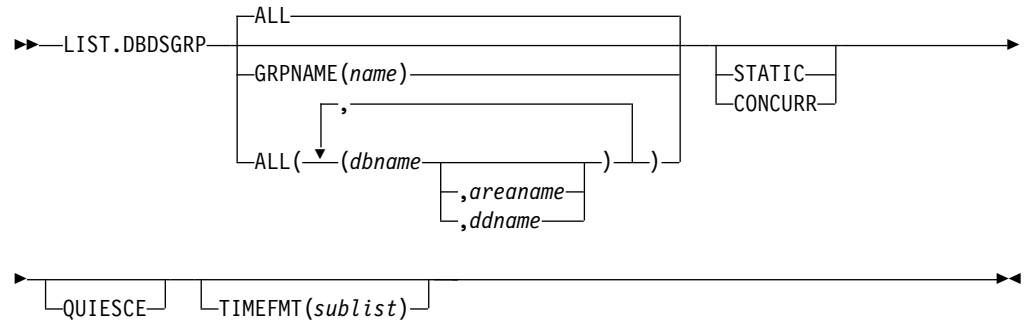
LIST.DBDSGRP コマンドは、RECON データ・セット内の 3 種類のデータ・グループ・レコード (DB グループ、DBDS グループ、およびリカバリー・グループ) のすべてのリスト、単一のデータ・グループ・レコードのメンバーのリスト、または指定されたメンバーを含むすべてのデータ・グループ・レコードのリストを表示するために使用します。

サブセクション:

- 369 ページの『構文』
- 369 ページの『キーワード』

- 370 ページの『DBDS グループのメンバーの表示例』

構文



キーワード

ALL | **GRPNAME(name)** | **ALL(dbname, areaname | ddname)**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、リストするグループを指定します。

ALL

RECON データ・セットで識別されるすべての DBDS、DB、およびリカバリー・グループのリストを生成します。ALL がデフォルトです。

GRPNAME

指定されたグループのメンバーのリストを生成します。指定されたグループは RECON データ・セットに存在している必要があります。

ALL(dbname, areaname, ddname)

RECON データ・セット内で識別される DBDS、DB、およびリカバリー・グループの限定リストを生成します。キーワード (dbname, areaname, ddname) を使用して、リストするレコードの数を制限してください。指定されたデータベース、DBDS、またはエリアが 1 つ以上含まれているグループのみがリストされます。

HALDB データベースの制約事項: LIST.DBDSGRP コマンドの場合、dbname には HALDB 区画または HALDB マスター・データベースの名前を指定できます。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | **CONCURR**

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON コマンド、またはアップグレード処理で設定されず。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

DBDS グループのメンバーの表示例

この例では、指定された DBDS グループのメンバーを表示します。

```
//LISTDBGP JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.DBDSGRP GRPNAME(DBDSG1)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

LIST.HISTORY コマンド

LIST.HISTORY コマンドは、DBDS または DEDB エリアのアクティビティ・ヒストリーのリストを生成するのに使用します。

LIST.HISTORY コマンドの出力は以下のもので構成されます。

- データベース・レコードのリスト
- DBDS レコードのリスト (DEDB エリア・レコード、エリア許可レコード、およびエリア・リカバリー・レコードをまとめて DBDS レコード・リストが形成される。)
- 以下のレコード (存在する場合) がそれぞれの DBDS またはエリアで時間順にリストされる。
 - ALLOC レコード
 - IMAGE レコード

- CA 実行レコード。現行 DBDS またはエリアに対してのみ、除去時刻が示される。
- RECOV レコード
- REORG レコード
- リストするすべての ALLOC レコードに関連した PRILOG レコード
- 上記のレコードが表すすべてのイベントに関連付けた要約時刻表

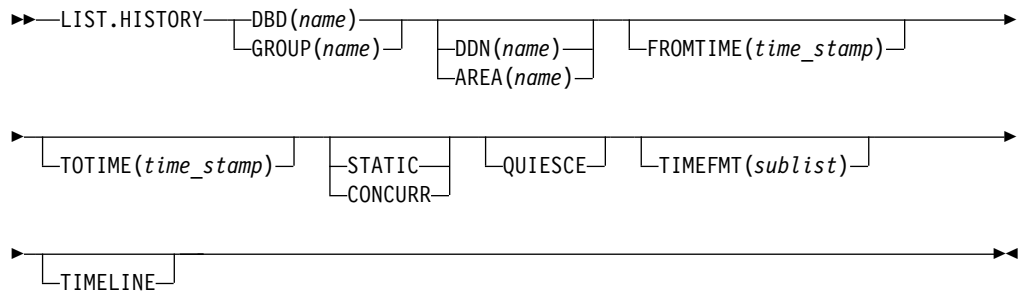
FROMTIME キーワードおよび TOTIME キーワードを使用して、次のレコードを除外する時刻範囲を定義できます。

- 範囲内でアクティブでない USID の ALLOC レコード。時刻範囲内でアクティブな ALLOC レコードがある場合は、それと同じ USID を持つ ALLOC はすべてリストされます。
- RUN 時刻 (あるいは、CIC の場合は、有効な除去時刻) が範囲外の IMAGE レコード
- STOP 時刻および PURGE 時刻が範囲外の CA 実行レコード
- RUN および RECOV TO が範囲外の RECOV レコード
- RUN の時刻が範囲外の REORG レコード

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 373 ページの『DBDS のアクティビティ・ヒストリーの表示例』

構文



キーワード

DBD(name) | GROUP(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、リストする DBDS または DEDB エリアを示します。

DBD(name)

リストする DBDS または DEDB エリアの名前を指定します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、DDN キーワードを指定しないときには、HALDB マスター・データベース名と HALDB 区画名のどちらでも指定できます。DDN キーワードを指定するときは、HALDB 区画名だけを指定できます。

GROUP(name)

ある DBDS グループか CA グループのすべての DBDS または DEDB エリアをリストすることを指定します。GROUP を指定すると、示されているグループのそれぞれのメンバーごとに、LIST.HISTORY コマンドを実行します。

DDN(name) | AREA(name)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、リストする DBDS または DEDB エリアを示します。DBD キーワードを指定する場合にのみ、以下のいずれかのキーワードを指定します。

DDN(name)

リストする DBDS の名前を指定します。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースの場合、DDN キーワードを使用するためには、DBD キーワードでパーティション・データベース名を指定する必要があります。DDN キーワード値は区分 DDN です。LIST.HISTORY コマンドは、区分の識別されている DBDS について実行されます。DDN で区分の DBDS が識別されていない場合は、LIST.HISTORY コマンドは失敗します。

AREA(name)

リストする DEDB エリアの名前を指定します。

DDN も AREA も指定しないと、LIST.HISTORY コマンドは、指定したデータベースのそれぞれの DBDS または DEDB エリアごとに実行されます。

HALDB データベースの制約事項: HALDB マスター名を指定した場合、LIST.HISTORY コマンドは、HALDB マスター内の各区画の DBDS ごとに実行されます。HALDB 区画名を指定すると、識別された区画のそれぞれの DBDS ごとに LIST.HISTORY コマンドが実行されます。

FROMTIME(time_stamp)

時間順にリストされる DBDS または DEDB エリア・レコードのタイム・スタンプを指定するオプション・キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。時間順にリストされないレコードは、FROMTIME または TOTIME が指定されているか否かに関係なくリストされます。FROMTIME には、リストする最も古いレコードのタイム・スタンプを指定します。FROMTIME だけを指定すると、RECON データ・セットに含まれる、それ以降の関連レコードがリストされます。

表示するレコードの範囲を指定するために、FROMTIME および TOTIME キーワードを組み合わせて使用できます。

FROMTIME も TOTIME も指定しないと、RECON データ・セット内の、指定された DBDS または DEDB エリアに関するすべてのレコードがリストされます。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TOTIME(*time_stamp*)

時間順にリストされる DBDS または DEDB エリア・レコードのタイム・スタンプを指定するためのオプション・キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。時間順にリストされないレコードは、FROMTIME または TOTIME が指定されているか否かに関係なくリストされます。TOTIME には、最後にリストするレコードのタイム・スタンプを指定します。TOTIME だけを指定すると、その時刻のレコードと RECON データ・セットに含まれる、それ以前の関連レコードすべてがリストされます。

表示するレコードの範囲を指定するために、FROMTIME および TOTIME キーワードを組み合わせて使用できます。

FROMTIME も TOTIME も指定しないと、RECON データ・セット内の、指定された DBDS または DEDB エリアに関するすべてのレコードがリストされます。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

TIMELINE

出力にタイム・ラインの要約だけをリストすることを指定するオプション・キーワード。

DBDS のアクティビティ・ヒストリーの表示例

この例では、指定した DBDS のアクティビティ・ヒストリーを表示します。

```
//LISTHIST    JOB
:
//SYSIN      DD *
LIST.HISTORY DBD(DB1) DDN(NAME1)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

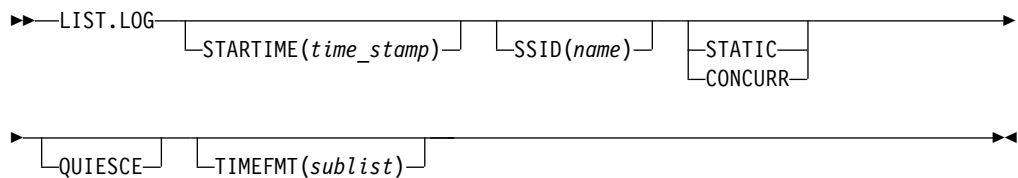
LIST.LOG コマンド (PRILOG ファミリー用)

LIST.LOG コマンドは、PRILOG レコード、ならびに指定された開始時刻をもつ LOGALL、SECLOG、PRISLD、または SECSLD レコードを表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 375 ページの『レコードの PRILOG ファミリーのリスト例』

構文



キーワード

STARTIME(*time_stamp*)

表示するレコードの開始時刻の指定するために使用するオプション・キーワード。

SSID(*name*)

指定されたサブシステムに関連したログ・レコードまたは OLDS エントリーだけを表示するように制限するためのオプション・キーワード。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

重要: ERROR、OPEN、または UNARCH キーワードを指定すると、メッセージ DSP0141I が出されて、コマンドは失敗します。

FROMTIME、TOTIME、INTERIM、または TRACKING キーワードを指定すると、STARTIME は無視され、コマンドは、次のセクションで説明するように、デフォルトとして ALL 処理になります。

レコードの **PRILOG** ファミリーのリスト例

この例では、指定された開始時刻を持つ PRILOG、SECLOG、PRISLD、SECSLD、および LOGALL レコードがリストされます。

```
//LISTLOG JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.LOG STARTIME('07.023 12:12:12.123456 PST')
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

LIST.LOG コマンド (レコードのカテゴリ用)

LIST.LOG コマンドは、PRILOG レコード、ならびに指定された開始時刻をもつ LOGALL、SECLOG、PRISLD、または SECSLD レコードを表示するために使用します。このコマンドの構文は、表示するレコードのリストによって異なります。

サブセクション:

- 376 ページの『構文』
- 377 ページの『キーワード』

- 379 ページの『例』

構文

PRILOG、LOGALL、SECLOG、PRISLD、SECSLD、PRIOLD、および SECOLD
レコードの構文

```
▶▶—LIST.LOG—ALL—| A |—————▶▶
```

IPRI、ISEC、IPRISL、ISECSL、IPRIOL、および ISECOL レコードの構文

```
▶▶—LIST.LOG—ALL—INTERIM—| A |—————▶▶
```

PRIOLD および **SECOLD** レコードの構文

```
▶▶—LIST.LOG—ALLOLDS—| A |—————▶▶
```

- PRIOLD
- SECOLD

IPRIOL および **ISECOL** レコードの構文

```
▶▶—LIST.LOG—ALLOLDS—INTERIM—| A |—————▶▶
```

- IPRIOL
- ISECOL

マッチング **DD** 名およびサブシステム名を持つ **PRIOLD** および **SECOLD** レコードの構文

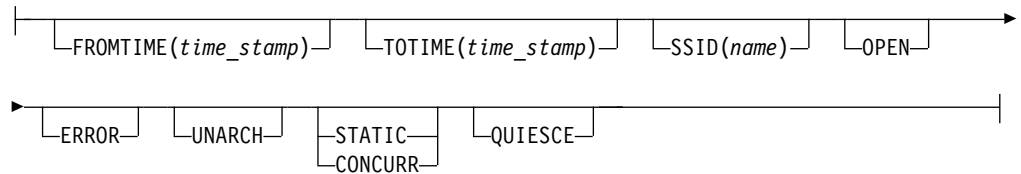
```
▶▶—LIST.LOG—OLDS(ddname)—SSID(name)—| A |—————▶▶
```

LIST.LOG OLDS は、DD 名およびサブシステム名が一致するデータ・セット・エントリーのみを表示します。SSID を省略した場合の処理は ALLOLDS を指定した場合と同じです。

LIST.LOG コマンドは、以下のオプション・キーワードを 1 つ以上使用して、さらに修飾することができます。例えば、SSID と OPEN を併用すると、指定されたサブシステムに属するログと OLDS、およびクローズされていないログと OLDS エントリーだけを表示するように制限できます。

LIST.LOG ALL、ALLOLDS、および OLDS のオプション・キーワードは次のとおりです。

A:



キーワード

FROMTIME(*time_stamp*)

この時刻またはそれ以降に開始したログ・レコードまたは OLDS エントリーだけを表示するように制限するオプション・キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FROMTIME には、リストする最も古いレコードのタイム・スタンプを指定します。FROMTIME だけを指定すると、RECON データ・セットに含まれる、それ以降の関連レコードがリストされます。

表示するレコードの範囲を指定するために、FROMTIME と TOTIME の両方のキーワードを指定できます。

PRILOG、SECLOG、PRISLD、SECSLD、IPRI、ISEC、IPRISL、ISECSL レコードの場合、FROMTIME タイム・スタンプは、サブシステムが開始した時刻 (START =) と比較されます。レコードがリストされると、この開始時刻には横にアスタリスク (*) が付けられます。

PRIOLD、SECOLD、IPRIOL、および ISECOL レコードの場合、FROMTIME タイム・スタンプは、サブシステムが開始した時刻 (PRILOG TIME =) と比較されます。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TOTIME(*time_stamp*)

この時刻に、またはこの時刻より前に開始されたログ・レコードまたは OLDS エントリーだけを表示するように制限するオプション・キーワード。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

TOTIME には、最後にリストするレコードのタイム・スタンプを指定します。TOTIME のみを指定すると、その時刻のレコードと、RECON データ・セットに含まれる、それ以前のすべての関連レコードがリストされます。

表示するレコードの範囲を指定するために、FROMTIME と TOTIME の両方のキーワードを指定できます。

PRILOG、SECLOG、PRISLD、SECSLD、IPRI、ISEC、IPRISL、ISECSL レコードの場合、TOTIME タイム・スタンプは、サブシステムが開始した時刻 (START =) と比較されます。レコードがリストされると、この開始時刻には横にアスタリスク (*) が付けられます。

PRIOLD、SECOLD、IPRIOL、および ISECOL レコードの場合、TOTIME タイム・スタンプは、サブシステムが開始した時刻 (PRILOG TIME =) と比較されます。

SSID(*name*)

指定されたサブシステムに関連したログ・レコードまたは OLDS エントリーだけを表示するように制限するオプション・キーワード。

OPEN

クローズされていないログ・レコードまたは OLDS エントリーだけを表示するように制限するオプション・キーワード。

ERROR

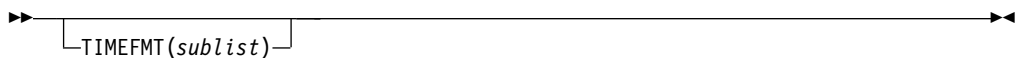
1 つ以上のデータ・セット・エントリーにエラーのマークが付いているログ・レコードまたはエラーのマークが付いている OLDS エントリーだけを表示するように制限するオプション・キーワード。

UNARCH

OLDS エントリーの表示を、アーカイブされていないものだけに制限するオプション・キーワード。

注: ERROR または OPEN キーワードなしで UNARCH キーワードを指定すると、LIST.LOG ALL は LIST.LOG ALLOLDS と同様に処理されます。つまり、ログ・レコードはリストされず、アーカイブされていない OLDS エントリーだけがリストされます。

次のキーワードは、すべての形式のコマンドで使用できます。



TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフ

フォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

例

STARTIME によって指定された **RECON** レコードの表示例

この例では、STARTIME キーワードで指定されたタイム・スタンプを持つ RLDS、SLDS、および対応する LOGALL レコードを表示します。

```
//LISTRCON JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.LOG STARTIME(07031131313023456)
/*
```

サブシステムの **OLDS** レコードの表示例

この例では、サブシステム IMSA から OLDS レコードを表示します。

```
//LISTRCON JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.LOG ALLOLDS SSID(IMSA)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

LIST.RECON コマンド

LIST.RECON コマンドを使用して RECON データ・セットの現在の状況を表示する。

RECON の状況情報には以下の項目が含まれます。

- DBRC コマンドがデータベース定義に使用する IMS カタログの名前、または DBRC コマンドがデータベース定義に DBD ライブラリーを使用する場合は CATALOG=**NULL**
- タイム・ゾーン・ラベル表の内容
- TIMEZIN と TIMEFMT の設定値
- この RECON と共存できる IMS の最低リリース・レベル
- 以下のような、3つの RECON データ・セットのそれぞれの状況

RECON 状況

意味

COPY1

PRIMARY ACTIVE RECON

COPY2

SECONDARY ACTIVE RECON

SPARE

AVAILABLE RECON

UNAVAILABLE

UNAVAILABLE RECON

DISCARDED

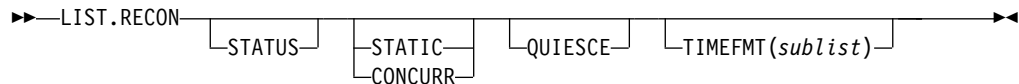
UNUSABLE RECON

リソースが別のシステムで割り振られているときは、RECON データ・セットは使用不能です。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 381 ページの『例』

構文



キーワード

STATUS

RECON ヘッダー・レコード情報およびすべての RECON データ・セットの状況を要求するためのオプション・キーワード。このキーワードを指定すると、残りのレコードのリストは抑止されます。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC が指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

使用上の注意

DBRC は、NOTIFY.REORG、CHANGE.PART、CHANGE.DBDS、INIT.PART、INIT.DB、および INIT.DBDS の各コマンドの処理中に、DBDLIB 内に格納されているデータベース定義にアクセスします。DBDLIB の代わりに、ディレクトリーが使用可能になっている場合、DBRC は IMS カタログにアクセスする必要があります。これは、ディレクトリーに、DDL を使用して定義されたデータベースのデータベース定義が含まれていない可能性があるからです。

カタログ名を定義して、DBRC が、データベース定義を参照する必要があるコマンドに対して DBDLIB の代わりにディレクトリーを使用していることを示す必要があります。カタログ名は LIST.RECON コマンドで表示されます。

例

ここでは、LIST.RECON コマンドの使用例をいくつか示します。

RECON データ・セットの表示例

この例では、RECON データ・セットの状況と内容が表示されます。

```
//LISTRCON JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.RECON
/*
```

RECON のヘッダーおよび状況情報の表示例

この例では、RECON ヘッダー状況情報だけを表示します。

```
//LISTRCON JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.RECON STATUS
/*
```

このケースでは 439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』で示される出力の最初のセグメントだけが生成されます。

DBDLIB を使用する例

RECON
 RECOVERY CONTROL DATA SET, IMS V14R1
 DMB#=9 INIT TOKEN=15318F1857505F
 NOFORCER LOG DSN CHECK=CHECK17 STARTNEW=NO
 TAPE UNIT=3400 DASD UNIT=SYSDA TRACEOFF SSID=**NULL**
 LIST DLOG=YES CA/IC/LOG DATA SETS CATALOGED=NO
 MINIMUM VERSION = 12.1 CROSS DBRC SERVICE LEVEL ID= 00001
 REORG NUMBER VERIFICATION=NO
 LOG RETENTION PERIOD=00.000 00:15:00.0
 COMMAND AUTH=NONE HLQ=**NULL**
 RCNQUAL=**NULL**
 CATALOG=**NULL**
 ACCESS=SERIAL LIST=STATIC
 SIZALERT DSNUM=15 VOLNUM=16 PERCENT= 95
 LOGALERT DSNUM=3 VOLNUM=16

TIME STAMP INFORMATION:

TIMEZIN = %SYS -LABEL- -OFFSET-
 PDT -07:00
 PST -08:00

OUTPUT FORMAT: DEFAULT = LOCORG NONE PUNC YY
 CURRENT = LOCORG NONE PUNC YY

IMSPLEX = ** NONE ** GROUP ID = ** NONE **

-DDNAME-	-STATUS-	-DATA SET NAME-
RECON1	COPY1	ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON1
RECON2	COPY2	ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON2
RECON3	SPARE	ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON3

NUMBER OF REGISTERED DATABASES = 9

デフォルトのカタログ名 **PATSCD00** を使用する例

RECON
 RECOVERY CONTROL DATA SET, IMS V14R1
 DMB#=9 INIT TOKEN=15318F1857505F
 NOFORCER LOG DSN CHECK=CHECK17 STARTNEW=NO
 TAPE UNIT=3400 DASD UNIT=SYSDA TRACEOFF SSID=**NULL**
 LIST DLOG=YES CA/IC/LOG DATA SETS CATALOGED=NO
 MINIMUM VERSION = 12.1 CROSS DBRC SERVICE LEVEL ID= 00001
 REORG NUMBER VERIFICATION=NO
 LOG RETENTION PERIOD=00.000 00:15:00.0
 COMMAND AUTH=NONE HLQ=**NULL**
 RCNQUAL=**NULL**
 CATALOG=PATSCD00
 ACCESS=SERIAL LIST=STATIC
 SIZALERT DSNUM=15 VOLNUM=16 PERCENT= 95
 LOGALERT DSNUM=3 VOLNUM=16

TIME STAMP INFORMATION:

TIMEZIN = %SYS -LABEL- -OFFSET-
 PDT -07:00
 PST -08:00

OUTPUT FORMAT: DEFAULT = LOCORG NONE PUNC YY
 CURRENT = LOCORG NONE PUNC YY

```

IMSPLEX = ** NONE **      GROUP ID = ** NONE **

-DDNAME-      -STATUS-      -DATA SET NAME-
RECON1        COPY1        ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON1
RECON2        COPY2        ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON2
RECON3        SPARE        ILOVE.IMS.SAIDPAT.RECON3

```

```
NUMBER OF REGISTERED DATABASES =          9
```

関連資料:

439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

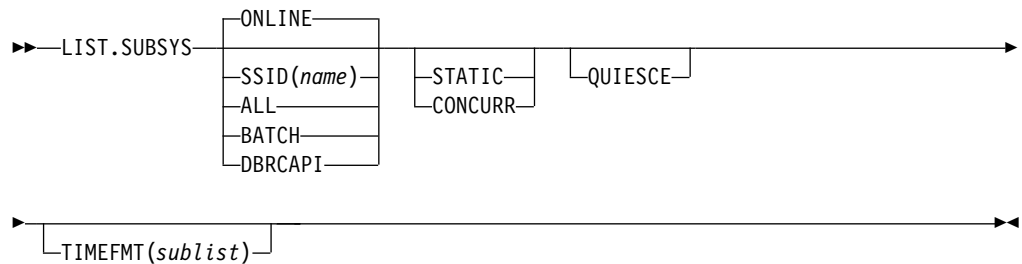
LIST.SUBSYS コマンド

LIST.SUBSYS コマンドは、RECON データ・セットに登録されているサブシステムの定様式リストを受け取るのに使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 384 ページの『すべてのオンライン・サブシステム・レコードの表示例』

構文



キーワード

ONLINE | **SSID(name)** | **ALL** | **BATCH** | **DBRCAPI**

互いに排他的なオプション・キーワードであり、表示するサブシステム情報を指定します。

ONLINE

すべてのオンライン・サブシステム情報を表示することを指定します。

SSID(name)

情報が表示するサブシステムの名前を指定します。

ALL

バッチおよびオンライン両方を含むすべてのサブシステム情報を表示することを指定します。

BATCH

すべてのバッチ・サブシステム情報を表示することを指定します。

DBRCAPI

すべての DBRCAPI サブシステム情報を表示することを指定します。

QUIESCE

RECON アクセスが並行で STATIC キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合に、コマンドを処理するために RECON データを静止することを設定することを示す、オプション・キーワード。CONCURR キーワードが指定されているかデフォルトになっている場合は、QUIESCE は無視されます。

STATIC | CONCURR

相互に排他的なオプション・キーワードで、並行 RECON アクセスが有効な場合に、リスト出力の作成方法を管理するのに使用されます。並行アクセスが有効でない場合に指定されると、キーワードは無視されます。

STATIC と CONCURR のどちらも指定されない場合、RECON ヘッダー・レコードからのデフォルト設定が使用されます。(デフォルトは INIT.RECON コマンド、CHANGE.RECON LIST コマンド、またはアップグレード処理で設定されます。)

STATIC

リスト出力がリスト処理中のある時点で整合するよう指定します。リスト処理がアクセスする RECON レコードは、リスト処理が完了するまでは、他の DBRC インスタンスによって更新できません。

CONCURR

リスト処理が RECON 更新アクティビティと並行して行えるよう指定します。この場合、リスト出力はどの時点でも RECON データの状態を反映しない可能性があります。

TIMEFMT(*sublist*)

DBRC からのメッセージ、表示、およびリストに現れるタイム・スタンプのフォーマットを定義するためのオプション・キーワード。5 つの値は定位置パラメーターです。それぞれの値はオプションであり、コンマを入れるだけで省略可能です。

LIST コマンドの TIMEFMT のデフォルトは、RECON ヘッダー・レコードに指定されている値から入手します。

すべてのオンライン・サブシステム・レコードの表示例

この例では、すべてのオンライン・サブシステム・レコードが表示されます。

```
//LISTSS JOB
:
//SYSIN DD *
LIST.SUBSYS
/*
```

関連資料:

439 ページの『第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト』

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

第 16 章 NOTIFY コマンド

NOTIFY コマンドは、通常では自動的に書き込まれる情報を RECON データ・セットに追加するために使用します。

NOTIFY.ALLOC コマンド

NOTIFY.ALLOC コマンドは、DBDS または DEDB エリアの、特定のデータベース割り振りまたは特定のデータベース割り振り解除について、RECON データ・セットに情報を追加します。

この情報の追加は、IMS の実行中に更新用に DBDS または DEDB エリアを割り振り、かつ、RECON データ・セットが更新されなかった場合にのみ必要となります。通常の操作状態では、このコマンドを使用する必要はありません。

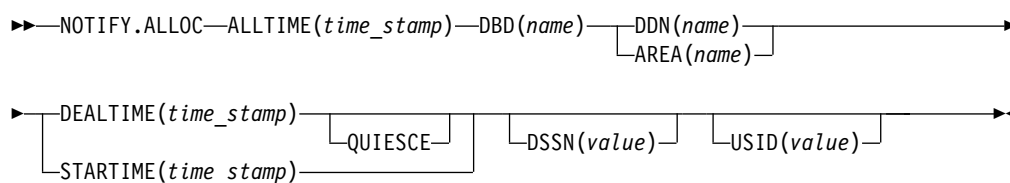
DBDS または DEDB エリアがリカバリー不能であるか、ユーザー・リカバリー可能であるか、使用中である場合、NOTIFY.ALLOC コマンドは失敗します。

HALDB データベースの制約事項: このコマンドは、ILDS または HALDB 区画の索引 DBDS には使用できません。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 386 ページの『割り振り情報を RECON データ・セットに追加する例』

構文



キーワード

ALLTIME(*time_stamp*)

このコマンドで指定する DBDS または DEDB エリアを含むデータベースの、割り振りのタイム・スタンプを指定する必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

STARTIME キーワードと一緒に使用すると、ALLTIME は、RECON データ・セットに新しい割り振りレコードを書き込みます。DEALTIME キーワードと一緒に使用すると、RECON データ・セットの割り振りレコードを識別し、そのレコードに割り振り解除時刻を追加します。

DBD(*name*)

RECON データ・セットに割り振り情報を追加する DBDS または DEDB エリアの、データベース名を指定する必須キーワードです。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに NOTIFY.ALLOC コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | **AREA**(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、割り振り情報を RECON データ・セットに追加する、DBDS または DEDB エリアのデータ・セット DD 名を指定するために使用します。

DEALTIME(*time_stamp*) | **STARTIME**(*time_stamp*)

互いに排他的な必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DEALTIME

指定された DBDS または DEDB エリアの、データベース割り振り解除のタイム・スタンプを指定します。この RECON データ・セットに対する追加は、データベースが更新用に割り振られ、かつ、IMS の実行が終了する前に明示的に割り振り解除された場合にのみ必要です。

STARTIME

ALLTIME キーワードで指定された割り振り時刻に、アクティブであったログ・データ・セットの、開始タイム・スタンプを指定します。

DSSN(*value*)

作成される割り振りレコードに入れるデータ・セット・シーケンス番号を指定するための、オプション・キーワードです。DSSN キーワードを指定しないと、新しい割り振りレコードのデータ・セット・シーケンス番号は 0 となり、これはデータ共用をしないことを示します。データ共用を行う場合は、該当の DSSN を指定する必要があります。このキーワードは、ログのマージ処理で使用します。

QUIESCE

指定された DEALLOC タイム・スタンプがデータベース静止コマンドによって生じたことを指定するオプション・キーワードです。このキーワードは、DEALTIME が指定されている場合にのみ有効です。

USID(*value*)

更新が生じたときに、データベースまたはエリアの更新セット ID を指定するオプション・キーワードです。

指定された USID 値がデータベースまたはエリアの現行の USID より大きい場合、そのデータベースまたはエリアを許可することはできません。また、この値は、現行の USID より 2 以上大きい値であってはなりません。

割り振り情報を **RECON** データ・セットに追加する例

この例は、指定された DBDS の割り振りについての情報を RECON データ・セットに追加します。ALLTIME キーワードは、DBDS または DEDB エリアの割り振りのタイム・スタンプを指定し、STARTIME キーワードは、割り振り時刻にアクティブであったログ・データ・セットの、開始タイム・スタンプを指定します。

```
//NFYALLOC JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.ALLOC DBD(DB1) DDN(DD1) -
STARTIME(07067020101023456) -
ALLTIME(070670308200)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

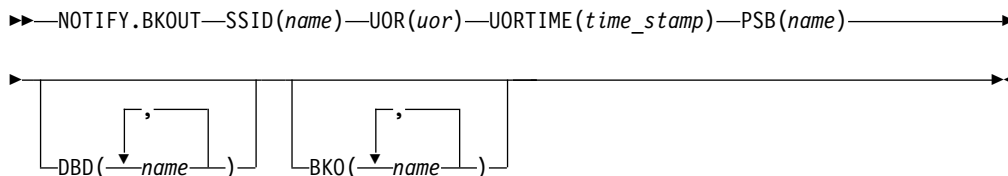
NOTIFY.BKOUT コマンド

NOTIFY.BKOUT コマンドは、指定されたサブシステムのバックアウト・レコードを作成し、作成されるレコードに 1 つのリカバリー単位 (UOR) エントリーを追加します。追加の UOR エントリーは、CHANGE.BKOUT コマンドを使用して、バックアウト・レコードに追加することができます。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 388 ページの『RECON データ・セットにバックアウト・レコードを追加する例』

構文



キーワード

SSID(*name*)

作成されるバックアウト・レコードが、どのサブシステム用のものであるかを指定する必須キーワードです。名前は、有効なサブシステム名を表す 8 文字の英数字ストリングです。

UOR(*uor*)

UORTIME キーワードと一緒に使用し、バックアウト・レコードのリカバリー単位を示す必須キーワード。リカバリー・トークン (*uor*) は 16 バイトのフィールドであり、バックアウト・レコードに含まれる特定の UOR を記述します。*uor* は、文字ストリングで表される 32 個の 16 進数字 (例えば、UOR(E2E8E2F3404040400000000600000003)) でなければなりません。

リカバリー・トークンは固有 ID ですが、再始動間で重複することがあります。UORTIME を含めれば、重複による問題がなくなります。

UORTIME(*time_stamp*)

バックアウト・レコードに追加される UOR の時刻を指定する必須キーワード

です。値は、UOR の開始を示すタイム・スタンプ (X'5607' ログ・レコードにあるもの) です。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

PSB(*name*)

UOR に関連付けられる PSB を指定するための必須キーワードです。

DBD(*name*)

バックアウトを必要とするリカバリー単位に関連付けられた変更を持つ、8 個までのデータベースを指定するオプション・キーワードです。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに NOTIFY.BKOUT コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

BKO(*name*)

既にバックアウトされたりリカバリー単位に関連付けられた変更を持つ、8 個までのデータベースを指定するオプション・キーワードです。

BKO は、この UOR と UORTIME の組み合わせから、既にバックアウトされたデータベースを指定します。BKO または DBD キーワードのいずれか、あるいはその両方を指定できます。データベース名は BKO または DBD のいずれかに指定できますが、両方に指定することはできません。(データベースをバックアウトし、同時にバックアウトを要求することはできません。)

RECON データ・セットにバックアウト・レコードを追加する例

この例では、サブシステム SYS3 のバックアウト・レコードを RECON データ・セットに追加します。

```
//NFYBKOUT JOB
:
//SYSIN DD *
        NOTIFY.BKOUT SSID(SYS3)
                        UOR(E2E8E2F340404040000000006000000003)
                        UORTIME(070931345027) PSB(APPL34)
                        DBD(DATA1,DATA2,DATA3C)
                        BKO(DATA4,DATA5,DATA3A)
/*
```

「57 ページの『標準フォーマットのタイム・スタンプ』」を参照してください。

NOTIFY.CA コマンド

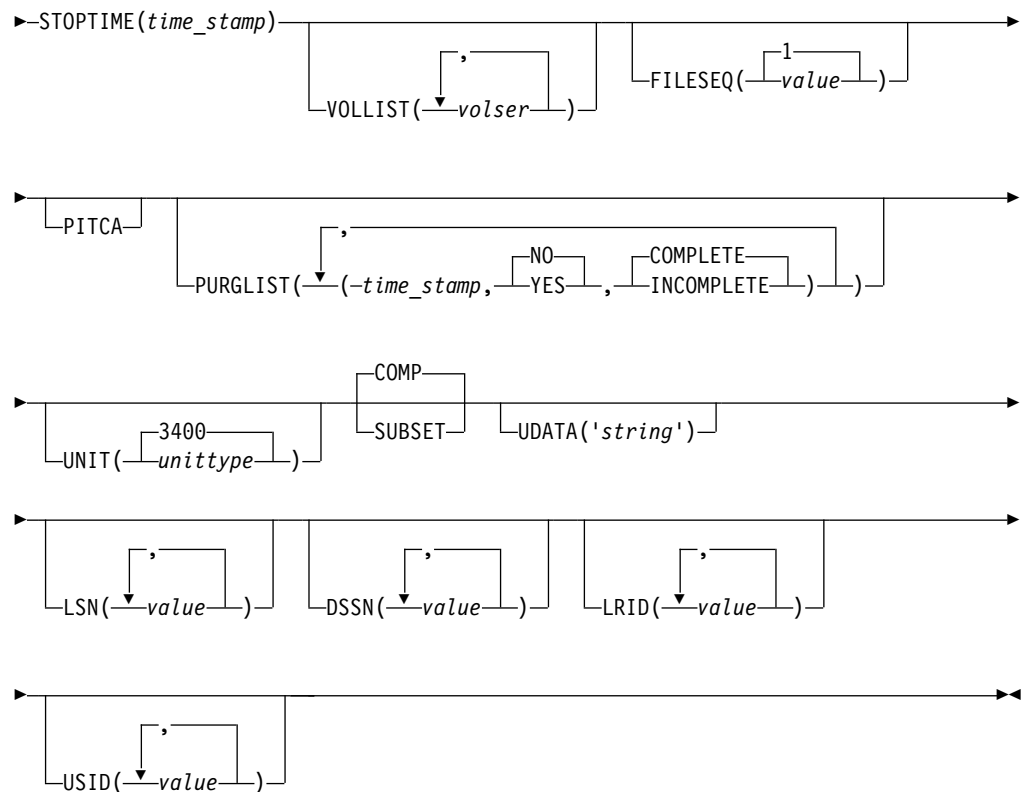
NOTIFY.CA コマンドは、指定された CA グループのデータベース変更累積ユーティリティの実行に関する情報を RECON データ・セットに追加するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 389 ページの『キーワード』
- 392 ページの『CADSN 情報を RECON データ・セットに追加する例』

構文

▶▶—NOTIFY.CA—CADSN(*name*)—GRPNAME(*name*)—RUNTIME(*time_stamp*)————▶▶



キーワード

CADSN(*name*)

示されたレコード内の変更累積データ・セットのデータ・セット名を指定する必須キーワードです。CA グループが再使用可能として定義されている場合、データ・セット名は固有でなければなりません。DBRC はデータ・セット名の重複を検査しません。

GRPNAME(*name*)

情報を追加する CA グループの名前を指定する必須キーワードです。

RUNTIME(*time_stamp*)

追加する特定の変更累積実行レコードを指定するための必須キーワードです。このタイム・スタンプは、データベース変更累積ユーティリティーが実行された時刻を表し、標準形でなければなりません。

STOPTIME(*time_stamp*)

情報を追加する変更累積実行レコードのタイム・スタンプを指定する必須キーワードです。このタイム・スタンプは、変更累積ユーティリティーの指定された実行で処理された、最後のログ・ボリュームの停止時刻です。これは標準形でなければなりません。

VOLLIST(*volser*)

定義される変更累積実行データ・セットが常駐するボリュームのボリューム通し番号を指定するために使用するオプション・キーワード。最大 255 のボリューム通し番号を *volser* に指定することができます。各ボリューム通し番号は、最大 6 文字の英数字を指定でき、ボリューム通し番号に関する z/OS JCL 規則

に従う必要があります。変更累積データ・セットがカタログ済みとして扱われない場合 (RECON 状況レコードに示されます)、VOLLIST は必須です。

FILESEQ(1 | value)

定義する変更累積実行データ・セットのファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワード。FILESEQ キーワードに 1 より大きい値を指定する場合は、VOLLIST キーワードも指定する必要があります。value は 1 から 9999 の 10 進数でなければなりません。

PITCA

IMS の外部で生成された CA レコードを追加するために使用するオプション・キーワード。追加されたレコードは、PITCA フラグと ERR フラグが ON になります。GENJCL.CA や GENJCL.RECOV など、他の DBRC 機能はこの CA を使用しません。

PURGLIST(time_stamp,NO | YES,COMPLETE | INCOMPLETE)

除去時刻 (入力ログ・レコード内の、変更累積が開始された時刻) を指定し、また、ログが完全なサブセットを構成するかどうかを指定するオプション・キーワードです。

タイム・スタンプは標準形にする必要があります。タイム・スタンプを指定しないと、時刻は 0 に設定されます。

リカバリーの入力として累算された変更を使用する場合、リカバリーのための DBRC 入力要件を満たす除去時刻を選択する必要があります。リカバリーは最初にイメージ・コピーを選択し、次にその DBDS の除去時刻がイメージ・コピーの実行時間と一致する変更累積を使用します。

NO | YES

互いに排他的なサブパラメーターで、対応する DBDS の変更を累積するかどうかを指定します。

NO 対応する DBDS の変更を累積しないことを指定します。

YES

対応する DBDS の変更を累積することを指定します。

COMPLETE | INCOMPLETE

互いに排他的なサブパラメーターです。ログが完全なサブセットを構成するかどうかを指定します。ログのサブセットが完全かどうかを判別するには、LIST.CAGRP コマンドを使用します。

COMPLETE

ログが完全なサブセットを構成することを指定します。COMPLETE を指定すると、STOPTIME キーワードのタイム・スタンプは、変更累積ユーティリティーへの最後のログ入力の停止時刻になります。

INCOMPLETE

ログが不完全なサブセットであることを指定します。INCOMPLETE を指定すると、STOPTIME キーワードのタイム・スタンプは、選択解除された (オープンな)、最も早いログ・ボリュームの開始時刻になります。このボリュームは、後の実行で選択される最初のものでなければなりません。

PURGLIST キーワードを指定すると、除去リスト内のタイム・スタンプと変更標識の順序は、INIT.CAGRP コマンドの GRPMEM キーワードに指定された

DBDS 名の順序になります。例えば、3 番目の除去時刻と変更標識は、INIT.CAGRP コマンドの GRPMEM キーワードに指定された 3 番目の DBDS のものです。

PURGLIST キーワードで指定したサブパラメーターが、INIT.CAGRP コマンドの GRPMEM キーワードに指定したものより少ない場合、DBRC は、省略された各 DBDS に NO と COMPLETE のデフォルトを使用します。同様に、PURGLIST キーワードを指定しないと、DBRC は、INIT.CAGRP コマンドの GRPMEM キーワードに指定された各 DBDS に、NO と COMPLETE のデフォルトを使用します。ある DBDS に NO のデフォルトを使用するには、コマを使用して、どの DBDS がデフォルトの対象となるかを示します。

UNIT(3400 | *unittype*)

変更累積データ・セットが存在するボリュームの装置タイプを指定するオプション・キーワード。 *unittype* は 8 文字までの英数字が可能です。UNIT キーワードを指定する場合は、VOLLIST キーワードも指定する必要があります。

COMP | SUBSET

互いに排他的なオプション・キーワードです。 変更累積レコードの停止時刻をログ・ボリュームの開始時刻とすることを示します。

COMP

CA の作成時に、ログの完全なセットが処理され、CA の停止時刻が、最後に処理されたログ・ボリュームの停止時刻であることを示します。

SUBSET

CA の作成時に、ログのサブセットが処理され、CA の停止時刻が、処理されていない最初のログ・ボリュームの開始時刻であることを示します。

PURGLIST キーワードに INCOMPLETE を指定しても、SUBSET は自動的に設定されません。

通常の状態では、このキーワードを使用する必要はありません。このキーワードの使用が、CA 停止時刻の値と整合しているかの検査は行われません。このキーワード値は、GENJCL.CA と GENJCL.RECOV の処理で使用されます。このキーワードの不適切な使用は、無効な JCL が生成の原因となります。

UDATA('string')

示された変更累積データ・セットについての情報を 80 バイトまで指定できるオプション・キーワード。このキーワードの変数フィールドを使用して、変更累積データ・セットがどのように作成されたかを記述できます。 *string* 値に空白またはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

LSN(value)

DBDS について累積された最後の変更のロック・シーケンス番号を指定するのに使用するオプション・キーワード。

ロック・シーケンス番号には、以下のいずれかを使用することができます。

- 1 から 12 文字の 16 進数。この番号は、単一引用符で囲み、先頭に文字 X が付きます。例: LSN(X'10B9C')
- 0 から (2**48) - 1 までの 10 進数。区切り文字を使用せずに指定します。例: LSN(68508)

DSSN(value)

DBDS について累積された最後の変更のデータ・セット・シーケンス番号を指定するのに使用するオプション・キーワード。

データ・セット・シーケンス番号は、0 から (2**32) - 1 までの 10 進数で指定することができ、区切り文字を使用せずに指定します。例: DSSN(68508)

LRID(value)

DBDS について累積された最後の変更の最終ログ・レコード ID を指定するのに使用するオプション・キーワード。

最終ログ・レコード ID には、以下のいずれかを使用することができます。

- 1 から 16 文字の 16 進数。この番号は、単一引用符で囲み、先頭に文字 X が付きます。例: LRID(X'10B9C')
- 0 から (2**64) - 1 までの 10 進数。区切り文字を使用せずに指定します。例: LRID(68508)

USID(value)

DBDS について累積された最後の変更の最終更新セット ID を指定するのに使用するオプション・キーワード。

最終更新セット ID は、0 から (2**32) - 1 までの 10 進数で指定することができ、区切り文字を使用せずに指定します。例: USID(68508)

CADSN 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、変更累積データ・セットについての情報を RECON データ・セットに追加しています。

```
//NFYCA JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.CA GRPNAME(CAGRP2) -
          STOPTIME(0702402020) -
          RUNTIME(070250305029) CADSN(CADSN06) -
          VOLLIST(VOL005) -
          PURGLIST((070240302005,YES),,(070250420256,))
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.IC コマンド

NOTIFY.IC コマンドは、イメージ・コピーに関する情報を RECON データ・セットに追加するために使用します。

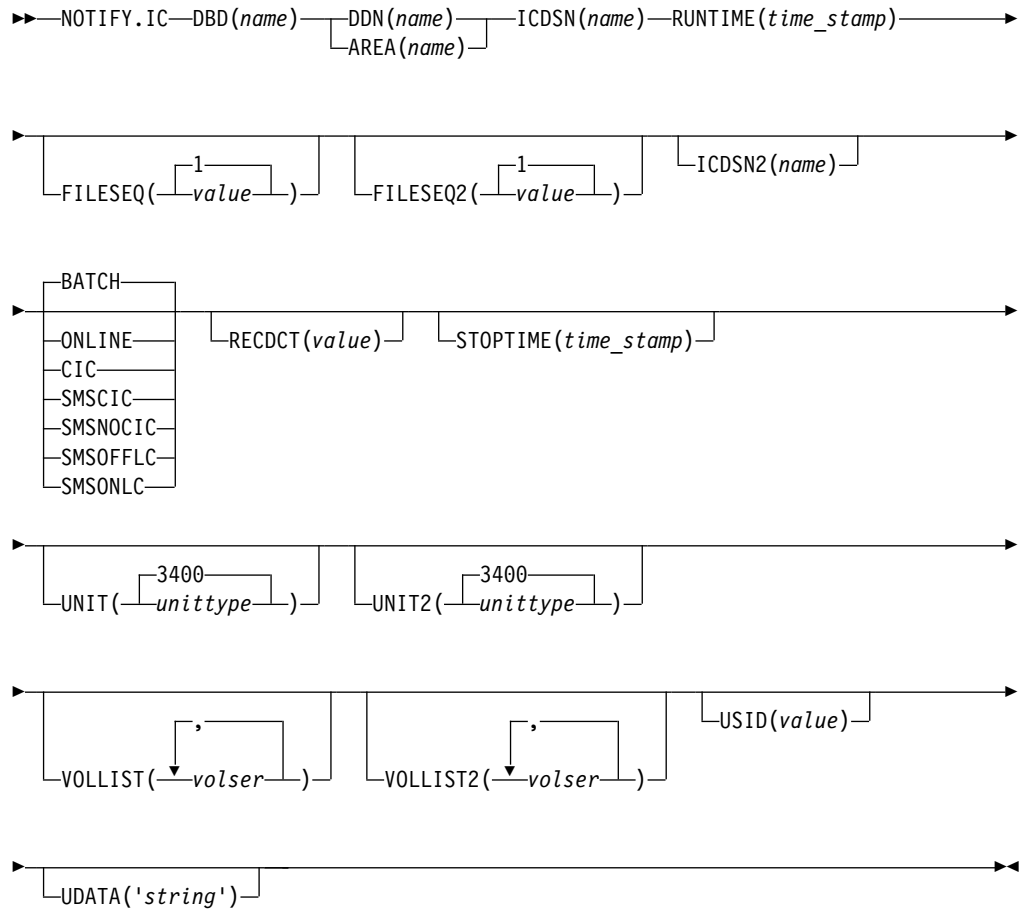
HALDB データベースの制約事項:

- NOTIFY.IC コマンドは、ILDS または HALDB 区画の索引 DBDS には使用できません。
- NOTIFY.IC コマンドは、オンライン再編成が進行中の HALDB のイメージ・コピーを記録しようとするとき失敗します。これは、HALDB のオンライン再編成中、および再編成が完了していないとき (再編成が進行中か終了している場合) は、HALDB のイメージ・コピーが取れないためです。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 396 ページの『並行イメージ・コピーの完了を DBRC に通知する例』

構文



キーワード

DBD(name)

イメージ・コピー実行レコードを追加する DBDS またはエリアの、データベース名を指定する必須キーワードです。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに NOTIFY.IC コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(name) | AREA(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、イメージ・コピー実行レコードを追加する DBDS (DDN を使用) または DEDB エリア (AREA を使用) の、データ・セット DD 名を指定します。

ICDSN(name)

実行レコードを追加するイメージ・コピーを含む、イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名を指定するために使用する必須キーワードです。
name は、最大 44 文字までです。

RUNTIME(time_stamp)

イメージ・コピー・ユーティリティーが実行された時刻を指定する必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(1 | value)

示されたイメージ・コピー・データ・セットの、ファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。*value* は 1 から 9999 の 10 進数でなければなりません。

FILESEQ2(1 | value)

示された重複イメージ・コピー・データ・セットの、ファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。*value* は、1 から 9999 の 10 進数です。

このキーワードは、VOLLIST2 キーワードを指定した場合のみ指定できます。VOLLIST2 キーワードを指定した場合、このキーワードのデフォルトは FILESEQ2(1) です。

ICDSN2(name)

実行レコードを追加するイメージ・コピーを含む、重複イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名を指定するオプション・キーワードです。*name* は、最大 44 文字までです。

BATCH | ONLINE | CIC | SMSCIC | SMSNOCIC | SMSONLC | SMSOFFLC

互いに排他的なオプション・キーワードであり、データ・セットに含まれるイメージ・コピーのタイプを指定します。

制約事項: CIC、SMSCIC、および ONLINE はユーザー・リカバリー可能データベースには使用できません。

BATCH

データベースが更新処理のために使用できなかった間、データベース・イメージ・コピー (DFSUDMP0) ユーティリティーを使用して、イメージ・コピーが作成されたことを示します (CIC キーワードが指定されなかった)。
BATCH は、HISAM 再編成アンロード・ユーティリティー・イメージ・コピーの出力を記録する場合にも指定できます。

ONLINE

イメージ・コピー・データ・セットが、オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティーを実行して得られたことを指定します。
ONLINE を指定する場合は、STOPTIME キーワードを使用する必要があります。

CIC

並行イメージ・コピーが取られたことを示します。並行イメージ・コピーは「ファジー」コピーのため、データ・セットはイメージを完全なものにするためにログを使用します。CIC を指定する場合は STOPTIME を使用する必要があります。CIC は、VSAM KSDS データベースのコピーには使用できません。

SMSCIC

データベースが更新処理のために使用できなかった間、データベース・イメージ・コピー 2 を使用して、イメージ・コピーが作成されたことを示します (ユーティリティー制御ステートメントに 'S' が指定された)。イメージ・コピーは DFSMS ダンプ・フォーマットです。イメージ・コピーは「ファジー」コピーのため、データ・セットを使用可能な状態にリカバリーするには、ログを適用する必要があります。SMSCIC を指定する場合は、STOPTIME キーワードを指定する必要があります。

SMSNOCIC

データベースが更新処理のために使用できなかった間、データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティーを使用して、イメージ・コピーが作成されたことを示します (ユーティリティー制御ステートメントに 'X' が指定された)。イメージ・コピーは DFSMS ダンプ・フォーマットです。

SMSOFFLC

データベースが更新処理のために使用できない間に、データベース・イメージ・コピー・コピー 2 ユーティリティーが DFSMS 高速複製を呼び出してイメージ・コピーを作成したことを示します。イメージ・コピーは DFSMS COPY コマンドによって作成されました。

SMSONLC

データベース・イメージ・コピー 2 ユーティリティーが DFSMS 高速複製を呼び出して、更新処理と並行してイメージ・コピーを作成したことを示します。イメージ・コピーは DFSMS COPY コマンド・フォーマットで作成されました。このイメージ・コピーは「ファジー」コピーであるため、データ・セットを使用可能な状態にリカバリーするには、ログを適用する必要があります。SMSONLC を指定する場合は、STOPTIME キーワードを指定する必要があります。

RECDCT(*value*)

イメージ・コピー・データ・セット内の、レコードのカウントを指定するオプション・キーワードです。 *value* は、1 から 2147483647 の 10 進数でなければなりません。

STOPTIME(*time_stamp*)

オンラインまたは並行イメージ・コピーの停止時刻を指定する、オプション・キーワードです。オンライン、CIC、SMSCIC、または SMSONLC を指定する場合は、このキーワードを指定する必要があります。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

UNIT(3400 | *unittype*)

イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定する、オプション・キーワードです。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

UNIT2(3400 | *unittype*)

重複イメージ・コピー・データ・セットの装置タイプを指定する、オプション・キーワードです。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームのボリューム通し番号を指定するために使用するオプション・キーワード。可変フィールドには、1 か

ら 255 個のボリューム通し番号を指定できます。各ボリューム通し番号は、6 文字までの英数字を指定でき、ボリューム通し番号に関する z/OS JCL 規則に従う必要があります。

重要: イメージ・コピー・データ・セットがカタログ済みとして扱われない場合 (RECON 状況レコードに示されます)、およびこのデータ・セットが SMS イメージ・コピーでない場合、VOLLIST は必須です。

VOLLIST2(volser)

重複イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームのボリューム通し番号を指定するために使用するオプション・キーワード。可変フィールドには、1 から 255 個のボリューム通し番号を指定できます。各変数は、最大 6 文字の長さの英数字を指定でき、ボリューム通し番号に関する z/OS JCL 規則に従う必要があります。VOLLIST2 は、ICDSN2 キーワードも指定されている場合にのみ許可されます。

重要: イメージ・コピー・データ・セットがカタログ済みとして扱われない場合 (RECON 状況レコードに示されます)、およびこのデータ・セットが SMS イメージ・コピーでない場合、VOLLIST2 は必須です。

USID(value)

再編成が生じたときの、データベースまたはエリアの更新セット ID を指定するオプション・キーワードです。

UDATA('string')

示された標準イメージ・コピー・データ・セットについての情報を 80 バイトまで指定できるオプション・キーワード。このキーワードの変数フィールドを使用して、標準イメージ・コピー・データ・セットがどのように作成されたかを記述できます。*string* 値にブランクまたはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

並行イメージ・コピーの完了を DBRC に通知する例

この例は、指定されたエリアの並行イメージ・コピーの正常終了を DBRC に通知しています。RUNTIME は、イメージ・コピーが開始された時刻を示します。STOPTIME は、イメージ・コピーが停止した時刻を示します。

```
//NFYIC JOB
:
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.IC DBD(DBD001) AREA(AREA1) -
          RUNTIME(0720002020) -
          STOPTIME(0720004040) -
          ICDSN(IC0005) CIC -
          UDATA('FIRST CIC OF THE WEEK')
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

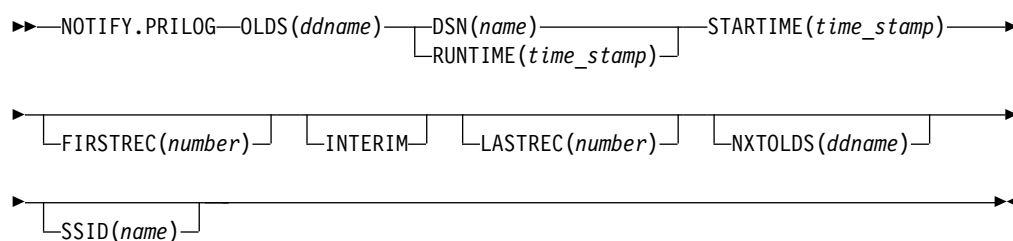
NOTIFY.PRILOG コマンド (OLDS 用)

NOTIFY.PRILOG コマンドは、1 次 OLDS についての情報を RECON データ・セットに追加し、また暫定 PRILOG を手作業で RECON データ・セットに作成するために使用します。この操作を行うのは、IMS システムのログ処理出口ルーチンがこれを失敗した場合です。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 399 ページの『例』

構文



キーワード

OLDS(ddname)

OLDS のレコードを RECON データ・セット内に作成することを指定する必須キーワード。

ddname

IMS オンライン制御領域が OLDS を使用したときに使用した DD ステートメントの名前を指定します。

注: OLDS キーワードを指定しないと、RLDS レコードを作成または更新しようとしています。

DSN(name) | RUNTIME(time_stamp)

互いに排他的な必須キーワードです。

DSN

RECON データ・セットにそのログ・レコードを作成する 1 次 OLDS のデータ・セット名を指定します。

RUNTIME

指定された 1 次 OLDS のクローズ操作のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

これらの 2 つのキーワードは、STARTIME、FIRSTREC、および NXTOLDS キーワードと組み合わせて使用して、どのタイプの 1 次 OLDS エントリーを RECON に追加するかを示します。以下の表では、各タイプの 1 次 OLDS エントリーに必要なキーワードの組み合わせを示します。

定義:

OLDS オープン
OLDS の使用の開始、および開始時刻の挿入。

OLDS スイッチ
現行 OLDS の使用の停止 (停止時刻の挿入)、および次の OLDS の使用開始 (新しい OLDS への開始時刻の挿入)。

OLDS クローズ
OLDS の使用の停止 (停止時刻の挿入)。

表 15. オープン、スイッチ、クローズ用の NOTIFY.PRILOG コマンド (OLDS 用) のパラメーター

ログ・エントリーのタイプ	必要なキーワード
OLDS オープン	STARTIME、DSN、FIRSTREC
OLDS スイッチ	STARTIME、DSN、FIRSTREC、NXTOLDS
OLDS クローズ	LASTREC、STARTIME、RUNTIME

それぞれの 1 次 OLDS ごとに、オープン、スイッチ、およびクローズのための別の NOTIFY.PRILOG コマンドを実行する必要があります。

STARTIME(*time_stamp*)

1 次 OLDS の開始時刻を指定する必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。NOTIFY.PRILOG コマンドの他のキーワードと一緒にこのキーワードを使用する場合の説明は、表 15 を参照してください。

FIRSTREC(*number*)

OLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。PRILOG の最初の OLDS の場合は、IMS サブシステムの初期設定中に書き込まれた最初のログ・レコードに対応します。

OLDS OPEN および SWITCH コマンドには、FIRSTREC が必須です。これは、オープンされる OLDS 上の最初のログ・レコード・シーケンス番号を指定します。これは CLOSE コマンドには無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: FIRSTREC(X'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: FIRSTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

INTERIM

中間ログ・データ・セット・レコードを作成することを指定するオプション・キーワードです

NOTIFY.PRILOG INTERIM を指定するには、対応する 1 次ログ・レコードが存在しなければなりません。

LASTREC(*number*)

OLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。

LASTREC は、OLDS CLOSE コマンドでは必須です。これは SWITCH コマンドにはオプションであり、省略すると、FIRSTREC 値から 1 を引いた値が、クローズされる OLDS に記録されます。これは OPEN コマンドには無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: LASTRECX'10B9C'。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: LASTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

NXTOLDS(*ddname*)

OLDS スイッチを反映するために、RECON データ・セットを更新する時に使用するオプション・キーワードです。現行 OLDS はクローズされ、IMS オンライン制御領域は新しい OLDS をオープンします。ddname は、オープンされる OLDS の DD ステートメントです。クローズされる OLDS は、OLDS(ddname) キーワードで指定します。DSN(name) キーワードは、オープンされる OLDS のデータ・セット名を指定します。STARTIME(time_stamp) キーワードは、クローズされる OLDS のクローズ時刻および、オープンされる OLDS のオープン時刻を指定する場合に使用します。

SSID(*name*)

ログ・データ・セットを作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す 8 文字の英数字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードのデフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用して設定します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

例

以下に、NOTIFY.PRILOG (for OLDS) コマンドの使用例をいくつか示します。

オンライン・サブシステム OLDS 用の PRIOLDS を作成する例

次の例では、IMS オンライン・サブシステム IMSA に属する OLDS 用の PRIOLDS を作成します。

```
//NFYPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
```

```

NOTIFY.PRILOG  STARTIME(071230554321) -
                DSN(IMS.OLDSP13) OLDS(DFSOLP13) -
                FIRSTREC(001) -
                SSID(IMSA)

```

/*

RECON データ・セットに 2 つの 1 次 **OLDS** についての情報を追加する例

次の例では、IMS オンライン・サブシステム IMSA に属する 2 つの OLDS 用の PRIOLDS を作成します。両方の OLDS がクローズされます。最初の STARTIME キーワードは、1 次 OLDS のオープンのタイム・スタンプを指定します。DSN キーワードは、追加される情報が OLDS のオープンに関するものであることを示します。NXTOLDS は、OLDS スイッチを示します。2 番目の STARTIME キーワードと 2 番目の DSN は、次の OLDS の開始時刻と DSN を示します。3 番目の STARTIME キーワードは、クローズされる OLDS の開始時刻を示します。RUNTIME キーワードは、クローズするボリュームのタイム・スタンプです。

```

NOTIFY.PRILOG SSID(IMSA) STARTIME(072171212120) OLDS(DFSOLP01) -
                DSN(IMS.OLDP01) LASTREC(4999)
NOTIFY.PRILOG SSID(IMSA) STARTIME(072181212120) OLDS(DFSOLP01) -
                DSN(IMS.OLDP02) NXTOLDS(DFSOLP02)
NOTIFY.PRILOG SSID(IMSA) STARTIME(072181212120) OLDS(DFSOLP02) -
                RUNTIME(072191010101)

```

/*

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用)

NOTIFY.PRILOG コマンドを使用して、1 次 RLDS (またはバッチ・サブシステムが作成した 1 次 SLDS) についての情報を RECON データ・セットに追加し、また暫定 1 次ログ・データ・セット・レコードを手作業で RECON データ・セットに作成します。

この情報は、IMS システム・ログ処理出口ルーチンから RECON データ・セットに追加できなかった情報です。IMS を使用して DBDS を処理する場合、通常の操作状態ではこのコマンドを使用する必要はありません。追加される 1 次 RLDS 上に変更レコードが存在する可能性のある各 DBDS について、NOTIFY.ALLOC コマンドを指定する必要があります。

このコマンドは、PRILOG レコード内のデータ・セット・エントリーを追加または完了します。既存の完了したデータ・セット・エントリーを変更する場合は、CHANGE.PRILOG(RLDS) コマンドを使用する必要があります。

サブセクション:

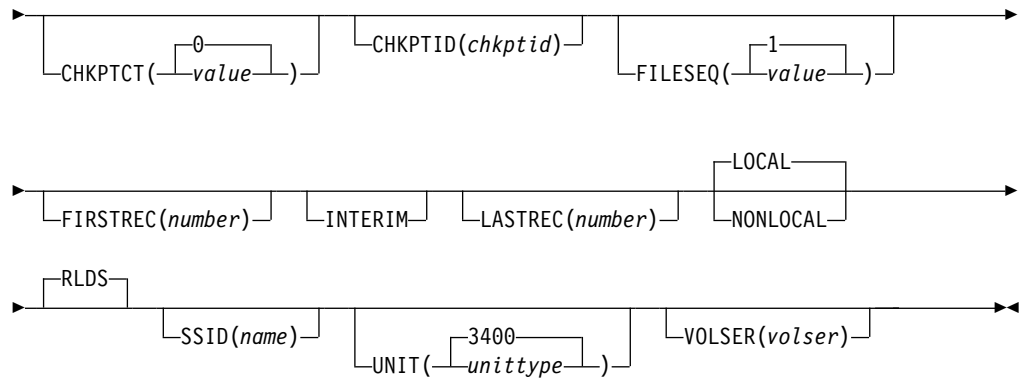
- 『構文』
- 401 ページの『キーワード』
- 404 ページの『例』

構文

```

▶▶NOTIFY.PRILOG—┬──DSN(name)──┬──STARTIME(time_stamp)──▶
                  └──RUNTIME(time_stamp)──┘

```



キーワード

DSN(name) | RUNTIME(time_stamp)

互いに排他的な必須キーワードです。

DSN

RECON データ・セットにログ・レコードを作成する 1 次 RLDS のデータ・セット名を指定します。

RUNTIME

指定された 1 次 RLDS の、クローズ操作またはボリュームの終わり (EOV) 操作のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

これらの 2 つのキーワードは、STARTIME および VOLSER キーワードと組み合わせて使用し、どのタイプの 1 次リカバリー・ログ・データ・セット・エントリーを RECON データ・セットに追加するかを示します。

以下の表では、各タイプの 1 次リカバリー・ログのデータ・セット・エントリーに必要なキーワードの組み合わせを示します。

定義：

RLDS オープン

RLDS の使用の開始、および開始時刻の挿入。

RLDS EOV

オペレーティング・システムからの RLDS ボリュームの終わり (EOV) の通知。これは OLDS Switch に類似したものです。

RLDS クローズ

RLDS の使用の停止 (停止時刻の挿入)

表 16. オープン、EOV、およびクローズ用の NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用) のキーワード

ログ・エントリーのタイプ	必要なキーワード
RLDS オープン	STARTIME、DSN、VOLSER、FIRSTREC
RLDS EOV	STARTIME、VOLSER、RUNTIME
RLDS クローズ	STARTIME、RUNTIME、LASTREC

それぞれの 1 次 RLDS ごとに、オープン、ゼロまたはそれ以上の EOV、およびクローズのための別の NOTIFY.PRILOG コマンドを実行する必要があります。

STARTIME(*time_stamp*)

1 次 RLDS の開始時刻を指定する必須キーワードです。

タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

NOTIFY.PRILOG コマンドの他のキーワードと一緒に STARTIME キーワードを使用する場合の説明は、401 ページの表 16を参照してください。

CHKPTCT(**0** | *value*)

RLDS ボリューム上で完了したチェックポイントの数を指定するオプション・キーワードです。

CHKPTCT に有効な値は、以下のものです。

- 0 RLDS ボリュームにチェックポイントがない
- 1 RLDS ボリュームに 1 つのチェックポイントがある
- 2 RLDS ボリュームに複数のチェックポイントがある

IMS は CHKPTCT の値を使用して、並行イメージ・コピーを使用した高速機能エリアのリカバリーに必要なログを判別します。

CHKPTID(*chkptid*)

RLDS 上のアクティブ区画仕様テーブル (PST) の、最も古いチェックポイント ID を指定するオプション・キーワードです。チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(**1** | *value*)

示された 1 次 RLDS のファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。このキーワードは、VOLSER キーワードを指定した場合のみ指定できます。

FIRSTREC(*number*)

RLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。PRILOG の最初の RLDS の場合、IMS サブシステムの初期設定中に書き込まれた最初のログ・レコードに対応します。

FIRSTREC は、DSN が指定されている場合は必須であり、RUNTIME が指定されている場合は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: FIRSTREC(X'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: FIRSTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

INTERIM

中間ログ・データ・セット・レコードを作成することを指定するオプション・キーワードです。NOTIFY.PRILOG INTERIM コマンドを実行する前に、対応する 1 次リカバリー・ログ・レコードを作成する必要があります。

LASTREC(number)

RLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。

LASTREC は、RUNTIME が指定され、VOLSER が指定されていない場合 (つまり、CLOSE 呼び出し) では必須です。DSN が指定されている場合、LASTREC は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: LASTRECX'10B9C'。

- 10 進数

この数は、0 から $(2^{*64})-1$ までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: LASTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

LOCAL | NONLOCAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RLDS データが元はどこで作成されたかを指定します。LOCAL は、RLDS がローカル・サービス・グループのアクティブ IMS サブシステムにより作成された場合に使用されます。

NONLOCAL は、RLDS が、元はローカル・サービス・グループ以外のアクティブ IMS サブシステムにより作成され、トラッキング・サイトにトランスポートされた場合に使用されます。

LOCAL または NONLOCAL は、PRILOG レコードの作成時にのみ指定する必要があります。LOCAL または NONLOCAL キーワードは、PRILOG レコードの後続の NOTIFY.PRILOG 呼び出しでは無視されます。

NONLOCAL を指定した場合、キーワード CHKPTID、FILESEQ、UNIT、または VOLSER のいずれも、PRILOG レコードの NOTIFY.PRILOG 呼び出しに指定することはできません (データ・セットはカタログされていなければなりません)。

RLDS

RLDS レコードが作成または更新されることを指定するオプション・キーワードです。

SSID(name)

ログ・データ・セットを作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す、8 文字の英数字からなる文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードのデフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用して設定します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

UNIT(3400 | unittype)

RLDS の装置タイプを指定する、オプション・キーワードです。UNIT キーワ

ードは、DSN キーワードを指定した場合のみ指定します。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLSER(*volser*)

示された 1 次 RLDS 用に記録されるログ・ボリユームの、ボリユーム通し番号を指定するオプション・キーワードです。EOV 通知の場合、このボリユーム通し番号が開始されるボリユームになります。

RLDS オープンと EOV 処理中には VOLSER キーワードを使用する必要があります。

例

ここでは、NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) コマンドの使用例をいくつか示します。

1 次 RLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、1 次 RLDS についての情報を RECON データ・セットに追加しています。VOLSER および DSN キーワードは、追加される情報が 1 次 RLDS のオープンに関したものであることを示します。STARTIME キーワードは、1 次 RLDS のオープンのタイム・スタンプを指定します。最初の RUNTIME キーワードは、1 次 RLDS の最初のボリユームの EOV のタイム・スタンプを指定します。2 番目の RUNTIME キーワードは、1 次 RLDS のクローズ・ボリユームのタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.PRILOG RLDS STARTIME(07067020101023456) -
VOLSER(VOL001) DSN(PRILOG1) FIRSTREC(001)
NOTIFY.PRILOG RLDS STARTIME(07067020101023456) -
VOLSER(VOL002) RUNTIME(070670202020)
NOTIFY.PRILOG RLDS STARTIME(07067020101023456) -
LASTREC(9999) RUNTIME(070670303030)
/*
```

暫定 1 次 RLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、暫定 1 次 RLDS についての情報を RECON データ・セットに追加しています。STARTIME キーワードは、暫定 1 次 RLDS のオープンのタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.PRILOG RLDS STARTIME(07254123456123456) -
DSN(DSNIRLDS) -
VOLSER(VOL008) -
FIRSTREC(077) -
INTERIM
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

DSN

RECON データ・セットにそのログ・レコードを作成する 1 次 SLDS のデータ・セット名を指定します。

RUNTIME

指定された 1 次 SLDS の、クローズ操作またはボリュームの終わり (EOV) 操作のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

この 2 つのキーワードを、STARTIME、FIRSTREC、LASTREC、および VOLSER キーワードと組み合わせて使用して、どのタイプの 1 次システム・ログ・データ・セット・エントリーを RECON データ・セットに追加するのかが示します。以下の表では、各タイプの 1 次システム・ログ・データ・セット・エントリーに必要なキーワードの組み合わせを示します。

定義：

SLDS オープン

SLDS の使用の開始、および開始時刻の挿入。

SLDS EOV

オペレーティング・システムからの SLDS ボリュームの終わり (EOV) の通知。これは OLDS Switch に類似したものです。

SLDS クローズ

SLDS の使用の停止 (停止時刻の挿入)

表 17. オープン、EOV、およびクローズ用の NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) コマンドのキーワード

ログ・エントリーのタイプ	必要なキーワード
SLDS オープン	STARTIME、DSN、VOLSER、FIRSTREC
SLDS EOV	STARTIME、VOLSER、RUNTIME
SLDS クローズ	STARTIME、RUNTIME、LASTREC

それぞれの 1 次 SLDS ごとに、オープン、ゼロまたはそれ以上の EOV、およびクローズのための別の NOTIFY.PRILOG コマンドを実行する必要があります。

STARTIME(*time_stamp*)

1 次 SLDS の開始時刻を指定する必須キーワードです。サブシステム・レコードまたは PRILOG レコードからログ開始時刻を使用します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。NOTIFY.PRILOG コマンドの他のキーワードと一緒にこのキーワードを使用する場合の説明は、表 17 を参照してください。

CHKPTCT(*value*)

SLDS ボリューム上で完了したチェックポイントの数を変更するために使用する、オプション・キーワードです。指定された各 SLDS ボリューム用の値を指定します。

CHKPTCT に有効な値は、以下のものです。

- 0 SLDS ボリュームにチェックポイントがない
- 1 SLDS ボリュームに 1 つのチェックポイントがある

2 SLDS ボリュームに複数のチェックポイントがある

IMS は CHKPTCT の値を使用して、並行イメージ・コピーを使用した高速機能エリアのリカバリーに必要なログを判別します。

CHKPTID(*chkptid*)

SLDS ボリューム上のアクティブ PST の、最も古いチェックポイント ID を指定するオプション・キーワードです。チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(1 | *value*)

示された 1 次 SLDS のファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。このキーワードは、VOLSER キーワードも指定した場合のみ指定します。

FIRSTREC(*number*)

SLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。PRISLD の最初の SLDS の場合、FIRSTREC は、IMS サブシステムの初期設定の際に書き込まれた最初のログ・レコードに対応します。

FIRSTREC は、DSN が指定されている場合は必須であり、RUNTIME が指定されている場合は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: FIRSTREC(X'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: FIRSTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

INTERIM

中間ログ・データ・セット・レコードを作成することを指定するオプション・キーワードです

LASTREC(*number*)

SLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。

LASTREC は、RUNTIME が指定され、VOLSER が指定されていない場合 (つまり、CLOSE 呼び出し) では必須です。DSN が指定されている場合、LASTREC は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: LASTRECX'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: LASTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

SSID(*name*)

ログ・データ・セットを作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す 8 文字の英数字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードのデフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用して設定します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

UNIT(3400 | *unittype*)

SLDS の装置タイプを指定する、オプション・キーワードです。UNIT キーワードは、DSN キーワードを指定した場合のみ指定します。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLSER(*volser*)

示された 1 次 SLDS 用に記録されるログ・ボリュームの、ボリューム通し番号を指定するオプション・キーワードです。EOV 通知の場合、このボリューム通し番号が開始されるボリュームになります。

注: SLDS のオープンおよび EOV 中には VOLSER キーワードを使用する必要があります。

1 次 SLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、1 次 SLDS についての情報を RECON データ・セットに追加しています。VOLSER および DSN キーワードは、追加される情報が 1 次 SLDS のオープンに関するものであることを示します。STARTIME キーワードは、1 次 SLDS のオープンのタイム・スタンプを指定します。最初の RUNTIME キーワードは、1 次 SLDS の最初のボリュームの EOV のタイム・スタンプを指定します。2 番目の RUNTIME キーワードは、1 次 SLDS のクローズ・ボリュームのタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYPRILG JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.PRILOG SLDS STARTIME(07067020101023456) -
              VOLSER(VOL004) DSN(PRILOG4) FIRSTREC(7000)
NOTIFY.PRILOG SLDS STARTIME(07067020101023456) -
              VOLSER(VOL005) RUNTIME(070670202020)
NOTIFY.PRILOG SLDS STARTIME(07067020101023456) -
              RUNTIME(070670303030) LASTREC(8889)
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.RECOV コマンド

NOTIFY.RECOV コマンドは、指定された DBDS または DEDB エリアのリカバリーについての情報を RECON データ・セットに追加します。

データベース・リカバリー・ユーティリティーを使用する以外の何らかの方法で (例えば、DBDS またはエリアが存在する DASD ボリュームを復元することにより)、DBDS または DEDB エリアのリカバリーを実行した場合は必ず、このコマンドを使用する必要があります。さらに、データベース・リカバリー・ユーティリティーを使用して、いつ DBDS または DEDB エリアをリカバリーするかを DBRC に通知することができます。

DEDB 変更ユーティリティーによって作成されたユーザー・イメージ・コピー・データ・セットを使用して DEDB エリアをリカバリーする必要がある場合も、このコマンドを使用することができます。データベース・リカバリー・ユーティリティーを実行する前に、NOTIFY.RECOV コマンドを発行して DEDB エリアを復元したことを DBRC に通知してください。

RCVTIME キーワードを指定して DBRC にタイム・スタンプ・リカバリーを知らせる場合、RECON データは、DBDS または DEDB エリアの復元に使用したイメージ・コピー・データ・セットのレコードを含んでいる必要があります。イメージ・コピー・レコードは、標準イメージ・コピーまたは標準外クリーン・イメージ・コピーを使用できます。標準外クリーン・イメージ・コピーの場合、そのタイム・スタンプは、既存のタイム・スタンプ・リカバリーの範囲内 (RECOV TO 時刻から RUN 時刻までの時間) に入りません。イメージ・コピー・レコードのタイム・スタンプは、NOTIFY.RECOV コマンドの RCVTIME キーワードに指定されたものと等しくなければなりません。NOTIFY.RECOV コマンドでは標準外ファジー・イメージ・コピーは使用しないでください。

受信の場合は、RCVUSID パラメーターと RUNUSID パラメーターの両方を指定します。両方のパラメーターに同じ *usid* 値を指定します。これは、リカバリーに使用されたイメージ・コピーの更新セット ID (*usid*) です。タイム・スタンプ・リカバリーの場合、RCVUSID パラメーターにはデータベースのリカバリー先の *usid* 値を指定し、RUNUSID パラメーターにはリカバリーの実行時に現行であった *usid* を指定します。以後のリカバリーでは、RCVUSID パラメーターに指定された値と RUNUSID パラメーターに指定された値の間の *usid* 値に関連するすべてのレコードが無視されます。

データ共用環境では、ユーザーが DBRC に標準外のリカバリーまたは IMS リカバリーを通知した後、DBRC は「リカバリー必要」フラグをオフにし、該当する DBDS 内のカウンターと RECON データ・セット内の DB レコードを減らします。

DEDB 変更ユーティリティーによって作成されたユーザー・イメージ・コピー・データ・セットを使用して DEDB エリアをリカバリーする必要がある場合は、データベース・リカバリー・ユーティリティーを実行する前に NOTIFY.RECOV コマンドを発行する必要があります。

- NOTIFY.RECOV コマンドを発行し、DEDB エリアを復元したことを DBRC に通知します。RCVTIME(*time_stamp*) は、DEDB 変更ユーティリティーによって

作成されて RECON に記録されたユーザー・イメージ・コピーのタイム・スタンプです。NOTIFY.RECOV DBD(*name*) AREA(*name*) RCVTIME(*time_stamp*)

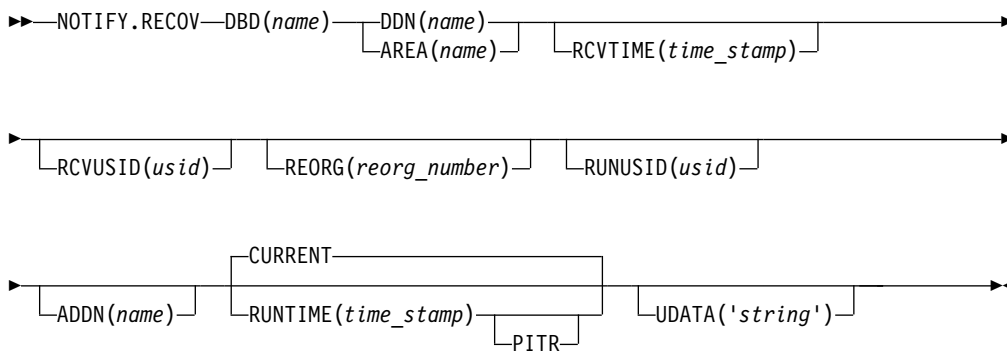
- USEAREA キーワードを使用してリカバリー JCL を生成し、生成する JCL にイメージ・コピー・データ・セットを含めないように指示するには、次のように GENJCL.RECOV コマンドを発行します。GENJCL.RECOV DBD(*name*) AREA(*name*) USEAREA

制約事項: このコマンドは、ILDS または HALDB 区画の索引には使用できません。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 412 ページの『DBDS リカバリー情報を RECON データ・セットに追加する例』

構文



キーワード

DBD(*name*)

DBD または DEDB エリアの、データベース名を指定する必須キーワードです。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに NOTIFY.RECOV コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*) | AREA(*name*)

互いに排他的な必須キーワードであり、DBRC が RECON データ・セットにデータベース・リカバリー・レコードを追加する DBDS または DEDB エリアの DD 名を指定します。

ADDN(*name*)

RECON データ・セットに高速機能 DEDB エリアのリカバリー・レコードを追加する ADS の、ADS DD 名を指定するオプション・キーワードです。

このキーワードは、AREA(*name*) キーワードを指定した場合のみ指定できます。

CURRENT | RUNTIME(*time_stamp*)PITR

互いに排他的なオプション・キーワードであり、DBDS または DEDB エリアがリカバリーされた時のタイム・スタンプを指定します。

CURRENT

リカバリーのタイム・スタンプとして、現行タイム・スタンプを使用することを指定します。CURRENT を指定すると、リカバリーを実行する同じジョブの後のステップで、RECON データ・セットにリカバリー情報を追加することができます。

RUNTIME

DBDS または DEDB エリアのリカバリーの、実際のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

オプションの PITR キーワードは、時刻指定リカバリーを指定します。PITR を使用する場合は、RCVTIME キーワードを使用する必要があります。

RCVTIME(*time_stamp*)

DBDS または DEDB エリアが復元された先の時刻を指定するオプション・キーワードです。これは、DBDS またはエリアが更新されていなかった時刻、つまり、RECON データ・セットのアクティブ ALLOC レコードが対象としていない時刻であればいずれの時刻でも構いません。

RCVTIME キーワードを指定しない場合は、DBRC に完全リカバリーを通知することになります。

PITR キーワードと一緒に RUNTIME キーワードを使用する場合は、RCVTIME を使用する必要があります。

RCVUSID(*usid*)

DBD または DEDB エリアのリカバリー先である有効な更新セット ID (USID) を指定するオプション・キーワードです。

使用する USID 値は、IMAGE レコードのリストにあります。

REORG(*reorg_number*)

データベースがこのパラメーターに指定された値にリカバリーされた後に有効であったデータベース再編成番号を指定するオプション・キーワード。この番号は 1 から 65535 までの範囲でなければなりません。

制約事項: このキーワードは、再編成番号の妥当性検査が RECON データ・セットでアクティブであり、データベースが HALDB 区画である場合にのみ有効です。NOTIFY.RECOV コマンドがデータベース・リカバリーの一部として発行された場合、HALDB 区画のデータベース・レコード内の再編成番号もこのパラメーターに指定された値に変更されます。

RUNUSID(*usid*)

データベースまたは DEDB エリアがリカバリーされた時の、現行の更新セット ID (*usid*) を指定するオプション・キーワードです。これが受け取りである場合、RUNUSID はリカバリーに使用されたイメージ・コピーの *usid* 値です。

UDATA('string')

示されたリカバリーについての情報を 80 バイトまで指定できるオプション・キーワード。このキーワードの変数フィールドを使用して、リカバリーについて記

述することができます。string 値にブランクまたはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

DBDS リカバリー情報を RECON データ・セットに追加する例

この例では、指定された DBDS のリカバリーについての情報を RECON データ・セットに追加します。RUNTIME キーワードは、DBDS のリカバリーのタイム・スタンプを指定します。PITR キーワードは、時刻指定リカバリーを指定します。RCVTIME キーワードは、指定された DBDS がリカバリーされた先のタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYRECOV JOB
:
//SYSIN DD *
      NOTIFY.RECOV DBD(DB1) DDN(DDN1) -
                   RUNTIME(071351015366) -
                   RCVTIME(071350905297) -
                   PITR
/*
```

コマンドの実行後、RECON のリストに RECOV レコードが以下のように表示されます。

```
RECOV
RUN      = 2007.135 10:15:36.6 -08:00 * RUN USID      = 0000000005
RECOV TO= 2007.135 09:05:29.7 -08:00 RECOV TO USID = 0000000004
POINT-IN-TIME
```

RECON データ・セット内の変更された再編成番号の例

以下の例は、NOTIFY.RECOV (外部) コマンドを発行した結果として追加された新しい再編成番号を含むレコードを示しています。

```
RECOV
RUN      = 2009.033 10:15:36.612345 -08:00 * RUN USID      = 0000000005
                                CMD PRIOR REORG# = 00009      NEW REORG# = 00010

RECOV
RUN      = 2009.033 10:15:36.612345 -08:00 * RUN USID      = 0000000005
RECOV TO= 2009.033 09:05:29.712345 -08:00 RECOV TO USID = 0000000004
                                CMD PRIOR REORG# = 00009      NEW REORG# = 00010

RECOV
RUN      = 2009.034 10:15:36.612345 -08:00 * RUN USID      = 0000000005
RECOV TO= 2009.034 09:05:29.712345 -08:00 RECOV TO USID = 0000000004
POINT-IN-TIME CMD PRIOR REORG# = 00009      NEW REORG# = 00010
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.REORG コマンド

NOTIFY.REORG コマンドを使用して、識別された DBDS が属するデータベースの再編成について、RECON データ・セットにレコードを追加します。

DBRC は、再編成レコード内の情報を使用して、識別された DBDS の後続のリカバリーの入力として、有効なイメージ・コピー・データ・セット、変更累積データ・セット、およびログ・データ・セットを判別します。

通常、再編成レコードは IMS および IMS ユーティリティによって自動的に作成されるため、NOTIFY.REORG コマンドを使用する必要はありません。

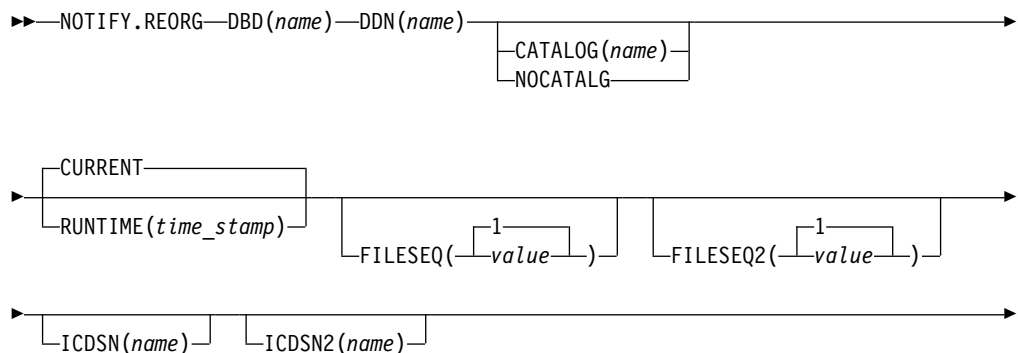
制約事項:

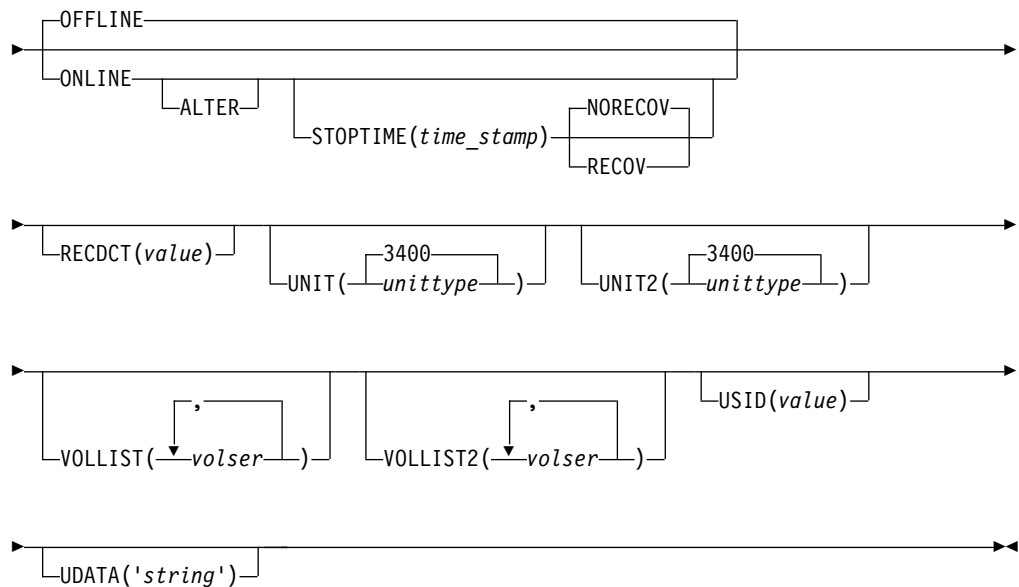
- このコマンドは、高速機能 DEDB の再編成の後に使用してはなりません。このデータベースは、再編成後にリカバリーすることができます。
- このコマンドは、DBDS レコードにある、イメージ・コピー処理が必要なフラグをオンにします。フラグをオフにするには、イメージ・コピーを実行するか、または CHANGE.DBDS ICOFF コマンドを実行する必要があります。
- また、このコマンドは、HISAM 再編成再ロード・ユーティリティ用に作成されたイメージ・コピー・データ・セットと同等のものを、RECON データ・セットに記録するために使用することもできます。このコマンドは、これらのログをイメージ・コピー・データ・セットとして使用している場合のみ使用します。
- CURRENT または RUNTIME を除き、すべてのオプション・キーワードは、HISAM 再編成再ロード・ユーティリティにより、処理の一部として作成されたイメージ・コピー・データ・セットにのみ適用されます。
- 再編成されたデータベースのそれぞれの DBDS に、NOTIFY.REORG コマンドを指定する必要があります。
- 非 HALDB データベースの場合、ACB を管理するために使用可能にされた IMS カタログの名前が RECON 内で指定されているか NOTIFY.REORG コマンドで指定されている必要があります。IMS カタログが ACB を管理しない場合は、IMS.DBDLIB データ・セットの DD ステートメントが NOTIFY.REORG コマンドのジョブ・ストリームで提供される必要があります。
- NOTIFY.REORG コマンドは、ILDS または HALDB 区画の索引 DBDS には使用できません。

サブセクション:

- 『構文』
- 414 ページの『キーワード』
- 417 ページの『DBDS 再編成情報を RECON データ・セットに追加する例』

構文





キーワード

DBD(*name*)

再編成された DBDS のデータベース名を示す必須キーワードです。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに NOTIFY.REORG コマンドを使用するときは、*name* に HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(*name*)

再編成された DBDS のデータ・セット DD 名を示す必須キーワードです。

CATALOG(*name*) | NOCATALG

互いに排他的なオプション・パラメーターであり、NOTIFY.REORG コマンドの実行中にカタログと DBDLIB のどちらを使用するかを示すために使用します。これらのパラメーターを省略した場合、IMS が NOTIFY.REORG に IMS カタログと DBDLIB のどちらを使用するかは、RECON ヘッダー内の指定によって決まります。

データベース定義言語 (DDL) を使用して定義されたデータベースの場合、DBRC はカタログにアクセスする必要があります。

CATALOG(*name*)

DBD ライブラリーの代わりに、指定された IMS カタログを NOTIFY.REORG コマンドで使用することを指定します。

name は、RECON データ・セット内に登録されている HALDB IMS カタログ・データベースの名前に一致する 8 文字の英数字ストリングとして指定します。8 文字未満のすべての IMS カタログ名には、空白が埋め込まれます。

IMS カタログ名は、NOTIFY.REORG コマンドの実行中に検証されます。カタログが存在しないか、HALDB データベースとして定義されていない場合、コマンドは失敗します。

NOCATALG

IMS カタログの代わりに DBD ライブラリーを NOTIFY.REORG コマンドで使用することを指定します。

CURRENT | RUNTIME(*time_stamp*)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、識別された DBDS の再編成のタイム・スタンプを指定します。

CURRENT

再編成レコードに現行のタイム・スタンプを入れることを指定します。CURRENT を指定した場合は、再編成を実行する同じジョブ内の後のステップで、NOTIFY.REORG コマンドを指定することができます。

RUNTIME

再編成レコード内に再編成の実際のタイム・スタンプを入れることを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(1 | *value*)

識別された DBDS のファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。これは、HISAM 再編成再ロード・ユーティリティーを実行するときの入力として使用されたログに含まれていたものです。ICDSN キーワードの説明のところに、このキーワードが関連するログ・データ・セットの情報があります。このキーワードは、VOLLIST キーワードも指定した場合のみ、使用します。

FILESEQ2(1 | *value*)

識別された DBDS のファイル・シーケンス番号が、HISAM 再編成再ロード・ユーティリティーの入力として使用されたログに含まれていた場合、そのファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。ICDSN2 キーワードの説明のところに、このキーワードが関連するログ・データ・セットの情報があります。このキーワードは、VOLLIST2 キーワードも指定した場合のみ、使用します。

ICDSN(*name*)

データベースの HISAM 再編成の一部として作成された、イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名を指定するオプション・キーワードです。(HISAM 再編成再ロード・ユーティリティーを使用してデータベースを再編成した場合、このユーティリティーの入力として使用したログは、イメージ・コピー・データ・セットとして使用することができます。)

ICDSN キーワードは、対応する DBDS が INIT.DBDS コマンドの NOREUSE 属性で RECON データ・セットに識別されている場合のみ、指定することができます。

ICDSN2(*name*)

データベースの HISAM 再編成の一部として作成された、重複イメージ・コピー・データ・セットのデータ・セット名を指定するオプション・キーワードです。(HISAM 再編成再ロード・ユーティリティーを使用してデータベースを再編成した場合、このユーティリティーの入力として使用したログは、イメージ・コピー・データ・セットとして使用することができます。)

ICDSN2 キーワードは、ICDSN キーワードを指定した場合のみ指定することができます。

OFFLINE | ONLINE

互いに排他的なオプション・キーワードであり、再編成が HALDB OLR かオフライン再編成のいずれであるかを指定します。

OFFLINE

DBDS がオフラインで再編成されたことを指定します。

ONLINE

データベースが HALDB であり、オンラインで再編成されたことを指定します。

ALTER

再編成によってデータベース構造が変更されたことを指定します。

STOPTIME(*time_stamp*)

HALDB OLR が正常に完了した時刻を指定するオプション・キーワードです。

NORECOV | RECOV

互いに排他的なオプション・キーワードであり、そのオンライン再編成をリカバリーの入力として使用できるかどうかを指定します。

NORECOV

HALDB OLR はリカバリーへの入力として使用できないことを指定します。

RECOV

HALDB OLR をリカバリーへの入力として使用できることを指定します。

RECDCT(*value*)

識別された DBDS に含まれるレコード数を指定するオプション・キーワードであり、*value* は、1 から 2 147 483 647 までの 10 進数でなければなりません。

UNIT(3400 | *unittype*)

イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームの、装置タイプを指定するオプション・キーワードです。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

UNIT2(3400 | *unittype*)

重複イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームの、装置タイプを指定するオプション・キーワードです。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLLIST(*volser*)

ICDSN キーワードで指定されたイメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームの、ボリューム通し番号を指定するオプション・キーワードです。*volser* として 255 個までのボリューム通し番号を指定することができます。なお、*volser* はそれぞれ、6 文字までの英数字が可能です。

VOLLIST2(*volser*)

ICDSN2 キーワードで指定された重複イメージ・コピー・データ・セットが存在するボリュームの、ボリューム通し番号を指定するオプション・キーワードです。*volser* では、255 個までのボリューム通し番号を指定することができ、それぞれ 6 文字までの英数字が可能です。

USID(value)

再編成が生じたときの、データベースまたはエリアの更新セット ID を指定するオプション・キーワードです。

UDATA('string')

再編成についての情報を 80 バイトまで指定できるオプション・キーワード。このキーワードの変数フィールドを使用して、再編成について記述することができます。*string* 値に空白またはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

DBDS 再編成情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、指定された DBDS の再編成についての情報を RECON データ・セットに追加します。DBDLIB データ・セットが指定されていますが、これは再編成が起こったことを検査するため、DBRC がその検索を要求するためです。再編成された DBDS の 2 つのイメージ・コピー・データ・セットの名前が指定されています。これらは両方とも、データ・セット命名規則に従っています。両方のイメージ・コピー・データ・セットのボリューム・リストが出されます。

```
//NFYREORG JOB
:
//IMS      DD  DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN    DD  *
          NOTIFY.REORG DBD(DB1) DDN(DD1) -
                    ICDSN(IMS.DB1.DD1.IC.ICDSN) -
                    VOLLIST(VOL001,VOL002,VOL003) FILESEQ(4) -
                    ICDSN2(IMS.DB1.DD1.IC2.ICDSN2) -
                    VOLLIST2(VOL004,VOL005,VOL006,VOL007) -
                    FILESEQ2(4) RECDCT(12345)
/*
```

デフォルトのカタログ名の代わりに DBDLIB を使用する例

```
//NFYREORG JOB
:
//IMS      DD  DSN=IMS.DBDLIB,DISP=SHR
//SYSIN    DD  *
          NOTIFY.REORG DBD(DB1) DDN(DD1) -
                    ICDSN(IMS.DB1.DD1.IC.ICDSN) -
                    VOLLIST(VOL001,VOL002,VOL003) FILESEQ(4) -
                    ICDSN2(IMS.DB1.DD1.IC2.ICDSN2) -
                    VOLLIST2(VOL004,VOL005,VOL006,VOL007) -
                    FILESEQ2(4) RECDCT(12345) -
                    NOCATALG
/*
```

デフォルトのカタログ名の代わりにカタログ名 GREGCD00 を使用する例

```
//NFYREORG JOB
:
//SYSIN    DD  *
          NOTIFY.REORG DBD(DB1) DDN(DD1) -
                    ICDSN(IMS.DB1.DD1.IC.ICDSN) -
                    VOLLIST(VOL001,VOL002,VOL003) FILESEQ(4) -
                    ICDSN2(IMS.DB1.DD1.IC2.ICDSN2) -
                    VOLLIST2(VOL004,VOL005,VOL006,VOL007) -
```

/*

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.SECLOG コマンド (OLDS 用)

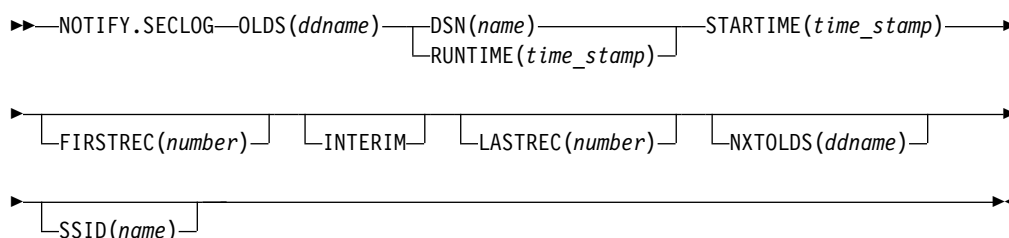
NOTIFY.SECLOG コマンドを使用して、2 次 OLDS についての情報を RECON データ・セットに追加し、また ISECOLDS レコードを手作業で RECON データ・セットに作成します。

RECON データ・セットには、SSID と STARTIME が同じ PRIOLDS レコードが既に存在している必要があります。この情報は、IMS ログ・データ出口ルーチンから追加できなかった情報です。通常、このコマンドは必要ありません。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 420 ページの『例』

構文



キーワード

OLDS(ddname)

RECON データ・セットに OLDS 用のレコードを作成、または更新することを指定する必須キーワードです。

ddname は、IMS オンライン制御領域が OLDS を使用した時に使用した DD 名です。

DSN(name) | RUNTIME(time_stamp)

互いに排他的な必須キーワードです。

DSN

RECON データ・セットにオンライン・ログ・レコードを作成する 2 次 OLDS のデータ・セット名を指定します。

RUNTIME

指定された 2 次 OLDS の、オープンまたはクローズ操作のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN および RUNTIME を、STARTIME、FIRSTREC、LASTREC、および NXTOLDS キーワードと組み合わせて使用して、どのタイプの 2 次オンライン・ログ・データ・セット・エントリーを RECON データ・セットに追加するかを示します。以下の表は、2 次オンライン・ログ・データ・セット・エントリーのタイプに対応するキーワードの組み合わせを示しています。

表 18. オープン、スイッチ、クローズ用の NOTIFY.SECLOG コマンド (OLDS 用) のパラメーター

オンライン・ログ・エントリーのタイプ	必要なキーワード
OLDS オープン	STARTIME、DSN、FIRSTREC
OLDS スイッチ	FIRSTREC、STARTIME、DSN、NXTOLDS
OLDS クローズ	LASTREC、STARTIME、RUNTIME

それぞれの 2 次 OLDS ごとに、オープン、スイッチ、およびクローズ操作のための別の NOTIFY.SECLOG コマンドを実行する必要があります。

STARTIME(*time_stamp*)

2 次 OLDS の開始時刻を指定する必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

NOTIFY.SECLOG コマンド内の他のキーワードと一緒にこのキーワードを使用する場合の説明は、表 18を参照してください。

FIRSTREC(*number*)

OLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。SECLOG の最初の OLDS の場合、FIRSTREC は、IMS サブシステムの初期設定の際に書き込まれた最初のログ・レコードに対応します。

OLDS OPEN および SWITCH コマンドには、FIRSTREC が必須です。これは、オープンされる OLDS で最初のログ・レコードのシーケンス番号を指定します。これは CLOSE コマンドには無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: FIRSTREC(X'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: FIRSTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

INTERIM

中間ログ・データ・セット・レコードを作成することを指定するオプション・キーワードです。中間ログ・データ・セットを作成する前に、2 次 OLDS を作成する必要があります。

LASTREC(*number*)

OLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。

LASTREC は、OLDS CLOSE コマンドでは必須です。これは SWITCH コマンドではオプションであり、省略すると、FIRSTREC 値から 1 を引いた値が、クローズされる OLDS 用に記録されます。これは OPEN コマンドには無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: LASTRECX'10B9C'。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: LASTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

NXTOLDS(ddname)

OLDS スイッチを反映するために、RECON データ・セットを更新する時に使用するオプション・キーワードです。現行 OLDS はクローズされ、IMS オンライン制御領域は新しい OLDS をオープンします。ddname は、オープンされる OLDS の DD ステートメントです。クローズされる OLDS は、OLDS(ddname) キーワードで指定します。DSN キーワードは、オープンされる OLDS のデータ・セット名を指定します。STARTIME キーワードは、クローズされる OLDS のクローズ時刻および、オープンされる OLDS のオープン時刻を指定します。

SSID(name)

ログ・データ・セットを作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す、8 文字の英数字からなる文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードのデフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用して設定します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

例

以下に、NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) コマンドの使用例をいくつか示します。

OLDS に対応した ISECOLDS レコードの作成例

この例では、OLDS に対応する ISECOLDS レコードを作成します。

```
//NFYSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
        NOTIFY.SECLOG  SSID(IMSA) OLDS(DFSOLS03) -
                        DSN(IMS.INTERIM.LOG) -
                        STARTIME(073220522348) -
                        INTERIM
/*
```


2 つの 2 次 OLDS 用の SECOLDS レコードの作成例

次の例では、IMS オンライン・サブシステム IMSA に属する 2 つの 2 次 OLDS 用の、SECOLDS レコードを作成します。両方の 2 次 OLDS がクローズされます。最初の STARTIME キーワードは、1 次 OLDS のオープンのタイム・スタンプを指定します。DSN キーワードは、追加される情報が OLDS のオープンに関するものであることを示します。NXTOLDS は、OLDS スイッチを示します。2 番目の STARTIME キーワードと 2 番目の DSN は、次の OLDS の開始時刻と DSN を示します。3 番目の STARTIME キーワードは、クローズされる OLDS の開始時刻を示します。RUNTIME キーワードは、クローズするボリュームのタイム・スタンプです。

```
NOTIFY.SECLOG SSID(IMSA) STARTIME(072171212120) OLDS(DFSOLS01)-
  DSN(IMS.OLSS01)
NOTIFY.SECLOG SSID(IMSA) STARTIME(072181212120) OLDS(DFSOLS01)-
  DSN(IMS.OLSS02) NXTOLDS(DFSOLS02)
NOTIFY.SECLOG SSID(IMSA) STARTIME(072181212120) OLDS(DFSOLS02)-
  RUNTIME(072191010101)
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.SECLOG コマンド (RLDS 用)

NOTIFY.SECLOG コマンドは、2 次 RLDS についての情報を RECON データ・セットに追加し、また ISECLOG レコードを手作業で RECON データ・セットに作成するために使用します。

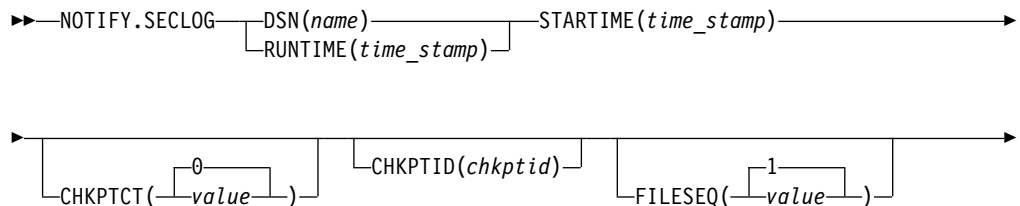
RECON データ・セットには、SSID と STARTIME が同じ PRILOG が既に存在している必要があります。この情報は、IMS ログ・データ出口ルーチンから追加できなかった情報です。通常、このコマンドは必要ありません。

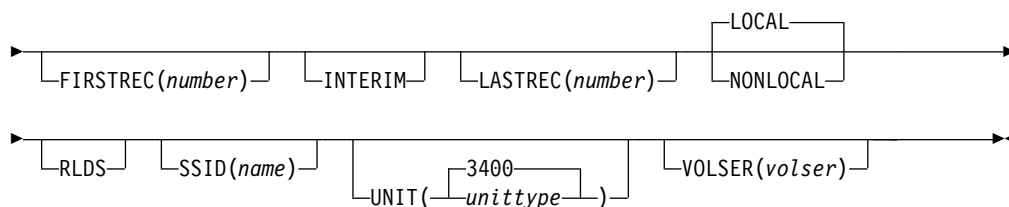
このコマンドは、1 次ログ・レコード内のデータ・セット・エントリーを追加または完了します。既存の完了したデータ・セット・エントリーを変更する場合は、CHANGE.SECLOG (RLDS) コマンドを使用する必要があります。

サブセクション:

- 『構文』
- 422 ページの『キーワード』
- 424 ページの『例』

構文





キーワード

DSN(name) | RUNTIME(time_stamp)

互いに排他的な必須キーワードです。

DSN

RECON データ・セットにリカバリー・ログ・レコードを作成する 2 次 RLDS のデータ・セット名を指定します。

RUNTIME

指定された 2 次 RLDS の、オープン、クローズ、または EOV 操作のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN および RUNTIME を、STARTIME および VOLSER キーワードと組み合わせて使用して、どのタイプの 2 次リカバリー・ログ・データ・セット・エントリーを RECON データ・セットに追加するかを示します。以下の表は、2 次リカバリー・ログ・データ・セット・エントリーのタイプに対応するキーワードの組み合わせを示しています。

表 19. オープン、EOV、およびクローズ用の NOTIFY.SECLOG コマンド (RLDS 用) のキーワード

リカバリー・ログ・エントリーのタイプ	必要なキーワード
RLDS オープン	STARTIME、DSN、VOLSER
RLDS EOV	STARTIME、VOLSER、RUNTIME
RLDS クローズ	STARTIME、RUNTIME

それぞれの 2 次 RLDS ごとに、オープン、ゼロまたはそれ以上の EOV、およびクローズ処理のための、別の NOTIFY.SECLOG コマンドを実行する必要があります。

STARTIME(time_stamp)

2 次 RLDS の開始時刻を指定する必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

続いて STARTIME キーワードを実行すると、その時刻がボリュームの開始時刻になります。NOTIFY.SECLOG コマンドの他のキーワードと一緒に STARTIME キーワードを使用する場合の説明は、表 19を参照してください。

CHKPTCT(0 | value)

RLDS ボリューム上で完了したチェックポイントの数を変更するために使用する、オプション・キーワードです。

CHKPTCT に有効な値は、以下のものです。

- 0 RLDS ボリュームにチェックポイントがない
- 1 RLDS ボリュームに 1 つのチェックポイントがある
- 2 RLDS ボリュームに複数のチェックポイントがある

IMS は CHKPTCT の値を使用して、並行イメージ・コピーを使用した高速機能エリアのリカバリーに必要なログを判別します。

CHKPTID(*chkptid*)

RLDS ボリューム上のアクティブ PST の、最も古いチェックポイント ID を指定するオプション・キーワードです。チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(1 | *value*)

示された 2 次 RLDS のファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。このキーワードは、VOLSER キーワードも指定した場合のみ指定します。

FIRSTREC(*number*)

RLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。SECLOG の最初の RLDS の場合は、IMS サブシステムの初期設定中に書き込まれた最初のログ・レコードに対応します。

FIRSTREC は、DSN が指定されている場合は必須であり、RUNTIME が指定されている場合は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: FIRSTREC(X'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: FIRSTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

INTERIM

中間ログ・データ・セット・レコードを作成することを指定するオプション・キーワードです

LASTREC(*number*)

RLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。

LASTREC は、RUNTIME が指定され、VOLSER が指定されていない場合 (つまり、CLOSE 呼び出し) では必須です。DSN が指定されている場合、LASTREC は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: LASTRECX'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から $(2^{64})-1$ までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: LASTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

LOCAL | NONLOCAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、RLDS データが元はどこで作成されたかを指定します。LOCAL は、RLDS がローカル・サービス・グループのアクティブ IMS サブシステムにより作成された場合に使用されます。

NONLOCAL は、RLDS が、元はローカル・サービス・グループ以外のアクティブ IMS サブシステムにより作成され、トラッキング・サイトにトランスポートされた場合に使用されます。

LOCAL または NONLOCAL は、SECLOG レコードの作成時にのみ指定する必要があります。LOCAL および NONLOCAL キーワードは、SECLOG レコードの後続の NOTIFY.SECLOG 呼び出しでは無視されます。

NONLOCAL を指定した場合、キーワード CHKPTID、FILESEQ、UNIT、または VOLSER のいずれも、SECLOG レコードの NOTIFY.SECLOG 呼び出しに指定することはできません (データ・セットがカタログされている必要があります)。

RLDS

RECON データ・セット内に IMS RLDS 用のレコードを作成、または更新することを指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID(name)

ログ・データ・セットを作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す、8 文字の英数字からなる文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードのデフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用して設定します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

UNIT(3400 | unittype)

2 次 RLDS が存在するボリュームの、装置タイプを指定するオプション・キーワードです。UNIT キーワードは、DSN キーワードを指定した場合のみ指定します。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLSER(volser)

示された 2 次 RLDS 用に記録されるリカバリー・ログ・ボリュームの、ボリューム通し番号を指定するオプション・キーワードです。EOV 通知の場合、このボリューム通し番号が開始されるボリュームになります。422 ページの表 19 に、いつ VOLSER キーワードを使用するかが示されています。

例

ここでは、NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) コマンドの使用例をいくつか示します。

2 次 RLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、2 次 RLDS についての情報を RECON データ・セットに追加しています。STARTIME キーワードは、そのオープン・タイム・スタンプにより 2 次 RLDS を示します。VOLSER および DSN キーワードは、追加される情報が 1 次 RLDS のオープンに関したものであることを示します。最初の RUNTIME キーワードは、2 次 RLDS の EOVS のタイム・スタンプを指定します。2 番目の RUNTIME キーワードは、2 次 RLDS のクローズのタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.SECLOG RLDS STARTIME(07067020101023456) -
              DSN(DSN003) VOLSER (VOL001)
NOTIFY.SECLOG RLDS STARTIME(07067020101023456) -
              RUNTIME(070680204500) VOLSER(VOL002)
NOTIFY.SECLOG RLDS STARTIME(07067020101023456) -
              RUNTIME(070682030000)
/*
```

暫定 2 次 RLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、暫定 2 次 RLDS についての情報を RECON データ・セットに追加しています。STARTIME キーワードは、暫定 2 次 RLDS のオープンのタイム・スタンプを指定し、RUNTIME キーワードは、暫定 2 次 RLDS のクローズのタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.SECLOG RLDS RUNTIME(072561630000)-
              STARTIME(07254123456123456) INTERIM
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

NOTIFY.SECLOG コマンド (SLDS 用)

NOTIFY.SECLOG コマンドを使用して、2 次 SLDS についての情報を RECON データ・セットに追加し、また ISECSLDS レコードを手作業で RECON データ・セットに作成します。

RECON データ・セットには、SSID と STARTIME が同じ 1 次ログ・データ・セット・レコードが既に存在している必要があります。この情報は、IMS システムのログ・データ出口から追加できなかった情報です。通常、このコマンドは必要ありません。

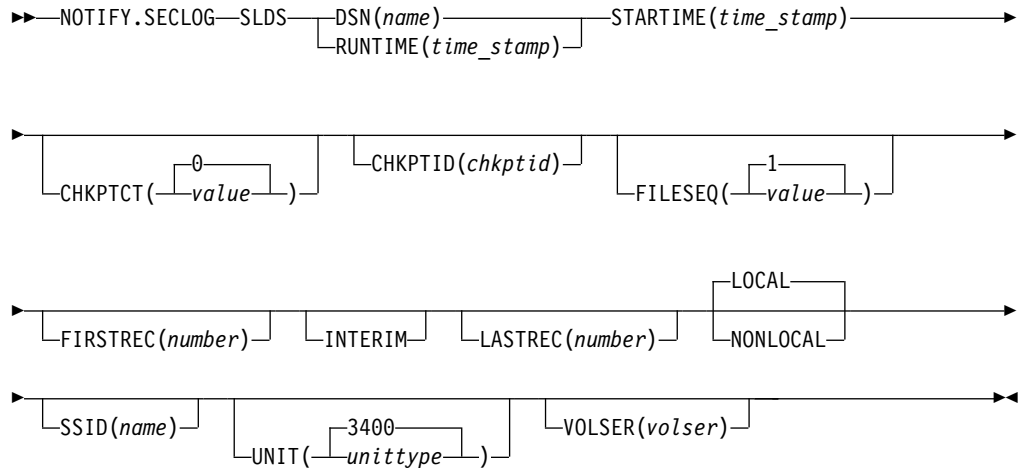
このコマンドは、1 次または 2 次ログ・レコード内のデータ・セット・エントリーを追加または完了します。既存の完了したデータ・セット・エントリーを変更する場合、CHANGE.SECLOG コマンド (SLDS 用) を使用します。

サブセクション:

- 426 ページの『構文』
- 426 ページの『キーワード』

- 429 ページの『2 次 SLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例』

構文



キーワード

SLDS

SLDS レコードを作成または更新することを指定する必須キーワード。

注: SLDS キーワードのいずれかを指定しないと、RLDS レコードを作成または更新しようとします。

DSN(name) | RUNTIME(time_stamp)

互いに排他的な必須キーワードです。

DSN

RECON データ・セットにシステム・ログ・レコードを作成する 2 次 SLDS の、データ・セット名を指定します。

RUNTIME

指定された 2 次 SLDS の、オープン、クローズ、または EOVS 操作のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

DSN および RUNTIME を、STARTIME および VOLSER キーワードと組み合わせて使用して、どのタイプの 2 次システム・ログ・データ・セット・エントリーを RECON データ・セットに追加するかを示します。以下の表は、2 次システム・ログ・データ・セット・エントリーのタイプに対応するキーワードの組み合わせを示しています。

表 20. オープン、EOV、およびクローズ用の NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) コマンドのキーワード

システム・ログ・エントリーのタイプ	必要なキーワード
SLDS オープン	STARTIME、DSN、VOLSER
SLDS EOVS	STARTIME、VOLSER、RUNTIME
SLDS クローズ	STARTIME、RUNTIME

それぞれの 2 次 SLDS ごとに、オープン、ゼロまたはそれ以上の EOV、およびクローズ処理のための、別の NOTIFY.SECLOG コマンドを実行する必要があります。

STARTIME(*time_stamp*)

2 次 SLDS の開始時刻を指定する必須キーワードです。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。NOTIFY.SECLOG コマンドの他のキーワードと一緒に STARTIME キーワードを使用する場合の説明は、426 ページの表 20 を参照してください。

CHKPTCT(0 | *value*)

SLDS ボリューム上で完了したチェックポイントの数を変更するために使用する、オプション・キーワードです。

CHKPTCT に有効な値は、以下のものです。

- 0 SLDS ボリュームにチェックポイントがない
- 1 SLDS ボリュームに 1 つのチェックポイントがある
- 2 SLDS ボリュームに複数のチェックポイントがある

IMS は CHKPTCT の値を使用して、並行イメージ・コピーを使用した高速機能エリアのリカバリーに必要なログを判別します。

CHKPTID(*chkptid*)

SLDS ボリューム上のアクティブ PST の、最も古いチェックポイント ID を指定するオプション・キーワードです。チェックポイント ID のタイム・スタンプは標準形にする必要があります。

FILESEQ(1 | *value*)

識別された 2 次 SLDS のファイル・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。このキーワードは、VOLSER キーワードを指定した場合のみ指定します。

FIRSTREC(*number*)

SLDS の最初のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。SECSLD の最初の SLDS の場合、FIRSTREC は、IMS サブシステムの初期設定の際に書き込まれた最初のログ・レコードに対応します。

FIRSTREC は、DSN が指定されている場合は必須であり、RUNTIME が指定されている場合は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: FIRSTREC(X'10B9C')。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: FIRSTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

INTERIM

中間ログ・データ・セット・レコードを作成することを指定するオプション・キーワードです

LASTREC(*number*)

SLDS の最後のログ・レコードの、ログ・レコード・シーケンス番号を指定するオプション・キーワードです。

LASTREC は、RUNTIME が指定され、VOLSER が指定されていない場合 (つまり、CLOSE 呼び出し) では必須です。DSN が指定されている場合、LASTREC は無効です。

ログ・レコード・シーケンス番号は、次のいずれかを使用することができます。

- 16 進数

この番号は 1 から 16 文字であり、単一引用符で囲み、前に文字 X を付けます。例: LASTRECX'10B9C'。

- 10 進数

この数は、0 から (2**64)-1 までの 10 進数であり、分離文字はありません。例: LASTREC(68508)。

いずれの場合も、先行ゼロは省略することができます。

LOCAL | NONLOCAL

互いに排他的なオプション・キーワードであり、SLDS データが元はどこで作成されたかを指定します。LOCAL は、SLDS がローカル・サービス・グループのアクティブ IMS サブシステムにより作成された場合に使用されます。

NONLOCAL は、SLDS が、元はローカル・サービス・グループ以外のアクティブ IMS サブシステムにより作成され、トラッキング・サイトにトランスポートされた場合に使用されます。

LOCAL または NONLOCAL は、SECSLD レコードの作成時にのみ指定する必要があります。LOCAL および NONLOCAL キーワードは、SECSLD レコードの後続の NOTIFY.SECLOG 呼び出しでは無視されます。

NONLOCAL を指定した場合、キーワード CHKPTID、FILESEQ、UNIT、または VOLSER のいずれも、SECSLD レコードの NOTIFY.SECLOG 呼び出しに指定することはできません (データ・セットがカタログされている必要があります)。

SSID(*name*)

ログ・データ・セットを作成した IMS サブシステムの名前を指定するために使用するオプション・キーワードです。

SSID は、有効な IMS サブシステム ID 名を表す、8 文字の英数字からなる文字ストリングです。SSID を指定しないと、DBRC は、RECON ヘッダー・レコードに入っているデフォルトのサブシステム ID を使用します。RECON ヘッダー・レコードのデフォルトのサブシステム ID は、INIT.RECON または CHANGE.RECON コマンドを使用して設定します。RECON ヘッダー・レコードにデフォルトを指定していない場合は、SSID を指定する必要があります。

UNIT(3400 | *unittype*)

2 次 SLDS が存在するボリュームの、装置タイプを指定するオプション・キー

ワードです。UNIT キーワードは、DSN キーワードを指定した場合のみ指定します。装置タイプには 8 文字までの英数字を指定することができます。

VOLSER(*volser*)

示された 2 次 SLDS 用に記録されるシステム・ログ・ボリュームの、ボリューム通し番号を指定するオプション・キーワードです。EOV 通知の場合、このボリューム通し番号が開始されるボリュームになります。426 ページの表 20 に、いつ VOLSER キーワードを使用するかが示されています。

2 次 SLDS 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例は、2 次 SLDS についての情報を RECON データ・セットに追加しています。STARTIME キーワードは、そのオープンのタイム・スタンプにより 2 次 SLDS を示します。VOLSER および DSN キーワードは、追加される情報が 2 次 SLDS のオープンに関したものであることを示します。最初の RUNTIME キーワードは、2 次 SLDS の EOV のタイム・スタンプを指定します。2 番目の RUNTIME キーワードは、2 次 SLDS のクローズのタイム・スタンプを指定します。

```
//NFYSECLG JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.SECLOG SLDS STARTIME(07067020101023456) -
              SSID(IMSC) DSN(DSN006) VOLSER(VOL009)
NOTIFY.SECLOG SLDS STARTIME(07067020101023456) -
              RUNTIME(070680204500) VOLSER(VOL003)
NOTIFY.SECLOG SLDS STARTIME(07067020101023456) -
              RUNTIME(070682030000)
```

/*

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

400 ページの『NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用)』

NOTIFY.SUBSYS コマンド

NOTIFY.SUBSYS コマンドは、RECON データ・セットにサブシステム・エントリーを作成します。

指定されたサブシステムのサブシステム・エントリーが、RECON データ・セットには存在しないことを確認する検査が行われます。通常、このコマンドは必要ありません。

サブセクション:

- 『構文』
- 430 ページの『キーワード』
- 431 ページの『RECON データ・セットに新しいサブシステム・レコードを追加する例』

構文

ENDRECOV

サブシステムが正常にサインオンしたこと、またはサインオン・リカバリー完了呼び出しが正常終了したことを指定します。

STARTRCV

サブシステムがリカバリー開始処理にサインオンしたことを指定します。

RECON データ・セットに新しいサブシステム・レコードを追加する例

この例では、SSID キーワードで指定された新しいサブシステム・レコードを RECON データ・セットに追加します。さらに、サブシステム・レコードはオンラインとしてマーク付けされます。

```
//NOTIFYSS JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.SUBSYS SSID(IMS34) ONLINE
/*
```

NOTIFY.UIC コマンド

NOTIFY.UIC コマンドは、コマンド内で指定された DBDS または DEDB エリアに関する、標準外イメージ・コピー・データ・セットについての情報を RECON データ・セットに追加します。

標準外イメージ・コピー・データ・セットとは、サポートされるイメージ・コピー・ユーティリティによって作成されなかったものであり、例えば、指定された DBDS または DEDB エリアを含む DASD ボリュームの、テープ・ダンプにより作成されたものです。標準外イメージ・コピー・データ・セットが存在することを RECON データ・セットに記録するには、NOTIFY.UIC コマンドを使用することが唯一の方法です。

このコマンドは、REUSE 属性を使用して定義された DBDS では実行できません。

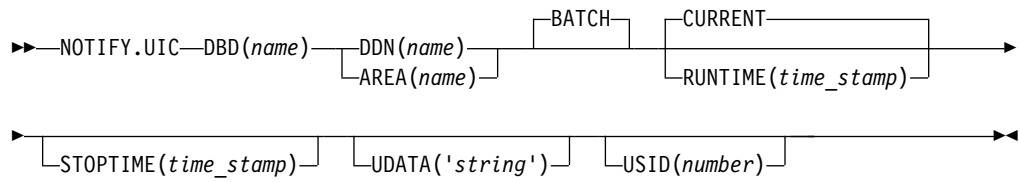
制約事項:

- 標準外イメージ・コピー・データ・セットをデータベース・リカバリー・ユーティリティへの入力として使用することはできません。詳しくは、データベース・リカバリー・ユーティリティ (DFSURDB0) を参照してください。
- このコマンドは、ILDS または HALDB 区画の索引には使用できません。
- NOTIFY.UIC コマンドは、オンライン再編成が進行中の HALDB のイメージ・コピーを記録しようとするとき失敗します。これは、HALDB のオンライン再編成中、および再編成が完了していないとき (再編成が進行中か終了している場合) は、HALDB のイメージ・コピーが取れないためです。

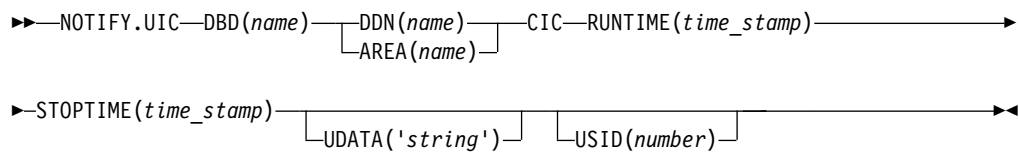
サブセクション:

- 432 ページの『構文』
- 432 ページの『キーワード』
- 433 ページの『標準外 ICDSN 情報を RECON データ・セットに追加する例』

構文



Or



キーワード

BATCH | CIC

IMS イメージ・コピー・ユーティリティ以外的手段で作成されたイメージ・コピーがクリーン・イメージ・コピーであるか、並行イメージ・コピーであるかを示すために使用する、互いに排他的なオプション・パラメーター。

BATCH

IMS イメージ・コピー・ユーティリティ以外的手段で作成されたイメージ・コピーがクリーン・イメージ・コピーであることを示します。

CIC

IMS イメージ・コピー・ユーティリティ以外的手段で作成されたイメージ・コピーが並行イメージ・コピーであることを示します。CIC を指定する場合は、RUNTIME および STOPTIME も指定する必要があります。CIC キーワードは VSAM KSDS データベースでは使用できません。

DBD(name)

標準外イメージ・コピー・データ・セットが作成された DBDS または DEDB エリアの、データベース名を指定する必須キーワードです。

HALDB データベースの制約事項: HALDB データベースに NOTIFY.UIC コマンドを使用するときは、name に HALDB 区画の名前を指定します。

DDN(name) | AREA(name)

互いに排他的な必須キーワードであり、標準外イメージ・コピー・データ・セットが作成された DBDS または DEDB エリアの名前を示します。

CURRENT | RUNTIME(time_stamp)

互いに排他的なオプション・キーワードであり、標準外イメージ・コピー・データ・セットの作成のタイム・スタンプを指定します。

CURRENT

指定されたイメージ・コピー・データ・セットの作成のタイム・スタンプとして、現行タイム・スタンプを使用することを指定します。CURRENT を

指定すると、1つのジョブ内で、標準外イメージ・コピー・データ・セットを作成し、別のステップでその作成を RECON データ・セットに記録することができます。

CURRENT は NOTIFY.UIC BATCH コマンドにのみ適用されます。

RUNTIME

指定された標準外イメージ・コピー・データ・セットの作成の、実際のタイム・スタンプを指定します。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。

STOPTIME(*time_stamp*)

並行イメージ・コピーの停止時刻を指定します。CIC を指定する場合は、このキーワードも指定する必要があります。タイム・スタンプは標準形にする必要があります。CIC が指定されていない場合、STOPTIME は無視されます。

UDATA('string')

示された、標準外イメージ・コピー・データ・セットについての情報を、80 バイトまで指定できるオプション・キーワードです。このキーワードの変数フィールドを使用して、標準外イメージ・コピー・データ・セットがどのように作成されたかを記述することができます。string 値に空白またはその他の特殊文字が含まれる場合は、単一引用符 (') で囲む必要があります。

USID(*number*)

イメージ・コピー・データ・セットが作成された時の、データベースまたはエリアの更新セット ID の値を指定するオプション・キーワードです。

標準外 ICDSN 情報を RECON データ・セットに追加する例

この例では、標準外イメージ・コピー・データ・セットについての情報を RECON データ・セットに追加します。RUNTIME キーワードは、標準外イメージ・コピー・データ・セットの作成のタイム・スタンプを指定します。UDATA キーワードは、このコマンドにより更新される RECON データ・セット内のレコードに記録される、ユーザー・データを指定します。

```
//NFYUIC JOB
:
//SYSIN DD *
NOTIFY.UIC DBD(DB1) DDN(DD1) -
RUNTIME(070670201010) -
UDATA('DUMP OF VOLUME VOL001 AT 070670201010')
/*
```

この例では、標準外の並行イメージ・コピー・データ・セットに関する情報が RECON データ・セットに追加されます。

```
//NFYUIC JOB

//SYSIN DD *
NOTIFY.UIC CIC -
DBD(DB1) DDN(DD1) -
RUNTIME(070670201010) -
STOPTIME(070670203115) -
UDATA('CIC DUMP OF VOLUME VOL001 AT 20201010')
/*
```

関連資料:

57 ページの『DBRC タイム・スタンプ』

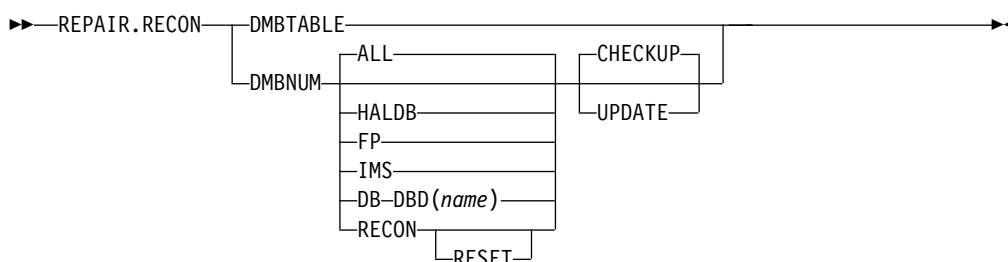
第 17 章 REPAIR.RECON コマンド

REPAIR.RECON コマンドは、破損または欠落した DMB テーブル・レコードの再作成、または RECON データ・セットのデータ管理ブロック (DMB) 番号の不整合の検査と修正を行うために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 436 ページの『使用上の注意』
- 437 ページの『DMB 番号表記の不整合の有無を検査する例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、REPAIR.RECON コマンドに有効です。

DMBTABLE | DMBNUM

DMBTABLE

RECON データ・セット内の DMB テーブル・レコードを再作成します。DMB テーブル・レコードが欠落している場合は、レコードが作成されます。DMB テーブル・レコードは、既存のデータベースに割り当てられるデータ管理ブロック (DMB) 番号を示します。再作成処理時にはすべてのデータベース・レコードが読み取られます。データベースまたはエリアが許可されない場合、DMB 番号に関して検出された不整合が報告され、修正されます。

DMBNUM

RECON データ・セット内で各種レコードの DMB 番号の内部表記に不整合がないか検査したり、不整合を修正したりします。すべてのタイプのデータベース・レコード、特定のタイプのデータベース・レコード、特定のデータベース・レコード、または RECON ヘッダーを指定できます。

ALL | HALDB | FP | IMS | DB DBD(name) | RECON RESET

ALL

すべてのタイプのデータベース・レコードを処理します。**ALL** がデフォルトです。

HALDB

すべての HALDB データベース・レコードを処理します。

FP すべて的高速機能データベース・レコードおよび高速機能エリア・レコードを処理します。

IMS

HALDB データベース・レコードを除くすべての IMS データベース・レコードを処理します。

DB 特定のデータベース・レコードを処理します。

DBD(*name*)

DB を指定する場合の必須キーワードであり、処理対象の HALDB、高速機能 DEDB、または IMSデータベースを示すときに使用します。

RECON

RECON ヘッダーのみを処理します。

RESET

RECON を指定するときのオプション・キーワードであり、RECON ヘッダー内の DMB# フィールドと LAST USED DMB# フィールドをリセットするときに指定します。

RECON DMB テーブル・レコードが存在する場合、これらのフィールドはいずれも 32,767 にリセットされます。RECON DMB テーブル・レコードは、次回のデータベース登録時に割り当てられる次の DMB 番号を判別するために使用されます。RECON DMB テーブル・レコードが存在せず、登録されているデータベースがない場合、これらのフィールドの値は RECON データ・セットの初期化時に使用されたものと同じ値にリセットされます。

CHECKUP | UPDATE

DMB 番号の検査または訂正を行います。

CHECKUP

DMB 番号に不整合がないか検査します。検出された不整合が報告されます。**CHECKUP** がデフォルトです。

UPDATE

DMB 番号の不整合があれば訂正します。データベースまたはエリアが無許可の場合、検出された不整合が報告され、訂正されます。

使用上の注意

コマンド実行時にエラーが検出された場合でもコマンドの処理は続行され、すべてのエラーが報告されます。コマンドが戻りコード 12 以上で完了した場合、レコードは変更されません。

以下のコマンドで並列 RECON アクセスが使用される場合、すべての DBRC インスタンスに対する RECON アクティビティが静止されます。

- REPAIR.RECON DMBTABLE
- REPAIR.RECON DMBNUM ALL | HALDB | FP | IMS

REPAIR.RECON コマンドが呼び出される前に、RECON データ・セットのコピー 1 およびコピー 2 に関連する保持ロックの有無に関する検査が実行されます。保持ロックが存在する場合、コマンドは失敗し、メッセージが発行されます。

並列 RECON アクセス・モードでは、RECON データ・セットに対する保持ロックが存在する場合、それらのロックを解決する必要があります。SMS サーバー (SMSVSAM) がアクティブであり、すべてのプロセッサ上の Transactional VSAM (TVS) がアクティブであることを確認して、コマンドを再サブミットしてください。

推奨事項:

- RECON データ・セットのバックアップ・コピーに対して REPAIR.RECON コマンドを発行し、コマンドが RECON データ・セットの可用性に及ぼす影響を判断してください。その後、実際の RECON データ・セットへのアクセスが最小限で済む時点で、コマンドを発行します。
- REPAIR.RECON DMBTABLE コマンドは、問題が識別済みである場合に限り、また通常は IBM ソフトウェア・サポートの指示の下でのみ発行してください。
- REPAIR.RECON DBNUM UPDATE コマンドを発行して不整合を訂正する前に、REPAIR.RECON DMBNUM CHECKUP コマンドを発行して、RECON データ・セット内の DMB 番号に不整合がないか評価してください。
- RECON データ・セットを最新バージョンの IMS にアップグレードした後、REPAIR.RECON DMBNUM CHECKUP コマンドを発行して、RECON データ・セット内の各種レコードの DMB 番号表記がすべて有効であることを確認してください。不整合が検出された場合は、REPAIR.RECON DMBNUM UPDATE を発行して、不整合を訂正してください。

REPAIR.RECON DMBNUM CHECKUP は、1 年に 1 回実行するようにスケジュールしてください。

DMB 番号表記の不整合の有無を検査する例

この例では、すべてのデータベースについて、RECON ヘッダー・レコード、データベース・レコード、および高速機能エリア・レコード内のデータ管理ブロック (DMB) 番号表記に不整合がないか検査します。

```
//REPAIRRE JOB
//JOB LIB DD DSN=xxxxx
//R1 EXEC PGM=DSPURX00
:
//SYSIN DD *
REPAIR.RECON DMBNUM ALL CHECKUP
/*
```

DMB 番号表記の不整合を訂正する例

この例では、RECON ヘッダー・レコード、データベース・レコード、および高速機能エリア・レコード内のデータ管理ブロック (DMB) 番号表記に不整合があれば、整合した状態に変更します。

```
//REPAIRRE JOB
//JOB LIB DD DSN=xxxxx
//R1 EXEC PGM=DSPURX00
```

```
⋮  
//SYSIN DD *  
REPAIR.RECON DMBNUM ALL UPDATE  
/*
```

第 18 章 RECON データ・セットのサンプル・リスト

RECON データ・セットからのサンプル・リストは、LIST.RECON コマンドによってリストされる、RECON データ・セットの例からの各種レコードの形式および内容を表示します。

LIST.DB コマンド出力のサンプル・リスト

LIST.DB コマンドは、RECON データ・セットに登録されているデータベースのリストを受け取るために使用します。LIST.DB コマンドを使用して、アクティブ・サイトまたはリモート・サイトから RECON リストを作成することができます。

LIST.HISTORY コマンド出力のサンプル・リスト

LIST.HISTORY コマンドで、DBDS または DEDB エリアのアクティビティのヒストリーを作成します。LIST.HISTORY コマンドを使用して、アクティブ・サイトまたはリモート・サイトから RECON リストを作成することができます。

サブセクション:

- 『LIST.HISTORY コマンドの出力例』
- 448 ページの『タイムライン・サマリーの出力例』

LIST.HISTORY コマンドの出力例

以下は、タイムラインを含んでいる LIST.HISTORY コマンドの出力例です。

```
IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL          PAGE 0001
LIST.HISTORY DBD(DBOHIDK5)
17.132 10:05:17.427858          LISTING OF RECON          PAGE 0002
-----
DB
DBD=DBOHIDK5          DMB#=3          CHANGE#=5          TYPE=HALDB
SHARE LEVEL=3          GSGNAME=**NULL**
DBRCVGRP=**NULL**
PSNAME=**NULL** DBORG=PHIDAM DSORG=OSAM CURRENT PARTITION ID=00004
FLAGS:          COUNTERS:
RECOVERABLE          =YES          PARTITIONS          =4
ONLINE REORG CAPABLE =YES          DATA SET GROUP MEMBERS =1
          ALTER COUNT          =0
          ALTER COMPLETE COUNT =0
-----
17.132 10:05:17.427858          LISTING OF RECON          PAGE 0003
-----
DB
DBD=POHIDKA MASTER DB=DBOHIDK5 IRLMID=**NULL CHANGE#=2 TYPE=PART
USID=00000000005 AUTHORIZED USID=00000000005 HARD USID=00000000005
RECEIVE USID=00000000005 RECEIVE NEEDED USID=00000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DBOHIDK5          PARTITION ID=00001
PREVIOUS PARTITION=**NULL** NEXT PARTITION=POHIDKB
OLRIMSID=**NULL** ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0
```

OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

FREE SPACE:

FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5)
K0200

PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
D2F0F2F0F0

OSAM BLOCK SIZE:

A = 4096

FLAGS:

BACKOUT NEEDED =OFF
READ ONLY =OFF
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF

COUNTERS:

RECOVERY NEEDED COUNT =0
IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
HELD AUTHORIZATION STATE=0
EEQE COUNT =0
RECEIVE REQUIRED COUNT =0
OLR ACTIVE HARD COUNT =0
OLR INACTIVE HARD COUNT =0

TRACKING SUSPENDED =NO
OFR REQUIRED =NO
PARTITION INIT NEEDED =NO
OLREORG CURSOR ACTIVE =NO
PARTITION DISABLED =NO
ONLINE REORG CAPABLE =YES
REORG INTENT =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO
ALTER IN PROGRESS =NO
PARTITION ALTERED =NO

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0004

DBDS

DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.A00001 TYPE=PART
DBD=POHIDKA DDN=POHIDKAA DSID=001 DBORG=HIDAM DSORG=OSAM
CAGRP=CAGRP1 GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=2 DSSN=00000004
NOREUSE RECOVPD=0 OTHER DDN=**NULL**
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=PICJCL OICJCL=POICJCL RECOVJCL=PRECOJCL
RECVJCL=PRECVJCL

FLAGS:

IC NEEDED =OFF
RECOV NEEDED =OFF
RECEIVE NEEDED =OFF

COUNTERS:

EEQE COUNT =0

IMAGE

RUN = 17.132 09:55:38.790739 * RECORD COUNT =60
STOP = 00.000 00:00:00.000000 BATCH USID=0000000002

IC1

DSN=IMSVS.POHIDKA.POHIDKAA.IC.IC095537 FILE SEQ=0001
UNIT=SYSDA VOLS DEF=0001 VOLS USED=0001
VOLSER=222222

ALLOC

ALLOC =17.132 09:55:52.648653 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000002 USID=0000000003 START = 17.132 09:55:50.813040

ALLOC

ALLOC =17.132 09:59:28.695919 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000003 USID=0000000004 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 09:59:49.372832 DEALLOC LRID =0000000000000000

```

REORG
  RUN      = 17.132 10:01:14.301509      *   USID = 0000000004
  REORG#   = 00000

IMAGE
  RUN      = 17.132 10:01:18.279960      *   RECORD COUNT =15
  STOP     = 00.000 00:00:00.000000      BATCH   USID=0000000004

IC1
  DSN=IMSVS.POHIDKA.POHIDKAA.IC.IC100117      FILE SEQ=0001
  UNIT=SYSDA                                VOLS DEF=0001 VOLS USED=0001
                                           VOLSER=222222

```

```

CA
17.132 10:05:17.427858      LISTING OF RECON      PAGE 0005
  DSN=IMSVS.CAGRP1.CA.CA170201      FILE SEQ=1
  CAGRP=CAGRP1      STOP = 17.132 10:02:46.844810      *
                                           VOLS DEF=1   VOLS USED=1
                                           UNIT=SYSDA  VOLSER=222222
  RUN      = 17.132 10:02:54.777684
  DBD=POHIDKA DDN=POHIDKAA PURGETIME = 17.132 10:01:18.279960
  CHANGES ACCUMULATED=NO COMPLETE CA=YES INDOUBT EEQES=NO
  LSN      = 000000000000      DSSN = 0000000000
  LRID     = 0000000000000000 USID = 0000000000

```

```

ALLOC
  ALLOC    =17.132 10:03:13.617493      *   ALLOC LRID =0000000000000000
  DSSN=00000000004 USID=00000000005 START = 17.132 09:58:31.994836
  DEALLOC  =17.132 10:03:31.814758      DEALLOC LRID =0000000000000000

```

```

RECOV
  RUN      = 17.132 10:05:01.216151      *   RUN USID      = 0000000005

```

```

17.132 10:05:17.427858      LISTING OF RECON      PAGE 0006
-----

```

```

DBDS
  DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.L00001      TYPE=PART
  DBD=POHIDKA DDN=POHIDKAL DSID=003 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
  FLAGS:                                COUNTERS:
    RECOV NEEDED  =OFF                    EEQE COUNT          =0
-----

```

```

DSP0181I NO CAGRP      RECORD FOUND
DSP0181I NO CA        RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC     RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE     RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG    RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV    RECORD FOUND

```

```

17.132 10:05:17.427858      LISTING OF RECON      PAGE 0007
-----

```

```

DBDS
  DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.X00001      TYPE=PART
  DBD=POHIDKA DDN=POHIDKAX DSID=005 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
                                           OTHER DDN=**NULL**
  FLAGS:                                COUNTERS:
    RECOV NEEDED  =OFF                    EEQE COUNT          =0
-----

```

```

DSP0181I NO CAGRP      RECORD FOUND
DSP0181I NO CA        RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC     RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE     RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG    RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV    RECORD FOUND

```

```

DB
DBD=POHIDKB MASTER DB=DBOHIDK5 IRLMID=*NULL CHANGE#=3 TYPE=PART
USID=0000000004 AUTHORIZED USID=0000000004 HARD USID=0000000004
RECEIVE USID=0000000004 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DBOHIDK5 PARTITION ID=00002
PREVIOUS PARTITION=POHIDKA NEXT PARTITION=POHIDKC
OLRIMSID=*NULL** ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0
  OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

FREE SPACE:
  FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5 )
  K0400
PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
  D2F0F4F0F0

OSAM BLOCK SIZE:
  A = 4096

FLAGS:                                COUNTERS:
BACKOUT NEEDED =OFF                   RECOVERY NEEDED COUNT =0
READ ONLY =OFF                         IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF             AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
                                         HELD AUTHORIZATION STATE=0
                                         EEQE COUNT =0
TRACKING SUSPENDED =NO                 RECEIVE REQUIRED COUNT =0
OFR REQUIRED =NO                         OLR ACTIVE HARD COUNT =0
PARTITION INIT NEEDED =NO              OLR INACTIVE HARD COUNT =0
OLREORG CURSOR ACTIVE =NO
PARTITION DISABLED =NO
ONLINE REORG CAPABLE =YES
REORG INTENT =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO
ALTER IN PROGRESS =NO
PARTITION ALTERED =NO

```

```

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.A00002 TYPE=PART
DBD=POHIDKB DDN=POHIDKBA DSID=001 DBORG=HIDAM DSORG=OSAM
CAGRP=CAGRP1 GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=1 DSSN=00000003
NOREUSE RECOVPD=0 OTHER DDN=*NULL**
DEFLTJCL=*NULL** ICJCL=PICJCL OICJCL=POICJCL RECOVJCL=PRECOJCL
RECVJCL=PRECVJCL
FLAGS:                                COUNTERS:
  IC NEEDED =OFF
  RECOV NEEDED =OFF
  RECEIVE NEEDED =OFF
                                         EEQE COUNT =0

```

```

IMAGE
RUN = 17.132 09:55:39.976143 * RECORD COUNT =2
STOP = 00.000 00:00:00.000000 BATCH USID=0000000001

```

```

IC1
DSN=IMSVS.POHIDKB.POHIDKBA.IC.IC095537 FILE SEQ=0001
UNIT=SYSDA VOLS DEF=0001 VOLS USED=0001
VOLSER=222222

```

ALLOC
ALLOC =17.132 09:55:53.114372 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000001 USID=0000000002 START = 17.132 09:55:50.813040

ALLOC
ALLOC =17.132 09:59:29.051080 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000002 USID=0000000003 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 10:03:02.941604 DEALLOC LRID =0000000000000000

CA
DSN=IMSVS.CAGRP1.CA.CA170201 FILE SEQ=1
CAGRP=CAGRP1 STOP = 17.132 10:02:46.844810 *
UNIT=SYSDA VOLS DEF=1 VOLS USED=1
VOLSER=222222
RUN = 17.132 10:02:54.777684
DBD=POHIDKB DDN=POHIDKBA PURGETIME = 17.132 09:55:39.976143
CHANGES ACCUMULATED=YES COMPLETE CA=YES INDOUBT EEQES=NO
LSN = 00000000000 DSSN = 0000000002
LRID = 000000000001D46 USID = 0000000003

ALLOC
ALLOC =17.132 10:03:14.171247 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000003 USID=0000000004 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 10:03:31.814758 DEALLOC LRID =0000000000000000

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0010
RECOV
RUN = 17.132 10:05:03.815010 * RUN USID = 0000000004

DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0011

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.L00002 TYPE=PART
DBD=POHIDKB DDN=POHIDKBL DSID=003 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
FLAGS: COUNTERS:
RECOV NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

DSP0181I NO CAGRP RECORD FOUND
DSP0181I NO CA RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV RECORD FOUND
17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0012

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.X00002 TYPE=PART
DBD=POHIDKB DDN=POHIDKBX DSID=005 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
OTHER DDN=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:
RECOV NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

DSP0181I NO CAGRP RECORD FOUND
DSP0181I NO CA RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV RECORD FOUND

```

DB
DBD=POHIDKC MASTER DB=DBOHIDK5 IRLMID=*NULL CHANGE#=4 TYPE=PART
USID=0000000004 AUTHORIZED USID=0000000004 HARD USID=0000000004
RECEIVE USID=0000000004 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DBOHIDK5 PARTITION ID=00003
PREVIOUS PARTITION=POHIDKB NEXT PARTITION=POHIDKD
OLRIMSID=*NULL** ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0
  OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

```

```

FREE SPACE:
  FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

```

```

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5 )
  K0600
PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
  D2F0F6F0F0

```

```

OSAM BLOCK SIZE:
  A = 4096

```

```

FLAGS:                                COUNTERS:
BACKOUT NEEDED                        =OFF      RECOVERY NEEDED COUNT =0
READ ONLY                             =OFF      IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF           AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
                                        HELD AUTHORIZATION STATE=0
                                        EEQE COUNT =0
TRACKING SUSPENDED                    =NO      RECEIVE REQUIRED COUNT =0
OFR REQUIRED                            =NO      OLR ACTIVE HARD COUNT =0
PARTITION INIT NEEDED                 =NO      OLR INACTIVE HARD COUNT =0
OLREORG CURSOR ACTIVE                 =NO
PARTITION DISABLED                    =NO
ONLINE REORG CAPABLE                   =YES
REORG INTENT                           =NO
QUIESCE IN PROGRESS                   =NO
QUIESCE HELD                           =NO
ALTER IN PROGRESS                     =NO
PARTITION ALTERED                     =NO

```

```

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.A00003 TYPE=PART
DBD=POHIDKC DDN=POHIDKCA DSID=001 DBORG=HIDAM DSORG=OSAM
CAGRP=CAGRP1 GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=1 DSSN=00000003
NOREUSE RECOVPD=0 OTHER DDN=*NULL**
DEFLTJCL=*NULL** ICJCL=PICJCL OICJCL=POICJCL RECOVJCL=PRECOJCL
RECVJCL=PRECVJCL
FLAGS:                                COUNTERS:
  IC NEEDED =OFF
  RECOV NEEDED =OFF
  RECEIVE NEEDED =OFF
                                        EEQE COUNT =0

```

```

IMAGE
RUN = 17.132 09:55:41.157199 * RECORD COUNT =2
STOP = 00.000 00:00:00.000000 BATCH USID=0000000001

```

```

IC1
DSN=IMSVS.POHIDKC.POHIDKCA.IC.IC095537 FILE SEQ=0001
UNIT=SYSDA VOLS DEF=0001 VOLS USED=0001
VOLSER=222222

```


ALLOC
ALLOC =17.132 09:55:53.381303 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000001 USID=0000000002 START = 17.132 09:55:50.813040

ALLOC
ALLOC =17.132 09:59:29.342652 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000002 USID=0000000003 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 10:03:03.040050 DEALLOC LRID =0000000000000000

CA
DSN=IMSVS.CAGRP1.CA.CA170201 FILE SEQ=1
CAGRP=CAGRP1 STOP = 17.132 10:02:46.844810 *
UNIT=SYSDA VOLS DEF=1 VOLS USED=1
VOLSER=222222
RUN = 17.132 10:02:54.777684
DBD=POHIDKC DDN=POHIDCA PURGETIME = 17.132 09:55:41.157199
CHANGES ACCUMULATED=YES COMPLETE CA=YES INDOUBT EEQES=NO
LSN = 000000000000 DSSN = 0000000002
LRID = 000000000001EB9 USID = 0000000003

ALLOC
ALLOC =17.132 10:03:14.514883 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000003 USID=0000000004 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 10:03:31.814758 DEALLOC LRID =0000000000000000

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0015
RECOV
RUN = 17.132 10:05:06.945800 * RUN USID = 0000000004

DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0016

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.L00003 TYPE=PART
DBD=POHIDKC DDN=POHIDKCL DSID=003 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
FLAGS: COUNTERS:
RECOV NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

DSP0181I NO CAGRP RECORD FOUND
DSP0181I NO CA RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV RECORD FOUND

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0017

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.X00003 TYPE=PART
DBD=POHIDKC DDN=POHIDKCX DSID=005 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
OTHER DDN=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:
RECOV NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

DSP0181I NO CAGRP RECORD FOUND
DSP0181I NO CA RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV RECORD FOUND

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0018

DB

DBD=POHIDKD MASTER DB=DBOHIDK5 IRLMID=NULL CHANGE#=5 TYPE=PART
 USID=000000005 AUTHORIZED USID=000000005 HARD USID=000000005
 RECEIVE USID=000000005 RECEIVE NEEDED USID=000000000
 DSN PREFIX=IMSTESTS.DBOHIDK5 PARTITION ID=00004
 PREVIOUS PARTITION=POHIDKC NEXT PARTITION=NULL**
 OLRMSID=NULL** ACTIVE DBDS=A-J
 REORG#=00000
 ONLINE REORG STATISTICS:
 OLR BYTES MOVED = 0
 OLR SEGMENTS MOVED = 0
 OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

FREE SPACE:
 FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5)
 YYYYY
 PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
 FFFFFFFF

OSAM BLOCK SIZE:
 A = 4096

FLAGS:		COUNTERS:	
BACKOUT NEEDED	=OFF	RECOVERY NEEDED COUNT	=0
READ ONLY	=OFF	IMAGE COPY NEEDED COUNT	=0
PROHIBIT AUTHORIZATION	=OFF	AUTHORIZED SUBSYSTEMS	=0
		HELD AUTHORIZATION STATE	=0
		EEQE COUNT	=0
TRACKING SUSPENDED	=NO	RECEIVE REQUIRED COUNT	=0
OFR REQUIRED	=NO	OLR ACTIVE HARD COUNT	=0
PARTITION INIT NEEDED	=NO	OLR INACTIVE HARD COUNT	=0
OLREORG CURSOR ACTIVE	=NO		
PARTITION DISABLED	=NO		
ONLINE REORG CAPABLE	=YES		
REORG INTENT	=NO		
QUIESCE IN PROGRESS	=NO		
QUIESCE HELD	=NO		
ALTER IN PROGRESS	=NO		
PARTITION ALTERED	=NO		

 17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0019

DBDS
 DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.A00004 TYPE=PART
 DBD=POHIDKD DDN=POHIDKDA DSID=001 DBORG=HIDAM DSORG=OSAM
 CAGRP=CAGRP1 GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=1 DSSN=00000004
 NOREUSE RECOVPD=0 OTHER DDN=NULL**
 DEFLTJCL=NULL** ICJCL=PICJCL OICJCL=POICJCL RECOVJCL=PRECOJCL
 RECVJCL=PRECVJCL
 FLAGS: COUNTERS:
 IC NEEDED =OFF
 RECOV NEEDED =OFF
 RECEIVE NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

IMAGE
 RUN = 17.132 09:55:42.200255 * RECORD COUNT =60
 STOP = 00.000 00:00:00.000000 BATCH USID=000000002

IC1
 DSN=IMSVS.POHIDKD.POHIDKDA.IC.IC095537 FILE SEQ=0001
 UNIT=SYSDA VOLS DEF=0001 VOLS USED=0001
 VOLSER=222222

ALLOC
ALLOC =17.132 09:55:51.931499 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000002 USID=0000000003 START = 17.132 09:55:50.813040

ALLOC
ALLOC =17.132 09:59:29.618104 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000003 USID=0000000004 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 10:03:03.169020 DEALLOC LRID =0000000000000000

CA
DSN=IMSVS.CAGRP1.CA.CA170201 FILE SEQ=1
CAGRP=CAGRP1 STOP = 17.132 10:02:46.844810 *
UNIT=SYSDA VOLS DEF=1 VOLS USED=1
VOLSER=222222
RUN = 17.132 10:02:54.777684
DBD=POHIDKD DDN=POHIDKDA PURGETIME = 17.132 09:55:42.200255
CHANGES ACCUMULATED=YES COMPLETE CA=YES INDOUBT EEQES=NO
LSN = 000000000000 DSSN = 0000000003
LRID = 000000000001EC3 USID = 0000000004

ALLOC
ALLOC =17.132 10:03:14.849937 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000004 USID=0000000005 START = 17.132 09:58:31.994836
DEALLOC =17.132 10:03:31.814758 DEALLOC LRID =0000000000000000

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0020
RECOV
RUN = 17.132 10:05:09.581948 * RUN USID = 0000000005

DSP0181I NO REORG RECORD FOUND

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0021

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.L00004 TYPE=PART
DBD=POHIDKD DDN=POHIDKDL DSID=003 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
FLAGS: COUNTERS:
RECOV NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

DSP0181I NO CAGRP RECORD FOUND
DSP0181I NO CA RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV RECORD FOUND

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0022

DBDS
DSN=IMSTESTS.DBOHIDK5.X00004 TYPE=PART
DBD=POHIDKD DDN=POHIDKDX DSID=005 DBORG=INDEX DSORG=VSAM
OTHER DDN=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:
RECOV NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

DSP0181I NO CAGRP RECORD FOUND
DSP0181I NO CA RECORD FOUND
DSP0181I NO ALLOC RECORD FOUND
DSP0181I NO IMAGE RECORD FOUND
DSP0181I NO REORG RECORD FOUND
DSP0181I NO RECOV RECORD FOUND

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0023

PRILOG RECORD SIZE= 304
START = 17.132 09:55:50.813040 * SSID=PWKBLP2 VERSION=15.1
STOP = 17.132 09:56:06.037616 #DSN=1

この例は、IMS データベースのタイムライン・サマリー出力を示しています。出力には、データベース静止コマンドによって作成された割り振りイベントおよび割り振り解除イベントが含まれています。

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0025

```

+-----+
| Timeline for DBDS: POHIDKA POHIDKAA
|                      USID=00000005 AUTHORIZED=00000005
|                      RECEIVE=00000000 HARD=00000005
|                      ACTIVE DBDS=A-J
+-----+
| Time-----+Events-----+-----+-----+
|              | IC      |      | US | Subsystem
|              | REORG  |      | ID| Logs and Allocs
|              | RECOV  | CA  |   |
+-----+-----+-----+-----+
17.132 09:55:38.790739 B              2
17.132 09:55:50.813040              PWKBLP2
17.132 09:55:52.648653              3 A
17.132 09:56:06.037616              3 C
17.132 09:58:31.994836              IMS1
17.132 09:59:28.695919              4 A
17.132 09:59:29.840457              | s
17.132 09:59:49.372832              4 D
17.132 09:59:49.448219              s
17.132 10:01:14.301509 G              |
17.132 10:01:18.279960 B              < 4 |
17.132 10:02:46.844810              S   s
17.132 10:02:54.777684              Rnc  |
17.132 10:03:13.617493              5 A
17.132 10:03:31.814758              5 D
17.132 10:03:31.907722              s
17.132 10:05:01.216151 R              |
+-----+-----+-----+-----+

```

In the timeline, only the last digit of USID is shown.
 IC: B = Batch, U = UIC, O = OIC, C = CIC, s = Stop
 REORG: G = REORG, GL = ONLINE REORG, GT = ALTER REORG
 s = Stoptime if online reorg
 y/n = Online reorg may be used as input
 to recovery
 The last digit of the reorg# is shown if the reorg# is not zero
 RECOV: R = Run time, * = RECOVTO time (if any)
 The last digit of the reorg# is shown if the reorg# is not zero
 CA: R = Run time, S = Stop time, < = Purge time
 ? = Inconsistency between times
 y/n = CHANGES ACCUMULATED, i/c = (IN)/COMPLETE
 Logs: SSID = Open time, C = Log Close,
 v = Vol close, s = DS close
 Allocs: D = Dealloc time, A = Alloc time, DQ = Dealloc time with QUIESCE

説明: 17.132 09:55:52.648653 のタイム・スタンプ項目は、割り振りイベントを記録します。 17.132 09:59:49.372832 のタイム・スタンプ項目は、割り振り解除イベントを示します。

例 2: REORG イベントに記録された再編成番号

この例は、HALDB 区画データベースのタイムライン・サマリー出力を示しています。出力には、以下のように、HALDB オンライン再編成について記録された再編成番号が含まれています。

17.132 10:05:17.427858 LISTING OF RECON PAGE 0031

```

+-----+
| Timeline for DBDS: POHIDKC POHIDKCA
|                      USID=00000004 AUTHORIZED=00000004
+-----+

```

		RECEIVE=00000000		HARD=00000004	
		ACTIVE DBDS=A-J			
Time	Events	IC	CA	US	Subsystem
		REORG		ID	Logs and Allocs
		RECOV			
17.132 09:55:41.157199	B		<	1	
17.132 09:55:50.813040					PWKBLP2
17.132 09:55:53.381303				2	A
17.132 09:56:06.037616				2	C
17.132 09:58:31.994836					IMS1
17.132 09:59:29.342652				3	A
17.132 09:59:29.840457					s
17.132 09:59:49.448219					s
17.132 10:02:46.844810		S			s
17.132 10:02:54.777684			Ryc		
17.132 10:03:03.040050				3	D
17.132 10:03:14.514883				4	A
17.132 10:03:31.814758				4	D
17.132 10:03:31.907722					s
17.132 10:05:06.945800	R				

In the timeline, only the last digit of USID is shown.
 IC: B = Batch, U = UIC, O = OIC, C = CIC, s = Stop
 RECOV: R = Run time, * = RECOVTO time (if any)
 The last digit of the reorg# is shown if the reorg# is not zero
 CA: R = Run time, S = Stop time, < = Purge time
 ? = Inconsistency between times
 y/n = CHANGES ACCUMULATED, i/c = (IN)/COMPLETE
 Logs: SSID = Open time, C = Log Close,
 v = Vol close, s = DS close
 Allocs: D = Dealloc time, A = Alloc time, DQ = Dealloc time with QUIESCE

説明: A-J DBDS はアクティブ・データ・セットです。POHIDKCA は、この区画 DBDS のパートナー DBDS です。現在の再編成番号は 4 に設定されています。

例 3: RECOV イベントでのタイム・スタンプ・リカバリーによって設定された再編成番号

この例は、HALDB 区画データベースのタイムライン・サマリー出力を示しています。以下の出力では、再編成番号は RECOV イベントでのタイム・スタンプ・リカバリーによって設定されています。

17.132 10:05:17.427858		LISTING OF RECON		PAGE 0034	
		Timeline for DBDS: POHIDKD POHIDKDA			
		USID=00000005		AUTHORIZED=00000005	
		RECEIVE=00000000		HARD=00000005	
		ACTIVE DBDS=A-J			
Time	Events	IC	CA	US	Subsystem
		REORG		ID	Logs and Allocs
		RECOV			
17.132 09:55:42.200255	B		<	2	
17.132 09:55:50.813040					PWKBLP2
17.132 09:55:51.931499				3	A
17.132 09:56:06.037616				3	C
17.132 09:58:31.994836					IMS1
17.132 09:59:29.618104				4	A
17.132 09:59:29.840457					s
17.132 09:59:49.448219					s
17.132 10:02:46.844810		S			s

```

17.132 10:02:54.777684          Ryc | |
17.132 10:03:03.169020          4 D
17.132 10:03:14.849937          5 A
17.132 10:03:31.814758          5 D
17.132 10:03:31.907722          s
17.132 10:05:09.581948 R      |
+-----+-----+-----+-----+

```

In the timeline, only the last digit of USID is shown.
 IC: B = Batch, U = UIC, O = OIC, C = CIC, s = Stop
 RECOV: R = Run time, * = RECOVTO time (if any)
 The last digit of the reorg# is shown if the reorg# is not zero
 CA: R = Run time, S = Stop time, < = Purge time
 ? = Inconsistency between times
 y/n = CHANGES ACCUMULATED, i/c = (IN)/COMPLETE
 Logs: SSID = Open time, C = Log Close,
 v = Vol close, s = DS close
 Allocs: D = Dealloc time, A = Alloc time, DQ = Dealloc time with QUIESCE

説明: A-J DBDS はアクティブ・データ・セットです。POHIDKD は、この区画 DBDS のパートナー DBDS です。現在の再編成番号は 5 に設定されています。このデータ・セットは、タイムライン項目 17.132 10:02:54.777684 での HALDB オンライン再編成に使用された入力データ・セットでした。このデータ・セットは、HALDB オンライン再編成が実行される前は、再編成番号が 3 であったことを示しています。HALDB オンライン再編成で、データベースの再編成番号が 4 に増分されました。出力データ・セット内の HALDB オンライン再編成レコードは、再編成番号を 4 としてリストしています。パートナー DBDS (POHIDKAM) のリスト表示を参照してください。17.132 10:05:09.581948 のタイム・スタンプ・リカバリーのタイムライン項目は、最後の HALDB オンライン再編成の前のデータ・セットをリカバリーしました。再編成番号は 5 に設定されました。

パートナー DBDS のタイムライン・サマリーは、以下のように表示されています。

```

17.132 10:05:18.098606          LISTING OF RECON          PAGE 0009
+-----+-----+-----+-----+
| Timeline for DBDS: POHIDKA POHIDKAA
|                               USID=00000005 AUTHORIZED=00000005
|                               RECEIVE=00000000 HARD=00000005
|                               ACTIVE DBDS=A-J
+-----+-----+-----+-----+
| Time-----+Events-----+-----+-----+
|           | IC           |      | US | Subsystem
|           | REORG        |      | ID| Logs and Allocs
|           | RECOV        | CA   |   |
+-----+-----+-----+-----+
17.132 09:55:38.790739 B          2
17.132 09:55:50.813040          PWKBLP2
17.132 09:55:52.648653          3 A
17.132 09:56:06.037616          3 C
17.132 09:58:31.994836          IMS1
17.132 09:59:28.695919          4 A
17.132 09:59:29.840457          | s
17.132 09:59:49.372832          4 D
17.132 09:59:49.448219          s
17.132 10:01:14.301509 G          |
17.132 10:01:18.279960 B          < 4 |
17.132 10:02:46.844810          S   s
17.132 10:02:54.777684          Rnc |
17.132 10:03:13.617493          5 A
17.132 10:03:31.814758          5 D
17.132 10:03:31.907722          s
17.132 10:05:01.216151 R          |
+-----+-----+-----+-----+

```

In the timeline, only the last digit of USID is shown.
 IC: B = Batch, U = UIC, O = OIC, C = CIC, s = Stop

```

REORG: G = REORG, GL = ONLINE REORG, GT = ALTER REORG
       s = Stoptime if online reorg
       y/n = Online reorg may be used as input
           to recovery
       The last digit of the reorg# is shown if the reorg# is not zero
RECOV: R = Run time, * = RECOVTO time (if any)
       The last digit of the reorg# is shown if the reorg# is not zero
CA: R = Run time, S = Stop time, < = Purge time
    ? = Inconsistency between times
    y/n = CHANGES ACCUMULATED, i/c = (IN)/COMPLETE
Logs: SSID = Open time, C = Log Close,
      v = Vol close, s = DS close
Allocs: D = Dealloc time, A = Alloc time, DQ = Dealloc time with QUIESCE

```

説明: A-J DBDS はアクティブ・データ・セットです。POHIDKAA は、この区画 DBDS のパートナー DBDS です。現在の再編成番号は 5 に設定されています。このデータ・セットは、タイムライン項目 14.161 13:07:22:012345 での HALDB オンライン再編成に使用された出力データ・セットでした。これは、再編成番号が 4 に増分されたことを示しています。パートナー DBDS のタイムライン・サマリーは、HALDB オンライン再編成の前にタイム・スタンプ・リカバリーが生じ、再編成番号を 5 に設定したことを示しています。

RECON データ・セットのサンプル・リスト

RECON データ・セットを示すために、サンプル RECON レコード・リストを表示します。

サブセクション:

- 『RECON 状況レコード』
- 453 ページの『ログ・レコード』
- 453 ページの『SSYS レコード』
- 453 ページの『BACKOUT レコード』
- 454 ページの『CAGRP および CA レコード』
- 455 ページの『DBGRP、DBDSGRP、および RECOVGRP レコード』
- 460 ページの『DB (IMS) および関連レコード』
- 462 ページの『DB (HALDB および PART) および関連レコード』
- 465 ページの『DB (FP) および関連レコード』

RECON 状況レコード

このサンプルは、RECON 状況レコードを示しています。

```

17.131 10:01:48.307694          LISTING OF RECON          PAGE 0003
-----
DB
DBD=DHVNTK03                DMB#=1      CHANGE#=5      TYPE=HALDB
SHARE LEVEL=0                GSGNAME=**NULL**
DBRCVGRP=**NULL**
PSNAME=**NULL**  DBORG=PHIDAM  DSORG=VSAM    CURRENT PARTITION ID=00004
FLAGS:                        COUNTERS:
  RECOVERABLE                =YES          PARTITIONS                =4
  ONLINE REORG CAPABLE       =YES          DATA SET GROUP MEMBERS   =1
                                ALTER COUNT                =0
                                ALTER COMPLETE COUNT       =0

```


ログ・レコード

このサンプルは、ログ・レコードを示しています。

17.132 14:42:52.868734 LISTING OF RECON PAGE 0003

```
-----
PRILOG                                RECORD SIZE= 304
START = 17.132 14:32:44.400778      *  SSID=LOADPDJK VERSION=15.1
STOP  = 17.132 14:32:52.747727      #DSN=1
GSGNAME=**NULL**                      NORMAL TERM
FIRST RECORD ID= 0000000000000001    PRILOG TOKEN= 0
```

```
DSN=IMSTESTS.PDJKLOG1                    UNIT=SYSDA
START = 17.132 14:32:44.400778      FIRST DS LSN= 0000000000000001
STOP  = 17.132 14:32:52.747727      LAST  DS LSN= 000000000000011C
FILE SEQ=0001      #VOLUMES=0001
```

```
VOLSER=DSHR03 STOPTIME = 17.132 14:32:52.747727
CKPTCT=0      CHKPT ID = 00.000 00:00:00.000000
LOCK SEQUENCE#= 000000000000
```

```
LOGALL
START = 17.132 14:32:44.400778      *
EARLIEST ALLOC TIME = 00.000 00:00:00.000000
DBDS ALLOC=0
```

SSYS レコード

このサンプルは、SSYS レコードを示しています。

17.135 10:58:20.921964 LISTING OF RECON PAGE 0009

```
-----
SSYS
SSID=IMS1      LOG START=17.135 10:51:56.572733
SSTYPE=ONLINE ABNORMAL TERM=OFF RECOVERY STARTED=NO  BACKUP=NO
TRACKED=NO     TRACKER TERM=OFF SHARING COVERED DBS=NO
IRLMID=IRLM2   IRLM STATUS=NORMAL      GSGNAME=**NULL**
COEXISTENCE LEVEL=15.1
```

```
AUTHORIZED DATA BASES/AREAS=3      VERSION=15.1 XRF CAPABLE=NO
                                         ENCODED
-DBD-      -AREA-  -LEVEL-  -ACCESS INTENT-  -STATE-
DIVNTZ02   **NULL**  3        UPDATE          3
DXVNTZ02   **NULL**  3        UPDATE          3
DHSVNTZ02  **NULL**  3        UPDATE          3
```

```
DSP0177I NO BACKOUT RECORDS DEFINED IN RECON
DSP0128I NO CHANGE ACCUMULATION GROUPS DEFINED IN RECON
DSP0093I NO DBDSGRP RECORD FOUND IN RECON
```

BACKOUT レコード

このサンプルは、BACKOUT レコードを示しています。

17.132 12:11:49.689722 LISTING OF RECON PAGE 0002

```
-----
BACKOUT
SSID=SYS1      #UORS=2

RECOVERY TOKEN=E2E8E2F140404040000000004000000000
TIME=17.132 12:06:41.965920      PSB=PLAPJK02
                                BMP
ASSOCIATED DATA BASES=3
```

```
BACKED  DYN BKOUT
-DBD-   -OUT -  -FAILURE-
DXHIDJ03 NO      YES
```

DHVNTK03 NO YES
DXVNTK03 NO YES

RECOVERY TOKEN=E2E8E2F1404040400000000700000000
TIME=17.132 12:09:04.631786 PSB=PSBEJK05
INFLT BMP
ASSOCIATED DATA BASES=3

	BACKED	DYN BKOUT
-DBD-	-OUT -	-FAILURE-
DBVHDJ05	NO	NO
DBOHIDK5	NO	NO
DXVHIDK5	NO	NO

DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 1
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 17.132 12:11:50.039380

CAGRP および CA レコード

このサンプルは、CAGRP および CA レコードを示しています。

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0010

CAGRP
GRPNAME=CAGRP1 GRPMAX=10 CA AVAIL=2 CA USED=0
REUSE CAJCL=CAJCL DEFLTJCL=**NULL** RECOVPD=0
#MEMBERS=1 -DBD- -DDN-
HISAMISA HISAMISA

AVAILABLE DATA SET
CAGRP=CAGRP1

CA
* DSN=IMSLI.CAGRP1.CA.CA001 FILE SEQ=1
CAGRP=CAGRP1 CREATE = 17.132 10:37:28.977308 *
UNIT=3400 VOLS DEF=1 VOLS USED=0
VOLSER=USER02

AVAILABLE DATA SET
CAGRP=CAGRP1

CA
* DSN=IMSLI.CAGRP1.CA.CA002 FILE SEQ=1
CAGRP=CAGRP1 CREATE = 17.132 10:37:28.989169 *
UNIT=3400 VOLS DEF=1 VOLS USED=0
VOLSER=USER02

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0011

CAGRP
GRPNAME=CAGRP2 GRPMAX=2 CA AVAIL=2 CA USED=0
REUSE CAJCL=CAJCL DEFLTJCL=**NULL** RECOVPD=0
#MEMBERS=1 -DBD- -DDN-
HDAMVSAM DD1

AVAILABLE DATA SET
CAGRP=CAGRP2

CA
* DSN=IMSLI.CAGRP2.CA.CA001 FILE SEQ=1
CAGRP=CAGRP2 CREATE = 17.132 10:37:29.001831 *
UNIT=3400 VOLS DEF=1 VOLS USED=0
VOLSER=USER02

AVAILABLE DATA SET

CAGRP=CAGRP2

CA
* DSN=IMSLI.CAGRP2.CA.CA002 FILE SEQ=4
CAGRP=CAGRP2 CREATE = 17.132 10:37:29.012359 *
UNIT=3400 VOLS DEF=1 VOLS USED=0
VOLSER=CAV011
17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0012

CAGRP
GRPNAME=CAGRP3 GRPMAX=2 CA AVAIL=0 CA USED=0
NOREUSE CAJCL=CAJCL DEFLTJCL=**NULL** RECOVPD=0
#MEMBERS=1 -DBD- -DDN-
HISAMVSA HISAMVSA

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0013

CAGRP
GRPNAME=CAGRP4 GRPMAX=2 CA AVAIL=0 CA USED=0
REUSE CAJCL=CAJCL DEFLTJCL=**NULL** RECOVPD=0
#MEMBERS=1 -DBD- -DDN-
SHISAM SHISAM

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0014

CAGRP
GRPNAME=CAGRP5 GRPMAX=2 CA AVAIL=0 CA USED=0
REUSE CAJCL=CAJCL DEFLTJCL=**NULL** RECOVPD=0
#MEMBERS=1 -DBD- -DDN-
SHISAMVS SHISAMVS

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0015

CAGRP
GRPNAME=CAGRP6 GRPMAX=4 CA AVAIL=0 CA USED=0
REUSE CAJCL=CAJCL DEFLTJCL=**NULL** RECOVPD=0
#MEMBERS=1 -DBD- -DDN-
INDEXVSA INDEXVSA

DBGRP、DBDSGRP、および RECOVGRP レコード

このサンプルは、DBGRP、DBDSGRP、および RECOVGRP レコードを示しています。

17.132 14:42:52.868734 LISTING OF RECON PAGE 0016

DBGRP
GRPNAME=MYGRP #MEMBERS=300 -DBD/AREA-
PDHDKAA
PDHDKAB
PDHDKAC
PDHDKAD
PDHDKAE
PDHDKAF
PDHDKAG
PDHDKAH
PDHDKAI
PDHDKAJ
PDHDKAK
PDHDKAL
PDHDKAM
PDHDKAN
PDHDKAO
PDHDKAP
PDHDKAQ
PDHDKAR

PDHDKAS
PDHDKAT
PDHDKAU
PDHDKAV
PDHDKAW
PDHDKAX
PDHDKAY
PDHDKAZ
PDHDKA0
PDHDKA1
PDHDKA2
PDHDKA3
PDHDKA4
PDHDKA5
PDHDKA6
PDHDKA7
PDHDKA8
PDHDKA9
PDHDKBA
PDHDKBB
PDHDKBC
PDHDKBD
PDHDKBE
PDHDKBF
PDHDKBG
PDHDKBH

17.132 14:42:52.868734

LISTING OF RECON

PAGE 0017

PDHDKBI
PDHDKBJ
PDHDKBK
PDHDKBL
PDHDKBM
PDHDKBN
PDHDKB0
PDHDKBP
PDHDKBQ
PDHDKBR
PDHDKBS
PDHDKBT
PDHDKBU
PDHDKBV
PDHDKBW
PDHDKBX
PDHDKBY
PDHDKBZ
PDHDKB0
PDHDKB1
PDHDKB2
PDHDKB3
PDHDKB4
PDHDKB5
PDHDKB6
PDHDKB7
PDHDKB8
PDHDKB9
PDHDKCA
PDHDKCB
PDHDKCC
PDHDKCD
PDHDKCE
PDHDKCF
PDHDKCG
PDHDKCH
PDHDKCI
PDHDKCJ
PDHDKCK
PDHDKCL

PDHDKCM
PDHDKCN
PDHDKCO
PDHDKCP
PDHDKCQ

17.132 14:42:52.868734

LISTING OF RECON

PAGE 0018

PDHDKCR
PDHDKCS
PDHDKCT
PDHDKCU
PDHDKCV
PDHDKCW
PDHDKCX
PDHDKCY
PDHDKCZ
PDHDKC0
PDHDKC1
PDHDKC2
PDHDKC3
PDHDKC4
PDHDKC5
PDHDKC6
PDHDKC7
PDHDKC8
PDHDKC9
PDHDKDA
PDHDKDB
PDHDKDC
PDHDKDD
PDHDKDE
PDHDKDF
PDHDKDG
PDHDKDH
PDHDKDI
PDHDKDJ
PDHDKDK
PDHDKDL
PDHDKDM
PDHDKDN
PDHDKDO
PDHDKDP
PDHDKDQ
PDHDKDR
PDHDKDS
PDHDKDT
PDHDKDU
PDHDKDV
PDHDKDW
PDHDKDX
PDHDKDY
PDHDKDZ

17.132 14:42:52.868734

LISTING OF RECON

PAGE 0019

PDHDKD0
PDHDKD1
PDHDKD2
PDHDKD3
PDHDKD4
PDHDKD5
PDHDKD6
PDHDKD7
PDHDKD8
PDHDKD9
PDHDKEA
PDHDKEB
PDHDKEC
PDHDKED
PDHDKEE

PDHDKEF
PDHDOAA
PDHDOAB
PDHDOAC
PDHDOAD
PDHDOAE
PDHDOAF
PDHDOAG
PDHDOAH
PDHDOAI
PDHDOAJ
PDHDOAK
PDHDOAL
PDHDOAM
PDHDOAN
PDHDOAO
PDHDOAP
PDHDOAQ
PDHDOAR
PDHDOAS
PDHDOAT
PDHDOAU
PDHDOAV
PDHDOAW
PDHDOAX
PDHDOAY
PDHDOAZ
PDHDOA0
PDHDOA1
PDHDOA2

17.132 14:42:52.868734

LISTING OF RECON

PAGE 0020

PDHDOA3
PDHDOA4
PDHDOA5
PDHDOA6
PDHDOA7
PDHDOA8
PDHDOA9
PDHDOBA
PDHDOBB
PDHDOBC
PDHDOBD
PDHDOBE
PDHDOBF
PDHDOBG
PDHDOBH
PDHDOBI
PDHDOBJ
PDHDOBK
PDHDOBL
PDHDOBM
PDHDOBN
PDHDOBO
PDHDOBP
PDHDOBQ
PDHDOBR
PDHDOBS
PDHDOBT
PDHDOBU
PDHDOBV
PDHDOBW
PDHDOBX
PDHDOBY
PDHDOBZ
PDHDOB0
PDHDOB1
PDHDOB2

17.132 14:42:52.868734

LISTING OF RECON

PAGE 0021

PDHDOB3
PDHDOB4
PDHDOB5
PDHDOB6
PDHDOB7
PDHDOB8
PDHDOB9
PDHDOCA
PDHDOCB

PDHDOCC
PDHDOCD
PDHDOCE
PDHDOCF
PDHDOCG
PDHDOCH
PDHDOCI
PDHDOCJ
PDHDOCK
PDHDOCL
PDHDOCM
PDHDOCN
PDHDOCO
PDHDOCP
PDHDOCQ
PDHDOCR
PDHDOCS
PDHDOCT
PDHDOCU
PDHDOCV
PDHDOCW
PDHDOCX
PDHDOCY
PDHDOCZ
PDHDOC0
PDHDOC1
PDHDOC2
PDHDOC3
PDHDOC4
PDHDOC5
PDHDOC6
PDHDOC7
PDHDOC8
PDHDOC9
PDHDODA
PDHDODB
PDHDODC
PDHDODD
PDHDODE
PDHDODF
PDHDODG
PDHDODH
PDHDODI
PDHDODJ
PDHDODK

17.132 14:42:52.868734

LISTING OF RECON

PAGE 0022

PDHDODL
PDHDODM
PDHDODN
PDHDODO
PDHDODP
PDHDODQ
PDHDODR
PDHDODS
PDHDODT
PDHDODU
PDHDODV

PDHDODW
 PDHDODX
 PDHDODY
 PDHDODZ
 PDHDOD0
 PDHDOD1
 PDHDOD2
 PDHDOD3
 PDHDOD4
 PDHDOD5
 PDHDOD6
 PDHDOD7
 PDHDOD8
 PDHDOD9
 PDHDOEA
 PDHDOEB
 PDHDOEC
 PDHDOED
 PDHDOEE
 PDHDOEF

17.132 14:30:45.565622 LISTING OF RECON PAGE 0017

```
-----
DBDSGRP
GRPNAME=DBDSGRP1          #MEMBERS=1    -DBD-   -DDN/AREA-
                           DIVNTZ02    DBHVSAM1

DBDSGRP
GRPNAME=DBDSGRP5          #MEMBERS=2    -DBD-   -DDN/AREA-
                           DBOVLFPC    VLOSAM01
                           DEDBJN23    DB23AR0
```

17.135 09:36:29.931706 LISTING OF RECON PAGE 0012

```
-----
RECOVGRP
GRPNAME=RECOVGP1          #MEMBERS=6    -DBD-   -AREA-
                           DBVHDJ05
                           DBOHIDK5
                           DXVHIDK5
                           D2XHIDK5
                           D2XHDJ05
                           DEDBDD01    DD01AR0

RECOVGRP
GRPNAME=RECOVGP2          #MEMBERS=3    -DBD-   -AREA-
                           DHVNTZ02
                           DXVNTZ02
                           DIVNTZ02

RECOVGRP
GRPNAME=RECOVGP3          #MEMBERS=8    -DBD-   -AREA-
                           DEDBJN23    DB23AR0
                           DEDBJN23    DB23AR1
                           DEDBJN23    DB23AR2
                           DEDBJN23    DB23AR3
                           DEDBJN23    DB23AR4
                           DEDBJN23    DB23AR5
                           DEDBJN23    DB23AR6
                           DEDBJN23    DB23AR7
```

DB (IMS) および関連レコード

このサンプルは、DB (IMS) レコードと関連のレコードを示しています。

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0016

```
-----
DB
DBD=HDAMVSAM                DMB#=6      TYPE=IMS
```


SHARE LEVEL=0 GSGNAME=**NULL** USID=0000000001
AUTHORIZED USID=0000000000 RECEIVE USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DBRCVGRP=**NULL**

FLAGS: COUNTERS:
BACKOUT NEEDED =OFF RECOVERY NEEDED COUNT =0
READ ONLY =OFF IMAGE COPY NEEDED COUNT =1
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
RECOVERABLE =YES HELD AUTHORIZATION STATE=0
EEQE COUNT =0
RECEIVE REQUIRED COUNT =0
TRACKING SUSPENDED =NO
OFR REQUIRED =NO
REORG INTENT =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0017

DBDS
DSN=HDAMVSAM TYPE=IMS
DBD=HDAMVSAM DDN=DD1 DSID=001 DBORG=HDAM DSORG=VSAM
CAGRP=CAGRP2 GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=0 DSSN=00000000
REUSE RECOVPD=0
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL OICJCL=OICJCL RECOVJCL=RECOVJCL
RECVJCL=ICRCVJCL
FLAGS: COUNTERS:
IC NEEDED =ON
RECOV NEEDED =OFF
RECEIVE NEEDED =OFF EEQE COUNT =0

ALLOC
ALLOC =80.030 12:12:13.100000 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000000 USID=0000000000 START = 80.030 12:12:12.000000
DEALLOC =80.031 13:13:13.000000 DEALLOC LRID =0000000000000000
CMD

REORG
RUN = 80.030 12:12:12.100000 * USID = 0000000000
REORG# = 00000

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0018

DB
DBD=HIDAMVSA DMB#=1 TYPE=IMS
SHARE LEVEL=0 GSGNAME=**NULL** USID=0000000001
AUTHORIZED USID=0000000000 RECEIVE USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DBRCVGRP=**NULL**

FLAGS: COUNTERS:
BACKOUT NEEDED =OFF RECOVERY NEEDED COUNT =0
READ ONLY =OFF IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
RECOVERABLE =YES HELD AUTHORIZATION STATE=0
EEQE COUNT =0
RECEIVE REQUIRED COUNT =0
TRACKING SUSPENDED =NO
OFR REQUIRED =NO
REORG INTENT =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0019

DBDS
DSN=HIDAMVSA TYPE=IMS
DBD=HIDAMVSA DDN=HIDAMVS1 DSID=001 DBORG=HIDAM DSORG=VSAM
CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=1 IC USED=0 DSSN=00000000
REUSE RECOVPD=0

```

DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL      OICJCL=OICJCL  RECOVJCL=RECOVJCL
RECVJCL=ICRCVJCL
FLAGS:                                COUNTERS:
  IC NEEDED      =OFF
  IC RECOMMENDED =ON
  RECOV NEEDED   =OFF
  RECEIVE NEEDED =OFF                EEQE COUNT          =0

```

AVAILABLE DATA SET
DBD=HIDAMVSA DDN=HIDAMVS1

IMAGE
* CREATE = 17.132 10:37:28.821180 *

```

IC1
DSN=DBRCIMS.HIDAMVSA.HIDAMVS1.IC.ICDSN1      FILE SEQ=0001
UNIT=3400                                     VOLS DEF=0001 VOLS USED=0000
                                              VOLSER=VOL003

```

17.132 10:37:44.401520 LISTING OF RECON PAGE 0020

```

DBDS
DSN=HIDAMVSA                                TYPE=IMS
DBD=HIDAMVSA DDN=HIDAMVS2 DSID=002 DBORG=HIDAM DSORG=VSAM
CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=1 IC USED=0 DSSN=00000000
REUSE RECOVPD=0
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL      OICJCL=OICJCL  RECOVJCL=RECOVJCL
RECVJCL=ICRCVJCL
FLAGS:                                COUNTERS:
  IC NEEDED      =OFF
  IC RECOMMENDED =ON
  RECOV NEEDED   =OFF
  RECEIVE NEEDED =OFF                EEQE COUNT          =0

```

AVAILABLE DATA SET
DBD=HIDAMVSA DDN=HIDAMVS2

IMAGE
* CREATE = 17.132 10:37:28.835174 *

```

IC1
DSN=DBRCIMS.HIDAMVSA.HIDAMVS2.IC.ICDSN2      FILE SEQ=0001
UNIT=3400                                     VOLS DEF=0001 VOLS USED=0000
                                              VOLSER=VOL004

```

DB (HALDB および PART) および関連レコード

このサンプルは、DB (HALDB および PART) レコードと関連のレコードを示しています。

17.131 10:01:48.307694 LISTING OF RECON PAGE 0003

```

DB
DBD=DHVNTK03                                DMB#=1      CHANGE#=5    TYPE=HALDB
SHARE LEVEL=0                                GSGNAME=**NULL**
DBRCVGRP=**NULL**
PSNAME=**NULL** DBORG=PHIDAM DSORG=VSAM CURRENT PARTITION ID=00004
FLAGS:                                COUNTERS:
  RECOVERABLE      =YES                PARTITIONS          =4
  ONLINE REORG CAPABLE =YES            DATA SET GROUP MEMBERS =1
                                              ALTER COUNT         =0
                                              ALTER COMPLETE COUNT =0

```

17.131 10:01:48.307694 LISTING OF RECON PAGE 0004

```

DB
DBD=PHVNTKA MASTER DB=DHVNTK03 CHANGE#=2 TYPE=PART
USID=0000000001 AUTHORIZED USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE USID=0000000000 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DHVNTK03 PARTITION ID=00001
PREVIOUS PARTITION=**NULL** NEXT PARTITION=PHVNTKB
OLRIMSID=**NULL** ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0
  OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

```

```

FREE SPACE:
  FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

```

```

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5 )
  K0200
PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
  D2F0F2F0F0

```

```

FLAGS:                                COUNTERS:
  BACKOUT NEEDED =OFF                 RECOVERY NEEDED COUNT =0
  READ ONLY      =OFF                 IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
  PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF          AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
                                       HELD AUTHORIZATION STATE=0
                                       EEQE COUNT =0
  TRACKING SUSPENDED =NO             RECEIVE REQUIRED COUNT =0
  OFR REQUIRED       =NO              OLR ACTIVE HARD COUNT =0
  PARTITION INIT NEEDED =YES         OLR INACTIVE HARD COUNT =0
  OLREORG CURSOR ACTIVE =NO
  PARTITION DISABLED =NO
  ONLINE REORG CAPABLE =YES
  REORG INTENT      =NO
  QUIESCE IN PROGRESS =NO
  QUIESCE HELD     =NO
  ALTER IN PROGRESS =NO
  PARTITION ALTERED =NO

```

```

17.131 10:01:48.307694 LISTING OF RECON PAGE 0005

```

```

DB
DBD=PHVNTKB MASTER DB=DHVNTK03 CHANGE#=3 TYPE=PART
USID=0000000001 AUTHORIZED USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE USID=0000000000 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DHVNTK03 PARTITION ID=00002
PREVIOUS PARTITION=PHVNTKA NEXT PARTITION=PHVNTKC
OLRIMSID=**NULL** ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0
  OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

```

```

FREE SPACE:
  FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

```

```

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5 )
  K0400
PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
  D2F0F4F0F0

```

```

FLAGS:                                COUNTERS:
  BACKOUT NEEDED =OFF                 RECOVERY NEEDED COUNT =0
  READ ONLY      =OFF                 IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
  PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF          AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
                                       HELD AUTHORIZATION STATE=0

```

```

TRACKING SUSPENDED    =NO      EEQE COUNT           =0
OFR REQUIRED           =NO      RECEIVE REQUIRED COUNT =0
PARTITION INIT NEEDED =YES     OLR ACTIVE HARD COUNT =0
OLREORG CURSOR ACTIVE =NO      OLR INACTIVE HARD COUNT =0
PARTITION DISABLED   =NO
ONLINE REORG CAPABLE  =YES
REORG INTENT          =NO
QUIESCE IN PROGRESS  =NO
QUIESCE HELD         =NO
ALTER IN PROGRESS    =NO
PARTITION ALTERED    =NO

```

17.131 10:01:48.307694 LISTING OF RECON PAGE 0006

```

DB
DBD=PHVNTKC  MASTER DB=DHVNTK03          CHANGE#=4    TYPE=PART
USID=0000000001 AUTHORIZED USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE USID=0000000000 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DHVNTK03          PARTITION ID=00003
PREVIOUS PARTITION=PHVNTKB  NEXT PARTITION=PHVNTKD
OLRIMSID=**NULL**  ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0
  OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

```

```

FREE SPACE:
  FREE BLOCK FREQ FACTOR=0  FREE SPACE PERCENTAGE=0

```

```

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR):      (LENGTH=5 )
  K0600
PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
  D2F0F6F0F0

```

```

FLAGS:                                COUNTERS:
BACKOUT NEEDED          =OFF          RECOVERY NEEDED COUNT =0
READ ONLY              =OFF          IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF          AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
                                HELD AUTHORIZATION STATE=0
                                EEQE COUNT           =0
                                RECEIVE REQUIRED COUNT =0
                                OLR ACTIVE HARD COUNT =0
                                OLR INACTIVE HARD COUNT =0

TRACKING SUSPENDED    =NO
OFR REQUIRED           =NO
PARTITION INIT NEEDED =YES
OLREORG CURSOR ACTIVE =NO
PARTITION DISABLED   =NO
ONLINE REORG CAPABLE  =YES
REORG INTENT          =NO
QUIESCE IN PROGRESS  =NO
QUIESCE HELD         =NO
ALTER IN PROGRESS    =NO
PARTITION ALTERED    =NO

```

17.131 10:01:48.307694 LISTING OF RECON PAGE 0007

```

DB
DBD=PHVNTKD  MASTER DB=DHVNTK03          CHANGE#=5    TYPE=PART
USID=0000000001 AUTHORIZED USID=0000000000 HARD USID=0000000000
RECEIVE USID=0000000000 RECEIVE NEEDED USID=0000000000
DSN PREFIX=IMSTESTS.DHVNTK03          PARTITION ID=00004
PREVIOUS PARTITION=PHVNTKC  NEXT PARTITION=**NULL**
OLRIMSID=**NULL**  ACTIVE DBDS=A-J
REORG#=00000
ONLINE REORG STATISTICS:
  OLR BYTES MOVED = 0
  OLR SEGMENTS MOVED = 0

```

OLR ROOT SEGMENTS MOVED = 0

FREE SPACE:

FREE BLOCK FREQ FACTOR=0 FREE SPACE PERCENTAGE=0

PARTITION HIGH KEY/STRING (CHAR): (LENGTH=5)
YYYYY

PARTITION HIGH KEY/STRING (HEX):
FFFFFFFF

FLAGS:

BACKOUT NEEDED =OFF
READ ONLY =OFF
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF

COUNTERS:

RECOVERY NEEDED COUNT =0
IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
AUTHORIZED SUBSYSTEMS =0
HELD AUTHORIZATION STATE=0
EEQE COUNT =0
RECEIVE REQUIRED COUNT =0
OLR ACTIVE HARD COUNT =0
OLR INACTIVE HARD COUNT =0

TRACKING SUSPENDED =NO
OFR REQUIRED =NO
PARTITION INIT NEEDED =YES
OLREORG CURSOR ACTIVE =NO
PARTITION DISABLED =NO
ONLINE REORG CAPABLE =YES
REORG INTENT =NO
QUIESCE IN PROGRESS =NO
QUIESCE HELD =NO
ALTER IN PROGRESS =NO
PARTITION ALTERED =NO

DSP0180I NUMBER OF RECORDS LISTED IS 5
DSP0203I COMMAND COMPLETED WITH CONDITION CODE 00
DSP0220I COMMAND COMPLETION TIME 17.131 10:01:48.615478
IMS VERSION 15 RELEASE 1 DATA BASE RECOVERY CONTROL PAGE 0008
DSP0211I COMMAND PROCESSING COMPLETE
DSP0211I HIGHEST CONDITION CODE = 00

DB (FP) および関連レコード

このサンプルは、DB (FP) レコードと関連のレコードを示しています。

17.132 10:46:50.860042 LISTING OF RECON PAGE 0024

DB

DBD=DEDBJ002 DMB#=2 TYPE=FP
SHARE LEVEL=3 RANDOMIZER=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:
RECOVERY NEEDED COUNT =0
IMAGE COPY NEEDED COUNT =0
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED AREAS =1
RECOVERABLE =YES EEQE COUNT =0
FULLSEG DEFAULT =NO ALTER COUNT =0

17.132 10:46:50.860042 LISTING OF RECON PAGE 0025

DBDS

DBD=DEDBJ002 AREA=DBJ2AR0 TYPE=FP
SHARE LEVEL=3 DSID=00001 DBORG=DEDB DSORG=VSAM
GSGNAME=**NULL** USID=0000000003
AUTHORIZED USID=0000000003 RECEIVE USID=0000000003 HARD USID=0000000003
RECEIVE NEEDED USID=0000000000
CAGRP=**NULL** GENMAX=2 IC AVAIL=0 IC USED=1 DSSN=00000002
NOREUSE RECOVPD=0 NOVSO NOPREOPEN NOPRELOAD NOFULLSG
CFSTR1=**NULL** CFSTR2=**NULL** NOLKASID NOMAS
DEFLTJCL=**NULL** ICJCL=ICJCL RECVJCL=ICRCVJCL RECOVJCL=RECOVJCL
DBRCVGRP=**NULL**
FLAGS: COUNTERS:
PROHIBIT AUTHORIZATION=OFF AUTHORIZED SUBSYSTEMS =3
HELD AUTHORIZATION STATE=3

IC NEEDED	=OFF	ADS AVAIL #	=1
RECOV NEEDED	=OFF	REGISTERED ADS #	=1
		EEQE COUNT	=0
RECEIVE NEEDED	=OFF	SHADOW ADS AVAIL #	=0
OFR REQUIRED	=NO	REGISTERED SHADOW ADS #	=1
TRACKING SUSPENDED	=NO		
HSSP CIC IN PROGRESS	=NO		
QUIESCE IN PROGRESS	=NO		
QUIESCE HELD	=NO		
ALTER IN PROGRESS	=NO		

ADS LIST:

-ADS DDN--ADS DSN-		CREATE
DBJ2AR0S IMSTESTS.DEDBJ002.DBJ2AR0.SHADOW	-STAT-	-RUNNING-
	AVAIL	NO

SHADOW ADS LIST:

-ADS DDN--ADS DSN-		CREATE
DBJ2AR0 IMSTESTS.DEDBJ002.DBJ2AR0	-STAT-	-RUNNING-
	UNAVAIL	NO

ASSOCIATED SUBSYSTEM INFORMATION:

-SSID-	-ACCESS INTENT-	ENCODED -STATE-	-SS ROLE-
IMS1	UPDATE	3	ACTIVE
IMS3	UPDATE	3	ACTIVE
IMS2	UPDATE	3	ACTIVE

ALLOC

ALLOC =17.132 10:46:44.535695 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000002 USID=0000000003 START = 17.132 10:40:46.604713

ALLOC

ALLOC =17.132 10:46:44.668111 * ALLOC LRID =0000000000000000
DSSN=0000000002 USID=0000000003 START = 17.132 10:42:40.019438

RECON リスト内のフィールド (レコード・タイプ別)

以下のトピックでは、RECON データ・セットのリストに表示されるフィールドについて、レコード・タイプ別に説明します。

サブセクション:

- 467 ページの『RECON レコード・フィールド』
- 472 ページの『ログ・レコード・フィールド』
- 472 ページの『LOGALL レコード・フィールド』
- 472 ページの『オンライン・ログ・レコード・フィールド』
- 472 ページの『SSYS レコード・フィールド』
- 472 ページの『BACKOUT レコード・フィールド』
- 472 ページの『CAGRP レコード・フィールド』
- 473 ページの『CA レコード・フィールド』
- 473 ページの『データ・グループ・レコード・フィールド』
- 473 ページの『DB (IMS) レコード・フィールド』
- 473 ページの『DB (HALDB) レコード・フィールド』
- 473 ページの『DB (PART) レコード・フィールド』

- 473 ページの『DB (高速機能) レコード・フィールド』
- 473 ページの『DBDS (高速機能以外) レコード・フィールド』
- 473 ページの『DBDS (高速機能) レコード・フィールド』
- 473 ページの『ALLOC レコード・フィールド』
- 473 ページの『IMAGE レコード・フィールド』
- 473 ページの『REORG レコード・フィールド』
- 474 ページの『RECOV レコード・フィールド』

RECON レコード・フィールド

RECON レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に示されています。

表 21. RECON レコード内のフィールド

レコード・タイプ	行番号	フィールド	内容
RECON	1		
	2	RECOVERY CONTROL DATA SET, IMS VxRx	RECON データ・セットのバージョンおよびリリースを示します。
	3	DMB# = <i>nnn</i>	新規データベース・レコードに最後に割り当てられた値を表します。値が 32,767 であれば、この値は変更されず、DMB 番号は再利用されています。フィールド LAST USED DMB# は、最後に割り当てられた DMB 番号を表します。
		LAST USED DMB#= <i>nnn</i>	<i>nnn</i> は、32,767 より小さい場合、最後に割り当てられた DMB の数を表します。DMB の数が 32,767 に達している場合、 <i>nnn</i> は最後に再利用された DMB を表します。ゼロより大きい場合にのみ印刷されます。
		INIT TOKEN= <i>token</i>	初期化の際にこの RECON に割り当てられたトークン
	4	FORCER NOFORCER	データベースを RECON データ・セットに登録する必要があるかどうかを示します。FORCER は、すべてのデータベースに登録する必要があることを示します。NOFORCER は、すべてのデータベースに登録する必要はないことを示します。
		LOG DSN CHECK= <i>xxxxxx</i>	ログ・データ・セットの名前検査のタイプであり、 <i>xxxxxx</i> は CHECK17、CHECK44、または NOCHECK です。
		STARTNEW= YES NO	RECON データ・セットの 1 つに入出力エラーがある場合、YES は新しいジョブを開始することを示します。NO は新しいジョブを開始しないことを示します。

表 21. RECON レコード内のフィールド (続き)

レコード・タイプ	行番号	フィールド	内容
	5	TAPE UNIT= <i>unittype</i>	テープ装置に存在する、ログ・データ・セット、 NOREUSE イメージ・コピー・データ・セット、および NOREUSE 変更累積データ・セット用のデフォルト装置タイプ。
		DASD UNIT= <i>unittype</i>	DASD 装置に存在する、ログ・データ・セット、 NOREUSE イメージ・コピー・データ・セット、および NOREUSE 変更累積データ・セット用のデフォルト装置タイプ。
		TRACEON TRACEOFF	TRACEON は、DBRC が外部 GTF トレース・エントリを作成することを示します。
		SSID= <i>xxxxxxx</i>	IMS サブシステムのデフォルト名。
	6	LISTDLOG= YES NO	RECON から削除されたログ・データ・セットの名前をリストするかどうかを示します。
		CA IC LOG DATA SETS CATALOGED= YES NO	CA、IC、およびログ・データ・セットを、カタログされているかのように扱うかどうかを示します。ユーティリティー DD ステートメントのボリューム通し番号検査をバイパスするには、YES を指定し、かつ、データ・セットはカタログしておきます。NO を指定するか、またはデータ・セットがカタログされていない場合は、ボリューム通し番号の検査が行われます。
	7	MINIMUM VERSION = <i>x.x</i>	これらの RECON データ・セットを使用してサインオンできる IMS の最低バージョンを示します。
		CROSS DBRC SERVICE LEVEL ID = <i>nnnnn</i>	示された値に対応するメンテナンスが、RECON データ・セットにアクセスするすべてのシステムに適用されたことを示します。
	8	REORG NUMBER VERIFICATION=YES NO	HALDB 区画再編成番号の妥当性検査が有効になっているかどうかを示します。
	9	LOG RETENTION PERIOD= <i>yy.ddd hh:mm:ss.t</i>	DBRC が RECON データ・セット内にログ・レコードを保持する最小時間を示します。
	10	COMMAND AUTH=SAF EXIT BOTH NONE	実行する DBRC コマンド許可のレベルを示します。
		HLQ= <i>hlq name</i>	コマンド許可を決めるために用いるリソース名の高位修飾子。コマンド許可が使用可能にされない場合は、**NULL** が印刷されます。

表 21. RECON レコード内のフィールド (続き)

レコード・タイプ	行番号	フィールド	内容
	11	RCNQUAL= <i>data_set_name</i>	データ・セットがコピーであるかどうか、およびコマンド許可を実行すべきかどうかを判別するために、RECON に対する今後のアクセス試行で使用される RECON COPY1 データ・セット名のサブストリングです。
	12	TRACE OPTIONS= <i>options</i>	この行は、問題分析のために、IBM 担当員が資料の収集を指示した場合にのみ印刷されます。これは、IBM 担当員が問題分析のために、DBRC トレース・レコードが DBRC トレース・テーブルに書き込まれるように指示したことを示しています。このオプションは、IBM 担当員が用意します。
	13	CATALOG= <i>catalog_name</i>	データベース定義の取得元である IMS カタログの名前。IMS カタログが使用されておらず、データベース定義が DBDLIB データ・セットから取得された場合は、**NULL** が印刷されます。
	14	ACCESS=SERIAL PARALLEL	RECON データ・セットのアクセス・モード。RESERVE 直列化を使用する SERIAL アクセスか、レコード・レベルのロックングを使用する PARALLEL アクセスのいずれかです。
		LIST=STATIC CONCURR	並列 RECON アクセスを使用する LIST コマンドのデフォルト・オプション。 LIST.xxxxxxxx コマンドの STATIC CONCURR キーワードによってオーバーライドすることができます。シリアル RECON アクセス (ACCESS=SERIAL) に対しては意味を持ちません。
	15	SIZALERT= xxxxxxxx xxxxxxxx xx	レコードが不自然に大きくなっていることを警告するメッセージのトリガーとなる、(オプションの) しきい値。フィールド値には、 <i>dsnum</i> 、 <i>volnum</i> 、および <i>percent</i> があります。 <i>dsnum</i> と <i>volnum</i> の値は、PRILOG ファミリーのレコードのみに適用されます。PRILOG レコードのサイズは最大 16 MB まで許容されるため、 <i>dsnum</i> と <i>volnum</i> を使用する必要は事実上なくなりました。

表 21. RECON レコード内のフィールド (続き)

レコード・タイプ	行番号	フィールド	内容
	16	LOGALERT= xxxxxxxx xxxxxxxx	DSP0287W メッセージ (PRILOG レコードが RECORDSIZE を超えたために、オンライン IMS サブシステムが異常終了する前に、それをシャットダウンするだけの時間がある場合に警告されます) をトリガーする (オプションの) しきい値。フィールド値には、dsnum および volnum があります。 PRILOG レコードのサイズは最大 16 MB まで許容されるため、LOGALERT を使用する必要は事実上なくなりました。
以下の行は、RECON への複数更新中に障害が起こった場合のみ印刷されます。			
	17	UPDATE TYPE= mmmn	進行中であった複数更新のタイプ。
		DBID= xxxxxxxx xxxxxxxx	複数更新に関係した DBDS のデータ・セット名とデータ・セットの DD 名。ブランクの場合があります。
		CAGRP= xxxxxxxx	複数更新に関係した CA グループの名前。グループが関係していない場合は、ブランクです。
		NEW DDN= xxxxxxxx	複数更新に関係した DBDS に関連付けられた新しい DD 名。新しい名前がない、または DBDS が関係していない場合は、ブランクです。
	18	OLD RECORD KEY	このフィールドは、複数更新にキー変更が含まれる場合にのみ印刷されます。
	19	KEY TYPE= *xxxxx	レコード・タイプの説明。アスタリスク (*) は、レコードが今後も使用可能な (つまり、新規であるか再利用のためにスケジューラされる) 場合のみ印刷されます。認識できないレコード・キー・タイプが見つかった場合は、16 進文字で示されるキーと一緒に、BADTYP.KEY が印刷されます。
		DBD= xxxxxxxx, DDN= xxxxxxxx	DBDS のデータベース名とデータ・セット DD 名。レコードが PRILOG、SECLOG、IPRI、または ISEC の場合、これらのフィールドは **NULL** と印刷されます。レコードが CAGRP または DB レコードの場合、DBD フィールドは **NULL** となり、DDN フィールドには CA グループまたはデータベースの名前が含まれます。
		TIME= time_stamp	レコードのキーのタイム・スタンプ。
	20-21	NEW RECORD KEY	このフィールドは、新しいレコード・キーが追加される場合のみ印刷されます。レコードのこの部分に印刷される追加のフィールドは、OLD RECORD KEY に対して印刷されるフィールドと同様です。

表 21. RECON レコード内のフィールド (続き)

レコード・タイプ	行番号	フィールド	内容
	22-23	BASE RECORD KEY	このフィールドは、新しいレコード・キーが変更される場合のみ印刷されます。レコードのこの部分に印刷される追加のフィールドは、OLD RECORD KEY に対して印刷されるフィールドと同様です。
	24-25	SSID= <i>ssidname</i> IRLMID= <i>irlmidname</i> SHARE LVL #= <i>n</i> #DB= <i>n</i> B/O#= <i>n</i>	複数更新についての情報。
	26	FLAGS:	以下の行のための見出し。
	27	RECOV= ON OFF NORECOV= ON OFF ICON= ON OFF ICOFF= ON OFF	複数更新についての情報。
	28	NORMAL= ON OFF ABNORMAL= ON OFF STARTRCV= ON OFF ENDRECOV= ON OFF	複数更新についての情報。
	29	READON= ON OFF READOFF= ON OFF AUTH= ON OFF NOAUTH= ON OFF	複数更新についての情報。
	30	B/O DONE= ON OFF PASS 1= ON OFF BACKOUT= ON OFF SHARELVL= ON OFF	複数更新についての情報。
	31	TIME STAMP INFORMATION:	RECON タイム・スタンプ情報を含むセクションの見出し。
	32	TIMEZIN= <i>offset</i>	ユーザー指定の、入力タイム・スタンプ・オフセットのデフォルト。オフセットを指定しないと、このフィールドには %SYS が表示されます。これは z/OS クロックのオフセットが使用されることを意味します。
		-LABEL- -OFFSET-	これらのカラム見出しは、時間帯ラベル表が定義されている場合に印刷されます。
	33- <i>nnn</i>	<i>label offset</i>	定義された時間帯オフセット・ラベルが、対応するオフセット値と一緒にリストされます。
	34	OUTPUT FORMAT: DEFAULT= <i>offset display form yearsize</i>	タイム・スタンプ出力フォーマットの設定。 デフォルトのタイム・スタンプ出力フォーマット設定。
	35	CURRENT= <i>offset display form yearsize</i>	現行タイム・スタンプ出力フォーマットの設定。
	36	IMSPLEX= <i>imsplex_name</i> , GROUP ID= <i>group_ID</i>	RECON データ・セットに関連付けられた IMSplex 名と DBRC グループ ID。

表 21. RECON レコード内のフィールド (続き)

レコード・タイプ	行番号	フィールド	内容
	37	-DDNAME- -STATUS- -DATA SET NAME-	以下に続く 1 行から 3 行のためのカラム見出し。
	38	RECON1 RECON2 RECON3 COPY1 <i>dsname</i>	コピー 1 RECON の DD 名、状況、およびデータ・セット名。
	39-40	RECON1 RECON2 RECON3 COPY2 DISCARDED SPARE UNAVAILABLE <i>dsname</i> またはブランク	これらの行は、RECON バックアップ (コピー 2)、スペアの RECON、および使用できない (DISCARDED) すべての RECON データ・セットの、DD 名、状況、およびデータ・セット名を示します。アクセスできなかった RECON データ・セットは、UNAVAILABLE (DSNAME と状況が不明) として表示されます。
	41	NUMBER OF REGISTERED DATABASES: <i>x</i>	DBRC に登録されたデータベースの数。

ログ・レコード・フィールド

ログ・レコードのフィールド (タイプを含む) と、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

LOGALL レコード・フィールド

ログ割り振りレコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

オンライン・ログ・レコード・フィールド

オンライン・ログ・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

SSYS レコード・フィールド

サブシステム・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に示されています。

BACKOUT レコード・フィールド

バックアウト・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

CAGRP レコード・フィールド

変更累積グループ・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

CA レコード・フィールド

変更累積レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

データ・グループ・レコード・フィールド

データベース・データ・グループ・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

DB (IMS) レコード・フィールド

IMS データベース・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、この表に説明されています。

DB (HALDB) レコード・フィールド

HALDB マスター・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

DB (PART) レコード・フィールド

HALDB パーティション・データベース・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、この表に説明されています。

DB (高速機能) レコード・フィールド

高速機能のデータベース・レコードのフィールドとそれに対応する行番号が、表に示されています。

DBDS (高速機能以外) レコード・フィールド

非高速機能のデータベース・データ・セット・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

DBDS (高速機能) レコード・フィールド

高速機能のデータベース・データ・セット・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

ALLOC レコード・フィールド

割り振りレコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

IMAGE レコード・フィールド

イメージ・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

REORG レコード・フィールド

再編成レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に示されています。

RECOV レコード・フィールド

リカバリー・レコードのフィールドと、そのフィールドに対応する行番号が、表に説明されています。

第 5 部 高速データベース・リカバリー・コマンド

高速データベース・リカバリー (FDBR) コマンドは、IMS 高速データベース・リカバリー領域を処理するために使用します。

- 477 ページの『第 19 章 MODIFY fdbproc コマンド』
- 481 ページの『第 20 章 START fdbproc コマンド』

第 19 章 MODIFY *fdbproc* コマンド

MODIFY (F) *fdbproc* コマンドは、IMS 高速データベース・リカバリー領域について、その状況の表示、領域の停止、および障害からのリカバリーを行うために使用します。

F *fdbproc*,DUMP

F *fdbproc*,DUMP コマンドは、IMS 高速 DB リカバリー機能を停止して、その領域のダンプを要求するために使用します。領域は、戻りコード X'0020' で終了します。

構文

```
▶▶—F—fdbproc,DUMP—▶▶  
    └─┬─┘  
      MODIFY
```

F *fdbproc*,RECOVER

F *fdbproc*,RECOVER コマンドは、トラッキングされた IMS データベースの IMS 高速 DB リカバリーを開始するために使用します。このコマンドは、例えば、z/OS システム間カップリング・ファシリティ(XCF) 時またはログ監視時のタイムアウト後に使用します。

構文

```
▶▶—F—fdbproc,RECOVER—▶▶  
    └─┬─┘  
      MODIFY
```

使用上の注意

IMS 高速 DB リカバリー領域が現在開始中の場合、またはデータベースのリカバリーを行っている最中の場合は、このコマンドは受け入れられません。

F *fdbproc*,STATUS

F *fdbproc*,STATUS コマンドは、IMS 高速 DB リカバリー領域の状況を表示するために使用します。

構文

```
▶▶—F—fdbproc,STATUS—▶▶  
    └─┬─┘  
      MODIFY
```

出力

このコマンドによって表示される出力には、以下の情報が含まれます。

PHASE

このフィールドは、高速 DB リカバリー領域のフェーズを示します。フェーズとして可能な値は次のとおりです。

- INIT
- TRACKING
- RECOVERY

LOG-TIME

高速 DB リカバリー領域で現在処理中のログ・レコードの時間です。ログの読み取り時に高速 DB リカバリー領域が IMS より遅れる時間の長さは、タイム・スタンプで示される現在時刻と、ログ時刻との差です。このフィールドは、FDBR の初期設定中は N/A を表示します。

ACT-ID

高速 DB リカバリーがトラッキング中の IMS サブシステムの IMSID。このフィールドは、FDBR の初期設定中は N/A を表示します。

GROUPNAME

XCF のモニターに使用される z/OS システム間カップリング・ファシリテーター (XCF) グループ名。このフィールドは、FDBR の初期設定中は N/A を表示します。

TIMEOUT

XCF タイムアウト値。このフィールドは、FDBR の初期設定中は N/A を表示します。

AREA01

DEDB エリアの共用レベル。 AREA01 として可能な値は次のとおりです。

- RECOV
- NORECOV

IMS.PROCLIB の DFSFDRxx メンバーに AREA01 の共用レベルを指定します。

SVSOOPEN

FDBR システム内の再実行処理を必要とするすべての領域が逐次処理されることを示します。 /ERE および XRF TKO 処理の場合は、このオプションは無視されます。このオプションは、FDBR が再実行処理のために割り振る構造の数を削減するために使用されます。

FPBUFF

高速機能 DEDB 処理用の制御ブロックを、ECSA でなく FDBR 専用領域内で割り振ることを示します。

LOCAL パラメーターは、DFSFDRxx PROCLIB メンバーで指定します。このオプションを選択した場合は、DEDB 処理用の制御ブロックは FDBR 制御領域専用ストレージで割り振られます。

このオプションを指定しない場合、DEDB 処理用の制御ブロックは ECSA ストレージで割り振られます。これはデフォルトです。

IRLMFAIL

IRLM が失敗した場合に IMS が行うアクションを示します。

ABEND

IMS は異常終了コード U3305 で異常終了します。

NOACT

IMS はアクションを実行せず、通常の処理を続行します。

このオプションは、IMS PROCLIB データ・セットの DFSFDRxx メンバーで指定できます。IRLMFAIL=NOACT がデフォルトです。

例

```
F FDR1,STATUS
DFS000I PHASE: TRACKING LOG-TIME: 17:48:41 FDR1
DFS000I ACT-ID: SYSS3 GROUPNAME: FDRSYS3 FDR1
DFS000I TIMEOUT: 060 SEC AREA01: NORECOV FDR1
DFS000I SVS0OPEN: SERIAL FPBUFF: LOCAL FDR1
```

F fdbproc,STOP

F *fdbproc,STOP* コマンドは、IMS 高速 DB リカバリー領域を停止するために使用します。領域は、戻りコード X'0020' で終了します。

構文

```
▶▶—F—fdbproc,STOP—▶▶
    |
    └─MODIFY─┘
```

F fdbproc,TERM

F *fdbproc,TERM* コマンドは、IMS 高速 DB リカバリー・トラッキング・アクティビティを停止するために使用します。

構文

```
▶▶—F—fdbproc,TERM—▶▶
    |
    └─MODIFY─┘
```

使用上の注意

IMS 高速 DB リカバリー領域が現在開始中の場合、またはデータベースのリカバリーを行っている最中の場合は、このコマンドは受け入れられません。

第 20 章 START fdbproc コマンド

通常は、トラッキング対象のデータベースが始動された後で実行依頼されるジョブを使用して IMS 高速 DB リカバリー領域を開始しますが、z/OS START コマンドを使用してトラッキングを開始することができます。

fdbproc パラメーターは、開始される領域のプロシージャー名を識別します。

構文

```
▶▶—S——— fdbproc————▶▶  
   |  
   └─START─┘
```

第 6 部 IMS Connect コマンド

以下のトピックでは、IMS Connect タイプ 2 コマンド、IMS Connect WTOR コマンド、および IMS Connect z/OS (MVS) コマンドについて説明します。

- 485 ページの『第 21 章 同等の IMS Connect WTOR コマンド、z/OS コマンド、およびタイプ 2 コマンド』
- 493 ページの『第 22 章 IMS Connect タイプ 2 コマンド』
- 495 ページの『第 23 章 IMS Connect WTOR コマンド』
- 593 ページの『第 24 章 IMS Connect z/OS コマンド』

第 21 章 同等の IMS Connect WTOR コマンド、z/OS コマンド、およびタイプ 2 コマンド

特定の IMS Connect WTOR コマンド、IMS Connect z/OS コマンド、および IMS Connect タイプ 2 コマンドは、類似のタスクを実行します。

以下の表は、類似のタスクを実行する IMS Connect WTOR コマンド、z/OS コマンド、およびタイプ 2 コマンドのさまざまなインスタンスを示しています。

表 22. QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIA ALL	QUERY ALIAS NAME(*)
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIA <i>alias_name</i>	QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>)
QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>)	VIEWIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>)

表 23. QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWHWS	QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) SHOW(ALL)

表 24. QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWDS ALL	QUERY DATASTORE NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWDS <i>datastore_name</i>	QUERY DATASTORE NAME(<i>datastore_name</i>)

表 25. QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIP ALL	QUERY IMSPLEX NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>IMSplex_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIP <i>IMSplex_name</i>	QUERY IMSPLEX NAME(<i>imsplexName</i>) SHOW(ALL)

表 26. QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWMSC ALL	QUERY MSC NAME(*)
QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>msc_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWMSC <i>msc_id</i>	QUERY MSC NAME(<i>msc_id</i>)

表 27. QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT ALL	QUERY PORT NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>portid</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT <i>port_id</i>	QUERY PORT NAME(<i>port_id</i>) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(LOCAL) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT LOCAL	QUERY PORT NAME(LOCAL) SHOW(ALL)

表 28. QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWRMT ALL	QUERY RMTIMSCON NAME(*)
QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWRMT <i>rmtimscon_name</i>	QUERY RMTIMSCON NAME(<i>rmtimscon_name</i>)

表 29. QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWUOR ALL	QUERY UOR NAME(*) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWUOR <i>uor_id</i>	QUERY UOR NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL)
QUERY IMSCON TYPE(UOR) STATE(<i>state</i>)	ありません。	ありません。

表 30. UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	STARTIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	UPDATE ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>) START(ROUTE)
UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	STOPIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	UPDATE ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>) STOP(ROUTE)

表 31. UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(<i>client_name</i>) PORT(<i>portid</i>) STOP(COMM)	STOPCLNT <i>portid</i> <i>clientid</i>	DELETE PORT NAME(<i>portName</i>) CLIENT(<i>clientName</i>)

表 32. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM)	CLOSEHWS	SHUTDOWN MEMBER
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(FORCE)	CLOSEHWS FORCE	SHUTDOWN MEMBER OPTION(FORCE)
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(QUIESCE)	CLOSEHWS QUIESCE	SHUTDOWN MEMBER OPTION(QUIESCE)

表 32. UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド (続き)

UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(ON))	SETOAUTO YES	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(OFF))	SETOAUTO NO	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(ON))	SETPWMC ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(OFF))	SETPWMC OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(RCF))	SETPWMC RCF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(RCF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(ON))	SETRACF ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(OFF))	SETRACF OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON))	SETRRS ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(OFF))	SETRRS OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(ON))	SETUIDC ON	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(ON))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(OFF))	SETUIDC OFF	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(OFF))
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDE)	RECORDER OPEN	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) START(TRACE)
UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) STOP(RECORDE)	RECORDER CLOSE	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) STOP(TRACE)

表 33. UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)	REFRESH CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>)	UPDATE CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)

表 34. UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド :

UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) START(COMM)	OPENDS <i>datastore_id</i> STARTDS <i>datastore_id</i>	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) STOP(COMM)	STOPDS <i>datastore_id</i>	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) STOP(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) SET()	ありません。	ありません。

表 35. UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド :

UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)	OPENIP <i>imsplex_id</i> STARTIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)	STOPIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)

表 36. UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>logical_link_name</i>) STOP(COMM)	STOPLINK <i>logical_link_name</i>	DELETE LINK NAME(<i>linkName</i>)
UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>logical_link_name</i>) MSC(<i>lclplk_id</i>) STOP(COMM)	STOPLINK <i>logical_link_name</i> <i>lclplk_id</i>	DELETE LINK NAME(<i>linkname</i>) LCLPLKID(<i>lclPlkid</i>)

表 37. UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)	STARTMSC <i>lclPlkid</i>	UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)	STOPMSC <i>lclPlkid</i>	UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)

表 38. UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	STARTOD <i>odbm_name</i>	UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	STOPOD <i>odbm_name</i>	UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) STOP(COMM)

表 39. UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド :

UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)	OPENPORT <i>port_id</i> STARTPT <i>port_id</i>	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)	STOPPORT <i>port_id</i>	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)

表 40. UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(<i>userid</i>) OPTION(REFRESH)	REFRESH RACFUID NAME(<i>userid</i>)	UPDATE RACFUID NAME(<i>userid</i>) OPTION(REFRESH)

表 41. UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド

UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) START(COMM)	STARTRMT <i>rmtimsconName</i>	UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) START(COMM)
UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	STOPRMT <i>rmtimsconName</i>	UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) STOP(COMM)

表 42. UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンドと同等の WTOR コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンド





UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド	同等の IMS Connect WTOR コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(<i>sendclient_name</i>) RMTIMSCON(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	STOPSCLN <i>rmtimscon</i> <i>sendclient</i>	DELETE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconname</i>) SENDCLNT(<i>clientid</i>)
UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(<i>sendclient_name</i>) RMTICICS(<i>rmtcics_name</i>) STOP(COMM)	STOPSCLN <i>rmtcics</i> <i>sendclient</i>	同等の z/OS コマンドは ありません

第 22 章 IMS Connect タイプ 2 コマンド

IMS Connect タイプ 2 コマンドは、IMSpIex 環境内の IMS Connect リソースの管理を簡単にするために提供されています。すべてのタイプ 2 コマンドと同様に、IMS Connect タイプ 2 コマンドは、Operations Manager (OM) API (TSO SPOC、REXX SPOC API、バッチ SPOC など) を介してのみサポートされます。

IMS Connect タイプ 2 コマンドが、他のすべての IMS タイプ 2 コマンドと共に記載されています。

関連資料:

-  [CREATE IMSCON コマンド \(コマンド\)](#)
-  [DELETE IMSCON コマンド \(コマンド\)](#)
-  [QUERY IMSCON コマンド \(コマンド\)](#)
-  [UPDATE IMSCON コマンド \(コマンド\)](#)

第 23 章 IMS Connect WTOR コマンド

z/OS システム・コンソールのコマンド行に入力する IMS Connect WTOR コマンドはすべて、未解決の IMS Connect 応答メッセージの応答番号をコマンドの直前に付加する必要があります (例えば、*nnHWSCMD*。ここで *nn* は応答番号です)。

関連資料:

➡ 同等の IMS Connect WTOR、z/OS、およびタイプ 2 コマンド (コマンド)

CLOSEHWS コマンド

CLOSEHWS コマンドは、IMS Connect を終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 496 ページの『使用上の注意』
- 496 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 497 ページの『例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、CLOSEHWS コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

FORCE

終了により、すべてのクライアント接続およびデータ・ストア接続を即時に終了させることを指定します。これによって、接続していたクライアントについて実行されている IMS アプリケーションは、すべて強制的に異常終了させられます。

QUIESCE

この終了により、制御された方法ですべてのクライアントおよびデータ・ストア接続を終了させることを指定します。CLOSEHWS でパラメーターを何も指定しなかった場合は、デフォルトによりこのパラメーターが使用されます。

IMS Connect が終了する前に、現在進行中かまたは処理のためにキューに入れている作業はすべて完了します。このコマンドが入力されて受け入れられた後は、新規の作業は受け入れられません。

IMS Connect は、以下の順序でシャットダウンされます。

1. クライアント/ブラウザーに関連したすべてのアクティブな作業単位が完了する。
2. IMS Connect と IMS の間の通信が終了する。
3. IMS Connect が終了する。

使用上の注意

CLOSEHWS コマンドは、IMS Connect を終了するために使用します。

IMS 間 TCP/IP 接続の場合、CLOSEHWS は、CONN 状態のすべての送信ソケット接続を閉じます。RECV 状態の送信ソケット接続については、IMS Connect は ACK または NAK を無期限に待機します。RECV 状態のすべての接続について ACK または NAK を受信した後でのみ、IMS Connect は終了します。

FORCE パラメーターを使用すると、クライアントおよびデータ・ストアのアクティビティは即時に終了します。QUIESCE パラメーターを使用した場合は、クライアントおよび IMS ホスト・アプリケーションは、完了するまで実行を続けることができます。CLOSEHWS FORCE コマンドは、CLOSEHWS QUIESCE コマンドを出した後で、出すことができます。

IMS 間 TCP/IP 接続の場合、CLOSEHWS FORCE は、すべての送信ソケット接続を閉じます。RECV 状態の送信ソケット接続については、IMS Connect は NAK を OTMA に送信します。これは OTMA に対して、メッセージを OTMA タイムアウト・キュー DFS\$\$TOQ に転送するように指示します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、CLOSEHWS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

CLOSEHWS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
CLOSEHWS	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM)	SHUTDOWN MEMBER
CLOSEHWS FORCE	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(FORCE)	SHUTDOWN MEMBER OPTION(FORCE)
CLOSEHWS QUIESCE	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(QUIESCE)	SHUTDOWN MEMBER OPTION(QUIESCE)

z/OS MVS システム・コマンドの STOP または CANCEL を使用して、IMS Connect を終了することもできます。

z/OS MVS システム・コマンドを使用する必要がある場合は、CANCEL コマンドの代わりに STOP コマンドを使用してください。CANCEL コマンドは IMS Connect 機能 (RRS など) を不明状態のままにすることがあるためです。STOP コマンドの結果は、IMS Connect CLOSEHWS QUIESCE コマンドと同じです。

以下の例は、STOP MVS システム・コマンドを示しています。

```
STOP ims_connect_jobname,dump
```

または

```
STOP ims_connect_jobname
```

以下の例は、CANCEL MVS システム・コマンドを示しています。

```
CANCEL ims_connect_jobname,dump
```

または

```
CANCEL ims_connect_jobname
```

例

IMS Connect を閉じるには、以下のコマンドのどちらも使用できます。

- `nnCLOSEHWS QUIESCE`
- `nnCLOSEHWS FORCE`

`nnCLOSEHWS QUIESCE` を発行した後、処理中の作業がすぐに完了しないために IMS Connect が終了しない場合は、その後で `nnCLOSEHWS FORCE` コマンドを発行することができます。

ここで `nn` は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(CONFIG\) コマンド \(コマンド\)](#)

[653 ページの『IMS Connect SHUTDOWN MEMBER コマンド』](#)

OPENDS コマンド

OPENDS コマンドは、IMS Connect とデータ・ストアの間の通信を開始するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 498 ページの『使用上の注意』
- 498 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 498 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnOPENDS datastore_id ◀◀
```

キーワード

以下のキーワードは、OPENDS コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

datastore_id

データ・ストアの名前を指定します。この名前は、構成メンバー HWSCFGxx を使用して IMS Connect に対して定義する必要があり、DATASTORE 構成ステートメント (1 つ以上) 内で定義されている ID の 1 つに一致していなければなりません。

使用上の注意

このコマンドは、IMS Connect とデータ・ストアとの間の通信が失敗した後で、データ・ストアとの通信を再確立するために使用します。例えば、IMS Connect の中でデータ・ストアに関するすべてのアクティビティーが終了したとき、または、STOPDS コマンドによりデータ・ストアとの通信が終了した後に、このコマンドを使用して通信を再開します。

特定のデータ・ストアについてのアクティビティーがはっきり分からない場合は、VIEWDS コマンドを使用してデータ・ストアに関する情報を表示してください。

OPENDS コマンドは、既にアクティブになっているデータ・ストア、または構成メンバー HWSCFGxx 内で IMS Connect に対して定義されていないデータ・ストアには影響を与えません。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、OPENDS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

OPENDS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
OPENDS <i>datastore_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) START(COMM)	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) START(COMM)

例

データ・ストア IMSA との通信をオープンするには、以下のように入力します。

```
nnOPENDS IMSA
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) コマンド (コマンド)

657 ページの『IMS Connect UPDATE DATASTORE コマンド』

512 ページの『STARTDS コマンド』

OPENIP コマンド

OPENIP コマンドは、IMS Connect と、SCI に接続されている OM を含む IMSplex の間の通信を開始するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 500 ページの『例』

構文

▶▶ *nn*OPENIP—*imsplex_id* ◀◀

キーワード

以下のキーワードは、OPENIP コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

imsplex_id

IMSplex の名前を指定します。この名前は、構成メンバー HWSCFGxx を使用して IMS Connect に対して定義されている必要があり、IMSplex 構成ステートメント内で定義されている TMEMBER に一致していなければなりません。

使用上の注意

このコマンドは、IMS Connect と、OM との通信のために使用されている IMSplex の間の通信が失敗した場合に、その IMSplex との通信を再確立するために使用します。例えば、IMS Connect の中で IMSplex に関するすべてのアクティビティが終了したときや、STOPIP コマンドにより OM が入っている IMSplex IMS との通信が終了した後、このコマンドを使用して通信を再開します。

IMSplex についてのアクティビティがはっきり分からない場合は、VIEWWIP コマンドを使用して、IMSplex に関する情報を表示してください。

IMSplex が既にアクティブになっている場合、または IMSplex が構成メンバー HWSCFGxx 内で IMS Connect に対して定義されていない場合は、OPENIP コマンドは IMSplex に影響を与えません。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、OPENIP コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。


OPENIP コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
OPENIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)

例

TMEMBER 名が IMSPLEX1 である IMSplex との通信をオープンするには、以下のように入力します。

```
nnOPENIP IMSPLEX1
```

関連資料:

-  UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド (コマンド)
- 659 ページの『IMS Connect UPDATE IMSPLEX コマンド』
- 514 ページの『STARTIP コマンド』

OPENPORT コマンド

OPENPORT コマンドは、IMS Connect と TCP/IP の間の通信を再確立して、TCP/IP ポートでの listen を可能にするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 501 ページの『使用上の注意』
- 501 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 501 ページの『例』

構文

```
►► nnOPENPORT—portid—◄◄
```

キーワード

以下のキーワードは、OPENPORT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

portid

オープンするポートの番号を指定します。このポート番号は、HWSCFGxx 構成メンバー内で TCPIP 構成ステートメントの PORTID サブステートメントに定義されているポート番号のいずれかに一致していなければなりません。ローカル・オプション・ポートの場合は、**portid** の値として LOCAL を指定してください。番号にはワイルドカード (* および %) を使用できます。

使用上の注意

このコマンドは、TCP/IP 接続を再確立して TCP/IP ポートでの listen を可能にするために使用します。IMS Connect と TCP/IP ポートの間の通信が停止し、IMS Connect はまだ終了していない場合に、このコマンドを使用してください。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、OPENPORT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

OPENPORT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
OPENPORT <i>port_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)

例

IMS Connect とポート 9999 の間の TCP/IP 接続を再確立して、IMS Connect がそのポート上で listen できるようにするには、以下のように入力します。

```
nnOPENPORT 9999
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(PORT\) コマンド \(コマンド\)](#)

[669 ページの『IMS Connect UPDATE PORT コマンド』](#)

[519 ページの『STARTPT コマンド』](#)

RECORDER コマンド

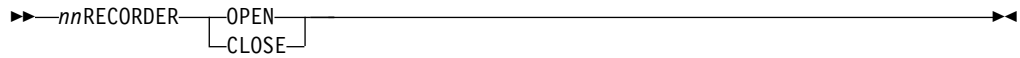
RECORDER コマンドは、回線トレース・データ・セットのオープンおよびクローズに使用します。

推奨事項: BPE を使用して、外部トレース・データ・セット内の IMS Connect レコーダー・トレース機能の出力を管理してください。

サブセクション:

- 502 ページの『構文』
- 502 ページの『キーワード』
- 502 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 502 ページの『例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、RECORDER コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

OPEN

回線トレース・データ・セットをオープンすることを指定します。

CLOSE

回線トレース・データ・セットをクローズすることを指定します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、RECORDER コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

RECORDER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
RECORDER OPEN	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDER)	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) START(TRACE)
RECORDER CLOSE	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) STOP(RECORDER)	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) STOP(TRACE)

例

```
nnRECORDER OPEN  
nnRECORDER CLOSE
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連概念:

 IMS Connect トレース (診断)

関連資料:

 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)

661 ページの『IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド』

REFRESH CONVERTER コマンド

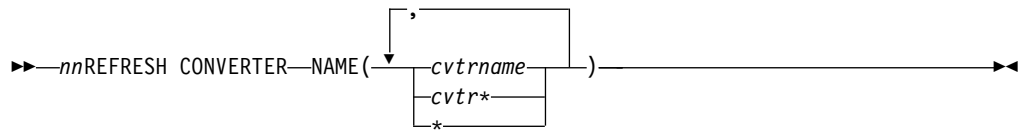
REFRESH CONVERTER コマンドは、IMS Connect を再始動せずに 1 つ以上の XML コンバーターをリフレッシュするために使用します。

このコマンドは、z/OS MODIFY コマンド UPDATE CONVERTER と同等です。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、REFRESH CONVERTER コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

NAME(*cvtrname*)

リフレッシュする 1 つ以上の XML コンバーターを指定します。パターン・マッチング用のワイルドカード・シンボル (*) がサポートされています。ワイルドカードのみを指定すると、すべての XML コンバーターがリフレッシュされます。NAME パラメーターで指定するすべてのコンバーター名の合計長さは、コンマ区切り文字を含めて 26 文字を超えてはなりません。

使用上の注意

REFRESH CONVERTER コマンドが発行されると、IMS Connect は指定された XML コンバーターをリフレッシュします。ワイルドカードが指定されている場合、IMS Connect はマスクに一致するすべての XML コンバーターを変換します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、REFRESH CONVERTER コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

REFRESH CONVERTER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
REFRESH CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)	UPDATE CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)

例

REFRESH CONVERTER コマンドの入力例:

```
nnREFRESH CONVERTER NAME(IMSPHBKD)
```

REFRESH CONVERTER コマンドの出力例:

```
HWSA0375I XML CONVERTER IMSPHBKD WAS SUCCESSFULLY REFRESHED,M=XMLA
```

関連タスク:

➡ IMS Connect クライアントの XML 変換サポートの構成 (システム定義)

関連資料:

➡ UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) コマンド (コマンド)

656 ページの『IMS Connect UPDATE CONVERTER コマンド』

REFRESH RACFUID コマンド

REFRESH RACFUID コマンドは、IMS Connect RACF ユーザー ID キャッシュに保管された 1 つ以上のキャッシュ済み ID をリフレッシュするために使用します。

このコマンドは、UPDATE RACFUID z/OS MODIFY コマンドと同等です。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 505 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 505 ページの『例』

構文

```
➡ nnREFRESH RACFUID—NAME( uidname )➡
```

キーワード

以下のキーワードは、REFRESH RACFUID コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

NAME(uidname)

リフレッシュする 1 つ以上の RACF ユーザー ID を指定します。すべてのユーザー ID の合計長さは、コンマ区切り文字を含めて 26 文字を超えてはなりません。

使用上の注意

REFRESH RACFUID コマンドが発行されると、IMS Connect は、指定された ID について RACF に対して RACROUTE REQUEST=VERIFY コマンドを発行して、指定された ID をリフレッシュします。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、REFRESH RACFUID コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

REFRESH RACFUID コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
REFRESH RACFUID NAME(userid)	UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(userid) OPTION(REFRESH)	UPDATE RACFUID NAME(userid) OPTION(REFRESH)

例

REFRESH RACFUID コマンドの入力例:

```
nnREFRESH RACFUID NAME(USRT001)
```

REFRESH RACFUID コマンドの出力例:

```
HWSP1504I RACF USERID USRT001 WAS SUCCESSFULLY REFRESHED,M=CUPR
```

関連概念:

➡ IMS Connect の RACF ユーザー ID キャッシュ (コミュニケーションおよびコネクション)

関連資料:

➡ UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド (コマンド)
670 ページの『IMS Connect UPDATE RACFUID コマンド』

SETOAUTO コマンド

SETOAUTO コマンドは、Open Database Manager (ODBM) との自動接続をオンおよびオフにするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 506 ページの『キーワード』
- 506 ページの『使用法』
- 506 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 506 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSETOAUTO [YES|NO] ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、SETOAUTO コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

YES | NO

ODBM との自動接続をオンまたはオフに指定します。

使用法

SETOAUTO コマンドを使用して、IMS Connect が開始されたとき、または ODBM のインスタンスが IMSplex でアクティブ化されたときのいずれかに、IMS Connect が ODBM に自動的に接続するかどうかを指定できます。

ODBM との自動接続が YES に設定されている場合、IMS Connect は、IMSplex に入る今後のすべての ODBM に接続します。このオプションは、IMS Connect 構成メンバーの ODBMAUTOCONN= パラメーターに指定することができます。

ODBM との自動接続が NO に設定されている場合、IMS Connect は、IMSplex に入る今後のすべての ODBM に登録されません。IMS Connect の ODBM に対する自動接続をオフにした後、STARTOD コマンドを使用して、手動で ODBM に接続し、ODBM のインスタンスとの通信をオープンすることができます。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、SETOAUTO コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

SETOAUTO コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
SETOAUTO YES	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(ON))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(ON))
SETOAUTO NO	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(OFF))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(OFF))

例

IMSplex に入る今後の ODBM に対して自動接続を設定するには、以下を入力します。

```
nnSETOAUTO YES
```

関連資料:

 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)

661 ページの『IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド』

SETPWMC コマンド

使用しているセキュリティー製品 (RACF など) が大/小文字混合パスワードをサポートしている場合、SETPWMC コマンドは、IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを使用可能にします。

デフォルトで IMS Connect は、大/小文字混合サポート・サポートの必要性を、RACF 構成の大/小文字混合パスワード・サポートに対する指定を基に決定します。

SETPWMC コマンドを使用して、IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを使用不可にすることもできます。IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートが使用不可の場合、IMS Connect は、パスワード内のすべての小文字を大文字に変換します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 508 ページの 『例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、SETPWMC コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

ON | OFF | RCF

IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートがオンまたはオフに設定されているかどうか、または、それが RACF の大/小文字混合パスワード指定に依存しているかどうかを識別します。大/小文字混合パスワードのサポートがオフの場合、IMS Connect はパスワード内の小文字をすべて大文字に変換します。大/小文字混合パスワードのサポートが RACF の大/小文字混合パスワード指定に依存している場合に、RACF の大/小文字混合パスワード指定が設定されていないときは、IMS Connect によって、パスワード内のすべての小文字が大文字に変換されます。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、SETPWMC コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

SETPWMC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
SETPWMC ON	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(ON))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(ON))
SETPWMC OFF	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(OFF))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(OFF))
SETPWMC RCF	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(RCF))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(RCF))


例

大/小文字混合パスワードのサポートを使用可能にするには、次のコマンドを入力します。

```
nnSETPWMC ON
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(CONFIG\) コマンド \(コマンド\)](#)
661 ページの『IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド』

SETRACF コマンド

SETRACF コマンドは、RACF フラグをオンまたはオフにするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 509 ページの『使用上の注意』
- 509 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 509 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSETRACF [ON | OFF] ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、SETRACF コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

ON | OFF

RACF フラグをオンまたはオフのどちらにするのかを指定します。

使用上の注意

このコマンドを使用して、RACF ユーザー識別および検査を使用可能または使用不可にします。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、SETRACF コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

SETRACF コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
SETRACF ON	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(ON))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(ON))
SETRACF OFF	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(OFF))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(OFF))


例

RACF をオンにするには、以下のように入力します。

```
nnSETRACF ON
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)
661 ページの『IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド』

SETRRS コマンド

SETRRS コマンドは、IMS Connect と z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) の間の通信を使用可能または使用不可にするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 510 ページの『キーワード』
- 510 ページの『使用上の注意』
- 510 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 510 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSETRRS [ON | OFF] ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、SETRRS コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

ON | OFF

RRS 通信を使用可能にするかどうかを指定します。

使用上の注意

IMS Connect と RRS の間の通信を使用可能または使用不可にします。RRS は、2 フェーズ・コミット・サポート用として必要です。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、SETRRS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

SETRRS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
SETRRS ON	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(ON))
SETRRS OFF	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(OFF))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(OFF))

例

IMS Connect と RRS の間の通信を使用不可にするには、以下のように入力します。

```
nnSETRRS OFF
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(CONFIG\) コマンド \(コマンド\)](#)

661 ページの『IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド』

SETUIDC コマンド

SETUIDC コマンドは、IMS Connect の RACF ユーザー ID キャッシュを有効または無効にするために使用します。

このコマンドは、UPDATE MEMBER z/OS MODIFY コマンドの SET UIDCACHE ステートメントと同等です。

サブセクション:

- 511 ページの『構文』
- 511 ページの『キーワード』

- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『例』

構文

```
▶▶ nnSETUIDC [ON | OFF] ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、SETUIDC コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

ON | OFF

IMS Connect の RACF ユーザー ID キャッシュを有効または無効にします。

使用上の注意

このコマンドは、IMS Connect による RACF サポートが使用可能である場合にのみ有効です。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、SETUIDC コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

SETUIDC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
SETUIDC ON	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(ON))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(ON))
SETUIDC OFF	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(OFF))	UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(OFF))

例

SETUIDC コマンドの入力例:

```
nnSETUIDC ON
```

SETUIDC コマンドの出力例:

```
HWSP1501I RACF USERID CACHING ENABLED,M=SDRC
```

関連概念:

➡ IMS Connect の RACF ユーザー ID キャッシュ (コミュニケーションおよびコネクション)

関連資料:

➡ UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)

STARTDS コマンド

STARTDS コマンドは、IMS Connect とデータ・ストアの間の通信を開始するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 513 ページの『例』

構文

▶▶ *nn*STARTDS—*datastore_id* ◀◀

キーワード

以下のキーワードは、STARTDS コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

datastore_id

データ・ストアの名前を指定します。この名前は、構成メンバー HWSCFGxx を使用して IMS Connect に対して定義する必要があり、DATASTORE 構成ステートメント (1 つ以上) 内で定義されている ID の 1 つに一致していなければなりません。

使用上の注意

このコマンドは、IMS Connect とデータ・ストアとの間の通信が失敗した後で、データ・ストアとの通信を再確立するために使用します。例えば、IMS Connect の中でデータ・ストアに関するすべてのアクティビティが終了したとき、または、STOPDS コマンドによりデータ・ストアとの通信が終了した後に、このコマンドを使用して通信を再開します。

特定のデータ・ストアについてのアクティビティがはっきり分からない場合は、VIEWDS コマンドを使用してデータ・ストアに関する情報を表示してください。

STARTDS コマンドは、既にアクティブになっているデータ・ストア、または構成メンバー HWSCFGxx 内で IMS Connect に対して定義されていないデータ・ストアには影響を与えません。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTDS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTDS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTDS <i>datastore_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) START(COMM)	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) START(COMM)

例

データ・ストア IMSA との通信をオープンするには、以下のように入力します。

```
nnSTARTDS IMSA
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(DATASTORE\) コマンド \(コマンド\)](#)

[497 ページの『OPENDS コマンド』](#)

[657 ページの『IMS Connect UPDATE DATASTORE コマンド』](#)

STARTIA コマンド

STARTIA コマンドは、1 つ以上の Open Database Manager (ODBM) インスタンスによって管理される IMS 別名へのメッセージ・ルーティングを有効に設定するために使用します。別名は、クライアントからのメッセージの送信先となる IMS データ・ストアを表します。

STARTIA コマンドは、指定した別名をアクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できるようにします。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 514 ページの『使用上の注意』
- 514 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 514 ページの『例』

構文

```
►► nnSTARTIA alias_name odbm_name ◀◀
```

キーワード

以下のキーワードは、STARTIA コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

alias_name

IMS 別名の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。

odbm_name

ODBM の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。このパラメーターはオプションです。

使用上の注意

STARTOD コマンドは、IMS Connect と IMS Open Database Manager (ODBM) の間の通信を開始しますが、STARTIA コマンドは、指定した IMS 別名をアクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できるようにします。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTIA コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTIA コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTIA <i>alias_name</i>	UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS)	UPDATE ALIAS
<i>odbm_name</i>	NAME(<i>alias_name</i>)	NAME(<i>aliasName</i>)
	ODBM(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	ODBM(<i>odbmName</i>)
		START(ROUTE)

例

ODBM10D という名前の ODBM に対して、IMS1 という名前の別名をアクティブ化するには、以下のように入力します。

```
nnSTARTIA IMS1 ODBM10D
```

関連資料:

524 ページの『STOPIA コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド (コマンド)

654 ページの『IMS Connect UPDATE ALIAS コマンド』

STARTIP コマンド

STARTIP コマンドは、IMS Connect と、SCI に接続されている OM を含む IMSplex の間の通信を開始するために使用します。

サブセクション:

- 515 ページの『構文』
- 515 ページの『キーワード』
- 515 ページの『使用上の注意』
- 515 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 515 ページの『例』

構文

▶▶ *nn*STARTIP *—imsplex_id* ◀◀

キーワード

以下のキーワードは、STARTIP コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

imsplex_id

IMSplex の名前を指定します。この名前は、構成メンバー HWSCFGxx を使用して IMS Connect に対して定義されている必要があり、IMSplex 構成ステートメント内で定義されている TMEMBER に一致していなければなりません。

使用上の注意

このコマンドは、IMS Connect と、OM との通信のために使用されている IMSplex の間の通信が失敗した場合に、その IMSplex との通信を再確立するために使用します。例えば、IMS Connect の中で IMSplex に関するすべてのアクティビティが終了したときや、STOPIP コマンドにより OM が入っている IMSplex IMS との通信が終了した後、このコマンドを使用して通信を再開します。

IMS Connect インスタンスが ISC または MSC TCP/IP リンクをサポートしている場合、IMS Connect は IMSplex 内のサポートするリンクの状況を ACTIVE に変更します。

IMSplex についてのアクティビティがはっきり分からない場合は、VIEWWIP コマンドを使用して、IMSplex に関する情報を表示してください。

IMSplex が既にアクティブになっている場合、または IMSplex が構成メンバー HWSCFGxx 内で IMS Connect に対して定義されていない場合は、STARTIP コマンドは IMSplex に影響を与えません。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTIP コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTIP コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)

例

TMEMBER 名が IMSPLEX1 である IMSplex との通信をオープンするには、以下のように入力します。

```
nnSTARTIP IMSPLEX1
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

➡ UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) コマンド (コマンド)

499 ページの『OPENIP コマンド』

659 ページの『IMS Connect UPDATE IMSPLEX コマンド』

STARTMSC コマンド

STARTMSC コマンドは、IMS Connect のローカル・インスタンス内で、MSC 物理リンク上の通信が STOPMSC コマンドまたは UPDATE MSC STOP(COMM) コマンドによって停止された後に、物理リンク上の通信を再開するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 517 ページの『例』

構文

```
➡ nnSTARTMSC lclplk_id ➡
```

キーワード

以下のキーワードは、STARTMSC コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

lclplk_id

MSC 物理リンクの ID。これは、IMS Connect に対して物理リンクを定義する MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。

使用上の注意

STARTMSC コマンドが発行されると、IMS Connect は、指定された MSC 物理リンク上の通信を再開し、物理リンクの状況を ACTIVE に変更します。

IMS Connect に対して定義されている MSC 物理リンクに関する情報を表示するには、VIEWMSC コマンドまたは QUERY MSC コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTMSC コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTMSC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTMSC <i>lclplk_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)	UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)

例

STARTMSC コマンドの入力例:

```
nnSTARTMSC MSC12
```

STARTMSC コマンドの出力例:

```
HWSF3300I COMMUNICATIONS ON MSC PHYSICAL LINK MSC12 STARTED; M=ISC1
```

関連資料:

665 ページの『IMS Connect UPDATE MSC コマンド』

 [UPDATE IMSCON TYPE\(MSC\) コマンド \(コマンド\)](#)

STARTOD コマンド

STARTOD コマンドは、IMS Connect と IMS Open Database Manager (ODBM) の間の通信を開始するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 518 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 518 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSTARTOD odbm_name ◀◀
```

キーワード

以下のキーワードは、STARTOD コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

odbm_name

ODBM の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。

使用上の注意

STARTOD コマンドは、IMS Connect と ODBM の間で通信が失敗した後で、ODBM との通信を再確立するために使用します。例えば、IMS Connect で、

ODBM に対するすべてのアクティビティーが終了したとき、または STOPOD コマンドによって ODBM との通信が終了された後に、このコマンドを使用して通信を再開します。STARTOD コマンドによって、ODBM への接続が行われ、その ODBM のすべての別名が自動的にアクティブに設定されて、それらの別名にメッセージを経路指定できるようになります。STARTOD コマンドが発行されると、ODBM 状況は REGISTERED になります。

ODBMAUTOCONN=N に設定されている場合、STARTOD コマンドを発行して、ODBM との通信を手動で開始できます。理由に関わらず、ODBM に対するメッセージの経路指定を停止したい場合は、STOPOD コマンドを発行してください。その ODBM に対するメッセージの経路指定を再開する場合は、STARTOD コマンドを発行して、通信を開始してください。特定の別名に対するメッセージの経路指定を停止したい場合は、STOPIA コマンドを発行します。STARTIA コマンドを発行することで、その別名への経路指定を再開することができます。このコマンドは、指定した IMS 別名をアクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できるようにします。

注: STOPIA コマンドを使用して、特定の別名に対するメッセージの経路指定を停止した後に、STOPOD コマンドと STARTOD コマンドを発行すると、その別名の状況は STOPOD コマンドから STARTOD コマンドの間で失われます。言い換えれば、別名は、STARTOD コマンドの後で再びアクティブになります。

特定の ODBM のアクティビティーが不明な場合は、VIEWDS コマンドを使用して、ODBM に関する情報を表示してください。STARTOD コマンドは、既にアクティブな ODBM には影響を及ぼしません。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTOD コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTOD コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTOD <i>odbm_name</i>	UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) START(COMM)

例

ODBM1OD という名前の ODBM に対する通信をオープンするには、以下のように入力します。

```
nnSTARTOD ODBM1OD
```

関連資料:

531 ページの『STOPOD コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド (コマンド)

667 ページの『IMS Connect UPDATE ODBM コマンド』

STARTPT コマンド

STARTPT コマンドは、IMS Connect と TCP/IP の間の通信を再確立して、TCP/IP ポートでの listen を可能にするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『例』

構文

▶▶ *nn*STARTPT—*portid*◀◀

キーワード

以下のキーワードは、STARTPT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

portid

オープンするポートの番号を指定します。このポート番号は、HWSCFGxx 構成メンバー内で TCPIP 構成ステートメントの PORTID または CICSSPORT サブステートメントに定義されているポート番号のいずれかに一致していなければなりません。ローカル・オプション・ポートの場合は、LOCAL の *portid* 値を指定します。番号にはワイルドカード (* および %) を使用できます。

使用上の注意

このコマンドは、TCP/IP 接続を再確立して TCP/IP ポートでの listen を可能にするために使用します。IMS Connect と TCP/IP ポートの間の通信が停止し、IMS Connect はまだ終了していない場合に、このコマンドを使用してください。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTPT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTPT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTPT <i>port_id</i>	UDPATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)

例

IMS Connect とポート 9999 の間の TCP/IP 接続を再確立して、IMS Connect がそのポート上で listen できるようにするには、以下のように入力します。

*nn*STARTPT 9999

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

500 ページの『OPENPORT コマンド』

669 ページの『IMS Connect UPDATE PORT コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド (コマンド)

STARTRMT コマンド

STARTRMT コマンドは、IMS Connect のローカル・インスタンス内で、IMS Connect のリモート・インスタンスとの通信が STOPRMT コマンドまたは UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) コマンドによって停止された後に、通信を再開するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 521 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 521 ページの『例』

構文

► *nn*STARTRMT *rmtimscon_id* ◄

└───┬───┘
 *

キーワード

以下のキーワードは、STARTRMT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

rmtimscon_id

開始するリモート IMS Connect 接続の名前。これは、ローカル IMS Connect インスタンスへの接続を定義する RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定されています。

使用上の注意

STARTRMT コマンドが発行されると、IMS Connect は、リモート IMS Connect インスタンスへの指定された接続上で通信を再開します。IMS Connect は、IMS Connect のリモート・インスタンスとの通信用に新規ソケットがオープンされるまで、接続の状況を NOT ACTIVE に変更します。

STARTRMT コマンドが必要になるのは、リモート IMS Connect インスタンスとの接続上の通信が STOPRMT コマンドまたは UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) コマンドによって以前に停止されている場合に限られます。

指定された RMTIMSCON 接続が AUTOCONN=Y で定義されている場合、STARTRMT が発行されると、IMS Connect はリモート IMS Connect へのソケット接続を自動的に作成します。IMS Connect がオープンするソケット接続の数は、RESVSOC パラメーターで決定されます。

OTMA 通信は、IMS Connect が STARTRMT コマンドを実行するとすぐに再開できます。

MSC 通信の場合、STARTRMT コマンドは IMS Connect 内の TCP/IP 通信のみを再開し、MSC リンクの停止状況を変更しません。MSC リンクが STOPMSC コマンドまたは UPDATE MSC STOP(COMM) コマンドによって停止されている場合、STARTRMT コマンドを発行した後、さらに IMS Connect で STARTMSC コマンドまたは UPDATE MSC START(COMM) コマンドを発行して、MSC リンクを再開する必要があります。

推奨事項: MSC 通信を再開する際には、TCP/IP 通信が再開される前に IMS が MSC メッセージを IMS Connect に送信するのを防止するために、必ず STARTMSC コマンドを発行する前に STARTRMT コマンドを発行してください。

ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されているリモート IMS Connect インスタンスへの現行の接続に関する情報を表示するには、VIEWRMT コマンド、QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド、または QUERY RMTIMSCON コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STARTRMT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STARTRMT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STARTRMT <i>rmtimsconName</i>	UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) START(COMM)	UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) START(COMM)

例

以下の STARTRMT コマンドの例は、接続 CONNECT2 を開始します。

```
nnSTARTRMT CONNECT2
```

STARTRMT コマンドの出力:

```
HWST3500I COMMUNICATIONS WITH REMOTE IMS CONNECT CONNECT2 STARTED; M=TSCH
```

関連資料:

533 ページの『STOPRMT コマンド』

672 ページの『IMS Connect UPDATE RMTIMSCON コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド (コマンド)

STOPCLNT コマンド

STOPCLNT コマンドは、特定の TCP/IP ポートを使用しているクライアントとの通信を即時に終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 523 ページの『例』

構文

▶—*nn*STOPCLNT—*portid*—*clientid*—▶

キーワード

以下のキーワードは、STOPCLNT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

portid

クライアントが IMS Connect との TCP/IP 接続用に使用しているポートを識別します。このポート番号は、HWSCFGxx 構成メンバーの内で TCPIP 構成ステートメントの PORTID または CICSSPORT サブステートメントに定義されているポート番号に一致していなければなりません。ローカル・オプション・ポートの場合は、LOCAL の *portid* 値を指定します。

clientid

クライアントの名前を指定します (クライアント名は、IMS TM Resource Adapter により動的に生成されます)。

使用上の注意

該当のクライアントについて進行中の作業が終了します。

クライアントが送られてくる応答メッセージを受け入れることができないとき、または、クライアントが存在しない応答メッセージを待っているとき (例えば、エラーが原因で、応答メッセージがクライアントに送り返される前に失われたとき) には、このコマンドを使用してください。

クライアントの名前と状態を表示するには、VIEWPORT コマンドを使用してください。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPCLNT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。


STOPCLNT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPCLNT <i>portid</i> <i>clientid</i>	UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(<i>client_name</i>) PORT(<i>portid</i>) STOP(COMM)	DELETE PORT NAME(<i>portName</i>) CLIENT(<i>clientName</i>)

例

ポート 9999 を使用して IMS Connect と通信しているクライアント CLIENT01 との通信を、IMS Connect で強制終了するには、以下のように入力します。

```
nnSTOPCLNT 9999 CLIENT01
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。
関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(CLIENT\) コマンド \(コマンド\)](#)
594 ページの『IMS Connect DELETE CLIENT コマンド』

STOPDS コマンド

STOPDS コマンドは、IMS Connect とデータ・ストアの間の通信を即時に終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 524 ページの『使用上の注意』
- 524 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 524 ページの『例』

構文

▶▶ *nn*STOPDS—*datastore_id*————▶▶

キーワード

以下のキーワードは、STOPDS コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

datastore_id

データ・ストアの名前を指定します。この名前は、HWSCFGxx 構成メンバーの DATASTORE 構成ステートメント内で定義されている ID の 1 つに一致していなければなりません。

使用上の注意

データ・ストアについて現在進行中の作業が終了し、そのデータ・ストアとの通信およびスレッドが終了します。そのデータ・ストアを宛先としてキューに入れられているメッセージは解放され、キュー内のメッセージの発信元に通知されます。STOPDS コマンドが受け入れられた後は、新規のメッセージは受け入れられません。

このコマンドは、使用不能のデータ・ストアか、または使用不能のクライアントに属する作業がキューに入っているデータ・ストアについて、キュー内のメッセージを解放するために使用します。このコマンドは、データ・ストアとの通信の即時終了を必要とするような任意のタイプのエラー状態に対して使用できます。

後でデータ・ストアとの通信をオープンするには、OPENDS コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPDS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPDS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPDS <i>datastore_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) STOP(COMM)	UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>) STOP(COMM)

例

データ・ストア IMSA との通信を停止するには、以下のように入力します。

```
nmSTOPDS IMSA
```

ここで *nm* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(DATASTORE\) コマンド \(コマンド\)](#)
657 ページの『IMS Connect UPDATE DATASTORE コマンド』

STOPIA コマンド

STOPIA コマンドは、1 つ以上の Open Database Manager (ODBM) インスタンスによって管理される IMS 別名へのメッセージ・ルーティングを無効に設定するために使用します。STOPIA コマンドは、指定した別名を非アクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できないようにします。

サブセクション:

- 525 ページの『構文』
- 525 ページの『キーワード』
- 525 ページの『使用上の注意』

- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『例』

構文

```
▶▶ nnSTOPIA alias_name odbm_name ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、STOPIA コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

alias_name

IMS 別名の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。

odbm_name

ODBM の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。このパラメーターはオプションです。

使用上の注意

特定の別名に対するメッセージの経路指定を停止したい場合は、STOPIA コマンドを発行します。STARTIA コマンドを発行することで、その別名への経路指定を再開することができます。このコマンドは、指定した IMS 別名をアクティブに設定して、IMS Connect がその別名に経路指定できるようにします。

注: STOPIA コマンドを使用して、特定の別名に対するメッセージの経路指定を停止した後に、STOPOD コマンドと STARTOD コマンドを発行すると、その別名の状況は STOPOD コマンドから STARTOD コマンドの間で失われます。言い換えれば、別名は、STARTOD コマンドの後で再びアクティブになります。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPIA コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPIA コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPIA <i>alias_name</i>	UDPATE IMSCON TYPE(ALIAS)	UPDATE ALIAS
<i>odbm_name</i>	NAME(<i>alias_name</i>)	NAME(<i>aliasName</i>)
	ODBM(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	ODBM(<i>odbmName</i>)
		STOP(ROUTE)

例

ODBM1OD という名前の ODBM に対して、IMS1 という名前の別名を非アクティブ化するには、以下のように入力します。

```
nnSTOPIA IMS1 ODBM1OD
```

関連資料:

513 ページの『STARTIA コマンド』

➡ UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド (コマンド)

654 ページの『IMS Connect UPDATE ALIAS コマンド』

STOPIP コマンド

STOPIP コマンドは、IMS Connect と、SCI に接続されている OM が入っている IMSplex の間の通信を停止します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 527 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 527 ページの『例』

構文

▶▶ *nn*STOPIP—*imsplex_id* ◀◀

キーワード

以下のキーワードは、STOPIP コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

imsplex_id

IMSplex の名前を指定します。この名前は、構成メンバー HWSCFGxx を介して IMS Connect に対して定義されている必要があり、IMSplex 構成ステートメント内で定義されている TMEMBER に一致していなければなりません。

使用上の注意

IMSplex に対して現在進行中の作業が終了し、IMSplex との通信およびそのスレッドが終了します。進行中のメッセージはすべて拒否され、エラー・メッセージが要求側に返されます。STOPIP は、IMSplex との通信の即時終了を必要とするようなすべてのエラー状態に対して使用できます。

IMS Connect が ISC リンクまたは MSC TCP/IP リンクをサポートしており、STOPIP コマンドを使用した場合、IMS Connect は、各 ISC リンクおよび MSC 物理リンクについて IMS に通知を送信します。ISC リンクの場合、IMS Connect は、IMS にすべての ISC 並列セッションが ISC リンク上で終了したことを通知します。MSC リンクの場合、IMS Connect は、IMS に物理リンク上のすべての MSC 論理リンクが終了したことを通知します。

IMSplex 通信を停止すると、ローカル IMSplex 内のローカル IMS Connect によってサポートされているすべての ISC リンクおよび MSC TCP/IP 物理リンクが切断されます。

STOPIP または同等のコマンドを発行すると、ISC および MSC TCP/IP リンクに対し、以下のアクションが起こります。

- ローカル IMS Connect は、リンクをサポートする並列送受信ソケットを切断し、IMS に対してローカル IMS システム内の ISC および MSC のシャットダウン・ディレクティブを送信します。
- ISC リンクの場合、IMS がシャットダウン・ディレクティブを受信すると、ISC は ISC リンクをクリーンアップします。
- MSC リンクの場合、IMS がシャットダウン・ディレクティブを受信すると、MSC は物理リンクをクリーンアップし、メッセージ DFS3176E を発行します。
- IMS Connect は、ISC リンクおよび MSC TCP/IP 物理リンクの状況を DISCONNECTED に変更します。

後で IMSplex との通信を開始するには、OPENIP コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPIP コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPIP コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPIP <i>imsplex_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)	UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)


例

TMEMBER 名が IMSPLEX1 である IMSplex との通信を停止するには、以下のように入力します。

```
nnSTOPIP IMSPLEX1
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(IMSPLEX\) コマンド \(コマンド\)](#)

659 ページの『IMS Connect UPDATE IMSPLEX コマンド』

STOPLINK コマンド

IMS Connect WTOR コマンド STOPLINK は、IMS Connect 内で MSC 物理リンクに割り当てられている MSC 論理リンク上の通信を停止するために使用します。STOPLINK は、DELETE LINK z/OS MODIFY コマンドと同様のアクションを実行します。

サブセクション:

- 528 ページの『構文』
- 528 ページの『キーワード』
- 528 ページの『使用上の注意』

STOPLINK コマンドが複数の物理リンクに対して発行されるか、あるいは *lclplk_id* 値が省略されている場合、IMS Connect は、STOPLINK LINK コマンドで指定された *logical_link_name* に一致するすべての MSC 論理リンク上の通信を停止します。

IMS Connect インスタンスに対して定義された MSC 物理リンクに割り当てられている MSC 論理リンクに関する情報を表示するには、以下のいずれかのコマンドを使用します。

- IMS タイプ 2 コマンド・フォーマットで、QUERY IMSCON TYPE(LINK) または QUERY IMSCON TYPE(MSC)
- WTOR コマンド・フォーマットで、VIEWMSC
- z/OS MODIFY コマンド・フォーマットで、QUERY MSC

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPLINK コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPLINK コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPLINK <i>linkName</i>	UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>link_name</i>) STOP(COMM)	DELETE LINK NAME(<i>linkName</i>)
STOPLINK <i>linkname</i> <i>lclPlkid</i>	UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>linkname</i>) MSC(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)	DELETE LINK NAME(<i>linkname</i>) LCLPLKID(<i>lclPlkid</i>)

例

次の例では、STOPLINK コマンドは、すべての MSC 物理リンクを検索し、MSCLINK1 という名前のすべての MSC 論理リンク上の通信を停止します。

```
nnSTOPLINK MSCLINK1
```

STOPLINK コマンドの出力例:

```
HWSF3310I LOGICAL LINK MSCLINK1 TERMINATED; MSC=MSC12, M=ISC2
```

関連資料:

- ➡ UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド (コマンド)
595 ページの『IMS Connect DELETE LINK コマンド』

STOPMSC コマンド

WTOR コマンド STOPMSC は、IMS Connect のローカル・インスタンスに定義されている MSC 物理リンク上の通信を停止するために使用します。STOPMSC コマンドは、z/OS MODIFY コマンド UPDATE MSC STOP(COMM) と同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 530 ページの『構文』

- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 531 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSTOPMSC {lclplk_id} ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、STOPMSC コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

lclplk_id

通信を停止する物理リンクの ID。これは、IMS Connect に対して物理リンクを定義する MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。

使用上の注意

STOPMSC コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- 指定された MSC 物理リンク上の通信を停止します。これには、その物理リンクに割り当てられているすべての MSC 論理リンク上の通信が含まれます。
- 物理リンク上の通信が停止されたことを IMS に通知し、IMS でも物理リンクおよびその論理リンクに割り当てられているすべての論理リンクを終了できるようにします。
- MSC 物理リンクの状況を NOT ACTIVE に変更します。
- TCP/IP 汎用リソースの場合、物理リンクの IMS システムへの類似性をクリアします。
- メッセージ HWSF3305I を発行します。

IMS Connect に対して定義されている MSC 物理リンクに関する情報を表示するには、VIEWMSC コマンドまたは QUERY MSC コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPMSC コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPMSC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPMSC <i>lclplkid</i>	UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclplkid</i>) STOP(COMM)	UPDATE MSC NAME(<i>lclplkid</i>) STOP(COMM)

例

次の STOPMSC コマンドの例は、MSC 物理リンク MSC12 を停止します。

```
nnSTOPMSC MSC12
```

STOPMSC コマンドの出力例:

```
HWSF3305I COMMUNICATIONS ON MSC PHYSICAL LINK MSC12 STOPPED; M=DSCM
```

関連資料:

516 ページの『STARTMSC コマンド』

665 ページの『IMS Connect UPDATE MSC コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド (コマンド)

STOPOD コマンド

STOPOD コマンドは、IMS Connect と IMS Open Database Manager (ODBM) の間の通信を即時に終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 532 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 532 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSTOPOD—odbm_name—————▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、STOPOD コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

odbm_name

ODBM の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。

使用上の注意

STOPOD コマンドは、ODBM との通信の即時終了を必要とする、任意のタイプのエラー状態に対して使用します。ODBM について現在進行中の作業が終了し、その ODBM との通信およびスレッドが終了します。

後で ODBM との通信をオープンするには、STARTOD コマンドを使用します。

STOPOD コマンドが発行されると、ODBM 状況は UNREGISTERED になります。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPOD コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。


STOPOD コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPOD <i>odbm_name</i>	UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) STOP(COMM)

例

ODBM1OD という名前の ODBM に対する通信を停止するには、以下のように入力します。

```
nnSTOPOD ODBM1OD
```

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(ODBM\) コマンド \(コマンド\)](#)
667 ページの『IMS Connect UPDATE ODBM コマンド』

STOPPORT コマンド

STOPPORT コマンドは、TCP/IP ポート上の listen を即時に終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 533 ページの『使用上の注意』
- 533 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 533 ページの『例』

構文

```
▶—nnSTOPPORT—portid—▶
```

キーワード

以下のキーワードは、STOPPORT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

portid

listen を停止させるポートの番号を指定します。このポート番号は、HWSCFGxx 構成メンバーの内で TCPIP 構成ステートメントの PORTID また

は CICSPOINT サブステートメントに定義されているポート番号に一致していなければなりません。ローカル・オプション・ポートの場合は、LOCAL の *portid* 値を指定します。

使用上の注意

既存のクライアントについて現在進行中の作業は続行可能です。ポート上での新規の要求メッセージに対する *listen* のみが、即時に終了されます。既存の作業が完了した後は、ポートはアクティブではなくなります。

ポートとそのポートを使用しているクライアントの状態を表示するには、VIEWPORT コマンドを使用してください。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPPORT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPPORT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPPORT <i>port_id</i>	UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)	UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)


例

ポート 9999 での *listen* を停止するには、以下のように入力します。

```
nnSTOPPORT 9999
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 UPDATE IMSCON TYPE(PORT) コマンド (コマンド)
669 ページの『IMS Connect UPDATE PORT コマンド』

STOPRMT コマンド

WTOR コマンド STOPRMT は、IMS Connect のローカル・インスタンス内で、IMS Connect のリモート・インスタンスとの通信を停止するために使用します。STOPRMT コマンドは、z/OS MODIFY コマンド UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) と同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 534 ページの『構文』
- 534 ページの『キーワード』
- 534 ページの『使用上の注意』
- 534 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 535 ページの『例』

構文

▶▶ *nn*STOPRMT *rmtimscon_id* ▶▶

キーワード

以下のキーワードは、STOPRMT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

rmtimscon_id

停止するリモート IMS Connect 接続の名前。これは、ローカル IMS Connect インスタンスへの接続を定義する RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定されています。

使用上の注意

STOPRMT コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- コマンドで指定された接続上のリモート IMS Connect インスタンスとのすべての通信を停止します。
- リモート IMS Connect インスタンスへの接続が停止されたことを IMS に通知し、IMS が影響を受けたすべての MSC 論理リンクをシャットダウンできるようにします。
- 既存のソケット接続を終了し、STARTRMT コマンドまたは UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドが発行されるまで、新規のソケット接続を防止します。
- 接続の状況を STOPPED に変更します。
- メッセージ HWST3505I を発行します。

STOPRMT コマンドが発行された後、IMS Connect が STOPPED 状態の接続についてメッセージを受け取った場合、IMS Connect は NAK 応答を OTMA に返し、メッセージ HWST3575W を発行します。OTMA は、キューの先頭にメッセージを保持します。

ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されているリモート IMS Connect インスタンス接続の現在の状況を表示するには、VIEWRMT コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPRMT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPRMT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPRMT	UPDATE IMSCON	UPDATE RMTIMSCON
<i>rmtimsconName</i>	TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>)	NAME(<i>rmtimsconName</i>)
	STOP(COMM)	STOP(COMM)

例

次の例では、STOPRMT コマンドは、接続 CONNECT2 の通信を停止します。

```
nnSTOPRMT CONNECT2
```

STOPRMT コマンドの出力:

```
HWST3505I COMMUNICATIONS WITH REMOTE IMS CONNECT CONNECT2 STOPPED; M=TSCH
```

関連資料:

520 ページの『STARTRMT コマンド』

672 ページの『IMS Connect UPDATE RMTIMSCON コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド (コマンド)

STOPSCLN コマンド

OTMA メッセージをリモート IMS システムに送信するために使用する接続の場合、IMS Connect WTOR コマンド STOPSCLN を使用して、リモート IMS Connect インスタンスへの接続の送信ソケットを終了します。

接続を終了した後に送信ソケットを適切にクリーンアップできなかった場合を除き、ISC 並列セッションまたは MSC リンクに使用する接続には STOPSCLN コマンドを使用しないでください。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 536 ページの『使用上の注意』
- 536 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 537 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnSTOPSCLN rmtimscon_id sendclnt *
```

キーワード

以下のキーワードは、STOPSCLN コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

rmtimscon_id

送信ソケットがあるリモート IMS Connect 接続の ID。これは、RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定されています。

sendclnt

終了する送信ソケットの ID。アスタリスク (*) をワイルドカード文字として使用できます。

使用上の注意

以下の送信ソケットを終了するには、STOPSCLN コマンドを使用します。

- CICS サブシステムへの ISC リンク。
- リモート IMS システムにメッセージを送信するために使用する IMS Connect 間の接続。

終了する必要がある送信ソケットの ID を確認するには、以下のいずれかの IMS Connect コマンドを使用します。

- IMS タイプ 2 コマンド・フォーマットで、QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT)
- リモート IMS システムへの OTMA 接続の場合:
 - WTOR コマンド・フォーマットで、VIEWRMT
 - z/OS MODIFY コマンド・フォーマットで、QUERY RMTIMSCON

ISC 並列セッションおよび MSC リンクの場合、リンク終了時に送信クライアントが適切にクリーンアップされなかった場合にのみ STOPSCLN コマンドを使用する必要があります。それ以外の場合は、STOPSCLN コマンドを使用して、ISC または MSC が使用しているソケットを終了しないでください。これを行うと、セッションやリンクが切断されるためです。

IMS 内でまだアクティブな ISC 並列セッションを停止する必要がある場合は、IMS コマンド /QUIESCE NODE を発行して停止してください。このコマンドは、IMS Connect 内の関連する送受信ソケットを自動的に終了します。ISC 並列セッションで使用している送信ソケットを終了する代替方法には、UPDATE IMSCON TYPE(ISCUSER) タイプ 2 IMS コマンドを使用する方法があります。このコマンドは、並列セッションで使用している送信ソケットと受信ソケットの両方を終了します。

IMS 内でまだアクティブの MSC リンクを停止する必要がある場合は、IMS コマンド /PSTOP LINK を発行することでリンクを停止してください。このコマンドは、IMS Connect 内の関連する送受信ソケットを自動的に終了します。MSC メッセージ用に使用される送信ソケットを終了する代替方式は、IMS Connect WTOR コマンド STOPLINK または IMS Connect z/OS 変更コマンド DELETE LINK を使用することです。これらのコマンドは、MSC リンクで使用される送信ソケットおよび受信ソケットを終了します。これと同等の IMS タイプ 2 コマンドは、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) です。

STOPSCLN コマンドが発行されたときに送信ソケット接続が RECV 状態である場合、IMS Connect は OTMA に NAK を発行した後、送信ソケット接続を終了します。OTMA は、メッセージを送達不能キュー HWS\$DLQ に転送します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、STOPSCLN コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

STOPSLCN コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
STOPSLCN <i>rmtimscon</i> <i>sendclient</i>	UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(<i>sendclient_name</i>) RMTIMSCON(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	DELETE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconname</i>) SENDCLNT(<i>clientid</i>)

例

次の例では、STOPSLCN コマンドは、CONNECT2 上の送信 OTM11111 ソケット接続を終了します。

```
nnSTOPSLCN CONNECT2 OTM11111
```

STOPSLCN コマンドの出力例:

```
HWST3525I THE SEND CLIENT OTM11111 WAS TERMINATED FOR REMOTE IMS CONNECT CONNECT2; M=TCVC
```

関連資料:

585 ページの『VIEWRMT コマンド』

646 ページの『IMS Connect QUERY RMTIMSCON コマンド』

598 ページの『IMS Connect DELETE SENDCLNT コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド (コマンド)

VIEWDS コマンド

VIEWDS コマンドは、IMS Connect に対して既知である 1 つまたはすべてのデータ・ストア、および ODBM インスタンスの現在の状況とアクティビティを表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 538 ページの『使用上の注意』
- 538 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 538 ページの『出力フィールド』
- 541 ページの『例』

構文

```
►► nnVIEWDS ALL
┌──────────┴──────────┐
│ datastore_name │
│ odbm_name      │
└──────────┬──────────┘
```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWDS コマンドに有効です。

ALL

IMS Connect に対して既知であるすべてのデータ・ストア、および ODBM インスタンスに関する情報を表示します。

datastore_name

情報を表示するデータ・ストアの名前です。この名前は、HWSCFGxx 構成メンバーの DATASTORE 構成ステートメントの ID パラメーターと一致しなければなりません。このデータ・ストアに関する情報のみ表示されます。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

odbm_name

情報を表示する ODBM インスタンスの名前です。この名前は、CSLDCxxx PROCLIB メンバーの ODBM ステートメントの NAME パラメーターに定義されている ODBM インスタンスの名前と一致しなければなりません。この ODBM インスタンスに関する情報のみ表示されます。

使用上の注意

VIEWDS コマンドは、データ・ストア、または ODBM インスタンスの現在のアクティビティーを表示するために使用します。

単一のデータ・ストアまたは ODBM インスタンスのみにに関する情報を表示するには、特定のデータ・ストアまたは ODBM インスタンスの名前を指定します。IMS Connect の特定のインスタンスに関連付けられたすべてのデータ・ストアおよび ODBM インスタンスに関する情報を表示するには、ALL キーワードを指定します。

nnVIEWDS ALL によって表示される情報は、VIEWHWS コマンドによってすべてのデータ・ストアに対して返される情報と同じです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWDS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWDS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWDS ALL	QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY DATASTORE NAME(*) SHOW(ALL)
VIEWDS <i>datastore_name</i>	QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY DATASTORE NAME(<i>datastore_name</i>)

出力フィールド

以下のリストは、VIEWDS コマンドの出力フィールドを示しています。

DATASTORE=

データ・ストアの名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の DATASTORE 構成ステートメントの ID サブステートメントに定義されている名前か、No

active Datastores です。データ・ストアは IMS システムであり、より正確に言えば、IMS システムへの接続です。

STATUS

データ・ストアの状態。これは、ACTIVE、NOT ACTIVE、または DISCONNECT のいずれかです。

データ・ストアが停止した場合は、IMS Connect にデータ・ストアの状況が (IMS OTMA から z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) を介して) 通知されます。データ・ストアがバックアップされ、再始動されると、IMS Connect は通知を受け、そのデータ・ストアに自動的に再接続します。

GROUP

IMS Connect および IMS OTMA が属しているグループの XCF グループ名。

MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS Connect メンバー名。

TARGET MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS OTMA メンバー名。

STATE

OTMA サーバーの状況を示します。STATE の値は、以下のいずれかです。

AVAIL

OTMA サーバーが使用可能であることを示します。

WARN

OTMA サーバーに、警告状態の 1 つ以上のリソースがあることを示します。

SEVERE

OTMA サーバーに、何らかの深刻なリソース問題があることを示します。

N/A

OTMA で、このデータ・ストアの状況が報告されなかったことを示します。

DEFAULT REROUTE NAME

クライアント転送要求で指定された代替宛先の名前。

RACF APPL NAME

パスチケットおよびデータ・ストア・アクセス制御用の RACF APPL 名。

MULTIRTP

現在表示されている DATASTORE 接続に関する DATASTORE ステートメント内の MULTIRTP パラメーターの現在の指定を示します。可能な値は以下のとおりです。

Y

この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする TPIPE が求められます。

N

この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求で

は、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする TPIPE が求められます。

- # この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求には、MULTIRTP 指定が含まれていません。この DATASTORE 接続の TPIPE が複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートするかどうかは、OTMA が決定します。
- b DATASTORE ステートメントに MULTIRTP 値が指定されていません。複数の RESUME TPIPE 要求に関する TPIPE のサポートは、HWS ステートメントの MULTIRTP 指定により、または OTMA クライアント記述子で決定されます。

CASCADE

IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する、データ・ストア定義内の指定を表示します。

この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の DATASTORE= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、またはタイプ 2 コマンド CREATE IMSCON TYPE(DATASTORE) または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) に SET(CASCADE()) キーワードを指定して設定されました。

ここに表示される値は、CASCADE に関する IMS Connect のデフォルト値をオーバーライドします。

以下のいずれかの値が表示されます。

- blank** 値がブランクの場合、このデータ・ストアにはカスケード・トランザクション・サポートが指定されなかったことを示します。このデータ・ストアのサポートは、IMS Connect のデフォルト指定によって決定されます。
- Y** IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートすることを示します。
- N** デフォルトでは、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートしないことを示します。

OTMA ACEE AGING VALUE

IMS Connect DATASTORE 構成ステートメントで指定された現行の OTMA アクセサー環境エレメント (ACEE) エージング値。OTMA ACEE エージング値は、IMS Connect の ACEE のキャッシュに入れられているセキュリティー定義を OTMA がリフレッシュする頻度を決めます。

OTMA ACK TIMEOUT VALUE

IMS Connect 構成メンバー内の OTMA ACK タイムアウト値。

OTMA MAX INPUT MESSAGE

IMS Connect 構成ファイル内の OTMA 入力メッセージあふれ制御値。

SUPER MEMBER NAME

このデータ・ストアが所属する OTMA スーパー・メンバーの名前。

ODBM=

IMSplex 内にある Open Database Manager (ODBM) のインスタンスを示します。

STATUS

IMS Connect のこのインスタンスが、ODBM の指定されたインスタンスに登録されているかどうかを示します。STATUS の値は、以下のいずれかです。

- REGISTERED - IMS Connect は、ODBM の指定されたインスタンスに登録されています。
- NOT ACTIVE - ODBM の指定されたインスタンスは使用できません。

ODBMRRS

ODBM での RRS 指定を示します。IMS Connect が ODBM に登録されている場合、ODBM によって、IMS Connect にその RRS 設定と別名が提供されます。

ALIAS

前述の ODBM 出力フィールドに示されている ODBM のインスタンスに対して定義されている IMS データ・ストアの別名。

STATUS

前述の別名に関連する IMS システムがアクティブであるか、非アクティブであるかを示します。status の値は、次のいずれかです。

- ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できます。
- NOT ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できません。

例

次の例で、*nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

VIEWDS コマンドの例 1

単一データ・ストア IMS1 についての情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWDS IMS1
```

このコマンドは以下のような出力を生成します。

```

HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP=Y CASCADE=Y
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=

```

VIEWWS コマンドの例 2

ODBM インスタンス ODBMAOD についての情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWWS ODBMAOD
```

このコマンドは以下のような出力を生成します。

```

HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE(ODBM)

```

VIEWWS コマンドの例 3

IMS Connect に対して定義されているすべてのデータ・ストアに関する情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWWS ALL
```

このコマンドは以下のような出力を生成します。

```

HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP=Y CASCADE=Y
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON)
HWSC0001I ODBM=ODBMBOB STATUS=REGISTERED ODBMRRS=N
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMCOB STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMDOB STATUS=NOT ACTIVE

```

関連資料:

 [QUERY IMSCON TYPE\(DATASTORE\) コマンド \(コマンド\)](#)

601 ページの『IMS Connect QUERY DATASTORE コマンド』

VIEWHWS コマンド

VIEWHWS コマンドは、IMS Connect の現在のアクティビティを表示するために使用します。

サブセクション:

- 543 ページの『構文』

- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 544 ページの『出力フィールド』
- 561 ページの『例 1: VIEWHWS コマンド』

構文

```

▶▶—nnVIEWHWS—┐
                  └─SUMMARY─┘
  
```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWHWS コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

SUMMARY

詳細なクライアント情報を除外します。このオプションにより、同じ HWS およびデータ・ストア情報が提供されますが、ポートに対する個々のクライアントのリスト表示はバイパスされます。ただし、ポート状況とクライアント合計は報告されます。

使用上の注意

VIEWWDS コマンドを使用して、データ・ストアについての情報のみを表示したり、VIEWPORT コマンドを使用して、ポートについての情報のみを表示したりすることができます。

VIEWHWS コマンドは、クライアントが IMS 会話型トランザクションを実行している場合、CONV 状況を表示します。ただし、アプリケーションが InteractionSpec convTypeNew プロパティの IMS を true に設定している場合は、IMS Connect は、会話型トランザクションの複数の反復間に渡ってクライアントの会話状況を追跡しません。したがって、会話型の 1 回の反復中にコマンドが入力されない限り、VIEWHWS コマンドは CONV 状況を表示しません。

IMS Connect が ODBM に接続すると、ODBM の状況は REGISTERED になります。STOPOD コマンドが発行されて ODBM への接続が停止されると、ODBM の状況は UNREGISTERED に変わります。状況が REGISTERED の ODBM が停止すると、その ODBM の状況は NOT ACTIVE に変わります。別名が ACTIVE である場合、IMS Connect は DRDA メッセージをその別名に経路指定できます。別名が NOT ACTIVE である場合、IMS Connect は DRDA メッセージをその別名に経路指定できません。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWHWS コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWHWS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWHWS	QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) SHOW(ALL)

出力フィールド

以下のリストは、VIEWHWS コマンドの出力フィールドを示しています。

HWS ID=

IMS Connect の名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の HWS 構成ステートメントの ID サブステートメントで定義されている名前です。

RACF HWS ID= フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスについて、RACF サポートが現在使用可能であるかどうかを示します。

UIDCACHE

HWS ID= フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスについて、RACF ユーザー ID キャッシュが使用可能であるかどうかを示します。

UIDAGE

IMS Connect によってリフレッシュされる前に RACF ユーザー ID が使用される長さ (秒数)。

PSWDMC

HWS ID= フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスについて、大/小文字混合パスワードのサポートが現在使用可能であるかどうかを示します。『R』は、IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートが、RACF の大/小文字混合パスワード指定によって決まることを示しています。

MAXSOC

IMS Connect のこのインスタンスが開くことができるソケットの最大合計数。作成できる物理接続の最大数は、MAXSOC= の値からポート数を引いた数になります。これは、IMS Connect によって、listen 用にポートごとに 1 つのソケットが使用されるからです。

TCPIPQ

割り当てられたソケットがない状態で IMS Connect が維持できる、キュー内の要求の最大数。

TIMEOUT

IMS からクライアントのための応答を待つか、またはクライアントによるソケット接続オープン後にクライアントからのデータを待って、IMS Connect がクライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまで待機する時間間隔。

NUMSOC

すべての定義済みポート、RMTIMSCON 接続、および RMTICIS 接続上の全アクティブ・ソケットの合計。

WARNSOC

ソケットの最大限度数 (TCPIP 構成ステートメント内の MAXSOC= 値) のパーセンテージとして表される警告レベルを示す 1 から 50 までの 10 進数。ソケット数がこの警告レベルに達すると、IMS Connect は HWSS0772W メッセージを発行します。

WARNING

警告の増分パーセンテージを示す 1 から 50 までの 10 進数。警告レベル (TCPIP 構成ステートメント内の WARNSOC 値) に達すると、ソケット数が警告レベルの増分パーセンテージだけ増加するたびに、IMS Connect は HWSS0772W メッセージを再発行します。

RRS HWS 構成ファイル内で、RRS が Y または N のどちらかに設定されているかを示します。

STATUS

RRS の状態。 RRS の状態は以下のいずれかが可能です。

- ACTIVE: RRS を伴う IMS Connect の再始動が完了しています。
- NOT ACTIVE - IMS Connect は RRS に登録されていません。
- REGISTERED - IMS Connect は RRS に登録されています。

MULTIRTP

HWS ステートメント内の MULTIRTP パラメーターの現在の指定を示します。可能な値は以下のとおりです。

Y MULTIRTP=Y は、この IMS Connect インスタンスからのすべての DATASTORE 接続のデフォルト値です。この値が DATASTORE ステートメントの MULTIRTP パラメーターによってオーバーライドされない限り、この IMS Connect インスタンスから行われる DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする TPIPE が求められます。

N MULTIRTP=N は、この IMS Connect インスタンスからのすべての DATASTORE 接続のデフォルト値です。この値が DATASTORE ステートメントの MULTIRTP パラメーターによってオーバーライドされない限り、この IMS Connect インスタンスから行われる DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする TPIPE が求められます。

b HWS ステートメントに MULTIRTP 値が指定されていません。複数の RESUME TPIPE 要求に関する TPIPE のサポートは、DATASTORE ステートメントの MULTIRTP 指定により、または OTMA クライアント記述子で決定されます。

CASCADE

IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する IMS Connect のデフォルト指定を表示します。この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の HWS= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、タイプ 2 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(CASCADE()) コマンドを使用して設定されました。

ここに表示される値は、個々のデータ・ストア接続の定義でオーバーライドされる可能性があります。

以下のいずれかの値が表示されます。

- Y IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、IMS Connect では、個々の定義に異なる CASCADE 値を含んでいないすべてのデータ・ストア接続に対してカスケード・トランザクション・サポートが有効になることを示します。
- N デフォルトでは、個々の定義に異なる CASCADE 値を含んでいないデータ・ストア接続に対してカスケード・トランザクション・サポートが無効であることを示します。

VERSION

IMS Connect のこのインスタンスのバージョン。

IP-ADDRESS

IMS Connect のこのインスタンスの IP アドレス。クライアント・アプリケーション・プログラムは、この IP アドレスを使用して、IMS Connect に接続します。

SUPER MEMBER NAME

1 から 4 文字の OTMA スーパー・メンバー名。

ADAPTER

XML アダプター・サポートが使用可能であるか使用不可であることを示します。

MAXCVRT

IMS Connect のこのインスタンスが同時にロードできる XML コンバーターの最大数。IMS Connect がロードできる実際のコンバーター数は、コンバーターのサイズと IMS Connect 領域サイズによって異なります。

NUMCVRT

IMS Connect のこのインスタンスでロードされている XML コンバーターの現行数。

MAXLSSSZ

XML コンバーターに渡される言語構成セグメントの最大サイズを表示します。

ODBM AUTO CONNECTION

ID フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスが、IMS Connect がメンバーになっている IMSplex にある ODBM のインスタンスに自動的に接続するように構成されているかどうかを示します。

ODBM TIMEOUT

Open Database アーキテクチャーを使用するクライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまでに IMS Connect が待機する時間間隔。

ODBM IMSPLEX

IMSplex 内の ODBM との通信に使用される IMS Connect および SCI の名前。

MEMBER

SCI が、IMS Connect と ODBM 間の通信管理に使用する IMS Connect の名前。

TARGET MEMBER

IMS Connect と ODBM 間の通信を管理する SCI の名前。

DATASTORE=

データ・ストアの名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の DATASTORE 構成ステートメントの ID サブステートメントに定義されている名前か、No active Datastores です。データ・ストアは IMS システムであり、より正確に言えば、IMS システムへの接続です。

STATUS

データ・ストアの状態。これは、ACTIVE、NOT ACTIVE、または DISCONNECT のいずれかです。

データ・ストアが停止した場合は、IMS Connect にデータ・ストアの状況が (IMS OTMA から z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) を介して) 通知されます。データ・ストアがバックアップされ、再始動されると、IMS Connect は通知を受け、そのデータ・ストアに自動的に再接続します。

GROUP

IMS Connect および IMS OTMA が属しているグループの XCF グループ名。

MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS Connect メンバー名。

TARGET MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS OTMA メンバー名。

STATE

OTMA サーバーの状況を示します。STATE の値は、以下のいずれかです。

AVAIL

OTMA サーバーが使用可能であることを示します。

WARN

OTMA サーバーに、警告状態の 1 つ以上のリソースがあることを示します。

SEVERE

OTMA サーバーに、何らかの深刻なリソース問題があることを示します。

N/A OTMA で、このデータ・ストアの状況が報告されなかったことを示します。

DEFAULT REROUTE NAME

クライアント転送要求で指定された代替宛先の名前。

RACF APPL NAME

パスチケットおよびデータ・ストア・アクセス制御用の RACF APPL 名。

MULTIRTP

現在表示されている DATASTORE 接続に関する DATASTORE ステートメント内の MULTIRTP パラメーターの現在の指定を示します。可能な値は以下のとおりです。

- Y この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする TPIPE が求められます。
- N この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする TPIPE が求められます。
- # この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求には、MULTIRTP 指定が含まれていません。この DATASTORE 接続の TPIPE が複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートするかどうかは、OTMA が決定します。
- b DATASTORE ステートメントに MULTIRTP 値が指定されていません。複数の RESUME TPIPE 要求に関する TPIPE のサポートは、HWS ステートメントの MULTIRTP 指定により、または OTMA クライアント記述子で決定されます。

CASCADE

IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する、データ・ストア定義内の指定を表示します。

この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の DATASTORE= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、またはタイプ 2 コマンド CREATE IMSCON TYPE(DATASTORE) または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) に SET(CASCADE()) キーワードを指定して設定されました。

ここに表示される値は、CASCADE に関する IMS Connect のデフォルト値をオーバーライドします。

以下のいずれかの値が表示されます。

blank 値がブランクの場合、このデータ・ストアにはカスケード・トランザクション・サポートが指定されなかったことを示します。このデータ・ストアのサポートは、IMS Connect のデフォルト指定によって決定されます。

- Y** IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートすることを示します。
- N** デフォルトでは、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートしないことを示します。

OTMA ACEE AGING VALUE

IMS Connect DATASTORE 構成ステートメントで指定された現行の OTMA アクセサー環境エレメント (ACEE) エージング値。
OTMA ACEE エージング値は、IMS Connect の ACEE のキャッシュに入れられているセキュリティー定義を OTMA がリフレッシュする頻度を決めます。

OTMA ACK TIMEOUT VALUE

IMS Connect 構成メンバー内の OTMA ACK タイムアウト値。

OTMA MAX INPUT MESSAGE

IMS Connect 構成ファイル内の OTMA 入力メッセージあふれ制御値。

SUPER MEMBER NAME

このデータ・ストアが所属する OTMA スーパー・メンバーの名前。

IMSPLEX=

IMSpIex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx の IMSpIex ステートメントの TMEMBER パラメーターで定義されている名前です。

STATUS

IMSpIex の状態。

MEMBER

IMS Connect メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで MEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

TARGET

IMS Connect ターゲット・メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで TMEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

ODBM=

IMSpIex 内にある Open Database Manager (ODBM) のインスタンスを示します。

STATUS

IMS Connect のこのインスタンスが、ODBM の指定されたインスタンスに登録されているかどうかを示します。STATUS の値は、以下のいずれかです。

- REGISTERED - IMS Connect は、ODBM の指定されたインスタンスに登録されています。

- NOT ACTIVE - ODBM の指定されたインスタンスは使用できません。

ODBMRRS

ODBM での RRS 指定を示します。IMS Connect が ODBM に登録されている場合、ODBM によって、IMS Connect にその RRS 設定と別名が提供されます。

ALIAS

前述の ODBM 出力フィールドに示されている ODBM のインスタンスに対して定義されている IMS データ・ストアの別名。

STATUS

前述の別名に関連する IMS システムがアクティブであるか、非アクティブであるかを示します。status の値は、次のいずれかです。

- ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できます。
- NOT ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できません。

MSC=

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されている、表示された MSC 物理リンクの名前。以下の追加出力フィールドが、MSC= 出力フィールドに示された物理リンクに属する状況、属性、および論理リンクを説明します。

STATUS

MSC 出力フィールドに示される MSC 物理リンクの状態。物理リンクは、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用可能です。

NOT ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用不能です。

RMTPLKID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターに定義されている、リモート IMS サイトでの MSC 物理リンクの ID。

LCLIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで IMS Connect に定義されている、ローカル MSC が使用可能な IMS システムの ID。この LCLIMS 値は、ローカル IMS システムが IMSplex の SCI で登録している IMS ID と一致する必要があります。SCI で登録されている IMS ID は、ローカル IMSplex で QUERY IMSPLEX コマンドを実行することによって判別することができます。

出力に 2 番目の IMS ID が示される場合、それは XRF 結合のうち 1 つの IMS システムを示しています。

RMTIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターに定義されている、リモート MSC が使用可能な IMS システムの名前。

GENIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されている、MSC 用の TCP/IP 汎用リソースに使用されている汎用 IMS ID。

AFFINITY

MSC 論理リンクが現在 TCP/IP 汎用リソースのアフィニティーを持っている、IMS システムの名前。

IMSPLEX

IMS Connect と、ローカルの MSC が使用可能な IMS システムとの間の通信を管理する、IMSpIex の名前。この名前は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターで指定されている IMSpIex 名です。

この IMSPLEX 名は、IMS Connect と IMSpIex の間の通信を管理している SCI インスタンスの CSLSIxxx PROCLIB メンバーの IMSPLEX(NAME=) ステートメントで指定された名前と一致する必要があります。

MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX サブステートメントの MEMBER パラメーターに定義されている、この IMS Connect が IMSpIex で登録されている名前。

この MEMBER 名は、ローカル IMS システムでこの MSC 物理リンクを定義する MSPLINK マクロ内の LCLICON パラメーターでも指定されている必要があります。

TARGET MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。

RMTIMSCON

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されている、この MSC 物理リンクによって使用される IMS Connect 接続の名前。

IP-ADDRESS

リモート IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

リモート IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

LINK この物理リンクに割り当てられる MSC 論理リンクの ID。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されます。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

PARTNERID

この論理リンク用のリモート・パートナーの ID。これは、この論理リンクを定義する MSLINK マクロ内の PARTNER パラメーターで指定されている ID です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

STATUS

この論理リンクの現在の状態。論理リンクは、以下の状態をもつことができます。

ACTIVE

この論理リンクにより、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

SENDCLNT

この接続でオープンしている送信ソケットを識別するために、IMS Connect のこのインスタンスによって生成される送信ソケット ID。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、SENDCLNT ID はクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

RECVCLNT

この論理リンク用の受信ソケットを識別するクライアント

ID。クライアント ID は、リモート IMS Connect インスタンスによって生成されます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

ISC= ISC リンクを定義する、IMS Connect 構成メンバー内の ISC 構成ステートメントの ID。これには、以下の出力フィールドが適用されます。

STATUS

この ISC リンクの状況。可能な値は以下のとおりです。

ACTIVE

この ISC リンクは、IMS Connect とローカル IMS システムとの間の通信に使用可能です。

NOT ACTIVE

この ISC リンクは、IMS Connect とローカル IMS システムとの間の通信に使用不能です。

NODE

ローカル IMS に定義されているこの ISC ノードの名前。

LCLIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されている、ローカル IMS の名前。

IMSPLEX=

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。ISC ステートメントで IMSPLEX が指定されていない場合には、構成内の最初の IMSPLEX ステートメントから、名前が表示されます。

MEMBER=

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されている、メンバーの名前。これは、IMSpIex に登録された IMS Connect メンバー名です。

TARGET MEMBER=

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。

RMTCICS

この ISC リンクが使用しているリモート CICS 接続の名前。ここに示される値は、IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで指定されている値です。

IP-ADDRESS

このリモート CICS の IP アドレス。

PORT

このリモート CICS のポート。

HOSTNAME

このリモート CICS のホスト名。HOSTNAME パラメーターが RMTICICS ステートメントで指定されている場合、このフィールドが表示されます。

CICSAPPL

リモート CICS サブシステムの DFHSIT マクロ定義の APPLID= パラメーターで指定される値。

CICSPORT

この ISC リンクで CICS からメッセージを受信するために IMS Connect が使用するポートの ID。CICSPORT は TCPIP 構成ステートメントで定義されます。

CICSNETID

リモート CICS サブシステムのネットワーク ID。

ISCUSER STATUS RECVCLNT SENDCLNT

この ISC リンクで 1 つ以上の ISC 並列セッション (ISCUSER) がアクティブな場合、コマンド出力には各 ISCUSER に関する情報が含まれます。情報タイプを識別する見出しの下に、複数の ISCUSER の情報が列形式で表示されます。各 ISCUSER に関する情報は、それぞれ独自の行に表示されます。

ISCUSER

ISC 並列セッションの名前。

STATUS

この ISCUSER の状況。

SENDCLNT

IMS Connect がこの ISCUSER のメッセージをリモート CICS サブシステムに送信するために使用するクライアント ID の名前。

RECVCLNT

この IMS Connect がこの ISCUSER のメッセージを受信する、リモート CICS サブシステムのクライアント ID の名前。

RMTICICS=

CICS Connect 構成メンバーの中の RMTICICS 構成ステートメントの ID パラメーターで定義されている、リモート CICS 接続の名前。

STATUS=

RMTICICS フィールドで識別されたリモート CICS サブシステムへの接続の状態。可能な値は、以下のとおりです。

ACTIVE

この IMS Connect には、RMTICICS フィールドに示されたリモート CICS サブシステムに、少なくとも 1 つのソケット接続があります。

NOT ACTIVE

この IMS Connect には、RMTICIS フィールドに示されたリモート CICS へのソケット接続はありません。

STOPPED

この IMS Connect とリモート CICS サブシステムとの間の通信は停止しています。接続が停止している間にリモート・サブシステムに送信されたすべてのメッセージは拒否され、エラー・メッセージが送信側に戻されます。

IP-ADDRESS

リモート CICS の IP アドレス。

PORT

この IMS Connect インスタンスが通信に使用するリモート CICS のポート番号。

HOSTNAME

CICS またはリモート IMS Connect のホスト名 (該当する場合)。

NUMSOC

現在オープンしているソケットの数。

SENDCLNT ISCNAME STATUS SECOND SENDPORT

IMS Connect のこのインスタンスに、このリモート CICS サブシステムとのアクティブ接続が 1 つ以上ある場合、コマンド出力には各接続に関する情報が含まれます。アクティブ接続の情報は、値を説明する見出しのすぐ下に表示されます。

フィールドの次のリストで、見出しについて説明します。

SENDCLNT

IMS Connect のこのインスタンスがリモート CICS への接続に使用したクライアント ID。

ISCNAME

IMS Connect 構成メンバー内の ISC 構成ステートメントの名前。

STATUS

このリモート IMS Connect 接続の状態。可能な値は、以下のとおりです。

CONN

この接続は、接続状態です。リモート CICS にメッセージを送信できます。

RECV

この接続は、受信状態です。リモート CICS からの応答の受信を待機しています。

SECOND

この接続が指定された状態にある秒数。

SENDPORT

IMS Connect のこのインスタンスがリモート CICS への接続に使用したポート。

RMTIMSCON=

このローカル IMS Connect インスタンスと IMS Connect のリモート・インスタンスとの間の接続を識別します。以下の追加出力フィールドが、RMTIMSCON 出力フィールドに示された接続に属する状況、属性、およびソケットを説明します。

STATUS

RMTIMSCON 出力フィールドに表示された接続の状態。接続は、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットが少なくとも 1 つあります。

NOT ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットがありません。

RETRY CONN

IMS Connect は、前回の接続の試行に失敗した後、リモート IMS Connect インスタンスへの再接続を自動的に試行しています。現在の再接続の試行が失敗に終わると、IMS Connect は 2 分ごとに再び再接続を試みます。

接続が RETRY CONN 状態の間、オープン・ソケットの数は変動します。再接続をアクティブに試行している間、IMS Connect はソケットをオープンします。IMS Connect は再接続の試行の 2 分間の間隔には、ソケットをクローズします。

STOPPED

STOPRMT コマンドがこの接続の通信を停止しました。この接続に送信されたすべてのメッセージは拒否され、送信側にエラーが返信されます。

IP-ADDRESS

この接続のリモート側にある IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

この接続のリモート側 IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

AUTOCONN

IMS Connect の始動時に、IMS Connect がこの接続に OTMA 通信用の送信ソケットを自動的に確立するかどうかを示します。可能な値は以下のとおりです。

Y IMS Connect の始動時に、この接続上で送信ソケットが自動的に確立されます。IMS Connect の始動時に確立されたソケット数が、RESVSOC 出力フィールドに表示されます。

N IMS Connect の始動時に、この接続で確立されるソケットはありません。OTMA メッセージについては、リモート IMS システムに配信するメッセージを OTMA から受信した時点で、送信ソケットが確立されます。

PERSISTENT

この接続上にあるソケットが永続的であるかどうかを示します。

Y この接続上に確立されたソケットは永続的です。

N この接続上に確立されたソケットは永続的ではありません。この接続でメッセージが送信された後、送信に使用されたソケットはクローズされます。

IDLETO

この接続上でソケットをオープンする時間間隔は、IMS Connect によってクローズされるまで、アイドル状態になります。

RESVSOC

この接続による使用に確保されている送信ソケットの数。

NUMSOC

この接続上で現在オープンしているソケットの数。

SENDCLNT

ランダムに生成された送信ソケット ID。IMS Connect のローカル・インスタンスでは、ID を使用して一意的にソケットを識別します。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、送信ソケット ID がクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

LCLPLKID

この接続を使用しているローカル MSC 物理リンクの ID。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。LCLPLKID 出力フィールドは、MSC 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

USERID

リモート IMS システムによるトランザクション許可のために、ローカル IMS システムによって提供されたユーザー ID。USERID 出力フィールドは、OTMA 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

STATUS

このソケット接続の現在の状態。ソケット接続は、以下のいずれかの状態になります。

CONN

このソケット接続により、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

RECV

このソケット接続は、リモート IMS Connect からの応答の受信を待機しています。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SECOND

この接続が、STATUS 出力フィールド見出しの下の同じ行に表示されている状態を継続している秒数。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SENDPORT

この接続に使用されるローカル・ポート。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

PORT=

以下の出力フィールドおよび状況が適用される 1 つ以上のポートを識別します。ポート番号は、IMS.PROCLIB データ・セットの IMS Connect 構成メンバー内で定義されます。

ポートのタイプは、ポート番号の末尾に付加されているポート・タイプ標識によって判別できます。IMS Connect では以下のポート・タイプ標識が使用されます。

タイプ標識なし

IMS TM OTMA クライアントおよび IMS 間 MSC または OTMA 通信に使用できるポートを示します。タイプ標識のないポートは、IMS Connect 構成メンバー内の TCPIP ステートメントの PORT キーワードまたは PORTID キーワードのいずれかで定義されます。

C ISC 通信用の IBM CICS Transaction Server for z/OS ポートを示します。このポートは、TCPIP および ISC ステートメントの CICSPOINT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。

CICS ポートは、ISC TCP/IP 経由で IMS TM にアクセスする CICS サブシステムが独占的に使用します。

- D** Distributed Relational Database Architecture™ (DRDA) ポートを示します。このポートは、DRDAPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。DRDA ポートは、Open Database Manager (ODBM) を介して IMS DB にアクセスするクライアント・アプリケーション・プログラムによって排他的に使用されます。
- S** SSLPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されている SSL ポートを示します。SSL ポートが使用されるのは、IMS Connect による SSL のサポートが有効になっている場合のみです。

以下の出力フィールドは、前述の PORT 出力フィールドで識別されているポートに適用されます。

STATUS

ポートの状態。ACTIVE または INACTIVE のいずれかです。

KEEPAV

z/OS TCP/IP レイヤーが接続を維持するためにパケットを送信するまでに、接続がアイドル状態のままになる時間の長さ。

NUMSOC

各ポートで使用されるソケット数。

TIMEOUT

クライアントからメッセージが受信されない場合にクライアント接続を終了するまでに、IMS Connect が待機する時間の長さ。

CLIENTID ISCNAM STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID USERID TRANCOD DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN

受信ソケット上のアクティブ・クライアントの ID および情報。

各アクティブ・クライアントの情報は、単一の行に表示されます。クライアントは、見出し行の下でクライアント・タイプ別にグループ化されます。見出しの行は、そのクライアント・タイプについて返される情報を識別します。

ISC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID ISCNAM STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

MSC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

OTMA および ODBM クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID USERID TRANCOD DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN。

次の例は、3 つの OTMA クライアントについて返される情報を示しています。

```
HWSC0001I  PORT=9999      STATUS=ACTIVE      KEEPAV=0  NUMSOC=4  EDIT=          TIMEOUT=0
HWSC0001I  CLIENTID USERID  TRANCODE  DATASTORE STATUS  SECOND  CLNTPORT IP-ADDRESS  APSB-TOKEN
HWSC0001I  CLIENT63 USRT003  apo112  IMSY      RECV WFCM    55      4118 192.0.2.0
HWSC0001I  CLIENT62 USRT002          IMS1      CONN          210     4115 192.0.2.0
HWSC0001I  CLIENT61 USRT001  apo112  IMSN      RECV          13      4112 192.0.2.0
HWSC0001I  TOTAL CLIENTS=3  RECV=2  CONN=1  XMIT=0  OTHER=0
```

ポートにアクティブ・クライアントがない場合、これらの出力フィールドは表示されません。代わりに、コマンド出力で、ポートを示す行の後に NO ACTIVE CLIENTS が表示されます。

アクティブ・クライアントについて返される情報には、以下の内容がアルファベット順で含まれます。

APSB-TOKEN

Open Database Manager (ODBM) APSB トークン。

CLIENTID

クライアントの名前。

別の IMS Connect インスタンスからの接続については、別の IMS Connect インスタンスがこの値を生成します。

CLNTPORT

クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する乱数。

DATASTORE

このクライアントに関連するデータ・ストア。

この接続のクライアントの IP アドレス。

IPV6 が使用可能にされている場合は、IP アドレスのフォーマットは、8 個の 16 進数をそれぞれコロンで区切ったものから成ります。IPV6 が使用できない場合、IPV4 の IP アドレス・フォーマットが使用されます。以下は、IPV6 形式で表示される IPV6 IP アドレスの例です。

```
FEDC:ABCD:2222:3333:FEDC:DB55:6666:3322
```

以下は、IPV6 形式で表示される IPV4 IP アドレスの例です。

```
0:0:0:0:FFFF:945:33FF
```

ISCNAME

IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの名前。

LCLPLKID

IMS Connect がクライアントからのメッセージを経路指定する先の、ローカル IMS システム内の MSC 物理リンク。このフィールドは、MSC 通信についてのみ表示されます。

SECOND

クライアントが指定された状況にあった秒数。

STATUS

クライアントのスレッドの状態。クライアントのスレッド状態は以下のいずれかの値が可能です。

RECV

クライアントからの入力を待機している受信状態にあります。

READ

部分的な読み取り状態にあります。IMS Connect はクライアントからのメッセージを読み取っていますが、メッセージの全体はまだ受信できていません。

CONN

IMS からの出力を待っています。

XMIT クライアントにデータを送信しています。

CONV

会話型状態にあります。

WFCM

クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待っています。

TRANCODE

クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。

USERID

IMS Connect に渡される USERID 名。

例 1: VIEWHWS コマンド

次の例で、*nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

IMS Connect のインスタンスに関する情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWHWS
```

このコマンドは以下のような出力を生成します。

```
HWSC0001I HWS ID=HWS1      RACF=N  PSWDMC=N
HWSC0001I UIDCACHE=Y      UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=2000     TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=7       WARNSOC=80%  WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=Y  STATUS=REGISTERED  MULTIRTP=  CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01  CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N      MAXCVRT=100  NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I ODBM AUTO CONNECTION=Y
HWSC0001I ODBM TIMEOUT=18000
HWSC0001I ODBM IMSPLEX MEMBER=IMSPLEX1  TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I DATASTORE=IMS1  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1  MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1  STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1  MULTIRTP=  CASCADE=Y
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01  CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I STATUS=ACTIVE
```

```

HWSC0001I MEMBER=IMSPLEX1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMBOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=N
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMCOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMDOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.0
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=LOCAL STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=0 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=9998S STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I PORT=1111D STATUS=ACTIVE KEEPAV=5 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=6000
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=2222D STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=100
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS

```

例 2: SUMMARY

次の例で、*nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

IMS Connect のインスタンスに関するサマリー情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWHWS SUMMARY
```

このコマンドでは、SUMMARY キーワードなしで VIEWHWS コマンドを発行した場合と同じ出力が生成されます (PORT= セクションは除く)。これによって、個々のクライアントは表示されず、ポートの合計数のみが表示されます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N PSWDMC=N
HWSC0001I UIDCACHE=Y UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=7 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=Y STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=Y
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I ODBM AUTO CONNECTION=Y
HWSC0001I ODBM TIMEOUT=18000
HWSC0001I ODBM IMSPLEX MEMBER=IMSPLEX1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=IMSPLEX1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE (IMSCON,ODBM)
HWSC0001I ODBM=ODBMBOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=N
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMCOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMDOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0

```

```

HWSC0001I  TOTAL CLIENTS=3  RECV=2  CONN=1  XMIT=0  OTHER=0
HWSC0001I  PORT=LOCAL    STATUS=ACTIVE    KEEPAV=0  NUMSOC=0  EDIT=      TIMEOUT=0
HWSC0001I  NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I  PORT=9998S    STATUS=NOT ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=1  EDIT=      TIMEOUT=0
HWSC0001I  PORT=1111D    STATUS=ACTIVE    KEEPAV=5  NUMSOC=1  EDIT=      TIMEOUT=6000
HWSC0001I  NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I  PORT=2222D    STATUS=ACTIVE    KEEPAV=0  NUMSOC=1  EDIT=      TIMEOUT=100
HWSC0001I  NO ACTIVE CLIENTS

```

例 3: MSC 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

IMS Connect インスタンス間の接続が MSC に使用される場合、そのコマンドが IMS Connect のどのインスタンスに対して実行されているかによって、コマンド出力は接続の異なる全体像を示します。

MSC 接続の場合、IMS Connect の 1 つのインスタンスは、MSC メッセージを IMS Connect の別のインスタンスへ送信するよう定義された接続を持ちます。IMS Connect の別のインスタンスは、応答メッセージを送信するよう定義された接続を持ちます。

次の出力例では、MSC トランザクションが IMS に入力されている IMS インストールで、IMS Connect のインスタンス HWS1 にコマンドが実行されました。HWS1 は、もう 1 つの IMS Connect インスタンスである HWS2 に接続されています。HWS1 は HWS2 を、RMTIMSCON 名の ICON2 でのみ認識しています。HWS1 には、MSC トランザクションを処理のために ICON2 に送信する 2 つのアクティブ・クライアント接続、MSCBB435 と MSC84CF7 があり、それらは RMTIMSCON 情報の SENDCLNT の下に示されています。HWS1 は MSC トランザクションへの応答メッセージをクライアント接続 MSCC73E0 および MSC0EBB0 で受信し、それらは PORT 情報の CLIENTID の下に示されています。

DATASTORE ステートメントが IMS Connect のこのインスタンスに定義されていますが、DATASTORE ステートメントは MSC 通信に使用されず、IMS Connect のインスタンスが OTMA と通信しない場合には省略することができます。

```

HWSC0001I  HWS ID=HWS1  RACF=N  PSWDMC=R
HWSC0001I  UIDCACHE=N  UIDAGE=2147483647
HWSC0001I  MAXSOC=2000  TIMEOUT=5000  TCP/IPQ=50
HWSC0001I  NUMSOC=5  WARNSOC=80%  WARNINC=5%
HWSC0001I  RRS=N  STATUS=REGISTERED  MULTIRTP=  CASCADE=N
HWSC0001I  VERSION=V14  IP-ADDRESS=192.0.2.0
HWSC0001I  SUPER MEMBER NAME=  CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I  ADAPTER=N  MAXCVRT=100  NUMCVRT=0
HWSC0001I  MAXLSSZ=32767
HWSC0001I  DATASTORE=IMS1  STATUS=DISCONNECT
HWSC0001I  GROUP=XCFGRP1  MEMBER=HWS1
HWSC0001I  TARGET MEMBER=IMS1  STATE=N/A
HWSC0001I  DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I  RACF APPL NAME=APPLID1  MULTIRTP=  CASCADE=
HWSC0001I  OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I  OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I  OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I  SUPER MEMBER NAME=  CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I  IMSPLEX=PLEX1  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  MEMBER=HWS1  TARGET=PLEX1
HWSC0001I  MSC=MSC12  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  RMTPLKID=MSC21
HWSC0001I  LCLIMSID=IMS1  RMTIMSID=IMS2
HWSC0001I  IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I  MEMBER=HWS1  TARGET MEMBER=PLEX1

```

```

HWSC0001I RMTIMSCON=ICON2
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I LINK PARTNERID STATUS SENDCLNT RECVCLNT
HWSC0001I LNK12T01 TA ACTIVE MSC84CF7 MSC0EBB0
HWSC0001I LNK12T02 TB ACTIVE MSCBB435 MSCC73E0
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I MSCC73E0 MSC12 RECV 6 1026 0:0:0:0:FFFF:7F00:1
HWSC0001I MSC0EBB0 MSC12 RECV 56 1025 0:0:0:0:FFFF:7F00:1
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=2 RECV=2 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=0
HWSC0001I RESVSOC=2 NUMSOC=2
HWSC0001I SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I MSCBB435 MSC12 CONN 6 1028
HWSC0001I MSC84CF7 MSC12 CONN 56 1027
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=2 RECV=0 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0

```

次の出力例は、前の出力例に対応しており、MSC トランザクションが処理されているリモート IMS インストールの、IMS Connect インスタンス HWS2 にコマンドを実行して生成されたものです。HWS2 は HWS1 を、RMTIMSCON 名の ICON1 でのみ認識しています。HWS2 は MSC トランザクションを 2 つのアクティブ・クライアント接続、MSCBB435 と MSC84CF7 で受信し、それらは PORT 情報の CLIENTID の下に示されています。これらの ID は、HWS1 の例で SENDCLNT の下に示された ID と同じです。MSC トランザクションの処理後、HWS2 は応答メッセージを RMTIMSCON 情報の SENDCLNT の下に示されている 2 つのアクティブ・クライアント接続で ICON1 に返送します。それらは MSCC73E0 と MSC0EBB0 で、HWS1 の例の CLIENTID の下に示された ID と同じです。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS2 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=5 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS2 STATUS=DISCONNECT
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS2
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS2 STATE=N/A
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=HWS2 TARGET=PLEX2
HWSC0001I MSC=MSC21 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC12
HWSC0001I LCLIMSID=IMS2 RMTIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX2
HWSC0001I MEMBER=HWS2 TARGET MEMBER=PLEX2
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON1
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I LINK PARTNERID STATUS SENDCLNT RECVCLNT
HWSC0001I LNK21T01 TA ACTIVE MSC0EBB0 MSC84CF7
HWSC0001I LNK21T02 TB ACTIVE MSCC73E0 MSCBB435

```



```

HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I PORT=5555 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I MSCBB435 MSC21 RECV 18 1028 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I MSC84CF7 MSC21 RECV 69 1027 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=2 RECV=2 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=0
HWSC0001I RESVSOC=2 NUMSOC=2
HWSC0001I SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I MSCC73E0 MSC21 CONN 18 1026
HWSC0001I MSC0EBB0 MSC21 CONN 69 1025
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=2 RECV=0 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0

```

例 4: OTMA 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

IMS Connect インスタンス間の接続が OTMA に使用される場合、そのコマンドが IMS Connect のどのインスタンスに対して実行されているかによって、コマンド出力は接続の異なる全体像を示します。

OTMA の場合、IMS Connect インスタンス間の接続は片方向接続になるため、接続は送信側の IMS Connect インスタンスによってのみ定義されます。接続は、リモート IMS Connect インスタンスでは定義されません。

次の出力例では、OTMA 出力メッセージを送信する IMS インストールで、IMS Connect インスタンス HWS1 にコマンドが実行されました。HWS1 は IMS Connect インスタンス HWS2 を受信するよう接続されていますが、HWS1 は HWS2 を例に示されている RMTIMSCON 名の ICON2B によってのみ認識しています。HWS1 は、RMTIMSCON 情報の SENDCLNT の下に示されているアクティブ・クライアント接続の OTM924FA で、OTMA 出力メッセージを処理のために ICON2 に送信します。SENDCLNT ID は、HWS2 との接続が確立される時点で、HWS1 によって自動生成されます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=2000 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=2 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=192.0.2.0
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I NO ACTIVE IMSPLEX
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I NO ACTIVE MSC
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON2B STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y

```

```

HWSC0001I IDLETO=3000
HWSC0001I RESVSOC=4 NUMSOC=1
HWSC0001I SENDCLNT USERID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I OTM924FA APOL1 CONN 5941 1026
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=1 RECV=0 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0

```

次の出力例は、前の出力例に対応しており、OTMA 出力メッセージを受信する IMS インストールの IMS Connect インスタンス、HWS2 に、コマンドを実行して生成されたものです。HWS2 は HWS1 を、PORT 情報の CLIENTID の下に示された、自動生成クライアント ID の OTM924FA によってのみ認識しています。CLIENTID の値は、ローカル IMS インストールの SENDCLNT の下に示された値と同じです。HWS2 は OTMA トランザクションを、クライアント ID OTM924FA で識別される接続上で受信します。OTMA メッセージを処理した後、リモート IMS システムはクライアント ID OTM924FA で識別される T パイプ保留キューに応答メッセージを入れ、後の非同期の取得に備えます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS2 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=5 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP2 MEMBER=HWS2
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS2 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I NO ACTIVE IMSPLEX
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I NO ACTIVE MSC
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=8888 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=7777 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=5555 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=2 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRancode DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I OTM924FA APOL1 APOL11 IMS2 RECV 11 1026 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=1 RECV=1 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON1B STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=0
HWSC0001I RESVSOC=4 NUMSOC=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS

```

例 5: IMS Connect と CICS の間の ISC 接続

次の出力例では、ISC リンク IMS1CIC4 が、RMTICICS 接続 CICS4 を経由してリモート CICS サブシステムにリンクされます。

現在、3 つの並列セッション (ISCUSER)、すなわち CIC4U01、CIC4U02、および CIC4U03 がアクティブです。各並列セッションの行には、状況、送信クライアント ID、および受信クライアント ID が示されています。

IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバーの CICSPORT キーワードの定義に従い、ポート 9876C で CICS から入力メッセージを受信します。CICSPORT 上の各並列セッションのそれぞれの受信ソケットは、IMS Connect によって生成される受信クライアント ID によって識別されます。

IMS Connect は、IMS Connect が自動選択するポートで、送信ソケットを通じて CICS に出力メッセージを送信します。各並列セッションのそれぞれの送信ソケットは、IMS Connect によって自動生成される送信クライアント ID によって識別されます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS1      RACF=N  PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N     UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50     TIMEOUT=5000  TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=7      WARNSOC=80%  WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N      STATUS=NOT ACTIVE  MULTIRTP=  CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=      CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N  MAXCVRT=100  NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=HWS1  TARGET=PLEX1
HWSC0001I ISC=IMS1CIC4  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I NODE=CIC4
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1      TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTICICS=CIC4
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0      PORT=7777
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I CICSAPPL=CIC4      CICSPORT=9876
HWSC0001I CICSNETID=IMSNET
HWSC0001I ISCUSER  STATUS      SENDCLNT  RECVCLNT
HWSC0001I CIC4U01  ACTIVE      ISCE7811  ISCF4816
HWSC0001I CIC4U02  ACTIVE      ISC3A819  ISC7121D
HWSC0001I CIC4U03  ACTIVE      ISCECD99  ISC5C09F
HWSC0001I TOTAL ISCUSERS=3  ACTIVE=3  OTHER=0
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I NO ACTIVE MSC
HWSC0001I PORT=9876C  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=4  EDIT=      TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID  ISCNAME  STATUS      SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS
HWSC0001I ISC5C09F  IMS1CIC4  RECV      4  1037  0:0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I ISC7121D  IMS1CIC4  RECV      13 1035  0:0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I ISCF4816  IMS1CIC4  RECV      200 1033  0:0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3  RECV=3  READ=0  CONN=0  XMIT=0  OTHER=0
HWSC0001I NO ACTIVE RMTIMSCON
HWSC0001I RMTICICS=CIC4      STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0      PORT=7777
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I SENDCLNT  ISCNAME  STATUS      SECOND  SENDPORT
HWSC0001I ISCECD99  IMS1CIC4  CONN      4  1036
HWSC0001I ISC3A819  IMS1CIC4  CONN      13 1034
HWSC0001I ISCE7811  IMS1CIC4  CONN      200 1032
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=3  RECV=0  CONN=3  XMIT=0  OTHER=0

```

例 6: 複数のクライアント・タイプ

次の出力例では、IMS Connect は、以下を含め、さまざまなクライアント・タイプをサポートします。

- DRDA ポート、および IMS 共通サービス層 (CSL) の Open Database Manager (ODBM) コンポーネントを介して IMS DB に接続するクライアント。
- DATASTORE 接続および IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) コンポーネントを介して IMS TM に接続するクライアント。

- ISC および CICS IPIC プロトコルを介して IMS TM に接続する CICS システム
- OTMA を介して別の IMS システムに接続する IMS システム
- MSC を介して別の IMS システムに接続する IMS システム

一部の出力フィールドは常に表示されますが、一方で、IMS Connect が特定のクライアント・タイプを明示的にサポートする場合にのみ表示される出力フィールドもあります。

```

HWSC0001I HWS ID=ICON1 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCP/IPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=18 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=ACTIVE MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=Y MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I ODBM AUTO CONNECTION=Y
HWSC0001I ODBM TIMEOUT=1200000
HWSC0001I ODBM IMSPLEX MEMBER= TARGET MEMBER=
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=ICON1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=N/A
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=THATWAY
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=ICON1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I ODBM=ODBM10D STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=ALI1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMSA STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=ALI2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MSC=MSC12 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC21
HWSC0001I LCLIMS=IMS1 RMTIMS=IMS2 GENIMSID=IMS AFFINTY=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=ICON1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=CONNECT2
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I LINK PARTNERID STATUS SENDCLNT RECVCLNT
HWSC0001I LINK12A AA ACTIVE MSC11111 MSC33333
HWSC0001I LINK12B BB ACTIVE MSC22222 MSC44444
HWSC0001I ISC=CICS STATUS=ACTIVE
HWSC0001I NODE=CICSTRM1
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTICICS=ICONNT1
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.1 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I CICSAPPL=CICSA1 CICSSPORT=6666
HWSC0001I CICSNETID=CICSNET
HWSC0001I NO ACTIVE ISCUSER
HWSC0001I ISC=LU6TCP2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I NODE=CICSTRM2
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTICICS=ICONNT2
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.2 PORT=9998



```

```

HWSC0001I      HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I      CICSAPPL=CICSA2  CICSSPORT=7777
HWSC0001I      CICSNETID=CICSNET
HWSC0001I      ISCUSER  STATUS  SENDCLNT  RECVCLNT
HWSC0001I      IMSUS01  ACTIVE  ISC11111  ISC33333
HWSC0001I      IMSUS02  ACTIVE  ISC22222  ISC44444
HWSC0001I      TOTAL  ISCUSERS=2  ACTIVE=2  OTHER=0
HWSC0001I      PORT=9996  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=4  EDIT=          TIMEOUT=0
HWSC0001I      CLIENTID  USERID  TRANCODE  DATASTORE  STATUS  SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS  APSB-TOKEN
HWSC0001I      CLIENT01  USRT003  ITOC04   IMS1       RECV      27 3464   0:0:0:0:FFFF:C000:204
HWSC0001I      CLIENTID  LCLPLKID  STATUS  SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS
HWSC0001I      MSC33333  MSC12     CONN     14 1739   0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I      MSC44444  MSC12     CONN     9 2684   0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I      TOTAL  CLIENTS=3  RECV=1  CONN=2  XMIT=0  OTHER=0
HWSC0001I      PORT=6666C  STATUS=NOT ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=1  EDIT=          TIMEOUT=0
HWSC0001I      NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I      PORT=7777C  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=3  EDIT=          TIMEOUT=0
HWSC0001I      CLIENTID  ISCNAME  STATUS  SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS
HWSC0001I      ISC33333  LU6TCP2  CONN     14 3579   0:0:0:0:FFFF:C000:202
HWSC0001I      ISC44444  LU6TCP2  CONN     9 2468   0:0:0:0:FFFF:C000:202
HWSC0001I      TOTAL  CLIENTS=3  RECV=1  CONN=2  XMIT=0  OTHER=0
HWSC0001I      PORT=LOCAL  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=0  EDIT=          TIMEOUT=0
HWSC0001I      NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I      PORT=8899S  STATUS=NOT ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=1  EDIT=          TIMEOUT=0
HWSC0001I      NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I      PORT=8888D  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=1  EDIT=          TIMEOUT=600000
HWSC0001I      NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I      RMTIMSCON=CONNECT2  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I      IP-ADDRESS=192.0.2.0  PORT=5555
HWSC0001I      HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I      AUTOCONN=N  PERSISTENT=Y
HWSC0001I      IDLETO=6000
HWSC0001I      RESVSOC=10  NUMSOC=2
HWSC0001I      SENDCLNT  LCLPLKID  STATUS  SECOND  SENDPORT
HWSC0001I      MSC11111  MSC12     CONN     100 1234
HWSC0001I      MSC22222  MSC12     CONN     89 5678
HWSC0001I      RMTIMSCON=CONNECT3  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I      IP-ADDRESS=192.0.2.4  PORT=9999
HWSC0001I      HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I      AUTOCONN=Y  PERSISTENT=Y
HWSC0001I      IDLETO=6000
HWSC0001I      RESVSOC=4  NUMSOC=4
HWSC0001I      SENDCLNT  USERID  STATUS  SECOND  SENDPORT
HWSC0001I      OTM11111  USER01  CONN     100 1111
HWSC0001I      OTM22222  USER01  CONN     89 2222
HWSC0001I      OTM33333  USER02  CONN     81 3333
HWSC0001I      OTM44444  USER03  RECV     23 4444
HWSC0001I      TOTAL  SENDCLNTS=4  RECV=1  CONN=3  XMIT=0  OTHER=0
HWSC0001I      RMTICIS=ICONNT1  STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I      IP-ADDRESS=192.0.2.1  PORT=9997
HWSC0001I      HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I      NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I      RMTICIS=ICONNT2  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I      IP-ADDRESS=192.0.2.2  PORT=9998
HWSC0001I      HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I      SENDCLNT  ISCNAME  STATUS  SECOND  SENDPORT
HWSC0001I      ISC11111  LU6TCP2  CONN     100 1111
HWSC0001I      ISC22222  LU6TCP2  CONN     89 2222
HWSC0001I      TOTAL  SENDCLNTS=2  RECV=0  CONN=2  XMIT=0  OTHER=0

```

関連資料:

-  z/OS: IPv6 アドレッシング
 -  QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)
- 608 ページの『IMS Connect QUERY MEMBER コマンド』

VIEWIA コマンド

VIEWIA コマンドは、IMS 別名と、関連する ODBM の状況を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『例』

構文

```
►► nnVIEWIA alias_name odbm_name ◀◀
```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWIA コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

alias_name

IMS 別名の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。

odbm_name

ODBM の名前を指定します。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。このパラメーターはオプションです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWIA コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWIA コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWIA ALL	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY ALIAS NAME(*)
VIEWIA <i>alias_name</i>	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>)
VIEWIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>)	QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>)

例

以下に示すのは VIEWIA コマンドの例です。

VIEWIA コマンドの例 1

コマンド入力:

```
nnVIEWIA IMSA
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM1OD STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM2OD STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON)
```

説明: この例は、IMS 別名 IMSA の状況と、関連する ODBM の状況を示しています。IMSA は ODBM1OD を介して経路指定される場合にアクティブですが、ODBM2OD を介して経路指定される場合はアクティブではありません。NOT ACTIVE(IMSCON) という状況は、別名が IMS Connect の STOPIA コマンドによって非アクティブ化されていることを示します。

VIEWIA コマンドの例 2

コマンド入力:

```
nnVIEWIA IMSA ODBM1OD
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM1OD STATUS=ACTIVE
```

説明: この例は、ODBM1OD という名前の ODBM に関連付けられた IMS 別名 IMSA の状況を示しています。IMSA は、ODBM1OD を介して経路指定される場合、アクティブです。

VIEWIA コマンドの例 3

コマンド入力:

```
nnVIEWIA IMSA ODBM*
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM1OD STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM2OD STATUS=ACTIVE
```

説明: この例は、名前が「ODBM」で始まる、ODBM に関連付けられた IMS 別名 IMSA の状況を示しています。IMSA は、ODBM1OD および ODBM2OD を介して経路指定される場合、アクティブです。

VIEWIA コマンドの例 4

コマンド入力:

```
nnVIEWIA I*
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I ALIAS=IMS1 ODBM=ODBM1OD STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM1OD STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON)
HWSC0001I ALIAS=IM1A ODBM=ODBM1OD STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS1 ODBM=ODBM2OD STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON,ODBM)
HWSC0001I ALIAS=IMSA ODBM=ODBM2OD STATUS=NOT ACTIVE(ODBM)
HWSC0001I ALIAS=IMS2 ODBM=ODBM2OD STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS3 ODBM=ODBM3OD STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON)
HWSC0001I ALIAS=IO3A ODBM=ODBM3OD STATUS=NOT ACTIVE(ODBM)
```

説明: この例は、名前が「I」で始まる IMS 別名の状況と、関連する ODBM の状況を示しています。NOT ACTIVE という状況は、IMS Connect STOPIA コマンド (IMSCON)、または UPDATE ODBM STOP(CONNECTION) ALIAS コマンド (ODBM)、またはそれら両方のコマンドによって、別名が非アクティブ化されていることを示します。

VIEWIA コマンドの例 5

コマンド入力:

```
nnVIEWIA IMS* ODBM2OD
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I  ALIAS=IMSA ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSB ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSC ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSD ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
```

説明: この例は、名前が「IMS」で始まり、ODBM2OD という名前の ODBM に関連付けられた IMS 別名の状況を示しています。

VIEWIA コマンドの例 6

コマンド入力:

```
nnVIEWIA IMS* ODBM*
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I  ALIAS=IMSA ODBM=ODBM1OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSB ODBM=ODBM1OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSA ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSB ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSC ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSD ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
```

説明: この例は、名前が「IMS」で始まり、かつ、名前が「ODBM」で始まる ODBM に関連付けられた IMS 別名の状況を示しています。

VIEWIA コマンドの例 7

コマンド入力:

```
nnVIEWIA IMS% ODBM%OD
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I  ALIAS=IMSA ODBM=ODBM1OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSB ODBM=ODBM2OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSA ODBM=ODBM3OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSB ODBM=ODBM4OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSC ODBM=ODBM5OD  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I  ALIAS=IMSD ODBM=ODBM6OD  STATUS=ACTIVE
```

説明: この例は、名前が「IMS」で開始する 4 文字で、かつ、名前が「ODBM」で始まり、「OD」で終わる 7 文字である ODBM に関連付けられた IMS 別名の状況を示しています。

関連資料:

VIEWIP コマンド

VIEWIP コマンドは、IMSpIex の現在のアクティビティーを表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 574 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 574 ページの『例』

構文

▶—*nn*VIEWIP—*imsplex_id*—————▶

キーワード

以下のキーワードは、VIEWIP コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

imsplex_id

情報を表示する IMSpIex の名前を指定します。IMSpIex 名を使用する場合、その名前は、HWSCFGxx 中の IMSpIex 構成ステートメントの ID パラメーターに一致していなければなりません。

使用上の注意

VIEWIP コマンドは、IMSpIex に関する現在の情報を表示します。IMSpIex について表示される情報は以下のとおりです。

IMSPLEX=

IMSpIex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx 中の IMSpIex 構成ステートメントの ID パラメーターに定義されている名前です。

STATUS=

IMSpIex の状態。これは、ACTIVE、NOT ACTIVE、または DISCONNECT のいずれかです。

IMSpIex が停止した場合は、IMS Connect には、SCI を介して IMSpIex の状況が通知されます。IMSpIex が再び稼働状態になり再始動されると、IMS Connect はその通知を受けて、自動的に IMSpIex に再接続します。

MEMBER=

メンバーの名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx の IMSplex 構成ステートメントの MEMBER パラメーターで定義されている名前です。

TARGET MEMBER=

IMS が接続されている IMSplex SCI のターゲット・メンバーの名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx の中の IMSplex 構成ステートメントの TMEMBER パラメーターで定義されている名前です。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWIP コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWIP コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWIP ALL	QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY IMSPLEX NAME(*) SHOW(ALL)
VIEWIP <i>IMSplex_name</i>	QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>IMSplex_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY IMSPLEX NAME(<i>imsplexName</i>) SHOW(ALL)


例

TMEMBER 名が IMSPLEX1 である IMSplex に関する情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWIP IMSPLEX1
```

ここで *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

関連資料:

 [QUERY IMSCON TYPE\(IMSPLEX\) コマンド \(コマンド\)](#)
606 ページの『IMS Connect QUERY IMSPLEX コマンド』

VIEWMSC コマンド

IMS Connect WTOR コマンド VIEWMSC は、IMS Connect がサポートする MSC リンクの属性および状況を表示するために使用します。

VIEWMSC コマンドは、z/OS MODIFY コマンド QUERY MSCと同じ情報を表示します。

IMS Connect に対して定義されている MSC 物理リンク上の MSC 論理リンクによって現在使用中のソケットに関する情報を表示するには、IMS Connect WTOR コマンド VIEWRMT または IMS Connect z/OS MODIFY コマンド QUERY RMTIMSCON を使用します。

サブセクション:

- 575 ページの『構文』

- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『出力フィールド』
- 578 ページの『例』

構文

```
▶▶ nnVIEWMSC lclplk_id
      └── ALL ───┘
```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWMSC コマンドに有効です。

ALL

IMS Connect のこのインスタンスに対して定義されているすべての MSC 物理リンクに関する情報を表示します。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

lclplk_id

MSC 物理リンク定義の ID。これは、HWSCFGxx PROCLIB メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。

使用上の注意

VIEWMSC コマンドは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで定義された MSC 物理リンクの情報を表示するために使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWMSC コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWMSC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWMSC ALL	QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY MSC NAME(*)
VIEWMSC <i>msc_id</i>	QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>msc_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY MSC NAME(<i>msc_id</i>)

出力フィールド

単一値のみを返す出力フィールドは、FIELD_LABEL=VALUE 形式 (例えば、MSC=MSC12) で表示されます。

複数の値を返す出力フィールド（例えば、MSC 物理リンク上の複数の論理リンクなど）は、列形式で表示されます。この場合、フィールド・ラベルは列見出しであり、値はその列の見出しの下に個別の行に表示されます。例えば、次のようになります。

HWSC0001I	LINK	PARTNERID	STATUS	SENDCLNT	RECVCLNT
HWSC0001I	LINK12A	AA	ACTIVE	MSC11111	MSC33333
HWSC0001I	LINK12B	BB	ACTIVE	MSC22222	MSC44444

以下のリストは、VIEWMSC コマンド出力フィールドを示しています。

MSC=

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されている、表示された MSC 物理リンクの名前。以下の追加出力フィールドが、MSC= 出力フィールドに示された物理リンクに属する状況、属性、および論理リンクを説明します。

STATUS

MSC 出力フィールドに示される MSC 物理リンクの状態。物理リンクは、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用可能です。

NOT ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用不能です。

RMTPLKID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターに定義されている、リモート IMS サイトでの MSC 物理リンクの ID。

LCLIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで IMS Connect に定義されている、ローカル MSC が使用可能な IMS システムの ID。この LCLIMS 値は、ローカル IMS システムが IMSplex の SCI で登録している IMS ID と一致する必要があります。SCI で登録されている IMS ID は、ローカル IMSplex で QUERY IMSPLEX コマンドを実行することによって判別することができます。

出力に 2 番目の IMS ID が示される場合、それは XRF 結合のうち 1 つの IMS システムを示しています。

RMTIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターに定義されている、リモート MSC が使用可能な IMS システムの名前。

GENIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されている、MSC 用の TCP/IP 汎用リソースに使用されている汎用 IMS ID。

AFFINITY

MSC 論理リンクが現在 TCP/IP 汎用リソースのアフィニティーを持っている、IMS システムの名前。

IMSPLEX

IMS Connect と、ローカルの MSC が使用可能な IMS システムとの間の通信を管理する、IMSpIex の名前。この名前は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターで指定されている IMSpIex 名です。

この IMSPLEX 名は、IMS Connect と IMSpIex の間の通信を管理している SCI インスタンスの CSLSIxxx PROCLIB メンバーの IMSPLEX(NAME=) ステートメントで指定された名前と一致する必要があります。

MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX サブステートメントの MEMBER パラメーターに定義されている、この IMS Connect が IMSpIex で登録されている名前。

この MEMBER 名は、ローカル IMS システムでこの MSC 物理リンクを定義する MSPLINK マクロ内の LCLICON パラメーターでも指定されている必要があります。

TARGET MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。

RMTIMSCON

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されている、この MSC 物理リンクによって使用される IMS Connect 接続の名前。

IP-ADDRESS

リモート IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

リモート IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

LINK この物理リンクに割り当てられる MSC 論理リンクの ID。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されます。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

PARTNERID

この論理リンク用のリモート・パートナーの ID。これは、この論理リンクを定義する MSLINK マクロ内の PARTNER パラメーターで指定されている ID です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

STATUS

この論理リンクの現在の状態。論理リンクは、以下の状態をもつことができます。

ACTIVE

この論理リンクにより、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

SENDCLNT

この接続でオープンしている送信ソケットを識別するために、IMS Connect のこのインスタンスによって生成される送信ソケット ID。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、SENDCLNT ID はクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

RECVCLNT

この論理リンク用の受信ソケットを識別するクライアント ID。クライアント ID は、リモート IMS Connect インスタンスによって生成されます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

例

次の例では、VIEWMSC コマンドは、MSC 物理リンク MSC13 に関する情報を戻します。

nnVIEWMSC MSC13

```
HWSC0001I MSC=MSC13 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC31
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1 RMTIMSID=IMS3
HWSC0001I GENIMSID= AFFINITY=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=ICONNT2
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=9992
HWSC0001I HOSTNAME=
HWSC0001I NO ACTIVE LINK
```

次の例では、VIEWMSC コマンドは、MSC 物理リンク MSC12 に関する情報を戻します。

nnVIEWMSC MSC12

```
HWSC0001I MSC=MSC12 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC21
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1 ,IMS3 RMTIMSID=IMS3
HWSC0001I GENIMSID=IMS AFFINITY=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=ICONNT1
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.2 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I NO ACTIVE LINK
```

関連資料:

635 ページの『IMS Connect QUERY MSC コマンド』

 QUERY IMSCON TYPE(MSC) コマンド (コマンド)

VIEWPORT コマンド

VIEWPORT コマンドは、ポートの状況、クライアント、およびアクティビティを表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 580 ページの『使用上の注意』
- 580 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 580 ページの『出力フィールド』
- 583 ページの『VIEWPORT コマンドの例 1』

構文

```
➔ nnVIEWPORT — portid —➔
                   |
                   |— ALL —|
                   |— LOCAL —|
```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWPORT コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

portid 情報を表示させるポートを指定します。指定される *portid* は、TCPIP 構成ステートメントの PORTID、PORT、または SSLPORT サブステートメントに定義されているポート番号、または IMS Connect 構成 PROCLIB メンバーの ODACCESS 構成ステートメントにある DRDAPORT サブステートメントに定義されているポート番号と一致しなければなりません。そのポートについての情報のみが表示されます。

ALL IMS Connect 構成 PROCLIB メンバーの TCPIP および ODACCESS 構成ステートメントに定義されているすべてのポートに関する情報を表示します。

LOCAL

IMS TM Resource Adapter を介してローカル・ポート通信を使用しているすべてのクライアントに関する情報を表示します。

使用上の注意

VIEWPORT コマンドは、1 つのポートまたはすべてのポートに対する、現在の状況、クライアント、およびアクティビティーを表示するために使用します。

*nn*VIEWPORT ALL によって表示される情報は、VIEWHWS コマンドによってすべてのポートに対して返される情報と同じです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWPORT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWPORT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWPORT ALL	QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY PORT NAME(*) SHOW(ALL)
VIEWPORT <i>port_id</i>	QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>portid</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY PORT NAME(<i>port_id</i>) SHOW(ALL)
VIEWPORT LOCAL	QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(LOCAL) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY PORT NAME(LOCAL) SHOW(ALL)

出力フィールド

以下のリストは、VIEWPORT コマンド出力フィールドを示しています。

PORT=

以下の出力フィールドおよび状況が適用される 1 つ以上のポートを識別します。ポート番号は、IMS.PROCLIB データ・セットの IMS Connect 構成メンバー内で定義されます。

ポートのタイプは、ポート番号の末尾に付加されているポート・タイプ標識によって判別できます。IMS Connect では以下のポート・タイプ標識が使用されます。

タイプ標識なし

IMS TM OTMA クライアントおよび IMS 間 MSC または OTMA 通信に使用できるポートを示します。タイプ標識のないポートは、IMS Connect 構成メンバー内の TCPIP ステートメントの PORT キーワードまたは PORTID キーワードのいずれかで定義されます。

- C** ISC 通信用の IBM CICS Transaction Server for z/OS ポートを示します。このポートは、TCPIP および ISC ステートメントの CICSSPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。CICS ポートは、ISC TCP/IP 経由で IMS TM にアクセスする CICS サブシステムが独占的に使用します。
- D** 分散リレーショナル・データベース体系 (DRDA) ポートを示します。このポートは、DRDAPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。DRDA ポートは、Open Database Manager (ODBM) を介して IMS DB にアクセスするクライアント・アプリケーション・プログラムによって排他的に使用されます。
- S** SSLPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されている SSL ポートを示します。SSL ポートが使用されるのは、IMS Connect による SSL のサポートが有効になっている場合のみです。

以下の出力フィールドは、前述の PORT 出力フィールドで識別されているポートに適用されます。

STATUS

ポートの状態。ACTIVE または INACTIVE のいずれかです。

KEEPAV

z/OS TCP/IP レイヤーが接続を維持するためにパケットを送信するまでに、接続がアイドル状態のままになる時間の長さ。

NUMSOC

各ポートで使用されるソケット数。

TIMEOUT

クライアントからメッセージが受信されない場合にクライアント接続を終了するまでに、IMS Connect が待機する時間の長さ。

CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN

受信ソケット上のアクティブ・クライアントの ID および情報。

各アクティブ・クライアントの情報は、単一の行に表示されます。クライアントは、見出し行の下でクライアント・タイプ別にグループ化されます。見出しの行は、そのクライアント・タイプについて返される情報を識別します。

ISC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID
ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

MSC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID
LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

OTMA および ODBM クライアントの場合、次の情報が表示され
ます。CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS
SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN。

次の例は、3 つの OTMA クライアントについて返される情報を示
しています。

```
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.0
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
```

ポートにアクティブ・クライアントがない場合、これらの出力フ
ィールドは表示されません。代わりに、コマンド出力で、ポートを示
す行の後に NO ACTIVE CLIENTS が表示されます。

アクティブ・クライアントについて返される情報には、以下の内容
がアルファベット順で含まれます。

APSB-TOKEN

Open Database Manager (ODBM) APSB トークン。

CLIENTID

クライアントの名前。

別の IMS Connect インスタンスからの接続については、別
の IMS Connect インスタンスがこの値を生成します。

CLNTPORT

クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する
乱数。

DATASTORE

このクライアントに関連するデータ・ストア。

この接続のクライアントの IP アドレス。

IPV6 が使用可能にされている場合は、IP アドレスのフォ
ーマットは、8 個の 16 進数をそれぞれコロンで区切ったも
のから成ります。IPV6 が使用できない場合、IPV4 の IP
アドレス・フォーマットが使用されます。以下は、IPV6 形
式で表示される IPV6 IP アドレスの例です。

FEDC:ABCD:2222:3333:FEDC:DB55:6666:3322

以下は、IPV6 形式で表示される IPV4 IP アドレスの例で
す。

0:0:0:0:FFFF:945:33FF

ISCNAME

IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの名
前。

LCLPLKID

IMS Connect がクライアントからのメッセージを経路指定する先の、ローカル IMS システム内の MSC 物理リンク。このフィールドは、MSC 通信についてのみ表示されます。

SECOND

クライアントが指定された状況にあった秒数。

STATUS

クライアントのスレッドの状態。クライアントのスレッド状態は以下のいずれかの値が可能です。

RECV

クライアントからの入力を待機している受信状態にあります。

READ

部分的な読み取り状態にあります。IMS Connect はクライアントからのメッセージを読み取っていますが、メッセージの全体はまだ受信できていません。

CONN

IMS からの出力を待っています。

XMIT クライアントにデータを送信しています。

CONV

会話型状態にあります。

WFCM

クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待っています。

TRANCODE

クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。

USERID

IMS Connect に渡される USERID 名。

VIEWPORT コマンドの例 1

次の例で *nn* は、z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

単一ポート 9999 についての情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWPORT 9999
```

IMS Connect に対して定義されているすべてのポートに関する情報を表示するには、以下のように入力します。

```
nnVIEWPORT ALL
```

コマンド *nnVIEWPORT ALL* は、以下のような出力を生成します。

```
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.1
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.2
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=LOCAL STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=0 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=9998S STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
```

```

HWSC0001I  PORT=1111D  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=5 NUMSOC=1 EDIT=      TIMEOUT=6000
HWSC0001I  NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I  PORT=2222D  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT=      TIMEOUT=100
HWSC0001I  NO ACTIVE CLIENTS

```

例 2: MSC 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

MSC 用に使用される IMS Connect から IMS Connect への接続では、VIEWPORT および QUERY PORT コマンドによって表示される情報は、IMS Connect から IMS Connect への接続の受信側のみに関連しています。IMS Connect から IMS Connect への接続の送信側に関する情報を表示するには、VIEWRMT または QUERY RMTIMSCON コマンドを使用してください。

次の出力例では、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドがローカル IMS Connect 上で実行されました。コマンド出力は、IMS Connect が MSC メッセージを受信するポート 9999 の情報を表示しています。ポート上のクライアント接続、MSCC73E0 および MSC0EBB0 が、CLIENTID の下に表示されています。LCLPLKID のラベルは、このポートが MSC TCP/IP 通信に使用されていることを示します。

```

HWSC0001I  PORT=9999    STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0 NUMSOC=3    EDIT=      TIMEOUT=0
HWSC0001I  CLIENTID LCLPLKID STATUS      SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I  MSCC73E0 MSC12    RECV          6 1026    2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I  MSC0EBB0 MSC12    RECV          56 1025   2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I  TOTAL CLIENTS=2  RECV=2  READ=0  CONN=0  XMIT=0  OTHER=0

```

例 3: OTMA 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

IMS Connect インスタンス間のソケット接続が OTMA メッセージに使用されている場合、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドの出力は、受信側の IMS Connect インスタンスで実行されたときだけ、関連するポート情報を示します。

送信側の IMS Connect インスタンスでは、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドは IMS Connect から IMS Connect への接続に関連するポート情報を表示しません。ただし VIEWRMT または QUERY RMTIMSCON コマンドは、接続に関連する送信側クライアント ID とともに、受信側 IMS Connect のリスニング・ポートを表示します。リスニング・ポートおよび送信側クライアント ID は、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドによって受信側インストールで表示情報と一致します。

受信側 IMS Connect インスタンスでは、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドが、受信側 IMS Connect が聴取しているポートおよび接続に関連する送信側クライアント ID を表示します。

次の例は、受信側 IMS Connect インスタンス上の VIEWPORT または QUERY PORT コマンドからの出力を示したものです。受信側 IMS Connect が IMS Connect から IMS Connect への接続に使用するポートは、PORT=5555 によって識別されます。送信側 IMS Connect からの接続は、CLIENTID の下に表示される自動生成のクライアント ID、OTM924FA によって識別されます。この CLIENTID の値は、送信側 IMS インストールで SENDCLNT の下に表示される値と同じです。CLNTPORT は、送信側 IMS Connect が接続上でメッセージを送信するために使用するポートです。

```

HWSC0001I PORT=5555 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=2 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I OTM924FA APOL1 APOL11 IMS2 RECV 11 1026 2001:DB8:0:0:0:0:0/32
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=1 RECV=1 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0

```

例 4: CICS への ISC TCP/IP 接続

コマンド入力:

```
nnVIEWPORT 7777
```

コマンド出力:

```

HWSC0001I PORT=7777C STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I ISC33333 LU6TCP2 CONN 14 3579 2001:DB8:0:0:0:0:0/32
HWSC0001I ISC44444 LU6TCP2 CONN 9 2468 2001:DB8:0:0:0:0:0/32
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=1 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0

```

関連資料:

- ➡ z/OS: IPv6 アドレッシング
 - ➡ QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド (コマンド)
- 640 ページの『IMS Connect QUERY PORT コマンド』

VIEWRMT コマンド

VIEWRMT コマンドは、IMS Connect のローカル・インスタンス内で、IMS Connect のリモート・インスタンスへのすべての接続に関する情報を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 586 ページの『使用上の注意』
- 586 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 589 ページの『例』

構文

```

▶▶ nnVIEWRMT rmt_imscon_id
                └── ALL ───┘

```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWRMT コマンドに有効です。

ALL

IMS Connect のこのインスタンスに対して定義されているすべてのリモート IMS Connect 接続に関する情報を表示します。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字です。

rmtimscon_id

IMS Connect のリモート・インスタンスへの接続の ID。ここで指定される値は、ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されている RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定された値と一致していなければなりません。

使用上の注意

VIEWRMT コマンドは、IMS Connect のリモート・インスタンスとの接続の属性および状況に関する情報、および接続上で現在オープンされているソケットに関する情報を表示するために使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWRMT コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWRMT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWRMT ALL	QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY RMTIMSCON NAME(*)
VIEWRMT <i>rmtimscon_name</i>	QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY RMTIMSCON NAME(<i>rmtimscon_name</i>)

出力フィールド

単一値のみを返す出力フィールドは、FIELD_LABEL=VALUE 形式 (例えば、RMTIMSCON=ICON1) で表示されます。

複数の値を返す出力フィールド (例えば、接続上の複数のソケットの出力フィールドなど) は、列形式で表示されます。この場合、フィールド・ラベルは列見出しであり、値はその列の見出しの下に個別の行に表示されます。例えば、次のようになります。

```
HWSC0001I      SENDCLNT USERID  STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I      OTM11111 USER01  CONN      100 1111
HWSC0001I      OTM22222 USER01  CONN      89 2222
```

以下のリストは、VIEWRMT コマンド出力フィールドを示しています。

RMTIMSCON=

このローカル IMS Connect インスタンスと IMS Connect のリモート・インスタンスとの間の接続を識別します。以下の追加出力フィールドが、RMTIMSCON 出力フィールドに示された接続に属する状況、属性、およびソケットを説明します。

STATUS

RMTIMSCON 出力フィールドに表示された接続の状態。接続は、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットが少なくとも 1 つあります。

NOT ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットがありません。

RETRY CONN

IMS Connect は、前回の接続の試行に失敗した後、リモート IMSConnect インスタンスへの再接続を自動的に試行しています。現在の再接続の試行が失敗に終わると、IMS Connect は 2 分ごとに再び再接続を試みます。

接続が RETRY CONN 状態の間、オープン・ソケットの数は変動します。再接続をアクティブに試行している間、IMS Connect はソケットをオープンします。IMS Connect は再接続の試行の 2 分間の間隔には、ソケットをクローズします。

STOPPED

STOPRMT コマンドがこの接続の通信を停止しました。この接続に送信されたすべてのメッセージは拒否され、送信側にエラーが返信されます。

IP-ADDRESS

この接続のリモート側にある IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

この接続のリモート側 IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

AUTOCONN

IMS Connect の始動時に、IMS Connect がこの接続に OTMA 通信用の送信ソケットを自動的に確立するかどうかを示します。可能な値は以下のとおりです。

Y IMS Connect の始動時に、この接続上で送信ソケットが自動的に確立されます。IMS Connect の始動時に確立されたソケット数が、RESVSOC 出力フィールドに表示されます。

N IMS Connect の始動時に、この接続で確立されるソケットはありません。OTMA メッセージについては、リモート IMS システムに配信するメッセージを OTMA から受信した時点で、送信ソケットが確立されます。

PERSISTENT

この接続上にあるソケットが永続的であるかどうかを示します。

Y この接続上に確立されたソケットは永続的です。

N この接続上に確立されたソケットは永続的ではありません。この接続でメッセージが送信された後、送信に使用されたソケットはクローズされます。

IDLETO

この接続上でソケットをオープンする時間間隔は、IMS Connect によってクローズされるまで、アイドル状態になります。

RESVSOC

この接続による使用に確保されている送信ソケットの数。

NUMSOC

この接続上で現在オープンしているソケットの数。

SENDCLNT

ランダムに生成された送信ソケット ID。IMS Connect のローカル・インスタンスでは、ID を使用して一意的にソケットを識別します。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、送信ソケット ID がクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

LCLPLKID

この接続を使用しているローカル MSC 物理リンクの ID。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。LCLPLKID 出力フィールドは、MSC 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

USERID

リモート IMS システムによるトランザクション許可のために、ローカル IMS システムによって提供されたユーザー ID。USERID 出力フィールドは、OTMA 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

STATUS

このソケット接続の現在の状態。ソケット接続は、以下のいずれかの状態になります。

CONN

このソケット接続により、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

RECV

このソケット接続は、リモート IMS Connect からの応答の受信を待機しています。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SECOND

この接続が、STATUS 出力フィールド見出しの下の同じ行に表示されている状態を継続している秒数。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SENDPORT

この接続に使用されるローカル・ポート。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

例

次の例は、リモート IMS Connect インスタンスへのすべての接続に関する情報を返す VIEWRMT コマンドを示しています。

```
nnVIEWRMT ALL
```

次例は、VIEWRMT コマンドによって生成される出力を示しています。

```
HWSC0001I   RMTIMSCON=CONNECT2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I   IP-ADDRESS=127.0.0.1      PORT=5555
HWSC0001I   HOSTNAME=ICON2.EXAMPLE.COM
HWSC0001I   AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I   IDLETO=6000
HWSC0001I   RESVSOC=10      NUMSOC=2
HWSC0001I   SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I   MSC11111 MSC12   CONN      100 1234
HWSC0001I   MSC22222 MSC12   CONN      89 5678
HWSC0001I   RMTIMSCON=CONNECT3 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I   IP-ADDRESS=192.0.2.0      PORT=9999
HWSC0001I   HOSTNAME=ICON3.EXAMPLE.COM
HWSC0001I   AUTOCONN=Y PERSISTENT=Y
HWSC0001I   IDLETO=6000
HWSC0001I   RESVSOC=4      NUMSOC=4
HWSC0001I   SENDCLNT USERID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I   OTM11111 USER01  CONN      100 1111
HWSC0001I   OTM22222 USER01  CONN      89 2222
HWSC0001I   OTM33333 USER02  CONN      81 3333
HWSC0001I   OTM44444 USER03  RECV      23 4444
```

関連資料:

535 ページの『STOPSCLN コマンド』

VIEWUOR コマンド

VIEWUOR コマンドは、IMS Connect 内の特定のリカバリー単位 ID (URID) またはすべての URID の現在の状況を表示するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド』
- 『出力フィールド』

構文

```
▶▶ nnVIEWUOR urid  
ALL ▶▶
```

キーワード

以下のキーワードは、VIEWUOR コマンドに有効です。

nn z/OS システム・コンソールの未解決の表示の 2 桁の数字。

urid | ALL

表示するリカバリー単位 ID またはすべてのリカバリー単位 ID の状況を指定します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド

以下の表には、VIEWUOR コマンドと同様の機能を実行する、IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect z/OS コマンドがリストされています。

VIEWUOR コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の IMS Connect z/OS コマンド
VIEWUOR ALL	QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY UOR NAME(*) SHOW(ALL)
VIEWUOR <i>uor_id</i>	QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	QUERY UOR NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL)

出力フィールド

表示される情報は以下のとおりです。

URID 特定のリカバリー単位 ID の 16 バイトの文字ストリングを示します。

STATE

UOR の状態。UOR の状態は以下のいずれかの値です。

- IN_RESET: UOR は開始中であり、まだどのリソースも変更していません。
- IN_FLIGHT: UOR はリソースにアクセスできる状態にあり、リソースを変更する可能性があります、変更はコミットされていません。
- IN_STATE_CHECK: UOR はコミットを出しており、Resource Manager の STATE_CHECK 出口ルーチンがリソースが正しい状態にあるかどうかを確認するのを待っています。
- IN_PREPARE: 適切な状態にある UOR がコミットを出し、z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) は PREPARE 出口ルーチン呼び出します。
- IN_DOUBT: RRS は、Resource Manager が、UOR をコミットまたはバックアウトのいずれにより解決するかを指示するのを待っています。
- IN_COMMIT: 以下のいずれかのアクションが発生しました。
 - PREPARE 出口ルーチンが YES と応答した。
 - DSRM または SDSRM が、IN_DOUBT UOR をコミットするよう RRS に指示した。
 - インストール・システムが、RRS パネルを使用して IN_DOUBT UOR をコミットした。
- IN_BACKOUT: 以下のいずれかのアクションが発生しました。
 - 1 つ以上の PREPARE 出口ルーチンが NO と応答した。
 - アプリケーションがバックアウトを出した。
 - DSRM または SDSRM が、IN_DOUBT UOR をバックアウトするよう RRS に指示した。
 - インストール・システムが、RRS パネルを使用して IN_DOUBT UOR をバックアウトした。
 - 2 フェーズ・コミット・プロトコルのフェーズ 2 の前に、システム、アプリケーション、RRS、または Resource Manager が失敗した。
- IN_END: リソースは更新されました。
- IN_ONLY_AGENT: 1 つの Resource Manager のみが UOR に対するインタレストを表明しました。
- IN_COMPLETION: リソースは更新され、RRS は UOR の処理を完了しました。
- IN_FORGET: 分散処理において、UOR は完了しましたが、RRS は、SDSRM が UOR のログ・レコードの処理に必要な時間を示すのを待っています。
- FORGOTTEN: UOR は完了し、RRS はその UOR のログ・レコードを削除しました。

XID (X/Open ID) X/Open アーキテクチャーで使用される分散トランザクションを識別します。XID は以下の 4 つの部分から成っています。

- FMID: 4 バイトの固定フォーマットの ID
- GTRID: 4 バイトの固定 GTRID 長
- BQUAL: 4 バイトの固定 BQUAL 長

- XID: 128 バイトの XID

TOTAL UOR

どの状態にあるかに関係なく、すべての UOR の総数。

INDOUBT

IN_DOUBT 状態にある UOR の総数。

INBACKOUT

IN_BACKOUT 状態にある UOR の総数。


INCOMMIT

IN_COMMIT 状態にある UOR の総数。

OTHER

その他の状態にある UOR の総数。

関連資料:

 [QUERY IMSCON TYPE\(UOR\) コマンド \(コマンド\)](#)
651 ページの『IMS Connect QUERY UOR コマンド』

第 24 章 IMS Connect z/OS コマンド

IMS Connect z/OS コマンドは、z/OS (MVS) インターフェースを介して使用したり、発行したりすることができます。z/OS 変更インターフェースを使用すると、IMS Connect *jobname* のみを使用して、IMS Connect にコマンドを送ることができます。

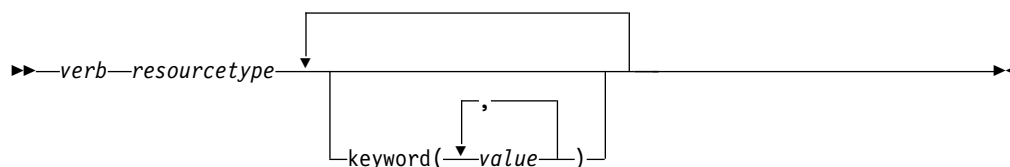
関連資料:

📄 同等の IMS Connect WTOR、z/OS、およびタイプ 2 コマンド (コマンド)

IMS Connect z/OS コマンド構文

IMS Connect は、*verb-resourcetype* 構文をサポートしています。

verb-resourcetype 構文は、*verb*、リソース・タイプ、およびゼロ個以上の、キーワードと値の対 (値は括弧で囲みます) で構成されます。



verb アクションを表すコマンド *verb*。 *verb* の例には、QUERY、SHUTDOWN、UPDATE、および DELETE があります。

resourcetype

verb により操作されるリソースのタイプ。リソースの例としては、DATASTORE、PORT、MEMBER、および UOR があります。

keyword(value)

コマンドに適用される属性、フィルター、またはその他の修飾子を表わす、1 つ以上のオプションのキーワードと値。例えば、NAME() は特定のリソースを識別し、SET() はオプションを設定します。

IMS Connect z/OS の呼び出し

一部の IMS Connect コマンドは、z/OS MODIFY コマンド・インターフェースを介して発行できます。以下の構文図は、変更インターフェースを介してコマンドの入力を行うための一般的な構文を示しています。



F z/OS 変更コマンド。

jobname

コマンドが送られる先のアドレス・スペースのジョブ名。

コマンド

実行されるコマンド。

IMS Connect のワイルドカード文字サポート

IMS Connect のコマンドのパラメーターには、パターン・マッチングのためのワイルドカード文字をサポートするものがあります。このようなパラメーターでは、以下のワイルドカード・パラメーターを使用することができます。

* ゼロまたはいくつかの文字とマッチングします。

% 1 文字だけをマッチングします。

以下に、ワイルドカード文字の使用例をいくつか示します。

CO*

「CO」で始まる任意の長さの任意のストリングとマッチングします。例:
CO、COO、COOP。

%%S

「S」で終わる 3 文字のストリングとマッチングします。例えば、IMS、CQS
などです。

IMS Connect DELETE CLIENT コマンド

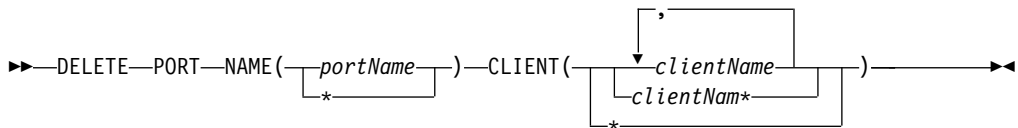
IMS Connect DELETE CLIENT コマンドは、クライアント・リソース・タイプを削除します。

このコマンドは、STOPCLNT コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 595 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 595 ページの『例』

構文



キーワード

DELETE PORT は、指定されたポート名の中のクライアントを削除するために使用されます。DELETE または DEL は、指定されたりソース (この場合は PORT) のクライアントを削除するために使用されます。PORT は IMS Connect が管理するリソースです。

NAME()

クライアントを削除したいポートの名前を指定します。すべてのポートを対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

CLIENT ()

削除したいクライアントの名前、ワイルドカード、またはクライアント名のリストを指定します。すべてのクライアントを対象としてこのコマンドを処理するには、CLIENT(*) を指定できます。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、DELETE CLIENT コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

DELETE CLIENT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
DELETE PORT NAME(<i>portName</i>) CLIENT(<i>clientName</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) NAME(<i>client_name</i>) PORT(<i>portid</i>) STOP(COMM)	STOPCLNT <i>portid</i> <i>clientid</i>

例

コマンド入力:

```
F HWS01,DEL PORT NAME(9999) CLIENT(CLIENT01)
```

コマンド出力:

```
HWSS0761I TCP/IP COMMUNICATION WITH CLIENT=9999_CLIENT01 STOPPED; M=SCCM
```

説明: ポート番号 9999 中のクライアント CLIENT01 が削除されます。

関連資料:

522 ページの『STOPCLNT コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(CLIENT) コマンド (コマンド)

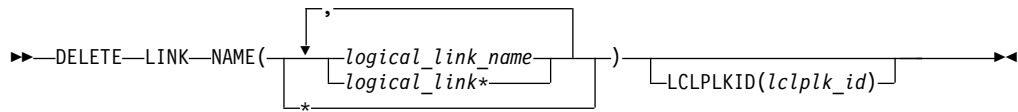
IMS Connect DELETE LINK コマンド

z/OS MODIFY コマンド DELETE LINK は、IMS Connect 内の MSC 物理リンクに割り当てられた MSC 論理リンク上の通信を停止するために使用します。

サブセクション:

- 596 ページの『構文』
- 596 ページの『キーワード』
- 596 ページの『使用法』
- 597 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 597 ページの『例』

構文



キーワード

コマンド DELETED LINK は、MSC 論理リンクを停止するために使用します。DELETED または DEL は、指定されたリソースを削除または終了するために使用します。LINK は、IMS Connect によって管理される MSC 論理リンクを表します。

NAME()

停止される MSC 論理リンクの名前。単一のリンク名、ワイルドカード名、またはコンマで区切ったリンク名のリストを指定できます。すべての MSC 論理リンクを対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。DELETED LINK コマンドが複数の物理リンクを対象にして実行された場合、指定された論理リンク名を使用するすべての論理リンクが停止されます。

logical_link_name

停止される MSC 論理リンク。

LCLPLKID

このコマンドの処理を、指定された LCLPLKID を持つ MSC 物理リンクに制限します。このキーワードでオプションです。

LCLPLKID 値を指定しない場合、DELETED LINK コマンドは、IMS Connect に対して定義されているすべての MSC 物理リンク上のすべての一致する論理リンク名を停止します。

lclplk_id

MSC 物理リンクの ID。これは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。

使用法

DELETED LINK コマンドは、MSC 論理リンクは既に終了しているが、そのリンクに関連付けられた IMS Connect リソースが正常にクリーンアップされなかった場合に、MSC 論理リンクに関連付けられているリソースをクリーンアップするために使用します。

推奨事項: MSC 論理リンクを終了するには、IMS コマンド /PSTOP を使用してください。DELETED LINK コマンドは、既に終了している MSC 論理リンクに関連付けられた IMS Connect リソースが正常にクリーンアップされていない場合にのみ使用してください。

DELETED LINK コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- MSC 論理リンク上の通信を停止します
- 論理リンク上の通信が停止されたことを IMS に通知します

- 論理リンクに関連付けられた制御ブロックを削除し、関連のストレージを解放します
- メッセージ HWSF3310I を発行します

別の物理リンク上で同じ論理リンク名を使用している論理リンクを誤って停止するのを避けるには、ターゲット物理リンクの名前を *lclplk_id* 値として指定することで、コマンドの処理を特定の物理リンクに制限します。

DELETE LINK コマンドが複数の物理リンクに対して発行されるか、あるいは *lclplk_id* 値が省略されている場合、IMS Connect は、DELETE LINK コマンドで指定された *logical_link_name* に一致するすべての MSC 論理リンク上の通信を停止します。

IMS Connect インスタンスに対して定義された MSC 物理リンクに割り当てられている MSC 論理リンクに関する情報を表示するには、以下のいずれかのコマンドを使用します。

- IMS Connect の QUERY IMSCON TYPE(LINK) IMS タイプ 2 コマンド
- IMS Connect の QUERY IMSCON TYPE(MSC) IMS タイプ 2 コマンド
- IMS Connect の VIEWMSC WTOR コマンド
- IMS Connect の QUERY MSC z/OS 変更コマンド

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、DELETE LINK コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
DELETE LINK NAME(<i>linkName</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>link_name</i>) STOP(COMM)	STOPLINK <i>linkName</i>
DELETE LINK NAME(<i>linkname</i>) LCLPLKID(<i>lclPlkid</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(LINK) NAME(<i>linkname</i>) MSC(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)	STOPLINK <i>linkname</i> <i>lclPlkid</i>

例

コマンド入力:

```
F ICON1,DELETE LINK NAME(MSCLINK1)
```

コマンド出力:

```
HWSF3310I LOGICAL LINK MSCLINK1 TERMINATED; MSC=MSC12, M=modc
```

関連資料:

527 ページの『STOPLINK コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(LINK) コマンド (コマンド)

IMS Connect DELETE SENDCLNT コマンド

IMS Connect が、OTMA メッセージをリモート IMS システムに送信するために使用されている場合、ローカル IMS Connect インスタンス上で DELETE SENDCLNT コマンドを使用して、リモート IMS Connect インスタンスへの接続の送信ソケットを終了します。DELETE SENDCLNT は、WTOR コマンド STOPSCLN と同様の機能を実行する z/OS MODIFY コマンドです。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用法』
- 599 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 599 ページの『例』

構文

```
▶▶—DELETE—RMTIMSCON—NAME(-rmtimscon_id-)—SENDCLNT(client_id | cli*)—▶▶
```

キーワード

DELETE キーワードは、指定した IMS Connect リソースを終了するために使用します。SENDCLNT キーワードは、OTMA メッセージ用に使用される IMS Connect 相互間の接続の 1 つ以上の特定の送信ソケットを表し、これは IMS Connect が管理するリソースです。コマンド DELETE SENDCLNT は、IMS Connect が管理する 1 つ以上の指定された OTMA 送信ソケットを終了するために使用します。

NAME(*rmtimscon_id*)

OTMA 送信ソケットがオープンされている IMS Connect 間の接続の ID。 *rmtimscon_id* に指定される値は、MVS MODIFY コマンドで指定された IMS Connect インスタンスの RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定された値と一致していなければなりません。

SENDCLNT(*sendclnt_id*)

終了する送信ソケットの ID。単一の送信ソケット ID、ワイルドカード文字 (アスタリスク *) を含む送信ソケット ID の先行文字、またはコンマで区切った送信ソケット ID のリストを指定できます。* を単独で指定して、指定された IMS Connect 間の接続のすべての送信ソケットを終了することもできます。

使用法

DELETE SENDCLNT コマンドは、メッセージをリモート IMS システムに送信するために使用される IMS Connect 相互間の接続の送信ソケットを終了するために使用します。

終了する必要がある送信ソケットの ID を確認するには、以下のいずれかの IMS Connect コマンドを使用します。

- IMS タイプ 2 コマンド・フォーマットで、QUERY IMSCON TYPE(SENDCLNT)
- WTOR コマンド・フォーマットで、VIEWRMT
- z/OS MODIFY コマンド・フォーマットで、QUERY RMTIMSCON

MSC リンクの場合、DELETE SENDCLNT コマンドは、MSC 論理リンクの終了時に送信クライアントが適切にクリーンアップされない場合にのみ使用します。それ以外の場合、DELETE SENDCLNT コマンドを発行すると、MSC リンクが切断されます。通常的环境下では、IMS から IMS コマンドの /PSTOP LINK を発行することで MSC リンクを停止します。このコマンドは、IMS Connect 内の関連する送受信ソケットを自動的に終了します。

MSC メッセージ用に使用される送信ソケットを終了する代替方式は、IMS Connect WTOR コマンド STOPLINK または IMS Connect z/OS MODIFY コマンド DELETE LINK を使用する方法です。これらのコマンドは、MSC リンクで使用される送信ソケットおよび受信ソケットを終了します。これと同等の IMS タイプ 2 コマンドは、UPDATE IMSCON TYPE(LINK) です。

DELETE SENDCLNT コマンドが発行されたときに送信ソケット接続が RECV 状態である場合、IMS Connect は OTMA に NAK を発行した後、送信ソケット接続を終了します。OTMA は、メッセージを送達不能キュー HWS\$DLQ に転送します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、DELETE SENDCLNT コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

DELETE SENDCLNT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
DELETE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconname</i>) SENDCLNT(<i>clientid</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) NAME(<i>sendclient_name</i>) RMTIMSCON(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	STOPSCLN <i>rmtimscon sendclient</i>

例

次の例では、DELETE SENDCLNT コマンドは、CONNECT2 上の送信 OTM11111 ソケット接続を終了します。

```
F ICON1,DELETE RMTIMSCON NAME(CONNECT2) SENDCLNT(OTM11111)
```

コマンド出力:

```
HWST3525I THE SEND CLIENT OTM11111 TERMINATED FOR REMOTE IMS CONNECT CONNECT2; M=TCVC
```

関連資料:

535 ページの『STOPSCLN コマンド』

585 ページの『VIEWRMT コマンド』

646 ページの『IMS Connect QUERY RMTIMSCON コマンド』

➡ UPDATE IMSCON TYPE(SENDCLNT) コマンド (コマンド)

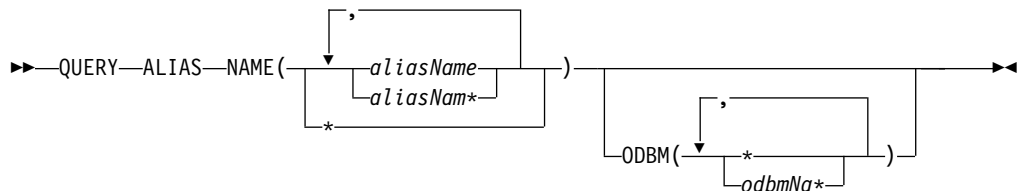
IMS Connect QUERY ALIAS コマンド

QUERY ALIAS コマンドは、要求された IMS 別名を表示するために使用します。QUERY ALIAS コマンドは、VIEWIA コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 601 ページの『例』

構文



キーワード

QUERY または QRY は、指定されたリソースの状況または属性を表示するために使用します。ALIAS は、IMS Connect が管理する、指定されたリソースです。コマンド QUERY ALIAS は、要求された別名の現在の状況を表示するために使用されます。

NAME ()

表示される別名の名前を指定します。単一の別名、ワイルドカード名、または、コンマで区切った別名のリストを指定できます。すべての別名を対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

aliasName

表示する別名を指定します。

ODBM ()

指定した別名を関連付ける ODBM 名を指定します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY ALIAS コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

QUERY ALIAS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY ALIAS NAME(*)	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIA ALL
QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>)	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIA <i>alias_name</i>
QUERY ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>)	QUERY IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>)	VIEWIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>

例

コマンド入力:

```
F HWS1,QRY ALIAS NAME(ALI1)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I ALIAS=IMS1 ODBM=ODBM1OD STATUS=ACTIVE
```

説明: ODBM ODBM1OD に関連付けられた別名 IMS1 はアクティブです。

関連資料:

570 ページの『VIEWIA コマンド』

 [QUERY IMSCON TYPE\(ALIAS\) コマンド \(コマンド\)](#)

IMS Connect QUERY DATASTORE コマンド

QUERY DATASTORE コマンドは、データ・ストア状況を表示するために使用します。

QUERY または QRY は、指定されたリソースの状況または属性を照会するために使用されます。例えば、指定するリソースは DATASTORE です。これは、IMS Connect が管理するリソースです。

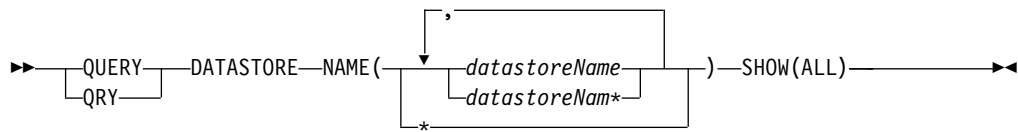
データ・ストア・リソース・タイプは、IMS OTMA にアクセスしている宛先を表します。データ・ストア・リソース・タイプの場合は、IMS Connect は IMS OTMA を介して IMS との通信を行うことができます。データ・ストア名を指定した場合は、そのデータ・ストアについての情報のみが表示または更新されます。指定する名前は、HWSCFGxx 構成メンバー内の DATASTORE 構成ステートメントの ID パラメーターに一致していなければなりません。QUERY DATASTORE は、VIEWWDS コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 602 ページの『構文』
- 602 ページの『キーワード』
- 602 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 602 ページの『出力フィールド』

- 606 ページの『例』

構文



キーワード

NAME(*datastoreName*)

表示するデータ・ストア名を指定します。単一のデータ・ストア名、ワイルドカード名、または、コンマで区切ったデータ・ストア名のリストを指定できます。すべてのデータ・ストアを対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*)を指定できます。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。これはデフォルトです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY DATASTORE コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

QUERY DATASTORE コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY DATASTORE NAME(*) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWDS ALL
QUERY DATASTORE NAME(<i>datastore_name</i>)	QUERY IMSCON TYPE(DATASTORE) NAME(<i>datastore_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWDS <i>datastore_name</i>

出力フィールド

以下のリストは、QUERY DATASTORE コマンド出力フィールドを示しています。

DATASTORE=

データ・ストアの名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の DATASTORE 構成ステートメントの ID サブステートメントに定義されている名前か、No active Datastores です。データ・ストアは IMS システムであり、より正確に言えば、IMS システムへの接続です。

STATUS

データ・ストアの状態。これは、ACTIVE、NOT ACTIVE、または DISCONNECT のいずれかです。

データ・ストアが停止した場合は、IMS Connect にデータ・ストアの状況が (IMS OTMA から z/OS システム間カップリング・ファシリティー (XCF) を介して) 通知されます。データ・ストアがバックアップされ、再始動されると、IMS Connect は通知を受け、そのデータ・ストアに自動的に再接続します。

GROUP

IMS Connect および IMS OTMA が属しているグループの XCF グループ名。

MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS Connect メンバー名。

TARGET MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS OTMA メンバー名。

STATE

OTMA サーバーの状況を示します。STATE の値は、以下のいずれかです。

AVAIL

OTMA サーバーが使用可能であることを示します。

WARN

OTMA サーバーに、警告状態の 1 つ以上のリソースがあることを示します。

SEVERE

OTMA サーバーに、何らかの深刻なリソース問題があることを示します。

N/A OTMA で、このデータ・ストアの状況が報告されなかったことを示します。

DEFAULT REROUTE NAME

クライアント転送要求で指定された代替宛先の名前。

RACF APPL NAME

パスチケットおよびデータ・ストア・アクセス制御用の RACF APPL 名。

MULTIRTP

現在表示されている DATASTORE 接続に関する DATASTORE ステートメント内の MULTIRTP パラメーターの現在の指定を示します。可能な値は以下のとおりです。

Y この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする TPIPE が求められます。

N この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする TPIPE が求められます。

この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求には、MULTIRTP 指定が含まれていません。この

DATASTORE 接続の TPIPE が複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートするかどうかは、OTMA が決定します。

- b** DATASTORE ステートメントに MULTIRTP 値が指定されていません。複数の RESUME TPIPE 要求に関する TPIPE のサポートは、HWS ステートメントの MULTIRTP 指定により、または OTMA クライアント記述子で決定されます。

CASCADE

IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する、データ・ストア定義内の指定を表示します。

この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の DATASTORE= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、またはタイプ 2 コマンド CREATE IMSCON TYPE(DATASTORE) または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) に SET(CASCADE()) キーワードを指定して設定されました。

ここに表示される値は、CASCADE に関する IMS Connect のデフォルト値をオーバーライドします。

以下のいずれかの値が表示されます。

- blank** 値がブランクの場合、このデータ・ストアにはカスケード・トランザクション・サポートが指定されなかったことを示します。このデータ・ストアのサポートは、IMS Connect のデフォルト指定によって決定されます。
- Y** IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートすることを示します。
- N** デフォルトでは、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートしないことを示します。

OTMA ACEE AGING VALUE

IMS Connect DATASTORE 構成ステートメントで指定された現行の OTMA アクセサー環境エレメント (ACEE) エージング値。

OTMA ACEE エージング値は、IMS Connect の ACEE のキャッシュに入れられているセキュリティー定義を OTMA がリフレッシュする頻度を決めます。

OTMA ACK TIMEOUT VALUE

IMS Connect 構成メンバー内の OTMA ACK タイムアウト値。

OTMA MAX INPUT MESSAGE

IMS Connect 構成ファイル内の OTMA 入力メッセージあふれ制御値。

SUPER MEMBER NAME

このデータ・ストアが所属する OTMA スーパー・メンバーの名前。

IMSPLEX=

IMSpIex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx の IMSpIex ステートメントの TMEMBER パラメーターで定義されている名前です。

STATUS

IMSpIex の状態。

MEMBER

IMS Connect メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで MEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

TARGET

IMS Connect ターゲット・メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで TMEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

ODBM=

IMSpIex 内にある Open Database Manager (ODBM) のインスタンスを示します。

STATUS

IMS Connect のこのインスタンスが、ODBM の指定されたインスタンスに登録されているかどうかを示します。STATUS の値は、以下のいずれかです。

- REGISTERED - IMS Connect は、ODBM の指定されたインスタンスに登録されています。
- NOT ACTIVE - ODBM の指定されたインスタンスは使用できません。

ODBMRRS

ODBM での RRS 指定を示します。IMS Connect が ODBM に登録されている場合、ODBM によって、IMS Connect にその RRS 設定と別名が提供されます。

ALIAS

前述の ODBM 出力フィールドに示されている ODBM のインスタンスに対して定義されている IMS データ・ストアの別名。

STATUS

前述の別名に関連する IMS システムがアクティブであるか、非アクティブであるかを示します。status の値は、次のいずれかです。

- ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できます。
- NOT ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できません。

例

QUERY DATASTORE コマンドの例 1

コマンド入力:

```
F HWS1, QRY DATASTORE NAME(*) SHOW(ALL)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP=Y CASCADE=Y
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON)
HWSC0001I ODBM=ODBMBOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=N
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMCOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMDOD STATUS=NOT ACTIVE
```

説明: IMS Connect に定義されたすべてのデータ・ストアの状況が表示されます。

QUERY DATASTORE コマンドの例 2

コマンド入力:

```
F HWS1, QRY DATASTORE NAME(IMS1) SHOW(ALL)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP=Y CASCADE=Y
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=
```

説明: 単一の IMS Connect データ・ストアである IMS1 の状況が表示されます。

関連資料:

537 ページの『VIEWDS コマンド』

 [QUERY IMSCON TYPE\(DATASTORE\) コマンド \(コマンド\)](#)

IMS Connect QUERY IMSPLEX コマンド

QUERY IMSPLEX コマンドは、IMSplex 状況を表示するために使用します。

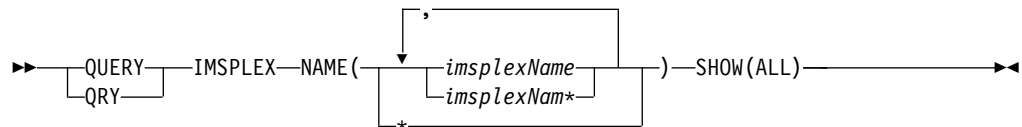
QUERY または QRY は、指定されたリソースの状況または属性を照会するために使用されます。例えば、指定するリソースは IMSplex です。これは、IMS Connect が管理するリソースです。

IMSplex リソース・タイプは、IMS Connect の接続先となる SCI の名前を指します。IMSplex 名を指定した場合は、その IMSplex についての情報のみが表示または更新されます。指定する名前は、HWSCFGxx 構成ファイル内の IMSPLEX 構成ステートメントの TMEMBER パラメーターに一致していなければなりません。QUERY IMSPLEX は、VIEWIP コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 『出力フィールド』
- 608 ページの『例』

構文



キーワード

NAME(*imsplexName*)

表示する IMSplex 名を指定します。単一の IMSplex 名、ワイルドカード名、または、コンマで区切った IMSplex 名のリストを指定できます。すべての IMSplex を対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。これはデフォルトです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY IMSPLEX コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

QUERY IMSPLEX コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY IMSPLEX NAME(*) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIP ALL
QUERY IMSPLEX NAME(<i>imsplexName</i>) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>IMSplex_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWIP <i>IMSplex_name</i>

出力フィールド

以下のリストは、QUERY IMSPLEX コマンド出力フィールドを示しています。

IMSPLEX=

IMSpIex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx の IMSpIex ステートメントの TMEMBER パラメーターで定義されている名前です。

STATUS

IMSpIex の状態。

MEMBER

IMS Connect メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで MEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

TARGET

IMS Connect ターゲット・メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで TMEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

例

QUERY IMSPLEX コマンドの例 1

コマンド入力:

```
F HWS1, QRY IMSPLEX NAME(PLEX1) SHOW(ALL)
```


コマンド出力:

```
HWSC0001I    IMSPLEX=PLEX1    STATUS=ACTIVE
HWSC0001I    MEMBER=HWS1     TARGET=PLEX1
```

説明: IMS Connect IMSpIex、PLEX1 の状況が表示されます。

関連資料:

573 ページの『VIEWIP コマンド』

 [QUERY IMSCON TYPE\(IMSPLEX\) コマンド \(コマンド\)](#)

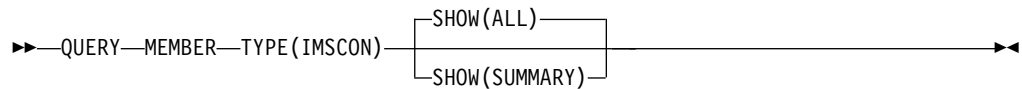
IMS Connect QUERY MEMBER コマンド

このコマンドは、IMS Connect の状況を表示するために使用します。QUERY MEMBER は、VIEWHWS コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 609 ページの『構文』
- 609 ページの『キーワード』
- 609 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 609 ページの『出力フィールド』
- 627 ページの『例 1: QUERY MEMBER』

構文



キーワード

QUERY または QRY は、指定されたリソースの状況または属性を照会するために使用します。MEMBER は、IMS Connect が管理する指定されたリソースです。QUERY MEMBER コマンドは、IMS Connect の状況を表示するために使用されます。

TYPE()

アクションのターゲット・タイプを指定します。

IMSCON

ターゲット・タイプが IMS Connect であることを指定します。

SHOW()

戻されるターゲット・タイプを指定します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。これはデフォルトです。

SUMMARY

詳細なクライアント情報を除外します。

使用上の注意

QUERY MEMBER という名前のコマンドは 2 つあります。QUERY MEMBER TYPE(IMS) はタイプ 2 コマンドで、IMS メンバーに関する情報を TSO SPOC または OM API から取得します。QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) は z/OS MODIFY コマンドで、IMS Connect メンバーに関する情報を取得します。詳しくは、QUERY MEMBER コマンド (コマンド)を参照してください。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY MEMBER コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

QUERY MEMBER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWHWS

出力フィールド

以下のリストは、QUERY MEMBER コマンド出力フィールドを示しています。

HWS ID=

IMS Connect の名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の HWS 構成ステートメントの ID サブステートメントで定義されている名前です。

RACF HWS ID= フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスについて、RACF サポートが現在使用可能であるかどうかを示します。

UIDCACHE

HWS ID= フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスについて、RACF ユーザー ID キャッシュが使用可能であるかどうかを示します。

UIDAGE

IMS Connect によってリフレッシュされる前に RACF ユーザー ID が使用される長さ (秒数)。

PSWDMC

HWS ID= フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスについて、大/小文字混合パスワードのサポートが現在使用可能であるかどうかを示します。『R』は、IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートが、RACF の大/小文字混合パスワード指定によって決まることを示しています。

MAXSOC

IMS Connect のこのインスタンスが開くことができるソケットの最大合計数。作成できる物理接続の最大数は、MAXSOC= の値からポート数を引いた数になります。これは、IMS Connect によって、listen 用にポートごとに 1 つのソケットが使用されるからです。

TCPIPQ

割り当てられたソケットがない状態で IMS Connect が維持できる、キュー内の要求の最大数。

TIMEOUT

IMS からクライアントのための応答を待つか、またはクライアントによるソケット接続オープン後にクライアントからのデータを待って、IMS Connect がクライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまで待機する時間間隔。

NUMSOC

すべての定義済みポート、RMTIMSCON 接続、および RMTICIS 接続上の全アクティブ・ソケットの合計。

WARNSOC

ソケットの最大限度数 (TCPIP 構成ステートメント内の MAXSOC= 値) のパーセンテージとして表される警告レベルを示す 1 から 50 までの 10 進数。ソケット数がこの警告レベルに達すると、IMS Connect は HWSS0772W メッセージを発行します。

WARNINC

警告の増分パーセンテージを示す 1 から 50 までの 10 進数。警告レベル (TCPIP 構成ステートメント内の WARNSOC 値) に達すると、ソケット数が警告レベルの増分パーセンテージだけ増加するたびに、IMS Connect は HWSS0772W メッセージを再発行します。

RRS HWS 構成ファイル内で、RRS が Y または N のどちらかに設定されているかを示します。

STATUS

RRS の状態。 RRS の状態は以下のいずれかが可能です。

- ACTIVE: RRS を伴う IMS Connect の再始動が完了しています。
- NOT ACTIVE - IMS Connect は RRS に登録されていません。
- REGISTERED - IMS Connect は RRS に登録されています。

MULTIRTP

HWS ステートメント内の MULTIRTP パラメーターの現在の指定を示します。可能な値は以下のとおりです。

- Y** MULTIRTP=Y は、この IMS Connect インスタンスからのすべての DATASTORE 接続のデフォルト値です。この値が DATASTORE ステートメントの MULTIRTP パラメーターによってオーバーライドされない限り、この IMS Connect インスタンスから行われる DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする TPIPE が求められます。
- N** MULTIRTP=N は、この IMS Connect インスタンスからのすべての DATASTORE 接続のデフォルト値です。この値が DATASTORE ステートメントの MULTIRTP パラメーターによってオーバーライドされない限り、この IMS Connect インスタンスから行われる DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする TPIPE が求められます。
- b** HWS ステートメントに MULTIRTP 値が指定されていません。複数の RESUME TPIPE 要求に関する TPIPE のサポートは、DATASTORE ステートメントの MULTIRTP 指定により、または OTMA クライアント記述子で決定されます。

CASCADE

IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する IMS Connect のデフォルト指定を表示します。この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の HWS= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、タイプ 2 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(CASCADE()) コマンドを使用して設定されました。

ここに表示される値は、個々のデータ・ストア接続の定義でオーバーライドされる可能性があります。

以下のいずれかの値が表示されます。

- Y** IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメ

ージ (LPAR) 上にある場合に、IMS Connect では、個々の定義に異なる CASCADE 値を含んでいないすべてのデータ・ストア接続に対してカスケード・トランザクション・サポートが有効になることを示します。

N デフォルトでは、個々の定義に異なる CASCADE 値を含んでいないデータ・ストア接続に対してカスケード・トランザクション・サポートが無効であることを示します。

VERSION

IMS Connect のこのインスタンスのバージョン。

IP-ADDRESS

IMS Connect のこのインスタンスの IP アドレス。クライアント・アプリケーション・プログラムは、この IP アドレスを使用して、IMS Connect に接続します。

SUPER MEMBER NAME

1 から 4 文字の OTMA スーパー・メンバー名。

ADAPTER

XML アダプター・サポートが使用可能であるか使用不可であることを示します。

MAXCVRT

IMS Connect のこのインスタンスが同時にロードできる XML コンバーターの最大数。IMS Connect がロードできる実際のコンバーター数は、コンバーターのサイズと IMS Connect 領域サイズによって異なります。

NUMCVRT

IMS Connect のこのインスタンスでロードされている XML コンバーターの現行数。

MAXLSSSZ

XML コンバーターに渡される言語構成セグメントの最大サイズを表示します。

ODBM AUTO CONNECTION

ID フィールドに示されている IMS Connect のインスタンスが、IMS Connect がメンバーになっている IMSplex にある ODBM のインスタンスに自動的に接続するように構成されているかどうかを示します。

ODBM TIMEOUT

Open Database アーキテクチャーを使用するクライアント・アプリケーション・プログラムを切断するまでに IMS Connect が待機する時間間隔。

ODBM IMSPLEX

IMSplex 内の ODBM との通信に使用される IMS Connect および SCI の名前。

MEMBER

SCI が、IMS Connect と ODBM 間の通信管理に使用する IMS Connect の名前。

TARGET MEMBER

IMS Connect と ODBM 間の通信を管理する SCI の名前。

DATASTORE=

データ・ストアの名前。これは、HWSCFGxx 構成メンバー内の DATASTORE 構成ステートメントの ID サブステートメントに定義されている名前か、No active Datastores です。データ・ストアは IMS システムであり、より正確に言えば、IMS システムへの接続です。

STATUS

データ・ストアの状態。これは、ACTIVE、NOT ACTIVE、または DISCONNECT のいずれかです。

データ・ストアが停止した場合は、IMS Connect にデータ・ストアの状況が (IMS OTMA から z/OS システム間カップリング・ファシリティー (XCF) を介して) 通知されます。データ・ストアがバックアップされ、再始動されると、IMS Connect は通知を受け、そのデータ・ストアに自動的に再接続します。

GROUP

IMS Connect および IMS OTMA が属しているグループの XCF グループ名。

MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS Connect メンバー名。

TARGET MEMBER

リストされている XCF グループ内の IMS OTMA メンバー名。

STATE

OTMA サーバーの状況を示します。STATE の値は、以下のいずれかです。

AVAIL

OTMA サーバーが使用可能であることを示します。

WARN

OTMA サーバーに、警告状態の 1 つ以上のリソースがあることを示します。

SEVERE

OTMA サーバーに、何らかの深刻なリソース問題があることを示します。

N/A OTMA で、このデータ・ストアの状況が報告されなかったことを示します。

DEFAULT REROUTE NAME

クライアント転送要求で指定された代替宛先の名前。

RACF APPL NAME

パスチケットおよびデータ・ストア・アクセス制御用の RACF APPL 名。

MULTIRTP

現在表示されている DATASTORE 接続に関する DATASTORE ス

ステートメント内の MULTIRTP パラメーターの現在の指定を示します。可能な値は以下のとおりです。

- Y** この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートする TPIPE が求められます。
- N** この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求では、単一のアクティブな RESUME TPIPE 要求のみをサポートする TPIPE が求められます。
- #** この DATASTORE 接続のクライアント・ビッド要求には、MULTIRTP 指定が含まれていません。この DATASTORE 接続の TPIPE が複数のアクティブな RESUME TPIPE 要求をサポートするかどうかは、OTMA が決定します。
- b** DATASTORE ステートメントに MULTIRTP 値が指定されていません。複数の RESUME TPIPE 要求に関する TPIPE のサポートは、HWS ステートメントの MULTIRTP 指定により、または OTMA クライアント記述子で決定されます。

CASCADE

IMS Connect とは異なる LPAR 上にある IMS TM データ・ストアへのグローバル RRS トランザクションのカスケードのサポートに関する、データ・ストア定義内の指定を表示します。

この指定は、IMS PROCLIB データ・セットの HWSCFGxx メンバー内の DATASTORE= ステートメントに CASCADE= パラメーターを指定するか、またはタイプ 2 コマンド CREATE IMSCON TYPE(DATASTORE) または UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE) に SET(CASCADE()) キーワードを指定して設定されました。

ここに表示される値は、CASCADE に関する IMS Connect のデフォルト値をオーバーライドします。

以下のいずれかの値が表示されます。

- blank** 値がブランクの場合、このデータ・ストアにはカスケード・トランザクション・サポートが指定されなかったことを示します。このデータ・ストアのサポートは、IMS Connect のデフォルト指定によって決定されます。
- Y** IMS Connect と IMS データ・ストアが異なる z/OS イメージ (LPAR) 上にある場合に、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートすることを示します。
- N** デフォルトでは、このデータ・ストア接続はグローバル IMS TM トランザクションのカスケードをサポートしないことを示します。

OTMA ACEE AGING VALUE

IMS Connect DATASTORE 構成ステートメントで指定された現行

の OTMA アクセサー環境エレメント (ACEE) エージング値。
OTMA ACEE エージング値は、IMS Connect の ACEE のキャッシュに入れられているセキュリティー定義を OTMA がリフレッシュする頻度を決めます。

OTMA ACK TIMEOUT VALUE

IMS Connect 構成メンバー内の OTMA ACK タイムアウト値。

OTMA MAX INPUT MESSAGE

IMS Connect 構成ファイル内の OTMA 入力メッセージあふれ制御値。

SUPER MEMBER NAME

このデータ・ストアが所属する OTMA スーパー・メンバーの名前。

IMSPLEX=

IMSpIex の名前。これは、IMS Connect 構成メンバー HWSCFGxx の IMSpIex ステートメントの TMEMBER パラメーターで定義されている名前です。

STATUS

IMSpIex の状態。

MEMBER

IMS Connect メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで MEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

TARGET

IMS Connect ターゲット・メンバー名。これは、IMS Connect 構成ファイルの IMSpIex ステートメントで TMEMBER= パラメーターに定義されている名前です。

ODBM=

IMSpIex 内にある Open Database Manager (ODBM) のインスタンスを示します。

STATUS

IMS Connect のこのインスタンスが、ODBM の指定されたインスタンスに登録されているかどうかを示します。STATUS の値は、以下のいずれかです。

- REGISTERED - IMS Connect は、ODBM の指定されたインスタンスに登録されています。
- NOT ACTIVE - ODBM の指定されたインスタンスは使用できません。

ODBMRRS

ODBM での RRS 指定を示します。IMS Connect が ODBM に登録されている場合、ODBM によって、IMS Connect にその RRS 設定と別名が提供されます。

ALIAS

前述の ODBM 出力フィールドに示されている ODBM のインスタンスに対して定義されている IMS データ・ストアの別名。

STATUS

前述の別名に関連する IMS システムがアクティブであるか、非アクティブであるかを示します。 status の値は、次のいずれかです。

- ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できます。
- NOT ACTIVE - IMS Connect は、指定された別名にメッセージを送付できません。

MSC=

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されている、表示された MSC 物理リンクの名前。以下の追加出力フィールドが、MSC= 出力フィールドに示された物理リンクに属する状況、属性、および論理リンクを説明します。

STATUS

MSC 出力フィールドに示される MSC 物理リンクの状態。物理リンクは、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用可能です。

NOT ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用不能です。

RMTPLKID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターに定義されている、リモート IMS サイトでの MSC 物理リンクの ID。

LCLIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで IMS Connect に定義されている、ローカル MSC が使用可能な IMS システムの ID。この LCLIMS 値は、ローカル IMS システムが IMSplex の SCI で登録している IMS ID と一致する必要があります。SCI で登録されている IMS ID は、ローカル IMSplex で QUERY IMSPLEX コマンドを実行することによって判別することができます。

出力に 2 番目の IMS ID が示される場合、それは XRF 結合のもう 1 つの IMS システムを示しています。

RMTIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターに定義されている、リモート MSC が使用可能な IMS システムの名前。

GENIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されている、MSC 用の TCP/IP 汎用リソースに使用されている汎用 IMS ID。

AFFINITY

MSC 論理リンクが現在 TCP/IP 汎用リソースのアフィニティーを持っている、IMS システムの名前。

IMSPLEX

IMS Connect と、ローカルの MSC が使用可能な IMS システムとの間の通信を管理する、IMSplex の名前。この名前は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターで指定されている IMSplex 名です。

この IMSPLEX 名は、IMS Connect と IMSplex の間の通信を管理している SCI インスタンスの CSLSIxxx PROCLIB メンバーの IMSPLEX(NAME=) ステートメントで指定された名前と一致する必要があります。

MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX サブステートメントの MEMBER パラメーターに定義されている、この IMS Connect が IMSplex で登録されている名前。

この MEMBER 名は、ローカル IMS システムでこの MSC 物理リンクを定義する MSPLINK マクロ内の LCLICON パラメーターでも指定されている必要があります。

TARGET MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されている、IMSplex の名前。

RMTIMSCON

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されている、この MSC 物理リンクによって使用される IMS Connect 接続の名前。

IP-ADDRESS

リモート IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

リモート IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

LINK この物理リンクに割り当てられる MSC 論理リンクの ID。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されます。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

PARTNERID

この論理リンク用のリモート・パートナーの ID。これは、この論理リンクを定義する MSLINK マクロ内の PARTNER パラメーターで指定されている ID です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

STATUS

この論理リンクの現在の状態。論理リンクは、以下の状態をもつことができます。

ACTIVE

この論理リンクにより、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

SENDCLNT

この接続でオープンしている送信ソケットを識別するために、IMS Connect のこのインスタンスによって生成される送信ソケット ID。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、SENDCLNT ID はクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

RECVCLNT

この論理リンク用の受信ソケットを識別するクライアント ID。クライアント ID は、リモート IMS Connect インスタンスによって生成されます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

ISC= ISC リンクを定義する、IMS Connect 構成メンバー内の ISC 構成ステートメントの ID。これには、以下の出力フィールドが適用されます。

STATUS

この ISC リンクの状況。可能な値は以下のとおりです。

ACTIVE

この ISC リンクは、IMS Connect とローカル IMS システムとの間の通信に使用可能です。

NOT ACTIVE

この ISC リンクは、IMS Connect とローカル IMS システムとの間の通信に使用不能です。

NODE

ローカル IMS に定義されているこの ISC ノードの名前。

LCLIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの LCLIMS パラメーターで定義されている、ローカル IMS の名前。

IMSPLEX=

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。ISC ステートメントで IMSPLEX が指定されていない場合には、構成内の最初の IMSPLEX ステートメントから、名前が表示されます。

MEMBER=

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの MEMBER サブパラメーターで定義されている、メンバーの名前。これは、IMSpIex に登録された IMS Connect メンバー名です。

TARGET MEMBER=

IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。

RMTCICS

この ISC リンクが使用しているリモート CICS 接続の名前。ここに示される値は、IMS Connect 構成メンバーの中の ISC ステートメントの RMTCICS パラメーターで指定されている値です。

IP-ADDRESS

このリモート CICS の IP アドレス。

PORT

このリモート CICS のポート。

HOSTNAME

このリモート CICS のホスト名。HOSTNAME パラメーターが RMTCICS ステートメントで指定されている場合、このフィールドが表示されます。

CICSAPPL

リモート CICS サブシステムの DFHSIT マクロ定義の APPLID= パラメーターで指定される値。

CICSPORT

この ISC リンクで CICS からメッセージを受信するために

IMS Connect が使用するポートの ID。CICSSPORT は TCPIP 構成ステートメントで定義されます。

CICSNETID

リモート CICS サブシステムのネットワーク ID。

ISCUSER STATUS RECVCLNT SENDCLNT

この ISC リンクで 1 つ以上の ISC 並列セッション (ISCUSER) がアクティブな場合、コマンド出力には各 ISCUSER に関する情報が含まれます。情報タイプを識別する見出しの下に、複数の ISCUSER の情報が列形式で表示されます。各 ISCUSER に関する情報は、それぞれ独自の行に表示されます。

ISCUSER

ISC 並列セッションの名前。

STATUS

この ISCUSER の状況。

SENDCLNT

IMS Connect がこの ISCUSER のメッセージをリモート CICS サブシステムに送信するために使用するクライアント ID の名前。

RECVCLNT

この IMS Connect がこの ISCUSER のメッセージを受信する、リモート CICS サブシステムのクライアント ID の名前。

RMTCICS=

CICS Connect 構成メンバーの中の RMTCICS 構成ステートメントの ID パラメーターで定義されている、リモート CICS 接続の名前。

STATUS=

RMTCICS フィールドで識別されたリモート CICS サブシステムへの接続の状態。可能な値は、以下のとおりです。

ACTIVE

この IMS Connect には、RMTCICS フィールドに示されたリモート CICS サブシステムに、少なくとも 1 つのソケット接続があります。

NOT ACTIVE

この IMS Connect には、RMTCICS フィールドに示されたリモート CICS へのソケット接続はありません。

STOPPED

この IMS Connect とリモート CICS サブシステムとの間の通信は停止しています。接続が停止している間にリモート・サブシステムに送信されたすべてのメッセージは拒否され、エラー・メッセージが送信側に戻されます。

IP-ADDRESS

リモート CICS の IP アドレス。

PORT

この IMS Connect インスタンスが通信に使用するリモート CICS のポート番号。

HOSTNAME

CICS またはリモート IMS Connect のホスト名 (該当する場合)。

NUMSOC

現在オープンしているソケットの数。

SENDCLNT ISCTYPE STATUS SECOND SENDPORT

IMS Connect のこのインスタンスに、このリモート CICS サブシステムとのアクティブ接続が 1 つ以上ある場合、コマンド出力には各接続に関する情報が含まれます。アクティブ接続の情報は、値を説明する見出しのすぐ下に表示されます。

フィールドの次のリストで、見出しについて説明します。

SENDCLNT

IMS Connect のこのインスタンスがリモート CICS への接続に使用したクライアント ID。

ISCTYPE

IMS Connect 構成メンバー内の ISC 構成ステートメントの名前。

STATUS

このリモート IMS Connect 接続の状態。可能な値は、以下のとおりです。

CONN

この接続は、接続状態です。リモート CICS にメッセージを送信できます。

RECV

この接続は、受信状態です。リモート CICS からの応答の受信を待機しています。

SECOND

この接続が指定された状態にある秒数。

SENDPORT

IMS Connect のこのインスタンスがリモート CICS への接続に使用したポート。

RMTIMSCON=

このローカル IMS Connect インスタンスと IMS Connect のリモート・インスタンスとの間の接続を識別します。以下の追加出力フィールドが、RMTIMSCON 出力フィールドに示された接続に属する状況、属性、およびソケットを説明します。

STATUS

RMTIMSCON 出力フィールドに表示された接続の状態。接続は、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットが少なくとも 1 つあります。

NOT ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットがありません。

RETRY CONN

IMS Connect は、前回の接続の試行に失敗した後、リモート IMSConnect インスタンスへの再接続を自動的に試行しています。現在の再接続の試行が失敗に終わると、IMS Connect は 2 分ごとに再び再接続を試みます。

接続が RETRY CONN 状態の間、オープン・ソケットの数は変動します。再接続をアクティブに試行している間、IMS Connect はソケットをオープンします。IMS Connect は再接続の試行の 2 分間の間隔には、ソケットをクローズします。

STOPPED

STOPRMT コマンドがこの接続の通信を停止しました。この接続に送信されたすべてのメッセージは拒否され、送信側にエラーが返信されます。

IP-ADDRESS

この接続のリモート側にある IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

この接続のリモート側 IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

AUTOCONN

IMS Connect の始動時に、IMS Connect がこの接続に OTMA 通信用の送信ソケットを自動的に確立するかどうかを示します。可能な値は以下のとおりです。

Y IMS Connect の始動時に、この接続上で送信ソケットが自動的に確立されます。IMS Connect の始動時に確立されたソケット数が、RESVSOC 出力フィールドに表示されます。

N IMS Connect の始動時に、この接続で確立されるソケットはありません。OTMA メッセージについては、リモート IMS システムに配信するメッセージを OTMA から受信した時点で、送信ソケットが確立されます。

PERSISTENT

この接続上にあるソケットが永続的であるかどうかを示します。

Y この接続上に確立されたソケットは永続的です。

N この接続上に確立されたソケットは永続的ではありません。この接続でメッセージが送信された後、送信に使用されたソケットはクローズされます。

IDLETO

この接続上でソケットをオープンする時間間隔は、IMS Connect によってクローズされるまで、アイドル状態になります。

RESVSOC

この接続による使用に確保されている送信ソケットの数。

NUMSOC

この接続上で現在オープンしているソケットの数。

SENDCLNT

ランダムに生成された送信ソケット ID。IMS Connect のローカル・インスタンスでは、ID を使用して一意的にソケットを識別します。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、送信ソケット ID がクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

LCLPLKID

この接続を使用しているローカル MSC 物理リンクの ID。この値は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。LCLPLKID 出力フィールドは、MSC 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

USERID

リモート IMS システムによるトランザクション許可のために、ローカル IMS システムによって提供されたユーザー ID。USERID 出力フィールドは、OTMA 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

STATUS

このソケット接続の現在の状態。ソケット接続は、以下のいずれかの状態になります。

CONN

このソケット接続により、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

RECV

このソケット接続は、リモート IMS Connect からの応答の受信を待機しています。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SECOND

この接続が、STATUS 出力フィールド見出しの下の同じ行に表示されている状態を継続している秒数。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SENDPORT

この接続に使用されるローカル・ポート。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

PORT=

以下の出力フィールドおよび状況が適用される 1 つ以上のポートを識別します。ポート番号は、IMS.PROCLIB データ・セットの IMS Connect 構成メンバー内で定義されます。

ポートのタイプは、ポート番号の末尾に付加されているポート・タイプ標識によって判別できます。IMS Connect では以下のポート・タイプ標識が使用されます。

タイプ標識なし

IMS TM OTMA クライアントおよび IMS 間 MSC または OTMA 通信に使用できるポートを示します。タイプ標識のないポートは、IMS Connect 構成メンバー内の TCPIP ステートメントの PORT キーワードまたは PORTID キーワードのいずれかで定義されます。

C ISC 通信用の IBM CICS Transaction Server for z/OS ポートを示します。このポートは、TCPIP および ISC ステートメントの CICSSPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。CICS ポートは、ISC TCP/IP 経由で IMS TM にアクセスする CICS サブシステムが独占的に使用します。

D 分散リレーショナル・データベース体系 (DRDA) ポートを示します。このポートは、DRDAPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。DRDA ポートは、Open Database Manager (ODBM) を介して IMS DB にアクセスするクライアント・アプリケーション・プログラムによって排他的に使用されます。

S SSLPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されている SSL ポートを示します。SSL ポートが使用されるのは、IMS Connect による SSL のサポートが有効になっている場合のみです。

以下の出力フィールドは、前述の PORT 出力フィールドで識別されているポートに適用されます。

STATUS

ポートの状態。ACTIVE または INACTIVE のいずれかです。

KEEPAV

z/OS TCP/IP レイヤーが接続を維持するためにパケットを送信するまでに、接続がアイドル状態のままになる時間の長さ。

NUMSOC

各ポートで使用されるソケット数。

TIMEOUT

クライアントからメッセージが受信されない場合にクライアント接続を終了するまでに、IMS Connect が待機する時間の長さ。

CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN

受信ソケット上のアクティブ・クライアントの ID および情報。

各アクティブ・クライアントの情報は、単一の行に表示されます。クライアントは、見出し行の下でクライアント・タイプ別にグループ化されます。見出しの行は、そのクライアント・タイプについて返される情報を識別します。

ISC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

MSC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

OTMA および ODBM クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN。

次の例は、3 つの OTMA クライアントについて返される情報を示しています。

```

HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.0
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0

```

ポートにアクティブ・クライアントがない場合、これらの出力フィールドは表示されません。代わりに、コマンド出力で、ポートを示す行の後に NO ACTIVE CLIENTS が表示されます。

アクティブ・クライアントについて返される情報には、以下の内容がアルファベット順で含まれます。

APSB-TOKEN

Open Database Manager (ODBM) APSB トークン。

CLIENTID

クライアントの名前。

別の IMS Connect インスタンスからの接続については、別の IMS Connect インスタンスがこの値を生成します。

CLNTPORT

クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する乱数。

DATASTORE

このクライアントに関連するデータ・ストア。

この接続のクライアントの IP アドレス。

IPV6 が使用可能にされている場合は、IP アドレスのフォーマットは、8 個の 16 進数をそれぞれコロンで区切ったものから成ります。IPV6 が使用できない場合、IPV4 の IP アドレス・フォーマットが使用されます。以下は、IPV6 形式で表示される IPV6 IP アドレスの例です。

FEDC:ABCD:2222:3333:FEDC:DB55:6666:3322

以下は、IPV6 形式で表示される IPV4 IP アドレスの例です。

0:0:0:0:0:FFFF:945:33FF

ISCNAME

IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの名前。

LCLPLKID

IMS Connect がクライアントからのメッセージを経路指定する先の、ローカル IMS システム内の MSC 物理リンク。このフィールドは、MSC 通信についてのみ表示されます。

SECOND

クライアントが指定された状況にあった秒数。

STATUS

クライアントのスレッドの状態。クライアントのスレッド状態は以下のいずれかの値が可能です。

RECV

クライアントからの入力を待機している受信状態にあります。

READ

部分的な読み取り状態にあります。IMS Connect はクライアントからのメッセージを読み取っていますが、メッセージの全体はまだ受信できていません。

CONN

IMS からの出力を待っています。

XMIT クライアントにデータを送信しています。

CONV

会話型状態にあります。

WFCM

クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待っています。

TRANCODE

クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。

USERID

IMS Connect に渡される USERID 名。

例 1: QUERY MEMBER

次のコマンドで、IMS Connect の状況を照会します。

コマンド入力:

```
F HWS1,QRY MEMBER TYPE(IMSCON)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N PSWDMC=N
HWSC0001I UIDCACHE=Y UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=2000 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=7 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=Y STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I ODBM AUTO CONNECTION=Y
HWSC0001I ODBM TIMEOUT=18000
HWSC0001I ODBM IMSPLEX MEMBER=IMSPLEX1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=Y
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=IMSPLEX1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMBOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=N
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMCOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMDOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.0
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=LOCAL STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=0 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=9998S STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
```

```

HWSC0001I PORT=1111D STATUS=ACTIVE KEEPAV=5 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=6000
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=2222D STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=100
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS

```

説明: IMS Connect の状況が表示されます。それぞれのデータ・ストアおよびポート番号の状況がリストされます。

例 2: SHOW(SUMMARY)

以下のコマンドによって、SHOW(SUMMARY) オプションを設定せずに QUERY MEMBER コマンドを発行した場合と同じ出力が生成されます (PORT= セクションは除く)。これによって、個々のクライアントは表示されず、ポートの合計数のみが表示されます。

コマンド入力:

```
F HWS1,QRY MEMBER TYPE(IMSCON) SHOW(SUMMARY)
```

コマンド出力:

```

HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N PSWDMC=N
HWSC0001I UIDCACHE=Y UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCP/IPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=7 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=Y STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=Y
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I ODBM AUTO CONNECTION=Y
HWSC0001I ODBM TIMEOUT=18000
HWSC0001I ODBM IMSPLEX MEMBER=IMSPLEX1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=CFG$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=SM01 CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=IMSPLEX1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I ODBM=ODBMAOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE, TRACE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=NOT ACTIVE(IMSCON,ODBM)
HWSC0001I ODBM=ODBMBOD STATUS=REGISTERED ODBMRRS=N
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMCOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I ODBM=ODBMDOD STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=LOCAL STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=0 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=9998S STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I PORT=1111D STATUS=ACTIVE KEEPAV=5 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=6000
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=2222D STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=100
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS

```

説明: IMS Connection の状況が表示されます。ポートに関する詳細なクライアント情報は含まれません。

例 3: MSC 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

IMS Connect インスタンス間の接続が MSC に使用される場合、そのコマンドが IMS Connect のどのインスタンスに対して実行されているかによって、コマンド出力は接続の異なる全体像を示します。

MSC 接続の場合、IMS Connect の 1 つのインスタンスは、MSC メッセージを IMS Connect の別のインスタンスへ送信するよう定義された接続を持ちます。IMS Connect の別のインスタンスは、応答メッセージを送信するよう定義された接続を持ちます。

次の出力例では、MSC トランザクションが IMS に入力されている IMS インストールで、IMS Connect のインスタンス HWS1 にコマンドが実行されました。HWS1 は、もう 1 つの IMS Connect インスタンスである HWS2 に接続されています。HWS1 は HWS2 を、RMTIMSCON 名の ICON2 でのみ認識しています。HWS1 には、MSC トランザクションを処理のために ICON2 に送信する 2 つのアクティブ・クライアント接続、MSCBB435 と MSC84CF7 があり、それらは RMTIMSCON 情報の SENDCLNT の下に示されています。HWS1 は MSC トランザクションへの応答メッセージをクライアント接続 MSCC73E0 および MSC0EBB0 で受信し、それらは PORT 情報の CLIENTID の下に示されています。

DATASTORE ステートメントが IMS Connect のこのインスタンスに定義されていますが、DATASTORE ステートメントは MSC 通信に使用されず、IMS Connect のインスタンスが OTMA と通信しない場合には省略することができます。

```
HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=2000 TIMEOUT=5000 TCP/IPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=5 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=192.0.2.0
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=DISCONNECT
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=N/A
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I MSC=MSC12 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC21
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1 RMTIMSID=IMS2
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON2
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I LINK PARTNERID STATUS SENDCLNT RECVCLNT
HWSC0001I LNK12T01 TA ACTIVE MSC84CF7 MSC0EBB0
HWSC0001I LNK12T02 TB ACTIVE MSCBB435 MSCC73E0
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
```

```

HWSC0001I MSCC73E0 MSC12 RECV 6 1026 0:0:0:0:FFFF:7F00:1
HWSC0001I MSC0EBB0 MSC12 RECV 56 1025 0:0:0:0:FFFF:7F00:1
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=2 RECV=2 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=0
HWSC0001I RESVSOC=2 NUMSOC=2
HWSC0001I SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I MSCBB435 MSC12 CONN 6 1028
HWSC0001I MSC84CF7 MSC12 CONN 56 1027
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=2 RECV=0 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0

```

次の出力例は、前の出力例に対応しており、MSC トランザクションが処理されているリモート IMS インストールの、IMS Connect インスタンス HWS2 にコマンドを実行して生成されたものです。HWS2 は HWS1 を、RMTIMSCON 名の ICON1 でのみ認識しています。HWS2 は MSC トランザクションを 2 つのアクティブ・クライアント接続、MSCBB435 と MSC84CF7 で受信し、それらは PORT 情報の CLIENTID の下に示されています。これらの ID は、HWS1 の例で SENDCLNT の下に示された ID と同じです。MSC トランザクションの処理後、HWS2 は応答メッセージを RMTIMSCON 情報の SENDCLNT の下に示されている 2 つのアクティブ・クライアント接続で ICON1 に返送します。それらは MSCC73E0 と MSC0EBB0 で、HWS1 の例の CLIENTID の下に示された ID と同じです。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS2 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=5 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS2 STATUS=DISCONNECT
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS2
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS2 STATE=N/A
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=HWS2 TARGET=PLEX2
HWSC0001I MSC=MSC21 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC12
HWSC0001I LCLIMSID=IMS2 RMTIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX2
HWSC0001I MEMBER=HWS2 TARGET MEMBER=PLEX2
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON1
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I LINK PARTNERID STATUS SENDCLNT RECVCNT
HWSC0001I LNK21T01 TA ACTIVE MSC0EBB0 MSC84CF7
HWSC0001I LNK21T02 TB ACTIVE MSCC73E0 MSCBB435
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I PORT=5555 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I MSCBB435 MSC21 RECV 18 1028 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I MSC84CF7 MSC21 RECV 69 1027 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=2 RECV=2 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM

```

```

HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=0
HWSC0001I RESVSOC=2 NUMSOC=2
HWSC0001I SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I MSCC73E0 MSC21 CONN 18 1026
HWSC0001I MSC0EBB0 MSC21 CONN 69 1025
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=2 RECV=0 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0

```

例 4: OTMA 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

IMS Connect インスタンス間の接続が OTMA に使用される場合、そのコマンドが IMS Connect のどのインスタンスに対して実行されているかによって、コマンド出力は接続の異なる全体像を示します。

OTMA の場合、IMS Connect インスタンス間の接続は片方向接続になるため、接続は送信側の IMS Connect インスタンスによってのみ定義されます。接続は、リモート IMS Connect インスタンスでは定義されません。

次の出力例では、OTMA 出力メッセージを送信する IMS インストールで、IMS Connect インスタンス HWS1 にコマンドが実行されました。HWS1 は IMS Connect インスタンス HWS2 を受信するよう接続されていますが、HWS1 は HWS2 を例に示されている RMTIMSCON 名の ICON2B によってのみ認識しています。HWS1 は、RMTIMSCON 情報の SENDCLNT の下に示されているアクティブ・クライアント接続の OTM924FA で、OTMA 出力メッセージを処理のために ICON2 に送信します。SENDCLNT ID は、HWS2 との接続が確立される時点で、HWS1 によって自動生成されます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=2000 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=2 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=192.0.2.0
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=HWS1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I NO ACTIVE IMSPLEX
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I NO ACTIVE MSC
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON2B STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=3000
HWSC0001I RESVSOC=4 NUMSOC=1
HWSC0001I SENDCLNT USERID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I OTM924FA APOL1 CONN 5941 1026
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=1 RECV=0 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0

```

次の出力例は、前の出力例に対応しており、OTMA 出力メッセージを受信する IMS インストールの IMS Connect インスタンス、HWS2 に、コマンドを実行し

て生成されたものです。HWS2 は HWS1 を、PORT 情報の CLIENTID の下に示された、自動生成クライアント ID の OTM924FA によってのみ認識しています。CLIENTID の値は、ローカル IMS インストールの SENDCLNT の下に示された値と同じです。HWS2 は OTMA トランザクションを、クライアント ID OTM924FA で識別される接続上で受信します。OTMA メッセージを処理した後、リモート IMS システムはクライアント ID OTM924FA で識別される T パイプ保留キューに応答メッセージを入れ、後の非同期の取得に備えます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS2 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=5 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=REGISTERED MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I ADAPTER=N MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I DATASTORE=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP2 MEMBER=HWS2
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS2 STATE=AVAIL
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=HWS$DEF
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I NO ACTIVE IMSPLEX
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I NO ACTIVE MSC
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=8888 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=7777 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=5555 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=2 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRancode DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I OTM924FA APOL1 APOL11 IMS2 RECV 11 1026 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=1 RECV=1 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTIMSCON=ICON1B STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=0
HWSC0001I RESVSOC=4 NUMSOC=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS

```

例 5: IMS Connect と CICS の間の ISC 接続

次の出力例では、ISC リンク IMS1CIC4 が、RMTICICS 接続 CICS4 を経由してリモート CICS サブシステムにリンクされます。

現在、3 つの並列セッション (ISCUSER)、すなわち CIC4U01、CIC4U02、および CIC4U03 がアクティブです。各並列セッションの行には、状況、送信クライアント ID、および受信クライアント ID が示されています。

IMS Connect は、IMS Connect 構成メンバーの CICSPOINT キーワードの定義に従い、ポート 9876C で CICS から入力メッセージを受信します。CICSPOINT 上の各並列セッションのそれぞれの受信ソケットは、IMS Connect によって生成される受信クライアント ID によって識別されます。

IMS Connect は、IMS Connect が自動選択するポートで、送信ソケットを通じて CICS へ出力メッセージを送信します。各並列セッションのそれぞれの送信ソケットは、IMS Connect によって自動生成される送信クライアント ID によって識別されます。

```

HWSC0001I HWS ID=HWS1      RACF=N  PSWDMC=R
HWSC0001I UIDCACHE=N     UIDAGE=2147483647
HWSC0001I MAXSOC=50     TIMEOUT=5000  TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=7      WARNSOC=80%  WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N       STATUS=NOT ACTIVE  MULTIRTP=  CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14  IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME=      CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=N  MAXCVRT=100  NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=HWS1   TARGET=PLEX1
HWSC0001I ISC=IMS1CIC4  STATUS=ACTIVE
HWSC0001I NODE=CIC4
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1           TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTICICS=CICS4
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0    PORT=7777
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I CICSAPPL=CICS1   CICSPOINT=9876
HWSC0001I CICSNETID=IMSNET
HWSC0001I ISCUSER  STATUS      SENDCLNT  RECVCLNT
HWSC0001I CIC4U01  ACTIVE      ISCE7811  ISCF4816
HWSC0001I CIC4U02  ACTIVE      ISC3A819  ISC7121D
HWSC0001I CIC4U03  ACTIVE      ISCECD99  ISC5C09F
HWSC0001I TOTAL ISCUSERS=3  ACTIVE=3  OTHER=0
HWSC0001I NO ACTIVE ODBM
HWSC0001I NO ACTIVE MSC
HWSC0001I PORT=9876C   STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=4  EDIT=      TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID  ISCNAME  STATUS      SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS
HWSC0001I ISC5C09F  IMS1CIC4  RECV        4  1037      0:0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I ISC7121D  IMS1CIC4  RECV       13  1035      0:0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I ISCF4816  IMS1CIC4  RECV       200  1033      0:0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3  RECV=3  READ=0  CONN=0  XMIT=0  OTHER=0
HWSC0001I NO ACTIVE RMTIMSCON
HWSC0001I RMTICICS=CICS4   STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0    PORT=7777
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I SENDCLNT  ISCNAME  STATUS      SECOND  SENDPORT
HWSC0001I ISCECD99  IMS1CIC4  CONN        4  1036
HWSC0001I ISC3A819  IMS1CIC4  CONN       13  1034
HWSC0001I ISCE7811  IMS1CIC4  CONN       200  1032
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=3  RECV=0  CONN=3  XMIT=0  OTHER=0

```

例 6: 複数のクライアント・タイプ

次の出力例では、IMS Connect は、以下を含め、さまざまなクライアント・タイプをサポートします。

- DRDA ポート、および IMS 共通サービス層 (CSL) の Open Database Manager (ODBM) コンポーネントを介して IMS DB に接続するクライアント。
- DATASTORE 接続および IMS Open Transaction Manager Access (OTMA) コンポーネントを介して IMS TM に接続するクライアント。
- ISC および CICS IPIC プロトコルを介して IMS TM に接続する CICS システム
- OTMA を介して別の IMS システムに接続する IMS システム
- MSC を介して別の IMS システムに接続する IMS システム

一部の出力フィールドは常に表示されますが、一方で、IMS Connect が特定のクライアント・タイプを明示的にサポートする場合にのみ表示される出力フィールドもあります。

```

HWSC0001I HWS ID=ICON1 RACF=N PSWDMC=R
HWSC0001I MAXSOC=50 TIMEOUT=5000 TCPIPQ=50
HWSC0001I NUMSOC=18 WARNSOC=80% WARNINC=5%
HWSC0001I RRS=N STATUS=ACTIVE MULTIRTP= CASCADE=N
HWSC0001I VERSION=V14 IP-ADDRESS=127.0.0.1
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=

HWSC0001I ADAPTER=Y MAXCVRT=100 NUMCVRT=0
HWSC0001I MAXLSSSZ=32767
HWSC0001I ODBM AUTO CONNECTION=Y
HWSC0001I ODBM TIMEOUT=1200000
HWSC0001I ODBM IMSPLEX MEMBER= TARGET MEMBER=
HWSC0001I DATASTORE=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I GROUP=XCFGRP1 MEMBER=ICON1
HWSC0001I TARGET MEMBER=IMS1 STATE=N/A
HWSC0001I DEFAULT REROUTE NAME=THATWAY
HWSC0001I RACF APPL NAME=APPLID1 MULTIRTP= CASCADE=
HWSC0001I OTMA ACEE AGING VALUE=2147483647
HWSC0001I OTMA ACK TIMEOUT VALUE=120
HWSC0001I OTMA MAX INPUT MESSAGE=5000
HWSC0001I SUPER MEMBER NAME= CM0 ACK TOQ=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MEMBER=ICON1 TARGET=PLEX1
HWSC0001I ODBM=ODBM10D STATUS=REGISTERED ODBMRRS=Y
HWSC0001I ALIAS=ALI1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMSA STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS1 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=ALI2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I ALIAS=IMS2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I MSC=MSC12 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC21
HWSC0001I LCLIMS=IMS1 RMTIMS=IMS2 GENIMSID=IMS AFFINTY=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=ICON1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=CONNECT2
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I LINK PARTNERID STATUS SENDCLNT RECVCLNT
HWSC0001I LINK12A AA ACTIVE MSC11111 MSC33333
HWSC0001I LINK12B BB ACTIVE MSC22222 MSC44444
HWSC0001I ISC=CICS STATUS=ACTIVE
HWSC0001I NODE=CICSTRM1
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTICICS=ICONNT1
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.1 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I CICSAPPL=CICSA1 CICSSPORT=6666
HWSC0001I CICSNETID=CICSNET
HWSC0001I NO ACTIVE ISCUSER
HWSC0001I ISC=LU6TCP2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I NODE=CICSTRM2
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTICICS=ICONNT2
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.2 PORT=9998
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I CICSAPPL=CICSA2 CICSSPORT=7777
HWSC0001I CICSNETID=CICSNET
HWSC0001I ISCUSER STATUS SENDCLNT RECVCLNT
HWSC0001I IMSUS01 ACTIVE ISC11111 ISC33333
HWSC0001I IMSUS02 ACTIVE ISC22222 ISC44444
HWSC0001I TOTAL ISCUSERS=2 ACTIVE=2 OTHER=0

```

```

HWSC0001I PORT=9996 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APTS-TOKEN
HWSC0001I CLIENT01 USRT003 ITOC04 IMS1 RECV 27 3464 0:0:0:0:FFFF:C000:204
HWSC0001I CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I MSC33333 MSC12 CONN 14 1739 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I MSC44444 MSC12 CONN 9 2684 0:0:0:0:FFFF:C000:200
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=1 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=6666C STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=7777C STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I ISC33333 LU6TCP2 CONN 14 3579 0:0:0:0:FFFF:C000:202
HWSC0001I ISC44444 LU6TCP2 CONN 9 2468 0:0:0:0:FFFF:C000:202
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=1 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=LOCAL STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=0 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=8899S STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=8888D STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=600000
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I RMTIMSCON=CONNECT2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.0 PORT=5555
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=6000
HWSC0001I RESVSOC=10 NUMSOC=2
HWSC0001I SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I MSC11111 MSC12 CONN 100 1234
HWSC0001I MSC22222 MSC12 CONN 89 5678
HWSC0001I RMTIMSCON=CONNECT3 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.4 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I AUTOCONN=Y PERSISTENT=Y
HWSC0001I IDLETO=6000
HWSC0001I RESVSOC=4 NUMSOC=4
HWSC0001I SENDCLNT USERID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I OTM11111 USER01 CONN 100 1111
HWSC0001I OTM22222 USER01 CONN 89 2222
HWSC0001I OTM33333 USER02 CONN 81 3333
HWSC0001I OTM44444 USER03 RECV 23 4444
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=4 RECV=1 CONN=3 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I RMTICICS=ICONNT1 STATUS=NOT ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.1 PORT=9997
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I RMTICICS=ICONNT2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.2 PORT=9998
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I SENDCLNT ISCNAME STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I ISC11111 LU6TCP2 CONN 100 1111
HWSC0001I ISC22222 LU6TCP2 CONN 89 2222
HWSC0001I TOTAL SENDCLNTS=2 RECV=0 CONN=2 XMIT=0 OTHER=0

```

関連資料:

542 ページの『VIEWHWS コマンド』



QUERY IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)

IMS Connect QUERY MSC コマンド

IMS Connect z/OS MODIFY コマンド QUERY MSC は、IMS Connect がサポートする MSC リンクの属性および状況を表示するために使用します。

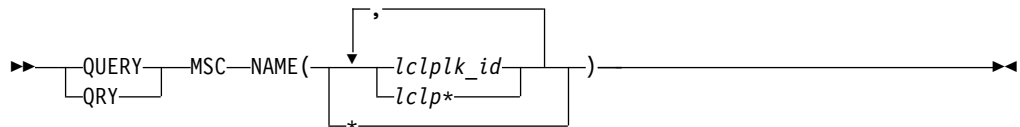
QUERY MSC コマンドは、IMS Connect WTOR コマンド VIEWMSC と同じ情報を表示します。

IMS Connect 上で現在 MSC 用にオープンされているソケットに関する情報を表示するには、IMS Connect z/OS MODIFY コマンド QUERY RMTIMSCON または IMS Connect WTOR コマンド VIEWRMT を使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用法』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 637 ページの『出力フィールド』
- 640 ページの『例』

構文



キーワード

QUERY キーワードまたは QRY キーワードは、指定されたリソース (MSC リンクなど) の状況または属性を照会するために使用します。MSC リンクは、IMS Connect 管理対象リソースです。MSC リンクは、コマンド構文内にキーワード MSC によって表されます。

NAME(lclplk_id)

MSC 物理リンクの ID。これは、IMS Connect PROCLIB 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。

単一のリンク ID、ワイルドカード名、またはコンマで区切ったリンク ID のリストを指定できます。IMS Connect インスタンスに対して定義されているすべての MSC 物理リンクに関する情報を表示するには、NAME(*) を指定します。

使用法

QUERY MSC コマンドは、IMS Connect 構成メンバー内で MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで定義された MSC 物理リンクの情報を表示するために使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY MSC コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY MSC コマンド	QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWMSC ALL

QUERY MSC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY MSC NAME(<i>msc_id</i>)	QUERY IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>msc_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWMSC <i>msc_id</i>

出力フィールド

単一値のみを返す出力フィールドは、FIELD_LABEL=VALUE 形式 (例えば、RMTIMSCON=ICON1) で表示されます。

複数の値を返す出力フィールド (例えば、接続上の複数のソケットの出力フィールドなど) は、列形式で表示されます。この場合、フィールド・ラベルは列見出しであり、値はその列の見出しの下に個別の行に表示されます。例えば、次のようになります。

```

HWSC0001I   LINK   PARTNERID STATUS   SENDCLNT RECVCCLNT
HWSC0001I   LINK12A AA      ACTIVE   MSC11111 MSC33333
HWSC0001I   LINK12B BB      ACTIVE   MSC22222 MSC44444

```

以下のリストは、QUERY MSC コマンド出力フィールドを示しています。

MSC=

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されている、表示された MSC 物理リンクの名前。以下の追加出力フィールドが、MSC= 出力フィールドに示された物理リンクに属する状況、属性、および論理リンクを説明します。

STATUS

MSC 出力フィールドに示される MSC 物理リンクの状態。物理リンクは、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用可能です。

NOT ACTIVE

MSC 物理リンクは、IMS Connect とローカル IMS システム間の通信に使用不能です。

RMTPLKID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTPLKID パラメーターに定義されている、リモート IMS サイトでの MSC 物理リンクの ID。

LCLIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLIMS パラメーターで IMS Connect に定義されている、ローカル MSC が使用可能な IMS システムの ID。この LCLIMS 値は、ローカル IMS システムが IMSplex の SCI で登録している IMS ID と一致する必要があります。SCI で登録されている IMS ID は、ローカル IMSplex で QUERY IMSPLEX コマンドを実行することによって判別することができます。

出力に 2 番目の IMS ID が示される場合、それは XRF 結合のもう 1 つの IMS システムを示しています。

RMTIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMS パラメーターに定義されている、リモート MSC が使用可能な IMS システムの名前。

GENIMSID

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの GENIMSID パラメーターで定義されている、MSC 用の TCP/IP 汎用リソースに使用されている汎用 IMS ID。

AFFINITY

MSC 論理リンクが現在 TCP/IP 汎用リソースのアフィニティーを持っている、IMS システムの名前。

IMSPLEX

IMS Connect と、ローカルの MSC が使用可能な IMS システムとの間の通信を管理する、IMSpIex の名前。この名前は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターで指定されている IMSpIex 名です。

この IMSPLEX 名は、IMS Connect と IMSpIex の間の通信を管理している SCI インスタンスの CSLSIxxx PROCLIB メンバーの IMSPLEX(NAME=) ステートメントで指定された名前と一致する必要があります。

MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX サブステートメントの MEMBER パラメーターに定義されている、この IMS Connect が IMSpIex で登録されている名前。

この MEMBER 名は、ローカル IMS システムでこの MSC 物理リンクを定義する MSPLINK マクロ内の LCLICON パラメーターでも指定されている必要があります。

TARGET MEMBER

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの IMSPLEX パラメーターの TMEMBER サブパラメーターで定義されている、IMSpIex の名前。

RMTIMSCON

IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの RMTIMSCON パラメーターで定義されている、この MSC 物理リンクによって使用される IMS Connect 接続の名前。

IP-ADDRESS

リモート IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

リモート IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

LINK この物理リンクに割り当てられる MSC 論理リンクの ID。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されます。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

PARTNERID

この論理リンク用のリモート・パートナーの ID。これは、この論理リンクを定義する MSLINK マクロ内の PARTNER パラメーターで指定されている ID です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

STATUS

この論理リンクの現在の状態。論理リンクは、以下の状態をもつことができます。

ACTIVE

この論理リンクにより、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

SENDCLNT

この接続でオープンしている送信ソケットを識別するために、IMS Connect のこのインスタンスによって生成される送信ソケット ID。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、SENDCLNT ID はクライアント ID として使用されます。

OTMA に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される接続上のソケットに生成された送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

RECVCLNT

この論理リンク用の受信ソケットを識別するクライアント

ID。クライアント ID は、リモート IMS Connect インスタンスによって生成されます。

この出力フィールドに戻された値は、列形式で表示されません。

この物理リンクに割り当てられる論理リンクが現在存在しない場合は、この出力フィールドは表示されません。

例

次の例では、QUERY MSC コマンドは、ローカル IMS Connect インスタンス HWS1 に定義されている、MSC 物理リンク MSC13 に関する情報を戻します。

```
F ICON1,QUERY MSC NAME(MSC13)
```

```
HWSC0001I MSC=MSC13 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC31
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1 RMTIMSID=IMS3
HWSC0001I GENIMSID= AFFINITY=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=ICONNT2
HWSC0001I IP-ADDRESS=127.0.0.1 PORT=9992
HWSC0001I HOSTNAME=
HWSC0001I NO ACTIVE LINK
```

次の例では、QUERY MSC コマンドは、MSC 物理リンク MSC12 に関する情報を戻します。

```
F ICON1,QUERY MSC NAME(MSC12)
```

```
HWSC0001I MSC=MSC12 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I RMTPLKID=MSC21
HWSC0001I LCLIMSID=IMS1 ,IMS3 RMTIMSID=IMS3
HWSC0001I GENIMSID=IMS AFFINITY=
HWSC0001I IMSPLEX=PLEX1
HWSC0001I MEMBER=HWS1 TARGET MEMBER=PLEX1
HWSC0001I RMTIMSCON=ICONNT1
HWSC0001I IP-ADDRESS=192.0.2.2 PORT=9999
HWSC0001I HOSTNAME=WWW.EXAMPLE.COM
HWSC0001I NO ACTIVE LINK
```

関連資料:

574 ページの『VIEWMSC コマンド』

 [QUERY IMSCON TYPE\(MSC\) コマンド \(コマンド\)](#)

IMS Connect QUERY PORT コマンド

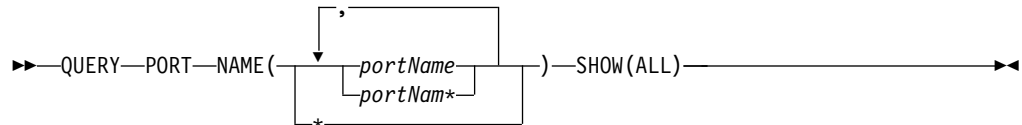
QUERY PORT コマンドは、要求されたポートの現在の状況を表示するために使用します。

PORT リソース・タイプは、TCP/IP にソケットをバインドするポート番号を指します。ポート名を指定する場合、その名前は、IMS Connect 構成メンバー内の TCP/IP 構成ステートメントの PORTID、CICSPORT、DRDAPORT、または SSLPORT サブステートメントで既に定義されているポート名でなければなりません。QUERY PORT コマンドは、VIEWPORT コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 642 ページの『出力フィールド』
- 例

構文



キーワード

QUERY または QRY は、指定されたリソースの状況または属性を照会するために使用します。PORT は、IMS Connect が管理する指定されたリソースです。QUERY PORT コマンドは、要求したポートの状況を表示するために使用します。

NAME (*portName*)

表示するポート名を指定します。単一ポート名、ワイルドカード名、または、コンマで区切ったポート名のリストを指定できます。すべてのポートを対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

SHOW()

戻される出力フィールドを指定します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。これはデフォルトです。

使用上の注意

QUERY PORT コマンドは、1 つのポートまたはすべてのポートに対する、現在の状況、クライアント、およびアクティビティーを表示するために使用します。

QUERY PORT によって表示される情報は、QUERY MEMBER コマンドによってすべてのポートに対して返される情報と同じです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY PORT コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY PORT NAME(*)	QUERY IMSCON TYPE(PORT)	VIEWPORT ALL
SHOW(ALL)	NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	

QUERY PORT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY PORT NAME(<i>port_id</i>) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>portid</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT <i>port_id</i>
QUERY PORT NAME(LOCAL) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(PORT) NAME(LOCAL) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWPORT LOCAL

出力フィールド

以下のリストは、QUERY PORT コマンド出力フィールドを示しています。

PORT=

以下の出力フィールドおよび状況が適用される 1 つ以上のポートを識別します。ポート番号は、IMS.PROCLIB データ・セットの IMS Connect 構成メンバー内で定義されます。

ポートのタイプは、ポート番号の末尾に付加されているポート・タイプ標識によって判別できます。IMS Connect では以下のポート・タイプ標識が使用されます。

タイプ標識なし

IMS TM OTMA クライアントおよび IMS 間 MSC または OTMA 通信に使用できるポートを示します。タイプ標識のないポートは、IMS Connect 構成メンバー内の TCPIP ステートメントの PORT キーワードまたは PORTID キーワードのいずれかで定義されます。

C ISC 通信用の IBM CICS Transaction Server for z/OS ポートを示します。このポートは、TCPIP および ISC ステートメントの CICSPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。CICS ポートは、ISC TCP/IP 経由で IMS TM にアクセスする CICS サブシステムが独占的に使用します。

D 分散リレーショナル・データベース体系 (DRDA) ポートを示します。このポートは、DRDAPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されます。DRDA ポートは、Open Database Manager (ODBM) を介して IMS DB にアクセスするクライアント・アプリケーション・プログラムによって排他的に使用されます。

S SSLPORT パラメーターで IMS Connect に対して定義されている SSL ポートを示します。SSL ポートが使用されるのは、IMS Connect による SSL のサポートが有効になっている場合のみです。

以下の出力フィールドは、前述の PORT 出力フィールドで識別されているポートに適用されます。

STATUS

ポートの状態。ACTIVE または INACTIVE のいずれかです。

KEEPAV

z/OS TCP/IP レイヤーが接続を維持するためにパケットを送信するまでに、接続がアイドル状態のままになる時間の長さ。

NUMSOC

各ポートで使用されるソケット数。

TIMEOUT

クライアントからメッセージが受信されない場合にクライアント接続を終了するまでに、IMS Connect が待機する時間の長さ。

CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS

または

CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN

受信ソケット上のアクティブ・クライアントの ID および情報。

各アクティブ・クライアントの情報は、単一の行に表示されます。クライアントは、見出し行の下でクライアント・タイプ別にグループ化されます。見出しの行は、そのクライアント・タイプについて返される情報を識別します。

ISC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID ISCNAME STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

MSC クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS。

OTMA および ODBM クライアントの場合、次の情報が表示されます。CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN。

次の例は、3 つの OTMA クライアントについて返される情報を示しています。

```
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.0
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
```

ポートにアクティブ・クライアントがない場合、これらの出力フィールドは表示されません。代わりに、コマンド出力で、ポートを示す行の後に NO ACTIVE CLIENTS が表示されます。

アクティブ・クライアントについて返される情報には、以下の内容がアルファベット順で含まれます。

APSB-TOKEN

Open Database Manager (ODBM) APSB トークン。

CLIENTID

クライアントの名前。

別の IMS Connect インスタンスからの接続については、別の IMS Connect インスタンスがこの値を生成します。

CLNTPORT

クライアントからの接続を表すために TCP/IP が生成する乱数。

DATASTORE

このクライアントに関連するデータ・ストア。

この接続のクライアントの IP アドレス。

IPV6 が使用可能にされている場合は、IP アドレスのフォーマットは、8 個の 16 進数をそれぞれコロンで区切ったものから成ります。IPV6 が使用できない場合、IPV4 の IP アドレス・フォーマットが使用されます。以下は、IPV6 形式で表示される IPV6 IP アドレスの例です。

FEDC:ABCD:2222:3333:FEDC:DB55:6666:3322

以下は、IPV6 形式で表示される IPV4 IP アドレスの例です。

0:0:0:0:0:FFFF:945:33FF

ISCNAME

IMS Connect 構成メンバー内の ISC ステートメントの名前。

LCLPLKID

IMS Connect がクライアントからのメッセージを経路指定する先の、ローカル IMS システム内の MSC 物理リンク。このフィールドは、MSC 通信についてのみ表示されます。

SECOND

クライアントが指定された状況にあった秒数。

STATUS

クライアントのスレッドの状態。クライアントのスレッド状態は以下のいずれかの値が可能です。

RECV

クライアントからの入力を待機している受信状態にあります。

READ

部分的な読み取り状態にあります。IMS Connect はクライアントからのメッセージを読み取っていますが、メッセージの全体はまだ受信できていません。

CONN

IMS からの出力を待っています。

XMIT クライアントにデータを送信しています。

CONV

会話型状態にあります。

WFCM

クライアントからの確認 (ACK、NAK、または DEALLOCATE) を待っています。

TRANCODE

クライアントが実行依頼したトランザクション・コード。

USERID

IMS Connect に渡される USERID 名。

例 1: QUERY PORT

コマンド入力:

```
F HWS1,QUERY PORT NAME(*) SHOW(ALL)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=4 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID USERID TRANCODE DATASTORE STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS APSB-TOKEN
HWSC0001I CLIENT63 USRT003 apo112 IMSY RECV WFCM 55 4118 192.0.2.0
HWSC0001I CLIENT62 USRT002 IMS1 CONN 210 4115 192.0.2.1
HWSC0001I CLIENT61 USRT001 apo112 IMSN RECV 13 4112 192.0.2.2
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=3 RECV=2 CONN=1 XMIT=0 OTHER=0
HWSC0001I PORT=LOCAL STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=0 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=9998S STATUS=NOT ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I PORT=1111D STATUS=ACTIVE KEEPAV=5 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=6000
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
HWSC0001I PORT=2222D STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=1 EDIT= TIMEOUT=100
HWSC0001I NO ACTIVE CLIENTS
```

説明: すべての IMS Connect ポートの状況が表示され、アクティブなクライアントがないことが示されます。

例 2: MSC 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

MSC 用に使用される IMS Connect から IMS Connect への接続では、VIEWPORT および QUERY PORT コマンドによって表示される情報は、IMS Connect から IMS Connect への接続の受信側のみに関連しています。IMS Connect から IMS Connect への接続の送信側に関する情報を表示するには、VIEWRMT または QUERY RMTIMSCON コマンドを使用してください。

次の出力例では、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドがローカル IMS Connect 上で実行されました。コマンド出力は、IMS Connect が MSC メッセージを受信するポート 9999 の情報を表示しています。ポート上のクライアント接続、MSCC73E0 および MSC0EBB0 が、CLIENTID の下に表示されています。LCLPLKID のラベルは、このポートが MSC TCP/IP 通信に使用されていることを示します。

```
HWSC0001I PORT=9999 STATUS=ACTIVE KEEPAV=0 NUMSOC=3 EDIT= TIMEOUT=0
HWSC0001I CLIENTID LCLPLKID STATUS SECOND CLNTPORT IP-ADDRESS
HWSC0001I MSCC73E0 MSC12 RECV 6 1026 2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I MSC0EBB0 MSC12 RECV 56 1025 2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I TOTAL CLIENTS=2 RECV=2 READ=0 CONN=0 XMIT=0 OTHER=0
```

例 3: OTMA 用の IMS Connect から IMS Connect への接続

IMS Connect インスタンス間のソケット接続が OTMA メッセージに使用されている場合、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドの出力は、受信側の IMS Connect インスタンスで実行されたときだけ、関連するポート情報を示します。

送信側の IMS Connect インスタンスでは、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドは IMS Connect から IMS Connect への接続に関連するポート情報を表示

しません。ただし VIEWRMT または QUERY RMTIMSCON コマンドは、接続に関連する送信側クライアント ID とともに、受信側 IMS Connect のリスニング・ポートを表示します。リスニング・ポートおよび送信側クライアント ID は、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドによって受信側インストールで表示情報と一致します。

受信側 IMS Connect インスタンスでは、VIEWPORT または QUERY PORT コマンドが、受信側 IMS Connect が聴取しているポートおよび接続に関連する送信側クライアント ID を表示します。

次の例は、受信側 IMS Connect インスタンス上の VIEWPORT または QUERY PORT コマンドからの出力を示したものです。受信側 IMS Connect が IMS Connect から IMS Connect への接続に使用するポートは、PORT=5555 によって識別されます。送信側 IMS Connect からの接続は、CLIENTID の下に表示される自動生成のクライアント ID、OTM924FA によって識別されます。この CLIENTID の値は、送信側 IMS インストールで SENDCLNT の下に表示される値と同じです。CLNTPORT は、送信側 IMS Connect が接続上でメッセージを送信するために使用するポートです。

```

HWSC0001I  PORT=5555  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=2  EDIT=  TIMEOUT=0
HWSC0001I  CLIENTID  USERID  TRANCODE  DATASTORE  STATUS  SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS  APSB-TOKEN
HWSC0001I  OTM924FA  APOL1  APOL1  IMS2  RECV  11  1026  2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I  TOTAL CLIENTS=1  RECV=1  READ=0  CONN=0  XMIT=0  OTHER=0

```

例 4: CICS への ISC TCP/IP 接続

コマンド入力:

```
F ICON1,QUERY PORT NAME(7777) SHOW(ALL)
```

コマンド出力:

```

HWSC0001I  PORT=7777C  STATUS=ACTIVE  KEEPAV=0  NUMSOC=3  EDIT=  TIMEOUT=0
HWSC0001I  CLIENTID  ISCNAME  STATUS  SECOND  CLNTPORT  IP-ADDRESS
HWSC0001I  ISC33333  LU6TCP2  CONN  14  3579  2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I  ISC44444  LU6TCP2  CONN  9  2468  2001:DB8:0:0:0:0/32
HWSC0001I  TOTAL CLIENTS=3  RECV=1  CONN=2  XMIT=0  OTHER=0

```

関連資料:

579 ページの『VIEWPORT コマンド』

 QUERY IMSCON TYPE(PORT) コマンド (コマンド)

IMS Connect QUERY RMTIMSCON コマンド

IMS Connect z/OS MODIFY コマンド QUERY RMTIMSCON は、IMS Connect のローカル・インスタンス内で、IMS Connect のリモート・インスタンスへのすべての接続に関する情報を表示するために使用します。

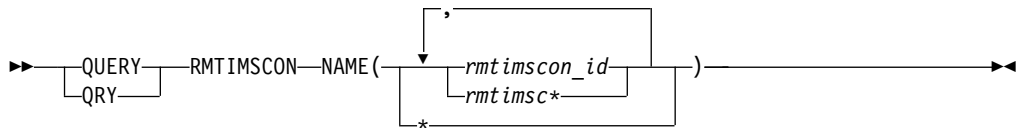
QUERY または QRY は、IMS Connect によって管理される、指定されたリソースの状況または属性を照会するために使用します。RMTIMSCON は、IMS Connect のローカル・インスタンスと IMS Connect のリモート・インスタンスの間の接続を表し、これは IMS Connect が管理するリソースです。

QUERY RMTIMSCON コマンドは、IMS Connect WTOR コマンド VIEWRMT と同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用法』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 648 ページの『出力フィールド』
- 651 ページの『例』

構文



キーワード

NAME(*rmtimscon_id*)

IMS Connect のリモート・インスタンスへの接続の ID。ここで指定される値は、ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されている RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定された値と一致していなければなりません。名前ではワイルドカード (* および %) がサポートされています。

使用法

QUERY RMTIMSCON コマンドは、IMS Connect のリモート・インスタンスとの接続の属性および状況に関する情報、および接続上で現在オープンされているソケットに関する情報を表示するために使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY RMTIMSCON コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

QUERY RMTIMSCON コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY RMTIMSCON NAME(*)	QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWRMT ALL
QUERY RMTIMSCON NAME(<i>rmtimscon_name</i>)	QUERY IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWRMT <i>rmtimscon_name</i>

出力フィールド

単一値のみを返す出力フィールドは、FIELD_LABEL=VALUE 形式 (例えば、RMTIMSCON=ICON1) で表示されます。

複数の値を返す出力フィールド (例えば、接続上の複数のソケットの出力フィールドなど) は、列形式で表示されます。この場合、フィールド・ラベルは列見出しであり、値はその列の見出しの下に個別の行に表示されます。例えば、次のようになります。

HWSC0001I	SENDCLNT	USERID	STATUS	SECOND	SENDPORT
HWSC0001I	OTM11111	USER01	CONN	100	1111
HWSC0001I	OTM22222	USER01	CONN	89	2222

以下のリストは、QUERY RMTIMSCON コマンド出力フィールドを説明していません。

RMTIMSCON=

このローカル IMS Connect インスタンスと IMS Connect のリモート・インスタンスとの間の接続を識別します。以下の追加出力フィールドが、RMTIMSCON 出力フィールドに示された接続に属する状況、属性、およびソケットを説明します。

STATUS

RMTIMSCON 出力フィールドに表示された接続の状態。接続は、以下のいずれかの状態になります。

ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットが少なくとも 1 つあります。

NOT ACTIVE

この接続には、リモート IMS Connect インスタンスにオープンしている送信ソケットがありません。

RETRY CONN

IMS Connect は、前回の接続の試行に失敗した後、リモート IMSConnect インスタンスへの再接続を自動的に試行しています。現在の再接続の試行が失敗に終わると、IMS Connect は 2 分ごとに再び再接続を試みます。

接続が RETRY CONN 状態の間、オープン・ソケットの数は変動します。再接続をアクティブに試行している間、IMS Connect はソケットをオープンします。IMS Connect は再接続の試行の 2 分間の間隔には、ソケットをクローズします。

STOPPED

STOPRMT コマンドがこの接続の通信を停止しました。この接続に送信されたすべてのメッセージは拒否され、送信側にエラーが返信されます。

IP-ADDRESS

この接続のリモート側にある IMS Connect インスタンスの IP アドレス。

PORT

この接続のリモート側 IMS Connect インスタンスで使用されるポート番号。

HOSTNAME

リモート IMS Connect インスタンスのホスト名 (該当する場合)。

AUTOCONN

IMS Connect の始動時に、IMS Connect がこの接続に OTMA 通信の送信ソケットを自動的に確立するかどうかを示します。可能な値は以下のとおりです。

Y IMS Connect の始動時に、この接続上で送信ソケットが自動的に確立されます。IMS Connect の始動時に確立されたソケット数が、RESVSOC 出力フィールドに表示されます。

N IMS Connect の始動時に、この接続で確立されるソケットはありません。OTMA メッセージについては、リモート IMS システムに配信するメッセージを OTMA から受信した時点で、送信ソケットが確立されます。

PERSISTENT

この接続上にあるソケットが永続的であるかどうかを示します。

Y この接続上に確立されたソケットは永続的です。

N この接続上に確立されたソケットは永続的ではありません。この接続でメッセージが送信された後、送信に使用されたソケットはクローズされます。

IDLETO

この接続上でソケットをオープンする時間間隔は、IMS Connect によってクローズされるまで、アイドル状態になります。

RESVSOC

この接続による使用に確保されている送信ソケットの数。

NUMSOC

この接続上で現在オープンしているソケットの数。

SENDCLNT

ランダムに生成された送信ソケット ID。IMS Connect のローカル・インスタンスでは、ID を使用して一意的にソケットを識別します。リモート IMS Connect インスタンスでソケット接続を確立する場合、送信ソケット ID がクライアント ID として使用されません。

OTMA に使用される送信ソケット ID は、先頭が「OTM」です。MSC に使用される送信ソケット ID は、先頭が「MSC」です。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

LCLPLKID

この接続を使用しているローカル MSC 物理リンクの ID。この値

は、IMS Connect 構成メンバーの中の MSC ステートメントの LCLPLKID パラメーターで指定されています。LCLPLKID 出力フィールドは、MSC 通信に使用される接続についてのみに表示されません。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

USERID

リモート IMS システムによるトランザクション許可のために、ローカル IMS システムによって提供されたユーザー ID。USERID 出力フィールドは、OTMA 通信に使用される接続についてのみに表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

STATUS

このソケット接続の現在の状態。ソケット接続は、以下のいずれかの状態になります。

CONN

このソケット接続により、リモート IMS Connect にメッセージを送信できます。

RECV

このソケット接続は、リモート IMS Connect からの応答の受信を待機しています。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SECOND

この接続が、STATUS 出力フィールド見出しの下の同じ行に表示されている状態を継続している秒数。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

SENDPORT

この接続に使用されるローカル・ポート。

この出力フィールドに戻された値は、表形式で表示されます。

現在この接続上でオープンしているソケットがない場合、この出力フィールドは表示されません。

例

QUERY RMTIMSCON コマンドの例 1

コマンド入力:

```
F ICON1,QUERY RMTIMSCON NAME(*)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I   RMTIMSCON=CONNECT2 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I   IP-ADDRESS=127.0.0.1      PORT=5555
HWSC0001I   HOSTNAME=ICON2.EXAMPLE.COM
HWSC0001I   AUTOCONN=N PERSISTENT=Y
HWSC0001I   IDLETO=6000
HWSC0001I   RESVSOC=10      NUMSOC=2
HWSC0001I   SENDCLNT LCLPLKID STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I   MSC11111 MSC12   CONN      100 1234
HWSC0001I   MSC22222 MSC12   CONN      89 5678
HWSC0001I   RMTIMSCON=CONNECT3 STATUS=ACTIVE
HWSC0001I   IP-ADDRESS=192.0.2.0     PORT=9999
HWSC0001I   HOSTNAME=ICON3.EXAMPLE.COM
HWSC0001I   AUTOCONN=Y PERSISTENT=Y
HWSC0001I   IDLETO=6000
HWSC0001I   RESVSOC=4      NUMSOC=4
HWSC0001I   SENDCLNT USERID  STATUS SECOND SENDPORT
HWSC0001I   OTM11111 USER01  CONN      100 1111
HWSC0001I   OTM22222 USER01  CONN      89 2222
HWSC0001I   OTM33333 USER02  CONN      81 3333
HWSC0001I   OTM44444 USER03  RECV      23 4444
```

関連資料:

535 ページの『STOPSCLN コマンド』

598 ページの『IMS Connect DELETE SENDCLNT コマンド』

585 ページの『VIEWRMT コマンド』

 [QUERY IMSCON TYPE\(RMTIMSCON\) コマンド \(コマンド\)](#)

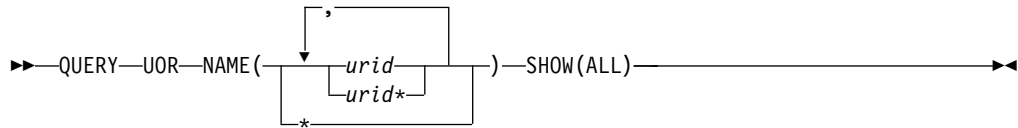
IMS Connect QUERY UOR コマンド

このコマンドは、リカバリー要求単位 (UOR) の現在の状況を表示するために使用されます。QUERY UOR は、VIEWUOR と同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 652 ページの『構文』
- 652 ページの『キーワード』
- 652 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 652 ページの『例』

構文



キーワード

QUERY または QRY は、指定されたリソースの状況または属性を照会するために使用されます。UOR は IMS Connect が管理するリソースです。QUERY MEMBER は、IMS Connect の状況を表示するために使用されます。このコマンドは、Operations Manager API または z/OS 変更インターフェースを介して出すことができます。

NAME()

表示するリカバリー単位 ID (URID) の名前を指定します。単一の URID、ワイルドカード、または、コンマで区切った URID のリストを指定できます。すべての UOR を対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

urid

表示される URID を指定します。

SHOW()

戻されるターゲット・タイプを指定します。

ALL

すべての出力フィールドを戻します。これはデフォルトです。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、QUERY UOR コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
QUERY UOR NAME(*) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(*) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWUOR ALL
QUERY UOR NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL)	QUERY IMSCON TYPE(UOR) NAME(<i>uor_id</i>) SHOW(ALL <i>show_parm</i>)	VIEWUOR <i>uor_id</i>

例

IMS Connect URID の状況を照会します。

コマンド入力:

```
F HWS1,QRY UOR NAME(*)
```

コマンド出力:

HWSC0050I NO ACTIVE UOR

関連資料:

590 ページの『VIEWUOR コマンド』

 QUERY IMSCON TYPE(UOR) コマンド (コマンド)

IMS Connect SHUTDOWN MEMBER コマンド

このコマンドは、IMS Connect をシャットダウンするために使用されます。SHUTDOWN MEMBER は、CLOSEHWS コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 654 ページの『例』

構文

▶▶ SHUTDOWN MEMBER OPTION(QUIESCE) ▶▶
 └──(FORCE)──┘

キーワード

SHUTDOWN または SHUT は、指定されたリソースをシャットダウンするために使用されます。MEMBER は、IMS Connect で指定される、管理されるリソースです。SHUTDOWN MEMBER コマンドは、IMS Connect をシャットダウンするために使用されます。

OPTION()

停止される属性を指定します。

QUIESCE

この終了により、制御された方法ですべてのクライアントおよびデータ・ストア接続を終了させることを指定します。

FORCE ()

終了が、すべてのクライアントおよびデータ・ストア接続を即時に終了させることを指定します。即時終了を行うと、接続されているクライアントと共に実行されている IMS アプリケーションは、すべて異常終了します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、SHUTDOWN MEMBER コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

SHUTDOWN MEMBER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマ ンド	同等の WTOR コマンド
SHUTDOWN MEMBER	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM)	CLOSEHWS
SHUTDOWN MEMBER OPTION(FORCE)	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(FORCE)	CLOSEHWS FORCE
SHUTDOWN MEMBER OPTION(QUIESCE)	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SHUTDOWN(COMM) OPTION(QUIESCE)	CLOSEHWS QUIESCE

例

強制オプションにより HWS をシャットダウンします。

コマンド入力:

```
F HWS07,SHUTDOWN MEMBER OPTION(FORCE)
```

コマンド出力:

```
HWS07 PURGED
```

説明: HWS メンバーがシャットダウンされます。

関連資料:

 [UPDATE IMSCON TYPE\(CONFIG\) コマンド \(コマンド\)](#)

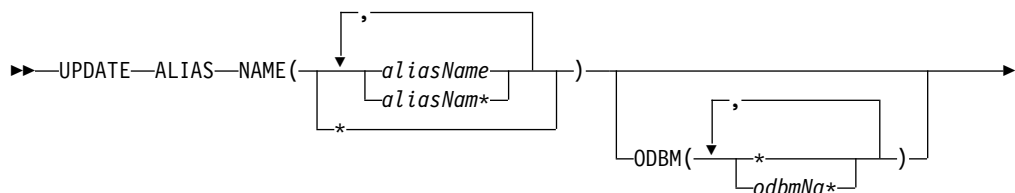
IMS Connect UPDATE ALIAS コマンド

UPDATE ALIAS コマンドは、要求された IMS 別名を更新するために使用します。UPDATE ALIAS コマンドは、STARTIA および STOPIA コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 655 ページの『キーワード』
- 655 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 656 ページの『例』

構文





キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。ALIAS は、IMS Connect によって管理されるリソースです。コマンド UPDATE ALIAS は、指定した別名の現在の状況を更新するために使用されます。

NAME()

更新する別名の名前を指定します。単一の別名、ワイルドカード名、または、コンマで区切った別名のリストを指定できます。すべての別名を対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

aliasName

更新する別名を指定します。

ODBM()

指定した別名に関連付ける Open Database Manager (ODBM) の名前を指定します。

START()

開始される属性を指定します。

ROUTE

この別名に対するメッセージ・ルーティングを使用可能に設定します。

STOP()

停止される属性を指定します。

ROUTE

この別名に対するメッセージ・ルーティングを使用不可に設定します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE ALIAS コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE ALIAS コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>) START(ROUTE)	UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	STARTIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>
UPDATE ALIAS NAME(<i>aliasName</i>) ODBM(<i>odbmName</i>) STOP(ROUTE)	UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) NAME(<i>alias_name</i>) ODBM(<i>odbm_name</i>) STOP(COMM)	STOPIA <i>alias_name</i> <i>odbm_name</i>

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPD ALIAS NAME(ALI1) STOP(ROUTE)
```

説明: この別名 ALI1 に対するメッセージ・ルーティングは使用不可に設定されま
す。

関連資料:

513 ページの『STARTIA コマンド』

524 ページの『STOPIA コマンド』

➡ UPDATE IMSCON TYPE(ALIAS) コマンド (コマンド)

IMS Connect UPDATE CONVERTER コマンド

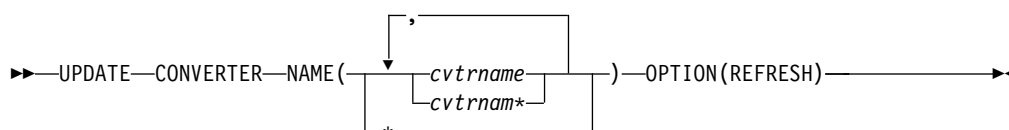
UPDATE CONVERTER コマンドは、IMS Connect を再始動せずに 1 つ以上の
XML コンバーターをリフレッシュするために使用します。

このコマンドは、WTOR コマンド REFRESH CONVERTER と同等です。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 657 ページの『使用上の注意』
- 657 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマ
ンド』
- 657 ページの『例』

構文



キーワード

以下のキーワードは、UPDATE CONVERTER コマンドに有効です。

cvtrname

リフレッシュする IMS Connect 用の XML コンバーターを指定します。パタ
ーン・マッチング用のワイルドカード・シンボル (*) がサポートされていま
す。ワイルドカードのみを指定すると、すべての XML コンバーターがリフレ
ッシュされます。

OPTION(REFRESH)

必須キーワード。

使用上の注意

z/OS 変更 ID を指定して、IMS Connect に対して UPDATE CONVERTER コマンドを発行します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE CONVERTER コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE CONVERTER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)	UPDATE IMSCON TYPE(CONVERTER) NAME(<i>converter_name</i>) OPTION(REFRESH)	REFRESH CONVERTER NAME(<i>converter_name</i>)

例

コマンド入力:

```
F hws1,UPDATE CONVERTER NAME(IMSPHBKD)
```

コマンド出力:

```
HWSA0375I XML CONVERTER IMSPHBKD WAS SUCCESSFULLY REFRESHED,M=XMLA
```

関連タスク:

 [IMS Connect クライアントの XML 変換サポートの構成 \(システム定義\)](#)

関連資料:

502 ページの『REFRESH CONVERTER コマンド』

 [UPDATE IMSCON TYPE\(CONVERTER\) コマンド \(コマンド\)](#)

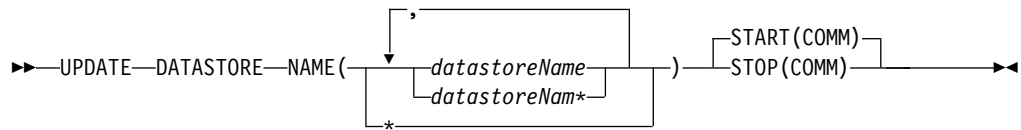
IMS Connect UPDATE DATASTORE コマンド

UPDATE DATASTORE コマンドは、要求されたデータ・ストアを更新するために使用されます。UPDATE DATASTORE は、OPENDS および STOPDS コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 658 ページの『構文』
- 658 ページの『キーワード』
- 658 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 659 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。DATASTORE は、IMS Connect が管理する、指定されたリソースです。コマンド UPDATE DATASTORE は、要求されたデータ・ストアの現在の状況を更新するために使用されます。

NAME()

更新するデータ・ストアの名前を指定します。単一のデータ・ストア、ワイルドカード名、または、コンマで区切ったデータ・ストアのリストを指定できます。すべてのデータ・ストアを対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*)を指定できます。

datastoreName

更新するデータ・ストアを指定します。

START()

開始される属性を指定します。

COMM

データ・ストアとの通信を開始します。

STOP()

停止される属性を指定します。

COMM

データ・ストアとの通信を停止します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE DATASTORE コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE DATASTORE コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE)	OPENDS <i>datastore_id</i>
START(COMM)	NAME(<i>datastore_name</i>) START(COMM)	STARTDS <i>datastore_id</i>
UPDATE DATASTORE NAME(<i>datastoreName</i>)	UPDATE IMSCON TYPE(DATASTORE)	STOPDS <i>datastore_id</i>
STOP(COMM)	NAME(<i>datastore_name</i>) STOP(COMM)	

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPD DATASTORE NAME(SOCKEYE) STOP(COMM)
```

コマンド出力:

```
HWS028I COMMUNICATION WITH DS=SOCKEYE    STOPPED;  
M=DSCM
```

説明: データ・ストア SOCKEYE との通信が停止されます。

関連資料:

497 ページの『OPENDS コマンド』

512 ページの『STARTDS コマンド』

523 ページの『STOPDS コマンド』

 [UPDATE IMSCON TYPE\(DATASTORE\) コマンド \(コマンド\)](#)

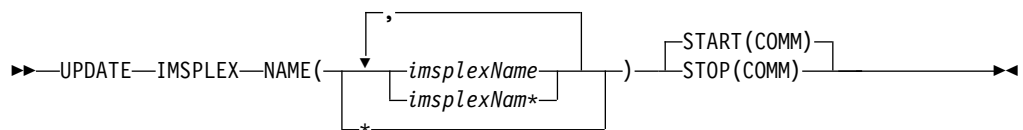
IMS Connect UPDATE IMSPLEX コマンド

UPDATE IMSPLEX コマンドは、IMS Connect と指定された IMSplex 間の通信を停止または開始するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 660 ページの『使用上の注意』
- 660 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 661 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。IMSPLEX は、IMS Connect によって管理されるリソースです。コマンド UPDATE IMSPLEX は、指定した IMSplex の現在の状況を更新するために使用されます。

NAME()

更新する IMSplex の名前を指定します。単一の IMSplex、ワイルドカード名、

または、コンマで区切った IMSplexes のリストを指定できます。すべての IMSplex を対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できません。

imsplexName

更新する IMSplex を指定します。

START ()

開始される属性を指定します。

COMM

IMSplex との通信を開始します。

STOP ()

停止される属性を指定します。

COMM

IMSplex との通信を停止します。

使用上の注意

STOP(COMM) キーワードを指定した UPDATE IMSPLEX NAME(*imsplexName*) が発行されると、IMSplex に対して現在進行中の作業が終了し、IMSplex との通信およびそのスレッドが終了します。進行中のメッセージはすべて拒否され、エラー・メッセージが要求側に返されます。STOPIP は、IMSplex との通信の即時終了を必要とするようなすべてのエラー状態に対して使用できます。

IMS Connect が ISC TCP/IP リンクをサポートしており、STOP(COMM) キーワードが使用されている場合、IMS Connect は各 ISC に関する通知を IMS に送信し、すべての ISC 並列セッションが ISC リンク上で終了したことを IMS に通知します。

IMS Connect が MSC IMS 間 TCP/IP 接続をサポートしており、STOP(COMM) キーワードが使用されている場合、IMS Connect は各 MSC 物理リンクについて IMS に通知を送信し、その物理リンク上のすべての MSC 論理リンクが終了したことを IMS に知らせます。

START(COMM) キーワードは、後に IMSplex との通信を開始するために使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE IMSPLEX コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE IMSPLEX コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) START(COMM)	OPENIP <i>imsplex_id</i> STARTIP <i>imsplex_id</i>

UPDATE IMSPLEX コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE IMSPLEX NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(IMSPLEX) NAME(<i>imsplex_name</i>) STOP(COMM)	STOPIP <i>imsplex_id</i>

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPD IMSPLEX NAME(PLEX1) STOP(COMM)
```


コマンド出力:

```
HWSM0584I COMMUNICATION WITH IMSPLEX=PLEX1 STOPPED; M=DSCM
```

説明: IMSplex、PLEX1 との通信が停止されます。

関連資料:

- 499 ページの『OPENIP コマンド』
- 514 ページの『STARTIP コマンド』
- 526 ページの『STOPIP コマンド』

 [UPDATE IMSCON TYPE\(IMSPLEX\) コマンド \(コマンド\)](#)

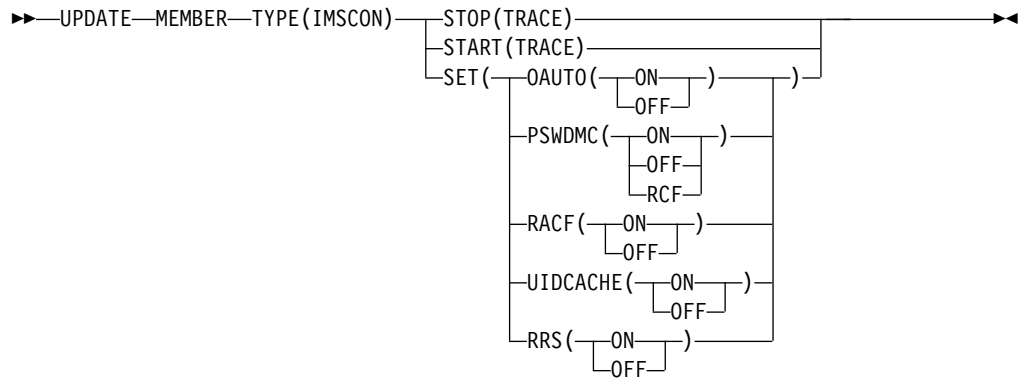
IMS Connect UPDATE MEMBER コマンド

UPDATE MEMBER コマンドは、IMS Connect の属性を更新するために使用されます。

サブセクション:

- 662 ページの『構文』
- 662 ページの『キーワード』
- 663 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 664 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたりソースの状況または属性を更新するために使用されます。MEMBER は IMS Connect が管理するリソースです。UPDATE MEMBER コマンドは、IMS Connect の状況を更新するために使用します。

TYPE()

アクションのターゲット・タイプを指定します。

IMSCON

ターゲット・タイプとして IMS Connect を指定します。

START()

開始される属性を指定します。

TRACE

回線トレースが開始されることを指定します。

STOP()

停止される属性を指定します。

TRACE

回線トレースが停止されることを指定します。

SET

変更される属性値を指定します。

OAUTO ()

設定される属性を指定します。

ON IMS Connect が、IMSplex に入る現在の ODBM と将来の ODBM のすべてに自動的に登録されるように設定します。

オフ IMS Connect が、IMSplex に入る将来のすべての ODBM に自動的に登録されないように設定します。

PSWDMC ()

IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを指定します。

ON IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを使用可能にします。

オフ IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートを使用不可にします。IMS Connect はパスワード内の小文字をすべて大文字に変換します。

RCF IMS Connect の大/小文字混合パスワードのサポートは、RACF に指定された大/小文字混合パスワードによって決定されます。RACF で大/小文字混合パスワードがサポートされない場合、IMS Connect は、パスワード内のすべての小文字を大文字に変換します。

RACF ()

IMS Connect で RACF セキュリティーを使用するかどうかを指定します。

ON RACF ユーザー識別・検査を使用可能にします。

オフ RACF ユーザー識別・検査を使用不可にします。

UIDCACHE()

IMS Connect が検証済み RACF ユーザー ID をキャッシュに保管するかどうかを指定します。このキーワードは、WTOR コマンド SETUIDC と同じ機能を実行します。

制約事項: このキーワードは、RACF セキュリティー・サポートが使用可能な場合にのみ有効です。

ON RACF ユーザー ID キャッシュを有効にします。

オフ RACF ユーザー ID キャッシュを無効にします。

RRS()

設定される属性を指定します。

ON IMS Connect と z/OS リソース・リカバリー・サービス (RRS) の間の通信を使用可能に設定します。RRS は、2 フェーズ・コミット・サポート用として必要です。

オフ IMS Connect と RRS の間の通信を使用不可にします。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE MEMBER コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE MEMBER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(ON))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(ON))	SETOAUTO YES
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(OAUTO(OFF))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(OAUTO(OFF))	SETOAUTO NO
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(ON))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(ON))	SETPWMC ON

UPDATE MEMBER コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(OFF))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(OFF))	SETPWMC OFF
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(PSWDMC(RCF))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(PSWDMC(RCF))	SETPWMC RCF
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(ON))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(ON))	SETRACF ON
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(OFF))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RACF(OFF))	SETRACF OFF
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(ON))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(ON))	SETRRS ON
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RRS(OFF))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(RRS(OFF))	SETRRS OFF
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(ON))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(ON))	SETUIDC ON
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(OFF))	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) SET(UIDCACHE(OFF))	SETUIDC OFF
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) START(TRACE)	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) START(RECORDER)	RECORDER OPEN
UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) STOP(TRACE)	UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) STOP(RECORDER)	RECORDER CLOSE

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPD MEMBER TYPE(IMSCON) SET(RACF(OFF))
```

コマンド出力: なし

コマンド入力:

```
F HWS1,QUERY MEMBER TYPE(IMSCON) SHOW(ALL)
```

コマンド出力:

```
HWSC0001I HWS ID=HWS1 RACF=N
```

説明: RACF セキュリティー検査がオフにされます。

コマンド入力:

```
F HWS1,UPDATE MEMBER TYPE(IMSCON) SET(UIDCACHE(ON))
```

コマンド出力:

```
HWSP1501I RACF USERID CACHING ENABLED,M=SDRC
```

説明: RACF ユーザー ID キャッシュは現在有効です。

関連資料:

501 ページの『RECORDER コマンド』

505 ページの『SETOAUTO コマンド』

507 ページの『SETPWMC コマンド』

508 ページの『SETRACF コマンド』

509 ページの『SETRRS コマンド』

510 ページの『SETUIDC コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(CONFIG) コマンド (コマンド)

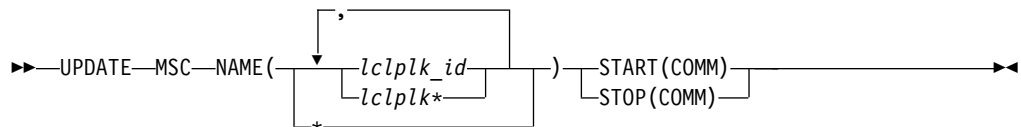
IMS Connect UPDATE MSC コマンド

UPDATE MSC コマンドは、ローカル IMS Connect インスタンス内で、IMS Connect インスタンスに対して定義されている MSC 物理リンク上の通信を開始または停止するために使用します。このコマンドは、STARTMSC コマンドおよび STOPMSC コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 666 ページの『使用法』
- 666 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 667 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。MSC は、IMS Connect によって管理されるリソースである MSC 物理リンク定義を表します。コマンド UPDATE MSC は、指定された MSC 物理リンクの現在の状況を更新するために使用されます。

NAME()

更新される MSC 物理リンクの名前。これは、MSC 構成ステートメントの

LCLPLKID パラメーターでローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されます。単一の MSC 物理リンク名、コンマで区切った MSC 物理リンク名のリスト、またはワイルドカード文字を使用した部分的な名前を指定できます。IMS Connect インスタンスに対して定義されたすべての MSC 物理リンクを対象にしてコマンドが実行されるようにするには、NAME(*) を指定できます。

START ()

開始される属性を指定します。

COMM

MSC 物理リンク上の通信を開始します。

STOP ()

停止される属性を指定します。

COMM

MSC 物理リンク上の通信を停止します

使用法

STOP(COMM) キーワードを指定した UPDATE MSC コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- 指定された MSC 物理リンク上の通信を停止します。これには、その物理リンクに割り当てられているすべての MSC 論理リンク上の通信が含まれます。
- 物理リンク上の通信が停止されたことを IMS に通知し、IMS でも物理リンクおよびその論理リンクに割り当てられているすべての論理リンクを終了できるようにします。
- MSC 物理リンクおよびそれに関連する論理リンクの状況を NOT ACTIVE に変更します。
- TCP/IP 汎用リソースの場合、物理リンクの IMS システムへの類似性をクリアします。
- メッセージ HWSF3305I を発行します。

START(COMM) キーワードを指定した UPDATE MSC コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- 指定された MSC 物理リンク上の通信を再開します
- MSC 物理リンクの状況を ACTIVE に変更します
- メッセージ HWSF3300I を発行します

IMS Connect に対して定義されている MSC 物理リンクに関する情報を表示するには、VIEWMSC MSC コマンドまたは QUERY コマンドを使用します。

同等の **IMS Connect** タイプ 2 コマンドおよび **WTOR** コマンド

以下の表には、UPDATE MSC コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE MSC コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) START(COMM)	STARTMSC <i>lclPlkid</i>
UPDATE MSC NAME(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(MSC) NAME(<i>lclPlkid</i>) STOP(COMM)	STOPMSC <i>lclPlkid</i>

例

STOP(COMM) キーワードを指定した場合の UPDATE MSC コマンド入力:

```
F ICON1,UPDATE MSC NAME(MSC12) STOP(COMM)
```

STOP(COMM) キーワードを指定した場合の UPDATE MSC コマンド出力:

```
HWSF3305I COMMUNICATIONS ON MSC PHYSICAL LINK MSC12 STOPPED; M=mc
```

START(COMM) キーワードを指定した場合の UPDATE MSC コマンド入力:

```
F ICON1,UPDATE MSC NAME(MSC12) START(COMM)
```

START(COMM) キーワードを指定した場合の UPDATE MSC コマンド出力:

```
HWSF3300I COMMUNICATIONS ON MSC PHYSICAL LINK MSC12 STARTED; M=mc
```

関連資料:

516 ページの『STARTMSC コマンド』

529 ページの『STOPMSC コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(MSC) コマンド (コマンド)

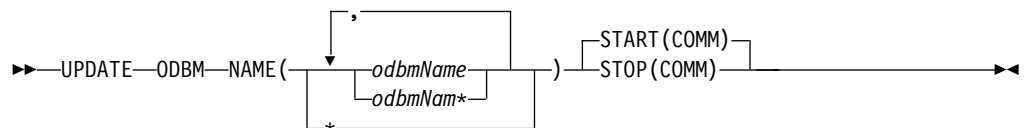
IMS Connect UPDATE ODBM コマンド

UPDATE ODBM コマンドは、要求された ODBM を更新するために使用します。UPDATE ODBM は、STARTOD および STOPOD コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 668 ページの『キーワード』
- 668 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。 ODBM は、IMS Connect によって管理されるリソースです。コマンド UPDATE ODBM は、指定した ODBM の現在の状況を更新するために使用されます。

NAME ()

更新する ODBM の名前を指定します。単一の ODBM、ワイルドカード名、または、コンマで区切った ODBM のリストを指定できます。すべての ODBM を対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

odbmName

更新する ODBM を指定します。

START ()

開始される属性を指定します。

COMM

ODBM との通信を開始します。

STOP ()

停止される属性を指定します。

COMM

ODBM との通信を停止します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE ODBM コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE ODBM コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE ODBM NAME(<i>odbmName</i>) START(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) NAME(<i>odbm_name</i>) START(COMM)	STARTOD <i>odbm_name</i>

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPD ODBM NAME(ODBM10D) STOP(COMM)
```

コマンド出力:

```
HWSN1985I COMMUNICATION WITH ODBM=ODBM10D CLOSED; M=DSCM
```

説明: ODBM、ODBM10D との通信が停止されます。

関連資料:

517 ページの『STARTOD コマンド』

531 ページの『STOPOD コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(ODBM) コマンド (コマンド)

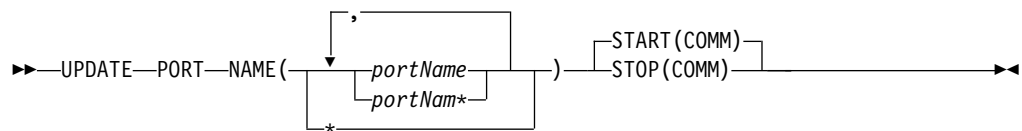
IMS Connect UPDATE PORT コマンド

このコマンドは、IMS Connect に使用されるポートを更新するために使用されます。UPDATE PORT は、OPENPORT および STOPPORT コマンドと同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 670 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。PORT は IMS Connect が管理するリソースです。UPDATE PORT コマンドは、要求されたポートの状況を更新するために使用されます。

NAME()

更新するポート名を指定します。単一ポート、ワイルドカード名、または、コンマで区切ったポート名のリストを指定できます。すべてのポートを対象としてこのコマンドを処理するには、NAME(*) を指定できます。

portName

表示されるポートを指定します。

START()

開始される属性を指定します。

COMM

TCP/IP ポートとの通信を開始します。

STOP()

停止される属性を指定します。

COMM

TCP/IP ポートとの通信を停止します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE PORT コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE PORT コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) START(COMM)	OPENPORT <i>port_id</i> STARTPT <i>port_id</i>
UPDATE PORT NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(PORT) NAME(<i>port_name</i>) STOP(COMM)	STOPPORT <i>port_id</i>

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPD PORT NAME(9999) STOP(COMM)
```

コマンド出力:

```
HWSS0770I LISTENING ON PORT=9999    TERMINATED;  
M=SSCH
```

説明: ポートは更新されています。

関連資料:

500 ページの『OPENPORT コマンド』

519 ページの『STARTPT コマンド』

532 ページの『STOPPORT コマンド』

 [UPDATE IMSCON TYPE\(PORT\) コマンド \(コマンド\)](#)

IMS Connect UPDATE RACFUID コマンド

UPDATE RACFUID コマンドは、IMS Connect RACF ユーザー ID キャッシュに保管された 1 つ以上のキャッシュ済み ID をリフレッシュするために使用します。

このコマンドは、WTOR コマンド REFRESH RACFUID と同じ機能を実行します。

サブセクション:

- 671 ページの『構文』
- 671 ページの『キーワード』
- 671 ページの『使用上の注意』
- 671 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 671 ページの『例』

構文

```
►► UPDATE RACFUID NAME ( uidname ) OPTION ( REFRESH ) ►►
```

キーワード

以下のキーワードは、UPDATE RACFUID コマンドに有効です。

uidname

リフレッシュする IMS Connect の RACF ユーザー ID を指定します。

OPTION(REFRESH)

必須キーワード。

使用上の注意

z/OS 変更 ID を指定して、IMS Connect に対して UPDATE RACFUID コマンドを発行します。

同等の **IMS Connect** タイプ 2 コマンドおよび **WTOR** コマンド

以下の表には、UPDATE RACFUID コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE RACFUID コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE RACFUID NAME(<i>userid</i>) OPTION(REFRESH)	UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) NAME(<i>userid</i>) OPTION(REFRESH)	REFRESH RACFUID NAME(<i>userid</i>)

例

コマンド入力:

```
F HWS1,UPDATE RACFUID NAME(USRT001)
```

コマンド出力:

```
HWSP1504I RACF USERID USRT001 WAS SUCCESSFULLY REFRESHED,M=SDRC
```

関連概念:

➡ IMS Connect の RACF ユーザー ID キャッシュ (コミュニケーションおよびコネクション)

関連資料:

504 ページの『REFRESH RACFUID コマンド』

➡ UPDATE IMSCON TYPE(RACFUID) コマンド (コマンド)

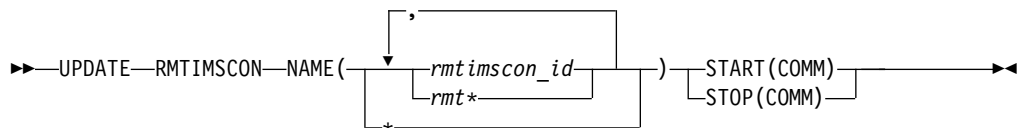
IMS Connect UPDATE RMTIMSCON コマンド

z/OS MODIFY コマンド UPDATE RMTIMSCON は、ローカル IMS Connect インスタンス内で、リモート IMS Connect インスタンスとの通信を開始または停止するために使用します。このコマンドは、WTOR コマンド STARTRMT および STOPRMT と同様の機能を実行します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 673 ページの『使用法』
- 674 ページの『同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド』
- 674 ページの『例』

構文



キーワード

UPDATE または UPD は、指定されたリソースの状況または属性を更新するために使用されます。RMTIMSCON は、リモート IMS Connect インスタンスへの接続を表します。この接続は、IMS Connect によって管理されるリソースです。コマンド UPDATE RMTIMSCON は、指定された接続の現在の状況を更新するために使用されます。

NAME()

更新されるリモート IMS Connect 接続の名前。これは、ローカル IMS Connect インスタンスへの接続を定義する RMTIMSCON ステートメントの ID パラメーターで指定されています。単一の接続、コンマで区切った接続のリスト、またはワイルドカード文字を使用した部分的な名前を指定できます。ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されたすべてのリモート IMS Connect インスタンス接続を対象にしてコマンドを発行するには、NAME(*) を指定します。

START()

開始される属性を指定します。

COMM

指定されたリモート IMS Connect 接続上の通信を開始します。

STOP()

停止される属性を指定します。

COMM

指定されたリモート IMS Connect 接続上の通信を停止します。

使用法

START(COMM) キーワードを指定した UPDATE RMTIMSCON コマンドが発行されると、IMS Connect は、リモート IMS Connect インスタンスへの指定された接続上で通信を再開します。IMS Connect は、IMS Connect のリモート・インスタンスとの通信用に新規ソケットがオープンされるまで、接続の状況を NOT ACTIVE に変更します。

UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドが必要になるのは、リモート IMS Connect インスタンスとの接続上の通信が STOPRMT コマンドまたは UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) コマンドによって以前に停止されている場合に限られます。

指定された RMTIMSCON 接続が AUTOCONN=Y で定義されている場合、UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドが発行されると、IMS Connect はリモート IMS Connect へのソケット接続を自動的に作成します。IMS Connect がオープンするソケット接続の数は、RMTIMSCON 構成ステートメントの RESVSOC パラメーターで決定されます。

OTMA 通信は、IMS Connect が UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドを処理するとすぐに再開できます。

MSC 通信の場合、IMS Connect 内で STOPMSC コマンドによって MSC 通信も停止された場合、UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドを発行した後、さらに STARTMSC コマンドまたは UPDATE MSC START(COMM) コマンドを発行して、リモート IMS Connect との MSC 物理リンクを再確立する必要があります。

STOP(COMM) キーワードを指定した UPDATE RMTIMSCON コマンドが発行されると、IMS Connect は、以下の操作を実行します。

- コマンドで指定された接続上のリモート IMS Connect インスタンスとのすべての通信を停止します。
- リモート IMS Connect インスタンスへの接続が停止されたことを IMS に通知し、IMS が影響を受けた MSC 論理リンクをシャットダウンできるようにします。
- 既存のソケット接続を終了し、STARTRMT コマンドまたは UPDATE RMTIMSCON START(COMM) コマンドが発行されるまで、新規のソケット接続を防止します。
- 接続の状況を STOPPED に変更します。
- メッセージ HWST3505I を発行します。

UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) コマンドが発行された後、IMS Connect が STOPPED 状態の接続についてメッセージを受け取った場合、IMS Connect は NAK 応答を OTMA に返し、メッセージ HWST3575W を発行します。OTMA は、キューの先頭にメッセージを保持します。

ローカル IMS Connect インスタンスに対して定義されているリモート IMS Connect インスタンスへの現行接続に関する情報表示するには、QUERY RMTIMSCON コマンドを使用します。

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド

以下の表には、UPDATE RMTIMSCON コマンドと同様の機能を実行する IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび IMS Connect WTOR コマンドがリストされています。

UPDATE RMTIMSCON コマンド	同等の IMS Connect タイプ 2 コマンド	同等の WTOR コマンド
UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) START(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) START(COMM)	STARTRMT <i>rmtimsconName</i>
UPDATE RMTIMSCON NAME(<i>rmtimsconName</i>) STOP(COMM)	UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) NAME(<i>rmtimscon_name</i>) STOP(COMM)	STOPRMT <i>rmtimsconName</i>

例

UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) のコマンド入力:

```
F ICON1,UPDATE RMTIMSCON NAME(CONNECT2) STOP(COMM)
```

UPDATE RMTIMSCON STOP(COMM) のコマンド出力:

```
HWST3505I COMMUNICATIONS WITH REMOTE IMS CONNECT CONNECT2 STOPPED; M=TSCH
```

UPDATE RMTIMSCON START(COMM) のコマンド入力:

```
F ICON1,UPDATE RMTIMSCON NAME(CONNECT2) START(COMM)
```

UPDATE RMTIMSCON START(COMM) のコマンド出力:

```
HWST3500I COMMUNICATIONS WITH REMOTE IMS CONNECT CONNECT2 STARTED; M=TSCH
```

関連資料:

520 ページの『STARTRMT コマンド』

533 ページの『STOPRMT コマンド』

 UPDATE IMSCON TYPE(RMTIMSCON) コマンド (コマンド)

第 7 部 IMS 制御領域コマンド

IMS 制御領域コマンドは、IMS 領域を処理するために使用します。

- 677 ページの『第 25 章 MODIFY imsproc コマンド』

第 25 章 MODIFY *imsproc* コマンド

MODIFY (F) *imsproc* コマンドは、IMS 領域を制御するために使用します。

関連資料:

705 ページの『第 29 章 TRACE CT コマンド』

F *jobname,DUMP*

MODIFY (F) *jobname,DUMP* コマンドは、オフライン・ダンプを取って IMS を強制終了します。

構文

►►—F—*jobname,DUMP*—►►
└—MODIFY—┘

使用上の注意

DBCTL の場合、次に挙げるものは異常終了しますが、次の /ERESTART コマンドまでロールバックされません。

- アクティブ・スレッド
- BMP
- DEDB ユーティリティー

例

入力 z/OS SC:

F *jobname,DUMP*

応答 z/OS SC:

DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED
DFS629I IMS STM TCB ABEND - IMS 0020

F *jobname,DUMPxxxx*

MODIFY (F) *jobname,DUMPxxxx* コマンドは、ダンプを取って、1 つ以上の接続された外部サブシステム接続を終了します。ここでは、「外部サブシステム」は非 CCTL サブシステムを意味します。

構文

►►—F—*jobname,DUMPxxxx*—►►
└—MODIFY—┘

使用上の注意

xxxx を ESS と指定した場合には、親の外部サブシステムのタスクと外部サブシステムの全サブタスクが終了します。xxxx が特定の外部サブシステム名である場合には、その外部サブシステムのみが終了します。指定するサブシステムは、IMS 外部サブシステムの PROCLIB メンバーで定義されているものでなければなりません。

例

ここでは、F jobname,DUMPxxxx コマンドの使用例をいくつか示します。

F jobname,DUMPxxxx の例 1

入力 z/OS SC:

```
F jobname,DUMPname
```

応答 z/OS SC:

```
DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED
DFS629I IMS ESI TCB DUMP - IMS 0020 IES
DFS3611I EXTERNAL SUBSYSTEM name CONNECTION TERMINATED
```

F jobname,STOPxxxx の例 2

入力 z/OS SC:

```
F jobname,DUMPESS
```

応答 z/OS SC:

```
DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED
DFS629I IMS ESS TCB DUMP - IMS 0020
DFS629I IMS ESS TCB DUMP - IMS 4095 IES
DFS3611I EXTERNAL SUBSYSTEM name CONNECTION TERMINATED
```

F jobname,FORCExxxx

MODIFY (F) jobname,FORCExxxx コマンドは、ダンプを取らずに、1 つ以上の接続された外部サブシステム接続を終了します。

構文

```
►► ┌── F ──┐ ── jobname, FORCExxxx ──►►
    └── MODIFY ──┘
```

使用上の注意

xxxx を ESS と指定した場合には、親の外部サブシステムのタスクと外部サブシステムの全サブタスクが終了します。xxxx が特定の外部サブシステム名である場合には、その外部サブシステムのみが終了します。指定するサブシステムは、IMS 外部サブシステムの PROCLIB メンバーで定義されているものでなければなりません。

FORCE オプションは、他の IMS タスク (例えば、制御タスク) には適用できません。IMS は、外部サブシステム終了出口 (例えば、サブシステム終了出口および識別終了出口) とは通信しません。

IMS が通信しない理由は、外部サブシステムでエラー (WAIT STATE など) が起きた場合に、インストール・システムで IMS と他のサブシステム間の接続を中断できるようにするためです。IMS が、STOP/DUMP オプションを使用した場合と同様に出口の 1 つを呼び出すことになっていたとすれば、その出口は再度 WAIT STATE を開始することができ、その結果、該当のサブシステム接続を終了させないようにすることがあります。

STOP または DUMP のいずれによってもサブシステム接続を中断することができない場合には、FORCE オプションを使用します。

例

ここでは、F jobname,FORCExxxx コマンドの使用例をいくつか示します。

F jobname,FORCExxxx の例 1

入力 z/OS SC:

```
F jobname,FORCEname
```

応答 z/OS SC:

```
DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED
DFS629I IMS ESI TCB DUMP - IMS 0020 IES
DFS3611I EXTERNAL SUBSYSTEM name CONNECTION TERMINATED
```

F jobname,FORCExxxx の例 2

入力 z/OS SC:

```
F jobname,FORCEESS
```

応答 z/OS SC:

```
DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED
DFS629I IMS ESS TCB DUMP - IMS 0020
DFS629I IMS ESS TCB DUMP - IMS 4095 IES
DFS3611I EXTERNAL SUBSYSTEM name CONNECTION TERMINATED
```

F jobname,RECONNECT

MODIFY (F) jobname,RECONNECT コマンドは、このコマンドを入力した IMS システムを、再始動後の IRLM に再接続させます。

構文

```
➤ ───┬─── F ───┬─── jobname,RECONNECT ───┬─── ➤
      │         │
      └─┬─┘     └─┬─┘
        MODIFY
```

使用上の注意

jobname は、IMS 制御領域のジョブ名またはプロシージャー名です。このコマンドが正常に完了すると、IRLM が再接続されたことを示すメッセージが、IMS マスター端末オペレーターと z/OS コンソール・オペレーターの両方に送られます。その後で、IMS MTO は、IRLM 障害が起きた時にブロック・レベル共用に参与していた高速機能 DEDB エリアを開始することができます。

例

この例では、IRLM の終了時に、その同じ IRLM に 2 つの IMS サブシステムが接続されています。

z/OS SYSTEM SC の受信メッセージ:

```
DXR121I KRLM212 END-OF-TASK CLEAN-UP SUCCESSFUL - HI-CSA 410K -  
HI-ACCT-CSA 0K
```

IMS 1 MT の受信メッセージ:

```
DFS2500I IMSA DATABASE dbname SUCCESSFULLY DEALLOCATED
```

IMS 2 MT の受信メッセージ:

```
DFS2500I IMSB DATABASE dbname SUCCESSFULLY DEALLOCATED
```

z/OS SYSTEM SC:

```
S KRLM1
```

z/OS SYSTEM SC の受信メッセージ:

```
DXR180I KRLM212 AUTOMATIC RESTART MANAGER IS NOT ENABLED  
または、  
DXR172I KRLM212 armelementname ARM READY COMPLETED  
DXR117I KRLM212 INITIALIZATION COMPLETE
```

z/OS SYSTEM SC:

```
F jobname,RECONNECT
```

IMS 1 MT AND z/OS SYSTEM SC の受信メッセージ:

```
DFS626I KRLM RECONNECT COMMAND SUCCESSFUL. IMSA
```

z/OS SYSTEM SC:

```
F jobname,RECONNECT
```

IMS 1 MT AND z/OS SYSTEM SC の受信メッセージ:

```
DFS626I KRLM RECONNECT COMMAND SUCCESSFUL. IMSB
```

IMS MT:

```
/START AREA areaname
```

説明: IRLM が異常終了しました。IRLM が正常に再始動すると、z/OS オペレーターは IMS システムを変更し、再始動済み IRLM に再接続します。この領域は、その後で /START AREA コマンドを使って再始動できるようになります。

F jobname,STOPxxxx

MODIFY (F) jobname,STOPxxxx コマンドは、ダンプを取らずに、1 つ以上の接続された外部サブシステム接続を終了します。ここでは、「外部サブシステム」は非 CCTL サブシステムを表します。

構文

```
►► ┌── F ───┐ ─── jobname,STOPxxx ───►►  
    └──MODIFY──┘
```

使用上の注意

xxxx を ESS と指定した場合には、親の外部サブシステムのタスクと外部サブシステムの全サブタスクが終了します。xxxx が特定の外部サブシステム名である場合には、その外部サブシステムのみが終了します。指定するサブシステムは、IMS 外部サブシステムの PROCLIB メンバーで定義されているものでなければなりません。

このコマンドを発行する場合、MPP 領域を停止してから再び稼働させる (リサイクルする) 必要があります。

例

ここでは、F jobname,STOPxxxx コマンドの使用例をいくつか示します。

F jobname,STOPxxxx の例 1

入力 z/OS SC:

```
F jobname,STOPname
```

応答 z/OS SC:

```
DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED  
DFS629I IMS ESI TCB DUMP - IMS 0020 IES  
DFS3611I EXTERNAL SUBSYSTEM name CONNECTION TERMINATED
```

F jobname,STOPxxxx の例 2

入力 z/OS SC:

```
F jobname,STOPESS
```

応答 z/OS SC:

```
DFS628I ABNORMAL TERMINATION SCHEDULED  
DFS629I IMS ESS TCB DUMP - IMS 0020  
DFS629I IMS ESS TCB DUMP - IMS 4095 IES  
DFS3611I EXTERNAL SUBSYSTEM name CONNECTION TERMINATED
```

第 8 部 IRLM コマンド

IRLM コマンドは、IRLM コンポーネントを制御するために使用します。

- 685 ページの『第 26 章 MODIFY irlmproc コマンド』
- 699 ページの『第 27 章 START irlmproc コマンド』
- 703 ページの『第 28 章 STOP irlmproc コマンド』
- 705 ページの『第 29 章 TRACE CT コマンド』

第 26 章 MODIFY irlmproc コマンド

MODIFY (F) *irlmproc* コマンドは、IRLM の状況を表示するため、および IRLM を異常終了させるために使用されます。

これらのコマンドは、z/OS コンソールからのみ出すことができます。

F irlmproc,ABEND

MODIFY *irlmproc,ABEND* コマンドは、IRLM に識別されている IMS サブシステムがあるかどうかに関係なく、IRLM を異常終了させるために使用します。

構文

```
➤ ───┬─── F ───┬─── irlmproc,ABEND ───┬─── ───┬─── ➤  
      └───┬───┘ └───┬───┘  
      MODIFY      ,NODUMP
```

使用上の注意

irlmproc は、終了させる IRLM のプロシージャ名を識別します。終了する前に、IRLM は、すべてのアクティブ IMS STATUS 出口ルーチンを開始して、それらのルーチンに保留終了を通知します。

NODUMP パラメーターを指定すると、IRLM はダンプを生成しないで終了します。NODUMP パラメーターを指定しないと、SYS1.DUMPxx データ・セットにシステム・ダンプが取られます。

推奨事項: 未解決の IMS 要求が処理中のため IRLM が終了しない場合 (DXR011I *irlmproc* END-OF-TASK CLEAN-UP SUCCESSFUL メッセージが受信されていない場合) は、以下の方法を (以下に示す順序で) 使用して、IRLM を強制終了します。

1. MODIFY *irlmproc,ABEND,NODUMP* コマンドを出す。これによって、IRLM を、未解決の IMS 要求をクリーンアップせずに終了させます。
2. z/OS CANCEL コマンドを出す。
3. z/OS FORCE コマンドを出す。この方法によって、*irlmproc* は、サブシステムの再始動を可能にするために必要なクリーンアップが完了できなくなる恐れがあるため、この方法は最も好ましくないものです。

例

ここでは、F *irlmproc,ABEND* コマンドの使用例をいくつか示します。

F *irlmproc,ABEND* の例 1

z/OS SYSTEM 1 SC:

```
F IR21J,ABEND
```

システム 1 SC への応答: (メッセージの一部)

```
DXR124E JR21212 ABENDED VIA MODIFY COMMAND
DUMPID=001 REQUESTED BY JOB (IR21J )
IEA794I SVC DUMP HAS CAPTURED: 857
DUMP TITLE=JR21 ESTAE ENTERED. ABEND U2020 MODULE DXRRL020+0A98
APAR PQ15432 1999/007 14:14:03
IXL030I CONNECTOR STATISTICS FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 860
CONNECTOR IRLMGRPR$JR21212:
IXL031I CONNECTOR CLEANUP FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 861
CONNECTOR IRLMGRPR$JR21212, HAS COMPLETED.
DXR121I JR21212 END-OF-TASK CLEANUP SUCCESSFUL - HI-CSA 410K -
HI-ACCT-CSA 0K
IEF450I IR21J IR21J - ABEND=S000 U2020 REASON=00000000
IEF352I ADDRESS SPACE UNAVAILABLE
$HASP395 IR21J ENDED
```

システム 2 SC への応答: (メッセージの一部)

```
DXR137I IR21001 GROUP STATUS CHANGED. JR21 212 HAS BEEN DISCONNECTED
FROM THE DATA SHARING GROUP
```

説明: システム 1 のオペレーターは IR21J という名前のプロシーチャーを終了しました。システム 2 のオペレーターには、システム 1 の IRLM に障害が起きたことが知らされます。

F *irlmproc*,ABEND の例 2

z/OS SYSTEM 2 SC:

```
F IR21J,ABEND,NODUMP
```

システム 2 SC への応答: (メッセージの一部)

```
DXR165I JR21212 TERMINATED VIA IRLM MODIFY COMMAND.
IXL030I CONNECTOR STATISTICS FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 976
CONNECTOR IRLMGRPR$JR21212:
.....
IXL020I CLEANUP FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 980
CONNECTION ID 02, STARTED BY CONNECTOR IRLMGRPR$IR21001
IXL021I GLOBAL CLEANUP FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 981
CONNECTION ID 02, BY CONNECTOR IRLMGRPR$IR21001
HAS COMPLETED.
DXR121I JR21212 END-OF-TASK CLEANUP SUCCESSFUL - HI-CSA 343K -
HI-ACCT-CSA 0K
IEF352I ADDRESS SPACE UNAVAILABLE
$HASP395 IR21J ENDED
```

システム 1 SC への応答: (メッセージの一部)

```
DXR137I IR21001 GROUP STATUS CHANGED. JR21 212 HAS BEEN DISCONNECTED
FROM THE DATA SHARING GROUP
```

説明: システム 2 のオペレーターは、IR21J という名前のプロシーチャーを終了し、SDUMP ダンプを抑制しました。システム 1 のオペレーターには、システム 2 の IRLM に障害が起きたことが知らされます。

F *irlmproc*,DIAG,HANG

HANG は、DEADLOCK または TIMEOUT の問題が発生している疑いがある場合に、IRLM シスプレックス・ダンプを収集するために、IBM サービスの指示の下で使用します。

構文

```
►► F ─────────── irlmproc,DIAG,HANG ───────────►►  
    └─┬─┘  
      MODIFY
```

使用上の注意

このコマンドは、DEADLOCK 処理中にダンプを取り、動的デッドロック・ストレージの収集時に DEADLOCK 処理を停止させます。その後、z/OS DUMP サービスが、DEADLOCK 処理を再開するように SRB をスケジュールします。SRB が IRLM デッドロックを再開すると、それぞれの IRLM によって DXR183I が出されます。

このメッセージが出されない場合、その IRLM は終了し、再始動しなければなりません。

注: IRLM SCF CTRACE は常に内部で開始し、30 秒間待機してから出してください。

F irlmproc,PURGE,imsname

MODIFY (F) *irlmproc,PURGE,imsname* コマンドは、IMS、IRLM、またはサブシステム障害が原因で特定の IMS サブシステムについて保持されていた IRLM ロックを解放します。このコマンドを使用すると、識別されている IMS ごとに、STATUS 出口ルーチンが活動化されます。

構文

```
►► F ─────────── irlmproc,PURGE,imsname ───────────►►  
    └─┬─┘  
      MODIFY
```

使用上の注意

このコマンドは、次のリカバリー状況で使用されます。

- データベースのクリーンアップが実行され、RECON データ・セットに反映されたが、IRLM にはそのことが知らせられなかった場合。一般に、IRLM が再接続される前にバッチ・バックアウトが実行されると、これが起こります。PURGE コマンドが出された後、ロックされていたデータは、アクティブな IMS システムに使用可能になります。
- 後でリカバリーが実行されるので、他の IMS システムがデータベースを使用不能にする必要がある場合。

制約事項: このコマンドを実行する前に、IMS が非アクティブ (ダウン) であることを確認してください。DBCTL 環境では、IMS がアクティブ (アップ) のときは、/CHANGE CCTL コマンドを使用してください。

imsname は、STATUS コマンドにより表示される IMS 名です。 *irlmproc* は、それぞれの IRLM のプロシージャ名を識別します。同じシステムに複数の IRLM が存在する場合は、それぞれのプロシージャは固有のプロシージャ名をもってい

る必要があります。 *irlmproc* は、障害のあるメンバーと同じシスプレックス・グループに接続されているアクティブ IRLM のプロシージャー名でなければなりません。非アクティブ IRLM を使用してページ要求を出すと、エラー・メッセージ IEE341I *irlmproc* NOT ACTIVE が出されます。

例

ここでは、F *irlmproc,PURGE,imsname* コマンドの使用例をいくつか示します。

ダウン状態の IMS (例えば IMS1) から保持ロックをクリーンアップするには、まず、*irlmproc* (例えば *ims1irlm*) がアップ状態かどうかを確認するために、以下のコマンドを出します。

```
D A,L
```

IRLM がアップ (アクティブ) であれば、以下のコマンドを出して、IMS サブシステムの状況を確認します。

```
F ims1irlm,STATUS
```

IMS がダウン (非アクティブ) であれば、以下の PURGE コマンドを出します。

```
F ims1irlm,PURGE,ims1
```

シスプレックス環境では、IMS がダウン状態でその IRLM が停止または切断されている場合は、他のアクティブ IRLM メンバーの 1 つを使用して、保持ロックの照会および以下の PURGE コマンドの発行を行う必要があります。

```
F irlmproc,STATUS,ALLD
```

この PURGE コマンドを出した後で、アクティブ IRLM をもつシステムでページ要求を出すことが必要です。例えば、*ims2irlm* という名前の *irlmproc* をもつ IMS2 サブシステムでシステム B がアップ状態にある場合に、データ共用シスプレックス内のすべてのアップおよびダウンのサブシステムを表示するには、以下のコマンドを出します。

```
F ims2irlm,STATUS,ALLD
```

次に、IMS2 サブシステムがダウン状態の場合は、以下のコマンドを入力することによって PURGE 要求を出します。

```
F ims2irlm,PURGE,ims2
```

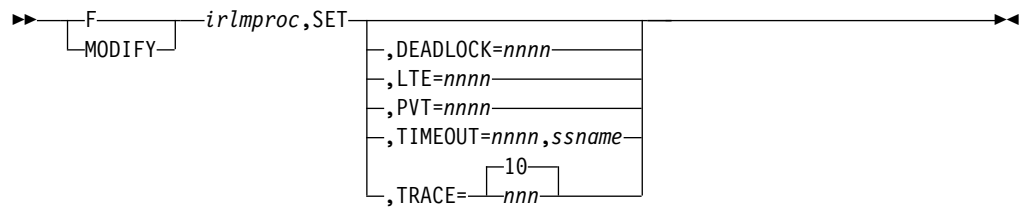
完了したページ要求について z/OS システム・コンソールに戻される応答は、以下のとおりです。

```
DXR109I IRS2002 PURGE COMMAND COMPLETED FOR IMS1
```

F *irlmproc,SET*

Modify (F) *irlmproc,SET* コマンドは、IRLM が認識している限定されたパラメーターのセットを動的に変更します。

構文



使用上の注意

F irlmproc,SET コマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

irlmproc

コマンドを処理する IRLM を指定します。

DEADLOCK= nnnn

nnnn ローカルのデッドロックの頻度に対して使用される、ミリ秒単位の数。値の範囲は、100 ミリ秒から 5000 ミリ秒です。シスプレックス・グループのメンバーとすべての IRLM がサブ秒デッドロック処理に使用できない場合は、DXR106E が出されます。

サブ秒のデッドロックをサポートする IRLM が、サブ秒のデッドロックをサポートしないメンバーをもつグループに結合する場合、新規メンバーの結合に使用される値の範囲は 1 秒から 5 秒です。サブ秒の処理をサポートするすべてのメンバーは、タイマー値の変更後に DXR177I メッセージを出します。

注: IMS TIMEOUT 候補がタイムアウトになると、それはタイムアウト候補のまま残り、グローバル・デッドロック・サイクルのたびにタイムアウト出口に対して提示されます。候補が提示されると、IMS は SMF 79.15 レコードを作成します。レコードは、使用可能になっていれば、SMF データ・セットに書き込まれます。タイムアウト候補が検出され、値 *nnnn* がサブ秒の場合、タスクが IRLM で待機しなくなるまで、多数の SMF 79.15 レコードが秒単位で書き込まれます。

LTE=nnnn

nnnn z/OS システム間カップリング・ファシリティの LOCK 構造に対する次の CONNECT で指定する、ロック・テーブル項目の数を決定します。値の範囲は、0 から 1024 までの 2 のべき乗でなければなりません。値のそれぞれの増分は、1,048,576 のロック・テーブル・エントリを表します。

コマンドを出す際に構文エラーがあると、DXR106E を受け取ります。構文エラーには、LTE 値が範囲外が含まれます。この IRLM がグループに接続されず、値が有効な場合、DXR177I が出されますが、値は他のメンバーには送信されません。メンバーが既にグループ内にある場合、値は、他のすべてのメンバーにブロードキャストするために Global Deadlock Manager IRLM (GDM) に送信されます。GDM がコードを適用していないと、DXR177I 応答はどのメンバー上でも出されません。GDM がコードをもっていれば、コマンドが処理されるときに、適用されるコードをもっているメンバーすべてが DXR177I を出します。

この値は、該当の IRLM が構造の割り振りを引き起こしてデータ共有グループに結合する最初のものであった場合、または REBUILD の最中のみ、使用されます。後で結合する IRLM はいずれも、更新済みの値をもつことはありません。

ん。複数の MODIFY コマンドが同じ IRLM 上、あるいは複数の IRLM 上で実行されると、一部の DXR177I が出されない場合があります。最後に出される DXR177I は、次の CONNECT で使用される値です。

通常のグループの始動時、または REBUILD 時に指定されたロック・テーブル項目の数を示す値は、以下の順に使用されます。

1. MODIFY irlmproc,SET,LTE= コマンドで指定された値 (0 より大きい場合)。
2. IRLMPROC の LTE= からの値 (0 より大きい)。
3. 既存の論理。戻された QUERY サイズを、MAXUSRS に基づいた長さの 2 倍の LTE 幅で除算した結果に最も近い 2 のべき乗の数を判別するもの。

上記のステップ 1 または 2 のいずれかの非ゼロ値を使用しようとしたが、その値が QUERY で戻される構造サイズに対して大きすぎる場合は、そのすぐ下位の順序にある値が使用されます。

PVT=nnnn

専用ストレージの上限を 2 ギガバイト境界より下で指定します。nnnn は、1 から 1800 までの 4 桁の数字でなければなりません。この値は、nnnn M または nnnn G のように、値の後に M (メガバイトを表す) または G (ギガバイトを表す) を指定することにより、メガバイト単位またはギガバイト単位で指定できます。IRLM は、ロックに使用される専用ストレージの量をモニターします。指定した限度に到達した場合、新しいロック要求は、『完了必須』の場合以外はリジェクトされます。指定した値が範囲外であるか、既に IRLM による専用ストレージの使用が指定した値を上回っている場合、コマンドはリジェクトされ、メッセージ DXR106E が出されます。「完了必須」のロックのための予約は、指定した PVT= 値からは計算されません。

TIMEOUT=nnnn, ssname

nnnn 1 秒から 3600 秒の範囲の新しいタイムアウト値。

ssname

MODIFY irlmproc,STATUS コマンドで表示される、識別されたサブシステム名。

コマンドを出す際に構文エラーがあると、DXR106E を受け取ります。構文エラーには、TIMEOUT 値が範囲外、あるいは識別されたサブシステム名が無効があります。また、前のコマンド完了時に DXR177I メッセージを受け取っていない場合にも、構文エラー・メッセージが出されます。

TIMEOUT 値はローカル・デッドロック・パラメーターの倍数である必要があります。入力された値がローカル・デッドロック・パラメーターの偶数倍ではない場合は、IRLM はタイムアウト値をその次の倍数に増やします。IRLM がタイムアウトに使用する値は、デッドロック処理で出される DXR177I メッセージに表示されます。この新しい値は、IRLM または識別されたサブシステムが終了するまで、あるいはオペレーターによってタイムアウトが再び変更されるまで、使用されます。コマンドで指定された値は、DB2® ZParms の値に影響を与えません。

TRACE=nnn

nnn で指定する値に対して、トレース・タイプ当たりの 64 KB トレース・バッファの最大数を IRLM が動的に設定するように要求します。この値は、外

部 CTRACE 書き込み機能が活動化されていない場合にのみ使用されます。トレース・バッファは、ECSA から割り振られます。有効な値は、10 から 255 です。この範囲外の値を指定すると、IRLM は値がその範囲内になるように自動的に調整します。デフォルトは 10 です。IRLM は、設定された数のトレース・バッファを直ちに獲得することではなく、このコマンドで設定されたバッファ数を超えないように、必要に応じてバッファを割り振ります。設定されたトレース・バッファの数が現在割り振られているバッファの数よりも小さい場合は、IRLM は、次のデッドロックまたはタイムアウト・サイクルの最後に、一番古いバッファを解放することによって、その数を指定された範囲内に収めます。

制約事項:

1. 最初にシステム・プログラマーに連絡して、IRLM で使用できる CSA ストレージの量を決定することなしに、CSA の値を変更しないようにしてください。
2. MODIFY コマンドで設定する値は、IRLM の停止から再始動までずっと持続しているわけではありません。それぞれのトレース・タイプごとにトレース・バッファの数はデフォルト値の 10 に戻り、MAXCSA の値は IRLM 始動プロシージャのパラメーターで設定した値に戻ります。

例

ここでは、F *irlmproc,SET* コマンドの使用例をいくつか示します。

F irlmproc,SET の例 1

z/OS システム・コンソールでの入力:

```
F IRLMPROC,SET,TRACE=20
```

z/OS システム・コンソールでの応答:

```
DXR177I IRLMX THE VALUE FOR TRACE IS SET TO 20
```

F irlmproc,SET の例 2

z/OS システム・コンソールでの入力:

```
F IRLMPROC,SET,TIMEOUT=60,DBMS
```

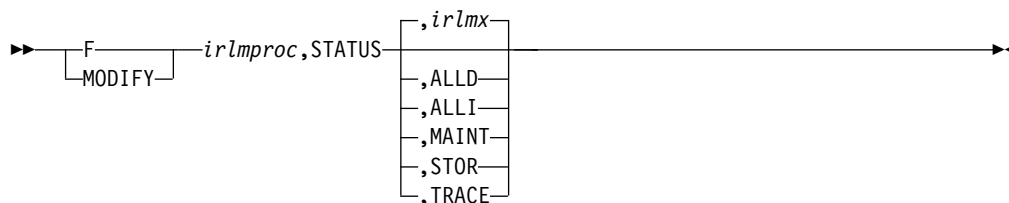
z/OS システム・コンソールでの応答:

```
DXR177I IRLMX THE VALUE FOR TIMEOUT IS SET TO 60 FOR DBMS
```

F *irlmproc,STATUS*

MODIFY (F) *irlmproc,STATUS* コマンドは、IRLM の状況を表示するために使われます。

構文



使用上の注意

F `irlmproc,STATUS` コマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

`irlmproc` は、コマンドを処理する IRLM を識別します。

`irlmx`

どの IRLM の状況を表示するかを指定します。 `irlmx` パラメーターは IRLM 始動プロシージャで指定されている IRLM サブシステム名 (IRLMN) と 3 桁の IRLM メンバー番号 (IRLMID) とを連結したものです。 DB2G002 (ID は 002) はその一例です。

ALLD

データ共有グループの任意の IRLM における DBMS 名、およびアクティブまたは障害を示すサブシステムの状況を要求します。また、このキーワードは、システムが所有している可能性がある RETAINED LOCKS とそれらが現在関連している IRLM も表示します。

ALLI

データ共有グループ内の IRLM 名およびすべての IRLM の状況を要求します。

MAINT

オペレーターが IRLM ロード・モジュール (ただし、DXRRLM50、DXRRL183、DXRRL186、DXRRLFTB、および非シブプレックス環境のDXRRLM70を除く) の IRLM 維持レベルを表示できるようにします。

STOR

この IRLM の場合、CSA および ECSA ストレージについて、現行と最大の指定された割り振りを表示します。

TRACE

この IRLM の場合、IRLM サブコンポーネント・トレース・タイプについての情報を要求します。戻される情報には、サブコンポーネント・トレース・タイプがアクティブかどうか、トレースで使用されるトレース・バッファの数、およびトレースでコンポーネント・トレースの外部書き出しプログラムがアクティブかどうかについての情報が含まれます。

z/OS の TRACE CT コマンドを使用して、トレースを活動化または非活動化することができます。EXP および INT トレースをオフにすることはできません。XIT (データ共有)、EXP、および INT トレースは、IRLM を開始すると、自動的に活動化されます。IRLMPROC TRACE=YES を用いることによって、トレースは自動的に活動化されます。

irlmx パラメーターが省略された場合、またはそのコマンドを受信する IRLM を指定する場合、メッセージ DXR001I が出されます。この複数行メッセージには、この IRLM に対して識別されている各 IMS 作業単位およびロックに関する情報が含まれています。

メッセージ DXR001I は、*irlmx* パラメーターが指定されているが、そのコマンドを受信する IRLM は *irlmx* の IRLMID を指定した IRLM を認識していない場合にも出されます。

irlmx を指定すると、メッセージ DXR102I が出されます。この複数行メッセージには、*irlmx* という IRLMN および IRLMID を使用して IRLM に対して識別されている各 IMS サブシステムの、IMS 名および状況が含まれています。メッセージ DXR102I は、ALLD が指定されている場合にも出されます。これには、データ共用グループ内の IRLM に対して識別されている各 IMS サブシステムの名前および状況が含まれています。

ALLI が指定されていると、メッセージ DXR103I が出されます。この複数行メッセージには、データ共用グループ内のすべての IRLM の IRLM 名と状況が含まれています。

例

ここでは、F *irlmproc,STATUS* コマンドの使用例をいくつか示します。

F *irlmproc,STATUS* の例 1

非データ共用環境にあるものと想定します。z/OS システム・コンソールでの入力:

```
F IRTPROC,STATUS
```

z/OS システム・コンソールでの応答:

```
DXR101I IR2T001 STATUS SCOPE=LOCAL
          SUBSYSTEMS IDENTIFIED                PT01
          NAME      STATUS   UNITS   HELD   WAITING   RET_LKS
          DSNT1    UP-NS    0005   0010   0002     0
```

説明: システム 1 のオペレーターが、IRTPROC という名前の IRLM プロシージャによって識別される IRLM に接続されている IMS システムについての情報を要求しました。

F *irlmproc,STATUS* の例 2

データ共用グループをもっているものと想定します。z/OS システム・コンソールでの入力:

```
F DB1GIRLM,STATUS,ALLD
```

z/OS システム・コンソールでの応答:

```
14.02.10 STC00086 DXR102I DJ1G001 STATUS IRLMID=001
          SUBSYSTEMS IDENTIFIED                PT01
          NAME      STATUS   RET_LKS   IRLMID   IRLM_NAME   IRLM_LEVEL
          DB4G     UP        0         004     DJ4G        1.009
          DB3G     UP        0         003     DJ3G        1.009
          DB2G     UP        0         002     DJ2G        1.009
          DB1G     UP        0         001     DJ1G        1.009
```

説明: 出力には、このデータ共有グループ (要求を処理中の IRLM が属しているグループ) 内の IRLM に接続されているすべての IMS サブシステムが表示されます。その他に表示される可能性がある情報には、以下のものがあります。

STATUS

IMS サブシステムの状況を示します。

UP IMS はアクティブです。

DOWN

IMS に障害が発生しました。

UP-RO

IMS はアクティブであり、現在は読み取り専用サブシステムとして IRLM に識別されています。

CLEANUP

IRLM は、障害発生後のクリーンアップが完了したという応答が、IMS サブシステムから戻されるのを待っています。

SFAIL

IMS が識別されている IRLM が、データ共有グループから切断されました。IMS が保持していた「変更」タイプのロックは、すべて IRLM により保持されています。

RET_LKS

この IMS サブシステムが所有している保持ロックの数。

IRLMID

この IMS サブシステムが識別されている IRLM の ID。

IRLM_NAME

この IMS サブシステムが識別されている IRLM の名前。

IRLM_LEVL

この IMS サブシステムが IRLM への識別時に要求した IRLM リリースおよび機能レベル。これは、*r.fff* の形式です。

F *irlmproc,STATUS* の例 3

再度、データ共有が有効であるものと想定します。z/OS システム・コンソールに次のように入力します:

```
F DB1GIRLM,STATUS,ALLI
```

z/OS コンソールでの応答は次のようになります。

```
DXR103I IR21010 STATUS
IRLMS PARTICIPATING IN DATA SHARING GROUP FUNCTION LEVEL=024
IRLM_NAME IRLMID STATUS LEVEL SERVICE MIN_LEVEL MIN_SERVICE
IRLM      001      UP   096 PQ92110    022    PQ52360
IR21      010      UP   024 PQ92110    012    PN90337
JRLM*     002      UP   096 PQ92110    022    PQ52360
DXR103I End of display
```

説明: 出力は、このデータ共有グループ (その要求を処理する IRLM が含まれているグループ) に参加している IRLM を表示します。IRLM_NAME フィールドのアスタリスク (*) は、この IRLM が Global Deadlock Manager (GDM) であることを示します。その他の情報は、以下のとおりです。

STATUS

STATUS フィールド内の値「UP」は、IRLM がアクティブであることを示します。IRLM に障害がある場合は、STATUS は「DOWN」と表示されます。IRLM に識別されている IMS サブシステムが保持ロックを保留している場合にのみ、その IRLM が「DOWN」であることが分かります。障害を起こした IMS サブシステムと IRLM の間のこの接続は、REBUILD の後、またはグループ再始動の後には失われます。

LEVEL

現行の IRLM リリースおよび機能レベル (*r.fff* の形式)。

SERVICE

「LEVEL」で指定されたリリースおよび機能レベルに対応する IRLM サービスまたはリリース。

MIN_LEVEL

この IRLM が共存できる最小 IRLM 機能レベル。

MIN_SERVICE

「MIN-LEVEL」で指定された機能レベルに対応する IRLM サービスまたはリリース。

グループ機能レベル

このデータ共有グループのすべての IRLM によって使用されている IRLM リリースおよび機能レベル。

F *irlmproc,STATUS* の例 4

z/OS システム・コンソールで次のコマンドを入力します:

```
F IRLME2N,STATUS,STOR
```

```
DXR100I IRLM241 STOR STATS
PC: YES  LTEW: 2  LTE:    0M  RLE:   2646  RLEUSE:    0
BB PVT: 1500M AB PVT (MEMLIMIT): 16383P
CSA USE: ACNT:    0K  AHWM:    0K  CUR: 1057K  HWM: 1057K
        ABOVE 16M:   27 1057K  BELOW 16M:   0    0K
PVT USE:  BB CUR: 7453K  AB CUR:   5M
CLASS  TYPE  SEGS    MEM  TYPE  SEGS    MEM  TYPE  SEGS    MEM
ACCNT  T-1    2     4M  T-2    1     1M  T-3    1     4K
PROC   WRK    4    20K  SRB    1     1K  OTH    1     1K
MISC   VAR   20   6086K  N-V   12    323K  FIX    1    24K
DXR100I End of display
```

説明: この例は、IRLM に割り振られている現行のストレージは 1057 KB、前回に IRLM が始動された以降に割り振られた最大量は 1057 KB であることを示しています。ロッキング構造 (RHB および RLB) 用のストレージは、IRLM 専用ストレージ内に格納されています。表示出力を解釈するには、以下の情報を使用してください。

PC IRLM 始動プロシージャの PC オプションの現行値。

BB PVT

2 GB 境界より下の、現行の専用ストレージ量。PVT 値は、この例では 1500 MB です。

AB PVT (MEMLIMIT)

2 GB 境界より上の、専用ストレージの現行の限度。これは MEMLIMIT

とも呼ばれ、MVS によって管理されます。このストレージはロック用に使用されます。AB PVT 値は、この例では 16383 PB です。

LTE この IRLM が前回グループに接続したときに、カップリング・ファシリティ内で使用可能だったロック・テーブル項目の数。各単位は、1 048 576 項目から構成されます。LTE が 1 単位未満のばあい、値はゼロになります。

LTEW

ロック・テーブル項目幅は、ロック構造でそれぞれのロック・テーブル項目に必要なバイト数です。グループのユーザー数が多ければ多いほど、それぞれのロック・テーブル項目を管理するために必要なバイト数は多くなります。6 ユーザーまでの場合、LTEW は 2、22 ユーザーまでの場合、LTEW は 4、32 ユーザーまでの場合、LTEW は 8 です。

RLE この IRLM が前回グループに接続したときに、カップリング・ファシリティ内で使用可能だったレコード・テーブル項目の数。

RLEUSE

MODIFY コマンドを発行した時点でカップリング・ファシリティで使用中であった RLE の数。IRLM が CF から切断されている場合は、この数値は DISCONNECT の前の IRLM の最後の更新時に使用中であった RLE を表します。

CSA USE

CSA USE は、互換性の理由でのみ表示されます。

ACNT

PC=YES の場合、この値はロック制御構造に使用される説明可能拡張専用ストレージです。この値は、xxxK (キロバイトの場合) または xxxM (メガバイトの場合) として指定されます。

AHWM

PC=YES の場合、この値はロック制御構造のこの初期化期間中に、IRLM によって割り振られた拡張専用ストレージの最高水準点または最大量です。この値は、xxxK (キロバイトの場合)、または xxxM (メガバイトの場合) として指定されます。

CUR 現在の CSA と ECSA の使用量の合計。この場合、現在の使用量 (CUR) は 1057 KB であり、最高水準点 (HWM) は 1057 KB です。説明可能ストレージは、このすべてのストレージのサブセットです。

PVT USE

現在の 2 GB 境界より下と 2 GB 境界より上の専用使用量。

BB CUR

現在の 2 GB 境界より下の専用使用量。値は、xxxxK (キロバイトの場合) または xxxxM (メガバイトの場合) として指定されます。

AB CUR

現在の 2 GB 境界より上の専用使用量。値は、xxxxM (メガバイトの場合) または xxxxG (ギガバイトの場合) として指定されます。

ACCNT

報告書の ACCNT の行は、ロック制御ブロック構造とそのストレージ使用量の内訳です。

- T-1** タイプ 1 構造はリソース用です。このケースでは、合計 4 MB に対して 2 つのストレージ・セグメントが保持されることを示しています。
- T-2** タイプ 2 構造は、特定のリソースに対する最初の要求の後の、すべてのリソース要求用です。この例では、合計 1 MB に対して 1 つのストレージ・セグメントが保持されることを示しています。
- T-3** タイプ 3 構造は、リソースを待っているか保持している要求側または作業単位用です。この例では、合計 64 KB に対して 1 つのストレージ・セグメントが保持されることを示しています。

PROC および **MISC** の行

これらの行には、IMS 要求の処理に使用される専用ストレージの使用状況に関する情報が入っています。この情報は、問題を診断する場合に、IBM ソフトウェア・サポートの指示の下に使用してください。

F irlmproc,STATUS の例 5

z/OS システム・コンソールで次のコマンドが入力された場合:

```
F PR21PROC,STATUS,TRACE
```

z/OS コンソール上の応答は、以下のようになります。

```
DXR179I PR21034 TRACE USAGE
TRACE BUFFER STORAGE IN USE: 256KB
MAXIMUM NUMBER OF TRACE BUFFERS ALLOWED PER TRACE TYPE: 10
TRACE TYPE  ACTIVE  BUFFERS IN USE  CTRACE WRITER
-----
SLM          N          0                N
XIT          Y          2                N
XCF          N          0                N
DBM          N          0                N
EXP          Y          1                N
INT          Y          1                N
```

この例では、現在、IRLM トレースに割り振られているストレージは 256 KB であり、トレース・タイプ当たりで許されるトレース・バッファの最大数は 10 に設定されており、さらに外部 CTRACE 書き込み機能はアクティブではないことを示しています。それぞれのバッファごとのトレース・サイズは 64 KB です。使用できるトレース・バッファの最大数は、コマンド **MODIFY**

irlmproc,SET,TRACE=nnn を出すことによって、変更することができます。

第 27 章 START irlmproc コマンド

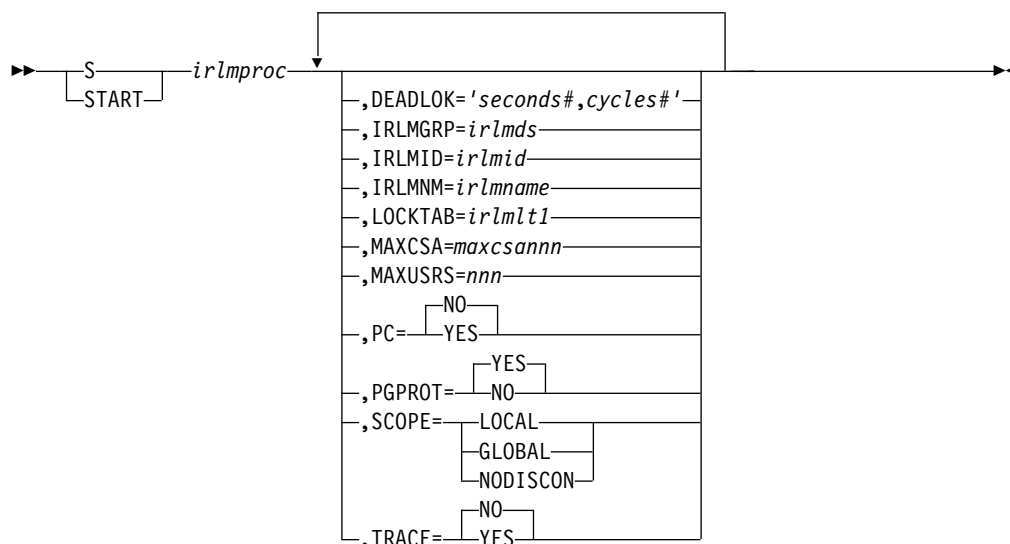
START *irlmproc* コマンドは、ご使用のシステムによって所定の位置に組み込んであるプロシージャーで、IRLM コンポーネントを開始します。

プロシージャーの中のシンボリック・パラメーターは、START *irlmproc* コマンドを使ってオーバーライドすることができます。IRLM が提供する機能を必要とするすべての IMS サブシステムの前に、IRLM を開始しておく必要があります。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』

構文



キーワード

START *irlmproc* コマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

irlmproc は、開始する IRLM のプロシージャー名を識別します。

IRLM パラメーターは、START コマンドを使ってオーバーライドすることができます。

DEADLOK=

ローカル・デッドロック検出インターバル (秒) と、グローバル検出が始まる前に起きるべきローカル・サイクルの数を次のように指定します。以下のものを指定することができます。

seconds#

この 1 から 9999 までの 1 桁から 4 桁の数値は、IRLM ローカル・デッ

ドロック検出サイクル間のインターバル (秒) を指定します。5 より大きい値も受け入れられますが、使用される最大は 5 です。

推奨事項: このパラメーターは 5 以下に設定してください。これは、1 つのグローバル・サイクルを完了するには、複数のローカル・サイクルが必要となるためです。5 より大きな数値を指定した場合、最大スループットを確保するためにグローバル・デッドロックを頻繁に分割できなくなります。

cycles#

この 1 から 9999 の範囲内の 1 から 4 桁の数値は、グローバル・デッドロック検出を行う前に終了していなければならないローカル・デッドロック・サイクルの数を指定します。1 より大きい値も受け入れられますが、使用される最大は 1 です。

推奨事項: このパラメーターは 5 以下に設定してください。これは、1 つのグローバル・サイクルを完了するには、複数のローカル・サイクルが必要となるためです。5 より大きな数値を指定した場合、最大スループットを確保するためにグローバル・デッドロックを頻繁に分割できなくなります。

IRLMGRP=

この IRLM がロック・マネージャーとしての役割を行う z/OS システム間カップリング・ファシリティ (XCF) グループの名前を指定します。

irlmids

XCF グループの名前。

IRLMID=

複数の IRLM を区別するために使用する 10 進数または印刷可能文字のいずれかを指定します。グループで最も小さい ID 値の IRLM が、そのグループのグローバル・デッドロック・マネージャーになります。グループのすべての IRLM ごとに固有の名前を指定する必要があります。グループに含めることができる IRLM の総数は、指定した値に関係なく、ユーザーのハードウェアによって制限され、255 より小さくすることができます。

irlmid には、1 から 255 の範囲の 1 から 3 桁の数値か、または印刷可能な EBCDIC 文字を指定することができます。文字を指定する場合は、IRLM がこの文字が本当に印刷可能文字であることを理解できるように、その文字を十分な数の単一引用符で囲んでおく必要があります。IRLM は、その文字を 1 から 255 の EBCDIC 値に変換します。

z/OS が引用符を解釈する方法に起因する理由で、文字のいずれの側にも 7 個の引用符を使用する必要があります。

例: 印刷可能文字の「D」を指定する場合、IRLMID='''''''D'''''' と指定する必要があります。

IRLMNM=

この IRLM に割り当てる 1 から 4 バイトの z/OS サブシステム名を指定します。

LOCKTAB

GROUP パラメーターの中で指定されているデータ共有グループによって使用されるロック・テーブルを指定します。

irlmtt1

これは、ロック・テーブルの名前です。

MAXCSA=

互換性の目的で IRLM EXEC ステートメントに保持されている廃止キーワード。IRLM は、このキーワードが指定されても無視します。

MAXUSRS=

データ共用グループに接続できるユーザーの最大数 (2 から 248 の間の数値) を指定します。

PC=NO | YES

互換性の目的で IRLM EXEC ステートメントに保持されている廃止キーワード。IRLM は、このキーワードが指定されても無視します。

PGPROT=YES | NO

これは、COMMON STORAGE ロード・モジュールを z/OS ページ保護ストレージに入れるべきかどうかを、IRLM に指示します。PGPROT=YES がデフォルトで、COMMON STORAGE ロード・モジュールを z/OS ページ保護ストレージに入れることを、IRLM に指示します。PGPROT=NO を指定すると、IRLM はロード・モジュールをページ保護ストレージに入れません。

SCOPE=

IRLM をデータ共用環境で使用するかどうかを指定します。使用する場合には、関連する IMS が終了したときに、IRLM が自動的に切断するかどうかも指定します。

LOCAL

IRLM が非データ共用環境にあり、システム間の共用がないことを指定します。

GLOBAL

IRLM がデータ共用環境にあり、システム間の共用が行われることを指定します。データ共用グループに識別されている IMS システムがない場合は、IRLM はそのグループから切断されます。XCF および SLM の両方とも必要です。

NODISCON

IRLM がデータ共用環境にあり、システム間の共用が行われることを指定します。データ共用グループに識別されている IMS システムがない場合でも、IRLM はそのグループに接続されたままです。共用グループからの通常の DISCONNECT は起こりません。NODISCON が指定された場合には、明示的に IRLM を停止させる必要があります。XCF および SLM の両方とも必要です。

NODISCON を使用すると、z/OS は、通常であれば IRLM の終了時に実行する一定のリカバリー・アクションを実行する必要がないので、IMS に障害が起こったときに、他のシステムへの影響が少なくてすみます。

NODISCON パラメーターのもう 1 つの利点は、IRLM が IRLM データ共用グループに再結合されるまで IMS が待っている必要がないために、正常終了または異常終了の後での IMS の再始動が速くなることです。

TRACE=

IRLM 始動中に、IRLM がアクティビティをトレースする必要があるかどうか

かを指定します。トレースは、循環トレース・バッファーに書き込まれます。つまり、最後のバッファーがいっぱいになると、最初のバッファーが再使用されます。

NO IRLM 始動中に、トレース・アクティビティを初期設定しません。NO がデフォルトです。

IRLM アクティビティをトレースするには、TRACE CT コマンドを使用します。

YES

始動中に、IRLM トレース・アクティビティを初期設定します。

推奨事項: すべてのデータ共用環境で、トレースをオンにしてください。

第 28 章 STOP irlmproc コマンド

STOP (P) *irlmproc* コマンドは、IRLM を正常にシャットダウンするために使用されます。いずれかのアクティブ IMS サブシステムが IRLM に現在識別されている場合、コマンドはリジェクトされます。

irlmproc は、停止される IRLM のプロシージャ名を示します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『例』

構文

▶▶ — P — *irlmproc* —————▶▶
 └── STOP ─┘

例

z/OS SYSTEM 1 SC:

P IR21I

システム 1 SC への応答:

```
DXR110I IR21001 STOP COMMAND ACCEPTED
IXL030I CONNECTOR STATISTICS FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 070
CONNECTOR IRLMGRPR$IR21001:
IXL031I CONNECTOR CLEANUP FOR LOCK STRUCTURE LOCK2, 071
CONNECTOR IRLMGRPR$IR21001, HAS COMPLETED.
DXR121I IR21001 END-OF-TASK CLEANUP SUCCESSFUL - HI-CSA 732K -
HI-ACCT-CSA 132K
IEF352I ADDRESS SPACE UNAVAILABLE
$HASP395 IR21I ENDED
```

システム 2 SC への応答:

NONE

説明: システム 1 のオペレーターは IR21I という名前の IRLM プロシージャを終了させました。システム 2 ではオペレーターのアクションは必要ありません。

第 29 章 TRACE CT コマンド

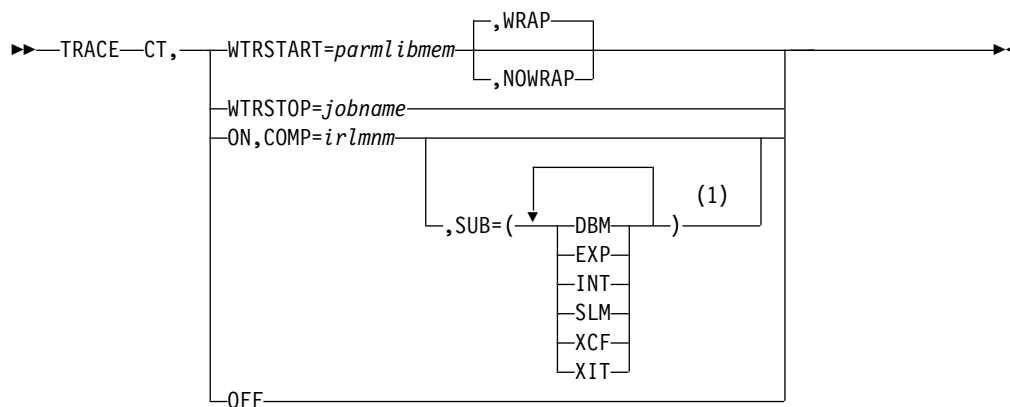
IRLM 診断トレースの開始、停止、または修正を行うときは、z/OS TRACE CT コマンドを使用します。

IRLM は、TRACE CT コマンドで使用可能なすべてのオプションをサポートしているわけではありません。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 707 ページの『使用上の注意』
- 707 ページの『例』

構文



注:

- 1 同じタイプのトレースは、一度だけしか指定できません。

キーワード

TRACE CT コマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

CT z/OS TRACE コマンドで使用可能なその他のトレース・オプションの代わりに、コンポーネント・トレースを指定します。

WTRSTART=parmlibmem

外部書き出しプログラムを呼び出し、またそのトレース・バッファの書き込み先であるデータ・セットを定義するソース JCL が含まれるメンバーの名前を識別します。メンバーは、SYS1.PROCLIB カタログ式プロシージャあるいはジョブです。多くのインストール・システムが SYS1.PROCLIB 内のカタログ式プロシージャを使用します。

TRACE CT,WTRSTART コマンドを入力した後、トレースをオンにし、TRACE CT コマンドへの応答で WTR パラメーターを使用して、書き出しプログラムを接続します。

WRAP

システムがデータ・セットまたはデータ・セット・グループの最後に到達したときに、データ・セットの最初またはデータ・セット・グループの最初にある最も古いデータを上書きすることを指定します。データ・セットの基本エクステン트가使用されます。

NOWRAP

データ・セットがいっぱいになったときに、システムがデータ・セットへの書き込みを停止するように指定します。データ・セットの基本エクステンと 2 次エクステン트가使われます。

WTRSTOP=jobname

停止されるコンポーネント・トレース外部書き出しプログラムのジョブ名を識別します。書き出しプログラムが使ったデータ・セットがクローズされます。

ジョブ名は次のうちのどちらかです。

- ソース JCL がプロシージャーの場合は、メンバー名
- ソース JCL 中の JOB ステートメント上の名前

ON トレースをオンにします。

COMP=irlmssnm

IRLM サブシステム名

SUB=subname

望みのサブレベル・トレースのタイプを識別します。パラメーターは、次に示す値のいずれかが可能です。

DBM

識別した DBMS との相互作用をトレースします。

EXP

例外条件をトレースします。EXP は、IRLM が実行を開始したときに、自動的にオンになり、永続してオンになっています。

INT

正常なロックング・アクティビティー外のメンバー・イベントとグループ・イベントをトレースします。INT は、IRLM が実行を開始したときに、自動的にオンになり、永続してオンになっています。

SLM

z/OS ロックング・コンポーネントとの対話をトレースします。

XCF

z/OS システム間結合サービスとのすべての対話をトレースします。

XIT

z/OS ロッキング・コンポーネントとの非同期対話のみをトレースします。IRLM が実行を開始すると、XIT は自動的にオンになりますが、z/OS TRACE CT コマンドを使用してオフにすることができます。

オフ

トレースをオフにします。IRLM がコンポーネント・トレース外部書き出しプログラムと接続されている場合、システムは暗黙切断を強制します。

EXP および INT サブレベル・トレースの場合、OFF パラメーターは、トレースは外部書き出しプログラムへの書き込みを停止します。ただし、バッファへの書き込みは継続します。これらのトレースは、IMS がデバッグ目的で使用します。

外部書き出しプログラムのプロシージャの例

IRLM 外部書き出しプログラムのプロシージャの例を次に示します。

```
//CTWTR   PROC
//        EXEC PGM=ITTRCWR
//TRCOUT01 DD  DSN=SYS1.WTR1,DISP=OLD
//TRCOUT02 DD  DSN=SYS1.WTR2,DISP=OLD
```

使用上の注意

TRACE CT ON を設定することによる影響として、それぞれのアクティブなサブネーム・タイプごとに、0.7 MB の ECSA が必要になります。IRLM は開始時にそれ自体のトレースを初期設定するため、DISPLAY TRACE コマンドはすべてのトレースはオフとして表示します。TRACE ON コマンドを出した後は、INT および EXT というオフにすることが不可能な 2 つのサブネームを除いて、報告書は正確です。

このコマンドは、マスター・コンソールからのみ入力できます。このコマンドは、適切なレベルの z/OS 権限が必要です。

このコマンドは z/OS コンポーネント・トレース・サービスを使用するので、IRLM 開始および停止ロード・モジュール DXRRL183 が z/OS リンク・リストに入っていることを確認してください。

例

ここでは、TRACE CT コマンドの使用例をいくつか示します。

TRACE CT コマンドの例 1

IRLM DBM トレースの開始と停止を実行するためのコマンド・シーケンスの例を次に示します。この例では、トレース・データはプロシージャ CTWTR で識別される外部書き出しプログラム・データ・セットに書き込まれます。

```
TRACE CT,WTRSTART=CTWTR
TRACE CT,ON,COMP=IRLM,SUB=(DBM)
:
:
: (z/OS は応答を要求します。)
:
R 15,WTR=CTWTR,END
```


```
TRACE CT,OFF,COMP=IRLM,SUB=(DBM)
:
: (トレース・バッファーが外部化されるのを確認するためにしばらく待ちます。)
TRACE CT,WTRSTOP=CTWTR
```

TRACE CT コマンドの例 2

これは、トレースの開始と停止を循環方式で行うサンプル・プロシージャーです。このプロシージャーで取り込まれたトレースは、IRLM が備えている限定された数のバッファーに保管されます。それぞれのバッファーは、前のバッファーが埋められると再利用されます。

```
TRACE CT,ON,COMP=IRLM
:
: (z/OS は応答を要求します。)
:
:
R 15,END
TRACE CT,OFF,COMP=IRLM
```

関連資料:

 z/OS: システム・コマンド権限に従って分類されたシステム・コマンド

第 9 部 Open Database Access コマンド

Open Database Access (ODBA) コマンドは、ODBA アプリケーション・アドレス・スペースを処理するために使用します。

- 711 ページの『第 30 章 CANCEL ODBA コマンド』
- 713 ページの『第 31 章 FORCE ODBA コマンド』

第 30 章 CANCEL ODBA コマンド

CANCEL および FORCE コマンドは、IMS サブシステムへのアクティブな接続をもつ ODBA アプリケーション・アドレス・スペースを終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『使用上の注意』

構文

```
▶▶ C—jobname————▶▶  
   |  
   └─ CANCEL ─┘
```

使用上の注意

CANCEL *jobname* コマンドは、IMS サブシステムへのアクティブな接続をもつ ODBA アプリケーション・アドレス・スペースを終了するために使用します。このコマンドで、*jobname* は ODBA アプリケーションのアドレス・スペースです。

この IMS への接続下にアクティブなスレッドがない場合、CANCEL コマンドを z/OS で処理できるようにします。アクティブなスレッドがあると思われる (IDTTHDCT が 0 より大の) 場合は、CANCEL コマンドはリジェクトされ、メッセージ DFS08051 が出されます。

CANCEL コマンドが出された後は、IMS への接続が正常に終了し、再び初期設定されるまでは、追加スレッドをターゲット・アドレス・スペースからスケジュールすることはできません。

ABENDU0113 または他の関連する異常終了から IMS 制御領域を保護するために、CANCEL はリジェクトされます。この時点でスレッドがアクティブであることが無効な場合は、資料を集めて、アクティブ・スレッドの原因を判別します。

第 31 章 FORCE ODBA コマンド

CANCEL コマンドおよび FORCE コマンドは、IMS サブシステムへのアクティブな接続をもつ ODBA アプリケーション・アドレス・スペースを終了するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『使用上の注意』

構文

▶—FORCE—*jobname*————▶

使用上の注意

FORCE *jobname* コマンドは、CANCEL コマンドがリジェクトされた場合に、IMS サブシステムへのアクティブな接続をもつ ODBA アプリケーション・アドレス・スペースを終了するために使用します。このコマンドで、*jobname* は ODBA アプリケーションのアドレス・スペースです。

推奨事項: FORCE コマンドを試行する前に、CANCEL コマンドを試行してください。

ODBA アプリケーション・アドレス・スペースの現反復に対して FORCE が出されるのが初めてである場合は、DFS1S100 により、FORCE が CANCEL に変更され、z/OS が CANCEL コマンドを処理できるようになります。

CANCEL コマンドがリジェクトされ、ODBA アプリケーション・アドレス・スペースの現反復に対して出された前の FORCE が失敗した場合には、2 番目の FORCE コマンドを出して、z/OS が 2 番目の FORCE コマンドを処理できるようにしてください。

FORCE コマンドは慎重に使用してください。アクティブ・スレッドの実際の状態によっては、z/OS がアドレス・スペースを CANCEL できるようにすることによって、IMS 制御領域が異常終了する可能性があります。FORCE コマンドを出す前に、未解決のアクティブ・スレッドを解決してください。

第 10 部 リポジトリ・サーバー・コマンド

リポジトリ・サーバー (RS) コマンドは、RS パラメーターの表示および更新、または RS アドレス・スペースのシャットダウンを行うために使用します。

- 717 ページの『第 32 章 MODIFY reposervername コマンド』
- 727 ページの『第 33 章 P reposervername コマンド』

第 32 章 MODIFY reposervername コマンド

MODIFY (F) *reposervername* コマンドは、リポジトリ・サーバー (RS) アドレス・スペースについて、RS パラメーターを表示または更新するために使用します。

サブセクション:


- 718 ページの『F reposervername,ADMIN』
- 721 ページの『F reposervername,AUDIT』
- 723 ページの『F reposervername,SECURITY』
- 724 ページの『F reposervername,SHUTDOWN』


一部の MODIFY (F) コマンドと FRPBATCH コマンドは同等です。

表 43. 同等の *Modify (F)* コマンドと *FRPBATCH* コマンド


MODIFY (F)	FRPBATCH	注記
--	ADD	
ADMIN DISPLAY	LIST	
ADMIN START	START	
ADMIN STOP	STOP	IMSRSC リポジトリを停止します。
--	RENAME	
--	DELETE	
ADMIN DSCHANGE	DSCHANGE	
--	UPDATE	
AUDIT	--	監査レベルを変更します
SECURITY	--	ストレージ内にあるプロファイルをリフレッシュします
SHUTDOWN	--	RS を停止します。z/OS STOP (P) インターフェースを介した STOP コマンドと同様です。

関連概念:

 [IMSRSC リポジトリの概要 \(システム定義\)](#)

 [IMSRSC リポジトリの管理 \(システム管理\)](#)

関連情報:

 [FRPBATCH でのコマンド \(システム・プログラミング API\)](#)

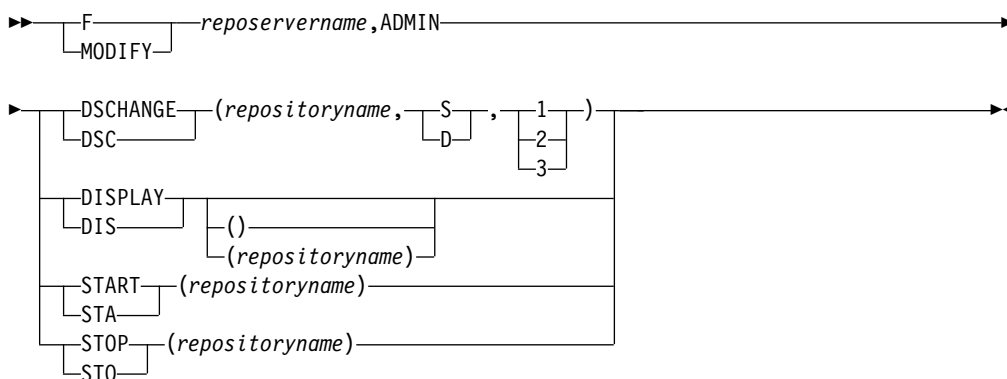
F reposervername,ADMIN

F *reposervername,ADMIN* コマンドは、IMSRSC リポジトリ上で管理用タスクを実行するために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 719 ページの『同等の FRPBATCH コマンド』
- 719 ページの『例』

構文



キーワード

このコマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

reposervername

管理用タスクを実行するリポジトリ・サーバー (RS) の名前を指定します。

DSCHANGE

ペアの COPY1、COPY2、またはスペア・リポジトリ・データ・セットの状況を DISCARD に変更するか、破棄されたデータ・セットの状況を SPARE に変更します。

repositoryname

データ・セットを変更するリポジトリの名前を指定します。CATALOG は予約済みであるため指定できません。

S | D

リポジトリ・データ・セット・パラメーターで指定されたりリポジトリ・データ・セットに対して、DSCHANGE アクションを適用することを指定します。

S 指定されたりリポジトリ・データ・セットに対して、SPARE の DSCHANGE アクションを適用することを指定します。

D 指定されたりリポジトリ・データ・セットに対して、DISCARD の DSCHANGE アクションを適用することを指定します。

1 | 2 | 3

要求された DSCHANGE アクションを適用するリポジトリ・データ・セットのペアを示すために、1 から 3 の範囲の数字を指定します。

1 状況を COPY1 リポジトリ・データ・セットに適用します。

2 状況を COPY2 リポジトリ・データ・セットに適用します。

3 状況を SPARE リポジトリ・データ・セットに適用します。

DISPLAY

RS カタログ・リポジトリに対して定義されているリポジトリのリストを表示します。このコマンドは、バッチ LIST STATUS コマンドに類似していません。*repositoryname* が指定されていない場合、リポジトリ名のみが返されます。*repositoryname* が指定されている場合、リポジトリの詳細 (データ・セット名など) が返されます。

repositoryname

情報を表示するリポジトリの名前を指定します。CATALOG は予約済みであるため指定できません。

START

リポジトリを開始します。

repositoryname

開始するリポジトリの名前を指定します。CATALOG は予約済みであるため指定できません。

STOP

リポジトリを停止します。

repositoryname

停止するリポジトリの名前を指定します。CATALOG は予約済みであるため指定できません。

同等の FRPBATCH コマンド

以下の表は、F *reposervername,ADMIN* コマンドと同様の機能を実行する FRPBATCH コマンドを示しています。

表 44. F *reposervername,ADMIN* コマンドと同等の FRPBATCH

F <i>reposervername,ADMIN</i> コマンド	類似の FRPBATCH コマンド
F <i>reposervername,ADMIN</i> DISPLAY	LIST
F <i>reposervername,ADMIN</i> DSCHANGE	DSCHANGE
F <i>reposervername,ADMIN</i> START	START
F <i>reposervername,ADMIN</i> STOP	STOP

例

以下に、F *reposervername,ADMIN* コマンドの例を示します。

F *reposervername,ADMIN* コマンドの例 1

コマンド入力:

F FRP1,ADMIN START(IMS_REPOS)

コマンド出力:

```
FRP2014I - Repository start request initiated: IMS_REPOS
          REPO1RP
```

説明: IMS_REPOS という名前のリポジトリを開始する要求が開始されました。リポジトリが開始されると、FRP2012I メッセージが発行されます。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

F reposername,ADMIN コマンドの例 2

コマンド入力:

F FRP1,ADMIN STOP(IMS_REPOS)

コマンド出力:

```
FRP2020I - Repository stop request initiated: IMS_REPOS
          REPO1RP
```

説明: IMS_REPOS という名前のリポジトリを停止する要求が開始されました。リポジトリが停止されると、FRP2012I メッセージが発行されます。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

F reposername,ADMIN コマンドの例 3

コマンド入力:

F FRP1,ADMIN DISPLAY(IMS_REPOS)

コマンド出力:

```
BPE0032I ADMIN COMMAND COMPLETED REPO1RP
FRP2100I - ADMIN DISPLAY repository IMS_REPOS 597
          - Last updated date/time : 2011/05/06 20:26:43 USRT004
          - Status . . . . . : OPEN
          - Auto-open . . . . . : YES
          - Security Class . . . . . : NOT DEFINED REPO1RP
FRP2101I - ADMIN DISPLAY repository RDS1: 598
          - Index (RID) . . . : IMSTESTS.REPO.IMSPRI.RID
          - Member (RMD) . . . : IMSTESTS.REPO.IMSPRI.RMD
          - Status . . . . . : COPY1 REPO1RP
FRP2101I - ADMIN DISPLAY repository RDS2: 599
          - Index (RID) . . . : IMSTESTS.REPO.IMSSEC.RID
          - Member (RMD) . . . : IMSTESTS.REPO.IMSSEC.RMD
          - Status . . . . . : COPY2 REPO1RP
FRP2101I - ADMIN DISPLAY repository RDS3: 600
          - Index (RID) . . . : IMSTESTS.REPO.IMSSPR.RID
          - Member (RMD) . . . : IMSTESTS.REPO.IMSSPR.RMD
          - Status . . . . . : DISCARD REPO1RP
```

説明: リポジトリ IMS_REPOS に関する情報を表示するための ADMIN コマンドが処理されます。リポジトリの状況と、COPY1、COPY2、および SPARE のデータ・セットに関する情報が返されます。このコマンドは、FRPCFG メンバーに

RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

F reposervername,ADMIN コマンドの例 4

コマンド入力:



```
F FRP1,ADMIN DISPLAY
```

コマンド出力:



```
BPE0032I ADMIN DISPLAY COMMAND COMPLETED REPO1RP
FRP2102I - IMS_REPOS                                OPEN
2011/05/06 USRT004 COPY1    COPY2    DISCARD REPO1RP
```

説明: リポジトリ・サーバーによって管理されるリポジトリに関する情報を表示する ADMIN コマンドが処理されます。出力には、データ・セット情報は含まれません。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

関連概念:





-  IMSRSC リポジトリの概要 (システム定義)
-  IMS リポジトリ・データ・セットの状態 (システム定義)

関連タスク:

-  リポジトリ・サーバーの停止 (オペレーションおよびオートメーション)
-  IMSRSC リポジトリ・データ・セットの割り振り (システム定義)

関連資料:

724 ページの『F reposervername,SHUTDOWN』

-  FRPBATCH での LIST コマンド (システム・プログラミング API)
-  FRPBATCH での START コマンド (システム・プログラミング API)
-  FRPBATCH での STOP コマンド (システム・プログラミング API)
-  FRPBATCH での DSCHANGE コマンド (システム・プログラミング API)

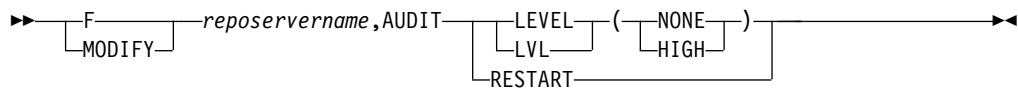
F reposervername,AUDIT

F reposervername,AUDIT コマンドは、IMS PROCLIB データ・セットの FRPCFG メンバー内の AUDIT_LEVEL パラメーターで設定された値から監査レベルを動的に変更するために使用します。

サブセクション:

- 722 ページの『構文』
- 722 ページの『キーワード』
- 722 ページの『例』

構文



キーワード

このコマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

LEVEL

監査レコードを監査ログ・ストリームに書き込むかどうかを決定します。

NONE

監査レコードは書き込まれません。

HIGH

監査レコードが書き込まれます。

RESTART

IMS PROCLIB データ・セットの FRPCFG メンバーで
AUDIT_FAIL=CONTINUE が指定されており、監査ログ・ストリームへの接続
中にエラーが発生した場合、監査ロギングは中断されます。RESTART を使用し
て、監査ロギングを再開することができます。

例

以下に、F reposerservername,AUDIT コマンドの例を示します。

F reposerservername,AUDIT コマンドの例 1

コマンド入力:

```
F FRP1,AUDIT LEVEL(NONE)
```

コマンド出力:

```
BPE0032I AUDIT COMMAND COMPLETED REPO1RP
FRP2103I - Audit level changed from HIGH to NONE REPO1RP
```

説明: AUDIT コマンドが処理され、監査レベルが HIGH から NONE に変更されています。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

F reposerservername,AUDIT コマンドの例 2

コマンド入力:

```
F FRP1,AUDIT LEVEL(HIGH)
```

コマンド出力:

```
BPE0032I AUDIT COMMAND COMPLETED REPO1RP
FRP2103I - Audit level changed from NONE to HIGH REPO1RP
```

説明: AUDIT コマンドが処理され、監査レベルが NONE から HIGH に変更されています。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されて

いるマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

F *reposervername,AUDIT* コマンドの例 3

コマンド入力:


```
F FRP1,AUDIT RESTART
```

コマンド出力:

```
BPE0032I AUDIT RESTART COMMAND COMPLETED REPE1RP
```


説明: 監査処理を再開するために AUDIT コマンドが処理されています。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

関連概念:

 IMSRSC リポジトリの概要 (システム定義)

 リポジトリ・サーバーの監査ログ・レコードの管理 (診断)

関連資料:

 IMS PROCLIB データ・セットの FRPCFG メンバー (システム定義)

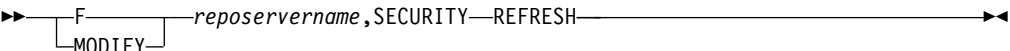
F *reposervername,SECURITY*

F *reposervername,SECURITY* コマンドは、ストレージ内にあるセキュリティー・テーブルを動的にリフレッシュし、RACF または同等のセキュリティー製品に定義されているプロファイルに対する変更を選出するために使用します。このコマンドは、リポジトリ・サーバー構成ファイル・パラメーターを再ロードしたり、リポジトリ定義を再読み取りしたりしません。

サブセクション:

- 『構文』
- 『例』

構文

▶▶  **F** *reposervername,SECURITY-REFRESH*

例

以下に、F *reposervername,SECURITY* コマンドの例を示します。

F *reposervername,SECURITY* コマンドの例 1

コマンド入力:

```
F FRP1,SECURITY REFRESH
```

コマンド出力:

FRP2106E - Security request rejected, CLASS not defined REPO1RP
BPE0032I SECURITY REFRESH COMMAND COMPLETED REPO1RP

説明: セキュリティー・プロファイルをリフレッシュするために、SECURITY コマンドが処理されています。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

関連概念:

➡ RS カタログ・リポジトリ内の IMSRSC リポジトリ指定の更新 (システム管理)

➡ IMSRSC リポジトリの概要 (システム定義)

関連資料:

➡ リポジトリ・サーバーの RACF 定義プロファイルの例 (システム管理)

F reposervername,SHUTDOWN

F *reposervername*,SHUTDOWN コマンドは、指定されたりポジトリ・サーバー (RS) またはすべての RS アドレス・スペースをシャットダウンするために使用します。

サブセクション:

- 『構文』
- 『キーワード』
- 『使用上の注意』
- 725 ページの『例』

構文

➡ `F` `reposervername,SHUTDOWN` `ALL` ➡

キーワード

このコマンドでは、以下のキーワードを指定できます。

ALL

指定された RS と同じ z/OS システム間カップリング・ファシリティグループを使用するすべての RS アドレス・スペース (アクティブの従属サーバーを含む) をシャットダウンします。

使用上の注意

ALL が指定されない場合は、コマンドが発行される z/OS イメージ上の RS のみがシャットダウンされます。マスター・サーバーがシャットダウンされ、SHUTDOWN ALL が発行されない場合、すべての従属サーバーが従属プロセスを開始し、1 つの従属サーバーが新しいマスターになります。

例

以下に、F *reposervername*,SHUTDOWN コマンドの例を示します。

F *reposervername*,SHUTDOWN コマンドの例 1

コマンド入力:

```
F FRP1,SHUTDOWN
```

コマンド出力:

```
FRP2005I - Shutdown command received, server terminating REPO1RP
```

説明: リポジトリ・サーバー・アドレス・スペースをシャットダウンするための SHUTDOWN コマンドを受け取り、サーバーがシャットダウンされます。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

F *reposervername*,SHUTDOWN コマンドの例 2

コマンド入力:


```
F FRP1,SHUTDOWN ALL
```

コマンド出力:


```
FRP2007I - Shutdown command received, notifying all repository servers  
to shut down REPO1RP
```

説明: リポジトリ・サーバー・アドレス・スペースをシャットダウンし、他のすべてのリポジトリ・サーバーに通知するための SHUTDOWN コマンドを受け取りました。このコマンドは、FRPCFG メンバーに RSNAME=REPO1 が指定されているマスター・リポジトリ・サーバーによって処理されます。REPO1RP の RSID は、マスター RS が発行するコマンド出力メッセージに付加されます。

関連概念:

 [IMSRSC リポジトリの概要 \(システム定義\)](#)

関連タスク:

 [リポジトリ・サーバーの停止 \(オペレーションおよびオートメーション\)](#)

関連資料:

718 ページの『F *reposervername*,ADMIN』

727 ページの『第 33 章 P *reposervername* コマンド』

第 33 章 P reposervername コマンド

z/OS STOP (P) インターフェースを介して STOP コマンドを使用して、指定されたリポジトリ・サーバーを停止およびシャットダウンします。マスター・サーバーがシャットダウンされると、すべての従属サーバーが従属プロセスを開始し、1 つの従属サーバーが新しいマスターになります。

サブセクション:

- 『構文』

構文

▶▶ `P` `reposervername` ▶▶
└─STOP─┘

関連概念:

[📄](#) IMSRSC リポジトリの概要 (システム定義)

関連資料:

724 ページの 『F reposervername,SHUTDOWN』

第 11 部 付録

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書の他言語版を IBM から入手できる場合があります。ただし、ご利用にはその言語版の製品もしくは製品のコピーを所有していることが必要な場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Director of Licensing
IBM Corporation
North Castle Drive, MD-NC119
Armonk, NY 10504-1785
US

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

記載されている性能データとお客様事例は、例として示す目的でのみ提供されています。実際の結果は特定の構成や稼働条件によって異なります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名前はすべて架空のものであり、類似する個人や企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (年).

このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。

© Copyright IBM Corp. _年を入れる_.

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com)[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java[™] およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用される条件

このご使用条件は、IBM Web サイトのすべてのご利用条件に追加して適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

IBM オンライン・プライバシー・ステートメント

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』（<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>）の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』（<http://www.ibm.com/privacy/details>）を参照してください。

参考文献

この参考文献のリストには、IMS 15 ライブラリーのすべての資料が記載されています。

表題	頭字語	資料番号
IMS V15 アプリケーション・プログラミング	APG	SC27-6778
IMS V15 アプリケーション・プログラミング API	APR	SC27-6779
IMS V15 コマンド 第 1 巻: IMS コマンド A-M	CR1	SC27-6780
IMS V15 コマンド 第 2 巻: IMS コマンド N-V	CR2	SC27-6781
IMS V15 コマンド 第 3 巻: IMS コンポーネント および z/OS コマンド	CR3	SC27-6782
IMS V15 コミュニケーションおよびコネクション	CCG	SC27-6783
IMS V15 データベース管理	DAG	SC27-6784
IMS V15 データベース・ユーティリティー	DUR	SC27-6785
IMS Version 15 Diagnosis	DGR	GC27-6786
IMS V15 出口ルーチン	ERR	SC27-6787SC43- 3856
IMS V15 インストール	INS	SC27-6788
IMS Version 15 Licensed Program Specifications	LPS	GC27-6799
IMS V15 メッセージおよびコード 第 1 巻: DFS メッセージ	MC1	GC27-6789
IMS V15 メッセージおよびコード 第 2 巻: DFS 以外メッセージ	MC2	GC27-6790
IMS V15 メッセージおよびコード 第 3 巻: IMS 異常終了コード	MC3	GC27-6791
IMS V15 メッセージおよびコード 第 4 巻: IMS コンポーネント・コード	MC4	GC27-6792
IMS V15 オペレーションおよびオートメーション	OAG	SC27-6793
IMS V15 リリース計画	RPG	GC27-6794
IMS V15 システム管理	SAG	SC27-6795
IMS V15 システム定義	SDG	GC27-6796
IMS V15 システム・プログラミング API	SPR	SC27-6797
IMS V15 システム・ユーティリティー	SUR	SC27-6798

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ

キーボード・ショートカット x
機能 x

イメージ・コピー 2 JCL 300

オンライン・コマンド 54

オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ (DFSUICP0)
ジョブの生成 230

オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ JCL 305

[カ行]

カップリング・ファシリティ構造

(CFSTR1 | 2) 334

完全精度タイム・スタンプ

パラメーター 64

キーボード・ショートカット x

キーワード

置換 253

NOOWNER 88

NORECOV 416

OFFLINE 416

OLRBYTES 86

OLRCAP 86, 328

OLRDBDS 88

OLRIMSID 88

OLRNOCAP 86, 328

OLRNOREL 87

OLRREL 87

OLRRGOFF 87

OLRRGON 87

OLRROOTS 87

OLRSEGS 87

ONLINE 416

RECOV 416

STOPTIME 416

%IC 304

%ICDSN2 304

%ICDSN3 304

%ICDSN4 304

%ICUNIT2 304

%ICUNIT3 304

キーワード (続き)

%ICUNIT4 304

%ICVCNT2 304

%ICVCNT3 304

%ICVCNT4 304

%ICVOLS2 304

%ICVOLS3 304

%ICVOLS4 304

キーワード、シンボリック 250

基幹 JCL 307

実行メンバーのコーディング 253, 277

実行メンバーの説明 251

データ・セット 251

デフォルト・メンバーの説明 251

変更 279

ユーザー独自の作成 279

IBM 提供の 250, 289

JCL とユーザー定義出力の生成 249

基本プリミティブ環境 (BPE) コマンド 1

共通サービス層 (CSL) コマンド 41

許可コマンド

CHANGE.DB 79, 82

CHANGE.DBDS 93, 97

継続文字 55

コールド・スタート (cold start)
コマンド

CHANGE.BKOUT 70

DELETE.BKOUT 181

LIST.BKOUT 359

高速データベース・リカバリー (FDBR)
コマンド 475

構文、DBRC コマンド 55

構文図

読み方 viii

コマンド

オンライン

/RMCHANGE コマンド 54

/RMDELETE コマンド 54

/RMGENJCL コマンド 54

/RMINIT コマンド 54

/RMLIST コマンド 54

/RMNOTIFY コマンド 54

前提知識 vii

同等の IMS Connect WTOR コマンド、z/OS コマンド、およびタイプ 2 コマンド 485

CANCEL ODBA 711

CHANGE.PART 110

F fdbproc 477

F fdbproc,DUMP コマンド 477

F fdbproc,RECOVER コマンド 477

コマンド (続き)

F fdbproc,STATUS コマンド 477

F fdbproc,STOP コマンド 479

F fdbproc,TERM コマンド 479

F irlmproc,ABEND コマンド 685

F irlmproc,DIAG,DELAY コマンド 687

F irlmproc,PURGE,imsname コマンド 687

F irlmproc,SET コマンド 688

F irlmproc,STATUS コマンド 691

F jobname,DUMP コマンド 677

F jobname,DUMPxxxx コマンド 677

F jobname,FORCExxxx 678

F jobname,RECONNECT コマンド 679

F jobname,RECONNSTR コマンド 681

F jobname,STOP コマンド 681

F reposervername 717

F reposervername,ADMIN コマンド 718

F reposervername,AUDIT コマンド 721

F reposervername,SECURITY コマンド 723

F reposervername,SHUTDOWN コマンド 724

IMS Connect

REFRESH CONVERTER 502

REFRESH RACFUID 504

SETUIDC 510

STARTMSC 516

STARTRMT 520

STOPLINK 527

STOPMSC 529

STOPRMT 533

STOPSCLN 535

VIEWMSC 574

VIEWRMT 585

INIT.PART 342

P cqsjob 49

P CSL 45

P irlmproc 703

P reposervername コマンド 727

S irlmproc コマンド 699

TRACE CT 705

コマンド、IMS Connect

CLOSEHWS 495

OPENDS 497

OPENIP 499

コマンド、IMS Connect (続き)

OPENPORT 500
 RECORDER 501
 REFRESH CONVERTER 502
 REFRESH RACFUID 504
 SETOAUTO 505
 SETPWMC 507
 SETRACF 508
 SETRRS 509
 SETUIDC 510
 STARTDS 512
 STARTIA 513
 STARTIP 514
 STARTMSC 516
 STARTOD 517
 STARTPT 519
 STARTRMT 520
 STOPCLNT 522
 STOPDS 523
 STOPIA 524
 STOPIP 526
 STOPLINK 527
 STOPMSC 529
 STOPOD 531
 STOPPORT 532
 STOPRMT 533
 STOPSCLN 535
 VIEWDS 537
 VIEWHWS 542
 VIEWIA 570
 VIEWIP 573
 VIEWMSC 574
 VIEWPORT 579
 VIEWRMT 585
 VIEWUOR 590

コマンド、MVS

ワイルドカード 594
 DELETE CLIENT 594
 QUERY ALIAS 600
 QUERY DATASTORE 601
 QUERY IMSPLEX 606
 QUERY MEMBER 608
 QUERY PORT 640
 QUERY UOR 651
 SHUTDOWN MEMBER 653
 UPDATE ALIAS 654
 UPDATE CONVERTER 656
 UPDATE DATASTORE 657
 UPDATE IMSPLEX 659
 UPDATE MEMBER 661
 UPDATE ODBM 667
 UPDATE PORT 669
 UPDATE RACFUID 670

コマンド、z/OS 593

構文 593
 呼び出し 593

コマンド、z/OS (続き)

DELETE LINK 595
 DELETE SENDCLNT 598
 QUERY MSC 635
 QUERY RMTIMSCON 646
 UPDATE MSC 665
 UPDATE RMTIMSCON 672

コマンド構文

継続文字 55
 コメント 55
 説明、DBRC ユーティリティの 55
 定義 56
 パラメーター 56
 分離文字 55

[サ行]

サービス・ユーティリティ

制御ステートメント・パラメーター 256

再作成 435

最大生成数、イメージ・コピー・データ・セットの、GENMAX キーワード 98, 331

削除グループ 258

サブシステム

変更、情報の 160
 リスト 383
 RECON 194
 情報削除 194
 情報の追加 429

時刻修飾子 257

指定、ログ保存期間の、

CHANGE.RECON 140

自動 RECON 損失通知 (Automatic Loss Notification)

DSPSCIX0 139

商標 731, 733

情報削除

イメージ・コピー・データ・セット・レコード 186
 エリア・データ・セット 179
 オンライン・ログ・データ・セット・レコード 187
 再編成レコード 193
 サブシステム・レコード 194
 システム・ログ・データ・セット・レコード 188
 すべてのデータベース・データ・セット・レコード 184
 すべてのデータベース・レコード 183
 すべての変更累積グループ・レコード 183
 データベース・データ・セットの割り振りレコード 180

情報削除 (続き)

データベース・データ・セット・グループ・レコード 185

バックアウト・レコード 181

標準外イメージ・コピー・データ・セット 195

変更累積実行レコード 182

リカバリー実行レコード 192

リカバリー・ログ・データ・セット・レコード 188

情報を RECON データ・セットに追加

イメージ・コピー 392

サブシステム 429

データベース変更累積ユーティリティ 388

データベース・データ・セットまたはエリアのリカバリー 409

バックアウト・レコード 387

標準外イメージ・コピー・データ・セット 431

割り振りまたは割り振り解除 385

1 次オンライン・ログ・データ・セット 397

1 次システム・ログ・データ・セット 405

1 次リカバリー・ログ・データ・セット 400

2 次オンライン・ログ・データ・セット 418

2 次システム・ログ・データ・セット 425

2 次リカバリー・ログ・データ・セット 421

初期化

イメージ・コピー・データ・セット 340

エリア・データ・セット 317

データベース 324

データベース・データ・セット 330

データベース・データ・セット・グループ 337

変更累積グループ 321

変更累積データ・セット 320

RECON ヘッダー・レコード 349

ジョブの生成

オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ 230

データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ 211

データベース・リカバリー・ユーティリティ 236, 244

変更累積ユーティリティ 202

ログ保存ユーティリティ 197

ログ・リカバリー・ユーティリティ 207

シンボリック・キーワード 253

シンボリック・キーワード (続き)

制御キーワード 253
 %DELETE 258
 %ENDDEL 258
 %ENDSEL 254
 %SELECT 254, 261
 %SET MEMBER 254, 259
 %SET TIMEFMT 254, 260
 説明 251, 254, 277
 ユーザー定義 254
 DBRC が認識する 279
 JCL 実行メンバー
 シンボリック・キーワード 253, 275
 %ALLSEL 275
 %ALLTIME 275
 %ALLUSID 276
 %CADSN 273
 %CAFSEQ 273
 %CALGTM 273
 %CAODSN 259
 %CASEL 273
 %CATIME 273
 %CAUNIT 273
 %CAVCNT 273
 %CAVOLS 273
 %DALTIME 275
 %DBADDN 277
 %DBADSAV 277
 %DBDDN 275, 277
 %DBDSDEL 277
 %DBDSN 277
 %DBDSNRV 277
 %DBNAME 275, 277
 %DBTYPE 276, 277
 %DBUSID 277
 %DDNAME 256
 %ICCAT 271
 %ICDSN 270
 %ICFSEQ 270
 %ICSEL 270
 %ICSTOP 270
 %ICTIME 271
 %ICTYPE 270
 %ICUNIT 271
 %ICUSID 271
 %ICVCNT 271
 %ICVOLS 271
 %LOGDSN 268
 %LOGETIM 268
 %LOGFRID 268
 %LOGFSEQ 268
 %LOGLRID 269
 %LOGMERG 268
 %LOGONL 268
 %LOGRMT 268

シンボリック・キーワード (続き)

JCL 実行メンバー (続き)
 %LOGSEL 268
 %LOGSTIM 268
 %LOGUNIT 268
 %LOGVOLS 268
 %OLDCTIM 262
 %OLDFRID 262
 %OLDLRID 262
 %OLDOTIM 262
 %OLDSDDN 262
 %OLSDSN 262
 %OLDSSEL 262
 %OLDSTYP 262
 %PLGTIME 275
 %SLDETIM 264
 %SLDFRID 265
 %SLDFSEQ 264
 %SLDLRID 265
 %SLDRMT 265
 %SLDSDDN 264
 %SLDSSEL 265
 %SLDSTIM 264
 %SLDUNIT 264
 %SLDVOLS 264
 %SSID 253
 %TIME 253
 シンボリック・キーワード、JCL 実行メンバー
 シンボリック・キーワード
 %SLDCHK 265
 置換 250
 制御キーワード、基幹 JCL 254, 277
 制御グループ、基幹 JCL 254
 生成、ユーザー出力 249
 制約事項
 F irlmproc,SET コマンド 691
 選択基準パラメーター 256
 選択グループ、基幹 JCL 254

[夕行]

タイム・スタンプ 57
 値ゼロを指定する 61
 値の標準デフォルト設定値 62
 標準フォーマット 57
 変換および例 62
 2 桁の年入力 61
 DBRC コマンド、フォーマットに影響される 63
 TIMEFMT パラメーター 58
 データ管理ブロック (DMB) 番号 435
 データベース
 再編成
 RECON データ・セット、再編成レコードの追加 412

データベース (続き)

データ・セット、情報を変更 93
 データ・セット・グループ、情報を変更 103
 定義 324
 変更、情報の 79
 リスト 362
 RECON からの情報削除 183
 RECON データ・セット
 再編成レコード 412
 データベース変更累積ユーティリティ
 (DFSUCUM0) 281
 コマンド
 BACKUP.RECON 67
 CHANGE.ADS 69
 CHANGE.BKOUT 70
 CHANGE.CA 73
 CHANGE.CAGRP 75
 CHANGE.DBDSGRP 103
 CHANGE.IC 106
 CHANGE.PRILOG (OLDS 用) 119
 CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 126
 CHANGE.RECON 131
 CHANGE.SECLOG (OLDS 用) 149
 CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 150
 CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 155
 CHANGE.SUBSYS 160
 CHANGE.UIC 163
 DELETE.ADS 179
 DELETE.ALLOC 180
 DELETE.BKOUT 181
 DELETE.CA 182
 DELETE.CAGRP 183
 DELETE.DB 183
 DELETE.DBDS 184
 DELETE.DBDSGRP 185
 DELETE.IC 186
 DELETE.LOG (OLDS 用) 187
 DELETE.LOG (RLDS 用) 188
 DELETE.LOG (SLDS 用) 188
 DELETE.RECOV 192
 DELETE.REORG 193
 DELETE.SUBSYS 194
 DELETE.UIC 195
 GENJCL.ARCHIVE 197
 GENJCL.CA 202
 GENJCL.CLOSE 207
 GENJCL.IC 211
 GENJCL.OIC 230
 GENJCL.RECOV 236
 GENJCL.USER 244
 INIT.ADS 317
 INIT.CA 320
 INIT.CAGRP 321

データベース変更累積ユーティリティ
(DFSUCUM0) (続き)
コマンド (続き)
INIT.DB 324
INIT.DBDS 330
INIT.DBDSGRP 337
INIT.IC 340
INIT.RECON 349
LIST.BKOUT 359
LIST.CAGRP 360
LIST.DB 362
LIST.DBDS 365
LIST.DBDSGRP 368
LIST.HISTORY 370
LIST.LOG (PRILOG ファミリー用)
374
LIST.LOG (レコードのカテゴリー
用) 375
LIST.RECON 379
NOTIFY.ALLOC 385
NOTIFY.BKOUT 387
NOTIFY.CA 388
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.PRILOG (OLDS 用) 397
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 400
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 405
NOTIFY.RECOV 409
NOTIFY.REORG 412
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 418
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 421
NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 425
NOTIFY.UIC 431
REPAIR.RECON 435

データベース変更累積ユーティリティの
JCL
情報を RECON データ・セットに追
加 388
ジョブの生成 202
データベース変更累積ユーティリ
ティーの JCL
基幹 JCL 295
変更、実行に関する情報を 73
RECON からの情報削除 182

データベース・イメージ・コピー・ユー
ティリティ (DFSUDMP0)
基幹 JCL 300
情報を RECON データ・セットに追
加 392
ジョブの生成 211

データベース・リカバリー
グループの定義 337

データベース・リカバリー管理
区画情報の変更 110
データ・セット、不整合な DMB 番号
の検査 435

データベース・リカバリー管理 (続き)
データ・セット、不整合な DMB 番号
の修復 435
データ・セット、古い情報を削除 165
データ・セット、DMB テーブル・レ
コードの再作成 435
バックアップ・コピーを作成するデ
ータ・セット 67
変更、情報の 106

データベース・リカバリー管理 (DBRC)
コマンド 51

データベース・リカバリー管理ユーティ
リティ (DSPURX00)
ジョブの生成 236, 244
GENJCL.RECOV コマンド 236

定義
リカバリー・グループ 337
DB グループ 337
DBDS グループ 337

デフォルト・メンバー 251, 278

特記事項
商標 731, 733
特記事項 731

[ハ行]

バックアップ
RECON のコピーの作成 67

バッチ環境
コマンド
LIST.SUBSYS 383
NOTIFY.SUBSYS 430
NOTIFY.SUBSYS コマンド 429

バッチ・バックアウト・ユーティリ
ティー
RECON からの削除 181
RECON データ・セット内のレコー
ドの変更 70
RECON データ・セットへのバック
アウト・レコードの追加 387

パラメーター
選択基準 256
レコード・タイプ 256

汎用トレース機能 (GTF) USR レコー
ド 143

標準外イメージ・コピー・データ・セ
ット
RECON
情報削除 195
情報の追加 431
変更、情報の 163

標準形のタイム・スタンプ、DBRC コ
マンドのパラメーター 57

複合式 258
不整合の検査 435
不整合の修復 435

並行イメージ・コピー (CIC) (concurrent
image copy (CIC))
CIC キーワード 215

変更、情報の
エリア・データ・セット 69
データベース 79
データベース変更累積ユーティリ
ティー 73
バックアウト・レコード 70
標準外イメージ・コピー・デー
タ・セ
ット 163
1 次 RLDS 121
1 次 SLDS 126
1 次オンライン・ログ・デー
タ・セ
ット 119
2 次 RLDS 150
2 次 SLDS 155
2 次オンライン・ログ・デー
タ・セ
ット 149
2 次サブシステム・エン
トリー 160
CA グループ・レコー
ド 75
DBDS 93
DBDSGRP 103
IC データ・セット 106
RECON ヘッダー・レコー
ド 131

変更累積
グループ
定義 321
リスト 360
RECON からの情報削除 183
RECON 内の情報の変更 75
データ・セット
選択 272
定義 320

[マ行]

メンバー 251

[ヤ行]

ユーザー提供の出口ルーチン
リフレッシュ 37

[ラ行]

リカバリー
グループの定義 337
データベース・デー
タ・セ
ットまたは
エリア、RECON データ・セ
ットへ
の情報の追加 409
ログ・デー
タ・セ
ット
情報削除 188
ログ・デー
タ・セ
ット、RECON デー
タ・セ
ットへの情報の追加 400, 421

リカバリー (続き)
 CHANGE.DBDS 101
 リカバリー管理
 データ・セット
 リスト 379
 JCL とユーザー定義出力を生成する
 コマンド 249
 リスト
 サブシステム 383
 データベース 362
 データベース・グループ 368
 データベース・データ・セット 365
 データベース・ヒストリー 370
 バックアウト・レコード 359
 変更累積グループ 360
 レコードのカテゴリ 375
 PRILOG ファミリー 374
 RECON 379, 439
 例
 F irlmproc,SET コマンド
 TIMEOUT 691
 TRACE=nnn 691
 F irlmproc,STATUS コマンド 693
 TRACE CT 707
 レコードのカテゴリ
 レコードのリスト 375
 レコード・タイプ・パラメーター 256
 ログ・リカバリー・ユーティリティ
 (DFSULTR0)
 ジョブの生成 207

A

ABNORMAL キーワード・コマンド
 CHANGE.SUBSYS 161
 NOTIFY.SUBSYS 430
 ADD キーワード
 CHANGE.CAGRP コマンド 75
 ADDDB キーワード
 CHANGE.DBDSGRP コマンド 104
 ADDEQE キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 95
 ADDN キーワード・コマンド
 CHANGE.ADS 69
 DELETE.ADS 179
 INIT.ADS 318
 NOTIFY.RECOV 410
 ADDNNEW キーワード
 CHANGE.ADS コマンド 69
 ADSN キーワード・コマンド
 CHANGE.ADS 69
 INIT.ADS 318
 ALL キーワード
 コマンド
 CHANGE.DB 81
 CHANGE.SUBSYS 160

ALL キーワード (続き)
 コマンド (続き)
 GENJCL.ARCHIVE 198
 LIST.BKOUT 359
 LIST.CAGRP 361
 LIST.DB 362
 LIST.DBDSGRP 369
 LIST.SUBSYS 383
 説明 81
 ALLD パラメーター
 F irlmproc,STATUS コマンド 692
 ALLI パラメーター
 F irlmproc,STATUS コマンド 692
 ALLTIME キーワード
 NOTIFY.ALLOC コマンド 385
 ALTER キーワード
 NOTIFY.REORG 416
 ARCHIVED キーワード
 CHANGE.PRILOG コマンド (OLDS
 用) 119
 ARCHJCL 基幹 JCL 実行メンバー 290
 AREA パラメーター
 コマンド
 CHANGE.ADS 69
 CHANGE.DBDS 95
 CHANGE.IC 107
 CHANGE.UIC 163
 DELETE.ADS 179
 DELETE.ALLOC 180
 DELETE.DBDS 185
 DELETE.IC 186
 DELETE.RECOV 192
 DELETE.UIC 195
 GENJCL.IC 214
 GENJCL.OIC 232
 GENJCL.RECOV 238
 INIT.ADS 318
 INIT.DBDS 331
 INIT.IC 340
 LIST.DBDS 366
 LIST.HISTORY 372
 NOTIFY.ALLOC 386
 NOTIFY.IC 392
 NOTIFY.RECOV 410
 NOTIFY.UIC 432
 データ・セットの定義 317
 RECON からの情報削除 179
 AREANew キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 97
 ARNEEDED キーワード
 CHANGE.PRILOG コマンド (OLDS
 用) 119
 ARSCHED キーワード
 CHANGE.PRILOG コマンド (OLDS
 用) 119

ARSTART キーワード
 CHANGE.PRILOG コマンド (OLDS
 用) 119
 AVAIL キーワード・コマンド
 CHANGE.ADS 69
 CHANGE.PRILOG (OLDS 用) 120
 CHANGE.SECLOG (OLDS 用) 149
 INIT.ADS 318

B

BACKIRLM キーワード・コマンド
 CHANGE.SUBSYS 161
 BACKOUT キーワード
 CHANGE.DB コマンド 85
 BACKUP.RECON コマンド
 キーワード
 BOTH 67
 RECON1 67
 RECON2 67
 説明 67
 例 68, 437
 BKO (backout) キーワード・コマンド
 CHANGE.BKOUT 72
 NOTIFY.BKOUT 388
 BOTH キーワード
 BACKUP.RECON コマンド 67
 BPE DISPLAY VERSION コマンド
 キーワード 7
 構文 7
 出力 7
 例 8
 BPE コマンド 1
 構文 3
 構文、verb 専用フォーマット 3
 構文、verb リソース・タイプ 4
 呼び出し 3
 ワイルドカード文字のサポート 3
 DISPLAY USEREXIT 25
 IMS コンポーネント・コマンド・パラ
 メーターの指定 3
 REFRESH USEREXIT 37
 BPE ユーザー提供の出口ルーチン
 リフレッシュ 37

C

CADSN キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 73
 INIT.CA 320
 NOTIFY.CA 388
 CAJCL キーワード
 コマンド
 CHANGE.CAGRP 75
 INIT.CAGRP 321

CAJCL パラメーター
 基幹 JCL 実行メンバー 295
 CANCEL ODBA コマンド
 構文図 711
 説明 711
 CATALOG キーワード
 CHANGE.DBDS 95
 CHANGE.PART 111
 CHANGE.RECON 133
 INIT.DB 325
 INIT.DBDS 331, 414
 INIT.PART 344
 INIT.RECON 350
 CATDS キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 131
 INIT.RECON 351
 CATIME キーワード
 GENJCL.CA コマンド 205
 CFSTR1 キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 96
 CFSTR1 キーワード INIT.DBDS コマ
 ンド 334
 CFSTR2 キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 96
 CFSTR2 キーワード INIT.DBDS コマ
 ンド 334
 CHANGE.ADS コマンド 69
 CHANGE.BKOUT コマンド 70
 CHANGE.CA コマンド 73
 CHANGE.CAGRP コマンド 75
 CHANGE.DB コマンド 79
 CHANGE.DBDS コマンド 93
 CHANGE.DBDSGRP コマンド 103
 CHANGE.IC コマンド 106
 CHANGE.PART コマンド 110
 CHANGE.PRILOG コマンド
 OLDS 用 119
 RLDS 用 121
 SLDS 用 126
 CHANGE.RECON コマンド 131
 CHANGE.SECLOG コマンド
 OLDS 用 149
 RLDS 用 150
 SLDS 用 155
 CHANGE.SUBSYS コマンド 160
 CHANGE.UIC コマンド 163
 CHECK17 キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 138
 CHECK17 キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 139
 INIT.RECON 353
 CHECK44 キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 138
 CHECK44 キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 139
 INIT.RECON 353

CHKINT キーワード、GENJCL.OIC コマ
 ンド 232
 CHKPTCT キーワード・コマンド
 CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 122
 CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 127
 CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 151
 CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 156
 NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 402
 NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 406
 NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 422
 NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 427
 CIC キーワード
 コマンド
 GENJCL.IC 215
 NOTIFY.IC 392
 CIC キーワード、コマンド
 GENJCL.IC 215
 NOTIFY.IC 392
 CIC (並行イメージ・コピー) 215
 CLEANUP.RECON コマンド
 説明 165
 例 169
 CLOSEHWS コマンド 495
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
 ドおよび z/OS コマンド 496
 CMDAUTH
 CHANGE.RECON 135
 CMDAUTH キーワード
 INIT.RECON 352
 Common Queue Server (CQS) コマンド
 47
 COMP キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 74
 NOTIFY.CA 388
 COPIES キーワード・コマンド
 GENJCL.IC 213
 GENJCL.OIC 232
 CQS コマンド 47
 CSL SHUTDOWN
 使用上の注意 43
 説明 43
 CSL コマンド 41
 CSLPLEX SHUTDOWN
 構文 43
 使用上の注意 43
 説明 43
 CSLSHUTDOWN
 構文 43
 CURRENT キーワード・コマンド
 NOTIFY.RECOV 410
 NOTIFY.REORG 414
 NOTIFY.UIC 432

D

DASDUNIT キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 136
 INIT.RECON 353
 DBCTL (データベース制御)
 開始するサブシステム
 START irlmproc 699
 DBD キーワード・コマンド
 CHANGE.ADS 69
 CHANGE.BKOUT 72
 CHANGE.DB 81
 CHANGE.DBDS 95
 CHANGE.IC 107
 CHANGE.UIC 163
 DELETE.ADS 179
 DELETE.ALLOC 180
 DELETE.DB 183
 DELETE.DBDS 185
 DELETE.IC 186
 DELETE.PART 191
 DELETE.RECOV 192
 DELETE.REORG 193
 DELETE.UIC 195
 GENJCL.IC 213
 GENJCL.OIC 231
 GENJCL.RECOV 237
 GENJCL.USER 245
 INIT.ADS 318
 INIT.DB 324
 INIT.DBDS 331
 INIT.IC 340
 LIST.DB 362
 LIST.DBDS 366
 LIST.HISTORY 370
 NOTIFY.ALLOC 385
 NOTIFY.BKOUT 388
 NOTIFY.IC 392
 NOTIFY.RECOV 410
 NOTIFY.UIC 431
 DBDS (データベース・データ・セット)
 コマンド 238
 GENJCL.RECOV 238
 LIST.DB 362
 NOTIFY.RECOV 411
 定義 330
 リスト 365
 DBDS レコードの選択 274, 276
 qualifier 257
 RECON データ・セットからの情報削
 除 184, 186
 DBDS (データベース・データ・セット)
 グループ
 定義 337
 LIST コマンド 368
 RECON からの情報削除 185

DBQUI キーワード
CHANGE.DB コマンド 83
CHANGE.DBDS コマンド 97

DBQUIH キーワード
CHANGE.DB コマンド 83
CHANGE.DBDS コマンド 97

DBQUIH キーワード・コマンド
GENJCL.IC 214

DBRC
再編成レコード 412
レコードの追加
データベース再編成 412

DBRC コマンド 51
NOTIFY.REORG 413

DBRC (データベース・リカバリー管理)
オンライン・コマンド 54
コマンド
概要 53
タイム・スタンプ 57

DBRC の基幹 JCL 249

DDN キーワード・コマンド
CHANGE.DBDS 95
CHANGE.IC 107
CHANGE.UIC 163
DELETE.ALLOC 180
DELETE.DBDS 185
DELETE.IC 186
DELETE.RECOV 192
DELETE.REORG 193
DELETE.UIC 195
GENJCL.IC 214
GENJCL.OIC 232
GENJCL.RECOV 238
GENJCL.USER 245
INIT.DBDS 331
INIT.IC 340
LIST.DBDS 366
LIST.HISTORY 372
NOTIFY.ALLOC 386
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.RECOV 410
NOTIFY.REORG 414
NOTIFY.UIC 432

DDNNEW キーワード
CHANGE.DBDS コマンド 97

DEADLOCK= パラメーター
START irlmproc コマンド 699

DEALTIME キーワード・コマンド
NOTIFY.ALLOC 386

DEFAULTS キーワード・コマンド
GENJCL.ARCHIVE 198
GENJCL.CA 203
GENJCL.CLOSE 208
GENJCL.IC 221
GENJCL.OIC 233
GENJCL.RECOV 238

DEFAULTS キーワード・コマンド (続き)
GENJCL.USER 246

DEFLTJCL キーワード
CHANGE.CAGRP 75
CHANGE.DBDS 98
INIT.CAGRP 321

DELEQE キーワード
CHANGE.DBDS コマンド 95

DELETE CLIENT コマンド
構文 594
使用法 594
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 595
例 594

DELETE LINK コマンド 595
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 597

DELETE SENDCLNT コマンド 598
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 599

DELETE キーワード・コマンド
CHANGE.BKOUT 71
CHANGE.CAGRP 75

DELETE コマンド 594
CLIENT 594

DELETE.ADS コマンド 179

DELETE.ALLOC コマンド 180

DELETE.BKOUT コマンド 181

DELETE.CA コマンド 182

DELETE.CAGRP コマンド 183

DELETE.DB コマンド 183

DELETE.DBDS コマンド 184

DELETE.DBDSGRP コマンド 185

DELETE.IC コマンド 186

DELETE.LOG コマンド (OLDS 用) 187

DELETE.LOG コマンド (RLDS 用) 188

DELETE.LOG コマンド (SLDS 用) 188

DELETE.PART コマンド
構文 191
DBD キーワード 191
PART キーワード 191

DELETE.RECOV コマンド 192

DELETE.REORG コマンド 193

DELETE.SUBSYS コマンド 194

DELETE.UIC コマンド 195

DELMEM キーワード、
CHANGE.DBDSGRP コマンド 104

DFSUDMP0 (データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ) 283

DFSUICP0 (オンライン・データベース・イメージ・コピー・ユーティリティ) 283

DFSULTR0 (ログ・リカバリー・ユーティリティ)
ジョブの生成 207

DISPLAY TRACETABLE
キーワード 9
構文 9
出力 9
使用上の注意 17

DISPLAY TRACETABLE コマンド 9
リポジトリ・サーバー定義のトレース・テーブル・タイプ 9

BPE 定義のトレース・テーブル・タイプ 9

CQS 定義のトレース・テーブル 9

OM 定義のトレース・テーブル 9

RM 定義のトレース・テーブル 9

SCI 定義のトレース・テーブル・タイプ 9

DISPLAY USEREXIT コマンド
構文 25
出力 31
使用上の注意 25
例 31

BPE ユーザー出口タイプ 26

CQS ユーザー出口タイプ 26

DBRC ユーザー出口タイプ 27

HWS ユーザー出口タイプ 27, 35

ODBM ユーザー出口タイプ 27, 35

OM ユーザー出口タイプ 28

RM ユーザー出口タイプ 28

SCI ユーザー出口タイプ 28

DMB (データ管理ブロック) 番号 435

DMB テーブル・レコード 435

DSN コマンド
CHANGE.DBDS 98
CHANGE.PRILOG (OLDS 用) 120
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 122
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 127
CHANGE.SECLOG (OLDS 用) 149
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 156
INIT.DBDS 331
NOTIFY.PRILOG (OLDS 用) 397
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 401
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 405
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 418
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 422

DSPSCIX0 出口 139

DSSN キーワード NOTIFY.ALLOC コマンド 386

DSSTART キーワード・コマンド
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 123
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 128
CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 152
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 157

DUAL キーワード
CHANGE.RECON コマンド 136

E

ENDRECOV キーワード・コマンド
CHANGE.SUBSYS 162
NOTIFY.SUBSYS 430

F

F fdbproc,DUMP コマンド
構文図 477
説明 477

F fdbproc,RECOVER コマンド
構文図 477
説明 477

F fdbproc,STATUS コマンド
構文図 477
説明 477

F fdbproc,STOP コマンド
構文図 479
説明 479

F fdbproc,TERM コマンド
構文図 479
説明 479

F irlmproc,ABEND コマンド
構文図 685
説明 685
例 685

F irlmproc,DIAG,DELAY コマンド
構文図 687
説明 687

F irlmproc,PURGE,imsname コマンド
構文図 687
説明 687
例 688

F irlmproc,SET コマンド
構文図 688
制約事項 691
説明 688
例
TIMEOUT 691
TRACE=nnn 691
irlmproc パラメーター 689
TRACE=nnn パラメーター 690

F irlmproc,STATUS コマンド
構文図 691
説明 691
例 693
ALLD パラメーター 692
ALLI パラメーター 692
irlmx パラメーター 692
STOR パラメーター 692
TRACE パラメーター 692

F jobname,DUMP コマンド
構文図 677
説明 677
例 677

F jobname,DUMPxxxx コマンド
構文図 677
説明 677
例 678

F jobname,FORCExxxx コマンド
構文図 678
説明 678
例 679

F jobname,RECONNECT コマンド
構文図 679
説明 679
例 680

F jobname,RECONNSTR コマンド
構文図 681
説明 681

F jobname,STOP コマンド
構文図 681
説明 681
例 681

F jobname,STOPxxxx コマンド
構文図 682
説明 682
例 682

F reposervername,ADMIN コマンド
構文図 718
説明 718
例 719

F reposervername,AUDIT コマンド
構文図 721
説明 721
例 722

F reposervername,SECURITY コマンド
構文図 723
説明 723
例 723

F reposervername,SHUTDOWN コマンド
構文図 724
説明 724
例 725

FDBR コマンド 475

FILESEQ キーワード・コマンド
CHANGE.CA 73
CHANGE.IC 107
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 123
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 128
CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 152
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 157
INIT.CA 320
INIT.IC 340
NOTIFY.CA 388
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 402
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 407
NOTIFY.REORG 415
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 423

FILESEQ キーワード・コマンド (続き)
NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 427

FILESEQ2 キーワード・コマンド
CHANGE.IC 107
INIT.IC 340
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.REORG 415

FORCE ODBA コマンド
説明 713

FORCER キーワード・コマンド
CHANGE.RECON 137
INIT.RECON 353

FPAREA キーワード、GENJCL.RECOV
コマンド 238

FROMTIME キーワード・コマンド
LIST.HISTORY 372
LIST.LOG 377

FULLSEG キーワード
CHANGE.DB コマンド 84
CHANGE.DBDS 98
INIT.DB コマンド 327

FULLSEG パラメーター
INIT.DBDS コマンド 336

G

GAP キーワード、CHANGE.PRILOG
(RLDS 用) 123, 124

GENJCL コマンド 249

GENJCL コマンド、説明 249

GENJCL.ARCHIVE コマンド
構文 197
TIMEFMT キーワード 200

GENJCL.CA コマンド 202
TIMEFMT キーワード 204

GENJCL.CLOSE コマンド 207
TIMEFMT キーワード 209

GENJCL.IC コマンド 211
SMSNOCIC キーワード 215
SMSOFFLC キーワード 215
SMSONLC キーワード 215
TIMEFMT キーワード 222

GENJCL.OIC コマンド 230
TIMEFMT キーワード 234

GENJCL.RECOV コマンド 236
キーワード
USEAREA 241
USEDDBDS 241
USEIC 241
USEOLRRG 241
RESTORE キーワード 240
TIMEFMT キーワード 240

GENJCL.USER コマンド 244
TIMEFMT キーワード 247

GENMAX パラメーター
INIT.DBDS コマンドの 331

GROUP キーワード・コマンド 213
 GENJCL.IC 213
 GENJCL.OIC 231
 GENJCL.RECOV 237
 GENJCL.USER 245
 LIST.DBDS 366
 LIST.HISTORY 370
 GRPMAX キーワード・コマンド
 CHANGE.CAGRP 75
 INIT.CAGRP 321
 GRPMEM キーワード
 INIT.CAGRP コマンド 321
 GRPNAME キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 73
 CHANGE.CAGRP 75
 CHANGE.DBDSGRP 104
 DELETE.CA 182
 DELETE.CAGRP 183
 DELETE.DBDSGRP 185
 GENJCL.CA 203
 INIT.CA 320
 INIT.CAGRP 321
 INIT.DBDSGRP 338
 LIST.CAGRP 361
 LIST.DBDSGRP 369
 NOTIFY.CA 388
 GTF (汎用トレース機能) USR レコード
 143

H

HALDB 区画
 登録 342
 HISTORY コマンド 370

I

ICDSN キーワード・コマンド
 選択 269
 定義 340
 CHANGE.IC 107
 INIT.IC 340
 NOTIFY.IC 392
 NOTIFY.REORG 415
 RECON
 情報の追加 409
 変更、情報の 106
 ICDSN2 キーワード・コマンド
 CHANGE.IC 107
 DELETE.IC 186
 INIT.IC 340
 NOTIFY.IC 392
 NOTIFY.REORG 415

ICJCL キーワード
 コマンド
 CHANGE.DBDS 99
 GENJCL.CA 203
 GENJCL.CLOSE 208
 GENJCL.OIC 233
 GENJCL.RECOV 239
 GENJCL.USER 246
 ICJCL パラメーター
 基幹 JCL 実行メンバー 300
 ICOFF キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 99
 ICON キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 99
 ICRCVJCL パラメーター
 基幹 JCL 実行メンバー 308
 ICREQ キーワード
 CHANGE.DB コマンド 84
 INIT.DB コマンド 326
 ICREQ キーワード、INIT.DB コマンド
 326
 IMS Connect
 コマンド 495
 タイプ 2 コマンド 493
 DELETE LINK 595
 DELETE SENDCLNT 598
 QUERY MSC コマンド 635
 QUERY RMTIMSCON コマンド 646
 UPDATE MSC 665
 UPDATE RMTIMSCON 672
 IMS サブシステム
 開始
 START irlmproc 699
 IMS 制御領域コマンド 675
 IMSPLEX
 CHANGE.RECON 137
 DSPSCIX0 139
 IMSpIex
 OPENIP コマンド 499
 STARTIP コマンド 514
 STOPIP コマンド 526
 VIEWIP コマンド 573
 INACTIVE キーワード
 DELETE.LOG コマンド (RLDS およ
 び SLDS 用) 188
 INIT.ADS コマンド
 説明 317
 INIT.CA コマンド 320
 INIT.CAGRP コマンド 321
 INIT.DB コマンド
 説明 324
 INIT.DBDS コマンド
 説明 330
 INIT.DBDSGRP コマンド 337
 INIT.IC コマンド 340
 INIT.PART コマンド 342

INIT.RECON コマンド
 説明 349
 INTERIM キーワード・コマンド
 DELETE.LOG (OLDS 用) 187
 DELETE.LOG (RLDS および SLDS
 用) 190
 INVALID キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 74
 CHANGE.IC 107
 INVALID2 キーワード
 説明 108
 CHANGE.IC コマンド 108
 IRLM コマンド 683
 IRLMGRP= パラメーター
 START irlmproc コマンド 700
 IRLMID キーワード・コマンド
 CHANGE.SUBSYS 161
 NOTIFY.SUBSYS 430
 IRLMID= パラメーター
 START irlmproc コマンド 700
 IRLMNM= パラメーター
 START irlmproc コマンド 700
 irlmproc パラメーター
 F irlmproc,SET コマンド 689
 irlmx パラメーター
 F irlmproc,STATUS コマンド 692

J

JCL (ジョブ制御言語)
 生成 249
 JCL の生成 249
 JCLOUT キーワード
 コマンド
 GENJCL.IC 221
 コマンド GENJCL.ARCHIVE 198
 JCLOUT パラメーター
 基幹 JCL 250
 JCLPDS キーワード
 コマンド 198
 GENJCL.ARCHIVE 198
 GENJCL.CA 203
 GENJCL.CLOSE 208
 GENJCL.IC 221
 GENJCL.OIC 233
 GENJCL.RECOV 239
 GENJCL.USER 246
 JCLPDS パラメーター
 基幹 JCL 250
 JOB キーワード・コマンド
 GENJCL.ARCHIVE 199
 GENJCL.CA 203
 GENJCL.CLOSE 208
 GENJCL.IC 222
 GENJCL.OIC 233
 GENJCL.RECOV 239

JOB キーワード・コマンド (続き)

GENJCL.USER 246

JOBJCL

基幹 JCL 実行メンバー 289

L

LIST キーワード・コマンド

GENJCL.ARCHIVE 199

GENJCL.CA 203

GENJCL.CLOSE 208

GENJCL.IC 222

GENJCL.OIC 233

GENJCL.RECOV 239

GENJCL.USER 246

LIST.BKOUT コマンド 359

LIST.CAGRP コマンド 360

LIST.DB コマンド 362

LIST.DBDS コマンド 365

LIST.DBDSGRP コマンド 368

LIST.HISTORY コマンド 370

LIST.LOG (PRILOG ファミリー用) コマンド 374

LIST.LOG (レコードのカテゴリ用) コマンド 375

LIST.RECON コマンド

オンライン・ログ・レコード・フィールド 472

コマンドで表示されるフィールド 466, 472, 474

サンプル・リスト 439

説明 379

データ・グループ・レコード・フィールド 473

ログ・レコード・フィールド 472

ALLOC レコード・フィールド 473

BACKOUT レコード・フィールド 472

CA レコード・フィールド 473

CAGRP レコード・フィールド 473

DB (HALDB) レコード・フィールド 473

DB (IMS) レコード・フィールド 473

DB (PART) レコード・フィールド 473

DB (高速機能) レコード・フィールド 473

DBDS (高速機能以外) レコード・フィールド 473

DBDS (高速機能) レコード・フィールド 473

IMAGE レコード・フィールド 473

RECON レコード・フィールド 467

REORG レコード・フィールド 474

SSYS レコード・フィールド 472

LIST.SUBSYS コマンド 383

LKASID キーワード

CHANGE.DBDS コマンド 99

LKASID パラメーター

INIT.DBDS コマンド 335

LOCKTAB= パラメーター

START irlmproc コマンド 700

LOGCLJCL 基幹 JCL 実行メンバー 298

LOGRET キーワード、CHANGE.RECON の 140

LOGRET パラメーター

INIT.RECON 354

M

MAS パラメーター

INIT.DBDS コマンド 335

MAXCSA= パラメーター

START irlmproc コマンド 701

MAXOLDS キーワード、

GENJCL.ARCHIVE コマンド 199

MAXUSRS= パラメーター

START irlmproc コマンド 701

MEMBER キーワード

GENJCL.ARCHIVE コマンド 199

GENJCL.CA 204

GENJCL.CLOSE 208

GENJCL.IC 222

GENJCL.OIC 233

GENJCL.RECOV 240

GENJCL.USER 245

INIT.DBDSGRP 338

MODIFY FDBRPROC コマンド

DUMP 477

RECOVER 477

STATUS 477

STOP 479

TERM 479

MODIFY IMS コマンド

DUMP 677

DUMPxxxx 677

FORCExxxx 678

RECONNECT 679

RECONNSTR 681

STOP 681

STOPxxxx 682

MODIFY irlmproc コマンド

ABEND 685

DIAG,DELAY 687

PURGE,imsname 687

SET 688

STATUS 691

MODIFY reposervername コマンド

ADMIN 718

AUDIT 721

SECURITY 723

SHUTDOWN 724

MULTIJOB キーワード・コマンド

GENJCL.IC 222

GENJCL.OIC 234

GENJCL.RECOV 240

GENJCL.USER 246

N

NEWTIME キーワード・コマンド

CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 123

CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 128

CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 153

CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 157

NEWVOL キーワード・コマンド

CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 124

CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 129

CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 153

CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 158

NOAUTH キーワード・コマンド

CHANGE.DB 82

CHANGE.DBDS 97

NOBACK キーワード

CHANGE.DB コマンド 85

NOBACKUP キーワード

CHANGE.SUBSYS コマンド 161

NOCATALG キーワード

CHANGE.DBDS 95

CHANGE.PART 111

CHANGE.RECON 133

INIT.DB 325

INIT.DBDS 331, 414

INIT.PART 344

INIT.RECON 350

NOCATDS キーワード・コマンド

CHANGE.RECON 131

INIT.RECON 351

NOCFSTR2 キーワード

CHANGE.DBDS コマンド 96

NOCHECK キーワード

CHANGE.RECON 138, 139

NOCHECK パラメーター

INIT.RECON 353

NODBQUI キーワード

CHANGE.DB コマンド 83

CHANGE.DBDS コマンド 97

NODBQUIH キーワード

CHANGE.DB コマンド 83

CHANGE.DBDS コマンド 97

NODBQUIH キーワード・コマンド

GENJCL.IC 214

NODEFLT キーワード・コマンド

CHANGE.CAGRP 75

GENJCL.CA 204

GENJCL.IC 222

GENJCL.OIC 234

GENJCL.RECOV 240

NODEFLT キーワード・コマンド (続き)
GENJCL.USER 247
NOFORCER キーワード・コマンド
CHANGE.RECON 137
INIT.RECON 353
NOFULLSG キーワード
CHANGE.DB コマンド 84
CHANGE.DBDS 98
INIT.DB コマンド 327
NOFULLSG パラメーター
INIT.DBDS コマンド 336
NOICREQ キーワード
CHANGE.DB コマンド 84
INIT.DB コマンド 326
NOICREQ キーワード、INIT.DB コマ
ンド 327
NOJOB キーワード・コマンド
GENJCL.ARCHIVE 199
GENJCL.CA 203
GENJCL.CLOSE 208
GENJCL.IC 222
GENJCL.OIC 233
GENJCL.RECOV 239
GENJCL.USER 246
NOLIST キーワード・コマンド
GENJCL.ARCHIVE 199
GENJCL.CA 203
GENJCL.CLOSE 208
GENJCL.IC 222
GENJCL.OIC 233
GENJCL.RECOV 239
GENJCL.USER 246
NOLKASID キーワード
CHANGE.DBDS コマンド 99
NOLKASID パラメーター
INIT.DBDS コマンド 335
NOMAS パラメーター
INIT.DBDS コマンド 335
NONEW キーワード・コマンド 356
CHANGE.RECON 142
INIT.RECON 356
NONRECOV キーワード
CHANGE.DB 85
NOOWNER キーワード 88
NOPREL キーワード
CHANGE.DBDS コマンド 100
NOPREO キーワード
CHANGE.DBDS コマンド 101
NORECOV キーワード
CHANGE.DBDS コマンド 101
NOTIFY.REORG 416
NOREUSE キーワード
コマンド
CHANGE.CAGRP 75
CHANGE.DBDS 100
INIT.CAGRP 321

NOREUSE キーワード (続き)
INIT.DBDS 332
NORMAL キーワード・コマンド
CHANGE.PRILOG (OLDS 用) 120
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 123
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 128
CHANGE.SECLOG (OLDS 用) 149
CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 152
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 157
CHANGE.SUBSYS 161
NOTIFY.SUBSYS 430
NOTIFY.ALLOC コマンド 385
NOTIFY.BKOUT コマンド 387
NOTIFY.CA コマンド 388
NOTIFY.PRILOG コマンド (OLDS 用)
397
NOTIFY.PRILOG コマンド (RLDS 用)
400
NOTIFY.PRILOG コマンド (SLDS 用)
405
NOTIFY.RECOV コマンド 409
NOTIFY.REORG
ALTER 416
NOTIFY.REORG コマンド 412
NOTIFY.SECLOG コマンド (OLDS 用)
418
NOTIFY.SECLOG コマンド (RLDS 用)
421
NOTIFY.SECLOG コマンド (SLDS 用)
425
NOTIFY.SUBSYS コマンド 429
NOTIFY.UIC コマンド
説明 431
NOVSO キーワード 102
CHANGE.DBDS 102
INIT.DBDS 334
NXTOLDS キーワード・コマンド
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 420

O

ODBA コマンド 709
OFFLINE キーワード 416
OICJCL キーワード
コマンド 100
CHANGE.DBDS 100
INIT.DBDS 333
OICJCL パラメーター
基幹 JCL 実行メンバー 305
OLDS (オンライン・ログ・データ・セッ
ト)
コマンド
CHANGE.PRILOG 119
CHANGE.SECLOG 149
DELETE.LOG (OLDS 用) 187
GENJCL.ARCHIVE 198

OLDS (オンライン・ログ・データ・セッ
ト) (続き)
コマンド (続き)
GENJCL.CLOSE 208
NOTIFY.PRILOG (OLDS 用) 397
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 418
変更、情報の 119, 149
JCL での選択 261
RECON
情報削除 187
情報の追加 397, 418
OLDVOL キーワード・コマンド
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 124
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 129
CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 153
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 158
OLRBYTES キーワード 86
OLRCAP キーワード 86, 328
OLRDBDS キーワード 88
OLRIMSID キーワード 88
OLRNOCAP キーワード 86, 328
OLRNOREL キーワード 87
OLRREL キーワード 87
OLRRGOFF キーワード 87
OLRRGON キーワード 87
OLRROOTS キーワード 87
OLRSEGS キーワード 87
ONEJOB キーワード・コマンド
GENJCL.IC 222
GENJCL.OIC 234
GENJCL.RECOV 240
GENJCL.USER 246
ONLINE キーワード 416
ONLINE キーワード・コマンド
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.SUBSYS 430
ONLINE キーワード・コマンド
LIST.SUBSYS 383
Open Database Access (ODBA) コマン
ド 709
OPENDS コマンド 497
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 498
OPENIP コマンド 499
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 499
OPENPORT コマンド 500
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 501

P

P cqsjob コマンド
構文図 49
説明 49

P CSL コマンド
 キーワード 45
 構文図 45
 シャットダウン 45
 説明 45

P irlmproc コマンド
 構文図 703
 説明 703
 例 703

P reposervername コマンド
 構文図 727
 説明 727
 例 703

PART キーワード
 DELETE.PART 191

PC= パラメーター
 START irlmproc コマンド 701

PRELOAD キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 100

PREOPEN キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 101

PRILOG ファミリー
 レコードのリスト 374

PSB キーワード・コマンド 72
 CHANGE.BKOUT 72
 GENJCL.OIC 232
 GENJCL.USER 247
 NOTIFY.BKOUT 388

PURGLIST キーワード
 NOTIFY.CA コマンド 388

Q

QUERY ALIAS
 構文 600
 使用法 600
 例 600

QUERY ALIAS コマンド 600
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 600

QUERY DATASTORE コマンド 601
 構文 601
 使用法 601
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 602
 例 601

QUERY IMSPLEX コマンド 606
 構文 606
 使用法 606
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 607
 例 606

QUERY MEMBER コマンド 608
 構文 608
 出力フィールド 609
 使用法 608

QUERY MEMBER コマンド (続き)
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 609
 例 608

QUERY MSC コマンド 635
 出力フィールド 637
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 636

QUERY PORT コマンド 640
 構文 640
 使用上の注意 641
 使用法 640
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 641
 例 640

QUERY RMTIMSCON コマンド 646
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 647

QUERY UOR コマンド 651
 構文 651
 使用法 651
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 652
 例 651

QUERY コマンド
 DB キーワード
 コマンドの比較 719
 類似の IMS コマンド 719

R

RCVTIME キーワード
 GENJCL.RECOV 240
 NOTIFY.RECOV 410

READOFF キーワード
 CHANGE.DB コマンド 89

READON キーワード
 CHANGE.DB コマンド 89

RECDCT キーワード・コマンド
 CHANGE.IC 108
 NOTIFY.IC 392
 NOTIFY.REORG 415

RECON
 サンプル・リスト 439

RECON データ・セット
 再編成レコード 412
 レコードの追加
 データベース再編成 412

RECON データ・セットの再編成
 情報削除 193

RECON1 キーワード
 BACKUP.RECON コマンド 67

REORDER コマンド 501
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 502

RECOV キーワード
 NOTIFY.REORG 416

RECOVABL キーワード
 CHANGE.DB 85
 INIT.DB 325

RECOVJCL キーワード
 コマンド
 CHANGE.DBDS 101
 INIT.DBDS 333

RECOVJCL パラメーター
 基幹 JCL 実行メンバー 310

RECOVPD キーワード
 コマンド
 INIT.CAGRP 321
 INIT.DBDS 334

RECOVPD キーワード・コマンド
 CHANGE.DBDS 101
 INIT.DBDS 333

RECTIME キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 73
 CHANGE.IC 107
 CHANGE.UIC 163
 DELETE.ALLOC 180
 DELETE.CA 182
 DELETE.IC 186
 DELETE.RECOV 193
 DELETE.REORG 194
 DELETE.UIC 195

RECVJCL キーワード
 CHANGE.DBDS コマンド 102

REFRESH CONVERTER コマンド
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 503

REFRESH RACFUID コマンド
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 505

REFRESH USEREXIT コマンド
 構文 33
 考慮事項 38
 出力 39
 使用法 33
 推奨事項 38
 例 39

REPAIR.RECON コマンド 435

REPLACE キーワード
 CHANGE.RECON コマンド 136

RESTORE キーワード
 GENJCL.RECOV 240

REUSE キーワード・コマンド
 CHANGE.CAGRP 75
 CHANGE.DBDS 100
 INIT.CAGRP 321
 INIT.DBDS 332

RLDS (リカバリー・ログ・データ・セット) 121
 コマンド 122

RLDS (リカバリー・ログ・データ・セッ
ト) (続き)
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 122
CHANGE.SECLOG (RLDS 用)
150
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 403
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 424
選択 266
RECON からの情報削除 188
RUNTIMES キーワード・コマンド
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 124
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 129
CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 153
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 158
NOTIFY.CA 388
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.PRILOG (OLDS 用) 397
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 401
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 405
NOTIFY.REORG 414
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 418
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 422
NOTIFY.UIC 433

S

SCOPE= パラメーター
START irlmproc コマンド 701
SETAUTO コマンド 505
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 506
SETPWMC コマンド 507
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 507
SETRACF コマンド 508
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 509
SETRRS コマンド 509
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 510
SETUIDC コマンド
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 511
SHADOW パラメーター
INIT.DBDS コマンド 336
SHARELVL キーワード
INIT.DB 342
SHARELVL パラメーター
CHANGE.DB 89
SHUTDOWN CSL
構文 43
使用上の注意 43
説明 43
SHUTDOWN CSLPLEX
構文 43
使用上の注意 43
SHUTDOWN CSLPLEX (続き)
説明 43
SHUTDOWN MEMBER コマンド 653
構文 653
使用法 653
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび WTOR コマンド 653
例 653
SLDS (システム・ログ・データ・セット)
情報を RECON データ・セットに追
加 405, 425
選択 263
変更、情報の 126, 155
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 126
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 155
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 405
NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 426
RECON からの情報削除 188
SMS 並行イメージ・コピー、SMSCIC キ
ーワード 215
SMSCIC (SMS 並行イメージ・コピー)
215
SMSCIC キーワード・コマンド
GENJCL.IC 215
SMSNOCIC キーワード
GENJCL.IC 215
SMSOFFLC キーワード
GENJCL.IC 215
SMSONLC キーワード
GENJCL.IC 215
SSID キーワード・コマンド
CHANGE.BKOUT 71
CHANGE.DB 90
CHANGE.PRILOG (OLDS 用) 120
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 130
CHANGE.RECON 141
CHANGE.SECLOG (OLDS 用) 150
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 159
CHANGE.SUBSYS 160
DELETE.BKOUT 181
DELETE.LOG (OLDS 用) 188
DELETE.SUBSYS 194
GENJCL.ARCHIVE 199
GENJCL.CLOSE 209
GENJCL.USER 247
INIT.RECON 355
LIST.BKOUT 359
LIST.LOG (PRILOG ファミリー用)
375
LIST.LOG (レコードのカテゴリ用)
379
LIST.RECON 381
LIST.SUBSYS 383, 384
NOTIFY.BKOUT 387
NOTIFY.PRILOG (OLDS 用) 399
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 403
SSID キーワード・コマンド (続き)
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 420
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 424
NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 428
NOTIFY.SUBSYS 430
START FDBRPROC コマンド
構文図 481
説明 481
START irlmproc コマンド
構文図 699
説明 699
DEADLOCK= パラメーター 699
IRLMGRP= パラメーター 700
IRLMID= パラメーター 700
IRLMNM= パラメーター 700
LOCKTAB= パラメーター 700
MAXCSA= パラメーター 701
MAXUSRS= パラメーター 701
PC= パラメーター 701
SCOPE= パラメーター 701
TRACE= パラメーター 701
STARTDS コマンド 512
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 512
STARTIA コマンド 513
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 514
STARTIME キーワード・コマンド
CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 122
CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 127
CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 150
CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 156
DELETE.LOG (RLDS および SLDS
用) 188
NOTIFY.ALLOC 386
NOTIFY.PRILOG (OLDS 用) 398
NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 401
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 406
NOTIFY.SECLOG (OLDS 用) 419
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 422
NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 427
STARTIP コマンド 514
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 515
STARTMSC コマンド 502, 516
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 516
STARTNEW キーワード
コマンド 142
CHANGE.RECON 142
INIT.RECON 356
STARTOD コマンド 517
同等の IMS Connect タイプ 2 コマン
ドおよび z/OS コマンド 518
STARTPT コマンド 519

STARTPT コマンド (続き)
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 519

STARTRCV キーワード・コマンド
 CHANGE.SUBSYS 162
 NOTIFY.SUBSYS 430

STARTRMT コマンド 520
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 521

STATUS キーワード
 LIST.RECON コマンド 380

STOP 49

STOP cqsjob コマンド
 説明 49

STOP CSL コマンド
 キーワード 45
 構文図 45
 シャットダウン 45
 説明 45

STOP irlmproc コマンド
 説明 703
 例 703

STOP reposervername コマンド 727

STOPCLNT コマンド 522
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 522

STOPDS コマンド 523
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 524

STOPIA コマンド 524
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 525

STOPIP コマンド 526
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 527

STOPLINK コマンド 527
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 529

STOPMSC コマンド 529
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 530

STOPOD コマンド 531
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 532

STOPPORT コマンド 532
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 533

STOPRMT コマンド 533
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 534

STOPSCLN コマンド 535
 同等の IMS Connect タイプ 2 コマ
 ドおよび z/OS コマンド 536

STOPTIME 416

STOPTIME キーワード・コマンド
 CHANGE.IC 109

STOPTIME キーワード・コマンド (続き)
 NOTIFY.IC 392

STOPTIME キーワード・コマンド
 NOTIFY.CA 388

STOR パラメーター
 F irlmproc,STATUS コマンド 692

SUBSET キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 74
 NOTIFY.CA 388

T

TAPEUNIT キーワード・コマンド
 CHANGE.RECON 142
 INIT.RECON 357

TIMEFMT キーワード
 GENJCL.ARCHIVE 200
 GENJCL.CA 204
 GENJCL.CLOSE 209
 GENJCL.IC 222
 GENJCL.OIC 234
 GENJCL.RECOV 240
 GENJCL.USER 247

TIMEFMT キーワードのサブリスト
 CHANGE.RECON 144

TIMEFMT パラメーターのサブリスト
 サブパラメーターの優先順位 60
 デフォルトの設定値 61

TIMEZIN キーワード
 CHANGE.RECON コマンド 144

TIMEZONE キーワード
 CHANGE.RECON コマンド 143

TOTIME キーワード・コマンド
 DELETE.LOG (RLDS および SLDS
 用) 188
 GENJCL.ARCHIVE 198
 LIST.HISTORY 372
 LIST.LOG 377

TRACE CT コマンド
 キーワード 705
 構文図 705
 説明 705
 パラメーター 705
 例 707

IRLM 外部書き出しプログラムのプロ
 シージャの例 707

IRLM ロード・モジュール 705
 z/OS リンク・リスト 705

TRACE パラメーター
 F irlmproc,STATUS コマンド 692

TRACEOFF キーワード
 CHANGE.RECON コマンド 142

TRACEON キーワード
 CHANGE.RECON コマンド 142

TRACETABLE 9
 コマンド verb 9

TRACE= パラメーター
 START irlmproc コマンド 701

TRACE=nnn パラメーター
 F irlmproc,SET コマンド 690

TRACK キーワード
 NOTIFY.RECOV コマンド 411

TRACKING パラメーター
 CHANGE.SUBSYS コマンド 162

TYPEFP キーワード・コマンド
 CHANGE.DB 90
 INIT.DB 327
 LIST.DB 362

TYPEIMS キーワード・コマンド
 CHANGE.DB 90
 INIT.DB 327
 LIST.DB 362

U

UDATA キーワード・コマンド
 CHANGE.UIC 163
 NOTIFY.CA 388
 NOTIFY.UIC 433

UNAUTH キーワード
 CHANGE.DB コマンド 90
 UNAUTH キーワード
 使用 81
 制約事項 81

UNAVAIL キーワード・コマンド
 CHANGE.ADS 69
 CHANGE.PRILOG (OLDS 用) 120
 CHANGE.SECLOG (OLDS 用) 149
 INIT.ADS 318

UNIT キーワード・コマンド
 CHANGE.CA 74
 CHANGE.IC 108
 CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 125
 CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 130
 CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 154
 CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 159
 GENJCL.CA 204
 GENJCL.IC 223
 GENJCL.OIC 234
 INIT.CA 320
 INIT.IC 340
 NOTIFY.CA 388
 NOTIFY.IC 392
 NOTIFY.PRILOG 408
 NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 403
 NOTIFY.REORG 416
 NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 424
 NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 428

UNIT2 キーワード・コマンド
 CHANGE.IC 108
 GENJCL.OIC 234
 INIT.IC 340

UNIT2 キーワード・コマンド (続き)

NOTIFY.IC 392
NOTIFY.REORG 416

UOR (リカバリー単位) キーワード・コマンド

CHANGE.BKOUT 71
NOTIFY.BKOUT 387

UORTIME キーワード

CHANGE.BKOUT コマンド 71

UPDATE ALIAS

構文 654
使用法 654
例 654

UPDATE ALIAS コマンド 654

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 655

UPDATE CONVERTER

構文 656
使用法 656
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 657
例 656

UPDATE CONVERTER コマンド 656

UPDATE DATASTORE

構文 657
使用法 657
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 658
例 657

UPDATE DATASTORE コマンド 657

UPDATE IMSPLEX

構文 659
使用法 659
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 660
例 659

UPDATE IMSPLEX コマンド 659

UPDATE MEMBER コマンド 661

構文 661
使用法 661
同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 663
例 661

UPDATE MSC コマンド 665

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 666

UPDATE ODBM

構文 667
使用法 667
例 667

UPDATE ODBM コマンド 667

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 668

UPDATE PORT コマンド 669

構文 669
使用法 669

UPDATE PORT コマンド (続き)

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 669
例 669

UPDATE RACFUID

構文 670
使用法 670
例 670

UPDATE RACFUID コマンド 670

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 671

UPDATE RMTIMSCON コマンド 672

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび WTOR コマンド 674

UPDATE TRACETABLE

構文 17
出力 23

UPDATE TRACETABLE コマンド 17

BPE 定義のトレース・テーブル・タイプ 17

CQS 定義のトレース・テーブル・タイプ 18

DBRC 定義のトレース・テーブル・タイプ 20

IMS Connect 定義のトレース・テーブル・タイプ 9, 19

OM 定義のトレース・テーブル・タイプ 20

RM 定義のトレース・テーブル・タイプ 20

SCI 定義のトレース・テーブル・タイプ 20

USEAREA キーワード、GENJCL.RECOV コマンド 241

USEDDBDS キーワード、GENJCL.RECOV コマンド 241

USEIC キーワード、GENJCL.RECOV コマンド 241

USEOLRRG キーワード、GENJCL.RECOV コマンド 241

USEREXIT コマンド 25

USERKEYS キーワード
GENJCL.ARCHIVE コマンド 200

GENJCL.CA 204

GENJCL.CLOSE 209

GENJCL.IC 224

GENJCL.OIC 234

GENJCL.RECOV 242

GENJCL.USER 248

USERRCOV キーワード
CHANGE.DB 85

USR レコード、GTF (汎用トレース機能) 143

V

VALID キーワード・コマンド

CHANGE.CA 74

CHANGE.IC 107

VALID2 キーワード

CHANGE.IC コマンド 108

VIEWDS コマンド 537

キーワード 537

構文 537

出力フィールド 538

使用上の注意 538

例 541

VIEWHWS コマンド 542

キーワード 543

構文 543

出力フィールド 544

使用上の注意 543

例 561

VIEWIA コマンド 570

VIEWIP コマンド 573

VIEWMSC コマンド 574

出力フィールド 575

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 575

VIEWPORT コマンド 579

キーワード 579

構文 579

出力フィールド 580

使用上の注意 580

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 580

例 583

VIEWRMT コマンド 585

出力フィールド 586

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 586

VIEWUOR コマンド 590

同等の IMS Connect タイプ 2 コマンドおよび z/OS コマンド 590

VOLLIST キーワード・コマンド

CHANGE.CA 74

CHANGE.IC 109

CHANGE.PRILOG (RLDS 用) 125

CHANGE.PRILOG (SLDS 用) 130

CHANGE.SECLOG (RLDS 用) 154

CHANGE.SECLOG (SLDS 用) 159

GENJCL.CA 205

GENJCL.IC 224

GENJCL.OIC 235

INIT.CA 320

INIT.IC 340

NOTIFY.CA 388

NOTIFY.IC 392

NOTIFY.REORG 416

VOLLIST2 キーワード・コマンド

CHANGE.IC 109
GENJCL.IC 224, 225
GENJCL.OIC 235
INIT.IC 340
NOTIFY.IC 392
NOTIFY.REORG 416

VOLNUM キーワード

GENJCL.CA コマンド 205

VOLSER キーワード・コマンド

NOTIFY.PRILOG (RLDS 用) 404
NOTIFY.PRILOG (SLDS 用) 408
NOTIFY.SECLOG (RLDS 用) 424
NOTIFY.SECLOG (SLDS 用) 429

VSO キーワード

CHANGE.DBDS 102
INIT.DBDS 334

Z

z/OS

コマンド

CANCEL 711
F fdbproc 477
F fdbproc,DUMP コマンド 477
F fdbproc,RECOVER コマンド 477
F fdbproc,STATUS コマンド 477
F fdbproc,STOP コマンド 479
F fdbproc,TERM コマンド 479
F irlmproc,ABEND コマンド 685
F irlmproc,DIAG,DELAY コマンド 687
F irlmproc,PURGE,imsname コマンド 687
F irlmproc,SET コマンド 688
F irlmproc,STATUS コマンド 691
F jobname,DUMP コマンド 677
F jobname,FORCExxxx コマンド 678
F jobname,RECONNECT コマンド 679
F jobname,RECONNSTR コマンド 681
F jobname,STOP コマンド 681
F jobname,STOPxxxx コマンド 682
F reposervername 717
F reposervername,ADMIN コマンド 718
F reposervername,AUDIT コマンド 721
F reposervername,SECURITY コマンド 723
F reposervername,SHUTDOWN コマンド 724

z/OS (続き)

コマンド (続き)

FORCE 713
P cqsjob 49
P CSL コマンド 45
P irlmproc コマンド 703
P reposervername コマンド 727
S irlmproc コマンド 699
TRACE CT 705

z/OS コマンド

構文 593
呼び出し 593
ワイルドカード・サポート 594
DELETE CLIENT 594
DELETE LINK 595
DELETE SENDCLNT 598
IMS Connect 483
QUERY ALIAS 600
QUERY DATASTORE 601
QUERY IMSPLEX 606
QUERY MEMBER 608
QUERY MSC 635
QUERY PORT 640
QUERY RMTIMSCON 646
QUERY UOR 651
SHUTDOWN MEMBER 653
START FDBRPROC 481
UPDATE ALIAS 654
UPDATE CONVERTER 656
UPDATE DATASTORE 657
UPDATE IMSPLEX 659
UPDATE MEMBER 661
UPDATE MSC 665
UPDATE ODBM 667
UPDATE PORT 669
UPDATE RACFUID 670
UPDATE RMTIMSCON 672

[特殊文字]

/NRESTART
INIT.DB 325
/RMxxxxxx コマンドの許可 54
%ALLDSSN キーワード 275
%ALLSEL キーワード 275
%ALLTIME キーワード 275
%ALLUSID キーワード 276
%CADSN キーワード 273
%CAFSEQ キーワード 273
%CALGTM キーワード 273
%CAODSN キーワード 259
%CASEL キーワード 273
%CATIME キーワード 273
%CAUNIT キーワード 273
%CAVCNT キーワード 273

%CAVOLS キーワード 273
%COPIES キーワード 304
%DALTIME キーワード 275
%DBADSAV キーワード 277
%DBADSN キーワード 277
%DBDDN キーワード 275, 277
%DBDSN キーワード 277
%DBDSNRV キーワード 277
%DBDSSEL キーワード 277
%DBNAME キーワード 275, 277
%DBTYPE キーワード 276, 277
%DBUSID キーワード 277
%DDNAME キーワード 256
%DELETE キーワード 258
%ENDDEL キーワード 258
%ENDSEL キーワード 254
%IC2DSN キーワード 271
%IC2FSEQ キーワード 271
%IC2SEL キーワード 271
%IC2UNIT キーワード 271
%IC2VCNT キーワード 271
%IC2VOLS キーワード 271
%ICCAT キーワード 271
%ICDSN キーワード 270
%ICDSN2 キーワード 304
%ICDSN3 キーワード 304
%ICDSN4 キーワード 304
%ICFSEQ キーワード 270
%ICSEL キーワード 270
%ICSTOP キーワード 270
%ICTIME キーワード 271
%ICTYPE キーワード 270
%ICUNIT キーワード 271
%ICUNIT2 キーワード 304
%ICUNIT3 キーワード 304
%ICUNIT4 キーワード 304
%ICUSID キーワード 271
%ICVCNT キーワード 271
%ICVCNT2 キーワード 304
%ICVCNT3 キーワード 304
%ICVCNT4 キーワード 304
%ICVOLS キーワード 271
%ICVOLS2 キーワード 304
%ICVOLS3 キーワード 304
%ICVOLS4 キーワード 304
%LOGDSN キーワード 268
%LOGETIM キーワード 268
%LOGFRID キーワード 268
%LOGFSEQ キーワード 268
%LOGLRID キーワード 269
%LOGMERG キーワード 268
%LOGONL キーワード 268
%LOGRMT キーワード 268
%LOGSEL キーワード 268
%LOGSTIM キーワード 268
%LOGUNIT キーワード 268

%LOGVOLS キーワード 268
%OLDCTIM キーワード 262
%OLDFRID キーワード 262
%OLDLRID キーワード 262
%OLDOTIM キーワード 262
%OLDSDDN キーワード 262
%OLDSDSN キーワード 262
%OLDSSEL キーワード 262
%OLDSTYP キーワード 262
%PLGTIME キーワード 275
%SELECT キーワード 263
 構文の指定 261, 277
 説明 254
 レコード・タイプの指定 256
%SET MEMBER キーワード 259
%SET TIMEFMT キーワード 260
%SLDCHKT キーワード 265
%SLDETIM キーワード 264
%SLDFRID キーワード 265
%SLDFSEQ キーワード 264
%SLDLRID キーワード 265
%SLDRMT キーワード 265
%SLDSDDN キーワード 264
%SLDSSEL キーワード 265
%SLDSTIM キーワード 264
%SLDUNIT キーワード 264
%SLDVOLS キーワード 264
%SSID キーワード 253
%TIME キーワード
 シンボリック・キーワードとして 253
 説明 280



プログラム番号: 5635-A06
5655-DS5
5655-TM4

Printed in Japan

SC43-4286-00



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21

Spine information:

IMS バージョン **15.1.0**

コマンド 第 **3** 巻: **IMS** コンポーネントおよび **z/OS** コマンド

